高住井手添遺跡　第１分冊（本文編１）　二〇一五　鳥取県教育委員会

一般国道９号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XIX

鳥取県鳥取市

高住井手添遺跡

第１分冊（本文編１）

２０１５

鳥取県教育委員会

一般国道９号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XIX

鳥取県鳥取市

高住井手添遺跡

第１分冊（本文編１）

２０１５

鳥取県教育委員会

1　2011 年度調査地と湖山池（南から）

2　2011 年度調査地全景（北西から）

14 溝木製構造物検出状況（2011 年度調査：北西から）

1　4溝　横木検出状況（北東から）

2　4溝　編組製品2出土状況（東から）

1　4溝　編組製品7出土状況（西から）

2　4溝　編組製品4出土状況（南から）

1　14 溝・26 溝木製構造物検出状況　（2012 年度調査：西から）

2　14 溝構造物 3 検出状況（2012 年度調査：西から）

26 溝下部構造物検出状況（2012 年度調査：北から）

序

山陰自動車道は鳥取市を起点とし、山口県美祢市を終点とする、延長380キロメートルの自動車専用道路であり、国土交通省により整備が進められているところです。

鳥取県内の事業区間である「鳥取西道路」は、鳥取市本高から同市青谷町青谷を結ぶ延長19.3キロメートルの区間であり、その改築事業に伴う事前の発掘調査を平成20年度から当教育委員会が実施しています。平成21年度からは財団法人鳥取県教育文化財団（平成25年度から公益財団法人に移行）に現地での発掘調査や出土遺物等の整理作業、報告書作成を委託して調査を進めているところです。

高住井手添遺跡では、平成23年度と平成24年度の２箇年にわたり調査を行いました。その結果、縄文時代の編みカゴを多数発見したほか、弥生時代の大規模な治水工事跡を確認するなど、地域の歴史を解明するうえで重要な成果を得ることができました。

なお、これまで鳥取西道路の改築に係る発掘調査の成果については、現地説明会、地元公民館などでの講演会、展示会を開催することで、地元の皆様をはじめとして多くの方々に紹介してまいりました。このような取り組みは、先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することとして、現在に生きる私たちの重要な責務と考えています。

本書をまとめるにあたり、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、並びに地元関係者の皆様をはじめ､多くの方々に多大なる御助言､御協力をいただきました｡心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

平成27年10月

鳥取県教育委員会

教育長　山本　仁志

例　言

1　本書は、一般国道９号（鳥取西道路）改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所から委託を受け、2011・2012 年度に実施した高住井手添遺跡の発掘調査報告書の第１分冊（本文編１）である。

2　高住井手添遺跡の所在地は、鳥取市高住字井手添 1142 － 1、1142 － 2、1143 である。調査面積は、2011 年度 4,390m^2、2012 年度 368.01m^2 である。現地調査は、2011 年４月 12 日から 2011 年 11 月 20 日まで、2012 年４月 25 日から 2012 年 12 月７日まで行い、調査記録と出土遺物の整理作業、報告書の作成は 2015 年５月まで行った。

3　本調査の名称は、2011 年度調査は「高住井手添遺跡 11」、2012 年度調査は「高住井手添遺跡 12」である。出土遺物などの注記には「タカ井 11」、「タカ井 12」の略号を用いた。

4　発掘調査の監理については、公益財団法人鳥取県教育文化財団（2012 年度まで財団法人鳥取県教育文化財団、以下、財団）に委託した。

5　発掘調査に際し、2011 年度は株式会社アーキジオ・アサヒコンサルタント共同企業体、2012 年度は埋蔵文化財発掘調査支援業務委託（高住牛輪谷遺跡、高住井手添遺跡（第２次調査））共同企業体（株式会社シン技術コンサル、サイトウコンサルタント株式会社）の支援を受けた。各年度における遺跡での掘削作業、記録作成と測量作業は、財団の指示のもと、それぞれの企業体が実施した。

6　調査で作成した図面の再編集、出土遺物の整理作業や記録作成は財団に委託し、財団の文化財主事と整理作業員が行った。

7　遺物の写真撮影は、財団係長の玉木および文化財主事の北が行った。

8　遺物実測及び浄書は、財団の文化財主事と整理作業員が行った。

9　本書の執筆は、第６章を除いて財団の濵田、中尾、奥原、北、茶谷、牧本が分担し、編集は北が行った。執筆分担は次のとおり。

第１～３章：茶谷、第４章：中尾（遺構）、奥原（縄文時代晩期以降の土器）、北（縄文時代後期以前の土器・石器・木製品）、濵田（編組製品）、第５章：牧本（弥生土器）、北（弥生土器以外）、第７章：北

10　本調査に係る図面・写真等の記録及び出土遺物は、全て台帳等に登録して収納しており、今後活用できるように、随時検索できる状態で鳥取県埋蔵文化財センターに移管した。

11　第６章第４節で報告を行う編組製品の素材に関する調査成果は、小林和貴（東北大学植物園）、能代修一（森林総合研究所）、佐々木由香（株式会社パレオ･ラボ）、鈴木三男（東北大学植物園）の各氏の協力を得て実施したもので、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（A）課題番号 21240071「東アジアの新石器時代遺跡出土編組製品等素材の考古植物学的研究拠点の形成と展開」（代表：鈴木三男）および基盤研究（A）課題番号 24252022「日本の縄紋・弥生時代遺跡出土編組製品・繊維製品等素材の考古植物学的研究」（代表：鈴木三男）の成果である。

12　出土木製品等の観察と樹種同定を鳥取大学地域学部地域環境学科の中原計 准教授に御指導いた

だき、第６章第５節に同定結果および考察を執筆していただいた。

13　層相解析をパリノ・サーヴェイ株式会社に、放射性炭素年代測定を株式会社パレオ・ラボ、加速器計測株式会社に、珪藻分析・大型植物遺体同定・花粉分析を株式会社パレオ・ラボに委託した。また、高住牛輪谷遺跡の放射性炭素年代測定結果も合わせて掲載した。なお、第６章の執筆は自然科学分析の各委託先によるものである

14　現地調査、報告書の作成にあたって、下記の方々、機関から、様々な御指導、御助言、御支援を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略、順不同）

公益財団法人大阪府文化財センター 、公益財団法人鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財センター、一般財団法人京都市埋蔵文化財研究所、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、鳥取市教育委員会、高住地区自治会

凡　例

1　本書に記載された測量成果については、世界測地系に基づいている。図中のＸ・Ｙ座標は国土座標第Ⅴ系によるものであり、m単位で表記している。また、平面図の方位は座標北を示している。

2　標高は海抜標高で示した。

3　本報告書に使用した地図は、国土地理院発行（1/25,000、1/200,000 地形図）、鳥取市作成の都市計画図（1/5,000）を縮小、加筆したものである。

4　本遺跡の土層に示した土色は、小山正忠、竹原秀雄編著『新版標準土色帖』2007 年版に基づき、土の色相、明度及び彩度を判定したものである。地層観察用畦の観察面はシートで被覆するなどして、湿った状態を保つように留意した。また、地層の粒度の記載に関しては、地質学で標準的に用いられる Wentworth の区分を使用した。同一地層内に粒度が幅をもって認められるときには、より主体を占める粒径を先にして、「シルト～粗砂」、「極粗砂～細砂」のように記載した。

5　遺構平面図や断面図の縮尺は統一していないが、挿図ごとにスケールバーと縮尺を示している。

6　発掘調査時に付した遺構番号、遺構名は第４章第１節表１、第５章第１節表 43 に一覧を示した。遺構名等が変更となったものも併せて記している。

7　遺物実測図の縮尺については、土器・陶磁器を 1/4、土製品を 1/2、1/4、石器を 1/1、1/2、2/3、1/3、1/4、木製品を 1/2、1/4、1/8、1/12、1/16、1/20、編組製品を 1/4、ガラス製品を 1/1 で示した。

8　遺物の掲載番号は種類ごとに調査年度を問わず連番とし、石器はＳ、木製品はＷ、ガラス製品はＧをそれぞれ番号の前に付して区別した。土器、土製品は番号のみとした。
石器の使用痕範囲を次の記号で表した。⟷：磨り　⟝：敲打
木製品の二次加工範囲を次の記号で表した。⟷：建築部材を杭などに二次加工した際の分割面
木製品の炭化範囲を　で示した。
その他遺物に用いた記号には図中に凡例を示している。

9　遺物観察表の法量記載における※は推定復元値、△は残存値を示す。

10　出土土器の時期決定は、以下の文献を参考に検討を行った。
泉　拓良 2008「鷹島式・船元式・里木Ⅱ式」小林達雄編『総覧　縄文土器』アム・プロモーション
清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社
濵田竜彦 2008「中国地方北部の突帯文土器と地域性」『古代文化』第 60 巻第３号、（財）古代学協会
間壁忠彦他 1971『里木貝塚』倉敷考古館集報７号
松井　潔 1997「東の土器、南の土器」『古代吉備』第 19 集、古代吉備研究会
牧本哲雄 1996「天神川流域における古墳時代土器の編年」財団法人鳥取県教育文化財団編『長瀬高浜遺跡Ⅶ・園遺跡』

11　木製品の分類群・器種名は基本的に以下の文献に従っている。
伊東隆夫・山田昌久編　2012『木の考古学　出土木製品用材データベース』 海青社

目　次

第１分冊（本文編１）

巻頭図版
序
例言
凡例
目次
第１章　調査の経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 3
　第３節　調査体制 …… 5
第２章　位置と環境
　第１節　地理的環境 …… 7
　第２節　歴史的環境 …… 8
第３章　調査の方法
　第１節　現地調査 …… 13
　第２節　整理作業 …… 16
第４章　2011 年度調査の成果
　第１節　調査の概要 …… 17
　第２節　調査地内の堆積と検出遺構面 …… 19
　第３節　表土～第 1a 層下面の調査 …… 35
　第４節　第 2a 面～第 2a 層下面の調査 …… 48
　第５節　第 3a 面の調査 …… 110
　第６節　第 4a 面の調査 …… 175
　第７節　第 5a 面以下の調査 …… 180
　第８節　時期不明の遺構 …… 191
　遺物観察表 …… 198

挿図目次

図１　鳥取西道路予定地と調査地の位置　1
図２　調査地位置図　2
図３　鳥取県と遺跡の所在地　7
図４　遺跡周辺の地形　8
図５　湖山池周辺の遺跡　9
図６　調査区の区割り　14
図７　調査区グリッド配置図　15
図８　遺構配置図　18
図９　流路と土壌層の関係模式図　19
図 10　断面図作成位置　20
図 11　土層断面パネルダイアグラム　21
図 12　断ち割り１断面図　23
図 13　断ち割り４ 断面図　25
図 14　断ち割り２ 断面図（１）　26
図 15　断ち割り２ 断面図（２）　27
図 16　中央断ち割り 断面図　28
図 17　調査区西側溝 断面図　29
図 18　４溝肩部 土壌断面図　31
図 19　調査区南側溝 断面図（１）　32
図 20　調査区南側溝 断面図（２）　33
図 21　ボーリング柱状図　34
図 22　21・22 落ち込み 平・断面図　36
図 23　21・22 落ち込み 出土遺物　38
図 24　24 落ち込み 平・断面図　39
図 25　第 1a 層下面全体図　40
図 26　８溝 平面図　41
図 27　15 ピット平・断面図、８溝・23 土坑断面図および 15 ピット出土土器　42
図 28　８溝・17 土坑・９ピット平面図　43
図 29　８溝・17 土坑・９ピット断面図　44
図 30　８溝 出土土器　44
図 31　30 土坑 平・断面図　45
図 32　30 土坑 出土遺物　45
図 33　第１a 層ほか出土遺物　47
図 34　第 2a 面全体図　48
図 35　14 溝 平面図　49
図 36　14 溝 南北 A 断面図　51
図 37　14 溝 南北 B 断面図　53
図 38　14 溝・19 溝 東西 A 断面図　54
図 39　14 溝・19 溝 東西 B 断面図　55
図 40　14 溝・19 溝 東西 C 断面図（北側溝）　56
図 41　14 溝 木製構造物検出状況図　57
図 42　14 溝 構造物１検出状況図　58
図 43　14 溝 構造物３検出状況図　59
図 44　14 溝 構造物４・５・６検出状況図　61
図 45　14 溝 構造物４　縦杓子出土状況図　63
図 46　14 溝 構造物６　土器（75・76）・樹木枝出土状況平面図　64
図 47　14 溝 構造物２検出状況図　65
図 48　14 溝 北側横矢板検出状況図　66
図 49　14 溝 南側横矢板検出状況図　67
図 50　14 溝北端 遺物出土状況図　68
図 51　14 溝 鍬 (W13 ～ 15) 出土状況平・立面図　69
図 52　14 溝上層 舟出土状況図　69
図 53　14 溝上層 出土土器（１）　71
図 54　14 溝上層 出土土器（２）　72
図 55　14 溝上層 出土土器（３）　73
図 56　14 溝下層 出土土器　74
図 57　14 溝最下層 出土土器　75
図 58　14 溝 出土石器　76
図 59　14 溝 出土木製品（１）　77
図 60　14 溝 出土木製品（２）　78
図 61　14 溝 出土木製品（３）　79
図 62　14 溝 出土木製品（４）　80
図 63　14 溝 出土木製品（５）　81
図 64　35 溝 平・断面図　81
図 65　34 溝 出土土器　82
図 66　35 溝 出土土器　82
図 67　37 土坑 平・断面図　82
図 68　37 土坑 出土土器　82
図 69　19 溝・26 溝 平・断面図　83
図 70　19 溝 出土土器　85
図 71　19 溝 出土土器・石器　86
図 72　19 溝 出土木製品　87
図 73　18 溝 出土土器　88
図 74　26 溝 木製構造物検出状況図　91
図 75　19 溝・26 溝 断面図　93
図 76　26 溝 出土土器　94
図 77　28 溝 平面図　95
図 78　28 溝 断面図（１）　97
図 79　28 溝 断面図（２）　98
図 80　28 溝・36 溝 出土土器　99
図 81　28 溝 出土石器　100
図 82　28 溝 出土木製品（１）　101
図 83　28 溝 出土木製品（２）　102
図 84　36 溝 出土木製品　102
図 85　29 土坑 平・断面図　103
図 86　29 土坑 出土遺物　104
図 87　27 溝 遺物出土状況図　105
図 88　27 溝 出土土器（１）　106
図 89　27 溝 出土土器（２）　107
図 90　27 溝 出土石器　109
図 91　33 溝 出土遺物　110

図 92　第 3a 面全体図　111
図 93　1 土坑 平・断面図　112
図 94　1 土坑出土土器　112
図 95　4・6 溝 平面図　113
図 96　4 溝 断面図　115
図 97　4 溝・6 溝 木材出土状況図　116
図 98　4 溝 横木検出状況図　117
図 99　4 溝 杭（取上 No.1231）平・立面図　118
図 100　4 溝 編組製品 1 出土状況図　118
図 101　4 溝 編組製品 2 出土状況図　119
図 102　4 溝 編組製品 3 出土状況図　120
図 103　4 溝 編組製品 4 出土状況図　121
図 104　6 溝 編組製品 5 出土状況図　122
図 105　4 溝 編組製品 6 出土状況図　123
図 106　4 溝 編組製品 7 出土状況図　123
図 107　4 溝 編組製品 9 出土状況図　124
図 108　4 溝 編組製品 10 出土状況図　125
図 109　4 溝 編組製品 11 出土状況図　125
図 110　4 溝 編組製品 8 出土状況図　126
図 111　4 溝 編組製品 12 出土状況図　126
図 112　4 溝 編組製品 13 出土状況図　126
図 113　4 溝 編組製品素材束 1 出土状況図　127
図 114　4 溝 編組製品素材束 2 出土状況図　127
図 115　4 溝上層 出土縄文土器（前期）　127
図 116　4 溝上層 出土縄文土器（中期～後期）　128
図 117　4 溝上層 出土縄文土器（晩期深鉢）　130
図 118　4 溝上層 出土縄文土器（突帯文土器）　131
図 119　4 溝上層 出土縄文土器（浅鉢）　132
図 120　4 溝下層 出土縄文土器（早期～前期）　135
図 121　4 溝下層 出土縄文土器（中期 1）　136
図 122　4 溝下層 出土縄文土器（中期 2）　137
図 123　4 溝下層 出土縄文土器（晩期深鉢 1）　139
図 124　4 溝下層 出土縄文土器（晩期深鉢 2）　140
図 125　4 溝下層 出土縄文土器（突帯文土器）　141
図 126　4 溝下層 出土縄文土器（晩期浅鉢 1）　142
図 127　4 溝下層 出土縄文土器（晩期浅鉢 2）　143
図 128　6 溝 出土土器　145
図 129　4 溝上層 出土石器　148
図 130　4 溝下層 出土石器（1）　149
図 131　4 溝下層 出土石器（2）　150
図 132　4 溝上層 出土木製品　151
図 133　4 溝下層 出土木製品　152
図 134　4 溝 出土編組製品 1　153
図 135　4 溝 出土編組製品 2　154
図 136　4 溝 出土編組製品 3　155
図 137　4 溝 出土編組製品 4　156
図 138　6 溝 出土編組製品 5　157
図 139　4 溝 出土編組製品 6　158
図 140　4 溝 出土編組製品 7　159
図 141　4 溝 出土編組製品 8　159
図 142　4 溝 出土編組製品 9　160
図 143　4 溝 出土編組製品 10　161
図 144　4 溝 出土編組製品 11・12・13　161
図 145　4 溝上層 出土編組製品素材束 1（1）　162
図 146　4 溝上層 出土編組製品素材束 1（2）　163
図 147　4 溝上層 出土編組製品素材束 1（3）　164
図 148　4 溝上層 出土編組製品素材束 2（1）　165
図 149　4 溝上層 出土編組製品素材束 2（2）　166
図 150　4 溝上層 出土編組製品素材束 2（3）　167
図 151　4 溝上層 出土編組製品素材束 2（4）　168
図 152　4 溝上層 出土編組製品素材（1）　169
図 153　4 溝上層 出土編組製品素材（2）　170
図 154　4 溝下層 出土編組製品素材束 3　171
図 155　4 溝下層 出土編組製品素材（1）　172
図 156　4 溝下層 出土編組製品素材（2）　173
図 157　16 溝 出土土器　174
図 158　第 3a 層 出土土器　174
図 159　第 4a 面全体図　175
図 160　10 溝 出土土器　176
図 161　10 溝 出土石器（1）　178
図 162　10 溝 出土石器（2）　179
図 163　第 5a 面以下の遺構・包含層の位置　180
図 164　調査区南側溝　第 6a ～ 7a 層遺物出土状況図・断面図　181
図 165　調査区南側溝 第 6a 層 遺物出土状況図・断面図　182
図 166　第 6a 層 出土土器（1）　184
図 167　第 6a 層 出土土器（2）　185
図 168　第 6a 層 出土石器（1）　186
図 169　第 6a 層 出土石器（2）　187
図 170　第 6a ～ 7a 層 出土土器（1）　188
図 171　第 6a ～ 7a 層 出土土器（2）　189
図 172　第 7a 層 出土土器　190
図 173　第 7a 層 出土石器　191
図 174　時期不明遺構配置図　192
図 175　5 溝 平・断面図　193
図 176　5 溝 出土土器　194
図 177　7 土坑 平・断面図　194
図 178　7・11・13 土坑 出土土器　194
図 179　11・12・13・20 土坑 平・断面図　195
図 180　31・32 土坑 平・断面図　196
図 181　31 土坑 出土土器　196
図 182　北方砂層上面 出土遺物　197

挿表目次

表１　2011 年度検出遺構一覧表　17
表２　21・22 落ち込み 出土石器石材別組成表　37
表３　第 1a 層ほか 出土石器石材別組成表　47
表４　14 溝 出土石器石材別組成表　76
表５　28 溝 出土石器石材別組成表　100
表６　４・６溝 出土石器石材別組成表　147
表７　10 溝 出土石器石材別組成表　177
表８　第 6a 層 出土石器石材別組成表　185
表９　第 7a 層 出土石器石材別組成表　191
表 10　土器観察表（１）　198
表 11　土器観察表（２）　199
表 12　土器観察表（３）　200
表 13　土器観察表（４）　201
表 14　土器観察表（５）　202
表 15　土器観察表（６）　203
表 16　土器観察表（７）　204
表 17　土器観察表（８）　205
表 18　土器観察表（９）　206
表 19　土器観察表（10）　207
表 20　土器観察表（11）　208
表 21　土器観察表（12）　209
表 22　土器観察表（13）　210
表 23　土器観察表（14）　211
表 24　土器観察表（15）　212
表 25　土器観察表（16）　213
表 26　土器観察表（17）　214
表 27　土器観察表（18）　215
表 28　土器観察表（19）　216
表 29　土器観察表（20）　217
表 30　土器観察表（21）　218
表 31　土器観察表（22）　219
表 32　土製品観察表　219
表 33　2011 年度出土石器石材別組成表（集計）　220
表 34　石器・玉観察表（１）　220
表 35　石器・玉観察表（２）　221
表 36　石器・玉観察表（３）　222
表 37　石器・玉観察表（４）　223
表 38　木製品観察表（１）　224
表 39　木製品観察表（２）　225
表 40　木製品観察表（３）　226
表 41　木製品観察表（４）　227
表 42　木製品観察表（５）　228

巻頭図版目次

巻頭図版１　１　2011 年度調査地と湖山池（南から）
　　２　2011 年度調査地全景（北西から）
巻頭図版２　14 溝木製構造物検出状況（2011 年度調査：北西から）
巻頭図版３　１　４溝　横木検出状況（北東から）
　　２　４溝　編組製品２出土状況（東から）
巻頭図版４　１　４溝　編組製品７出土状況（西から）
　　２　４溝　編組製品４出土状況（南から）
巻頭図版５　１　14 溝・26 溝木製構造物検出状況　（2012 年度調査：西から）
　　２　14 溝構造物３検出状況（2012 年度調査：西から）
巻頭図版６　26 溝下部構造物検出状況（2012 年度調査：北から）

文中写真目次

写真１　編組製品取上げ作業風景　3
写真２　26 溝 樹皮取上げ作業風景　4
写真３　現地説明会風景　5
写真４　遺物展示会風景（松保地区公民館）　5

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

鳥取県教育委員会では、一般国道９号（鳥取西道路）改築工事に伴い、鳥取市高住字井手添に所在する高住井手添遺跡の発掘調査を 2011 年度から 2012 年度にかけて実施した。

山陰地方では、観光、物流などの地域活性化をめざした幹線道路ネットワークの形成、交通渋滞の解消及び緩和、災害時の緊急輸送路確保等を目的とし、中国横断自動車道姫路鳥取線や山陰自動車道等の国土開発幹線道路の整備が進められている。鳥取市本高と鳥取市青谷町青谷を結ぶ全長 19.3 km の鳥取西道路の建設事業も山陰自動車道の一部となる事業である（図１）。

鳥取西道路の計画地内には多くの遺跡が存在している。そのため道路建設に先立って、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所（以下国土交通省）、鳥取県教育委員会、鳥取市教育委員会により埋蔵文化財の取扱いについて協議がもたれ、まず計画地内に存在する遺跡の状況を把握する必要性が確認された。これを受け、2005 年度から計画地内の踏査による分布調査や鳥取市教育委員会による範囲確認調査が逐次行われ、調査結果に基づき道路事業と埋蔵文化財保護との調整が図られている。

高住地区では、計画地内にある遺跡の範囲、内容を確認するため、2008 年度から 2009 年度にかけて鳥取市教育委員会が試掘調査を行った。その結果、遺構・遺物が確認されたため事業地内に遺跡が存在することが明らかとなった。この結果を受けて、計画地内の埋蔵文化財の取扱いについて、再度国土交通省、鳥取県教育委員会、鳥取市教育委員会で協議した結果、道路盛土部分となる 4,390 m^2 を対象として記録保存のための発掘調査が行われることになり、文化財保護法第 94 条による手続きを踏まえ、2011 年度に鳥取県教育委員会が国土交通省の委託を受けて発掘調査を実施した。発掘調

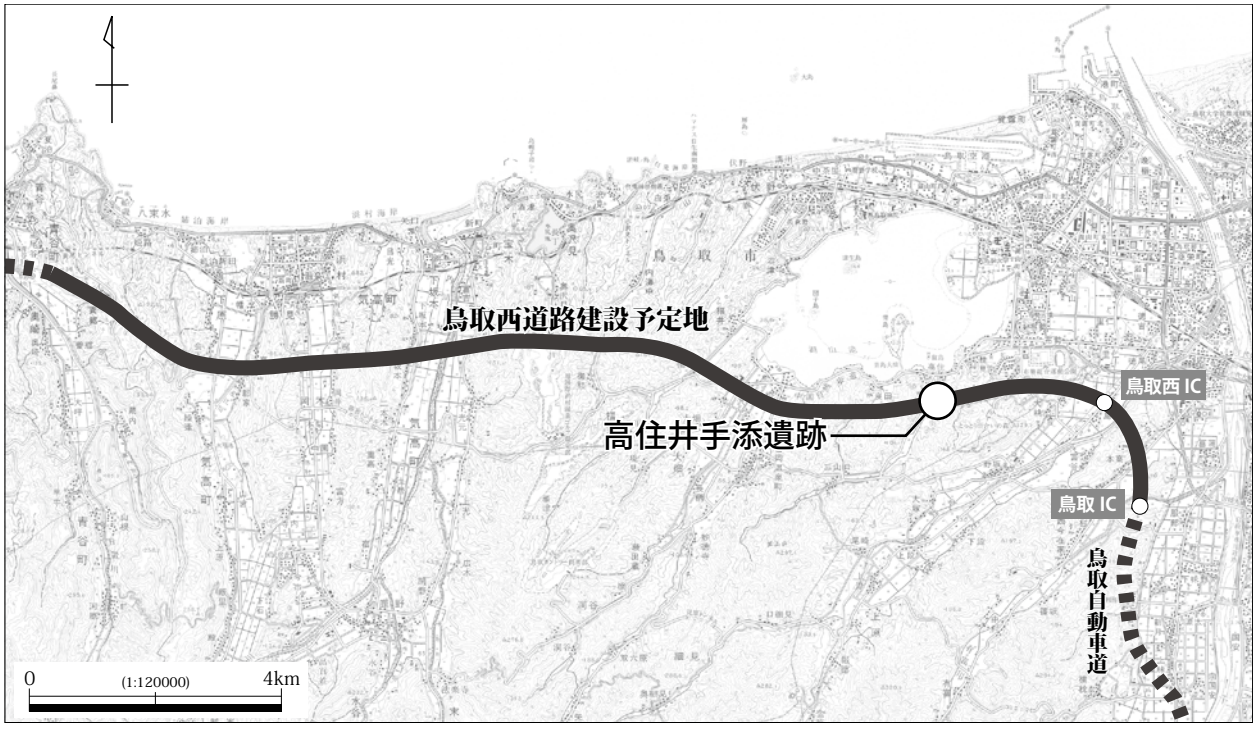


図１　鳥取西道路予定地と調査地の位置

査に当たっては、現場での発掘作業、出土遺物の整理作業および報告書の作成を財団法人鳥取県教育文化財団（2013 年度から公益財団法人に移行、以下財団）に再委託した。また、財団が発掘調査を行う中で、現地での発掘作業、調査記録作業等については、株式会社アーキジオ・アサヒコンサルタント株式会社共同企業体に発掘調査支援を委託した。

2011 年度の発掘調査においては、試掘調査の結果を受け、当初予定では弥生時代から古墳時代にかけての遺構面（２層２面）を対象としていた。しかし、表土掘削時に表土下で縄文時代の遺物包含層が確認されたことや、その後に設定した断ち割りラインでの基本層序の検討を通じて、試掘調査では確認されなかった複数の遺物包含層および遺構面が確認されたことにより、発掘調査期間の大幅な延長が必要となった。そこで鳥取県教育委員会と国土交通省で協議を行い、道路構造を盛土から橋脚に工法変更して工事範囲を縮減すること、すでに調査に取り掛かっている遺構面までは調査し、それより下層については橋脚工事該当部分に範囲を縮減して、2012 年度まで調査を実施することになった。

なお、調査中の遺構面であっても、遺構、遺物の検出状態を鑑みて調査を中途で中止しても保存に影響がないと判断された場合には必要最低限の調査に留め、部分的に地下保存することとした。（縄文時代晩期の流路である４溝、６溝については断ち割り１から６溝東端の間を掘削せずにそのまま地

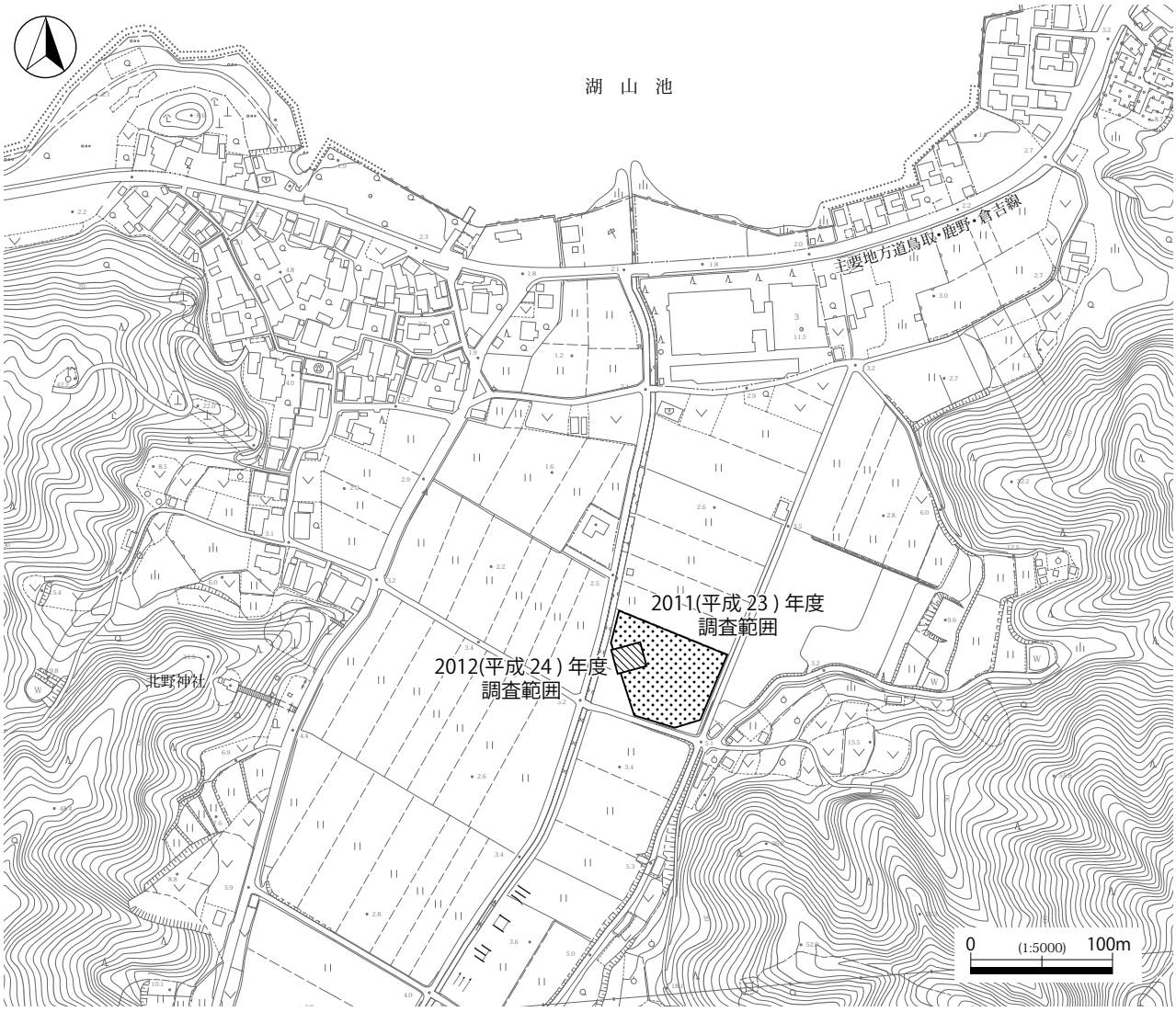


図２　調査地位置図

下保存し、弥生時代中期の溝群（14・19・26・28 溝）については溝の護岸として検出された木製構造物を解体調査せず埋め戻して保存することとした。）

2012 年度も引き続き、鳥取県教育委員会が国土交通省の委託を受け、橋脚部分に当たる 368.01 m^2 を対象として発掘調査を行うこととなった。発掘調査に当たっては、現場での発掘作業等を財団に再委託し、また財団が発掘調査を行う中で、発掘調査支援業務を埋蔵文化財発掘調査支援業務委託（高住牛輪谷遺跡、高住井手添遺跡（第２次調査））共同企業体（株式会社シン技術コンサル、サイトウコンサルタント株式会社）に委託した。

第２節　調査の経過

１　2011 年度調査

調査は４月 12 日から基準点測量、調査区現況地盤測量などに着手した。５月 13 日から重機による表土除去を開始したが、表土下で当初想定されていなかった縄文時代の遺物包含層が確認されたことにより、調査方針の見直しが必要となった。そこで調査範囲内における縄文時代層の平面的な広がりを把握するため、土層確認のためのトレンチ掘削作業を優先的に行うこととした。土層確認にあたっては、鳥取西道路の中央軸線を基準として調査区内に縦横に設定した「断ち割り」ライン（「（路線）中央断ち割り」と「断ち割り１～４」）（第４章図 10）に沿って掘削したトレンチの土層断面と、調査区周囲に設けた排水溝の壁面によって、調査区内の網羅的な堆積状況の把握に努めた。

写真１　編組製品取上げ作業風景

５月 24 日から調査区周囲の排水溝と断ち割りラインに沿ったトレンチの人力掘削作業を開始、併せて６月 22 日には下層の状況確認を目的としたボーリング調査を実施し、調査が必要な遺物包含層および遺構面が９層９面以上に及ぶことを確認した。調査量の大幅な増大により、2011 年度中の発掘調査終了が困難となったため、鳥取県教育委員会と国土交通省との協議の結果、盛土から橋脚へ工法変更して工事範囲を縮減すること、すでに調査に取り掛かっている遺構面までは調査を行うこと、それより下層については橋脚工事該当部分に範囲縮減して 2012 年度まで調査を実施することとなった。

６月から表土層を除去した後の同一面で検出された古墳・弥生時代の遺構面と縄文時代晩期の遺構面の精査、遺構検出に着手し、溝や落ち込み等複数の遺構を検出し、以降 11 月まで遺構掘削を行った。縄文時代晩期の４溝等から当該期の編組製品が多量に出土するとともに、弥生時代中期の 14 溝では護岸のための木製構造物が検出されるなど、特筆される調査成果が得られた。

10 月 24 日から調査区全体の清掃作業に着手し、10 月 28 日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行った。その後、14 溝護岸部分を中心に掘削・記録作業を行い、11 月 20 日をもって調査を終了、翌 21 日から遺構面を養生するための埋め戻し作業を行った。遺構の埋め戻しの際には、木製構造物の間に土嚢を詰めて補強するとともに、遺構内に真砂土を充填して保護した。降雪等、悪天候

の中の作業となったが、2012 年 1 月 21 日に現地におけるすべての作業が終了した。

２　2012 年度調査

調査は、盛土から橋脚への工法変更により P5 橋脚の施工範囲（以下、「P5」とする）が対象となった。調査開始前に鋼矢板の打設を行う予定であったが、工事予定の変更が生じて打設が夏期まで延期となったため、掘削深度が浅く安全が確保される間は、露天掘りで調査を進めることとなった。

写真２　26 溝 樹皮取上げ作業風景

P5 の調査は、４月 25 日から基準点測量に着手した。５月 10 日から重機によって埋め戻し土を掘削し、14 日から 2011 年度調査の際に埋め戻された養生材の撤去を開始した。

５月 31 日から第 2a 層下面（第１面）の調査を開始、26 溝の木製構造物の取り上げから行い、以降、弥生時代中期の木製構造物を伴う溝等の調査を９月まで実施した。この間、８月 10 日から 26 日まで発掘調査を一時停止して鋼矢板打設を実施、27 日から調査を再開している。

９月３日から第 3a 層下面（第２面：縄文時代晩期）の調査を開始、16 溝等の調査を行い、10 月 10 日に終了した。10 月 11 日からは第 4a 層下面（第３面、縄文時代中期の遺構面）で検出された 55 河川等の自然流路の調査に着手し、15 日からは北方砂層と称する縄文時代中期以前の堆積層の掘削を開始した。

11 月５日に北方砂層の掘削途中で鋼矢板打設による掘削限界深度に達したが、同層中に多数の遺物が含まれていることから、掘削限界深度よりも低位での余掘りの可能性について国土交通省と協議を行った。その結果、鋼矢板から２m 控えれば掘削限界深度からさらに 50 cm 下までは安全に掘削可能と判断されたため、20 日から余掘りに着手し、29 日に掘削を終了した。30 日に記録作業を行い、12 月７日には高所作業車による写真撮影を行って、現地におけるすべての調査が終了した。

2011・2012 年度の調査成果については、財団のホームページ※や月刊広報誌「鳥取西道路の遺跡を掘る！」で随時紹介し、2011 年 10 月 15 日に現地説明会を開催（約 120 名参加）したほか、松保地区公民館（鳥取市布勢）で 2012 年 11 月 29 日から 30 日まで、湖山池情報プラザ（鳥取市高住）で同年 12 月 10 日から 17 日まで、県民ふれあい会館（鳥取市富安）で 2013 年３月 11 日から 19 日まで出土品の展示会を行った。

※公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室ホームページ（http://kyo-bun.sakura.ne.jp/chosasitsu%20new.htm）

写真３　現地説明会風景

写真４　遺物展示会風景（松保地区公民館）

第３節　調査体制

発掘調査および報告書作成は以下の体制で行った。

2011年度

○鳥取県教育委員会
　教育長　横濵　純一
鳥取県教育委員会事務局文化財課
　課長　上山　憲二
　歴史遺産室長　中原　斉
　課長補佐　田貝　隆（兼主幹）
　文化財係長　北浦　弘人
　文化財主事　大野　哲二
○財団法人鳥取県教育文化財団
　理事長　井上　善弘
　事務局長　漆原　貞夫
　事務職員　岡田　美津子
調査室
　室長　松井　潔*1（兼美和調査事務所長）
　次長　石本　富正
　事務職員　福田　早由里
美和調査事務所
　事務職員　植木　智子
調査第１担当
　副主幹　濵田　竜彦*1
　文化財主事　中尾　智行*2

2012年度

○鳥取県教育委員会
　教育長　横濵　純一
鳥取県教育委員会事務局文化財課
　課長　上山　憲二
　歴史遺産室長　北浦　弘人
　課長補佐　土山　和俊
　文化財主事兼係長　大野　哲二
○財団法人鳥取県教育文化財団
　理事長　井上　善弘
　事務局長　漆原　貞夫（～2012年12月31日）
　　中川　眞一（2013年１月１日～2013年１月20日まで、この間調査室次長兼務）
　　石本　富正（2013年１月21日～）
　事務職員　岡田　美津子
　臨時職員　橋本　絵美
調査室
　室長　松井　潔*1（兼美和調査事務所長）
　次長　石本　富正（～2012年５月31日）
　　中川　眞一（2012年６月１日～）
　主事　福島　亘*1
　事務職員　福田　早由里
美和調査事務所
　副主幹（総括）　濵田　竜彦*1
　事務職員　植木　智子
　調査第2担当
　副主幹　野口　良也*1
　文化財主事　北　浩明*1
　　長戸　満男*3

2013年度

○鳥取県教育委員会
　教育長　横濵　純一
鳥取県教育委員会事務局文化財課
　課長　上山　憲二
　歴史遺産室長　北浦　弘人
　課長補佐　土山　和俊
　係長　小口英一郎
　文化財主事　岡野　雅則
○公益財団法人鳥取県教育文化財団
　理事長　井上　善弘
　事務局長　石本　富正
　事務職員　岡田　美津子
調査室
　室長　松井　潔*1

次長　中川　眞一（兼総務企画課長）
総務企画課
総務係
係長　川村　悟*1
主事　福島　亘*1
事務職員　福田　早由里
植木　智子（兼事務局事務職員）
調査企画設計係
係長　玉木　秀幸*1
文化財主事　横山　聖*1（～2013年６月30日）
片岡　啓介*1（2013年６月１日～）
〔報告書担当〕
主幹　野口　良也*1
文化財主事　北　浩明*1
長戸　満男*3（～2013年６月16日）

2014年度

○鳥取県教育委員会
教育長　山本　仁志
鳥取県教育委員会事務局文化財課
課長　木本　美喜
歴史遺産室長　松井　潔
課長補佐　土山　和俊
文化財主事兼係長　野口　良也
文化財主事　岡野　雅則
○公益財団法人鳥取県教育文化財団
理事長　井上　善弘（～2014年６月30日）
野村　勇二（2014年７月１日～）
事務局長　石本　富正
副主幹　岡田　美津子
調査室
室長　北浦　弘人*1
次長　中川　眞一（兼総務企画課長）（～2014年４月30日）
民木　一美（兼総務企画課長）（2014年５月１日～）
総務企画課
総務係
係長　川村　悟*1
主事　福島　亘*1
事務職員　田中　絵里子（兼事務局事務職員）
調査企画設計係
係長　玉木　秀幸*1
文化財主事　淺井　達也*1
〔報告書担当〕
主幹　牧本　哲雄*1
副主幹　茶谷　満*1
文化財主事　北　浩明*1

2015年度

○鳥取県教育委員会
教育長　山本　仁志
鳥取県教育委員会事務局文化財課
課長　木本　美喜
歴史遺産室長　松井　潔
課長補佐　土山　和俊
文化財主事兼係長　野口　良也
文化財主事　北　浩明
○公益財団法人鳥取県教育文化財団
理事長　野村　勇二
事務局長　石本　富正（～2015年６月30日）
畑中　弘子（2015年７月１日～）
副主幹　岡田　美津子
調査室
室長　北浦　弘人*1
次長　民木　一美
総務係
係長　川村　悟*1
主事　西村　あかね*1
事務職員　田中　絵里子（兼事務局事務職員）
調査企画設計係
係長　玉木　秀幸*1
文化財主事　淺井　達也*1
〔報告書担当〕
主幹　牧本　哲雄*1
副主幹　茶谷　満*1

*1　鳥取県教育委員会から派遣
*2　財団法人（現公益財団法人）大阪府文化財センターから出向
*3　財団法人（現一般財団法人）京都市埋蔵文化財研究所から出向

○発掘調査支援業者

2011年度

株式会社アーキジオ・アサヒコンサルタント株式会社共同企業体
現場代理人　：伊東　孝次
副現場代理人：藤田　健二
支援調査員　：伊藤　雅和、野　浩一
調査補助員　：大西　健吾、中井　英策、
大橋　太郎

2012年度

埋蔵文化財発掘調査支援業務委託（高住牛輪谷遺跡、高住井手添遺跡（第２次調査））共同企業体（株式会社シン技術コンサル、サイトウコンサルタント株式会社）
現場代理人　：千葉　清貴
副現場代理人：武安　淳
支援調査員　：長澤　展生、石川　博行
調査補助員　：成田　典信、中谷　桂太、
岩瀬　大輔

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

高住井手添遺跡は、鳥取県鳥取市高住に所在する（図３）。鳥取県は、西日本の日本海側に位置しており中国地方に属する。県域は東西に長く広がり、旧国名では東部を因幡国、中西部を伯耆国と呼称した。鳥取市は古来より因幡国の中心として栄え、10 世紀に編まれた『和名類聚抄』には「因幡国邑美郡鳥取郷」の地名が確認できる。1889（明治 22）年に市制を開始し、2004 年の合併により現在の面積は 765.66 km^2、人口は約 20 万人を数える。

高住井手添遺跡の所在する高住地区は、鳥取市の中央やや北寄りに位置する湖山池に向かって南方の山地から形成する谷底平野に位置している。現在は湖山池南岸に面した丘陵裾部が集落として、丘陵を挟んで三山口方面に入り組む平野部が耕地として主に利用されている。高住井手添遺跡は南北方向に延びる谷底平野部の西側丘陵裾部に立地しており、この谷底平野および湖山池に面した東西の丘陵が埋蔵文化財包蔵地として周知されている。遺跡の北に広がる湖山池は、東西４km、南北 2.5 km、面積 6.8 km^2 を測る海跡湖であり、現在は海岸線の砂丘の形成や河口での水門設置によって弱い汽水環境にあるものの、過去には日本海の内湾として海水環境にあった。今回の調査地の標高は約２ｍであり、湖山池などの水文環境の変化を直接的に受ける立地といえよう。

また、遺跡の南方約 1.5 km には、1943 年に発生した鳥取大地震の震源ともなった「吉岡断層」が東西に走っており、今回の調査でも液状化現象に伴う地層の変形が確認されている。

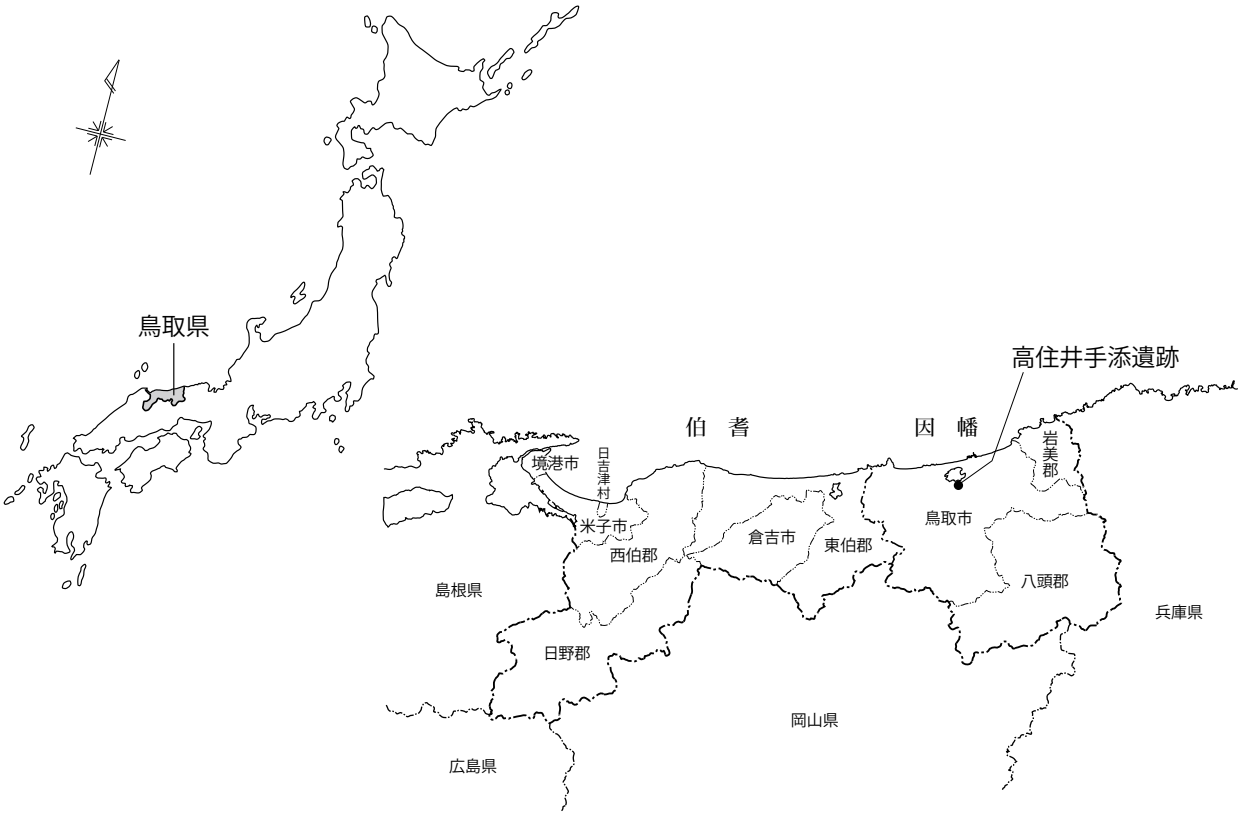


図３　鳥取県と遺跡の所在地

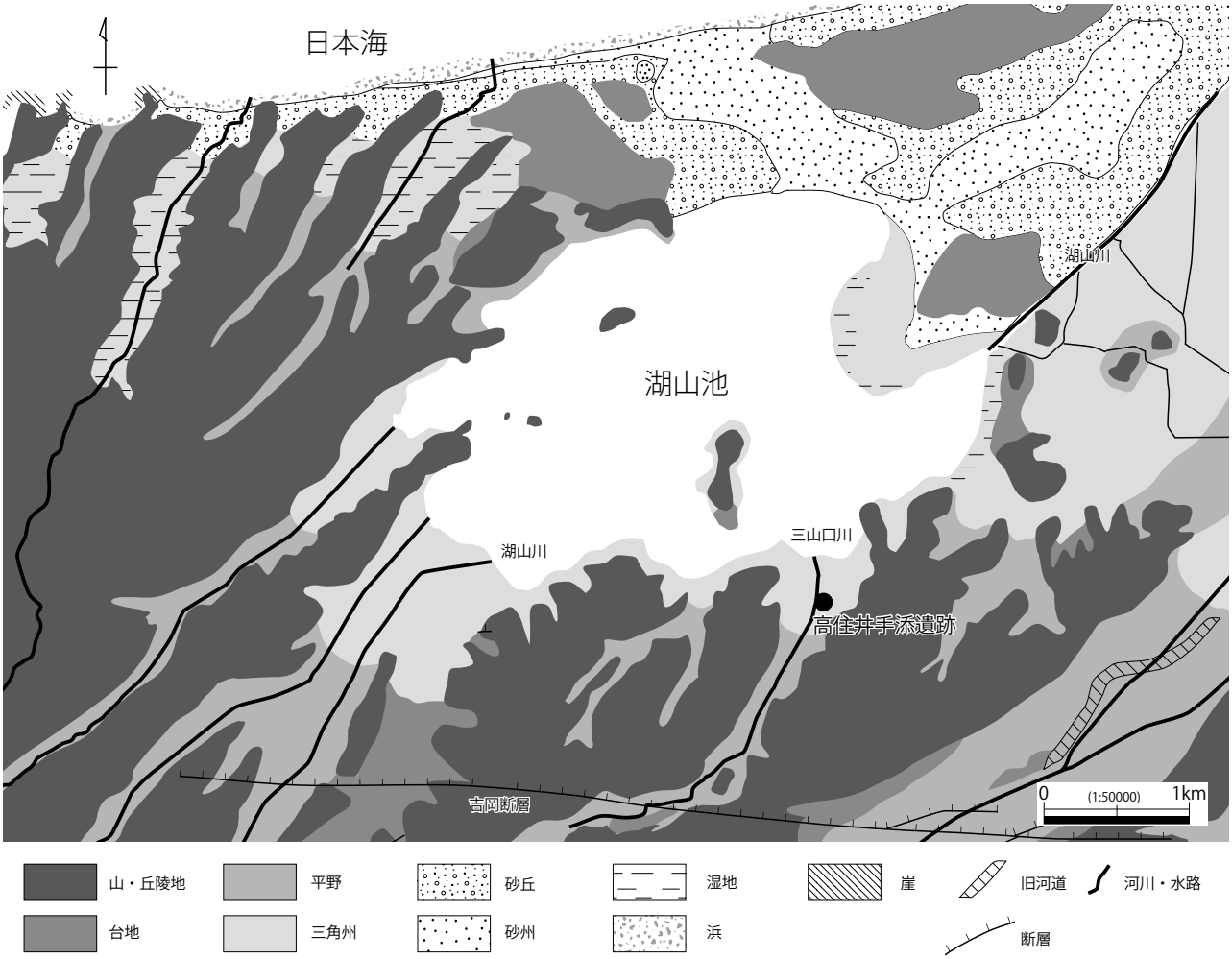


図４　遺跡周辺の地形（『高住平田遺跡Ⅰ』から引用。一部加筆）

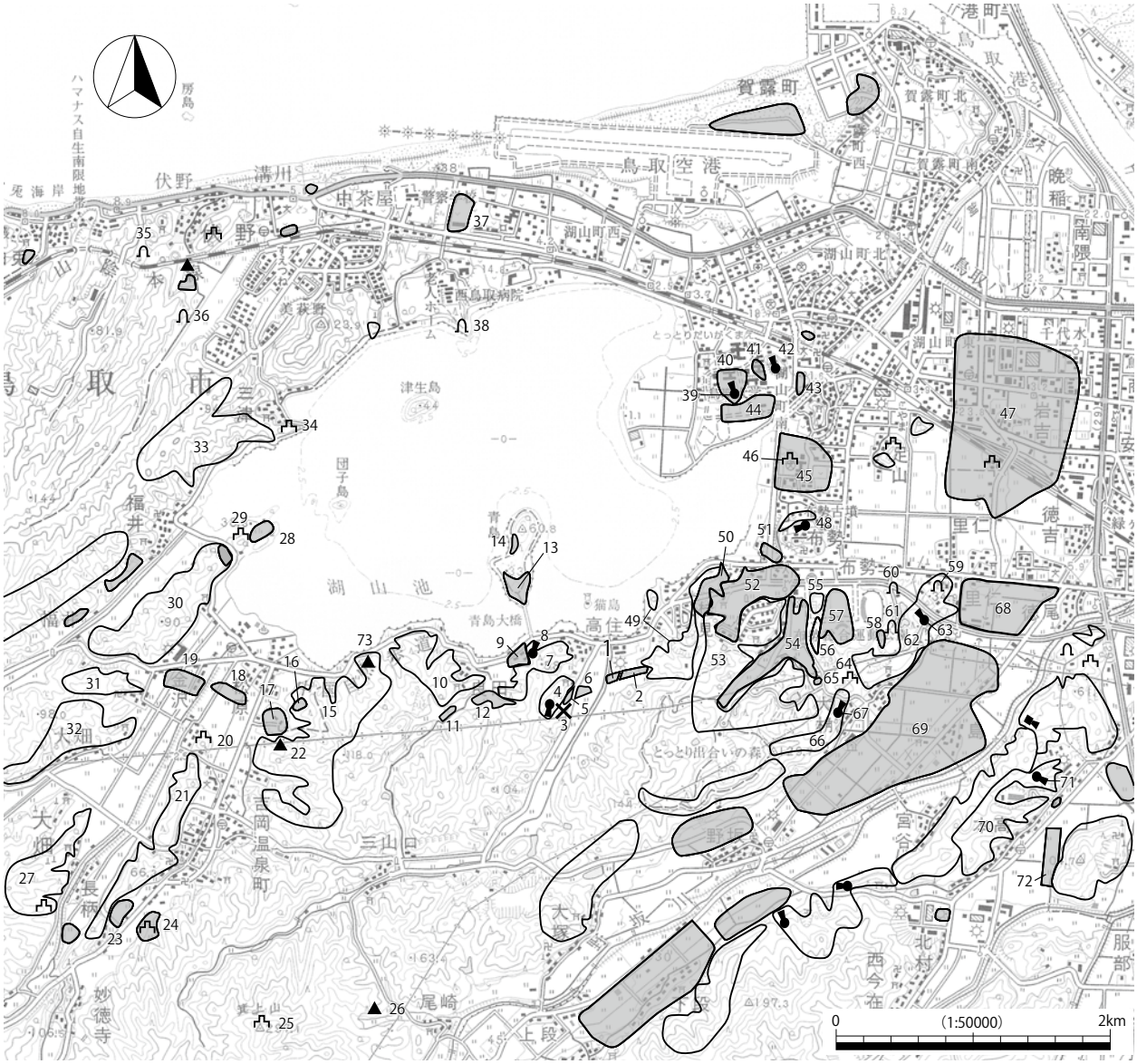
第２節　歴史的環境

今回の調査地は湖山池の南部にあたる。湖山池周辺は、鳥取県東部でも多くの遺跡が集中する地域の一つである。本節では湖山池周辺の歴史を概観する。

【縄文時代】

これまで湖山池周辺で確認された縄文土器では、古相のものでは桂見遺跡（52）で確認された大歳山式土器がある。ただし出土は少量に留まり、縄文時代前期についてはこれまで良好な資料にめぐまれていなかった。今回の高住井手添遺跡の調査で出土した北白川下層式土器群は、湖山池南岸における人々の暮らしが、縄文時代前期中葉以降には安定して営まれていたことを示す資料といえる。また、合わせて今回の調査をはじめとした鳥取西道路にかかる発掘調査において、高住・桂見地区の各遺跡で縄文時代中期の鷹島式や船元式、里木Ⅱ式の各土器型式が出土したことは、湖山池沿岸地域での人々の継続的な活動を物語る。

中期末から後期にかけては、湖山池南東部の布勢、桂見の低湿地において遺構・遺物が確認されている。布勢第１遺跡（57）では、杭と板材を用いた後期の水路護岸らしき遺構が確認された。周辺は湿潤な環境下で多数の木製品が良好な状態で地中に保存されており、中でも布勢第１遺跡出土の朱漆塗りの木製容器や、桂見遺跡（52）出土の丸木舟は特筆される。後期以降の土器は、湖山池南側に浮



1 高住井手添遺跡　2 高住牛輪谷遺跡　3 高住銅鐸出土地　4 高住宮ノ谷古墳群　5 高住宮ノ谷遺跡
6 高住平田遺跡　7 高住古墳群　8 高住 1 号墳　9 塞ノ谷遺跡　10 良田古墳群　11 良田中道遺跡
12 良田平田遺跡　13 青島第 1 遺跡　14 青島第 3 遺跡　15 松原古墳群　16 松原小奥遺跡　17 松原谷田遺跡
18 松原田中遺跡　19 金沢坂津口遺跡　20 松原所在古墓　21 丸山城跡　22 吉岡古墳群　23 吉岡遺跡（大海地区）
24 吉岡遺跡（丸山地区）　25 箕上山城跡　26 尾崎須恵器窯跡　27 長柄古墳群　28 岩本第 2 遺跡　29 防己尾城跡
30 岩本古墳群　31 大谷古墳群　32 大畑古墳群　33 三津古墳群　34 三津ヶ崎本陣山城跡　35 伏野神社の南横穴墓群
36 伏野所在横穴墓群　37 中ノ茶屋遺跡　38 三津所在横穴墓　39 三浦 1 号墳（琵琶隈古墳）　40 三浦遺跡
41 大熊段遺跡　42 大熊段 1 号墳　43 湖山第 1 遺跡　44 湖山第 2 遺跡　45 天神山遺跡　46 天神山城跡
47 岩吉遺跡　48 布勢 1 号墳　49 倉見古墳群　50 西桂見遺跡　51 帆城遺跡　52 桂見遺跡　53 桂見古墳群・墳墓群
54 東桂見遺跡　55 布勢古墳群　56 布勢鶴指奥墳墓群　57 布勢第 1 遺跡　58 布勢第 2 遺跡　59 里仁第 1 横穴群
60 里仁第 2 横穴群　61 里仁第 3 横穴群　62 里仁古墳群　63 里仁 29 号墳　64 鍋山城跡　65 桂見鍋山遺跡
66 栫間古墳群　67 栫間 1 号墳　68 里仁遺跡　69 大栫遺跡　70 本高古墳群　71 本高 14 号墳　72 本高弓ノ木遺跡
73 松原 1 号墓

図５　湖山池周辺の遺跡

かぶ青島の青島第１遺跡（13）でも出土した。

後期後半から晩期にかけて、千代川やそこへ合流する河川によって形成された自然堤防上に人々が進出する。野坂川沿いの大桝遺跡（69）や、千代川と湖山池の間にある岩吉遺跡（47）、湖山池の北東部にある湖山第２遺跡（44）では、晩期の土器がみつかった。湖山池南西部の岩本第２遺跡（28）や松原田中遺跡では、少量ながら晩期の突帯文土器が出土する。ただし、明確な遺構はいずれも未確認である。

2010 年度に行われた本高弓ノ木遺跡（72）の調査では、木材を貯木した可能性がある流路が確認され、弥生前期土器に伴って突帯文土器が出土している。

【弥生時代】

前期の遺物出土地点は、縄文時代晩期に展開した地域と大きな差違はない。これまで遺構はほとんど確認されていなかったが、湖山池南西部にある松原田中遺跡（18）でこの頃の溝が確認された。

明らかな建物遺構が確認できるのは中期以降である。湖山池北東部の湖山第２遺跡では、中期前葉と思われる掘立柱建物が確認された。中期中葉はよくわかっていないが、中期後葉になると徐々に遺構が確認されはじめる。湖山池南東部の布勢第２遺跡（58）や北東部の湖山第２遺跡では竪穴建物を、東部の岩吉遺跡では掘立柱建物を確認しており、これらは後期も存続する。湖山池南部では、高住字宮ノ谷の丘陵から流水文銅鐸が、青島の南対岸に面する塞ノ谷遺跡（５）から分銅形土製品がそれぞれ出土している。また、湖山池北部の砂丘地では、中ノ茶屋遺跡（37）で弥生土器のほか石鏃や銅鏃の散布が確認されている。

後期になると、各所で建物遺構が各所で形成される。湖山第２遺跡ではこの頃から遺構数が増え、布勢第２遺跡に続き、桂見遺跡、帆城遺跡（51）、大桝遺跡（69）では丘陵裾に、西桂見遺跡（50）では丘陵上に建物遺構が確認された。特に、布勢第２遺跡（58）の玉作工房と思しき竪穴建物は注目される。

一方、湖山池南東部の丘陵では墳墓群が築造される。その中で後期中葉の墳丘長軸が 17.8 ｍを測る布勢鶴指奥１号墳丘墓（56）や、水銀朱や玉類を副葬する桂見墳墓群第１土壙墓（53）の存在は、首長層の存在を示すものだろう。さらに後期末になると西桂見墳丘墓（全長約 65 ｍ）が出現し、湖山池南東部に有力な集団が存在していたようである。

湖山池南西部では、松原田中遺跡や松原谷田遺跡（17）、岩本第２遺跡で建物遺構が発見され、また、湖山池を眼下に望む丘陵上には、2011 年度の調査で 1000 点以上のガラス玉が出土した松原１号墓（73）が所在する。

【古墳時代】

古墳時代に入ると、湖山池周辺の丘陵上に多くの古墳が造られる。

鳥取平野最大の前方後円墳は、大桝遺跡を見下ろす尾根上にある桝間１号墳（全長 92 ｍ）（67）で、里仁 29 号墳（全長 81 ｍ）（63）が続く。また全長 30 ｍ前後の前方後円墳は、桂見、高住や良田、松原、吉岡の各古墳群に点在する。松原古墳群内の７号墳（全長 54 ｍ）は、周辺では突出した規模を持つ。

前期古墳の調査は、桂見古墳群や倉見古墳群（49）、松原古墳群（15）で実施された。これらはすべて方墳で、立地も含めて弥生時代からの伝統を継承していることが想定される。また、2009 年度に実施された本高古墳群（70）の調査では、当初は円墳と認識されていた本高 14 号墳（71）が全長 63 ｍを測る前方後円墳であることが明らかとなり、現状では山陰地方で最も早くに築造された前方

後円墳の一つと評価されている。

中期古墳の調査例は里仁 32 ～ 35 号墳（62）にある。いずれも方墳で、32・33 号墳では鰭付円筒埴輪を棺に転用した埋葬施設が確認されており、35 号墳からは竪櫛が多数出土した。

後期古墳は、湖山池北東部の濃山台地上にある三浦１号墳（琵琶隈古墳）（全長 36 ｍ）（39）や大熊段１号墳（全長 46 ｍ）（42）、東部の布勢１号墳（全長 59 ｍ）（48）といった前方後円墳が比較的近接して築造される。横穴式石室は倉見９号墳（49）、高住 12 号墳（７）、松原 28 号墳（15）や吉岡１号墳（葦岡長者古墳）（21）などがあるが、千代川東岸地域に比べると確認例は少ない。このほか、湖山池南西部の松原古墳群では、尾根頂部の平坦部を中心に築造された 10 基の古墳と斜面に開口する後期末の横穴墓が調査された。

集落は弥生時代後期から継続して、湖山第２遺跡や西桂見遺跡、布勢第２遺跡、松原谷田遺跡などで営まれた。ただ中期の遺構、遺物は減少傾向にある。西桂見遺跡の集落は前期で廃絶し、布勢第２遺跡も中期は未確認である。湖山第２遺跡は中期で終焉し、隣接する湖山第１遺跡は中期末から後期の建物遺構を検出する。松原谷田遺跡（17）は前期以降の遺物が散布するのみである。

塞ノ谷遺跡（５）では木製の護岸施設を伴う池状遺構が見つかっている。池状遺構内からは弥生時代後期から古墳時代にかけての祭祀具を含んだ遺物が出土しており、水に関係する祭祀が想定される。

【古代】

湖山池周辺は、律令制下では因幡国高草郡に属した。この時期の遺構として、桂見遺跡や岩吉遺跡で掘立柱建物が確認されている。桂見遺跡では周辺から赤色塗彩された土師器や転用硯、木簡が出土し、岩吉遺跡では木簡とともに「草田」と記した墨書土器が多数みつかった。両遺跡とも人形代や斎串などの木製祭祀具が出土する。

松原谷田遺跡（17）では平安時代の掘立柱建物１棟を確認したほか、吉岡遺跡（丸山地区）（24）では須恵器とともに奈良時代初頭の単弁十二葉蓮花文軒丸瓦や鴟尾の破片が出土する。吉岡遺跡（大海地区）（23）では瓦が多数散布しており、古代寺院があったと考えられる。

2011・2012 年度に行われた高住平田遺跡（10）の調査でも、奈良時代から平安時代にかけての遺構・遺物が確認されており、墨書のある土器や人形のほか、銅印が１点出土している。また、2011・2012 年度に行われた良田平田遺跡（２）の調査で出土した、奈良時代から平安時代（一部飛鳥時代に遡る）の木簡、墨書土器、硯といった文字関係資料、銅製帯金具、斎串・形代などの木製祭祀具などの遺物と、溝で区画された建物遺構群は、官衙関連施設の存在を窺わせるものである。

【中世】

南北朝の争乱期において因幡の実質的な支配を確立した山名時氏は、1364（貞治３）年に室町幕府から正式に因幡守護に任じられ、以後山名氏が因幡守護職に就くことになる。

その守護所として築城されたのが天神山城（46）である。正確な築造時期は不明だが、15 世紀後半には守護所として機能していたと考えられている。その後但馬山名氏の支配下に入るが、1563（永禄６）年に武田高信による攻撃を受けた山名豊数が退去し廃城となる。一方、湖山池南西部に所在する丸山城（20）と防己尾城（29）は、この地域を拠点とする吉岡氏との関連性が考えられよう。

当該期の墓は、天神山城の北側の三浦遺跡（40）、大熊段遺跡（41）や、南側の里仁古墳群、布勢墳墓群、布勢鶴指奥墳墓群、桂見墳墓群、西桂見遺跡でみつかった。大熊段遺跡、布勢墳墓群、桂見墳墓群、西桂見遺跡等では、方形に周溝を持つものや盛土を確認した。

※参考文献（本章で紹介した遺跡の主要文献のみを掲出。遺跡名五十音順）

『葦岡長者古墳（吉岡１号墳）発掘調査報告書』 明日の湖南を考える会　1984
『岩吉遺跡』 岩吉遺跡調査団　1976
『岩吉遺跡発掘調査概報』鳥取市文化財報告書委 25　鳥取市教育委員会　鳥取市遺跡調査団　1989
『岩吉遺跡発掘調査概報Ⅱ』鳥取市文化財報告書 20　鳥取市教育委員会　鳥取市遺跡調査団　1990
『岩吉遺跡Ⅲ』鳥取市文化財報告書 30　鳥取市教育委員会　鳥取市遺跡調査団　1991
『岩吉遺跡Ⅳ』 財団法人鳥取市教育文化財団　1997
『大熊段遺跡』鳥取県教育文化財団報告書 19　財団法人鳥取県教育文化財団　1986
『桂見墳墓群』鳥取市文化財報告書　鳥取市教育委員会　鳥取市遺跡調査団　1984
『桂見墳墓群Ⅱ』 財団法人鳥取市教育福祉振興会　1993
『平成６年度　桂見遺跡発掘調査報告書』 財団法人鳥取市教育福祉振興会　1995
『平成７年度　桂見遺跡群発掘調査概要報告書』 財団法人鳥取市教育福祉振興会　1996
『桂見遺跡－八ツ割地区・堤谷東地区・堤谷西地区－』鳥取県教育文化財団調査報告書 45　財団法人鳥取県教育文化財団　1996
『平成８年度　桂見遺跡群発掘調査概要報告書』 財団法人鳥取市教育福祉協議会　1997
『平成９年度　桂見遺跡発掘調査報告書』 財団法人鳥取市教育福祉振興会　1998
『桂見遺跡群（その１）』 財団法人鳥取市教育福祉振興会　1998
『桂見遺跡群（その２）』 財団法人鳥取県教育文化財団　1998
『平成 20 年度　桂見遺跡発掘調査報告書』財団法人鳥取市文化財団　2009
『桂見古墳群・桂見遺跡発掘調査概要報告書』鳥取市文化財報告書 23　鳥取市教育委員会　1988
『湖山第１遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書 24　鳥取県教育委員会　財団法人鳥取県教育文化財団　1989
『湖山第２遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書 11　財団法人鳥取県教育文化財団　1982
『里仁古墳群』鳥取県教育文化財団報告書 18　財団法人鳥取県教育文化財団　1985
『高住平田遺跡Ⅰ』 鳥取県教育委員会　2012
『高住平田遺跡Ⅱ』 鳥取県教育委員会　2013
『高住牛輪谷遺跡Ⅰ』 鳥取県教育委員会　2014
『天神山遺跡発掘調査概報』 鳥取県教育委員会　1973
『天神山遺跡発掘調査報告書』 鳥取県教育委員会　1989
『徳尾遺跡群発掘調査報告書』 鳥取県教育委員会　1985
『西桂見遺跡』鳥取市文化財報告書Ⅹ　鳥取市教育委員会　1981
『西桂見遺跡Ⅱ』鳥取市文化財報告書 16　鳥取市教育委員会　倉見古墳群発掘調査団　1984
『西桂見遺跡－鷲谷口地区・鷲谷奥地区・堤谷地区－倉見古墳群』鳥取県教育文化財団調査報告書 46　財団法人鳥取県教育文化財団　1996
『東桂見遺跡試掘調査報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告６　鳥取県教育委員会　1992
『東桂見遺跡　布勢鶴指奥墳墓群』鳥取県教育文化財団調査報告書 29　財団法人鳥取県教育文化財団　1992
『布勢遺跡発掘調査報告書』鳥取県教育文化財団調査報告書７　財団法人鳥取県教育文化財団　1981
『布勢鶴指奥墳墓群試掘調査報告書』鳥取県教育委員会　1992
『布勢墳墓群』 財団法人鳥取市教育福祉振興会　1998
『松原１号墓』財団法人鳥取市文化財団　2012
『松原古墳群Ⅰ』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 30　鳥取県埋蔵文化財センター　国土交通省鳥取河川国道事務所　2010
『松原古墳群Ⅱ　松原小奥遺跡』鳥取県文化財調査報告書 20　鳥取県教育委員会　2010
『松原田中遺跡Ⅰ』 鳥取県教育委員会　2013
『三浦遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書９　鳥取大学　財団法人鳥取県教育文化財団　1982
『本高古墳群』 鳥取県教育委員会　2010
『本高弓ノ木遺跡　５区』 鳥取県教育委員会　2013
『本高弓ノ木遺跡　４区』 鳥取県教育委員会　2014
『良田平田遺跡』鳥取県教育委員会　2014
『鳥取県史』第１巻　原始古代　鳥取県　1972
『新修鳥取市史』第１巻　古代・中世篇　鳥取市　1983

第３章　調査の方法

第１節　現地調査

調査区の区割り

鳥取県教育委員会が、鳥取県教育文化財団に委託した鳥取西道路関連の発掘調査では、調査成果の標準化をはかるため、遺跡・遺構の位置表示、遺物の取り上げ等に使用する調査区割り（グリッド）を以下のとおり定め、調査を行っている。

遺跡･遺構の位置は平面直角座標の第Ⅴ系（世界測地系）を使用して表示する。区割りについては、10 m × 10 m（100 m^2）の区画を基本的な最小単位とし、その名称（記号）については、以下のように設定した（図６）。

第Ⅰ区画　鳥取県の全域に設定した大区画である。10,000 m×10,000 mで、91の区画を設け、北東隅からT1～T91の記号を付した。

第Ⅱ区画　第Ⅰ区画の１区画内、1,000 m×1,000 mに100分割した区画である。第Ⅱ区画については、南北軸に１～10、東西軸にａ～ｊを付し、1a～10jの記号を付した。

第Ⅲ区画　第Ⅱ区画の1区画を、100 m×100 mに100分割した区画である。第Ⅲ区画については、南北軸に１～10、東西軸にＡ～Ｊを付し、1A～10Jの記号を付した。

第Ⅳ区画　第Ⅲ区画の１区画を、10 m×10 mに100分割した区画である。第Ⅳ区画については、南北軸に１～10、東西軸にａ～ｊを付し、1a～10jの記号を付した。

調査区名

当報告書内では、図７のとおり、調査年度によって「2011 年度調査区」「2012 年度調査区」の呼称を用いる。

遺物の取り上げ

遺物の取り上げは、上記の地区割りを基本にして、第Ⅳ区画の単位で行っている。また、遺物取上カードおよび遺物取上台帳にもこの地区名を必ず記入しており、地図上でも出土地点を示すことが可能となっている。高住井手添遺跡の発掘調査では、２ヶ年度通しで取り上げ番号を記した。

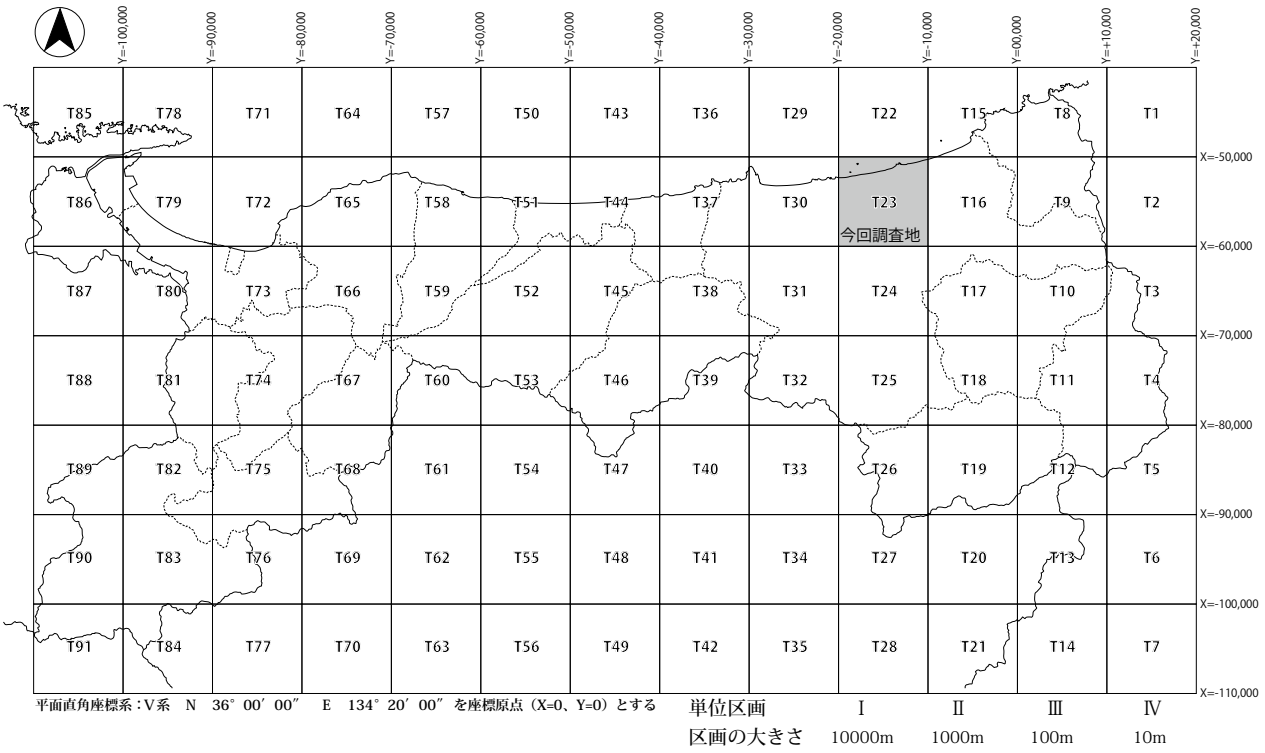
遺構番号と遺構種類の呼称

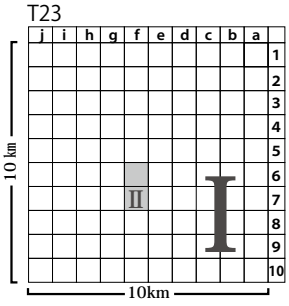
遺構番号については、検出した順に番号を付与することを基本方針とし、遺構種類の呼称については、遺構番号の後に種類を組み合わせて１土坑、２溝のように記載している。遺構種類については調査の進展により変更されることがある。また、遺構番号を付与したものの、調査の結果、撹乱や自然地形であることが明らかとなった場合には欠番とした。

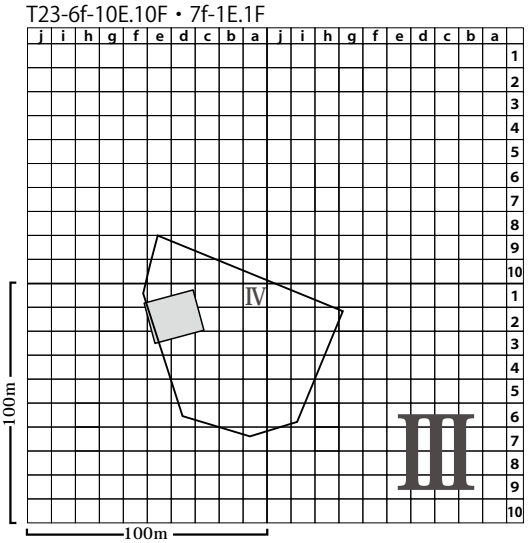
高住井手添遺跡では、2011 年度調査では１番から 44 番まで通しで番号を付した。2012 年度調査では、2011 年度調査と同一の遺構はそのままの番号を用い、新しく検出した遺構は 51 番から通しで遺構番号を付した。

図面記録

図面は作成した各年度ごとに通し番号を付して管理している。調査地の全体図、調査地内の堆積をみるための主要な土層断面図、個別の遺構平面図や断面図等については、電子平板を用いたデジタル


Y=-100,000
Y=-90,000
Y=-80,000
Y=-70,000
Y=-60,000
Y=-50,000
Y=-40,000
Y=-30,000
Y=-20,000
Y=-10,000
Y=-00,000
Y=+10,000
Y=+20,000
T85 T78 T71 T64 T57 T50 T43 T36 T29 T22 T15 T8 T1
T86 T79 T72 T65 T58 T51 T44 T37 T30 T23 T16 T9 T2
T87 T80 T73 T66 T59 T52 T45 T38 T31 T24 T17 T10 T3
T88 T81 T74 T67 T60 T53 T46 T39 T32 T25 T18 T11 T4
T89 T82 T75 T68 T61 T54 T47 T40 T33 T26 T19 T12 T5
T90 T83 T76 T69 T62 T55 T48 T41 T34 T27 T20 T13 T6
T91 T84 T77 T70 T63 T56 T49 T42 T35 T28 T21 T14 T7
今回調査地
X=-50,000
X=-60,000
X=-70,000
X=-80,000
X=-90,000
X=-100,000
X=-110,000
平面直角座標系：V系　N　36° 00′ 00″　E　134° 20′ 00″ を座標原点（X=0、Y=0）とする
単位区画　Ⅰ　Ⅱ　Ⅲ　Ⅳ
区画の大きさ　10000m　1000m　100m　10m


T23
j i h g f e d c b a
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
Ⅱ
Ⅰ
10 km
10km


T23-6f-10E.10F・7f-1E.1F
j i h g f e d c b a j i h g f e d c b a
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
Ⅳ
Ⅲ
100m
100m

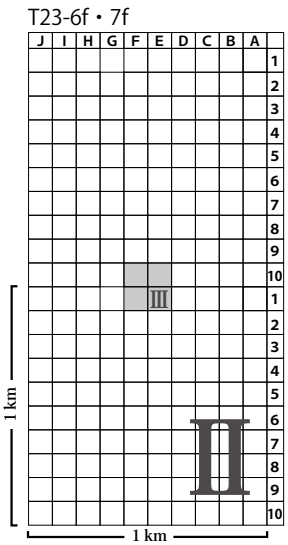
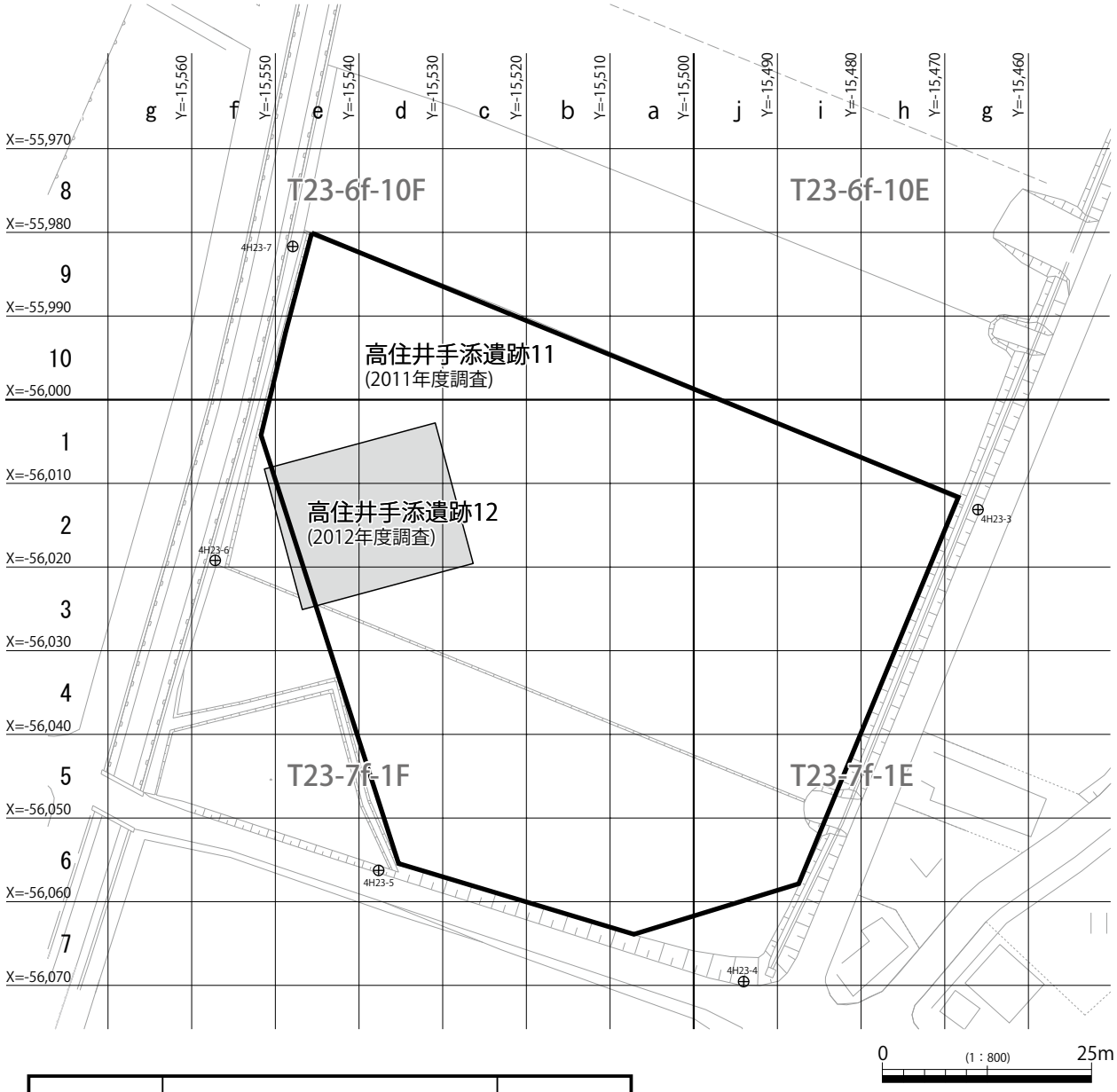

T23-6f・7f
J I H G F E D C B A
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
Ⅲ
Ⅱ
1 km
1 km

図６　調査区の区割り



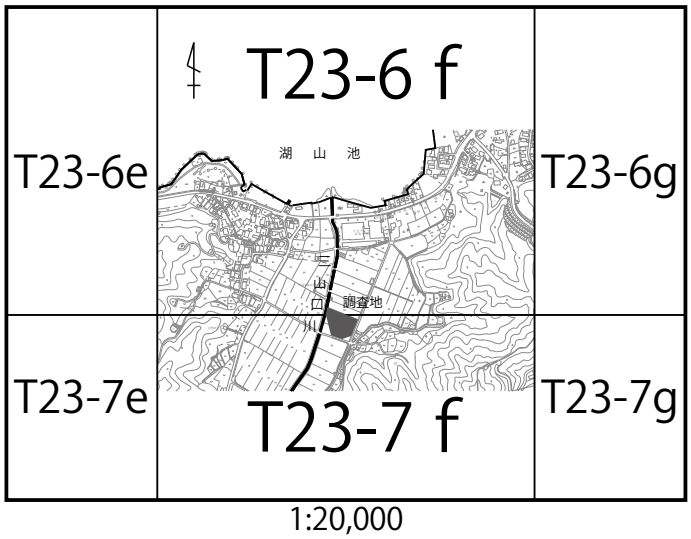


図７　調査区グリッド配置図

測量を行い、DXF 形式にて描画した。

図面の縮尺はそれぞれ状況に合わせて縮尺 1/10、1/20、1/40、1/50、1/200 で作成した。こうして作成した原図は番号を付し、登録台帳を作成して管理している。

写真撮影

調査地全体の写真撮影については、遺跡の立地や景観、周辺地形との関係性を表現するため、ラジコンヘリコプターおよび高所作業車を使用し、調査中および調査後の各遺構面完掘状況について、2011 年度は合計１回、2012 年度は合計１回行った。

また、４×５判カラーリバーサル・黒白、ブローニー（６×７）判カラーリバーサル・黒白、35 mm 判カラーリバーサル・黒白、デジタルデータの３種類を、撮影対象に応じて適宜選択しながら撮影した。

なお，デジタルデータには撮影の諸データを写し込み、各フィルムカットの検索用資料の役割を持たせた。デジタルデータは各カット RAW データと jpeg データの２種類を作成し保存している。

第２節　整理作業

出土遺物については、現地での取り上げ後、鳥取県教育文化財団にて以下の整理作業を行った。

土器・土製品　遺物整理は現場作業と並行して行い、洗浄・注記・接合・復元を行った後、実測作業を実施した。実測にあたっては、器種および形状が判明ないし復元できる個体を対象とした。

木・編組製品　破損した状態で出土し、そのままでは実測が困難な木製品や編組製品については、外部委託して高級アルコール法および真空凍結乾燥法による保存処理および接合を行った。実測にあたっては、器種や用途、特徴的な加工が施されているものを対象とした。実測した遺物については、全て樹種（素材）同定を行った。

石　器　石器については、洗浄・注記後、実測作業を行った。

写真撮影　以上の出土遺物を対象に、４×５判あるいはデジタル一眼レフカメラ（センサーサイズ　フルサイズ）で撮影を行った。

保　管　調査で得られた図面・写真の記録類、土器などの出土遺物はすべて台帳に登録して収納作業を行った。各資料は活用に対応することを念頭に、随時検索できる状況で保管している。

第４章　2011 年度調査の成果

第１節　調査の概要

2011（平成 23）年度の調査では、調査地内に重複して形成された多数の流路遺構を確認した。これらの流路は、縄文時代中期以降、弥生時代中期まで、ほぼ絶え間なく調査地内に存在していたようである。流路の肩部には土壌層が形成されており、後述するとおり、この土壌層などを手がかりに合計６面の遺構面を設定した。

各遺構面の時期は、上面から順に、第 1a 層下面が弥生時代後期、第 2a 面が弥生時代中期、第 2a 層下面が弥生時代前期～中期、第 3a 面が縄文時代晩期～弥生時代前期、第 4a 面が縄文時代後期～晩期、第 6a 面が縄文時代中期～後期と考えられる。

各遺構面では、流路遺構を中心に、その周辺につくられた土坑やピットも確認している。なお、流路遺構には、自然流路、人工的に掘削された可能性がある溝、自然流路にわずかながらも人の手が加えられた可能性のある溝といった、異なった性格のものが含まれている。しかしながら、調査中にそ

表１　2011 年度検出遺構一覧表

遺構番号	遺構種別	帰属グリッド	帰属遺構面	調査時確認面	時期	備考
21	落ち込み	T23-6f-10F-10e	第 1a 層上面（以上）	第 1a 層除去面	近世～近代	
22	落ち込み	T23-6f-10F-9e・10e	第 1a 層上面（以上）	第 1a 層除去面	近世～近代	
24	落ち込み	T23-6f-10F-10d	第 1a 層上面（以上）	第 1a 層除去面	近世～近代	
8	溝	T23-6f-10F・7f-1F	第 1a 層下面	第 1a 層除去面	弥生時代後期	
9	ピット	T23-7f-1F-5a	第 1a 層下面	第 1a 層除去面	弥生時代後期	
15	ピット	T23-6f-10F-10d	第 1a 層下面	第 1a 層除去面	弥生時代後期	
17	土坑	T23-7f-1F-2b	第 1a 層下面	第 1a 層除去面	弥生時代後期	
23	土坑	T23-7f-1F-1d	第 1a 層下面	第 1a 層除去面	弥生時代後期	
30	土坑	T23-7f-1F-2c	第 1a 層下面	第 1a 層除去面	弥生時代後期	
14	溝	T23-6f-10F・7f-1F	第 2a 面（第 2a 層上面）	第 1a 層除去面	弥生時代中期	
18	溝	T23-7f-1F-1e・2e	第 2a 面（第 2a 層上面）	第 1a 層除去面	弥生時代中期	
19	溝	T23-6f-10F・7f-1F	第 2a 面（第 2a 層上面）	第 1a 層除去面	弥生時代中期	
26	溝	T23-7f-1F-1e・2e	第 2a 面（第 2a 層上面）	第 1a 層除去面	弥生時代中期	
28	溝	T23-7f-1F-2e・3e	第 2a 面（第 2a 層上面）	第 1a 層除去面	弥生時代中期	
29	土坑	T23-7f-1F-2e	第 2a 面（第 2a 層上面）	第 1a 層除去面	弥生時代中期	
34	溝	T23-7f-1F-1c	第 2a 面（第 2a 層上面）	第 1a 層除去面	弥生時代中期	
35	溝	T23-7f-1F-2d	第 2a 面（第 2a 層上面）	第 1a 層除去面	弥生時代中期	
36	溝	T23-7f-1F-2e	第 2a 面（第 2a 層上面）	第 1a 層除去面	弥生時代中期	28 溝の一部か
37	土坑	T23-7f-1F-2d	第 2a 面（第 2a 層上面）	第 1a 層除去面	弥生時代中期	
40	溝	－	第 2a 層下面	第 2a 層下面	弥生時代前期～中期？	トレンチで確認。未調査
27	溝	T23-6f-10F-9e・10e	第 2a 層下面	第 2a 層除去面	弥生時代前期	
33	溝	T23-6f-10F-9c	第 2a 層下面	第 1a 層下面	弥生時代前期	トレンチで確認。未調査
1	土坑	T23-7F-1E-6j	第 3a 面（第 3a 層上面）	第 1a 層除去面	縄文時代晩期？	
4	溝	T23-7f-1F	第 3a 面（第 3a 層上面）	第 1a 層除去面	縄文時代晩期	6 溝と同一遺構
6	溝	T23-7f-1F	第 3a 面（第 3a 層上面）	第 1a 層除去面	縄文時代晩期	4 溝と同一遺構
16	溝	T23-6f-10F・7f-1F	第 3a 面（第 3a 層上面）	第 1a 層下面	縄文時代晩期～弥生時代前期	トレンチで確認。未調査
43	溝	－	第 3a 面（第 3a 層上面）	第 2a 層下面	縄文時代晩期～弥生時代前期	トレンチで確認。未調査
10	溝	T23-7f-1F	第 4a 面（第 4a 層上面）	第 1a 層除去面	縄文時代後期～晩期	
25	溝	T23-7f-1F-6d	第 4a 面（第 4a 層上面）	第 1a 層下面	縄文時代後期～晩期	トレンチで確認。未調査
38	溝	T23-7f-1F-4e	第 4a 面（第 4a 層上面）	第 1a 層除去面	縄文時代後期～晩期	トレンチ確認と平面検出のみ。未調査
39	溝	T23-7f-1F-5b	第 4a 面（第 4a 層上面）	第 3a 層下面	縄文時代後期～晩期	トレンチで確認。未調査
41	溝	－	第 6a 面（第 6a 層上面）	第 5a 層下面	縄文時代中期～後期	トレンチで確認。未調査
42	溝	－	第 6a 面（第 6a 層上面）	第 5a 層下面	縄文時代中期～後期	トレンチで確認。未調査
44	溝	－	第 6a 面（第 6a 層上面）	第 4a 層下面	縄文時代中期～後期？	トレンチで確認。未調査
5	溝	T23-7f-1E-2h・3h・4h・4i	不明	圃場整備盛土除去面	時期不明	
7	土坑	T23-7f-1F-3e	不明	第 1a 層除去面	弥生中期以降	
11	土坑	T23-7f-1F-3c	不明	第 1a 層除去面	弥生中期以降	
12	土坑	T23-7f-1F-3c	不明	第 1a 層除去面	弥生中期以降	
13	土坑	T23-7f-1F-3d	不明	第 1a 層除去面	弥生中期以降	
20	土坑	T23-7f-1F-2c	不明	第 1a 層除去面	弥生中期以降	
31	土坑	T23-7f-1F-2b	不明	第 1a 層除去面	縄文時代晩期？	
32	土坑	T23-7f-1F-2a	不明	第 1a 層除去面	縄文時代晩期？	
2	欠番	－	－	－	－	
3	欠番	－	－	－	－	

20m
0
(1 : 500)
北方砂層
Y=-15,460
Y=-15,480
Y=-15,500
Y=-15,520
Y=-15,540
X=-56,060
X=-56,040
X=-56,020
X=-56,000
X=-55,980

図８　遺構配置図

の性格を確定することは困難であったことと、遺構名称が複雑になるのを避けるために、流路遺構の遺構種別名はすべて溝とした。

第２節　調査地内の堆積と検出遺構面

１　基本層序と検出遺構面（図９～ 20、PL. ３・４）

調査区の南東側では圃場整備による削平が著しいため、現代の耕作土、圃場整備盛土を除去すると、ただちに縄文時代の遺物包含層が確認される。また、調査区北東側では、縄文時代中期以前に堆積したと考えられる「北方砂層」が圃場整備盛土直下で露出する。それ以外の場所では、一部に残存（調査区西部のみ）する近代耕作土の下に、灰色～黄灰色の遺物包含層が確認され、これを第 1a 層とした。第 1a 層は撹拌が強く耕作土と考えられる。縄文時代から中世にいたる遺物を含んでおり、除去面でウシと考えられる偶蹄目の蹄痕が多数検出された。中世を上限として形成された耕作土層と考えられよう。

以上のような状況を確認した上で、調査区内に建設される鳥取西道路の中央軸線を基準とした「断ち割り」ライン（「（路線）中央断ち割り」と「断ち割り１～４」）を原則 20 m 間隔となるように設定し、調査の端緒に掘削した。この断ち割り断面と、調査区周囲に巡らせた側溝断面によって基本層序の検討を行った（北側と東側については、掘削深度が浅く記録化していない）。ただし、重機掘削の進捗状況や、湧水、遺物の出土などで、下層の掘削が制限され、調査開始段階で層序確認を十分に行うことはできなかった。そのため、先述の第 1a 層については層呼称として確定したが、縄文時代の遺物包含層と考えられる土層については、縄文Ａ・Ｂ・Ｃ層に大別し、各層の細分については、それぞれ枝番を振って対応することとした。遺物ラベルや現地での土層断面注記などには、以上の層呼称を用いているが、調査終了後、各層の層相確認と層序対比から層呼称について以下のように整理した（左が調査時層名、右が本報告書での層名）。

第 1a 層→第 1a 層、弥生中期土壌層→第 2a 層、縄文 A-1 層→第 3a 層、縄文 A-2 層→第 4a 層、縄

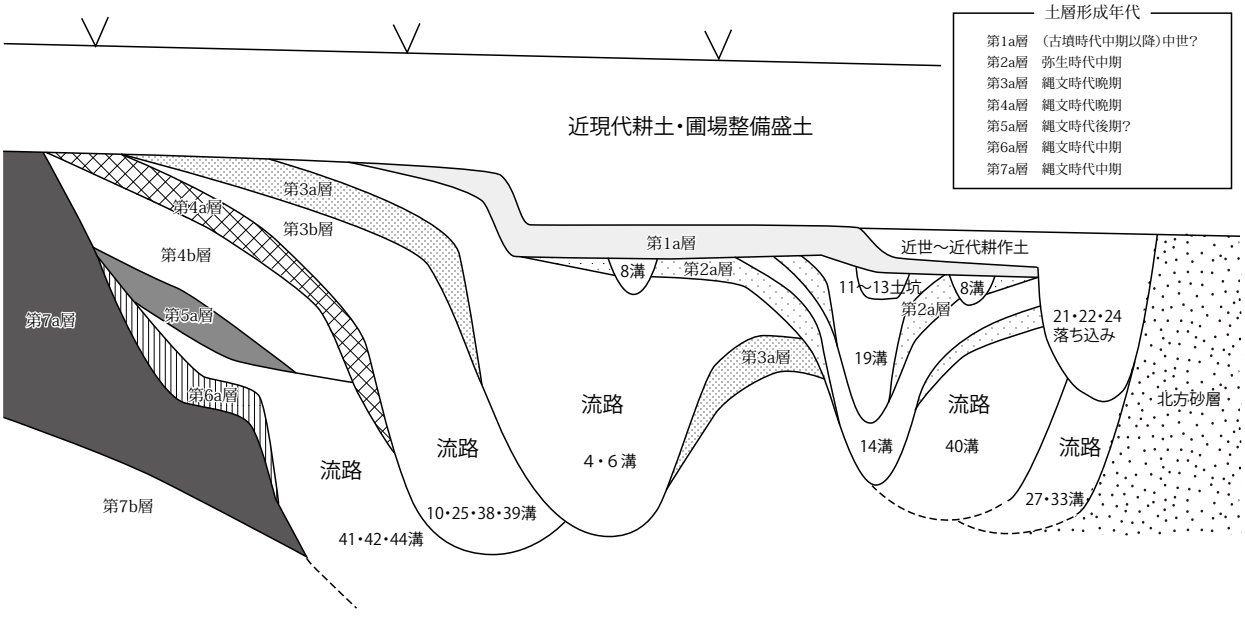


図９　流路と土壌層の関係模式図

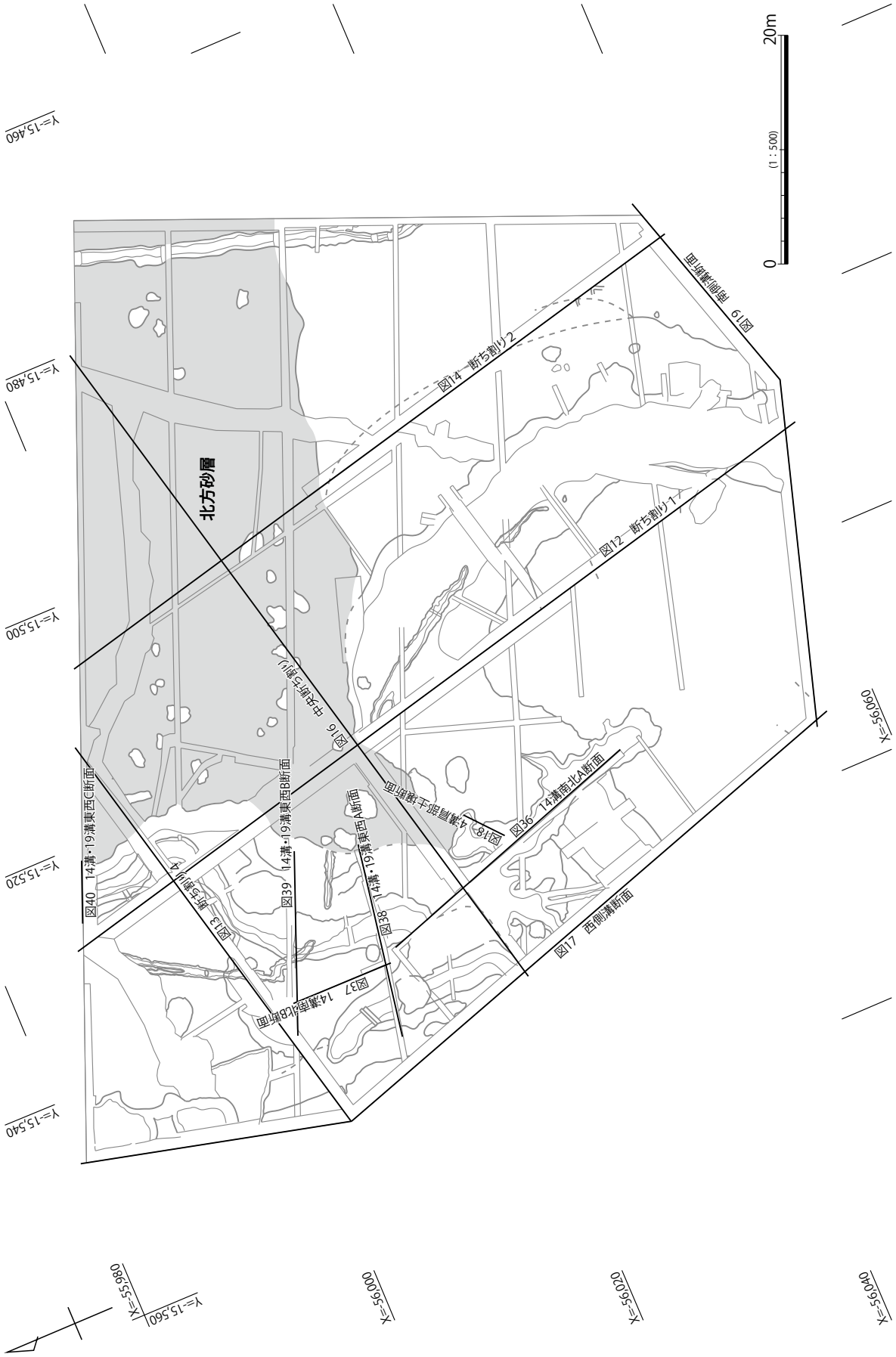

20m
0
(1 : 500)
北方砂層
図19 西側溝断面
図14 断ち割り2
図12 断ち割り1
図16 中央断ち割り
図18 4溝肩部土層断面
図36 14溝南北A断面
図17 西側溝断面
図40 14溝・19溝東西C断面
図13 断ち割り4
図39 14溝・19溝東西B断面
図38 14溝・19溝東西A断面
図37 14溝南北B断面
Y=-15,460
Y=-15,480
Y=-15,500
Y=-15,520
Y=-15,540
Y=-15,560
X=-55,980
X=-56,000
X=-56,020
X=-56,040
X=-56,060

図 10　断面図作成位置

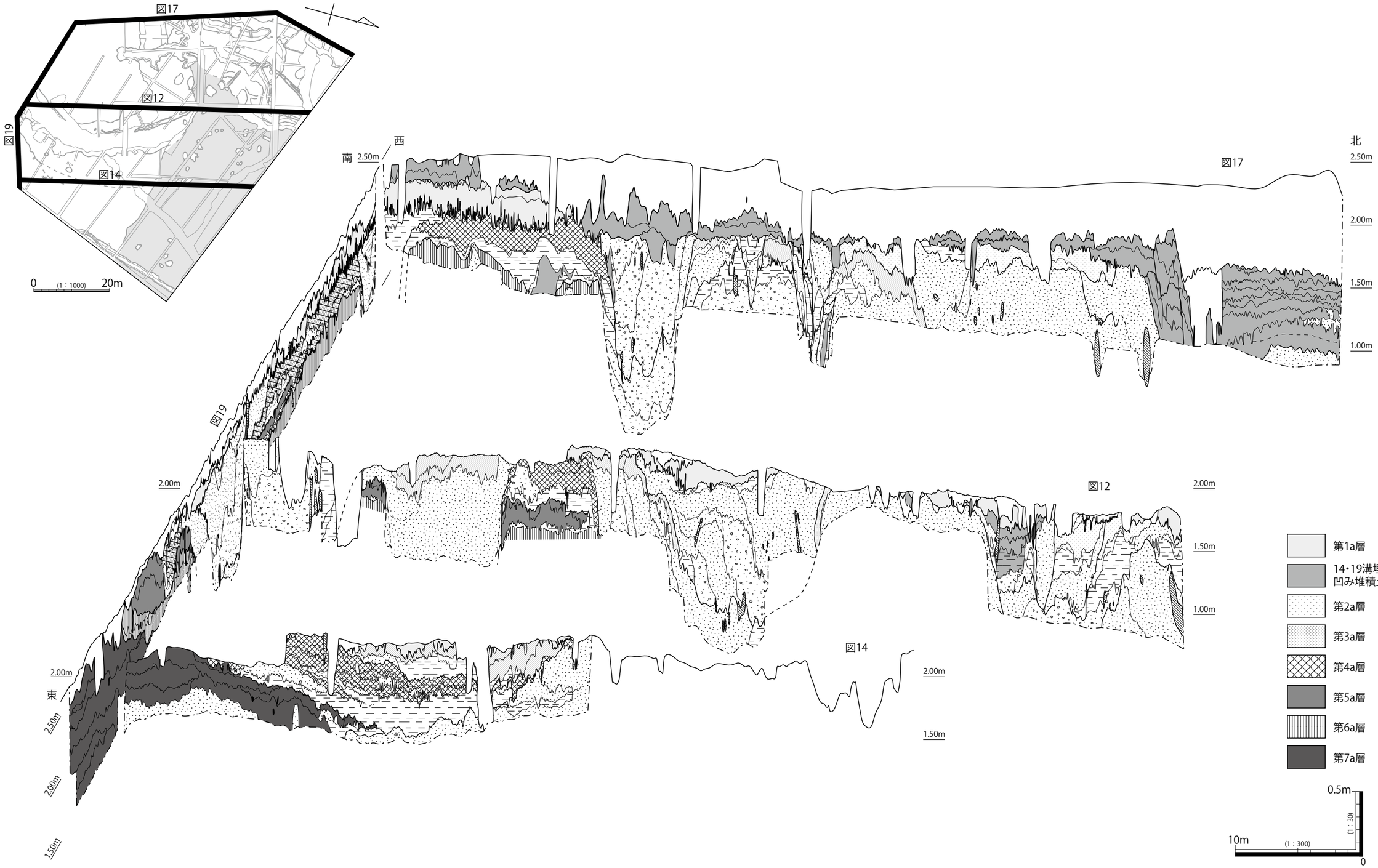
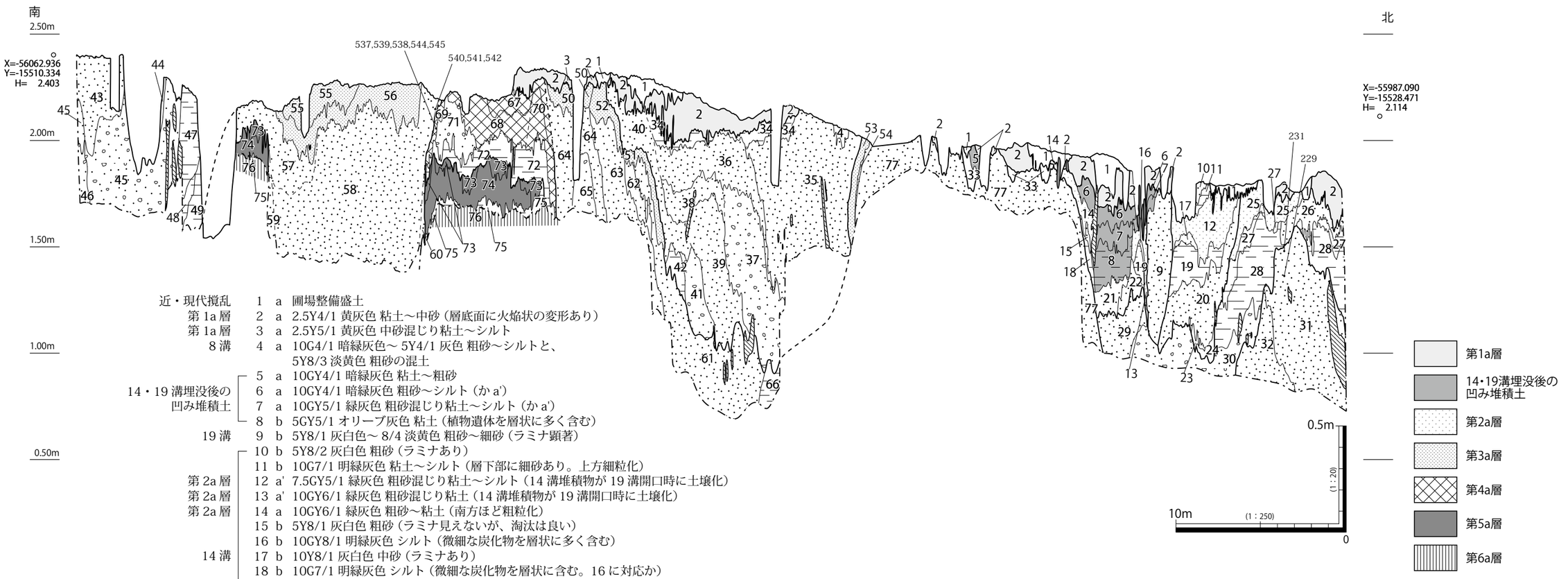
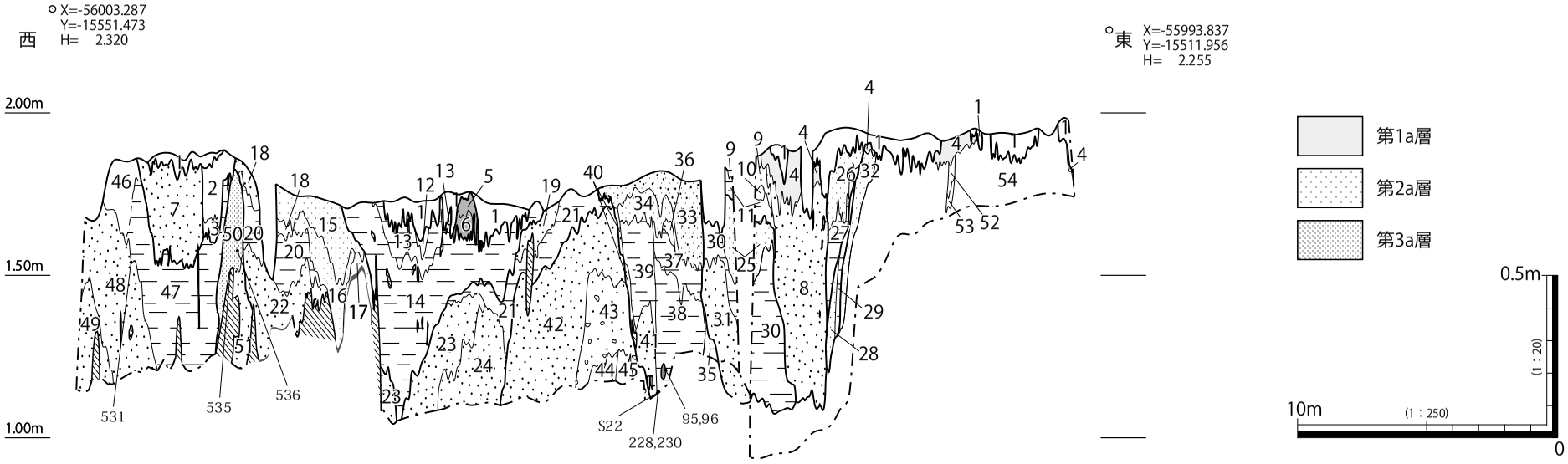


図 11　土層断面パネルダイアグラム



近・現代撹乱　1 a 圃場整備盛土
第 1a 層　2 a 2.5Y4/1 黄灰色 粘土～中砂（層底面に火焔状の変形あり）
第 1a 層　3 a 2.5Y5/1 黄灰色 中砂混じり粘土～シルト
8 溝　4 a 10G4/1 暗緑灰色～ 5Y4/1 灰色 粗砂～シルトと、5Y8/3 淡黄色 粗砂の混土
14・19 溝埋没後の凹み堆積土　5 a 10GY4/1 暗緑灰色 粘土～粗砂
6 a 10GY4/1 暗緑灰色 粗砂～シルト（か a'）
7 a 10GY5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土～シルト（か a'）
8 b 5GY5/1 オリーブ灰色 粘土（植物遺体を層状に多く含む）
19 溝　9 b 5Y8/1 灰白色～ 8/4 淡黄色 粗砂～細砂（ラミナ顕著）
10 b 5Y8/2 灰白色 粗砂（ラミナあり）
第 2a 層　11 b 10G7/1 明緑灰色 粘土～シルト（層下部に細砂あり。上方細粒化）
第 2a 層　12 a' 7.5GY5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土～シルト（14 溝堆積物が 19 溝開口時に土壌化）
第 2a 層　13 a' 10GY6/1 緑灰色 粗砂混じり粘土（14 溝堆積物が 19 溝開口時に土壌化）
第 2a 層　14 a 10GY6/1 緑灰色 粗砂～粘土（南方ほど粗粒化）
15 b 5Y8/1 灰白色 粗砂（ラミナ見えないが、淘汰は良い）
16 b 10GY8/1 明緑灰色 シルト（微細な炭化物を層状に多く含む）
14 溝　17 b 10Y8/1 灰白色 中砂（ラミナあり）
18 b 10G7/1 明緑灰色 シルト（微細な炭化物を層状に含む。16 に対応か）
19 b 7.5GY4/1 暗緑灰色 シルトと、7.5Y8/1 灰白色 細砂の互層
20 b 7.5Y8/1 灰白色 粗砂と、10GY5/1 緑灰色 シルトの互層（弥生中期遺物を含む）
21 b 5Y8/2 淡黄色 極粗砂～粗砂（ラミナ顕著）
22 b 5Y8/2 灰白色～ 8/3 淡黄色 粗砂～細砂（ラミナあり）
23 a' 10GY4/1 暗緑灰色～ 5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土
24 b 7.5Y8/1 灰白色 粗砂（ラミナ顕著。微細な木質遺物を多く含む）
第 2a 層　25 a 5BG6/1 青灰色 粘土～粗砂（40 溝堆積物が 14 溝開口時に土壌化）
40 溝　26 b 5Y8/3 淡黄色 粗砂と、10G6/1 緑灰色 細砂～シルトの互層
27 a' 10G6/1 緑灰色 細砂混じり粘土
28 b 7.5Y4/2 灰オリーブ色 シルト（植物遺体を層状に多く含む）
29 b 5Y8/1 灰白色～ 8/4 淡黄色 粗砂（ラミナ顕著）
30 b 5Y8/1 ～ 8/2 灰白色 極粗砂～粗砂（ラミナ顕著）
33 溝　31 b 7.5Y8/1 灰白色 粗砂～細砂と、10GY6/1 緑灰色 シルトの互層（弥生前期遺物を含む）
32 b 5Y8/1 ～ 8/2 灰白色 細砂～粗砂（ラミナ顕著）
遺構埋土？　33 a 10G6/1 緑灰色 粘土混じり粗砂
34 b 7.5Y7/1 灰白色 シルト
4 溝　35 b 5Y8/2 灰白色～ 8/4 淡黄色 粗砂（ラミナ顕著）
36 b 7.5GY6/1 緑灰色 細砂～シルト（ラミナあり。炭化物を含む。上方細粒化）
37 b 5Y8/6 黄色～ 8/1 灰白色 粗砂～極粗砂（ラミナ顕著。南方細粒化して 38 に側方変化する）
38 b 10Y5/1 灰色 シルト混じり細砂（ラミナあり）
39 b 7.5Y8/1 灰白色 粗砂と、7.5Y5/2 灰オリーブ色 シルトの互層（ラミナ顕著。南方細粒化して 40 に側方変化する）
40 b 7.5GY5/1 緑灰色 中砂～シルト（ラミナあり。炭化物を含む。木質遺物を含む。上方細粒化）
41 b 7.5Y7/1 ～ 8/1 灰白色 粗砂～極粗砂（ラミナ顕著。上方細粒化する）
42 b 7.5Y5/2 灰オリーブ色 シルトに、5Y8/1 灰白色 細砂が帯状に入る（ラミナあり）
43 b 7.5GY4/1 暗緑灰色～ 6/1 緑灰色 シルトと、5Y8/1 灰白色 粗砂の互層（ラミナ顕著。層底部に木質遺物を含む）
44 b 10G6/1 緑灰色 シルト～細砂（部分的にラミナあり）
45 b 5Y8/1 ～ 8/2 灰白色 粗砂～細礫（ラミナ顕著）
46 b 5GY4/1 暗オリーブ灰色 シルトと、10GY8/1 明緑灰色 細砂の互層
47 b 10GY6/1 緑灰色 シルトと、8/1 明緑灰色 微砂の互層
48 b 5GY4/1 暗オリーブ灰色 シルト（ラミナあり）
第 3a 層　50 a 5Y6/1 灰色 シルト～中砂（炭化物を含む）
第 3a 層　51 a 10Y5/1 灰色 極粗砂混じり細砂～シルト（ブロック土・炭化物を含む。52 に対応か）
第 3a 層　52 a N5/0 灰色 シルト～粗砂と、5Y8/1 灰白色 粗砂～中砂の混土（炭化物を多く含む）
第 3a 層　53 a' 10GY6/1 緑灰色 粗砂混じり粘土
第 3a 層　54 a' 7.5Y4/1 灰色 シルト（か b）
第 3a 層　55 a 7.5Y6/1 灰色 シルト～粗砂（炭化物を含む）
第 3a 層　56 a N5/0 灰色 シルト～中砂と、直下層の混土（炭化物を多く含む）
39 溝　57 a' 5BG6/1 青灰色 シルト～中砂（直下層の影響で弱く土壌化した 58）
58 b 10GY7/1 ～ 8/1 明緑灰色 粗砂～細砂（ラミナ顕著）
59 b 58 に、10GY7/1 明青灰色 粘土を偽礫として含む（ラミナ顕著）
60 b 58 に、10GY7/1 明青灰色 粘土を偽礫として含む（ラミナ顕著）
10 溝　61 b 5Y8/1 灰白色～ 5BG7/1 明青灰色 粗砂～細砂（ラミナあり）
62 a' 10Y5/1 灰色 細砂～シルト（部分的にラミナあり。炭化物を含む）（か b）
63 b 7.5GY6/1 緑灰色～ 7/1 明緑灰色 細砂～中砂（部分的にラミナあり。炭化物を含む。上方粗粒化）
64 b 7.5GY6/1 緑灰色～ 7.5Y7/1 灰白色 シルト～細砂（炭化物を含む。部分的にブロック土を含むが淘汰は良い）
65 b 5T8/1 灰白色～ 8/2 灰白色 細砂～細礫（ラミナ顕著）
66 a' 7.5GY5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土（か b）
67 a' 5Y7/2 灰白色 粘土～粗砂（炭化物をわずかに含む）
第 4a 層　68 a 7.5Y6/1 灰色 粘土～粗砂
第 4a 層　69 a 7.5Y6/1 灰色 粘土～極粗砂
第 4a 層　70 a N4/0 ～ 5/0 灰色 シルト～粘土と、直下層の混土（炭化物を多く含む）
第 4b 層　71 b 5Y8/3 淡黄色～ 8/1 灰白色 極粗砂～中砂（部分的にラミナあり）
第 4b 層　72 b 5BG7/1 明青灰色 粘土（わずかに炭化物を含む）
第 5a 層　73 a' 5BG6/1 青灰色 粘土～中砂
第 5a 層　74 a' 10GY5/1 ～ 6/1 緑灰色 極粗砂～シルト（長石の細礫多く含み、締まりが良い）
第 5b 層　75 b 10GY6/1 緑灰色 粘土（広い範囲で第 6a 層を被覆する）
第 6a 層　76 a 5Y3/1 オリーブ黒色 シルト混じり粗砂（縄文時代中期の土器・石器を多く含む）

図 12　断ち割り 1 断面図



近・現代撹乱	1	a	圃場整備盛土
近現代溝	2	a	5Y5/1 灰色 粗砂～シルト（ブロック土を多く含む）
	3	b	5Y8/1 ～ 8/2 灰白色 粗砂～細砂（ラミナ顕著）
第 1a 層	4	a	2.5Y5/1 黄灰色 中砂混じり粘土～シルト（層底面に火焔状の変形あり）
8 溝	5	a	5Y8/2 灰白色 粗砂に、5Y5/1 灰色 粗砂～シルトが混じる
	6	a	5Y5/1 灰色 粗砂～シルトに、5Y8/3 淡黄色 粗砂と、13 のブロック土が混じる
18 溝	7	b	5Y8/1 灰白色～ 8/4 淡黄色 粗砂～細砂（ラミナ顕著）
19 溝	8	b	5Y8/1 灰白色～ 8/4 淡黄色 粗砂（ラミナ顕著）
	9	b	5Y8/2 灰白色 粗砂（ラミナあり）
	10	b	5BG7/1 明青灰色 粘土～シルト
	11	b	10GY7/1 明緑灰色 粘土～シルト（層下部に細砂あり。上方細粒化）
遺構埋土？	12	a	5Y5/1 灰色 粗砂～シルトに、5Y8/2 灰白色 粗砂が混じる（8 溝埋土に近似）
14 溝上層	13	b	10GY7/1 明緑灰色 シルト～極細砂（微細な炭化物を層状に含む）
	14	b	5GY5/1 オリーブ灰色 粘土～シルト（植物遺体を層状に含む）
	15	a	5Y6/1 灰色 シルト～粗砂（14 溝西肩の盛土）
	16	a	10Y6/1 灰色 粗砂混じり粘土（ブロック土を多く含む。14 溝西肩盛土）
	17	a	5BG5/1 青灰色 シルト～細砂（ブロック土をわずかに含む）
14 溝下層	18	b	5Y8/3 淡黄色 粗砂に、5Y4/1 灰色 シルトが混じる（部分的にラミナあり）
	19	b	5Y8/2 灰白色 粗砂～細砂（ラミナあり。18 に対応か）
	20	b	5Y5/1 ～ 6/1 灰色 細砂～シルト（上方細粒化・明色化）
	21	b	10GY6/1 緑灰色 シルト～極細砂（炭化物を含む。20 に対応か）
	22	b	5Y8/1 灰白色 粗砂と、10GY6/1 緑色 シルトの互層（下部に樹皮）
	23	b	10GY5/1 緑灰色 シルトと、5Y8/2 灰白色 粗砂の互層（22 に対応か）
	24	b	5Y8/2 灰白色 粗砂と、10GY3/1 緑灰色 シルトの互層
第 2a 層	25	a'	7.5GY5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土～シルト（14 溝堆積物が 19 溝開口時に土壌化）（か b）
第 2a 層	26	a'	10GY5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土～シルト（14 溝堆積物が 19 溝開口時に土壌化）（か b）
14 溝	27	b	5GY5/1 オリーブ灰色 粘土（植物遺体を層状に多く含む）
第 2a 層	28	a	10Y6/1 灰色 シルト～粗砂（14 溝開口時の土壌化層）
14 溝	29	b	10GY7/1 明緑灰色 シルト～極細砂（13 に対応）
	30	b	7.5GY4/1 暗緑灰色 シルトと、7.5Y8/1 灰白色 細砂の互層
	31	b	7.5Y8/1 灰白色 粗砂と、10GY5/1 緑灰色 シルトの互層（弥生中期遺物を含む）
第 2a 層	32	a	10G4/1 暗緑灰色 粘土混じり粗砂（14 溝開口時の土壌化層）
第 2a 層	33	a	5Y6/1 灰色 粗砂～シルト（締まりが良い。40 溝堆積物が 14 溝開口時に土壌化）
第 2a 層	34	a	5Y6/1 灰色 シルト～粗砂（40 溝堆積物が 14 溝開口時に土壌化）
第 2a 層	35	a	10GY5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土（40 溝堆積物が 14 溝開口時に土壌化）
40 溝	36	b	5Y8/3 淡黄色 細砂～粗砂（ラミナ顕著）
	37	b	10G6/1 緑灰色 シルト～極細砂（炭化物が少ないが、21 に近似）
	38	b	7.5GY6/1 緑灰色 シルト～粘土（植物遺体を層状に含む。灰白色細砂が部分的に混じる）
	39	b	7.5GY5/1 緑灰色 シルト（ラミナあり。部分的に灰白色細砂が混じる）
	40	b	7.5Y6/1 灰色 細砂（部分的にラミナあり。炭化物をわずかに含む）
	41	b	7.5Y8/1 灰白色 細砂～粗砂（ラミナ顕著）
33 溝	42	b	10Y8/1 ～ 8/2 灰白色 粗砂（ラミナ顕著。上方に緑灰色シルト帯あり）
	43	b	10Y8/1 灰白色 極細砂～粗砂（ラミナ顕著）
	44	b	10Y6/1 灰色 粗砂～極細砂（ラミナあり。偽礫を含む）
	45	a	7.5Y6/1 灰色 粗砂混じり粘土（か a'）
16 溝？	46	a'	5Y6/1 灰色～ 7/1 灰白色 細砂混じりシルト
16 溝	47	b	10GY5/1 緑灰色 シルトと、5Y8/2 灰白色 粗砂～細砂の互層
	48	b	5Y8/2 灰白色 粗砂～細砂と、10GY5/1 緑灰色 シルトの互層
	49	b	5Y8/1 灰白色 細砂～粗砂と、5GY4/1 暗オリーブ灰色 シルトの互層
第 3a 層？	50	a'	5Y7/1 灰色 細砂～シルト
下層流路？	51	b	10GY6/1 緑灰色 細砂（ラミナ顕著）
遺構埋土？	52	b	10GY8/1 明緑灰色 シルト（微細な炭化物を層状に含む）
	53	a'	10GY5/1 緑灰色 粘土混じり粗砂
北方砂層	54	b	2.5GY8/1 灰白色～ 5Y8/3 淡黄色 粗砂～中砂（ラミナあり）

図 13　断ち割り 4 断面図

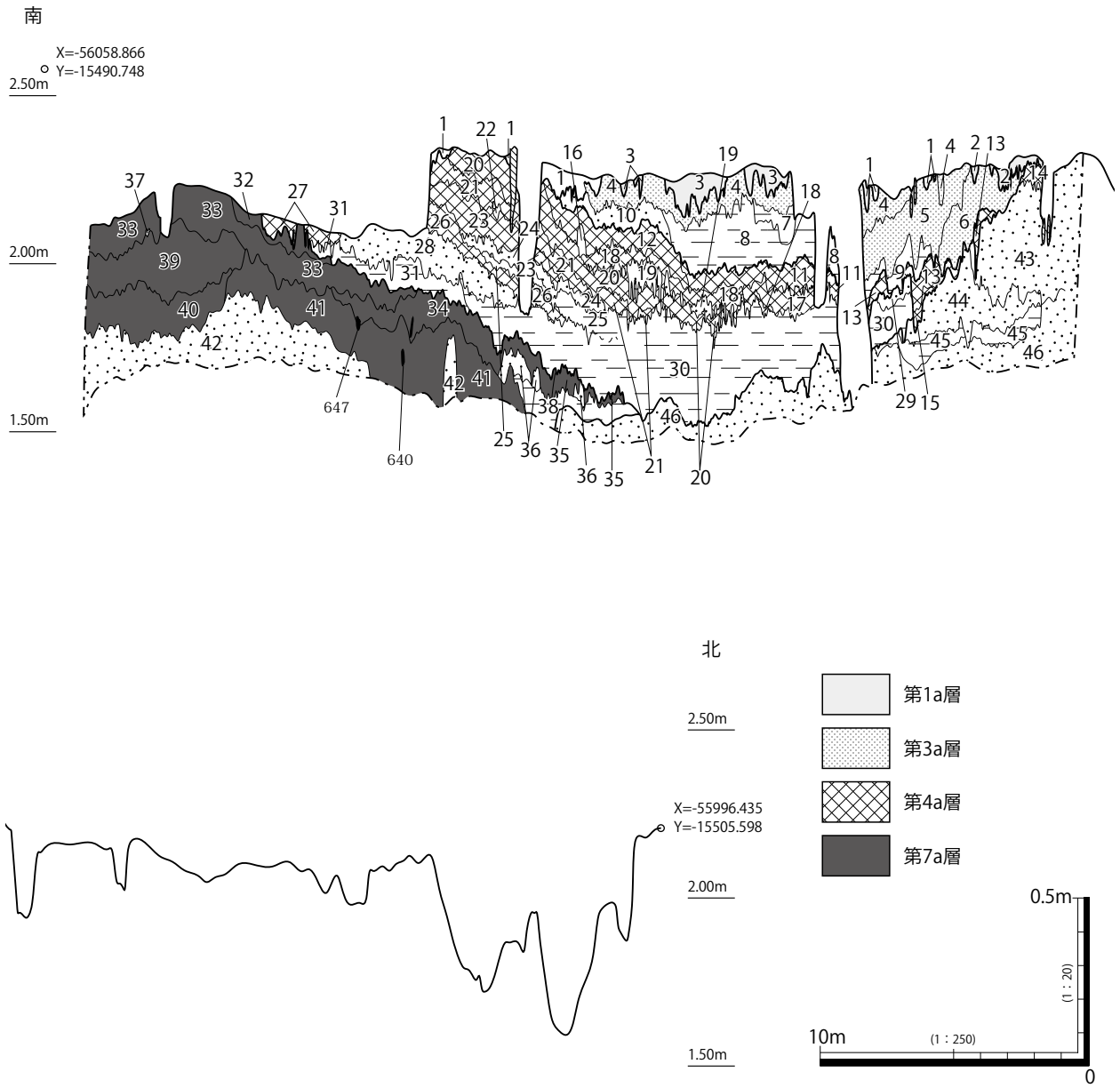


図 14　断ち割り２ 断面図（１）

文A-3 層→第 5a 層、縄文 B-1 層→第 6a 層、縄文 B-2 層→第 4a 層、縄文 C 層→第 7a 層

本報告書では、以後、上記のように整理した層呼称を用いて記述を進める（表１参照）。

圃場整備盛土と第 1a 層の除去面では、縄文時代から弥生時代後期まで、幅広い時期の遺構を確認した。圃場整備や耕作による削平の結果と考えられる。圃場整備の削平により、各時期の遺構の本来の掘り込み面は失われているため、第 1a 層を除去した段階で複数時期の遺構が同時に確認されている。本来的には、第 1a 層上面が近世以降の遺構面となるだろう。また弥生時代中期の第 2a 層との関係から見て、弥生時代後期の遺構は本来的には第 1a 層の下面に帰属すると判断した。

調査区北東部で検出された弥生時代中期の溝群付近では、当時の古土壌が確認され、これを第 2a 層とした。当該期には、数時期にわたって溝の埋没と浚渫、掘削が行われたと考えられ、第 2a 層は、各時期の溝の肩に部分的に形成されている。水平方向へ広がりをもって確認される遺物包含層ではなく、溝の機能時や埋没過程の中で局所的に形成された古土壌といえよう。各時期の溝に対応して形成

近・現代撹乱	1	a	圃場整備盛土
第 1a 層	2	a	5Y4/1 灰色 粗砂～粘土（層底面に火焔状の変形あり）
第 1a 層	3	a	5Y6/1 灰色 粗砂～粘土
第 3a 層	4	a	5Y7/1 灰白色 粘土～粗砂
第 3a 層	5	a'	10Y6/1 灰色 粘土（わずかに粗砂・炭化物を含む）
第 3a 層	6	a	7.5GY7/1 明緑灰色 粘土（炭化物を多く含む。部分的に粗砂を含む）
10 溝？	7	b	10G6/1 緑灰色 粘土（炭化物を層状に多く含む）
	8	b	10GY6/1 緑灰色 粘土～シルト（下方にラミナ顕著だが、上方は弱く土壌化している可能性あり）
	9	b	10G6/1 緑灰色 粘土～シルト（ラミナあり）
	10	b	5Y8/3 淡黄色 細砂～粗砂（直下層との間に明緑灰色粘土を挟在する）
第 4a 層	11	a	10GY5/1 ～ 6/1 緑灰色 粘土～粗砂
第 4a 層	12	a	5Y6/1 ～ 5/1 灰色 極粗砂～シルト
第 4a 層	13	a	10G5/1 緑灰色 粗砂～粘土
第 4a 層	14	a	2.5Y6/1 黄灰色 粗砂～シルト
第 4a 層	15	a	10GY5/1 緑灰色 粘土～粗砂
第 4b 層	16	b	5Y8/4 淡黄色 粗砂～極粗砂（ラミナあり）
第 4a' 層	17	a'	10GY6/1 緑灰色 粗砂混じり粘土
第 4a 層	18	a	5Y5/1 灰色 粗砂～シルト
第 4b 層	19	b	5Y8/4 淡黄色 粗砂～細砂（ラミナ顕著）
第 4a 層	20	a	5Y6/1 灰色 極粗砂～粘土（締まりが良い）
第 4a 層	21	a	5Y6/2 灰オリーブ色 極粗砂～粘土
第 4b 層	22	b	5Y7/3 浅黄色 極粗砂～粗砂（ラミナ見えないが、淘汰は良い）
第 4a 層	23	a	5BG6/1 ～ 5/1 青灰色 粗砂～粘土
第 4b 層	24	b	7.5Y7/1 灰白色 微砂～細砂
第 4b 層	25	b	10G6/1 緑灰色 粘土～シルト
第 4a 層	26	a	10Y5/1 灰色 粘土～粗砂
第 4a 層？	27	a	5Y7/1 灰白色～ 8/4 淡黄色 粗砂～細砂（わずかにブロック土を含む）（か a'）
44 溝	28	b	5Y6/1 灰色～ 6/2 灰オリーブ色 粗砂～細砂（部分的にラミナあり。南方ほど顕著）
	29	b	5Y8/4 淡黄色 粗砂（ラミナ見えないが、淘汰は良い）
	30	b	10GY4/1 暗緑灰色 粘土～シルトと、6/1 緑灰色 シルトの互層（上方明色化）
	31	a'	10GB6/1 青灰色 粘土に、粗砂が帯状に入る（炭化物を含む）（か b）
第 7a 層？	32	a	10BG6/1 青灰色 粘土～粗砂
第 7a 層	33	a	10Y5/1 灰色 極粗砂～粘土
第 7a 層	34	a	10GY5/1 緑灰色 粘土～粗砂（土器を含む）
第 7a 層	35	a	10GY5/1 緑灰色 粘土～粗砂
第 7b 層	36	b	2.5GY8/1 灰白色 粗砂（ラミナ見えないが、淘汰は良い）
第 7b 層	37	b	10BG6/1 青灰色 粘土
第 7b 層	38	b	10GY5/1 ～ 6/1 緑灰色 粘土（わずかに粗砂が混じる）
第 7a 層	39	a	5Y5/1 灰色 極粗砂～粘土（土器を含む。締まりが良い）
第 7a 層	40	a	5BG4/1 暗青灰色 粗砂～粘土（炭化物を含む。上方に向かって漸移的に締まる）
第 7a 層	41	a	10G4/1 暗緑灰色 粗砂～粘土（土器・木質遺物・炭化物を多く含む）
第 7b 層	42	b	5Y8/1 ～ 8/2 灰白色 粗砂～極粗砂（ラミナ見えないが、淘汰は良い。締まりが良い）
北方砂層	43	b	2.5Y7/6 明黄色～ 7/2 灰黄色 粗砂（ラミナあり）
	44	b	10GY8/1 ～ 7/1 明緑灰色 粗砂（ラミナあり）
	45	b	7.5GY5/1 ～ 6/1 緑灰色 粘土（ラミナあり。上方明色化）
	46	b	5Y7/1 灰白色～ 5/1 灰色 粗砂（上方暗色化。ラミナ見えないが、淘汰は良い）

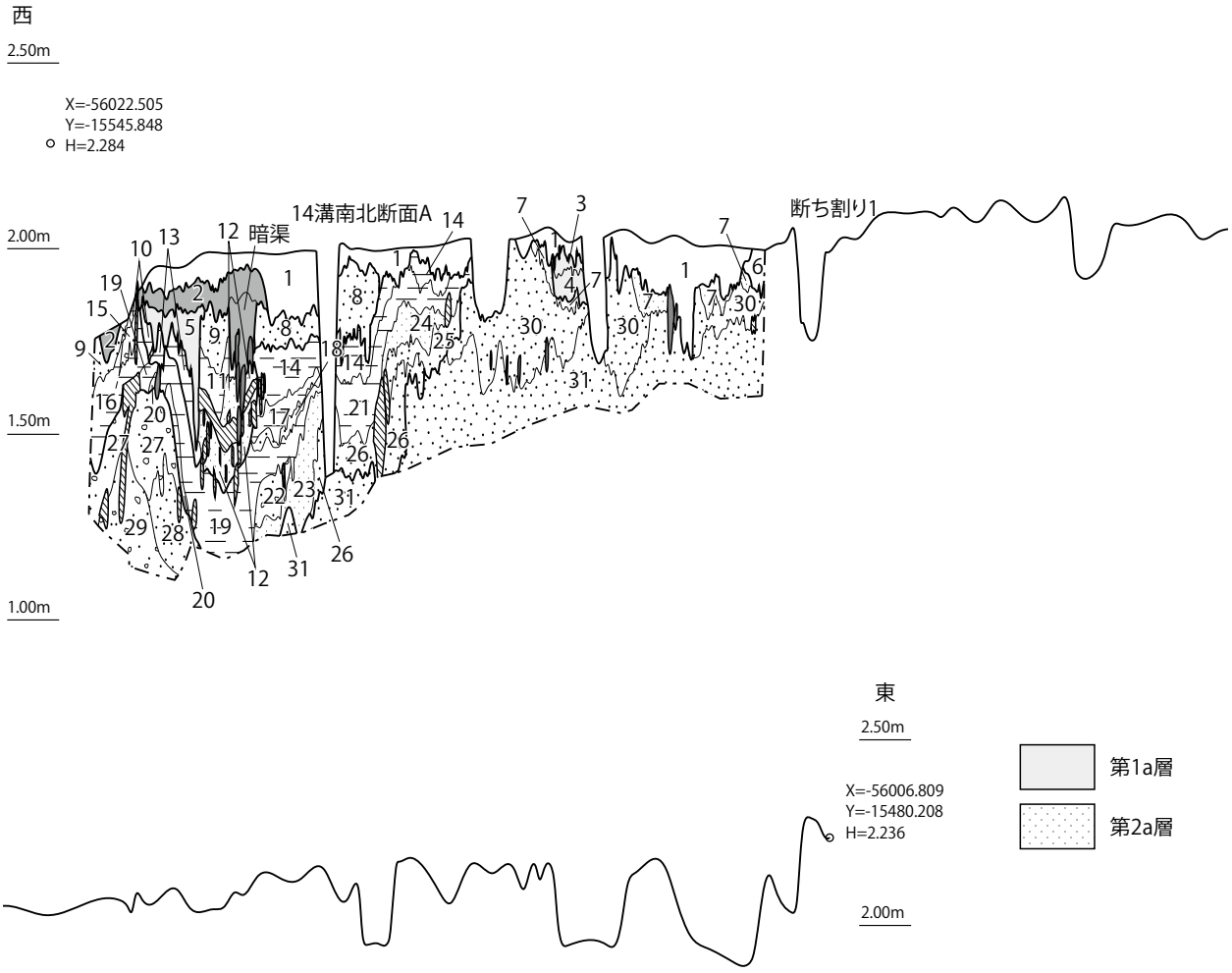
図 15　断ち割り 2 断面図（2）

された第 2a 層には時間差があるが、調査では細分は行っていない。層相は、土壌化が進み、締まりがいい古土壌から、灰色ブロック土の目立つ盛土状のものまで多様である。こうしたことから、局所的な堆積であっても、第 2a 層の上面で検出した弥生時代中期の遺構群はすべて同一遺構面として扱うこととし、この遺構面を第 2a 面と呼称することとした。

第 3a 層は、緑灰～青灰色の粘土～シルト層で、縄文時代晩期の流路の肩部や周辺に広がる古土壌である。部分的に炭化物を多く含む。重機掘削中に縄文時代晩期末の浅鉢が出土した。第 3a 層上面の遺構面を第 3a 面とした。

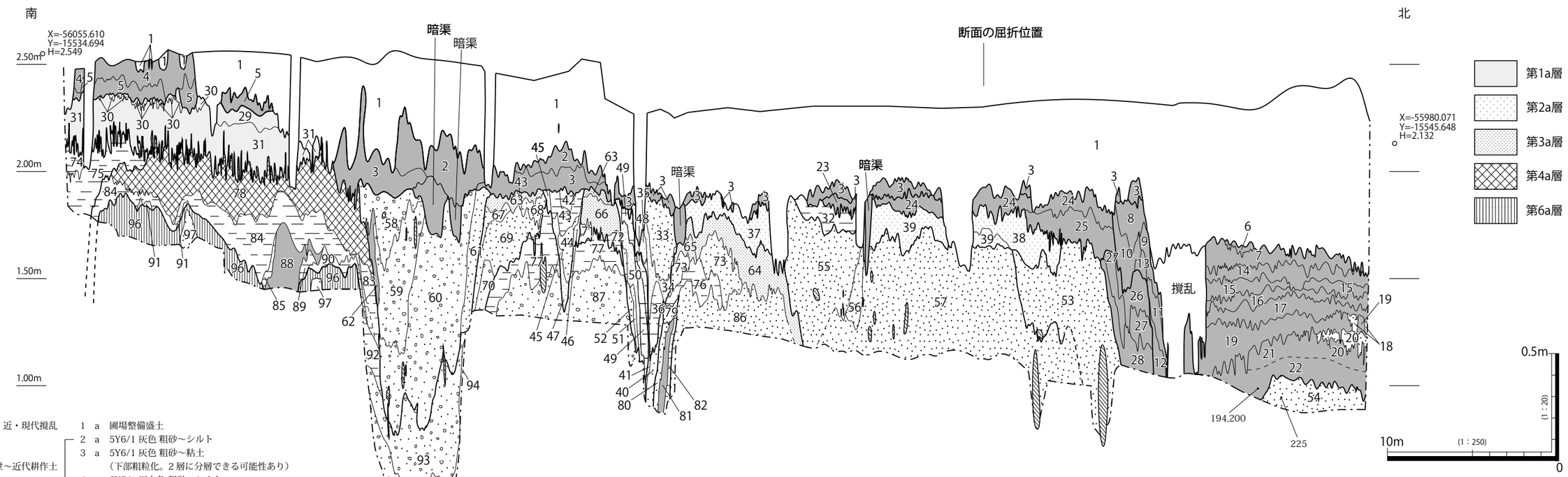
第 4a 層は、灰白色～灰色の粘土～極粗砂層で、東側ほど粗砂を多く含み淘汰が悪く、西側では細粒化する。断ち割り 1 の掘削中に遺物が少量出土している。第 4a 層上面の遺構面を第 4a 面とした。

第 5a 層は、緑灰色の粗砂～シルト層を主体とする。調査区南東部でのみ確認され、局所的に礫を多く含むことから、調査区東側の開析谷からの供給物を母材とした古土壌の可能性がある。遺物は出



近・現代攪乱	1	a	圃場整備盛土
近現代耕作土	2	a	5Y6/1 灰色 粗砂～シルト
第 1a 層	3	a	5Y4/1 灰色 粗砂～粘土
第 1a 層？	4	a	5Y6/1 灰色 粗砂～粘土
第 1a 層？	5	a	5Y4/1 ～ 5/1 灰色 粗砂～粘土
8 溝	6	a	5Y4/1 灰色 粗砂～シルトと、8/3 淡黄色 粗砂の混土
第 2a 層？	7	a	5Y5/1 灰色 シルト～粘土（か a'）
	8	b	5Y8/3 淡黄色 粗砂～細砂（ラミナ顕著）
	9	b	5Y8/3 淡黄色 微砂～細砂（ラミナあり）
	10	b	7.5GY4/1 暗緑灰色 シルトと、5Y8/3 淡黄色 細砂の互層
19 溝	11	b	7.5GY4/1 緑灰色 シルト
	12	a	10G5/1 緑灰色 シルト～粗砂（中位に緑灰色のブロック土粘土。下位に灰白色の粗砂帯あり。角材と板材による土留工の盛土）
	13	b	5GY6/1 オリーブ灰色 シルト～細砂（ラミナあり。上方細粒化）
	14	b	7.5Y7/1 灰白色 シルト～粘土と、5Y8/3 淡黄色 微砂の互層（微細な植物遺体が層状堆積。上方細粒化）
	15	b	5Y8/4 淡黄色～ 8/6 黄色 極粗砂～粗砂（ラミナ見えないが、淘汰は良い）
	16	b	5GY5/1 オリーブ灰色 シルトと、5Y8/2 灰白色 細砂の互層
	17	b	10Y4/1 灰色 シルト～細砂（植物遺体が層状に堆積。上方細粒化）
	18	b	5Y8/4 淡黄色 粗砂（ラミナ見えないが、淘汰は良い）
	19	b	10GY4/1 暗緑灰色 シルト～細砂（ラミナあり。植物遺体を層状に含む）
14 溝	20	b	5BG6/1 青灰色 粘土と、5GY5/1 オリーブ灰色 シルト～細砂の互層
	21	a	5GY4/1 暗オリーブ灰色 粘土～シルト（か b）
	22	b	5Y8/3 淡黄色 極粗砂～粗砂
	23	a	5Y6/1 灰色 粗砂混じり粘土と、5BG6/1 青灰色 炭化物混じり粘土と、5Y8/3 淡黄色 粗砂の混土（ブロック土多いが部分的に互層状の堆積を見せる）
	24	a	5Y8/3 淡黄色 粗砂に、10GY4/1 暗緑灰色 粘土混じり粗砂が混じる
	25	b	10GY5/1 緑灰色 シルトと、8/2 灰白色 粗砂～細砂の互層
	26	a'	7.5GY5/1 緑灰色 シルト～ 5Y8/2 灰白色 粗砂（ラミナあるが部分的に転倒）
	27	b	5GY3/1 ～ 4/1 暗オリーブ灰色 シルト混じり極粗砂と、5Y8/2 灰白色 粗砂～細砂の互層
16 溝？	28	a	10Y4/1 灰色 細砂混じりシルトに、5G7/1 明緑灰色 粘土～シルトがブロック状に混じる（部分的にラミナあり。崩落土か）（か a'）
	29	b	5Y8/3 淡黄色～ 8/1 灰白色 粗砂～極粗砂（ラミナ顕著。木質遺物を含む）
北方砂層	30	b	5Y8/2 灰白色 粗砂と、6/1 灰色 粗砂混じりシルトがマーブル状に混じる
	31	b	5Y7/1 灰色 粗砂（ラミナあり）

図 16　中央断ち割り 断面図



近・現代撹乱
- 1 a 圃場整備盛土

近世～近代耕作土
- 2 a 5Y6/1 灰色 粗砂～シルト
- 3 a 5Y6/1 灰色 粗砂～粘土（下部粗粒化。２層に分層できる可能性あり）
- 4 a 5Y7/1 灰白色 粗砂～シルト
- 5 a 5Y6/1 灰色 粗砂～粘土
- 6 b 10BG5/1 青灰色 シルト～粘土
- 7 a 5Y7/1 灰白色 粗砂～シルト
- 8 a 5Y4/1 灰色 粗砂～粘土に、5Y7/1 灰白色 粗砂～シルトが混じる
- 9 a 10Y6/1 灰色 粗砂～シルトと、5Y8/3 淡黄色 細砂混じりシルトの混土
- 10 a 5Y6/1 灰色 粗砂～シルトと、5Y7/2 灰白色 シルトの混土（9 と同一層か）
- 11 a 5Y7/1 灰白色 極粗砂～シルトに、10Y5/1 灰色 粗砂～シルトが混じる
- 12 a 10GY5/1 緑灰色 粗砂～粘土と、5Y8/3 淡黄色 粗砂の混土
- 13 a 5Y6/1 灰色 粗砂～粘土（ブロック土を含む）

22 落ち込み
- 14 a 5Y5/1 灰色 粗砂～シルト
- 15 a 2.5Y5/1 黄灰色 粗砂～シルト
- 16 a 5Y6/1 灰色 粗砂～シルトに、5Y7/2 灰白色 粗砂～細砂がブロック状に混じる
- 17 a 5Y5/1 灰色 粗砂～シルト
- 18 a' 5Y8/1 ～ 8/2 灰白色 粗砂（直下層をブロック土状に含む）（か b）
- 19 a 7.5Y5/1 灰色 粗土混じり粗砂～シルト
- 20 b 5Y8/2 灰白色 粗砂（ラミナあり）
- 21 a 10Y5/1 灰色 粗砂～シルトと、5Y8/2 灰白色 細砂～粗砂の混土（下層との層界不明瞭）
- 22 a 10GY5/1 緑灰色 シルト～粗砂（層中に炭酸鉄の結核目立つ）

近世～近代耕作土
- 23 a' 5Y7/1 灰白色 シルト～粗砂
- 24 a 5Y6/3 オリーブ黄色 粘土～粗砂（酸化鉄による黄変顕著）
- 25 a 5Y6/1 灰色 粘土～粗砂（マンガン斑顕著）

21 落ち込み
- 26 a' 7.5Y6/1 灰色 粗砂～粘土に、5Y8/2 灰白色 細砂が混じる
- 27 a 10GY5/1 緑灰色 粘土と、7.5GY5/6 緑灰色 粗砂～粘土の混土（部分的にラミナあり）
- 28 a 10GY4/1 暗緑灰色～ 5/1 緑灰色 粗砂～粘土

第 1a 層
- 29 a 5Y5/1 灰色 粗砂～粘土

第 1a 層
- 30 a 5BG4/1 暗青灰色 粗砂混じりシルト～粘土

第 1a 層
- 31 a 5Y5/1 灰色 粗砂～粘土（層底面に火焔状の変形あり）

18 溝
- 32 b 7.5Y4/1 ～ 5/1 灰色 シルト

28 溝
- 33 b 5Y8/2 灰白色 粗砂と、10G6/1 緑灰色～ 7/1 明緑灰色 シルト～極細砂の互層
- 34 a 5BG6/1 青灰色 粘土混じり粗砂（層底面に部分的にラミナあり。ブロック土を含み、盛土か）
- 35 a 5BG6/1 青灰色 粗砂～シルト（部分的にシルト帯が入る）
- 36 a' 5BG6/1 青灰色 シルトに、5Y8/2 灰白色 粗砂が混じる（か b）（部分的にラミナあり。層底面に植物遺体が層状に堆積する。被覆材か）

第 2a 層
- 37 a' 5BG6/1 青灰色 粘土～細砂（上方細粒化）

第 2a 層
- 38 a' 5Y7/1 灰白色 細砂混じりシルト（か b）

第 2a 層
- 39 a' 38 に近似するが、締まりよく細砂を含む

19 溝
- 40 b 5G7/1 明緑灰色 粗砂（ラミナあり。偽礫を多く含む）
- 41 a 10GY5/1 緑灰色 粘土と、10G7/1 明緑灰色 粘土の混土（49 の北方への変形により当層も変形している）

14 溝
第 2a 層
- 42 b 5G7/1 明緑灰色 シルト～細砂（微細な木質遺物を層状に多く含む）
- 43 b 10GY5/1 緑灰色 シルト～粘土と、5Y8/2 灰白色 極細砂の互層
- 44 b 5Y8/3 淡黄色～ 10G7/1 明青灰色 粗砂～細砂（ラミナ顕著。偽礫を含む）
- 45 a 10Y6/1 灰色 粗砂～シルト
- 46 a 10Y6/1 灰色 粗砂～シルト
- 47 a 10Y6/1 灰色 細砂混じりシルトと、5Y8/1 灰白色 粗砂の混土

14 溝？
- 48 b 5G7/1 明緑灰色 シルト～細砂（微細な木質遺物を層状に多く含む。42 に対応か）
- 49 b 10GY5/1 緑灰色 シルト～粘土と、5Y8/2 灰白色 極細砂の互層（炭化した植物遺体を層状に含む。43 に対応か）
- 50 a 5BG6/1 青灰色 粘土と、5Y7/1 灰白色 細砂～シルトの混土（盛土もしくは崩落土）
- 51 a 5G7/1 明緑灰色 粘土と、7.5GY 緑灰色 シルトの混土
- 52 b 10G7/1 明緑灰色 粘土と、5Y8/3 淡黄色 粗砂の互層

27 溝？
- 53 b 7.5Y7/1 ～ 8/1 灰白色 粗砂～極細砂（ラミナ顕著。上方細粒化。南方細粒化・暗色化（7.5Y4/1 灰色 シルト））

27 溝
- 54 b 5Y8/1 灰白色～ 8/4 淡黄色 粗砂～細砂（ラミナ顕著）

16 溝
- 55 b 5G4/1 暗緑灰色～ 5/1 緑灰色 シルトと、5Y8/3 淡黄色 粗砂～極粗砂の互層（木質遺物を多く含む）
- 56 b 5Y8/1 ～ 8/2 灰白色 粗砂～細砂と、5/1 灰色 シルト～極細砂の互層

16 溝？
- 57 b 5Y8/1 灰白色 粗砂～細砂と、4/1 灰色 シルトの互層

6 溝
- 58 b 5Y8/3 淡黄色 粗砂（ラミナ顕著。層底面に植物遺体を層状に含む）
- 59 b 5Y8/3 淡黄色～ 8/1 灰白色 粗砂～極粗砂（ラミナ顕著。南方細粒化して緑灰色シルトとなる）
- 60 b 5Y8/6 黄色～ 8/3 淡黄色 粗砂～極粗砂（ラミナ顕著。木質遺物を含む）
- 61 b 5BG6/1 青灰色 粗砂混じり細砂（ラミナあり。炭化物を含む）
- 62 a 10BG6/1 青灰色 細砂混じり粘土と、5G7/1 明緑灰色 粘土の混土

第 3a 層
- 63 a 2.5Y7/1 灰白色 粗砂～シルト

第 3a 層
- 64 a 10G6/1 緑灰色 粗砂混じり細砂～シルト（わずかに炭化物を含む）

第 3a 層
- 65 a 5BG6/1 青灰色 粗砂～粘土

第 3a 層？
- 66 a 5Y8/3 淡黄色～ 10G7/1 明緑灰色 シルト混じり粗砂～細砂（直径 2cm までの礫・ブロック土を含む）

38 溝
- 67 a' 5BG6/1 青灰色 粗砂～細砂（ラミナは見えない。締まりが良い）
- 68 b 5Y8/2 灰白色～ 10G6/1 緑灰色 粗砂～細砂（ラミナは見えないが、淘汰は良い）
- 69 a' 10BG6/1 青灰色 シルト混じり粗砂～細砂（炭化物を含む）（か b）
- 70 b 5Y8/4 淡黄色～ 10BG7/1 明青灰色 極粗砂～粗砂（ラミナあり。偽礫を含む）

第 3b 層
- 71 b 5Y8/3 淡黄色～ 8/6 黄色 極粗砂～粗砂（ラミナは見えないが、淘汰は良い）

第 3b 層？
- 72 a' 5BG6/1 青灰色 粗砂混じり細砂～シルト（部分的にラミナあり。炭化物を含む）（か b）

第 3b 層
- 73 b 5Y7/1 灰白色～ 8/3 淡黄色 細砂～粗砂（ラミナあり）

25 溝
- 74 b 10Y8/1 灰白色 粘土
- 75 a' 5Y7/1 ～ 8/1 灰白色 シルト～細砂混じり粘土？（ラミナは見えないが、淘汰は良い）
- 76 a 10BG6/1 青灰色 粗砂混じり粘土（炭化物を多く含む）
- 77 a' 10BG6/1 青灰色 粗砂混じりシルト～細砂（上方細粒化。層底面ほど土壌化弱い）

第 4a 層
- 78 a 10Y7/1 ～ 8/1 灰白色 粘土～シルト（炭化物をわずかに含む）

43 溝
- 79 b 10Y4/2 オリーブ灰色 細砂～シルト（ラミナ顕著。植物遺体を多く含む）
- 80 b 5Y8/1 灰白色 粗砂～細砂と、4/1 灰色 シルトの互層（ラミナ顕著。木質遺物を多く含む）
- 81 a' 10GY6/1 緑灰色 細砂混じり粘土
- 82 b 10GY4/1 暗緑灰色 シルト（部分的にラミナあり）

第 4b ～ 5b 層
- 83 b 10BG7/1 明青灰色～ 6/1 青灰色 粘土

第 4b ～ 5b 層
- 84 b 10BG6/1 青灰色 粘土（25 溝直下で深くなる（第 6a 層上面の 42 溝））

第 4b ～ 5b 層
- 85 b 10GY4/1 暗緑灰色 粗砂混じり粘土

第 4b ～ 5b 層？
- 86 b 10G7/1 明緑灰色 粗砂と、5G6/1 緑灰色 シルト～粘土の互層

第 4b ～ 5b 層
- 87 b 5Y8/3 淡黄色～ 7.5GY8/1 明緑灰色 極粗砂～粗砂（ラミナ顕著。直径 2cm までの礫を含む）

遺構盛土？
- 88 a 5Y8/1 灰白色 粘土と、96（第 6a 層）の混土（土器を多く含む。盛土か）

第 5b 層？
- 89 b 10BG7/1 明青灰色 粘土（わずかに炭化物を含む）

第 5b 層？
- 90 b 10GY7/1 明緑灰色 粘土（わずかに炭化物を含む）

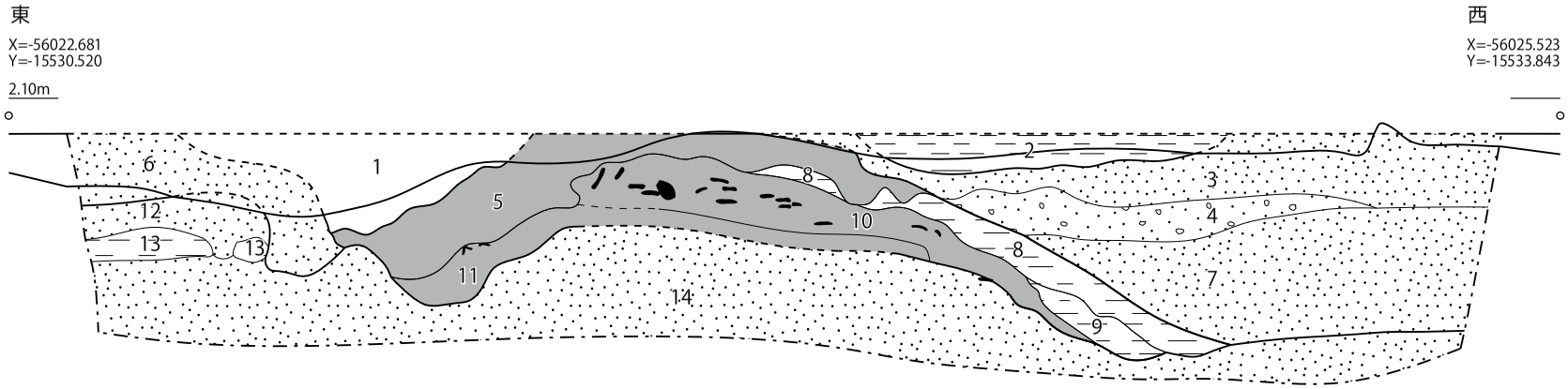
第 5b 層？
- 91 a' 10GY4/1 暗緑灰色 粗砂混じり粘土

41 溝
- 92 b 7.5Y4/1 灰色～ 4/2 灰オリーブ色 細砂混じりシルト（ラミナあり。有機物を多く含む）
- 93 b 7.5Y8/1 灰白色～ 8/3 淡黄色 極粗砂～粗砂（ラミナ顕著）
- 94 a' 10BG6/1 青灰色 シルト混じり中砂
- 95 b 5Y8/1 灰白色 極粗砂～礫（ラミナ顕著。偽礫を含む）

第 6a 層
- 96 a 10Y3/1 オリーブ黒色 粗砂～シルト（土器を多く含む）

第 6b 層
- 97 b 5Y7/1 ～ 7/2 灰白色 粗砂（ラミナ顕著）

図 17　調査区西側溝 断面図



撹乱	1	5Y6/1 灰色 粗砂～粘土（ブロック土を多く含む）
14 溝	2	2.5GY5/1 オリーブ灰色 粗砂混じりシルト（炭化物を含む）
4 溝	3	7.5GY7/ 1 明緑灰色 粗砂混じり細砂～シルト
	4	5Y8/1 灰白色 粗砂～極粗砂（ラミナあり）
盛土？	5	7.5Y5/1 灰色 粗砂～粘土と、10GY7/1 明緑灰色 粘土と、N5/0 灰色 粗砂～粘土の混土
4 溝	6	5Y8/1 灰白色～ 8/3 淡黄色 粗砂と、7.5GY6/1 緑灰色 シルト～粘土の互層
	7	5Y8/1 灰白色 細砂と、5GY5/1 オリーブ灰色 シルトの互層
5・10 間の泥質堆積	8	10GY4/1 暗緑灰色 細砂混じり粘土（炭化物をわずかに含む）
	9	10GY7/1 明緑灰色 粗砂混じり粘土（炭化物をわずかに含む）
盛土？	10	5BG3/1 暗青灰色 粗砂～シルト（ブロック土と土器を多量に含む）
	11	10GY6/1 緑灰色 粘土～粗砂（炭化物を含む）
下層流路？	12	5GY5/1 オリーブ灰色 粘土混じり粗砂（部分的にラミナあり。木質遺物と土器の小片含む）
	13	10GY6/1 明緑灰色 シルト～細砂（上方細粒化。炭化物を含む）
	14	10Y7/1 灰白色～ 5GY5/1 オリーブ灰色 粗砂（ラミナは見えないが、淘汰は良い。拳大の礫を含む場所がある）

図 18　4 溝肩部 土壌断面図

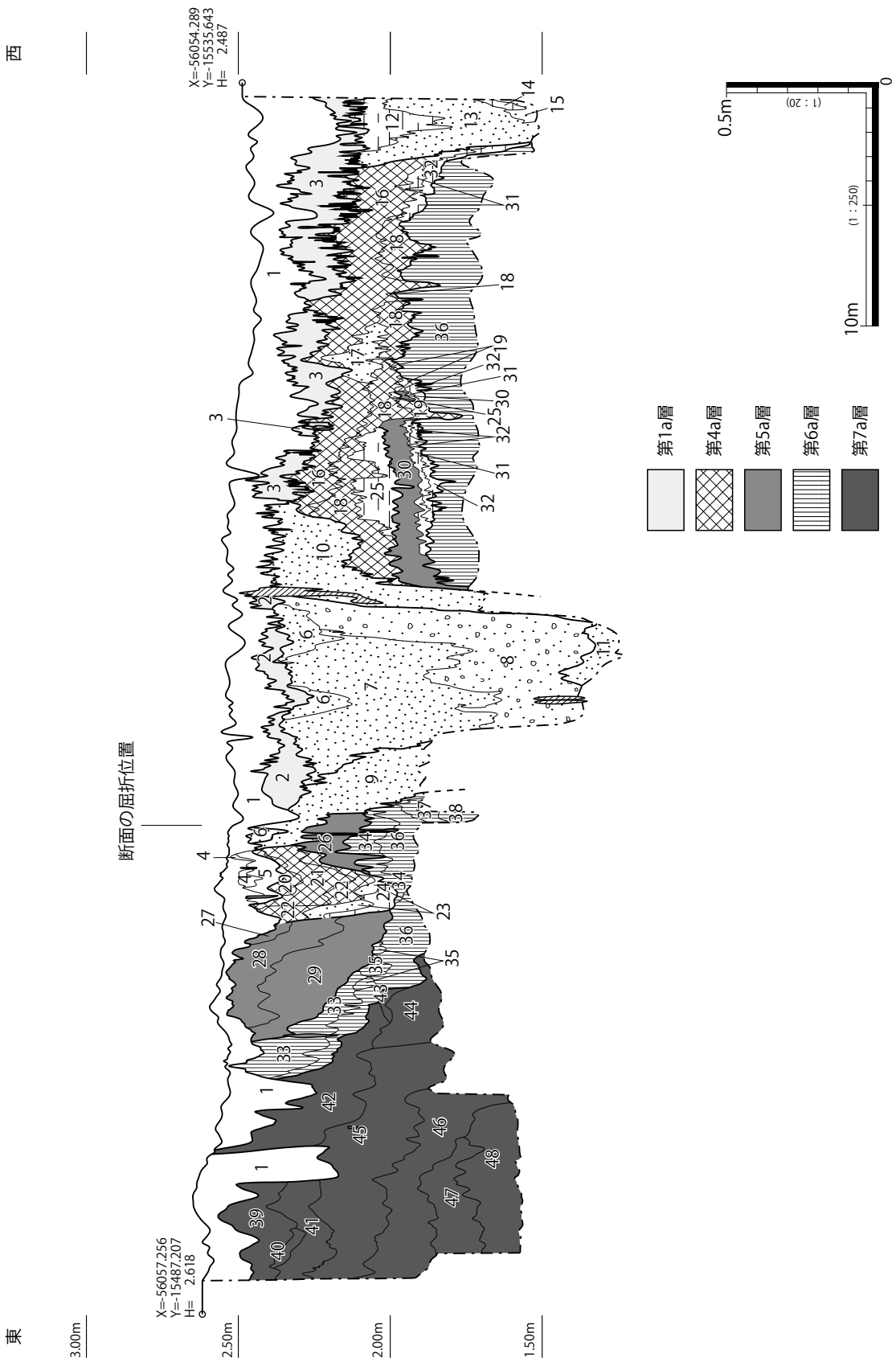


図 19　調査区南側溝 断面図（1）

近・現代撹乱	1	a	圃場整備盛土
第 1a 層	2	a	5Y5/1 灰色 粘土～粗砂
第 1a 層	3	a	5Y5/1 灰色 粘土～粗砂（層底面に火焔状の変形あり）
遺構埋土？	4	a	5Y8/4 淡黄色 粗砂（ラミナが転倒している。炭化物・ブロック土を含む）
	5	a	2.5Y5/1 黄灰色 粘土～粗砂（多量の炭化物・土器片・礫を含む）
4 溝上層	6	b	7.5Y6/1 灰色～ 7/1 灰白色 細砂～粘土（ラミナあり。上方細粒化）
	7	b	5Y8/3 淡黄色 粗砂と、7.5Y4/1 灰色 シルトと、10Y6/1 灰色 細砂の互層
4 溝下層	8	b	5Y8/4 淡黄色～ 8/2 灰白色 極粗砂～粗砂（ラミナ顕著。偽礫・直径 2 ㎝までの礫を含む）
10 溝	9	a'	10G6/1 緑灰色 細砂～中砂（ラミナ見えないが、淘汰は良い。上方弱く土壌化）
	10	b	7.5Y6/1 灰色～ 7/1 灰白色 シルト～細砂（西方細粒化。側方変化して 16 となる）
	11	b	10Y7/1 灰白色 粗砂（ラミナ見えないが、淘汰は良い。直径 4 ㎝までの礫を含む）
25 溝	12	a'	5BG7/1 明青灰色 粘土（か b）
	13	b	7.5GY4/1 暗緑灰色～ 5BG6/1 青灰色 粗砂～シルト（上方細粒化。ラミナあり）
	14	a'	10GY6/1 緑灰色 粘土（か b）
	15	b	5Y8/2 灰白色 粗砂（植物遺体を多く含む）
第 4a 層	16	a	7.5Y7/1 灰白色 粘土～細砂
第 4b 層	17	b	5Y7/6 黄色～ 8/4 淡黄色 粗砂～細砂（ラミナあり）
第 4a 層	18	a'	7.5Y8/1 灰白色 粘土（わずかに細砂を含む。層下面に凹凸多く土壌層か）
第 4a 層	19	a	30 と 31 の混土
第 4a 層？	20	a'	5Y7/1 灰白色 粗砂混じり粘土
第 4a 層？	21	a	5Y5/1 ～ 6/1 灰色 粘土～粗砂（直径 1 ㎝までの礫を含む）
第 4a 層？	22	a	5Y7/2 灰白色 粘土～粗砂
44 溝？	23	b	5Y8/4 淡黄色 細砂（ラミナあり）
	24	a'	5Y7/2 灰白色 粘土（わずかに粗砂・炭化物を含む）（か b）
第 4b 層	25	b	10GY8/1 明緑灰色 粘土
第 5a 層？	26	a	5Y7/2 灰白色 シルト～粗砂（ブロック土・直径 3 ㎝までの礫を多く含む）
第 5a 層？	27	a	5Y6/1 灰色 シルト～粗砂（礫を含む。締まりが良い）
第 5a 層？	28	a	5Y6/2 灰オリーブ色 粗砂～シルト（礫を含む。締まりが良い）
第 5a 層？	29	a	5Y7/2 灰白色 粗砂～シルト（礫を含む。締まりが良い）
第 5a 層	30	a'	10GY5/1 ～ 6/1 緑灰色 極粗砂～シルト（長石の細礫を多く含み、締まりが良い）
第 5b 層	31	b	10GY6/1 緑灰色 粘土（広い範囲で第 6a 層を被覆する）
第 5b 層	32	a'	10Y3/1 オリーブ黒色 粘土～シルト（31 とともに 25 溝直下で深くなる（第 6a 層上面の 42 溝））（か b）
第 6a 層	33	a	10Y5/1 灰色 シルト～粗砂（礫を含む。締まりが良い）
第 6a 層	34	a	10BG5/1 青灰色 粗砂混じり粘土（遺物を多く含む）
第 6a 層	35	a'	10Y7/1 灰白色 粗砂混じり粘土（炭化物を含む）（か b）
第 6a 層	36	a	5Y3/1 オリーブ黒色 シルト混じり粗砂（縄文時代中期の土器・石器を多く含む）
第 6a 層	37	a	5BG6/1 青灰色～ 7/1 明青灰色 粘土混じり粗砂（炭化物を含む）
第 6a 層	38	a	10BG6/1 青灰色 粘土混じり粗砂
第 7a 層	39	a	2.5Y7/1 浅黄色 粗砂～粘土
第 7a 層	40	a	2.5Y7/2 灰黄色 粗砂混じり粘土
第 7a 層	41	a	10Y6/1 灰色 粘土～粗砂
第 7a 層	42	a	5Y7/2 灰白色 粗砂～粘土（直径 1 ㎝までの礫を含む。締まりが良い）
第 7a 層	43	a'	10GY7/1 明緑灰色 粘土（炭化物を含む）（か b）
第 7a 層	44	a	10G6/1 緑灰色 粗砂混じり粘土（炭化物・土器を多く含む）
第 7a 層	45	a	5Y6/2 灰オリーブ色～ 7/2 灰白色 粗砂～粘土（直径 1 ㎝までの礫含む。締まりが良い）
第 7a 層	46	a	10Y5/1 灰色 極粗砂～粘土
第 7a 層	47	a	5Y5/1 灰色 極粗砂～粘土（土器を含む。締まりが良い）
第 7a 層	48	a	5BG4/1 暗青灰色 粗砂～粘土（炭化物を含む。上方に向かって漸移的に締まる）

図 20　調査区南側溝 断面図（2）

土しなかった。この土壌層の上面では遺構面を設定していない。

第 6a 層は、オリーブ黒色の粗砂～シルト層で、調査区北半部を除いた広い範囲で確認される。縄文時代中期の遺物を多量に含む。第 6a 層上面の遺構面を第 6a 面とした。

第 7a 層は、灰色～灰黄色の粗砂～粘土層で、土壌化が進んで淘汰が悪い。調査区南東側でのみ確認された。北東方向への傾斜を持って確認され、南東端では圃場整備盛土直下（標高 2.5 m）で露出する。縄文時代中期の遺物を含んでおり、当該期の遺物包含層と考えられる。

2　ボーリング調査による堆積確認結果（図 21）

調査区付近は湧水が著しく、人力による側溝・断ち割り掘削では、より下層の縄文時代遺物包含層の状況を確認することができなかった。そのため、縄文時代遺物包含層の分布状況と深度を確認する

BP1

標尺 m	標高 m	層厚 m	深度 m	柱状図	土質区分	色調	相対密度	相対稠度	記事
		0.20	0.20		砂混じりシルト	暗褐灰			含水は少位。粘性も低く比較的硬い。
1					砂	灰～淡灰			上部、GL-0.20m～0.40m間において粗砂が優勢である。全体的には細～中、粗砂で不均一である。
		1.60	1.80						
2					砂	暗灰			GL-1.80m以深において若干、含水が高くなり比較的緩い。全体的に腐植物片、木片等の混入が見られる。
		1.20	3.00						

BP2

標尺 m	標高 m	層厚 m	深度 m	柱状図	土質区分	色調	相対密度	相対稠度	記事
		0.80	0.80		砂	淡褐～褐			粗砂が主体であり淘汰されている。含水は中位。
1					砂	暗褐～褐			GL-0.80m～1.00m付近にて腐食した有機物を含む。GL-1.50m付近までは粗砂が続き、以深は細～中砂となる。含水は中位。
		0.90	1.70						
2					砂	暗灰～淡褐			細～中砂主体。含水は中位。礫分はほとんど見られない。腐植物、木片等の混入が、少量ながら見られる。
		1.30	3.00						

BP3

標尺 m	標高 m	層厚 m	深度 m	柱状図	土質区分	色調	相対密度	相対稠度	記事
		0.40	0.40		砂混じりシルト	灰			少量の細礫が混じる。GL-0.30m付近にて炭化した木片の混入あり。含水は少位。
1		0.90	1.30		砂	暗灰～灰			上部は均一な中砂である。深くなるにつれ粒径は大きくなり粗砂となる。含水は中位。
		0.40	1.70						
2					砂	褐～茶褐			粗砂主体。GL-1.40m付近において、色調は濃くなり酸化が強いと思われる。
		1.30	3.00		砂	淡褐灰～淡白褐			GL-1.70m以深、上部にて中砂主体。深くなるにつれ、粒径は小さくなり細砂主体となる。全体的にφ2mm～4mm程度の礫が、少量であるが混入している。

BP4

標尺 m	標高 m	層厚 m	深度 m	柱状図	土質区分	色調	相対密度	相対稠度	記事
		0.22	0.22		砂混じりシルト	褐灰			含水は少位。粘性も低く、比較的硬い。
		0.18	0.40						
1					シルト混じり砂	灰			細～中砂が主体であり粘性はそれほど高くない。礫分はほとんど見られなかった。
2					砂	淡灰褐～褐灰			GL-0.40m～1.95m間は粗砂が主体である。GL-1.60m～1.95m付近にて酸化の強い部分が見られる。GL-1.95m以深、シルト分を若干含む細砂主体、またGL-2.15m付近においてはφ20mm程度の亜円礫の混入が見られた。
3									
4		3.60	4.00						
		1.00	5.00		シルト混じり砂	青灰			中砂主体。GL-4.35m付近にてシルトの薄い層を挟む。そのシルト層の上部にφ20mm～70mm程度の亜角礫の混入が見られた。

BP5

標尺 m	標高 m	層厚 m	深度 m	柱状図	土質区分	色調	相対密度	相対稠度	記事
		0.50	0.50		砂混じりシルト	暗灰褐			耕作土。GL-0.30m付近にて暗渠後あり。GL-0.50m付近まで攪拌されたものと思われる。
1					砂	暗白灰			上、中部にては粗砂が主体である。下部は中砂主体。部分的に炭化した木片の層を挟む。全体的にφ2mm～4mm程度の礫が少量であるが混入する。
		1.35	1.85						
2					砂	暗灰～淡茶灰			上部にて中砂、深くなるにつれて粒径は小さくなり細砂となる。礫分はほとんど見られない。含水は上部にて中位、下部は高位。
		1.15	3.00						

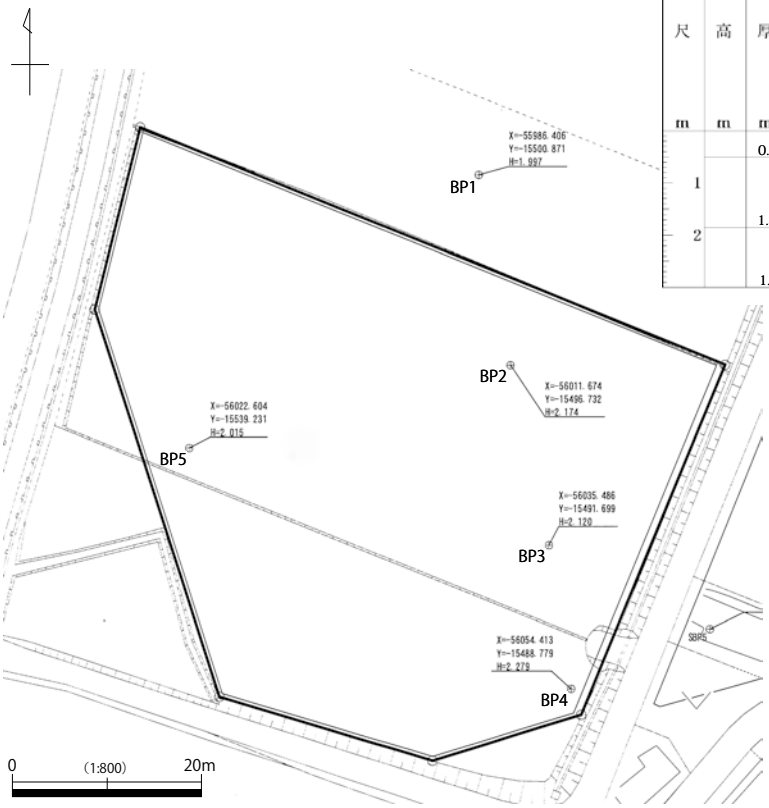


図 21　ボーリング柱状図

ことを目的として、ボーリング調査を行った。調査は６月 22 日に行い、同日終了した。調査区内の５ヶ所（BP1 ～ 5）より試料（ボーリングコア）を採取して、層相の検討を行った。GL－５ｍまでの掘削を行った BP4 を除いた４ヶ所は、GL－３ｍまでの掘削である。

調査区の北側４ｍに位置する BP1 と、調査区北方に位置する BP2 では、標高－１ｍまで砂礫が堆積する状況が見られ、北方砂層の下部に古土壌は観察されなかった。調査区東部の BP3、BP4 では縄文時代の遺物包含層の下部に砂礫が厚く堆積している状況であった。特に BP4 では、標高－2.7 ｍまでシルト層を挟在しながら砂礫層が堆積する状況がみられる。堆積単位での逆級化のほか、草本や木片をしばしば含むことから、砂礫層は河川性の堆積物と理解されるが、海抜以下の標高においても明瞭な海成堆積を確認することができないことについては、ボーリング地点が埋没河川に当たっていた可能性も考える必要があろう。

第３節　表土～第 1a 層下面の調査

１　概要

表土と第 1a 層を除去してすぐに遺構を検出した。この面で検出した遺構は、先述のとおり本来は複数の帰属面に分離できるものである。本来的に第 1a 層上面（あるいはそれより上の面）や第 1a 層下面に帰属すると推定できる遺構を以下にまとめた。第 1a 層上面（以上）は近世以降の面で、21・22・24 落ち込みや近代以降の暗渠が帰属する。第 1a 層下面は弥生時代後期の面で、８溝とそれに関連する遺構と考えられる９･15 ピット、17･23･30 土坑が帰属する。

２　近世～現代の遺構と出土遺物

（１）暗渠

圃場整備盛土および、その下部の近世～近代と考えられる耕作土層の下部で暗渠が確認された。暗渠はその構造から３つに大別できる。

①陶製管暗渠：最も新しく、圃場整備時に設置されたと考えられる。溝の底に針葉樹の葉を敷き、陶製の土管を据える。その上をさらに葉で覆った後に埋め戻す。西南西－東北東の軸を持ちながら、約 10 m 間隔で東西に設置されており、西端は三山口川の堤防に開口する。

②木製暗渠：溝の底に入れた２本の長細い丸太材に蓋掛けするように、長さ約 20 cm に割り裂いた丸太材を敷き並べた後に埋め戻す。ほぼ方位に沿って設置されており、南北、東西両方向が確認される。ただし、部分的な検出にとどまり、圃場整備前の水田の排水状況に合わせて設置されたものと考えられる。

③石製暗渠：溝の底に拳大の礫を入れる。切り合い関係から最も古い暗渠と考えられる。調査区の西端で局所的に観察され、三山口川の際の排水環境整備のための設置が考えられる。

（２）21・22 落ち込み

遺構（図 22、PL.5）

調査区北西部で確認された。大規模な落ち込み状の遺構で、内部からは陶磁器が出土する。21・22 落ち込みの内部には、直下層由来と考えられるブロック土を多く含む単一層が充填されており、埋め

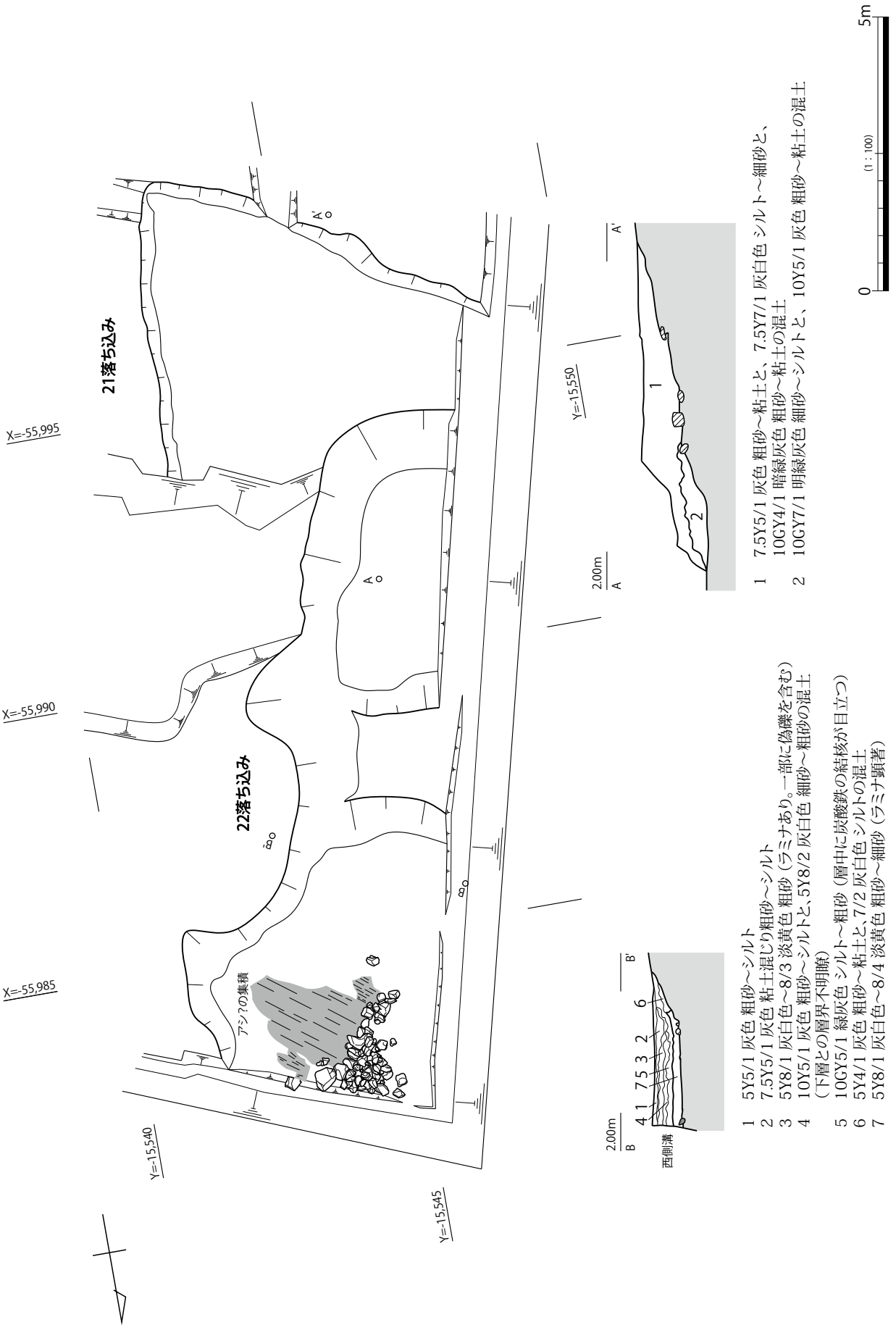


図22　21・22落ち込み 平・断面図

戻しされた状況が想定できる。22 落ち込みの埋土は、耕作土と考えられる古土壌が累重しており、埋没過程の中で段階的な耕地利用が行われてきた状況を示す。22 落ち込みの北側底面には、凝灰岩の角礫とアシのような植物が集中する場所が確認されたが、性格は不明である。

これらの遺構からは、陶磁器など、近世～近代にかけての遺物が出土する。21 落ち込みからは肩甲骨と考えられる獣骨が１点出土しているが、遺存状況が悪く、下層からの混入遺物の可能性がある。

また、21･22 落ち込みの底部は下層に存在する弥生時代前期の流路である 27 溝に達している。そのため､底面からは弥生前期土器を主体とする遺物群が出土した。27 溝は砂礫によって埋没しており、調査区の北西端で検出されたこともあって、現地調査を行っていない。ただし、確認された出土遺物については、取上げを行った（図 87 参照)。

出土遺物（図 23、PL.48・49）

長期間にわたり段階的に耕作地として利用されたと考えられる 21・22 落ち込みには、縄文時代晩期から近世～近代までの土器、陶磁器が混在する。そのうち、弥生時代前期までの土器は、落ち込みの下位にある 27 溝に由来するものである。ここでは、特徴的な晩期縄文土器、弥生土器、中世土器、打製石器を図化した。１～ 11、Ｓ１が 21 落ち込みから、12 ～ 21 が 22 落ち込みからの出土である。

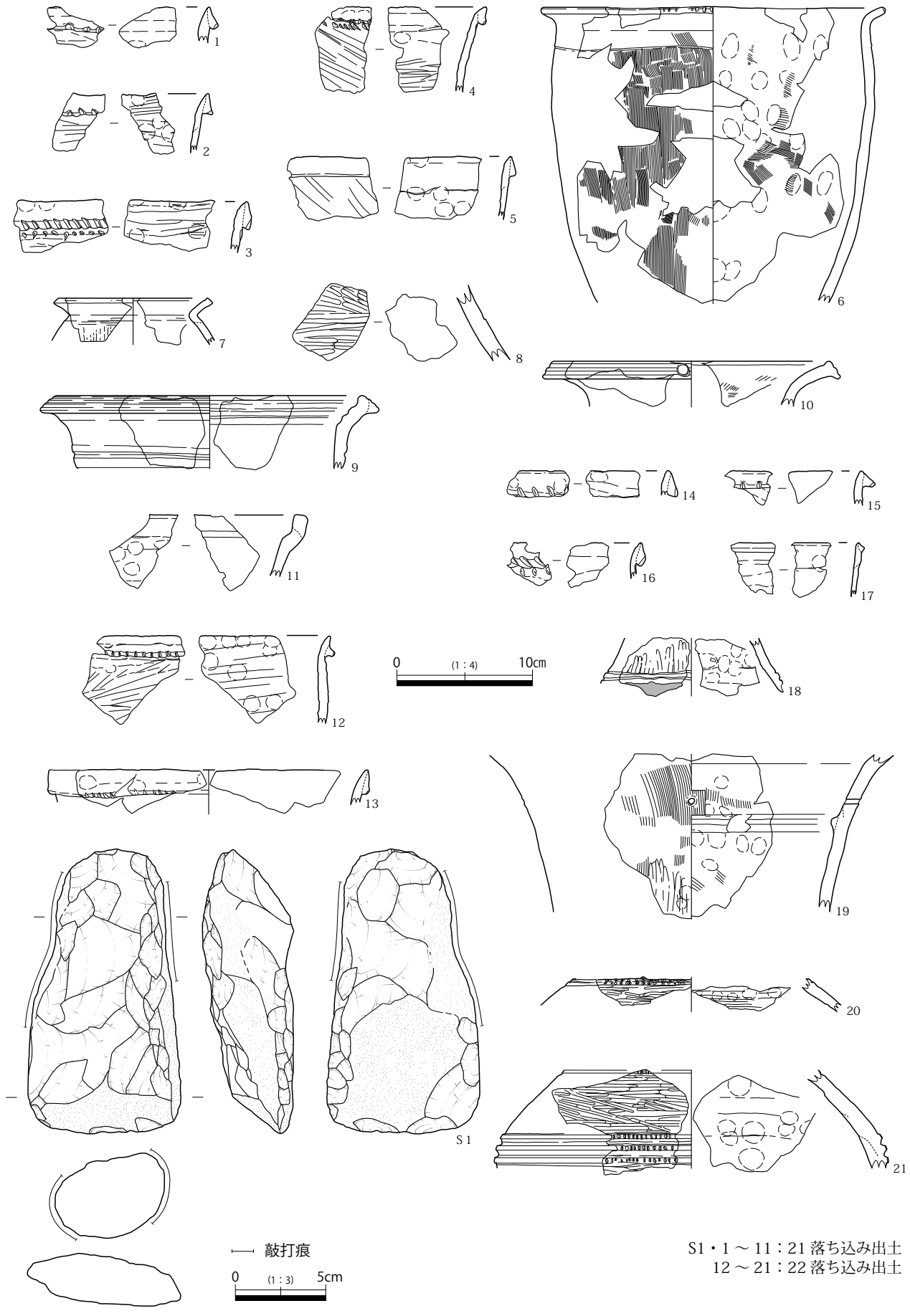
１～５、12 ～ 17 は縄文時代晩期後半の突帯文土器である。いずれも小片で、全形をうかがいうる資料はないが、口縁が直立、あるいはわずかに外傾して立ち上がることから、胴部は砲弾形を呈していたものと推定される。口縁部に貼り付けられる突帯は断面が垂れ下がった三角形を呈し、17 を除く全点にヘラ状工具によるＶ字状の刻目が施される。突帯の貼り付け位置は、12 のみ口縁からわずかに下がった位置で、その他は口縁端部に接する、または被さるように貼り付けられている。器面調整は内外面ともに指押さえと粗いナデである。また、18 は縄文時代晩期末の壺の頸部で、肩部に２条の沈線を引く。外面をミガキ、内面を指押さえによって整える。

出土した弥生土器には甕、壺があり、弥生時代前期に帰属する資料が大半を占める。６は弥生時代前期前葉の遠賀川式土器の甕である。底部を欠くが、ほぼ全形を復元できた。口縁部がく字状に緩やかに外反し､端部に刻目が施される。頸部下に段が形成される。外面は縦方向のハケメが密に施され、内面は指押さえとハケメで調整される。７は中期中葉の特徴を持つ甕の口縁部である。外面をハケメ、内面をナデで調整する。

壺は弥生時代前期（８、19 ～ 21）と中期（９、10）のものが出土した。８は遠賀川式土器の壺の頸部片である。19 は内面に貼付突帯を有するもので、外面をハケメとミガキ、内面をハケメと指押さえで調整する。前期後葉に位置づけられる。また、20 は削出突帯をもつ壺で、突帯には極小の竹管文が刺突される。21 は頸部近くに１条、胴部に３条の刻目突帯が残存する。２点はいずれも外面を細密なミガキ、内面をナデと指押さえで整える。中期の壺は２点で、いずれも中期後葉の特徴を持つ広口の壺である。９は口縁部の内外面および頸部に凹線が施される。また 10 は、Ｔ字状に拡張し

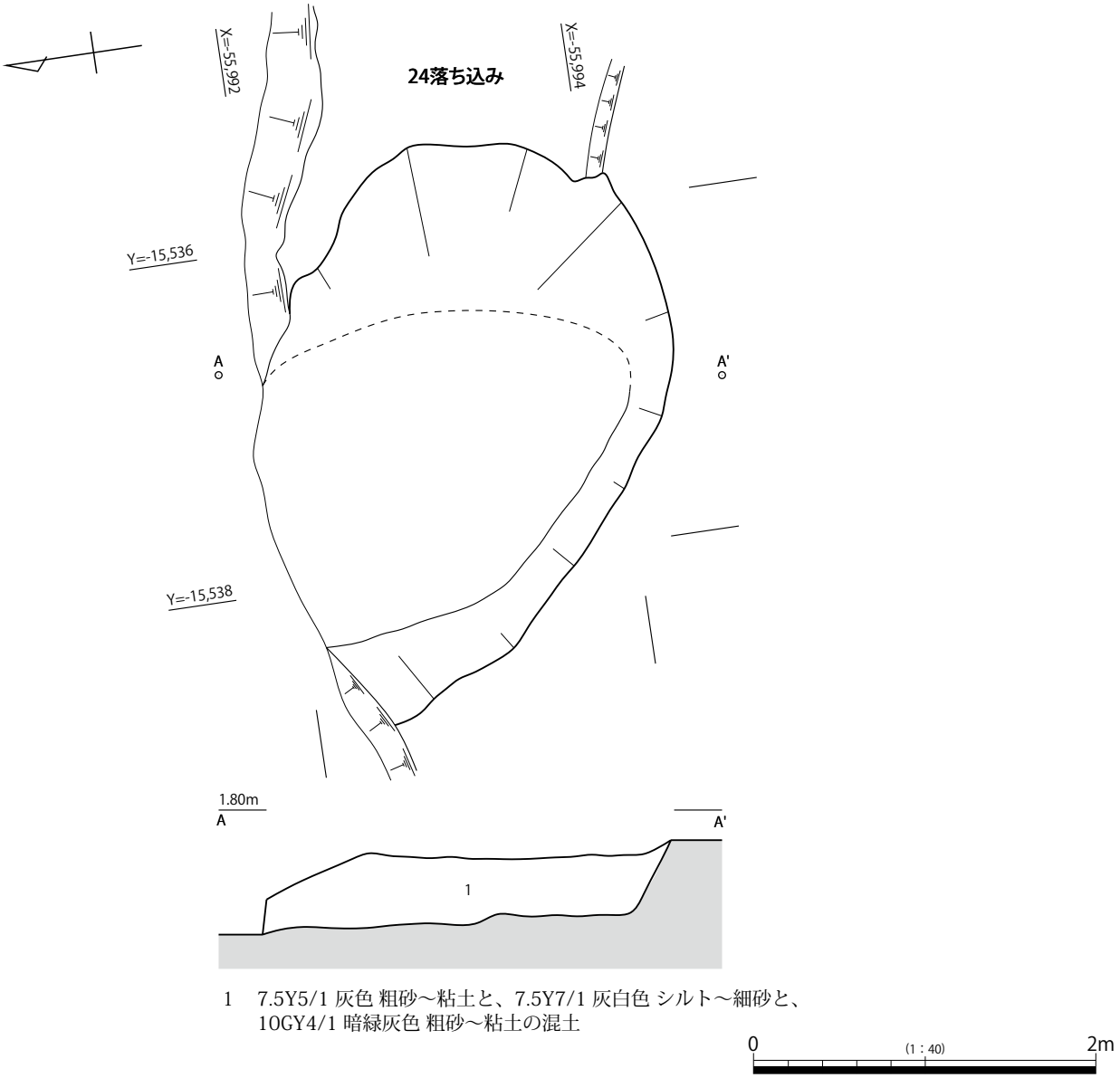
表２　21・22 落ち込み 出土石器石材別組成表

	楔形石器	剥片	石核	ブランク	打製石斧	砥石	計
安山岩	1	2		1			4
花崗岩						1	1
凝灰岩					1		
頁　岩			1				1
計	1	2	1	1	1	1	6



S1・1 ～ 11：21 落ち込み出土
12 ～ 21：22 落ち込み出土

図 23　21・22 落ち込み 出土遺物



1　7.5Y5/1 灰色 粗砂～粘土と、7.5Y7/1 灰白色 シルト～細砂と、
10GY4/1 暗緑灰色 粗砂～粘土の混土

図 24　24 落ち込み 平・断面図

た口縁部に２条の沈線を引き、円形浮文を貼りつける。

11 は瓦質鍋の口縁部である。外面に成形時の指頭圧痕がはっきりと残存している。

石器は表２に示したとおり、打製石斧や楔形石器などが少量出土している。１点のみ図化した。S１は凝灰岩または流紋岩製の打製石斧である。厚みがあることに加え､刃部に使用痕がないことから、磨製石斧未成品の可能性も考えられる。

（3）24 落ち込み（図 24、PL.5）

21・22 落ち込みの東で検出した、径約３ｍの落ち込みである。埋土は埋戻しによるものと考えられる。図化可能な遺物は出土しなかった。

3　弥生時代後期の遺構と出土遺物

（1）遺構群（図 25 ～ 29・31、PL.5・6）

調査区中ほどを南東から北西方向に並ぶ遺構群を確認した。遺構群は、８溝、９･15 ピット、17･23･30

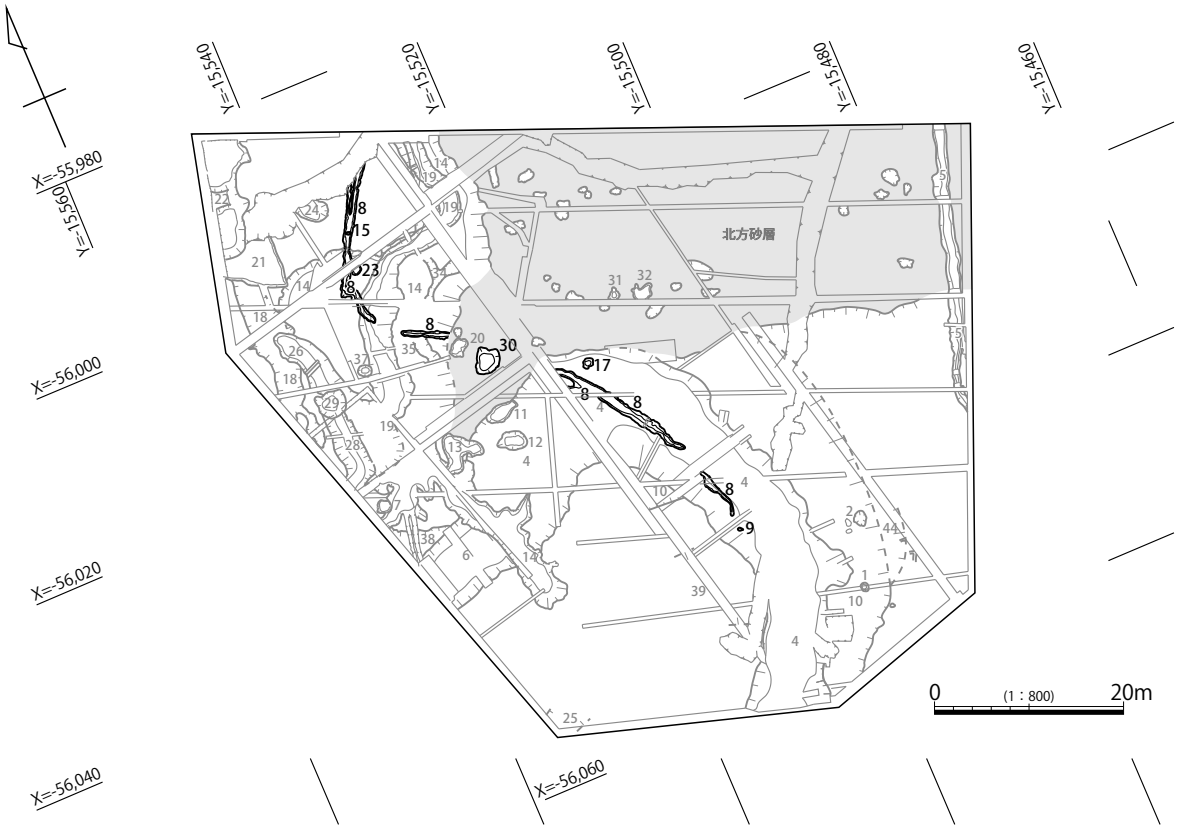


図 25　第 1a 層下面全体図

土坑によって構成される。いずれも埋没した下層遺構の上部での検出で、粗砂を主体としたブロック土を多く含む埋土が共通して観察される。掘り込み面は不明だが、残存する深さはほとんどなく、削平を受けていることが想定される。

直線的に 60 m以上の延長距離を持つ８溝を主体として、モモ核が出土することが特徴である。モモ核が８溝の全域にわたって散在する状況からは、人為的な埋納行為が考えられよう。17 土坑からはモモ核のほかにも長径１cm 弱の楕円形の種子が 30 点ほど出土した。

これらの遺構群から出土する土器は、ほとんどが弥生時代後期のものである。15 ピットからは甕形のミニチュア土器が出土した。ちなみに９ピットは８溝の延長上、15 ピットは８溝のプラン内に位置しており、両遺構は８溝の一部であった可能性がある。

30 土坑からは、木材と礫が多数出土した（図 31）。いずれも構築されたような状況はみられない。また、当遺構からもモモ核が約 30 点出土している。

（２）出土遺物

15 ピット（図 27、PL.49）

15 ピットからは先述のようにミニチュア土器の甕が１点出土している（22）。全面をナデによって丁寧に仕上げており、外面には一部にハケメの痕跡が残る。

８溝（図 30、PL.49・50）

８溝からは比較的多くの遺物が出土しており、弥生時代後期の土器（23 ～ 40）を中心に、土師器（41）、時期不明の土製品（42）が見られる。土師器は１点のみで、その他はすべて弥生土器であることから、この土師器は弥生時代後期の溝に混入したものと考えられる。

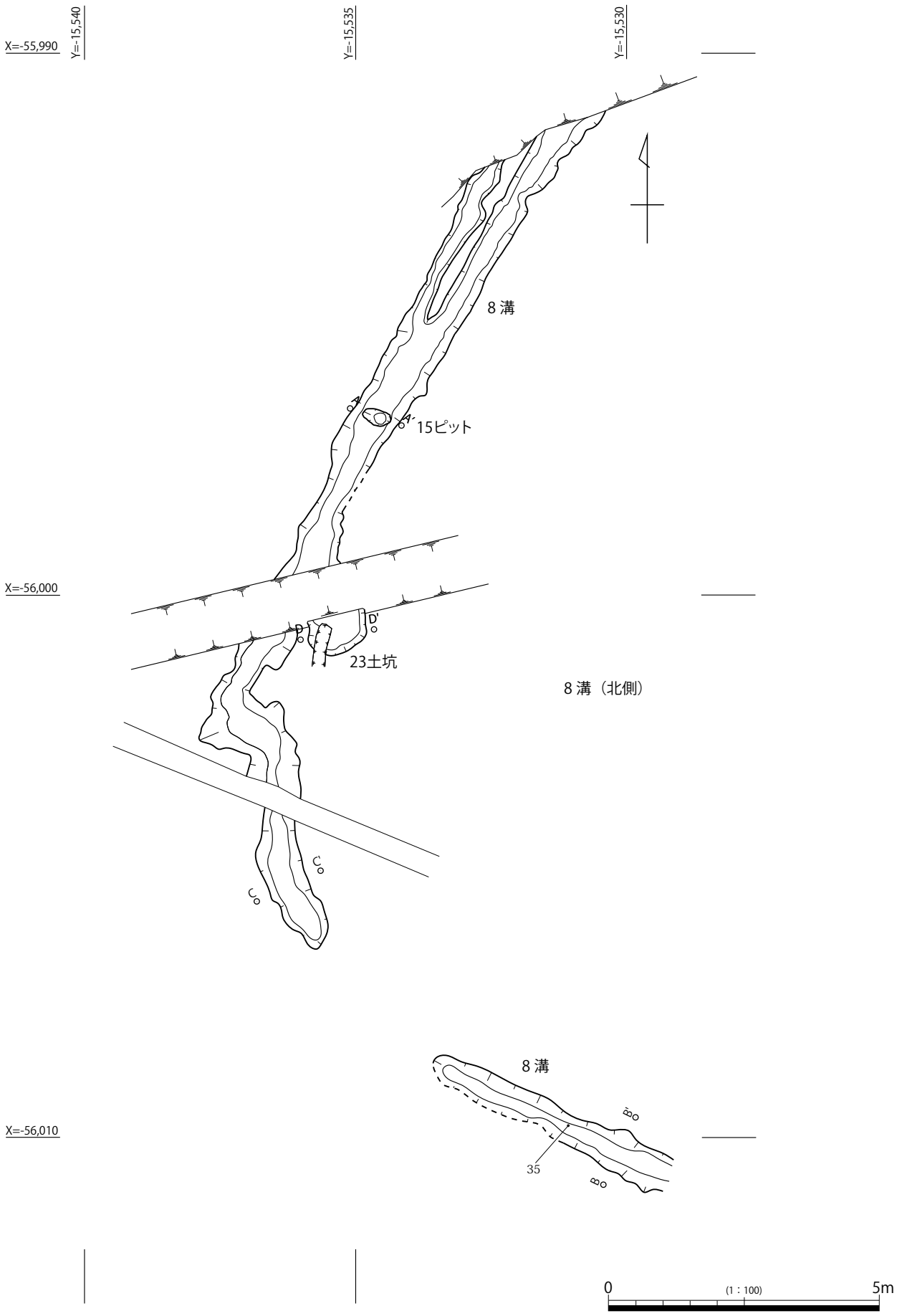
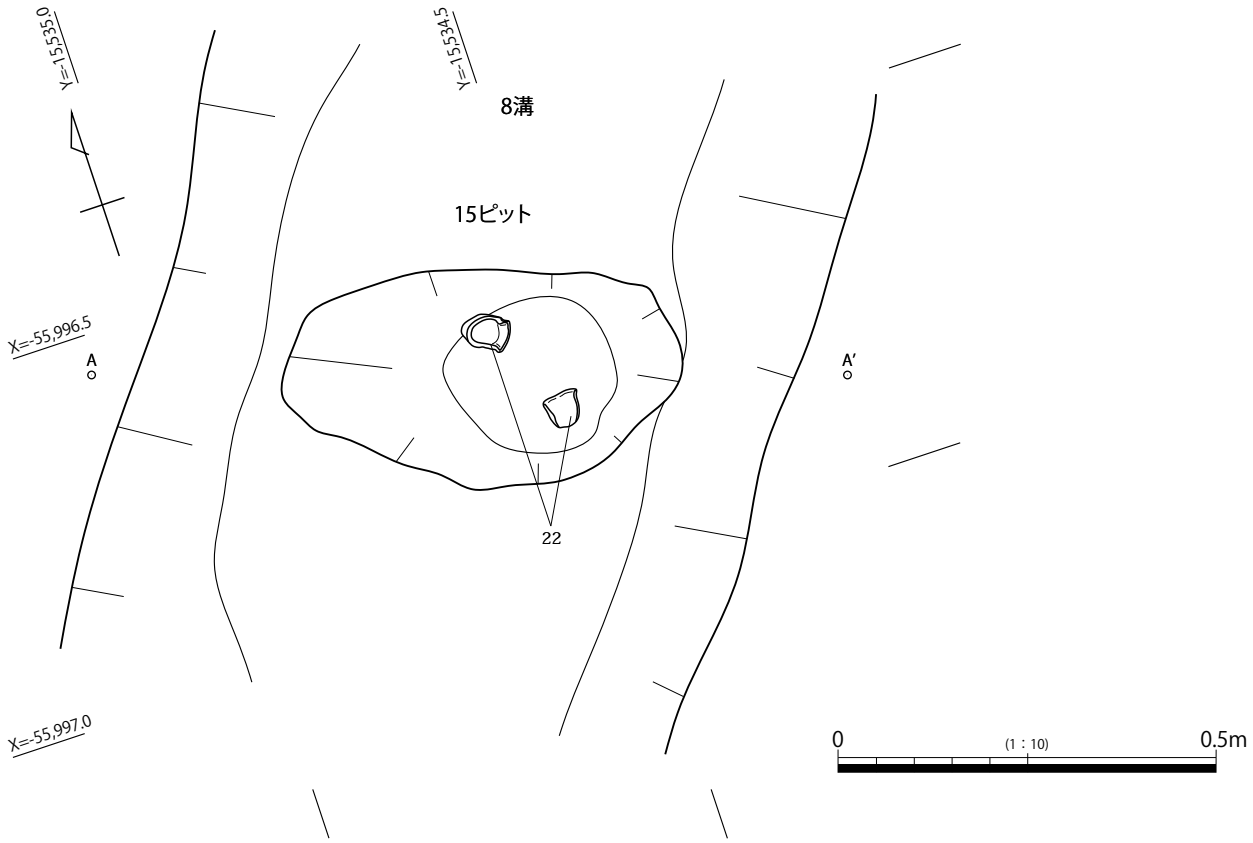
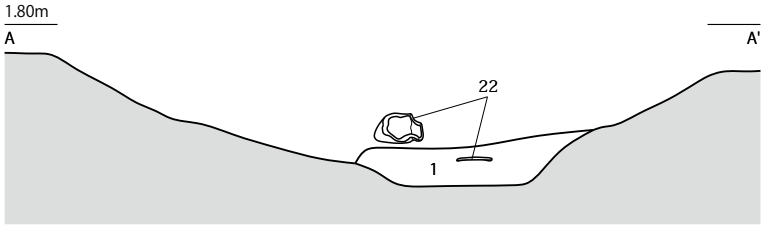
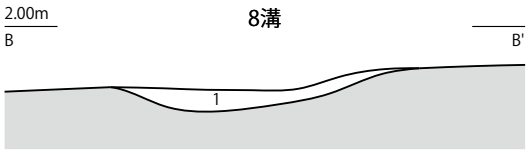

X=-55,990
Y=-15,540
Y=-15,535
Y=-15,530
8 溝
15ピット
A
A'
X=-56,000
D
D'
23土坑
8 溝（北側）
C
C'
8 溝
B
B'
35
X=-56,010
0
(1：100)
5m

図 26　8 溝 平面図

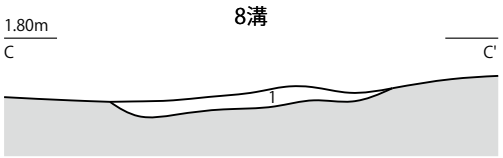




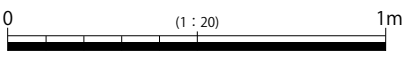
1　5Y 5/1 灰色 粗砂～シルトと、5Y 8/2 灰白色　粗砂の混土

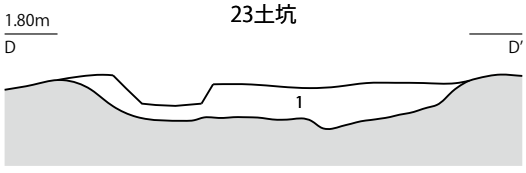


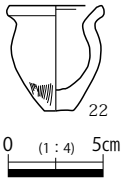
1　5Y4/1 灰色 粗砂～シルト
（径 1cm までの礫・炭化物を含む）



1　5Y4/1 灰色 粗砂～シルト
（径 1cm までの礫・炭化物を含む）







1　5Y4/1 灰色 粗砂～シルト
（径 1cm までの礫・炭化物を含む）

図 27　15 ピット平・断面図、８溝・23 土坑断面図および 15 ピット出土土器

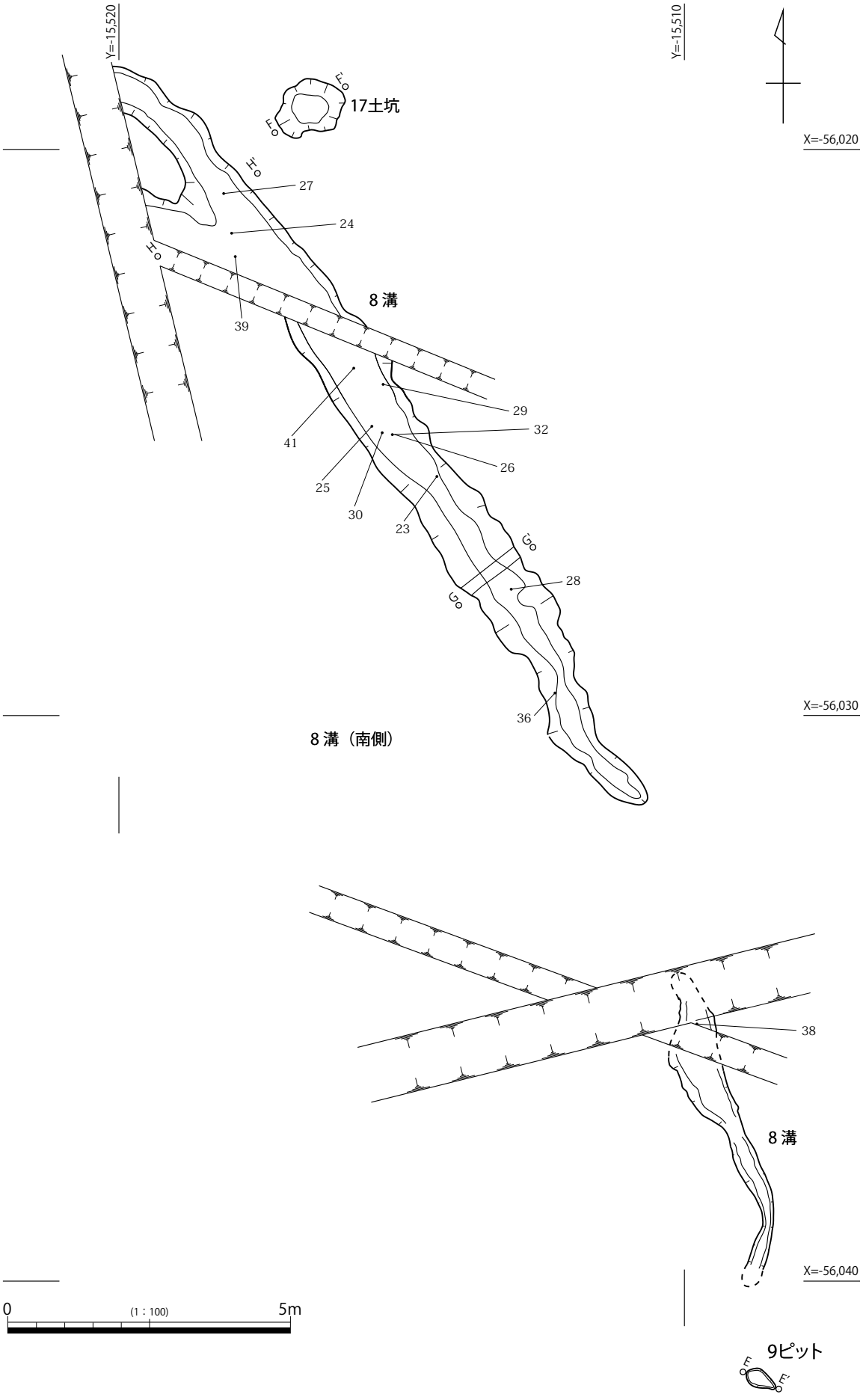
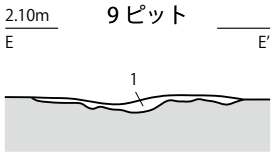
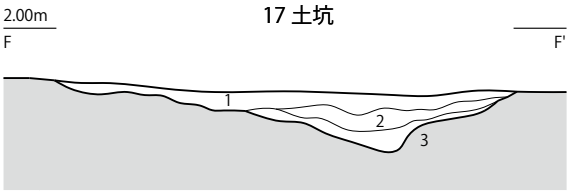


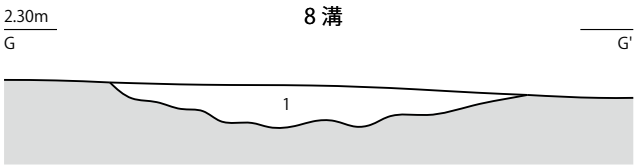
図 28　８溝・17 土坑・９ピット平面図



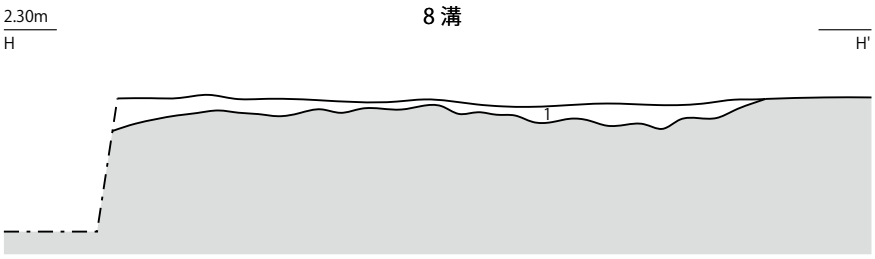
1　5Y4/1 灰色 粗砂～シルト
（径 1cm までの礫・炭化物を含む）



1　5Y 4/1 灰色　粗砂混じりシルト（ブロック土含む。8 溝と近似した埋土）
2　5Y 8/2 灰白色 粗砂（ラミナ顕著）
3　5Y 5/1～4/1 灰色 粗砂とシルトの互層



1　5Y4/1灰色 粗砂～シルト（径1cmまでの礫･炭化物を含む）



1　5Y4/1 灰色 粗砂～シルト（径1cmまでの礫･炭化物を含む）

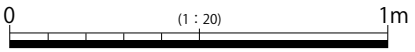


図 29　8 溝・17 土坑・9 ピット断面図

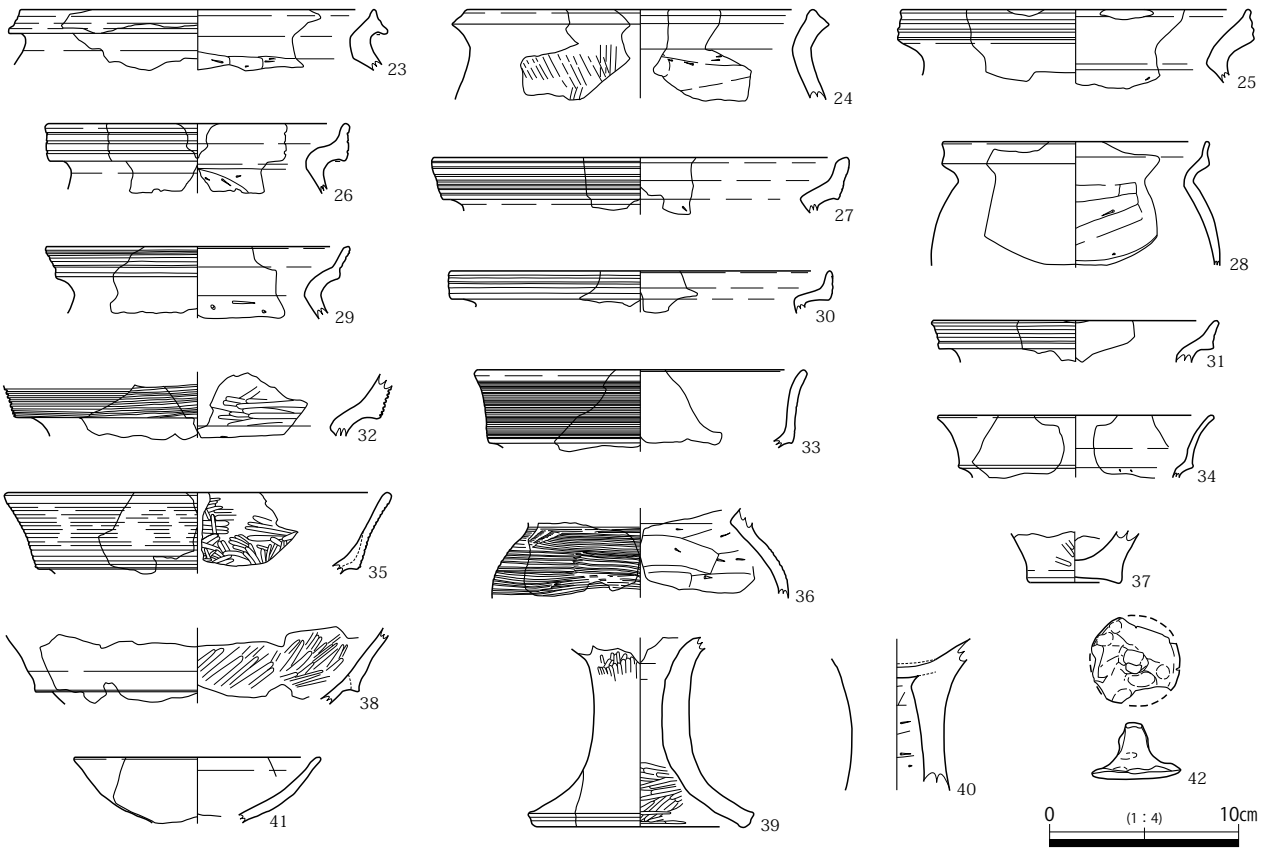
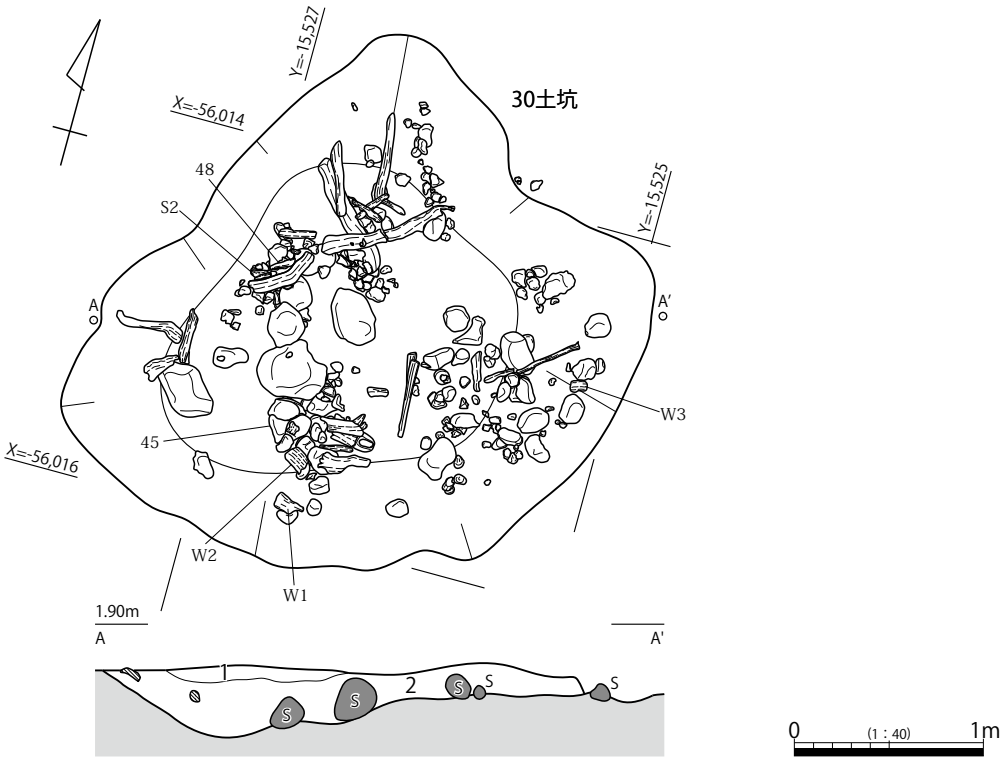


図 30　8 溝 出土土器



1　2.5GY4/1 暗オリーブ灰色 シルトと、5Y8/3 淡黄色 細砂～粗砂の互層
2　10Y4/2 オリーブ灰色 シルトと、5Y8/2 灰白色 極粗砂～粗砂の互層

図 31　30 土坑 平・断面図

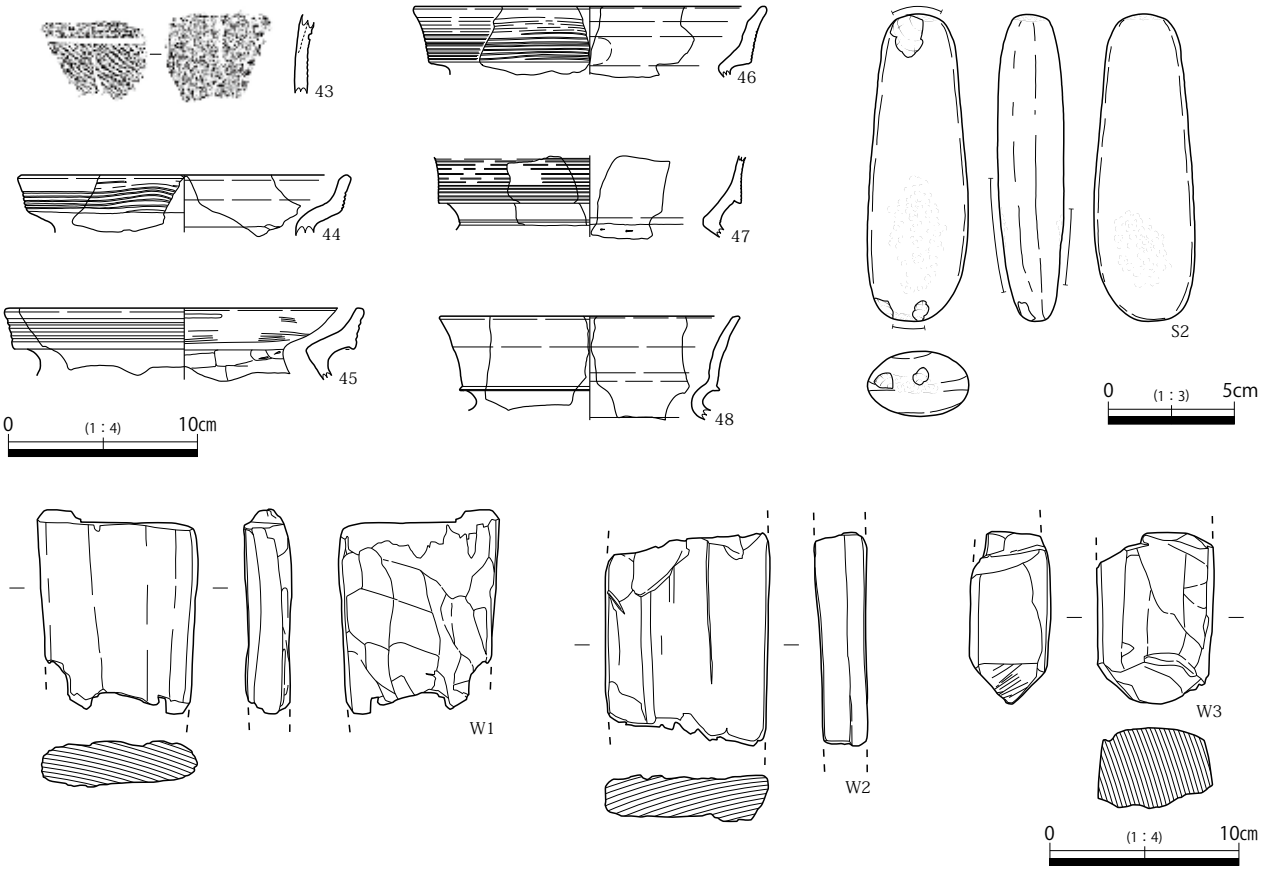


図 32　30 土坑 出土遺物

23 ～ 40 は弥生時代後期の甕である。胴部が残るものは 28 のみで、倒卵形を呈するものと推定される。口縁部形態の特徴から、23 ～ 25 は後期前葉、26 ～ 31 は後期中葉、32 ～ 35 は後期後葉から末葉に位置づけられる。24 を除き、複合口縁を有し、ほぼ全点の口縁帯外面に多条平行沈線を巡らせる。器面調整は、外面をナデ、口縁部内面をナデやミガキ、頸部以下をケズリで整える。36 は胴部片で、外面を二枚貝条痕、内面をケズリで調整する。37 は甕または壺の底部である。わずかに上げ底になっており、外面をナデとミガキ、内面をナデで調整する。わずかに残る器面の立ち上がりが比較的直立に近いことから、甕の可能性が高いと考えられる。

38 は鼓形器台の受部である。全形は不明であるが、頸部は長いものであろう。外面をナデ、内面をミガキで調整する。高坏は脚部のみを確認した（39・40）。39 は脚端部まで残存しており、坏部付近と脚部内面にミガキの痕跡が残る。端部の形態から、弥生時代後期後半期のものと推定される。40 は坏部底面から脚柱部の破片で、坏部と脚部の接合痕跡がうかがえる。脚部内面にはケズリの痕跡が残る。

41 は土師器の高坏の坏部である。浅い椀形を呈し、内面に赤色塗彩の痕跡が残る。

42 は時期不明の土製品で、円盤の中央に突起状のツマミが付く。用途は不明であるが、鏡形土製品と形状が類似しており、同様の土製品である可能性が考えられるが、中央の突起に鈕孔はみられない。全面をナデおよび指押さえで整形する。

30 土坑（図 32、PL.49・50）

30 土坑からも、比較的多くの遺物が出土している（43 ～ 48・Ｓ２・Ｗ１～３）。

43 は縄文時代後期初頭に位置づけられる中津式の深鉢である。外面には磨消縄文と沈線文が施される。44 ～ 48 は弥生土器の甕の口縁部片である。口縁部はいずれも端部が上方に長く立ち上がる複合口縁を有し、48 以外の口縁部外面には多条平行沈線が巡る。器面調整はナデで、内面の頸部以下にケズリが施される。口縁部形態の特徴から、44・45 は弥生時代後期中葉、46・47 が後期後葉、48 が終末期に帰属するものと考えられる。

石器は１点のみ出土した。Ｓ２は安山岩製の棒状敲石。木製品は３点掲載した。Ｗ１・２は板である。いずれもモミ属製で同一個体の可能性がある。Ｗ３はアカガシ亜属製の角材である。

４　遺構外の出土遺物（図 33、PL.51）

第 1a 層や表土、造成土、撹乱土に含まれていた、第 1a 面検出までに出土した遺物をここにまとめた。

49 は弥生時代中期の高坏片である。50 は弥生時代後期の甕で、単純口縁をもつ。51 は管状土錘である。52 ～ 54 はいずれも縄文時代晩期のものである。52 は突帯文土器で、口縁に刻目をもつ貼付突帯が付される。53 は篠原式併行の深鉢で、口縁に刻目が施されている。54 も篠原式併行と考えられる浅鉢である。

石器は表３に示したとおり、石錘を主体として、比較的多くの量が出土している。Ｓ３～Ｓ５は造成土から第 1a 層にかけて出土した石器である。Ｓ３は安山岩製の打製石斧。Ｓ４は小型で扁平な両刃の磨製石斧である。Ｓ５は磨製石斧の基部と考えられる。Ｓ６は撹乱出土の大型両刃磨製石斧で、弥生時代のものであろう。

Ｗ４は漆器椀である。Ｇ１はガラス小玉である。

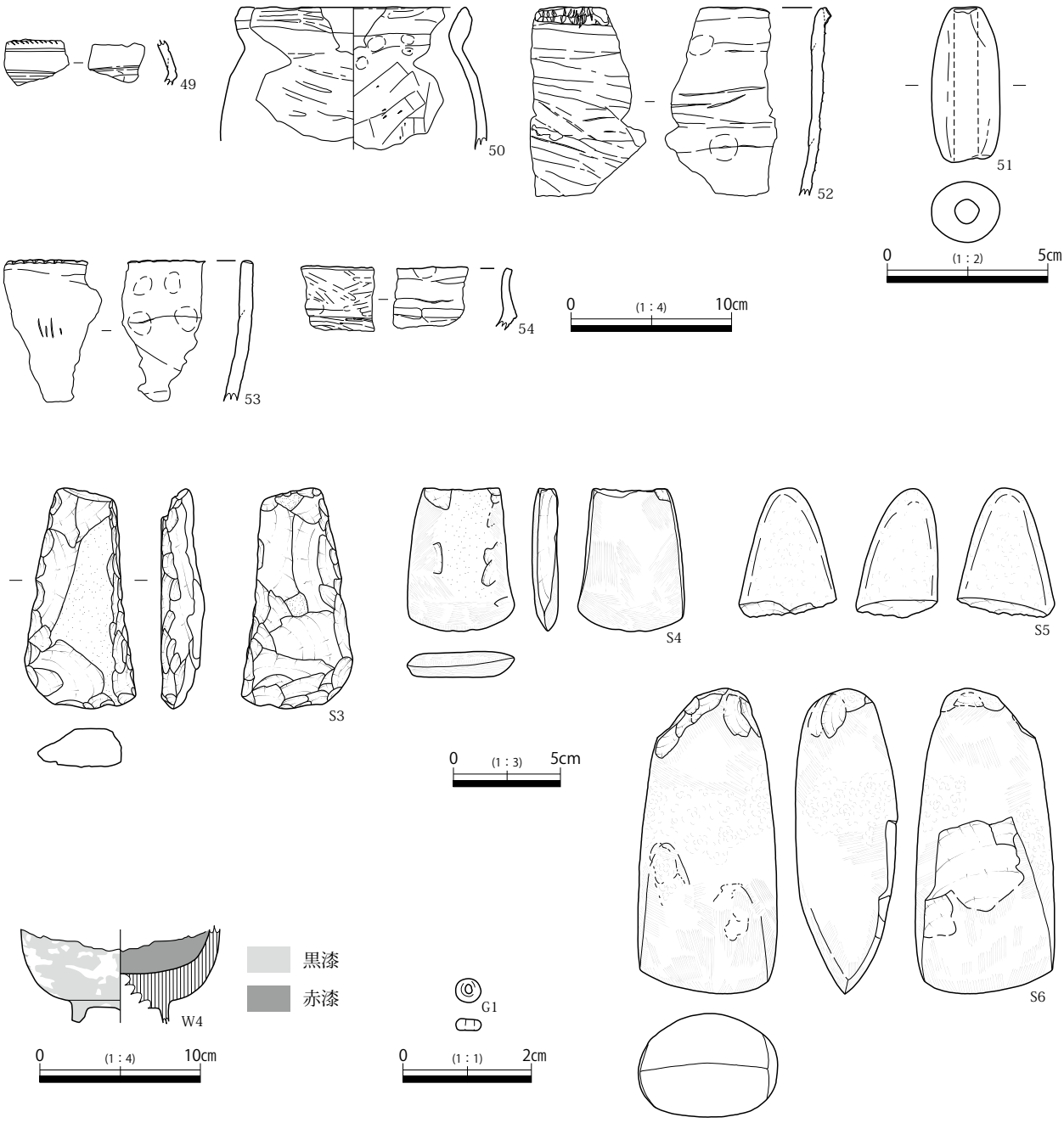


図 33　第１a 層ほか出土遺物

表 3　第１a 層ほか 出土石器石材別組成表

		剥片	打製石斧	磨製石斧	石錘	磨石	敲石＋磨石	礫石器片	計
火成岩	安山岩	2	3		5	1	2	1	14
	流紋岩			1	4				5
	閃緑岩			2					2
	碧玉	1							1
堆積岩	砂岩				1				1
	他			1	1				2
変成岩	緑色片岩			1					1
計		3	3	5	11	1	2	1	26

第４節　第 2a 面～第 2a 層下面の調査

１　第 2a 面の遺構と出土遺物

（1）概要（図 34）

弥生時代中期の遺構群は、調査区北西部で検出した。14・19・26・28・34・35・36 溝の７条の溝と、29・37 土坑がこの面に帰属する。溝の規模は様々であるが、いずれも調査区内で蛇行しながらも、おおむね南から北に向かって流れていたようである。土坑は溝に付随するような遺構である。遺構相互の切り合いから、弥生時代中期の時間幅の中での段階的な開発が想定できる。

この面の主体となる溝のなかには、木製構造物を伴うものが存在し、積極的な人間活動が行われたことが分かる。特に木製構造物の残りが良かったのは、14 溝、26 溝、28 溝である。14 溝の主な木製構造物と 26・28 溝の木製構造物では性格が異なっており、前者は堰状の遺構、後者は護岸施設であった可能性が考えられる。

遺構群の構築段階は大きく５段階に分かれる。以下、中期第１段階～第５段階に区分し、古い順に各遺構の詳細を述べる。

（2）14 溝

遺構（図 35 ～ 52、PL.7 ～ 15）

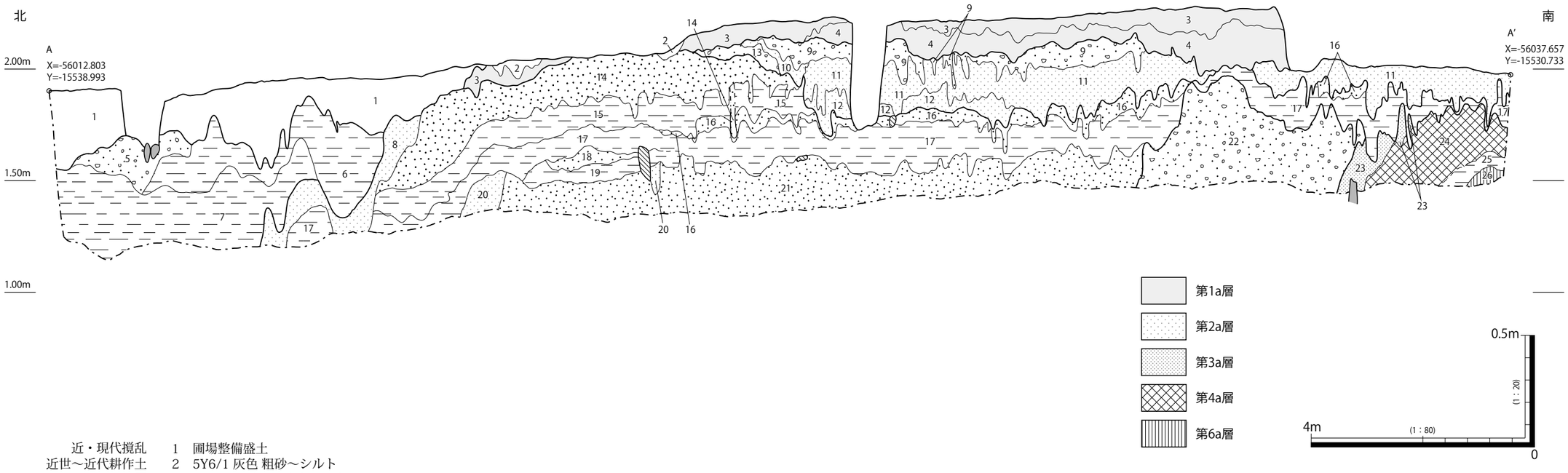
＜形態と堆積＞

中期第１段階の遺構である。調査区北西側で検出した。19 溝、26 溝など、後出する多くの遺構に切られている。

図 34　第 2a 面全体図

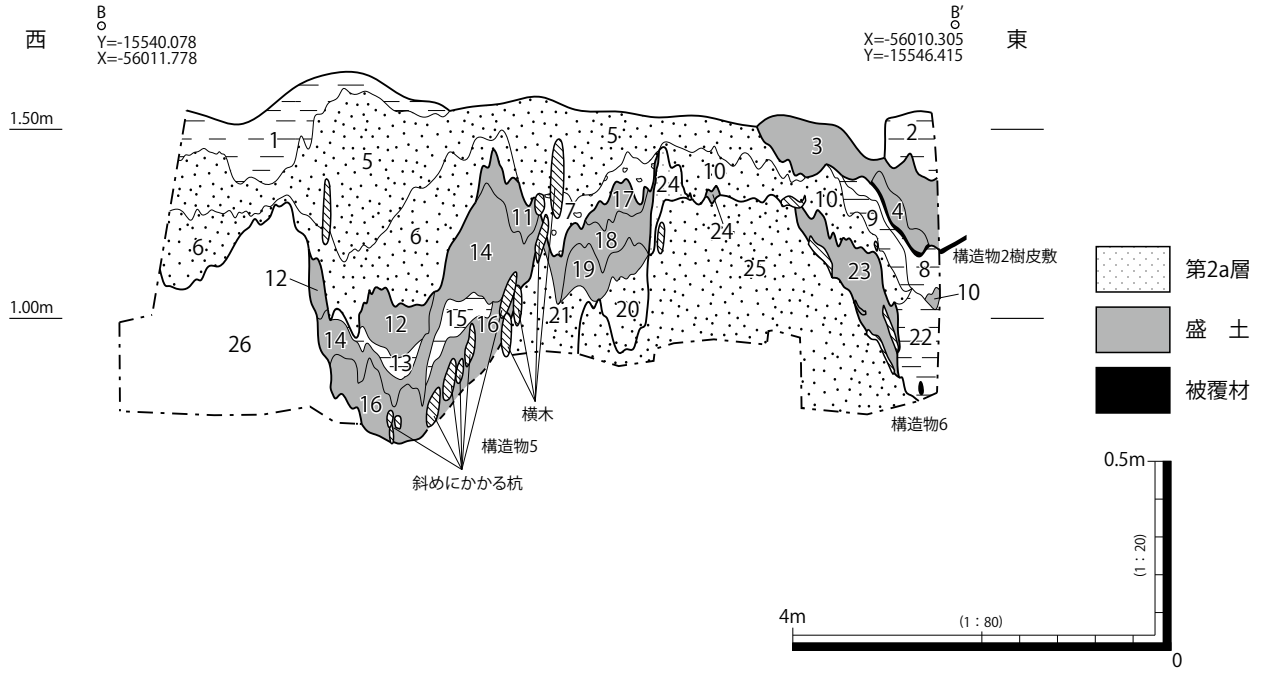
X=56,020
X=56,010
X=56,000
X=55,990
X=56,030
Y=-15,550
Y=-15,540
Y=-15,530
Y=-15,520
X=56,040
18溝
26溝
28溝
19溝
38溝
6溝
14溝
37土坑
15ピット
8溝
構造物1
構造物2
構造物3
構造物4
構造物5
構造物6
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
図36
図37
図38
図39
図40
0
(1：150)
10m

図 35　14 溝 平面図



近・現代撹乱	1	圃場整備盛土
近世～近代耕作土	2	5Y6/1 灰色 粗砂～シルト
第 1a 層	3	7.5Y4/1 灰色 シルト～粗砂
第 1a 層	4	7.5Y5/1 灰色 シルト～粗砂
	5	10GY6/1 緑灰色～ 7/1 明緑灰色 極粗砂～粗砂（斜行ラミナ）
19 溝	6	10Y5/2 オリーブ灰色 シルト～微砂（ラミナあり。層中に木質遺物を含む）
	7	7.5GY6/1 緑灰色 シルトと、7.5GY8/1 明緑灰色 細砂の互層
第 2a 層	8	5Y6/1 灰色 粗砂～シルト（14 溝堆積土が 19 溝開口時に土壌化）
	9	2.5Y7/6 明黄褐色～ 8/3 淡黄色 極粗砂～粗砂（ラミナあり。層底面ほど酸化して黄橙色に変色）
第 2a 層	10	5Y5/1 灰色 シルト～粗砂（層中に粗砂の間層あり。炭化物を含む）
第 2a 層	11	5Y6/1 ～ 5/1 灰色 粗砂混じりシルト（ブロック土・炭化物を含む）
第 2a 層	12	5Y6/1 灰色 粘土～シルト（炭化物を含む。ラミナが転倒している）
	13	5Y8/6 黄色～ 8/3 淡黄色 極粗砂～粗砂（斜行ラミナ。層底面に木質遺物を含む）
	14	5Y8/4 淡黄色～ 8/1 灰白色 粗砂～細砂（ラミナ顕著）
14 溝	15	5Y6/1 灰色 粘土～シルト（ラミナあり）
	16	5Y8/2 灰白色 細砂～微砂（ラミナ顕著）
	17	7.5Y5/1 灰色 粗砂混じり粘土（部分的にラミナあり）
	18	5Y8/3 淡黄色～ 8/2 灰白色 細砂～粗砂（ラミナ顕著）
	19	5Y6/1 灰色～ 7/1 灰白色 微砂～シルト
第 2a 層	20	5BG7/1 明青灰色 細砂混じり粘土
	21	5GY5/1 オリーブ灰色 粘土と、5Y8/2 灰白色 粗砂～細砂の互層（南端では偽礫を多く含む）
6 溝	22	5Y8/3 淡黄色 極粗砂～粗砂（ラミナ顕著。木質遺物を多く含む）
第 3a 層	23	10GY6/1 緑灰色 粘土と、10GY8/1 明緑灰色 シルトの混土（炭化物を多く含む。6 溝開口時の土壌化層）
第 4a 層	24	5BG7/1 明青灰色 粘土～シルト（わずかにブロック土を含む）
第 4b 層	25	5G7/1 明緑灰色 粘土
第 6a 層	26	10GY3/1 暗緑灰色 粘土～粗砂

図 36　14 溝 南北 A 断面図



1　5Y5/2 灰オリーブ色 シルト～極細砂（ラミナあり）
2　7.5GY5/1 緑灰色 シルト～粘土
構造物２上部盛土　3　7.5GY4/1 暗緑灰色～ 5/1 緑灰色 砂混じりシルトに、5Y8/2 灰白色～ 8/3 淡黄色 粗砂が混じる
構造物２上部盛土　4　10Y5/1 灰色 粘土と、7.5Y4/1 灰色 シルト～粘土の混土
5　5Y8/3 淡黄色 粗砂と、10GY5/1 緑灰色 シルトの互層
6　5Y8/1 ～ 8/2 灰白色 粗砂（ラミナ顕著。緑灰色の粘土層を偽礫として含む）
7　5Y8/3 淡黄色 粗砂～極粗砂と、10Y4/1 灰色 シルトの互層
8　5GY5/1 オリーブ灰色 粘土～シルト
9　10Y6/1 灰色 シルト～粘土と、5Y4/1 灰色 シルトと、5Y8/3 淡黄色 粗砂の互層（上方粗粒化）
10　5Y8/2 灰白色～ 8/4 淡黄色 粗砂（ラミナ顕著）
構造物５上部盛土　11　10G7/1 明緑灰色 細砂混じり粘土と、5Y8/2 灰白色 粗砂の混土
構造物５上部盛土　12　10Y5/1 灰色 粘土と、7.5Y7/1 灰白色 粗砂～シルトの混土
13　7.5GY6/1 緑灰色 粘土（植物遺体を層状に含む）
構造物５上部盛土　14　7.5GY5/1 緑灰色 粘土に、5GY7/1 明オリーブ灰色 シルト～粘土をブロック状に含む
15　7.5Y8/1 灰白色 粗砂と、5GY5/1 オリーブ灰色 シルトの互層
構造物５上部盛土　16　5GY5/1 オリーブ灰色 シルトと、7.5Y7/1 灰白色 細砂の混土
17　10GY4/1 暗緑灰色～ 5/1 緑灰色 細砂混じり粘土と、7.5GY6/1 緑灰色 粘土の混土
構造物５下部盛土　18　10Y6/1 ～ 5/1 灰色 粗砂混じり粘土（粗砂のブロック土を含む）
構造物５下部盛土　19　5Y/1 灰色 粘土～粗砂
20　5Y8/2 灰白色～ 8/3 淡黄色 粗砂（ラミナあり）
21　7.5Y4/1 ～ 5/1 灰色 粘土～シルトと、5Y8/2 灰白色 細砂の互層
22　7.5GY5/1 緑灰色 粘土～シルト
構造物６盛土　23　10Y5/1 灰色 細砂と、7.5Y6/1 灰色 細砂～粗砂の混土（内部に粗朶が認められる）
第 2a 層　24　5Y7/1 灰白色 粘土～粗砂
25　5Y8/2 灰白色～ 6/1 灰色 粗砂と、10Y6/1 灰色 シルトの互層
北方砂層？　26　5Y8/1 ～ 7/2 灰色 粗砂（ラミナ見えないが、淘汰は良い）

図 37　14 溝 南北 B 断面図

いくつかの流路が合流しながら蛇行して北流し、調査区北端から調査区外に延びる（図 35）。遺構の幅は、最も広い部分で約 18 m、狭い部分で約３mあり、規模の大きな溝である。調査区西側や南側で部分的に未調査部分を残す（図 35）。内部は砂礫を主体として、シルト層などを挟在しており、流路が緩急を繰り返しながら徐々に埋没していった状況を示す（図 36 ～ 39）。

＜木製構造物＞

内部から横木と杭を組み合わせた木製構造物が確認された。南東から北西方向を軸に横木を設置し、流向に対してほぼ直交するように構築されている。下流側（横木の南西側）に斜めに杭材を立て並べて水を受ける構造になっており、堰の可能性がある。木製構造物は埋没状況から数段階にわたって構

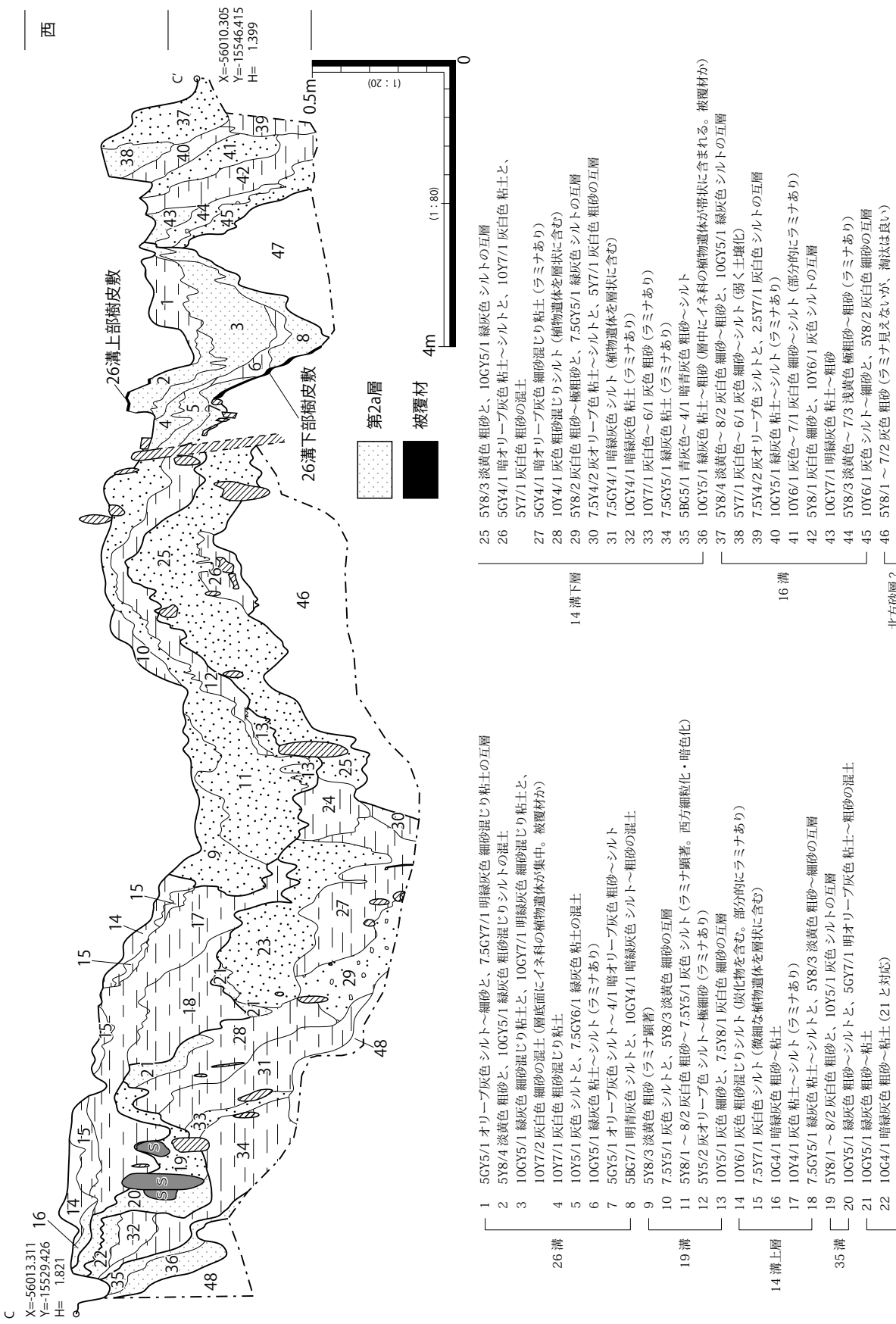


図38　14溝・19溝 東西A断面図

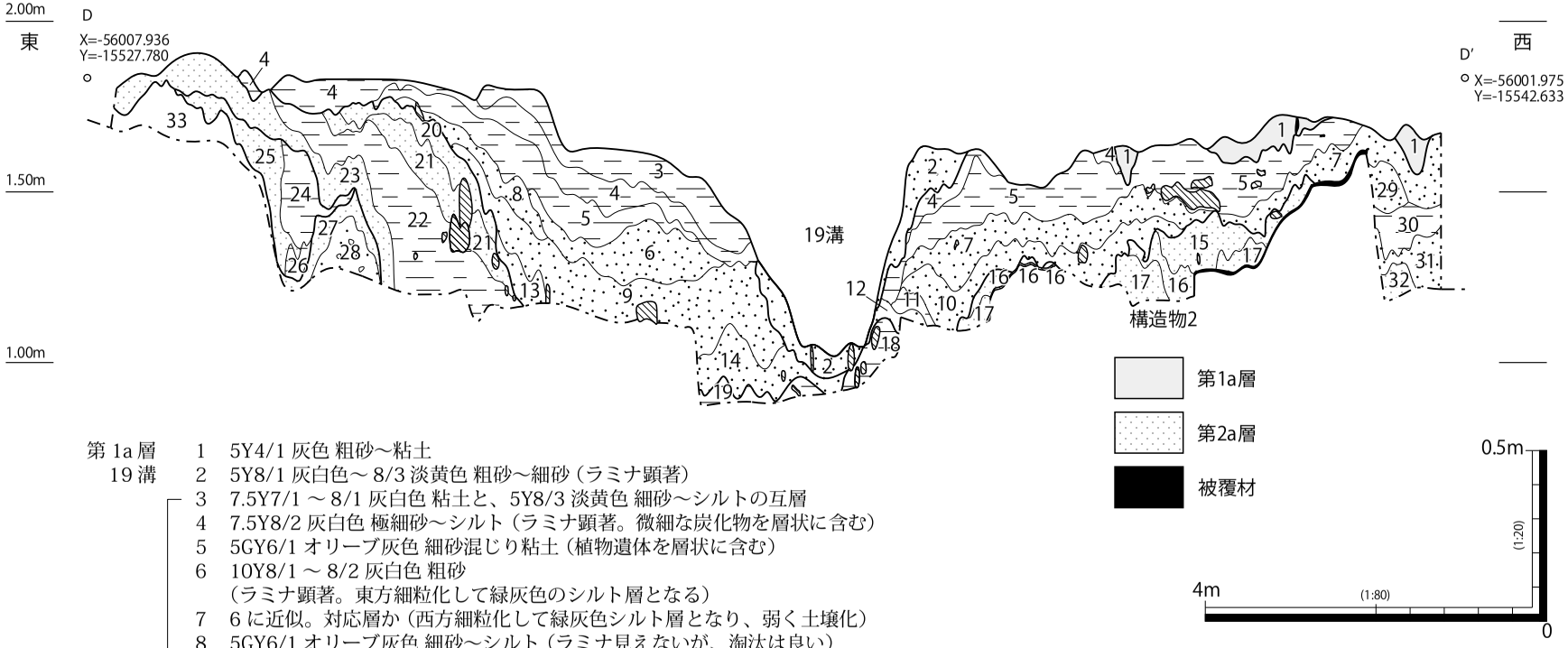


図 39　14 溝・19 溝 東西 B 断面図

第 1a 層　1　5Y4/1 灰色 粗砂～粘土

19 溝　2　5Y8/1 灰白色～ 8/3 淡黄色 粗砂～細砂（ラミナ顕著）

14 溝上層
- 3　7.5Y7/1 ～ 8/1 灰白色 粘土と、5Y8/3 淡黄色 細砂～シルトの互層
- 4　7.5Y8/2 灰白色 極細砂～シルト（ラミナ顕著。微細な炭化物を層状に含む）
- 5　5GY6/1 オリーブ灰色 細砂混じり粘土（植物遺体を層状に含む）
- 6　10Y8/1 ～ 8/2 灰白色 粗砂
  （ラミナ顕著。東方細粒化して緑灰色のシルト層となる）
- 7　6 に近似。対応層か（西方細粒化して緑灰色シルト層となり、弱く土壌化）
- 8　5GY6/1 オリーブ灰色 細砂～シルト（ラミナ見えないが、淘汰は良い）
- 9　7.5Y8/1 灰白色 粗砂～細砂
  （ラミナ顕著。東方細粒化して緑灰色のシルト層となる）
- 10　9 に近似。対応層か（樹皮の上まで浸食し、堆積する）
- 11　10GY5/1 緑灰色 粘土～シルト（層底面に植物遺体が層状に堆積）
- 12　5Y8/1 灰白色 粗砂（ラミナあり）
- 13　5Y8/1 灰白色 粗砂に、7.5GY5/1 緑灰色 シルトが混じる
  （部分的にラミナあり）
- 14　7.5Y8/1 灰白色 粗砂と、7.5GY6/1 緑灰色 粘土～シルトの互層

構造物 2 盛土
- 15　7.5GY5/1 緑灰色 シルト～細砂（緑灰色粘土をブロック土状に含む）
- 16　5GY5/1 ～ 6/1 オリーブ灰色 粗砂混じり粘土（ブロック土を含む）
- 17　7.5GY5/1 緑灰色 シルト～細砂に、灰白色 粗砂が混じる

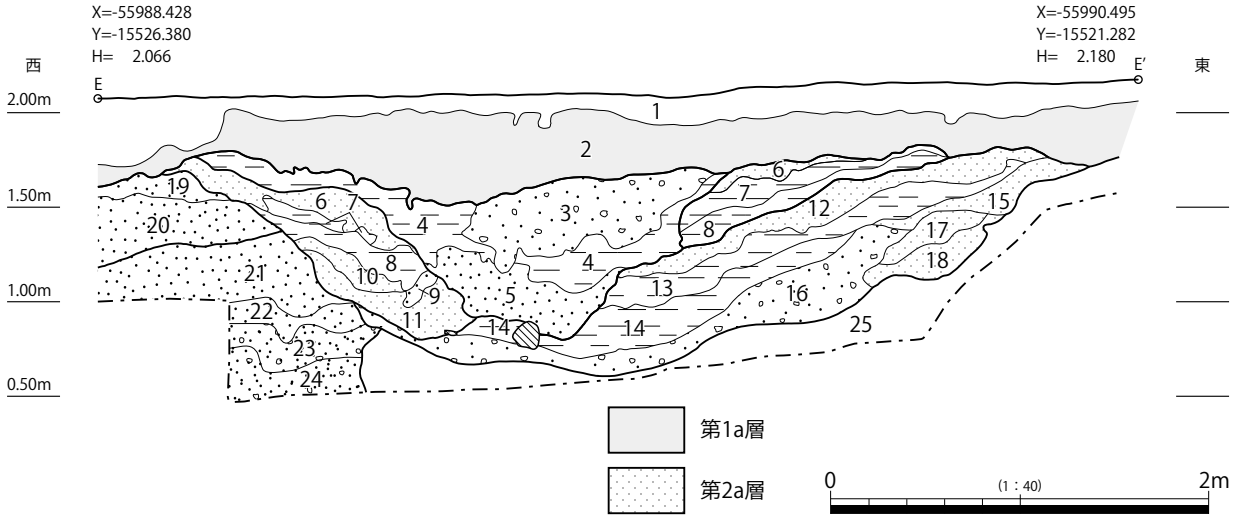
14 溝下層
- 18　10Y4/2 オリーブ灰色 細砂混じりシルト（植物遺体を含む）
- 19　10Y4/2 オリーブ灰色 シルト
- 20　10Y6/1 灰色 粘土～粗砂（ブロック土を含む。盛土か）
- 21　10Y7/1 灰白色 粗砂混じり粘土（ブロック土を含む。盛土か）
- 22　7.5Y7/1 灰白色 細砂～ 5/1 灰色 シルトに、漸移的に変わる
  （上方・東方細粒化）
- 23　5Y5/2 灰オリーブ色 粘土混じり粗砂に、8/3 淡黄色 粗砂が混じる

34 溝
- 24　10GY5/1 緑灰色 粗砂混じり粘土（炭化物が混じる）
- 25　10G4/1 暗緑灰色 粘土混じり粗砂に、
  5Y8/2 灰白色 粗砂が混じる
- 26　10GY5/1 緑灰色 粘土（炭化物が混じる）

14 溝下層？
- 27　10Y8/1 ～ 8/2 灰白色 粗砂に、緑灰色 粘土が
  ブロック状に混じる
- 28　7.5Y8/1 灰白色 粗砂～極粗砂と、
  N6/0 灰色 細砂の互層（植物遺体を層状に含む）

14 溝下層
- 29　5Y8/2 灰白色 粗砂と、10G5/1 緑灰色 シルトの互層
- 30　7.5Y4/2 灰オリーブ色 細砂混じりシルト～粘土
  （部分的にラミナあり）
- 31　5Y8/3 淡黄色 粗砂と、10Y5/1 灰色 シルトの互層
- 32　10Y4/1 灰色 粘土～粗砂に、緑灰色の粘土が
  ブロック状に混じる

北方砂層　33　5Y8/1 灰白色 粗砂（ラミナ見えないが、淘汰は良い）



近・現代撹乱　1　圃場整備盛土
第 1a 層　2　5Y4/1 灰色 粘土～粗砂

19 溝
- 3　5Y8/3 淡黄色 粗砂～極粗砂（ラミナ顕著）
- 4　5Y5/1 ～ 5/2 灰オリーブ色 シルト～粘土に、5Y8/2 灰白色 細砂～粗砂が層状に混じる（植物遺体を層状に含む）
- 5　5Y8/1 灰白色～ 8/3 淡黄色 粗砂～細砂と、10GY5/1 緑灰色 シルトの互層

14 溝上層
- 6　5Y7/1 ～ 8/1 灰白色 粗砂（淘汰は良いが、弱く土壌化）
- 7　5Y7/1 ～ 8/1 灰白色 シルト～粘土（微細な植物遺体を層状に含む）
- 8　5Y6/1 灰色～ 7/1 灰白色 粗砂混じり粘土（部分的にラミナあり）
- 9　5Y8/3 淡黄色～ 8/1 灰白色 細砂～粗砂
- 10　5Y7/2 灰白色 粗砂に、5GY 明緑灰色 粘土が混じる
- 11　10Y5/1 灰色 粘土と、10G7/1 明緑灰色 粘土の混土（部分的にラミナあり。崩落土か）
- 12　5Y6/1 灰色 粗砂～粘土

14 溝下層
- 13　7.5Y5/1 灰色～ 5/2 灰オリーブ色 シルトに、5Y8/1 灰白色 細砂～粗砂が層状に混じる（14 溝内の静水的堆積）
- 14　10GY5/1 緑灰色 シルトに、5Y8/3 淡黄色～ 8/1 灰白色 細砂～粗砂が層状に混じる（14 溝底部の堆積）
- 15　N6/1 灰色～ 5Y6/2 灰オリーブ色 粗砂～粘土（ブロック土を含む。崩落土か）
- 16　5Y8/4 淡黄色～ 8/1 灰白色 極粗砂～細砂（ラミナ顕著。偽礫を含む）
- 17　5Y5/1 灰色 粘土～粗砂（ブロック土を含む。崩落土か）
- 18　5Y4/1 灰色 粗砂～シルト（ブロック土を含む。崩落土か）

40 溝
- 19　5Y8/3 淡黄色 粗砂と、10G7/1 明緑灰色 粘土の互層
- 20　5Y8/2 灰白色 細砂～ 5Y6/1 灰色 シルト（ラミナ顕著。上方細粒化）

33 溝
- 21　5Y8/2 灰白色～ 8/4 淡黄色 極細砂～粗砂
- 22　5Y7/1 灰白色 粗砂と、7.5GY5/1 緑灰色 シルト～粘土の互層（植物遺体を多く含む）
- 23　5Y8/1 ～ 8/2 灰白色 粗砂～極粗砂（ラミナあり。底部に緑灰色シルト帯あり）
- 24　5G7/1 明緑灰色 粗砂～極粗砂（ラミナあり）

北方砂層　25　7.5Y8/1 灰白色 中砂～細砂（ラミナあり。植物遺体を含む）

図 40　14 溝・19 溝 東西 C 断面図（北側溝）

築されたと考えられ、14 溝の大規模な埋没まで補修や改修を行いながら機能の維持が図られていたことがわかる。

これらの木製構造物については、それぞれ「構造物１～６」（以下、各単位名については「木製」を省略）の名称を付けた（図 41）。一部に針葉樹と考えられる樹皮を多用するものがある（構造物２・４）。各木製構造物を被覆する流路内堆積物の層序対比から先後関係を確認することができ、ここでは古いものから順に変遷過程を述べる。

構造物１は、最も北東側（下流側）で検出された（図 42）。背面側には木材が散布しており、構造物から流出したものであろうか。また、同じく背面側 2.5 m の位置に、構造物１に平行するような杭列が確認される。

構造物３は、構造物１の上部を覆う砂礫層の上部に構築されている（図 43）。南東側は 14 溝の肩

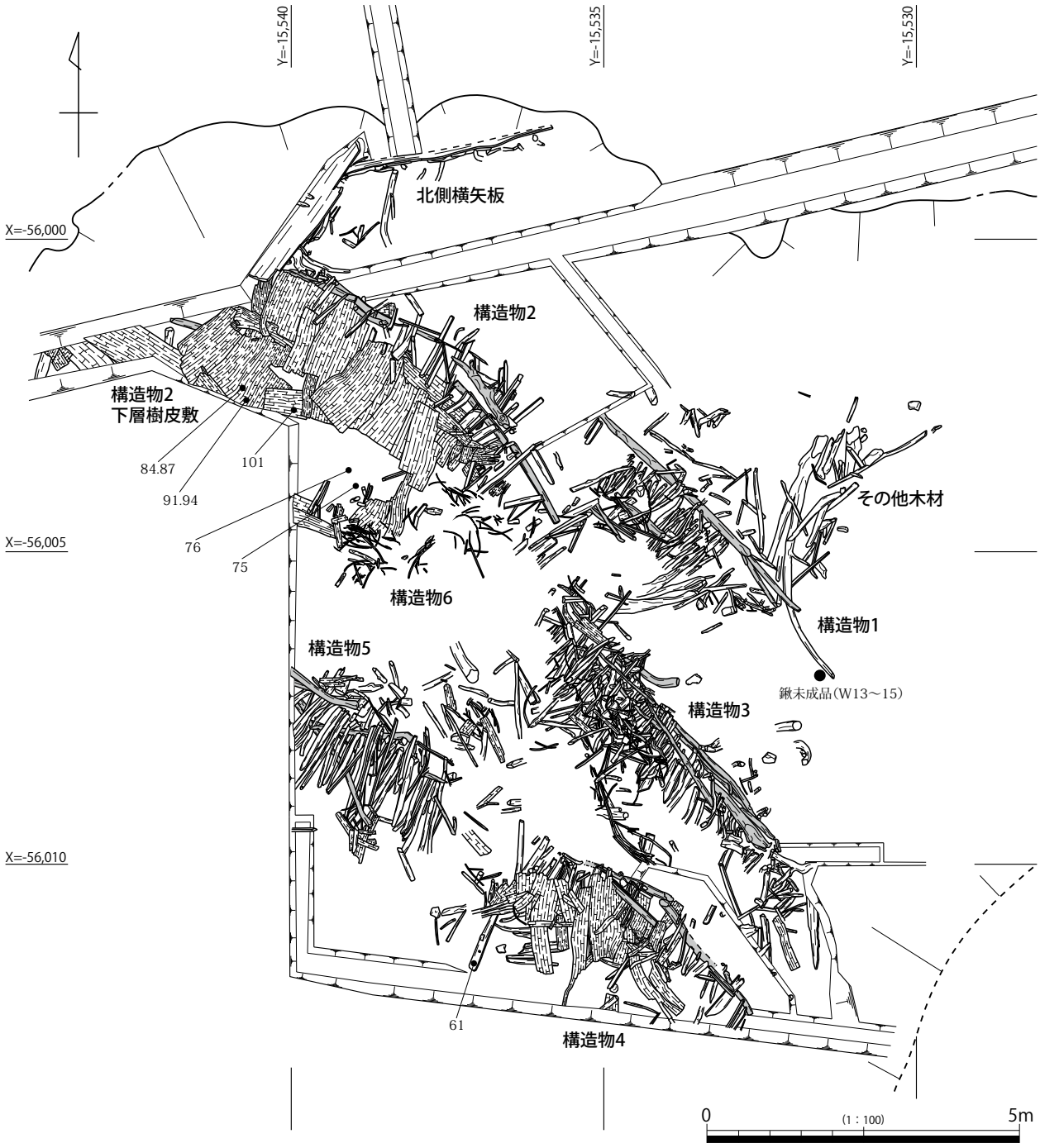


図 41　14 溝 木製構造物検出状況図

付近まで延びることが確認されるが、北西側は 19 溝形成時に破壊されて不明瞭となっている。より新しい構造物と考えられる構造物２の西端には、下層により古い構造物が確認されており（図 47）、これが構造物３より延長される可能性があるが、構造物２を解体調査していないため不明である。

構造物４・５は、最も南西側（上流側）で検出された構造物である（図 44）。14 溝の調査は、これらの構造物の南西側において行っておらず、構造物４の南東側、５の西側については、拡がりを確認できていない。４に多用される樹皮が５にほとんど見られないという相違はあるものの、元来は同一の遺構であったものが、19 溝形成時に分断されたものと考えられる。構造物４・５の背面には、小枝などを含み込んだ盛土が確認された。特に構造物５の北側では、構造物１～５と逆方向の北東方向

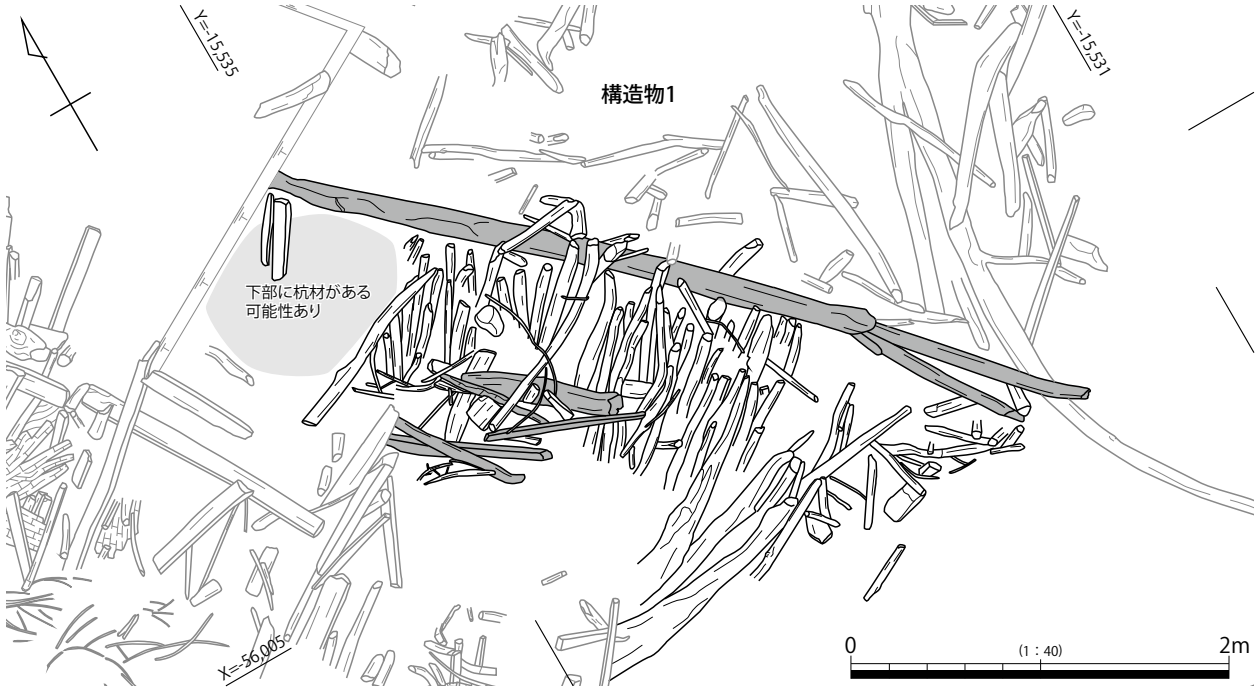


図 42　14 溝 構造物 1 検出状況図

への傾斜を持つ構造物６が確認され、構造物４・５・６が構造物３の埋没および埋戻し後に土堤状の水利施設として構築された可能性を示す。構造物４・５は堤の前面（南西側）、６は背面（北東側）の芯材と考えられよう。

構造物６の盛土上面から、弥生土器の甕（75･76）が２点出土した（図 46）。いずれも完形に近い。ただし、盛土上面からの出土であることから、構造物６に確実に伴うとは言いがたい。出土地点のすぐ北側には、後述する構造物２が構築されており、この構築に伴う土器の可能性もある。

また、構造物４の裾部からは、縦杓子（W12）が出土した（図 45）。構造物４を被覆する盛土の中からの出土である。掘削時に柄の側面を傷めてしまったが、柄の上部内側に帯状の陽刻を持つ。

構造物２は、多量の樹皮を用いることが特徴である（図 47）。広い範囲に樹皮を敷きつめており、垂直的というよりも平面的な構造を持つ。構造物６上部の盛土の上に樹皮がかぶっており、今回検出した木製構造物群の中で最も新しい段階のものと考えられる。樹皮上から残りの良い土器の出土がみられ（84・87・91・94）、構造物２の機能時期を示す。

以上までをまとめると、木製構造物の構築過程は次のようになり、大きく４段階の構築によるものと理解されよう。

構造物１　→　構造物３　→　構造物４・５・６　→　構造物２

また、溝内の２ヶ所で杭と板を組み合わせた「横矢板」が確認された（図 48・49）。いずれも 14 溝の肩部に構築されている。横にした板を立て、前面（溝側）に杭を打設している。背面にはブロック土を含む粘質土が充填されており、前面は自然埋没する（図 48 断面）。設置位置は 14 溝内でも水衝部にあたる場所であるため、護岸としての性格が考えられよう。

北側横矢板は、14 溝内部の木製構造物群の北側で検出された（図 48）。２枚の板が平面くの字に

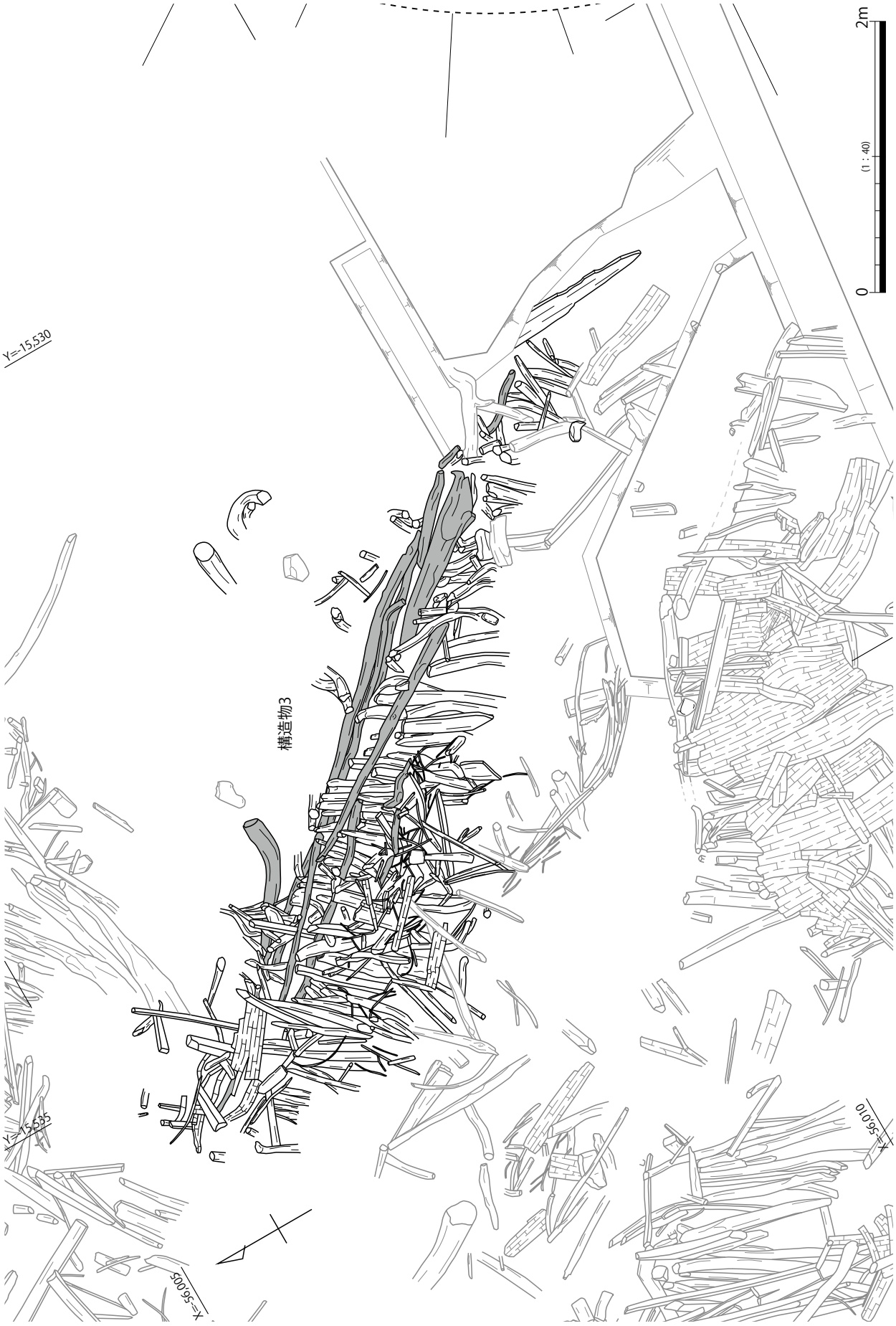


図 43　14 溝 構造物３検出状況図

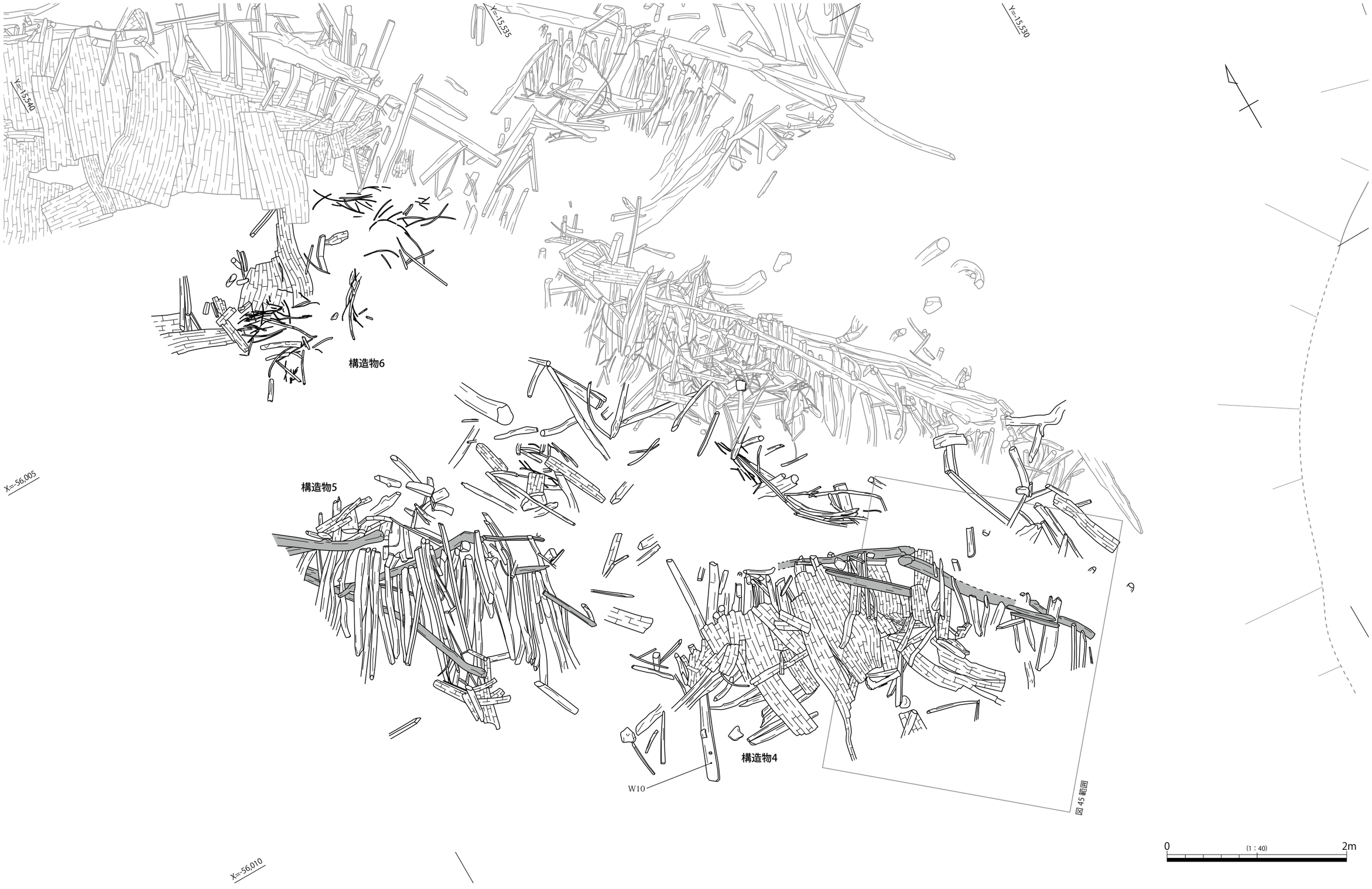
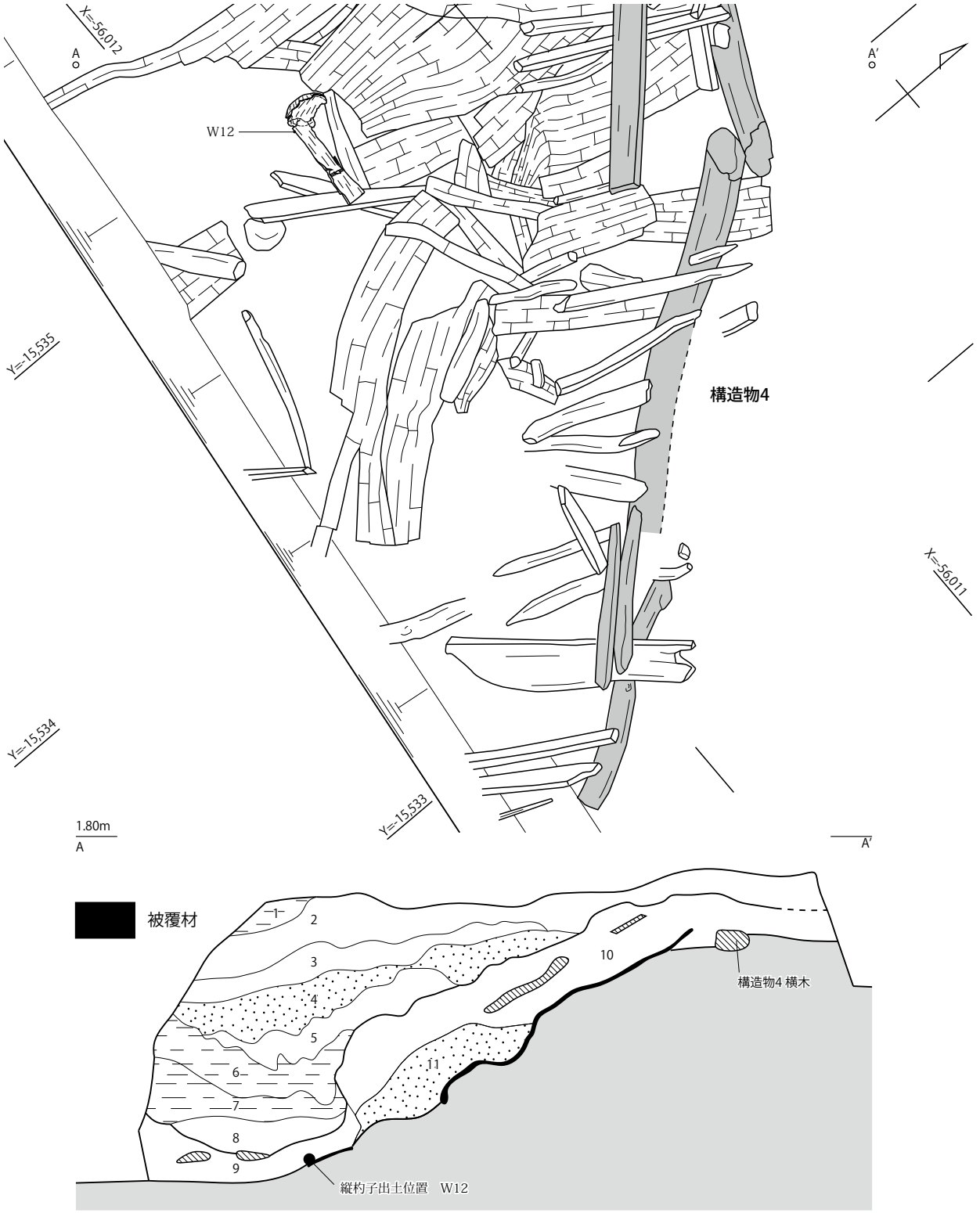


図 44　14 溝 構造物４・５・６検出状況図



1　7.5Y8/1 灰白色 シルト（微細な植物遺体を層状に含む）
2　10Y5/1 灰色 粘土～細砂（わずかにブロック土を含む）
3　7.5Y5/2 灰オリーブ色～ 5/1 灰色 シルト～細砂（ラミナあり）
4　5Y8/2 灰白色 粗砂と、10GY5/1 緑灰色 シルトの互層
5　10Y5/1 灰白色 粗砂～粘土と、10Y5/2 オリーブ灰色 シルト～粘土の混土
6　7.5GY5/1 緑灰色 シルト（部分的に粗砂を層状に含む）
7　10GY5/1 緑灰色 シルト～粘土と、7.5GY7/1 明緑灰色 細砂の互層（層底面に植物遺体が層状に堆積する）
8　10GY4/1 暗緑灰色 粘土～シルトと、7.5Y5/1 灰色
9　7.5Y5/2 灰オリーブ色 細砂～シルトと、5Y8/1 灰白色 細砂の混土
10　7.5Y5/1 灰色 シルトと、5Y6/1 灰色～ 8/1 灰白色 粗砂の混土
11　5Y7/3 浅黄色～ 8/1 灰白色 粗砂（ラミナあり）

図 45　14 溝 構造物 4　縦杓子出土状況図

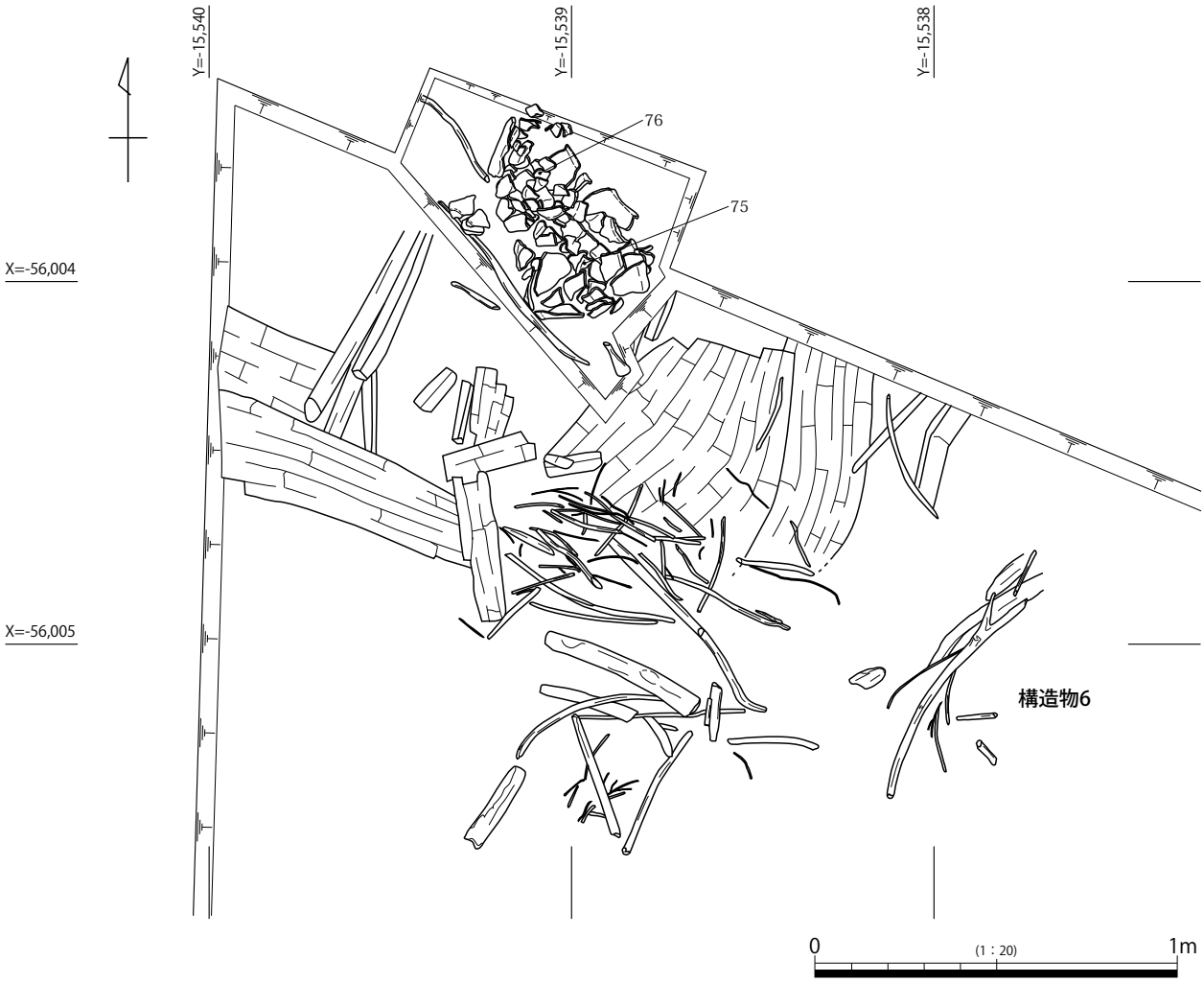


図 46　14 溝 構造物６　土器（75・76）・樹木枝出土状況平面図

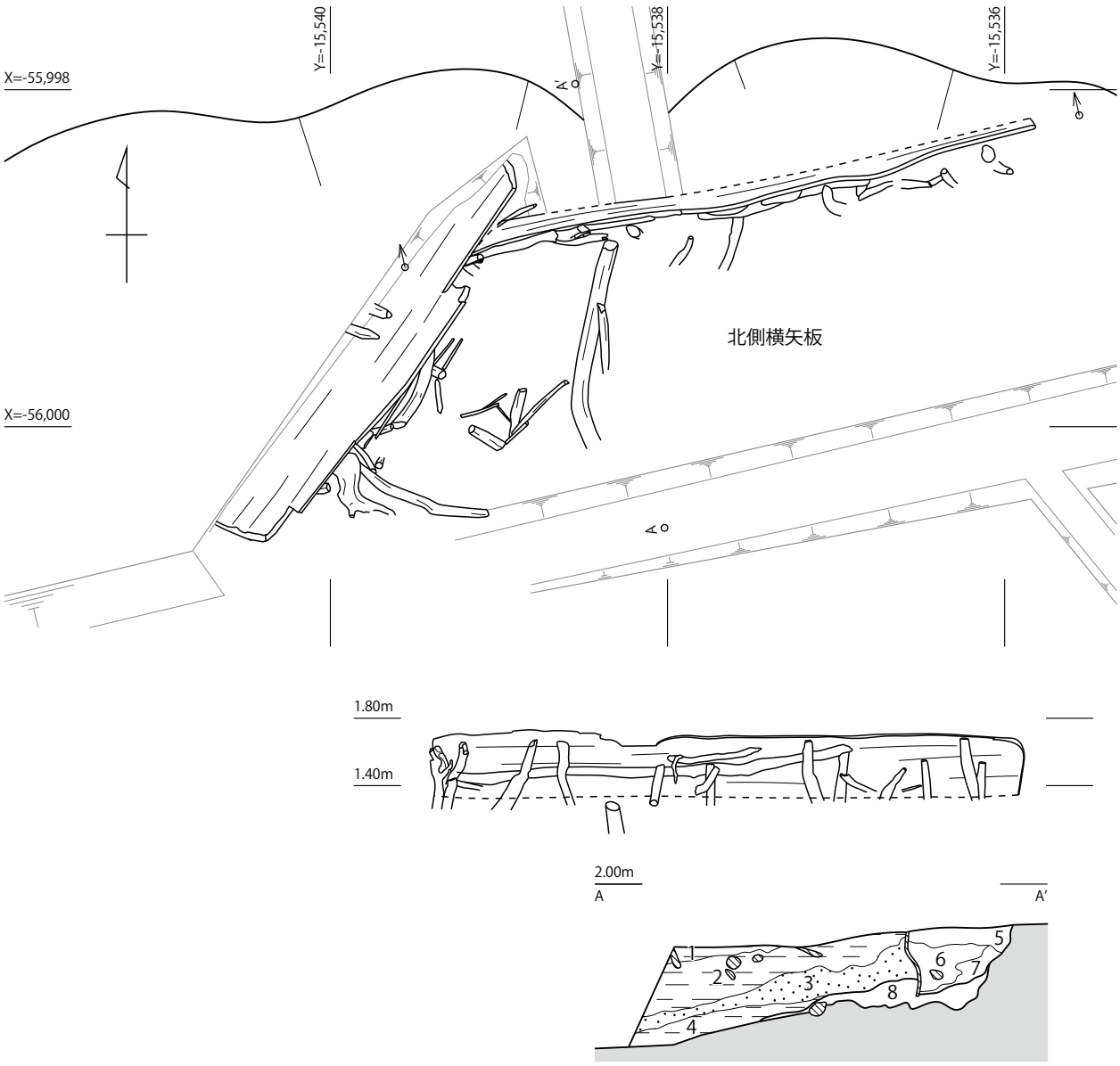
設置されている。西側の板は垂直ではなく、溝内部方向に倒れ込むような形で検出されている。これについては、上部が圃場整備時の撹乱を受けているため、検出状況も撹乱の結果と理解される。東側の板は、前面（溝側）に 10 本以上の杭を打設しており、杭と板の間に 2.5 m ほどの横木をわたす状況もみられる。この遺構の設置がどの木製構造物の段階になるのかは明らかでないが、前面に堆積する泥質の土の上に構造物２が構築されていることから、これに先行することは確実である。北側横矢板の構造から想定される護岸的性格を考えると、構造物４・５・６からなる土堤状の構造の背面にあることは不自然であり、構造物３が構造物２の下層構造物に延長する可能性を考えると、この段階の構築も考えにくい。構造物１と同時期か、それ以前の可能性がある構造物１背面の杭列に伴って設置された可能性を考えておきたい。

南側横矢板は、14 溝南側で検出された（図 49）。板の前に打設される杭は少なく、北側横矢板とは異なるが、板の長さは 3.5 m と、北側横矢板の西側の板に共通する。南側横矢板については北側横矢板と似た構造を持つことから、同時期に設置された可能性があるが、不明である。

これらの構造物については、解体することなく調査を終え、現地において養生した上で埋め戻しを行った。

以上のもの以外に 14 溝に伴う木製構造物として調査したものはないが、中央断ち割り内では、14

図 47　14 溝 構造物２検出状況図



14 溝埋土
1　7.5Y8/2 灰白色　極細砂～シルト（ラミナ顕著。微細な炭化物を層状に含む）
2　10Y4/2 ～ 5/2 オリーブ灰色　粘土～シルトと、5Y8/2 灰白色　極細砂の互層（植物遺体を層状に含む）
3　7.5Y5/2 灰オリーブ色　粘土～シルトと、5Y8/1 灰白色　細砂の互層（北方ほど砂質強い）
4　10Y4/2 オリーブ灰色　粘土～シルト（ラミナあり。灰白色細砂をわずかに挟在する）

裏込土
5　5Y5/2 灰オリーブ色　シルト～粗砂（わずかにブロック土を含む）
6　7.5Y5/2 灰オリーブ色　シルト～粗砂（5 より砂質少ない。灰白色シルトをブロック土状に含む）

横矢板設置時の盛土
7　10Y7/1 灰白色　粘土～粗砂と、7.5Y4/1 灰色　シルト～細砂の混土
8　10Y7/1 灰白色　細砂混じり粘土と、5Y5/1 灰色　シルト～細砂と、5Y8/3 淡黄色　細砂の混土

0　(1：40)　2m

図 48　14 溝 北側横矢板検出状況図

溝の東肩付近に木製構造物の可能性がある木材を確認している（図 16 参照）。14 溝の未調査部分に未確認の木製構造物が埋没している可能性は高いと言えよう。また、14 溝東肩付近で舟の可能性が高い大型の木製品が出土した（図 52）。上部は圃場整備時に削られており、本来の形状と出土状況は明らかでないが、大型木製品を転用した何らかの構造物であった可能性がある。

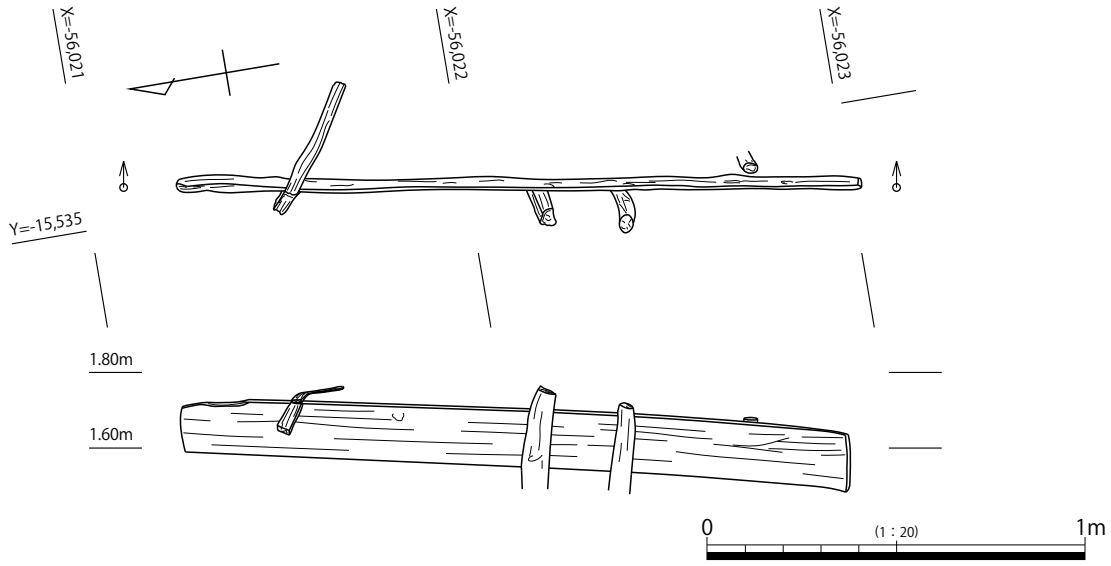


図 49　14 溝 南側横矢板検出状況図

＜遺物の出土状況＞

遺物については、集中する場所が２ヶ所にある。木製構造物群周辺と、調査区北端付近である。ただし、完形に近い土器の出土は構造物２・６付近に限られる。木製構造物群に使用される木材には、建築部材などとみられる転用材が含まれており、確実に製品と考えられる数点を取上げた。ほかに、鍬先未成品が３点出土している（W13 ～ W15）。調査当初は、出土地点南側の 35 溝の延長からの出土を考えており、35 溝出土遺物として取り扱ったが、その後 35 溝の平面プランを明瞭に確認できなかったことから、14 溝の肩部に埋没していたものと評価を変更した。鍬は３点とも柄孔が開けられていない未製品である。14 溝肩部のシルト質の堆積層の中から、３点を揃えて立てたような形で出土した（図 51）。鍬を洗浄してみると、３点ともに柄を取り付ける舟状突起の左側に、直径約 1.5 cm の穿孔が確認された。出土状況では、この孔の位置が揃っていたことから、孔に紐などを通して未製品を束ね､溝内に保管していたものと考えられる。木製品の製作工程を考える上で重要な発見である。

調査区北端付近では、木材と土器の細片が多く出土した。木材には構築された状況は見受けられない（図 50）。

土器は比較的多く出土しているが、細片ばかりで完形に復元できるものはない。弥生時代前期の遺物が含まれるが、直下にある 33 溝や 40 溝からの混入が考えられよう。

後述する出土土器の時期から見て、14 溝は弥生時代中期後葉に埋没したと考えられる。

出土遺物

14 溝は、上層、下層、最下層に分けて遺物の取り上げを行った。以下、層位ごとに抽出・図化した資料について報告する。

＜14溝上層出土土器＞（図53～55、PL.52～55・57・58）

出土土器は各層位の中で最多で、縄文時代後期から弥生時代中期後葉までの土器を含む。図化した土器の内訳は、縄文土器 10 点、弥生土器 44 点である。

55 は深鉢の口縁部突起で、多数の穿孔や複雑な造形が特徴的である。縄文時代後期前葉から中葉にかけてみられる福田ＫⅡ式から布勢式に位置づけられるものと考えられるが、本遺跡では同時期

図 50　14 溝北端 遺物出土状況図

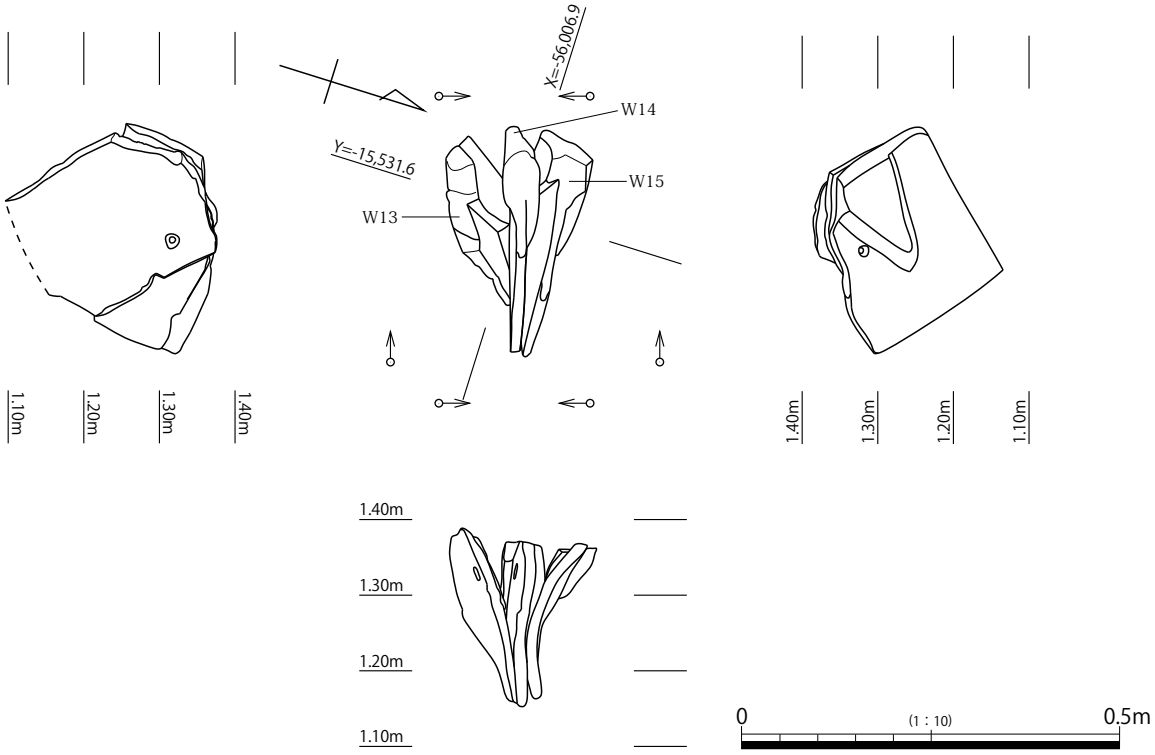


図 51　14 溝 鍬 (W13 ～ 15) 出土状況 平・立面図

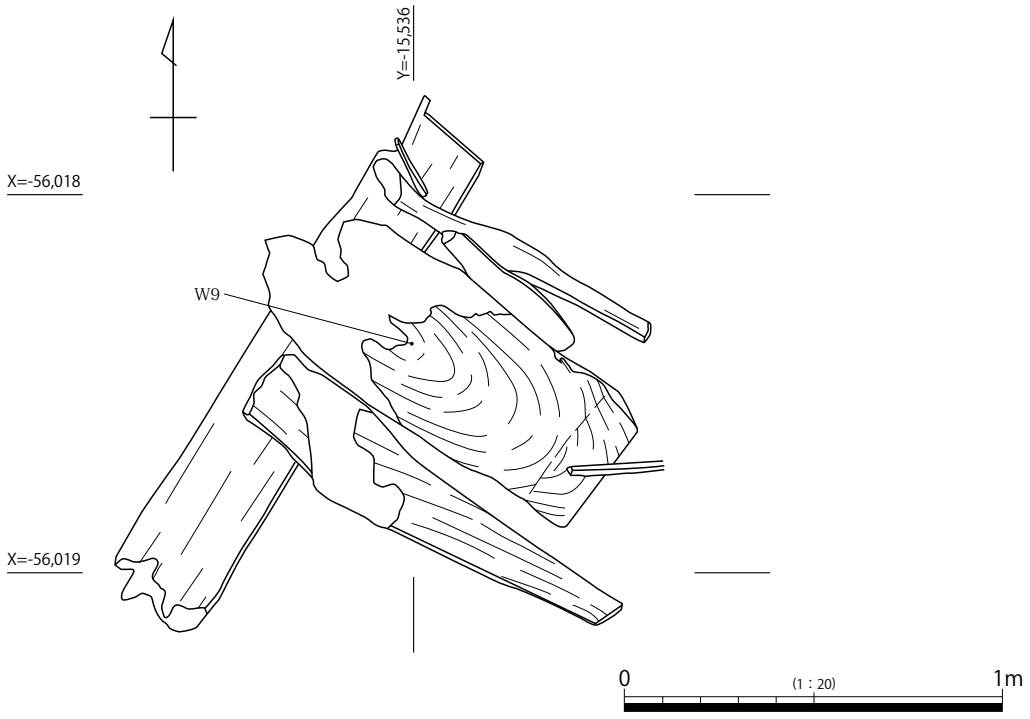


図 52　14 溝上層 舟出土状況図

の資料があまりみられないことから、現時点では流入してきたものと考えたい。56・57 は粗製の深鉢である。56 は内湾、57 は外反する口縁部をもち、内外面をナデと指頭圧痕で調整する。58 ～ 63 は突帯文土器である。58 ～ 62 は口縁部片で、直立、またはやや外傾して立ち上がる。58 ～ 60 は、口縁端部に被さるように断面三角形の突帯が、61 は口縁端部に接して垂れ下がり突帯が貼り付けられ、62 のみ口縁端部から少し下がった位置に小ぶりな突帯が貼り付けられる。いずれも刻目突帯である。器面調整はナデと指押さえである。63 は丸底の底部で、内外面に粗いナデの痕跡が観察できる。また、64 は壺の口縁部と考えられる。広口の口縁部が外反して立ち上がり、口縁端部内面に１条の沈線を引く。

弥生土器には、甕、壺、甕または壺の底部、鉢、そして高坏がある。

甕は、弥生時代前期から中期まで帰属時期に幅があり、中期中葉から後葉の土器が中心を占める。65 ～ 67 は弥生時代前期後半の甕である。いずれも口縁部がく字状に短く外反し、66・67 の頸部には数条の沈線が巡る。また、66 は口縁部に V 字状の刻目が入る。内外面はハケメ、ナデで調整する。68 は中期前葉の土器で、頸部を持たない。口縁部には多条沈線が巡り、口縁端部と沈線文帯の下に三角形の刻目が施される。内外面はナデ調整で仕上げる。続く中期中葉の甕はバリエーションがあり、69 ～ 74・78・79 のように口縁が短くく字状に屈曲するものと、75 ～ 77、81 ～ 83 のように口縁端部が上下に拡張して凹線が引かれるものに大きく分けられる。前者は中期中葉の前半期、後者は後半期に帰属するものである。前者の土器は全形をうかがえるものは出土していないが、胴部上半まで残る資料からは細身の倒卵形を呈する傾向が強い。口縁部はナデ調整のみであるが、70・71・79 の口縁端部には沈線が巡る。胴部の内外面は総じてハケメと指押さえによる調整で、78 の内面にはケズリの痕跡がみられる。また、69 の胴部外面には二枚貝腹縁によると思われる刺突文が巡る。一方、後者の甕は全形を復元できた資料が３点ある（75 ～ 77）。いずれも外面をハケメ、ミガキ、内面をハケメ、ケズリ、指押さえで調整する。82・83 は口縁部のみの破片であるが、口縁端部に縦方向の刻みと円形浮文の貼り付けがみられる。以上のほか、胴部片が４点出土している。84・87 は胴部の大半が残る資料で、外面をハケメとミガキ、内面をケズリとハケメで調整する。85・86 は胴部上半の小片で、85 には刺突文、86 には波状文が施される。

壺には、弥生時代前期前葉から中期中葉までの資料がある。前期前葉に位置づけられるものは２点で（88・89）、いずれも口縁に向かって器壁がすぼまり、口縁端部がわずかに外反する縄文晩期浅鉢の系譜を引く壺である。外面をミガキ、内面をハケメとミガキによって丁寧に仕上げている。90 は中期前半に帰属し、細い頸部と大きく反り返った口縁部が特徴的である。また、91 ～ 93 は中期中葉の広口壺の口縁部である。口縁部が水平近くまで外反し、端部が上下に拡張する。その端部外面には、格子状文（91・92）、刻目と円形浮文（93）が施される。なお、91 の頸部外面には幅広の凹線と刻目突帯が、93 の口縁部上面には波状文と巻貝の押圧文様も施されている。94 は中期中葉の短頸壺である。口縁部に段が形成されている。外面をハケメとミガキ、内面をケズリとハケメ、指押さえで調整する。全形は残らないが、球形に近い胴部を持つことが分かる。95・96 は同一個体の可能性がある壺の胴部および底部である。頸部が長く、口縁部が外反して立ち上がる広口壺で、内外面をミガキで丁寧に調整している。97 は小片であるが、壺の胴部下半の破片である。断面 M 字の突帯が貼りつけられ、外面を丁寧に磨く。弥生時代前期のものと考えられる。98 は小型壺の脚台と考えられる土器である。内外面ともに細かなミガキが観察できる。

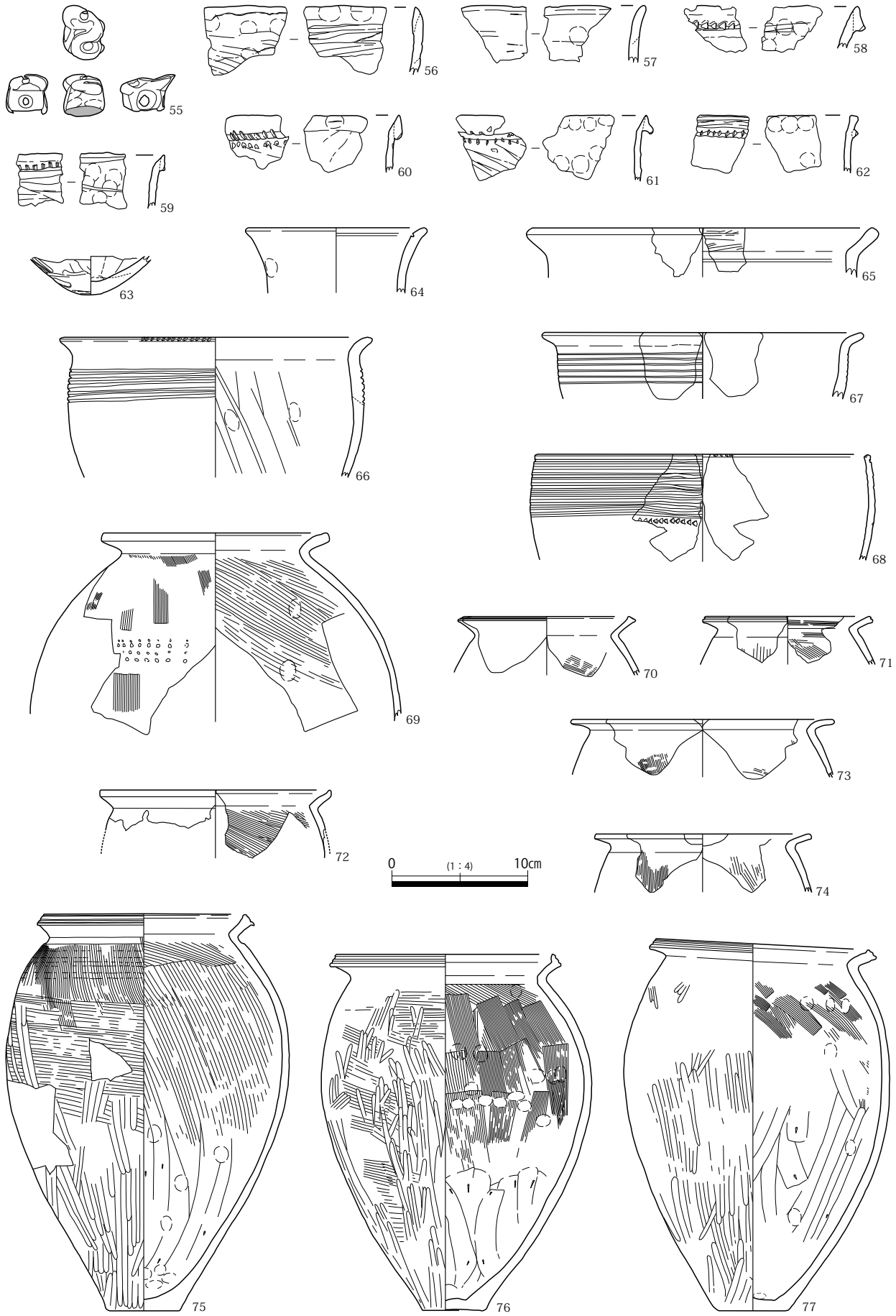


図 53　14 溝上層 出土土器（1）

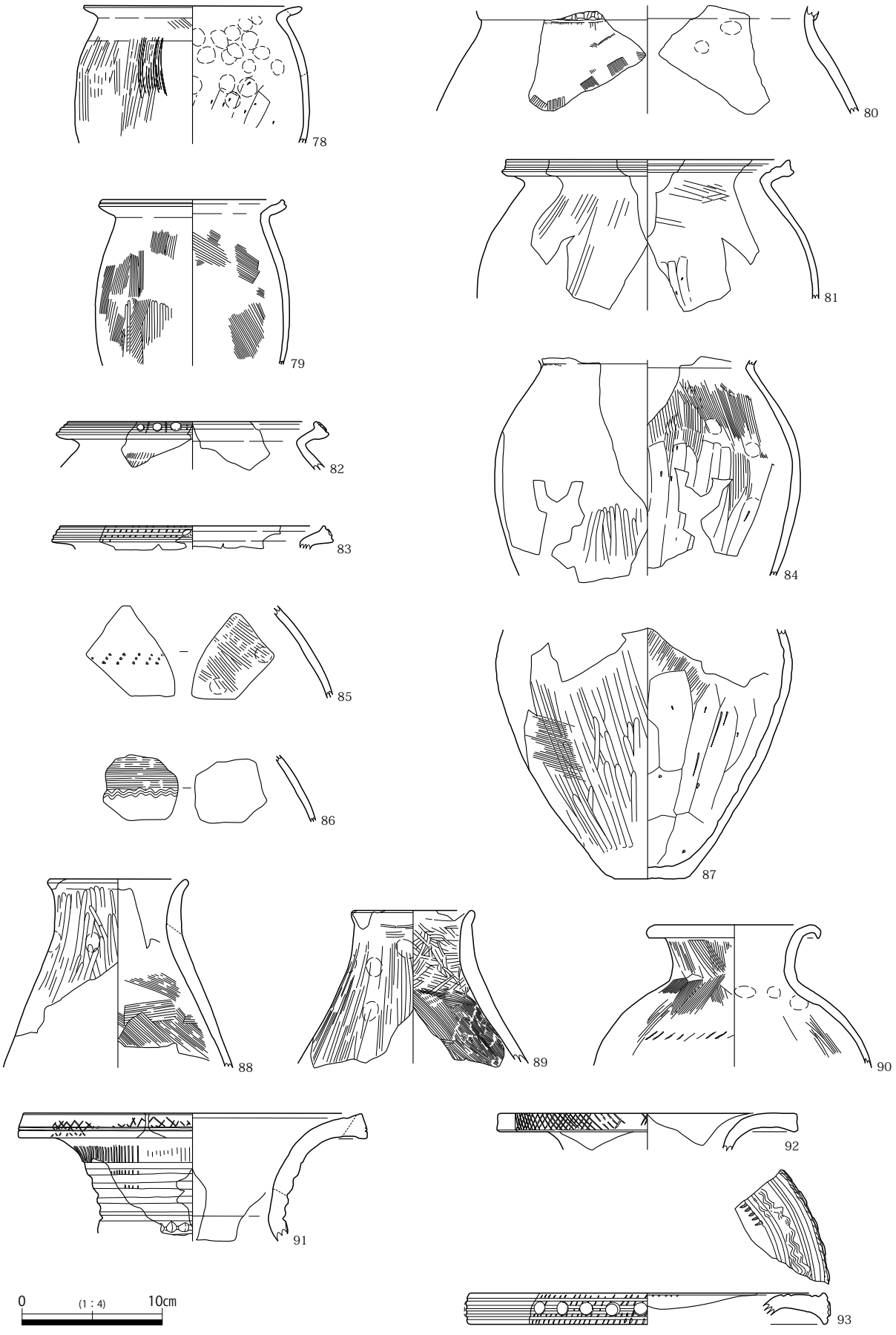


図 54　14 溝上層 出土土器（２）

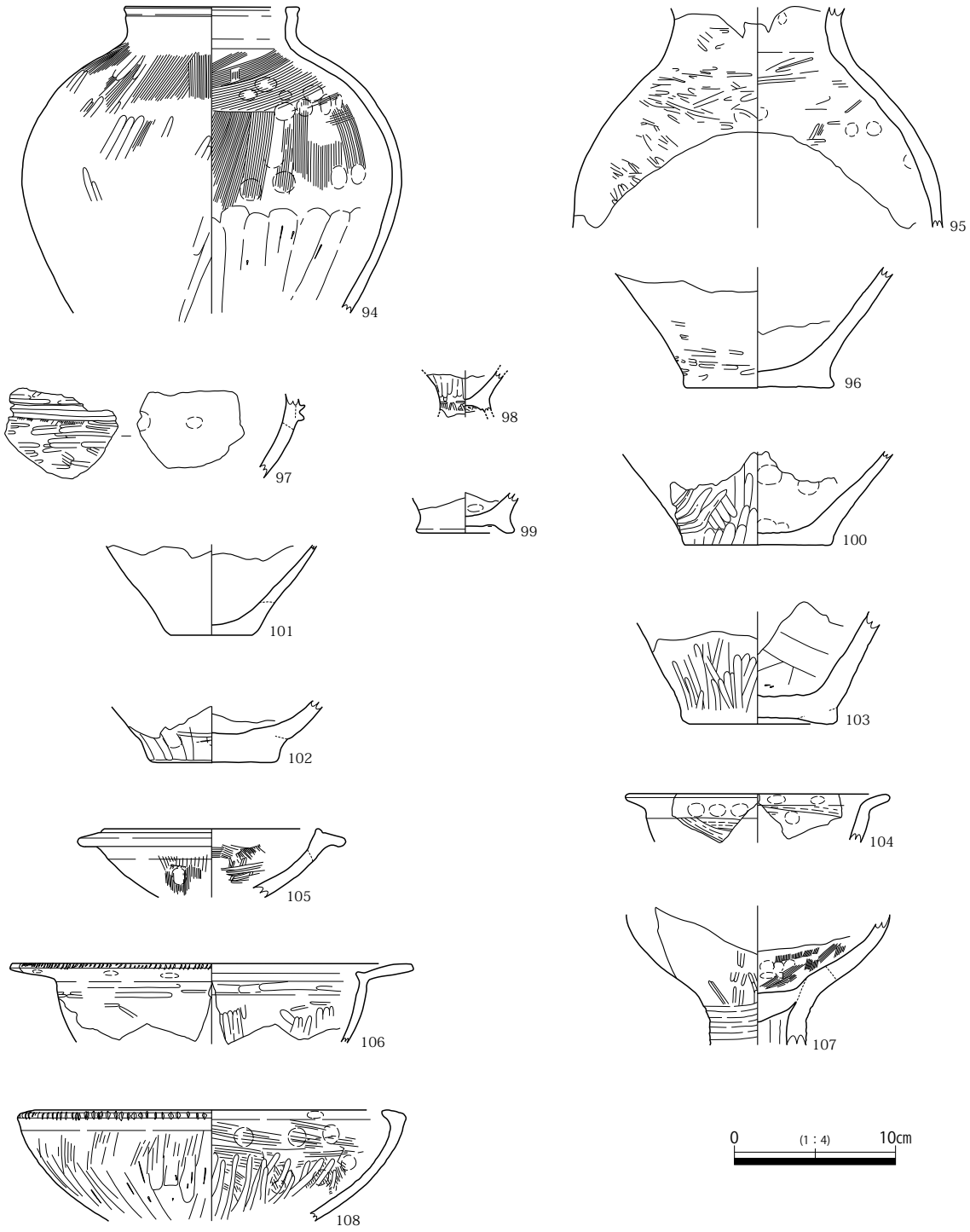


図 55　14 溝上層 出土土器（３）

底部の資料は５点あり、うち３点が平底（100 ～ 102）、２点が上げ底（99・103）を呈する。全形はうかがえないが、大型で安定感のあるつくりのものが多い。器面調整としては、外面にナデやミガキ、内面にナデ、ケズリ、指頭圧痕が観察できる。101 の外面には、工具で抉ったような痕跡がみられる。

104 は鉢と考えられる。底部を欠くため判断が難しいが、高坏の可能性もある。く字状に外反する口縁部を持ち、内外面ともにハケメと指頭圧痕で調整する。

出土した高坏はすべて坏部片である（105 ～ 108）。105 は小型の坏部で、口縁部が外側に大きく突

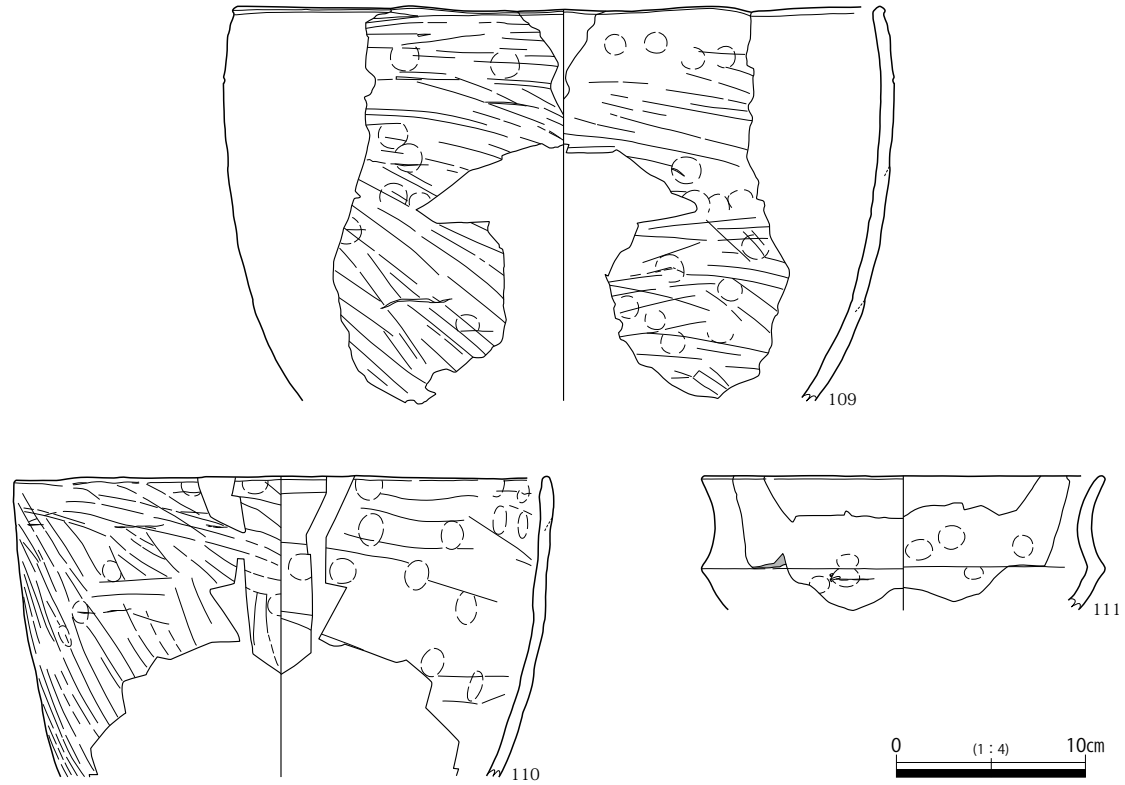


図 56　14 溝下層 出土土器

出し、下方向に垂れ下がる。器面調整はナデ、ハケメ、ミガキである。105 と類似した形態を呈する 106 は大型の高坏で、外側に水平方向に突出した口縁端部を刻む。中期中葉に位置づけられる資料である。また 108 も中期中葉に特徴的な高坏で、椀状の坏部と内側に突出した口縁端部をもつ。この資料も、口縁端部の外側に刻目が施される。器面調整は、外面をケズリとハケメ、内面をハケメ、ミガキと指押さえで整える。107 は坏部下半と脚部を一部残す資料である。坏部は深めの椀形で、脚部は太く、坏部との境目に４条前後の幅広の凹線が巡る。

＜14溝下層出土土器＞（図56、PL.58）

下層からは、縄文土器３点を抽出した。109・110 は粗製の深鉢で、109 はやや内湾ぎみに、110 はわずかに外傾して器壁が立ち上がる。内外面ともに擦痕の残るナデ調整と指押さえによって成形する。111 は縄文時代晩期後半の浅鉢である。頸部が強く外反し、屈曲部に明瞭な稜をもつ。内外面ともにナデと指押さえによって丁寧に成形している。

＜14溝最下層出土土器＞（図57、PL.56・58）

最下層に包含されていた土器には、縄文時代晩期から弥生時代中期中葉の特徴を持つものがある。その中から、縄文土器４点、弥生土器６点を抽出し、図化した。

112 は縄文時代晩期の浅鉢口縁部である。口縁端部が外反して立ち上がり、端部内面に１条の沈線が巡る。また、口縁がゆるやかな波状を呈する。113・114 は突帯文土器の深鉢である。いずれも口縁端部に接するように、断面三角形の無刻目突帯が貼り付けられる。内外面は擦痕の残るナデ、ケズリ、および指押さえによって仕上げられる。115 は晩期末の大型の浅鉢で、頸部が内傾して立ち上がり、

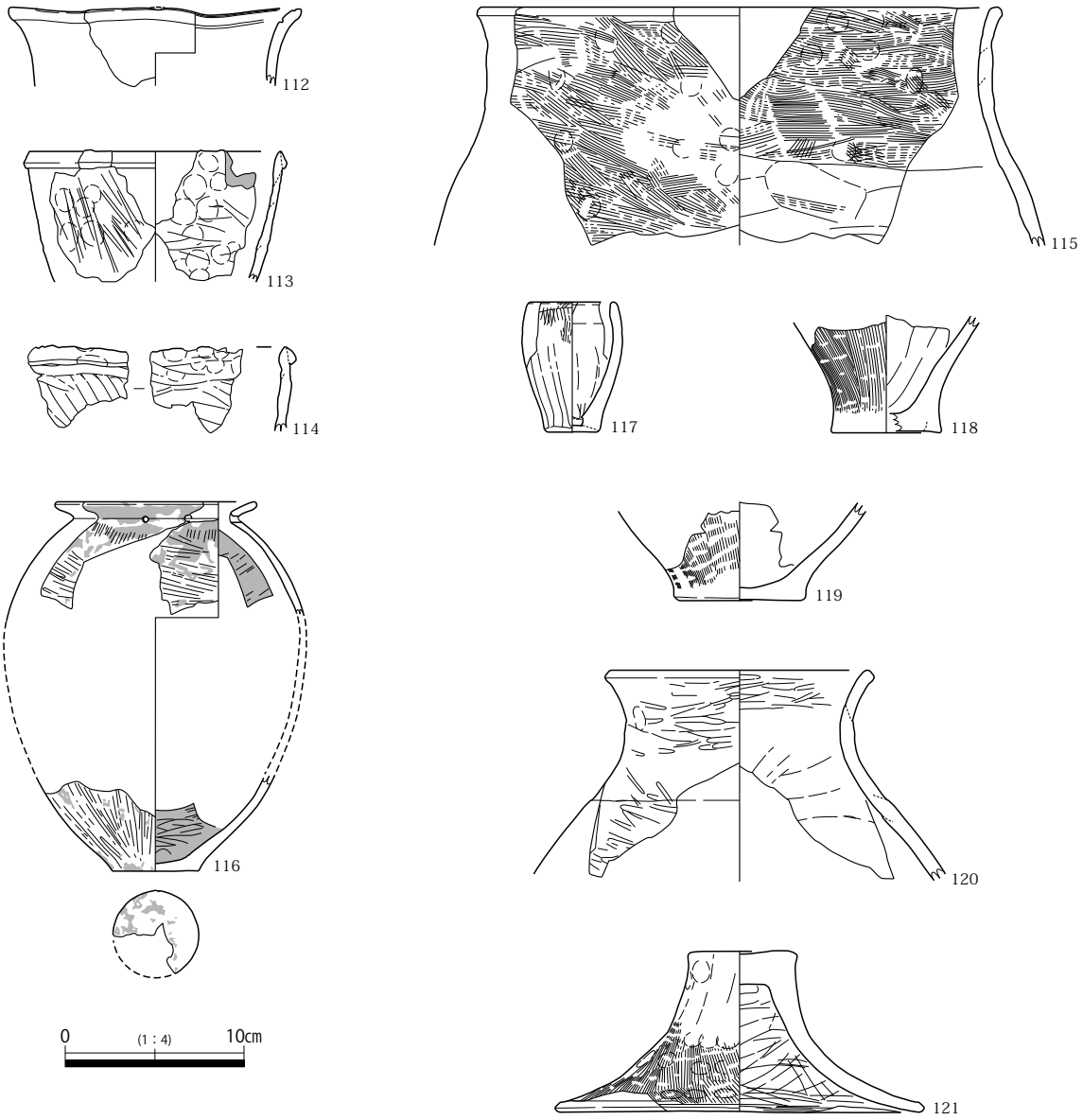


図57　14溝最下層 出土土器

口縁端部がわずかに外反する。内外面ともに二枚貝条痕が密に施され、内面の頸部以下にはケズリを施した様子が観察できる。

弥生土器には、甕、壺、甕または壺の底部、蓋、およびミニチュア土器がある。

116は中期中葉の甕で、内外面に黒漆が塗布されている。出土した破片から復元できたのは胴部上半と底部のみで、胴部下半を欠くものの、同一個体であると判断し、図面上で復元した。器面全体にハケメ、ミガキが施され、頸部には2カ所の円孔が穿たれる。117はミニチュア土器の甕である。頸部は屈曲しない。内外面をナデで整えるが、外面の口縁部にはハケメの痕跡も残る。

120は前期前葉の壺である。遠賀川式土器を特徴づける頸部の段がみられ、口縁部が強く外反して立ち上がる。また、外面と口縁部内面を丁寧なミガキで調整し、頸部以下の内面にナデを施す。

118・119は、甕または壺の底部である。118は器壁が直立ぎみに立ち上がる細身の形状、119はやや膨らんで立ち上がる形状を呈する。いずれも外面に縦方向のハケメ、内面にナデを施す。

121は前期前半に帰属する蓋である。持ち手部分が太く、上面は平坦につくられている。外面調整

は全面にハケメが施されていたものと考えられるが、上半は風化によりハケメを確認できない。内面は板状工具によるナデで、擦痕状の痕跡が残る。

＜石器＞（図58、PL.59）

石器は表４に示したとおり、楔形石器、石錘、砥石などが少量出土した。

Ｓ７～S11 は 14 溝上層から出土した石器である。Ｓ７はサヌカイト製の楔形石器で、上下縁に両極打撃による剥離痕が集中して見られるほか、上縁と右側縁に潰れが見られる。Ｓ８・Ｓ９は砥石で、Ｓ８は細粒花崗岩を、Ｓ９は緑色凝灰岩を素材としている。S10 は安山岩製の敲石。S11 は４か所に打ち欠きが施された石錘である。

＜木製品＞（図59～63、PL.59～61）

Ｗ５～W12 は 14 溝上層から出土した木製品である。Ｗ５は田下駄で、左の折損面にも孔の痕跡が残る。スギの板目材を素材としている。Ｗ６は盾の破片である。モミ属の板目材を素材としている。Ｗ７はスギの分割材、Ｗ８は矢板である。Ｗ９は舟の破

表４　14 溝 出土石器石材別組成表

	楔形石器	石錘	敲石	砥石	被熱礫	計
安山岩	1		2		1	4
流紋岩		1				1
花崗岩				1		1
凝灰岩				1		1
計	1	1	2	2	1	7

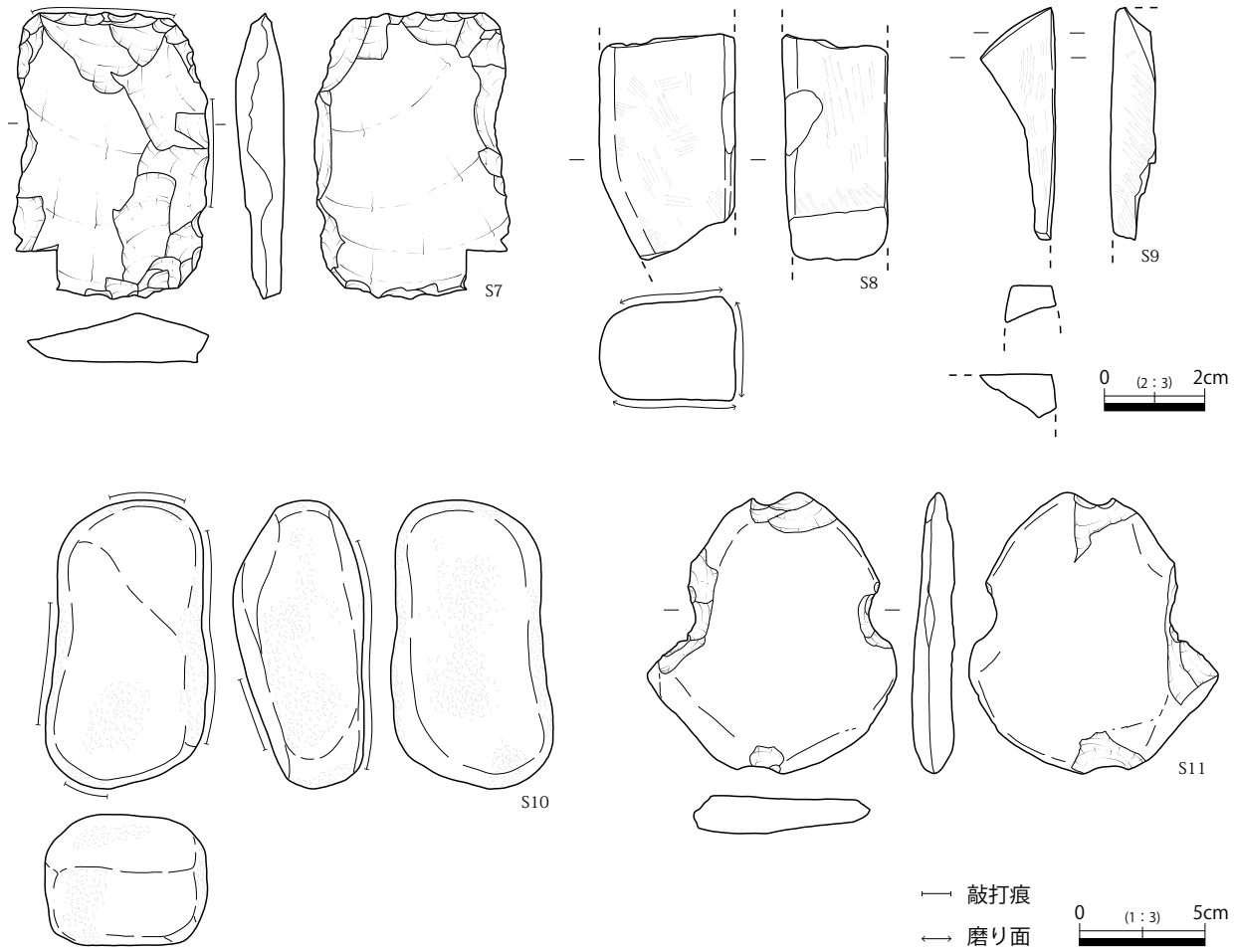


図 58　14 溝 出土石器

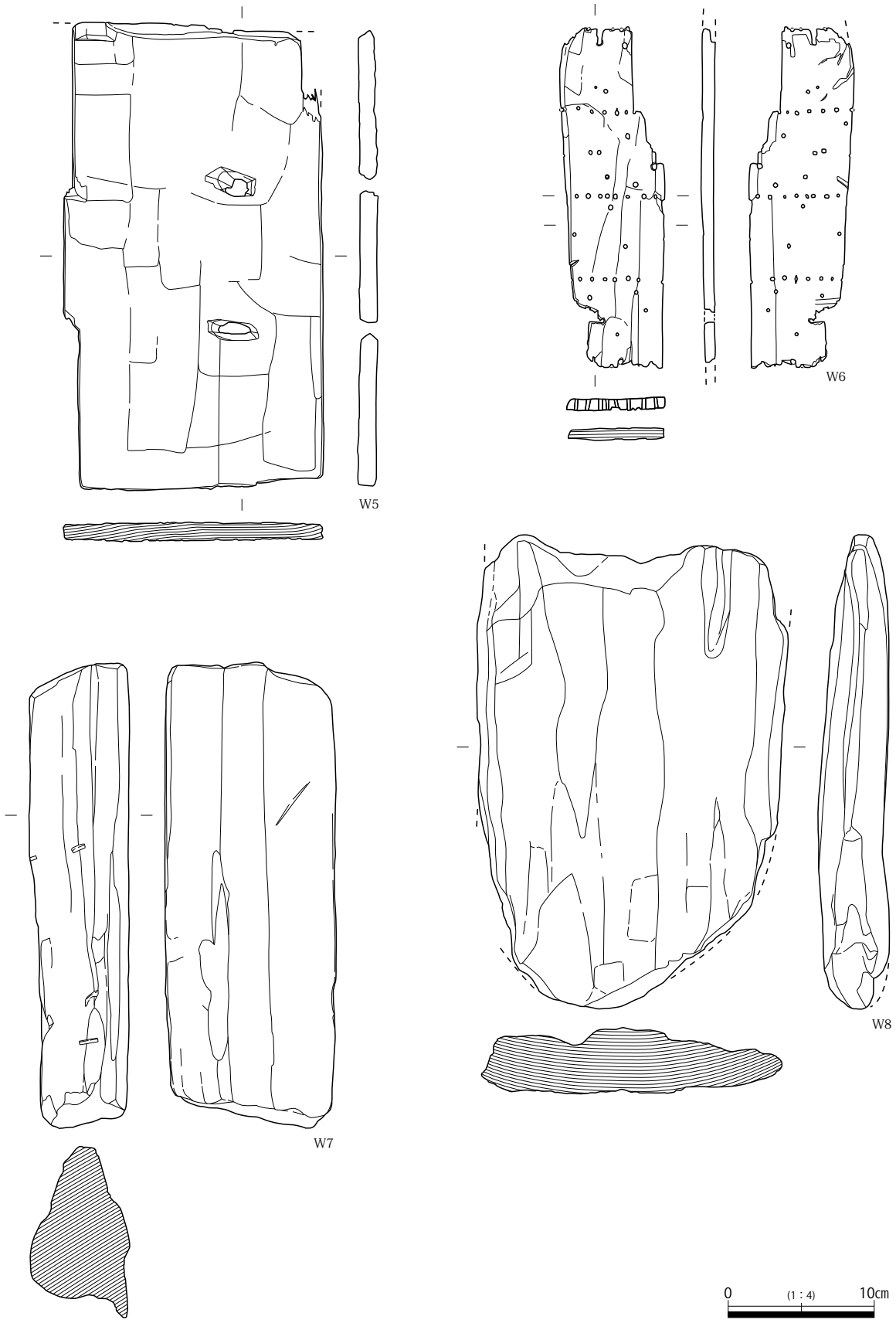


図 59　14 溝 出土木製品（1）

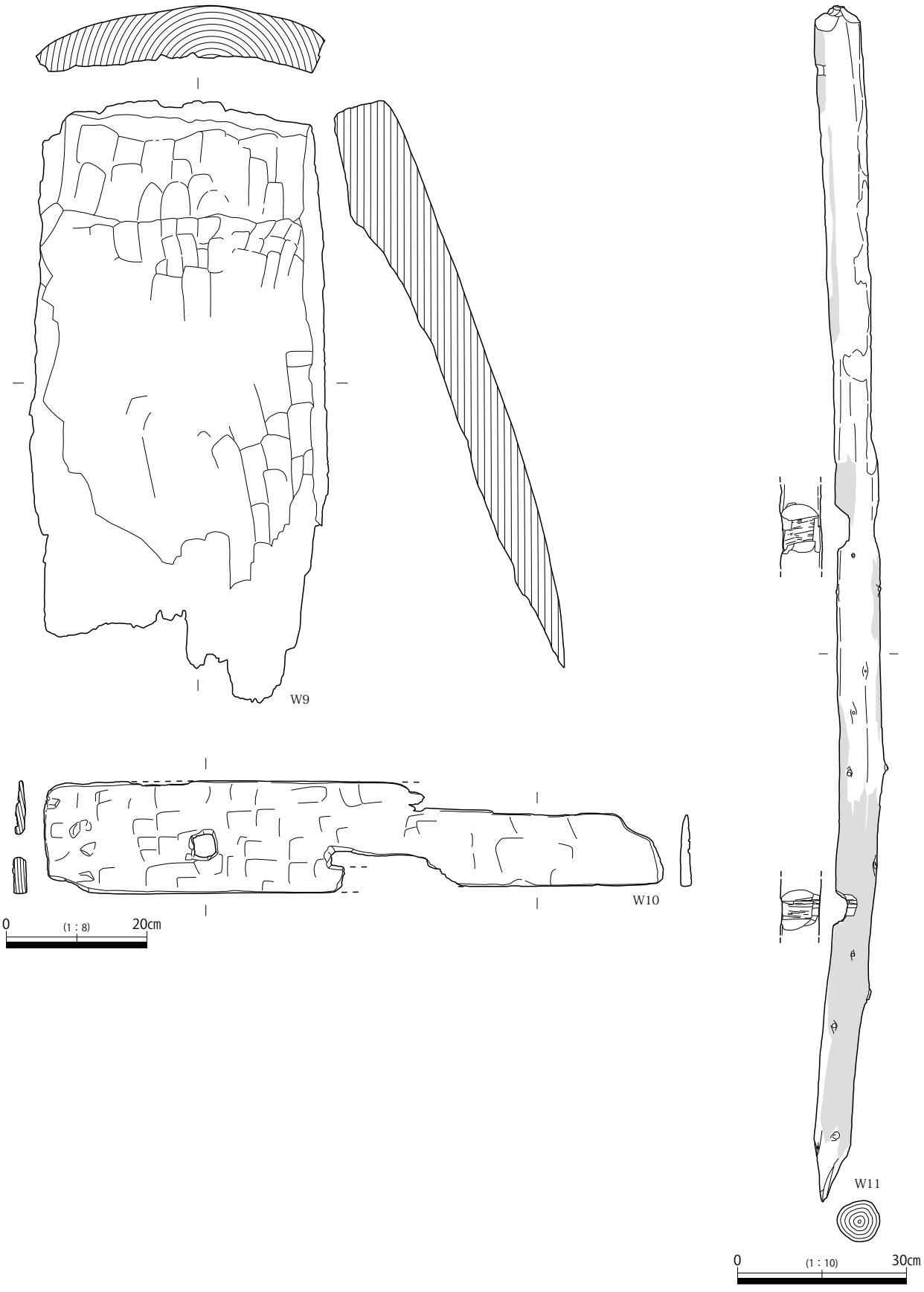


図 60　14 溝 出土木製品（２）

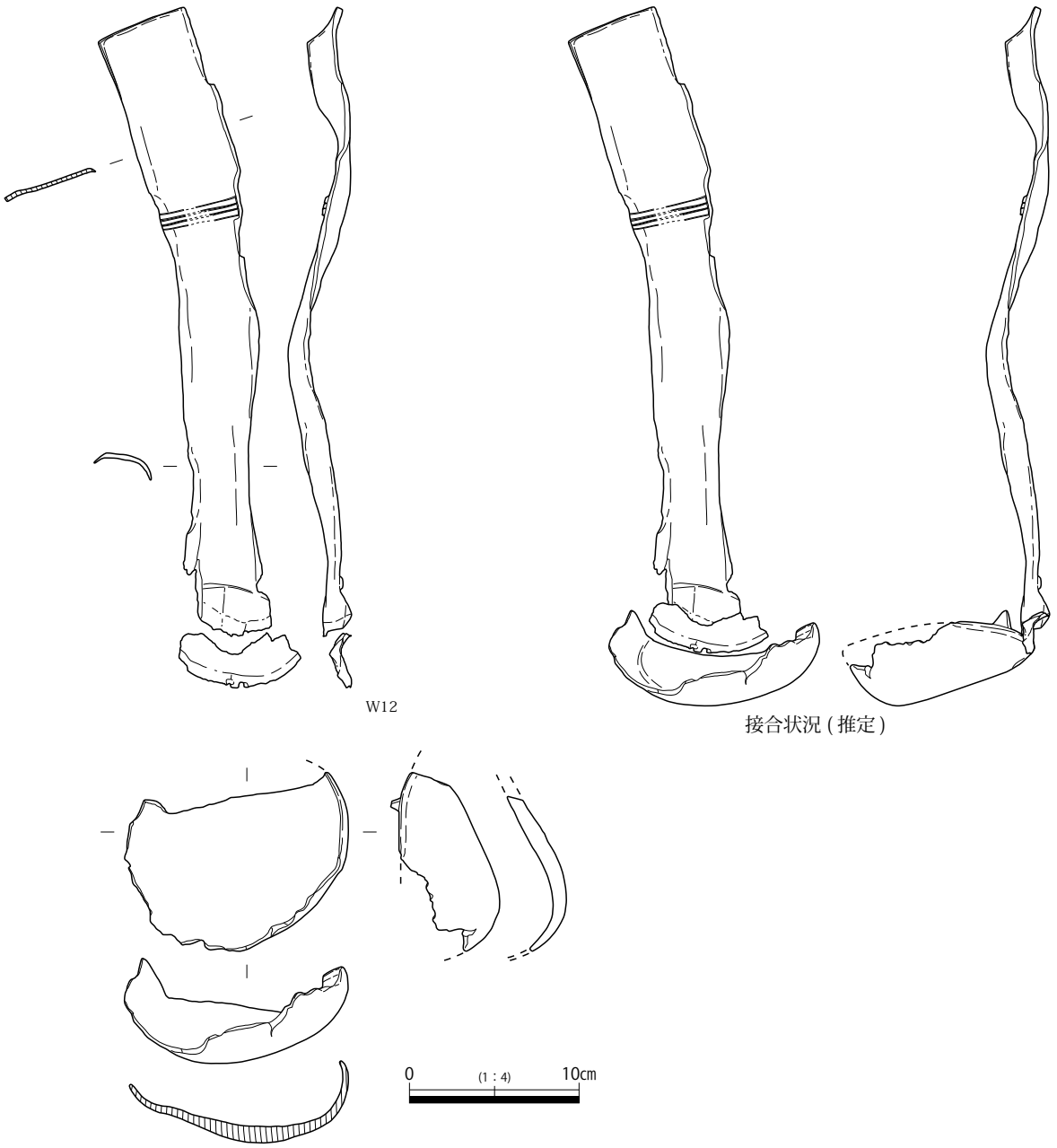


図 61　14 溝 出土木製品（３）

片で、３側面は破損面であるが、図の上端はほぼ欠損していないと考えられる。樹種はモミ属である。W10 は板で、表面にはハツリ痕が見られ、孔がうがたれている。建築部材で、厚みから見て壁板の可能性が高い。W11 は樹皮の残る芯持ち丸太材を用いた杭で、側面に２ヶ所の抉り込みがある。W12 は縦杓子である。柄の付け根が割れて出土したうえ、取り上げ後に変形してしまったため、柄と身のなす角度は正確には不明であるが、身の口縁と柄が直角に近い状態になるものと推定した。ヤマグワを素材としている。

W13 ～ W15 は先述のように束ねられて出土した直柄平鍬の未成品である。いずれも柄の孔が空けられていない状態で、舟状突起の横に穿孔が施されている。樹種はアカガシ亜属と推定される。

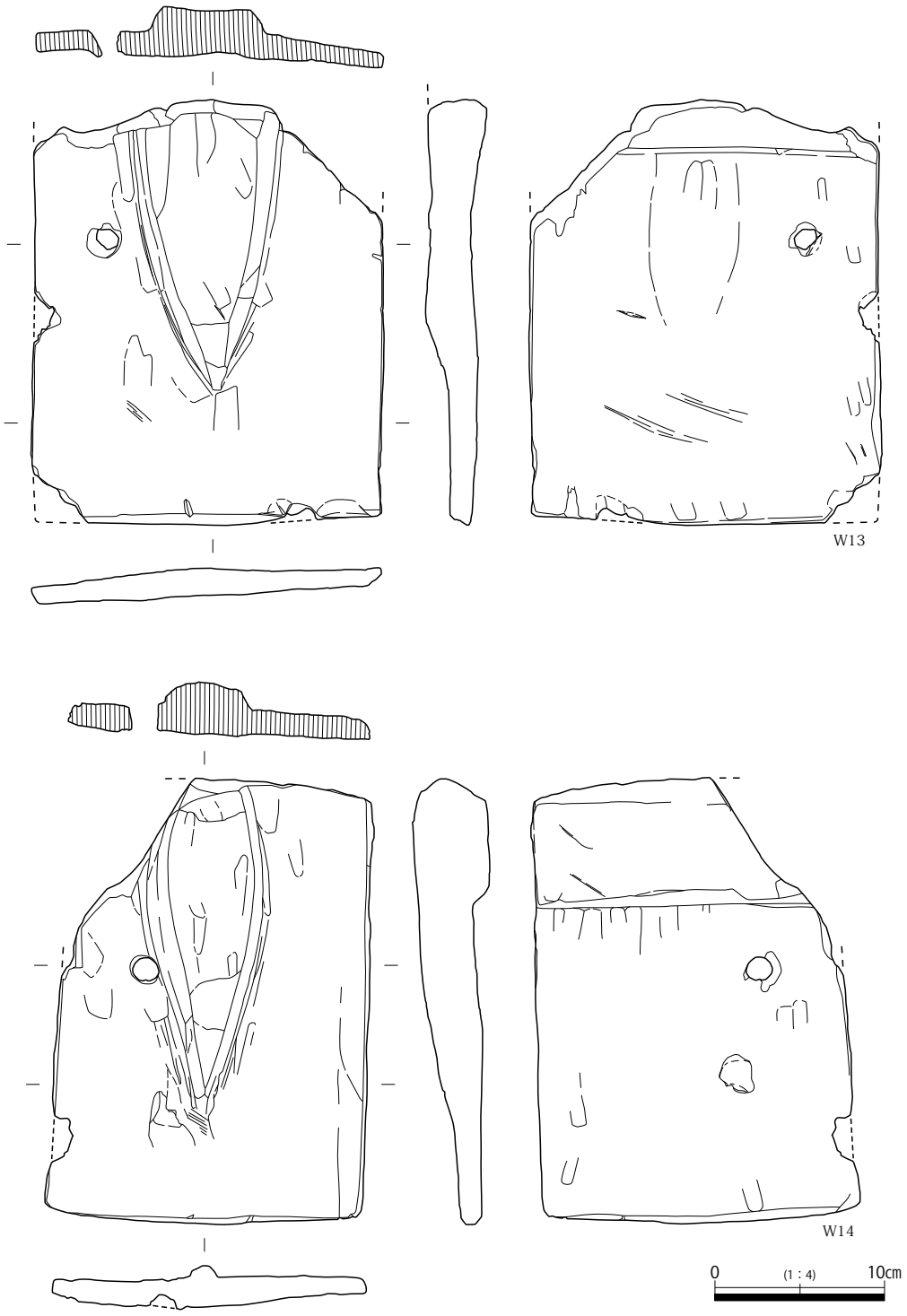


図 62　14 溝 出土木製品（４）

（２）34･35 溝、37 土坑

遺構（図 64・67、PL.15）

34・35 溝と 37 土坑は、14 溝の埋没過程の中で確認される遺構で、中期第１段階に帰属する。

34・35 溝は 14 溝右岸で確認される小溝で平面プランは明確に確認できなかった。

37 土坑は、14 溝左岸で確認された長径約 0.9 ｍの円形の土坑である。構造物５の前面に検出され、14 溝内の堆積物で埋没していた。

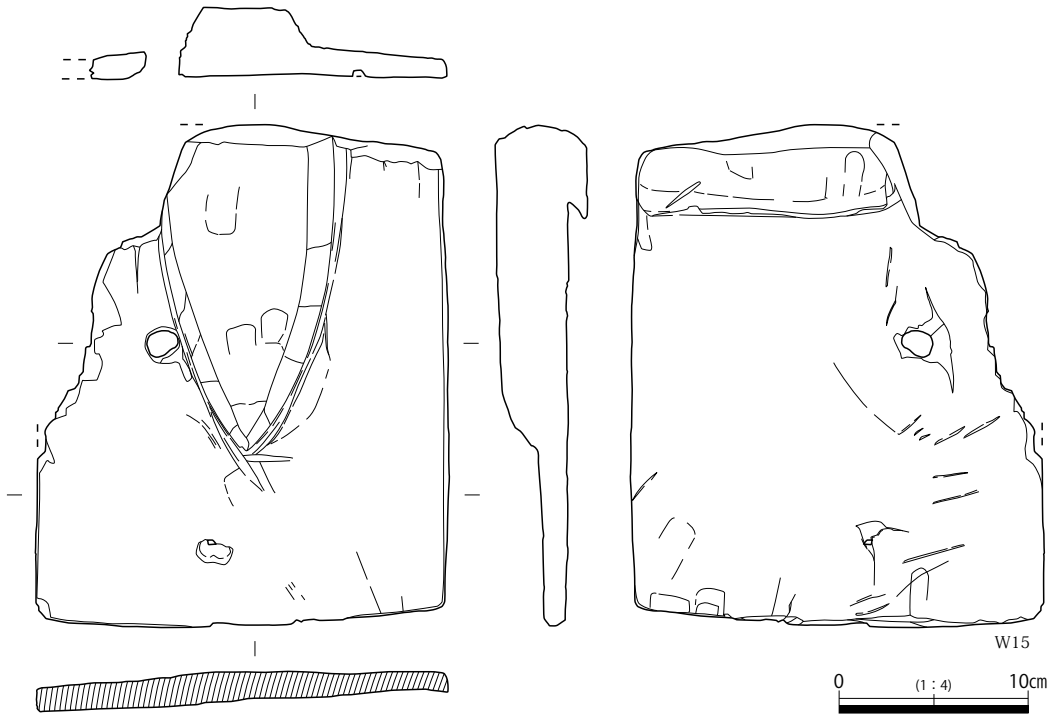
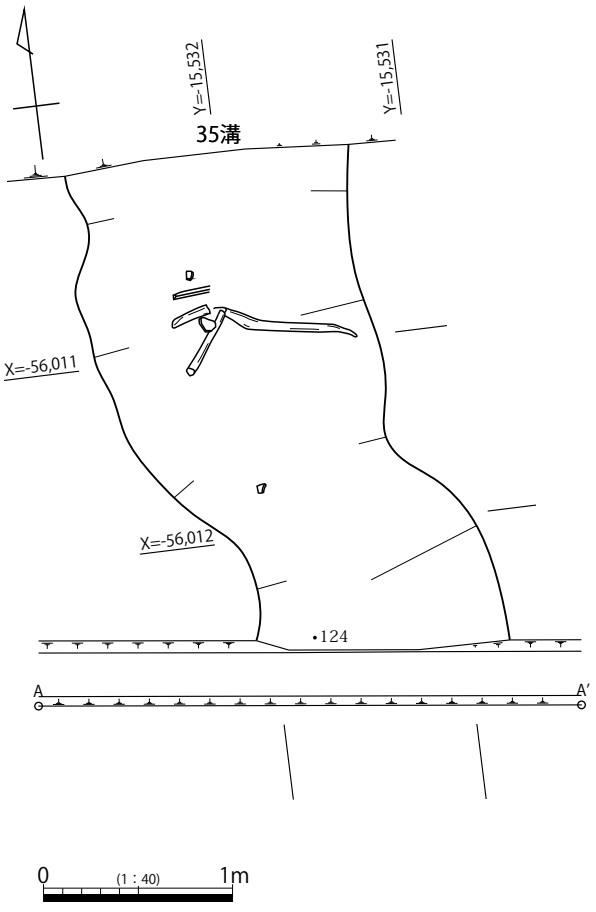
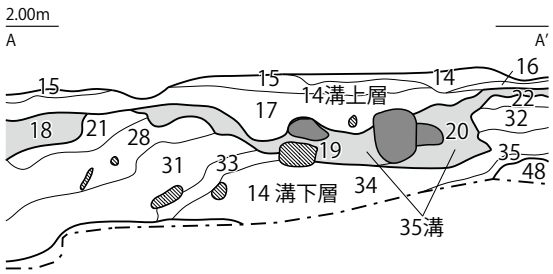


図 63　14 溝 出土木製品（5）





14 溝上層
- 14　10Y6/1 灰色 粗砂混じりシルト（炭化物を含む。部分的にラミナあり）
- 15　7.5Y7/1 灰白色 シルト（微細な植物遺体を層状に含む）
- 16　10G4/1 暗緑灰色 粗砂～粘土
- 17　10Y4/1 灰色 粘土～シルト（ラミナあり）

35 溝
- 18　7.5GY5/1 緑灰色 粘土～シルトと、5Y8/3 淡黄色 粗砂～細砂の互層
- 19　5Y8/1 ～ 8/2 灰白色 粗砂と、10Y5/1 灰色 シルトの互層
- 20　10GY5/1 緑灰色 粗砂～シルトと、5GY7/1 明オリーブ灰色 粘土～粗砂の混土

14 溝下層
- 21　10GY5/1 緑灰色 粗砂～粘土
- 22　10G4/1 暗緑灰色 粗砂～粘土（21 と対応）
- 28　10Y4/1 灰色 粗砂混じりシルト（植物遺体を層状に含む）
- 31　7.5GY4/1 暗緑灰色 シルト（植物遺体を層状に含む）
- 32　10GY4/1 暗緑灰色 粘土（ラミナあり）
- 33　10Y7/1 灰白色～ 6/1 灰色 粗砂（ラミナあり）
- 34　7.5GY5/1 緑灰色 粘土（ラミナあり）
- 35　5BG5/1 青灰色～ 4/1 暗青灰色 粗砂～シルト

北方砂層
- 48　10Y8/1 ～ 7/1 灰白色 粗砂（ラミナ見えないが、淘汰は良い）

図 64　35 溝 平・断面図

図 65　34 溝 出土土器

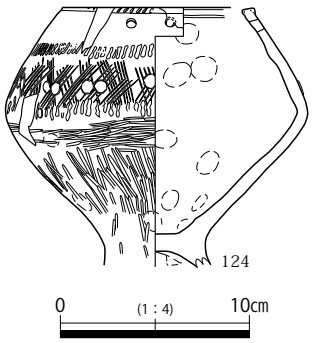
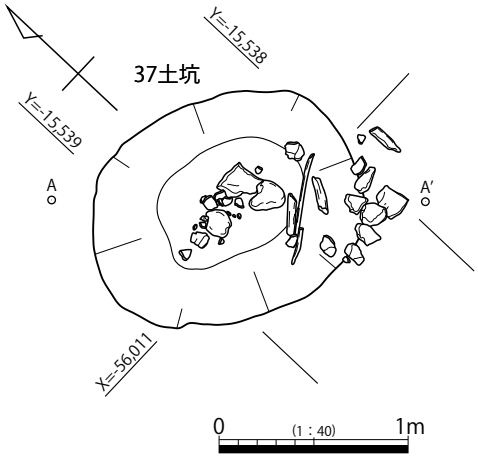
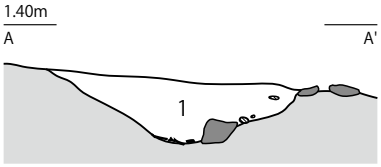


図 66　35 溝 出土土器





1　5Y8/3 淡黄色 粗砂と、10GY5/1 緑灰色 シルトの互層
（14 溝埋没砂から連続する埋土）

図 67　37 土坑 平・断面図

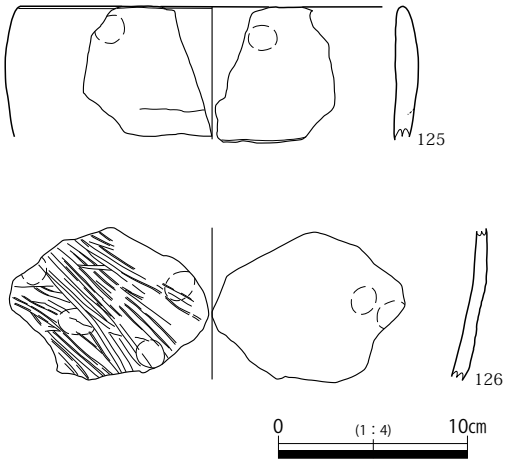


図 68　37 土坑 出土土器

出土遺物（図 65・66・68、PL.62）

35 溝からは少量の木材や弥生土器が出土しており、台付無頸壺１点を掲載した（124）。口縁に円孔が施され、胴部の屈曲部上半を櫛描き格子目文と円形浮文で装飾している。

37 土坑からは縄文時代晩期の深鉢が出土している（125・126）。

（3）19 溝

遺構（図 69、PL.16）

19 溝は中期第２段階にあたる遺構である。調査区西端の X=-56,020 付近から蛇行しながら、北東方向に延びる、幅約２～４ｍの溝である。北端は調査区外に続いている。14 溝の直上を通っており、埋没により規模を縮小した 14 溝の遺存流路と評価できる。砂礫を主体とする流路内堆積物で埋没しており、下層（14 溝堆積物）を浸食した可能性を示すが、人為的な掘削（浚渫）も否定できない。

19 溝内部からは、土器、木製品が散在して出土した。直下の 14 溝内堆積物を浸食するため、下層

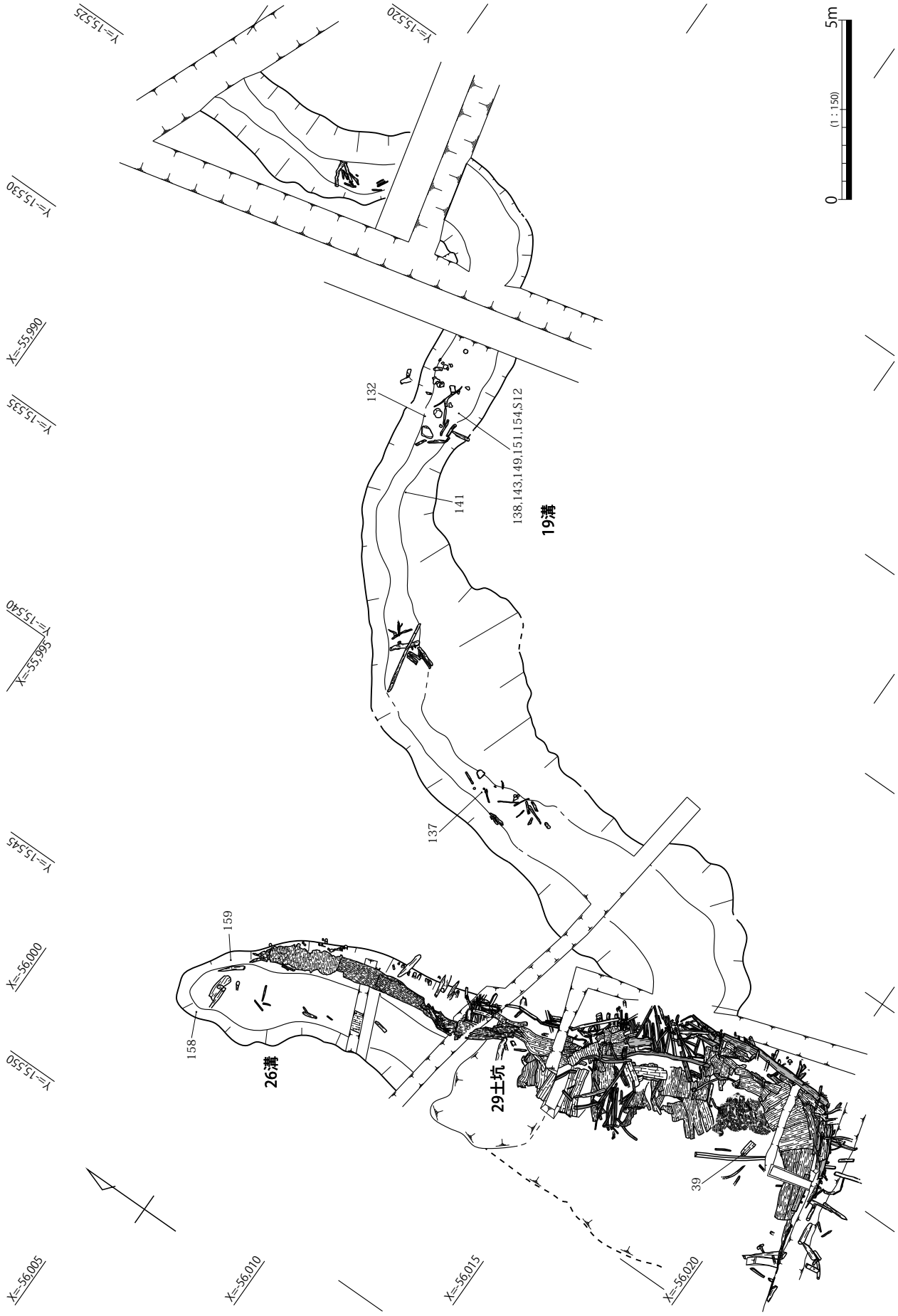


図 69　19 溝・26 溝 平・断面図

からの混入遺物が含まれる可能性が高い。

後述する出土土器の時期や遺構の重複関係から、19 溝は弥生時代中期後葉の間に形成され、かつ埋没したと考えられる。

出土遺物

19 溝は、埋土を上層、下層、最下層に分層して取り上げをおこなったが、各層に含まれる遺物の帰属時期や出土量に有意な差がみられなかったため、一括して報告する。

＜土器＞（図70・71、PL.62・63）

19 溝には、縄文時代前期前葉から弥生時代中期後葉までの土器が包含されていた。中心を占めるのは弥生時代中期中葉の弥生土器である。ここでは、出土した土器のうち、特徴的なものを抽出した。その内訳は、縄文土器６点、弥生土器 23 点である

127 ～ 132 は縄文土器である。127 は連続刺突文が施される縄文時代前期前葉の深鉢で、最下層から出土した。128 は縄文時代後期初頭の中津式に位置づけられる深鉢片である。129 は口縁部に３条の沈線が施される。内外面はナデ調整である。縄文時代後期のものであろう。130 は縄文時代晩期の浅鉢と考えられる。器厚の薄い口縁部が内湾して立ち上がり、端部が平坦に面取りされる。これも内外面をナデで仕上げる。131・132 は外面に貝殻条痕をもつ粗製深鉢で、器壁が外傾して立ち上がり、131 はほぼ直線的に、132 はわずかに内湾して口縁部に至る。

133 ～ 140 は弥生土器の甕である。全形が復元できたのは 138 のみで、ほかはすべて口縁部から肩部までの破片である。

133 ～ 135 は弥生時代前期前葉の遠賀川式土器の特徴を有する口縁部である。短くく字状に外反する口縁部を持ち、端部に刻目が入る。また、133・134 は頸部に３条の沈線が巡る。器面調整は指押さえ、ナデが主体で、一部にハケメ、ミガキが観察できる。

136 ～ 139 は中期中葉に位置づけられる甕で、く字状に強く屈曲し、端部が上方向に短く立ち上がる口縁部が特徴である。136・137 は口縁端部の立ち上がりがわずかで、端部外面に刻目等は見られない。外面調整はハケメ、内面調整はハケメとナデが施される。138 は前述の２点に比べて、口縁端部の拡張が大きく、端部外面に二枚貝腹縁による刺突文が巡る。胴部はやや歪みがあるものの、安定した倒卵形を呈する。外面にはハケメ、ミガキを全面に施したのち、口縁に施したものと同様の二枚貝腹縁による刺突を肩部に二重に巡らせ､底部付近には巻貝を押圧した痕跡もみられる。一方内面は、胴部中位までケズリを施し、それ以上をハケメで整える。139 は小片であるが、頸部に刻目突帯が巡るものである。

また 140 は、口縁端部が T 字状に拡張する口縁部で、端部外面に２条の凹線が引かれる。口縁部のみの破片であるが、中期後葉に帰属することがうかがえる資料である。

壺には、弥生時代前期前葉から中期中葉までの資料がある。141 は前期前葉の遠賀川式土器壺の頸部である。器面が風化しているが、遠賀川式土器の特徴である頸部の段差が明瞭にみられ、外面にはハケメが残る。142 は頸部に貼付突帯を持つ壺で、細い頸部と玉葱状の丸い胴部を呈するものと推定される。内面は大きく剥離しているが、内外面ともにハケメ調整の痕跡が確認できる。弥生時代中期前葉に位置づけられよう。143 は中期の短頸壺の口縁部で、口縁端部が内側にわずかに突出し、端部外面に刻目がみられる。144 は無頸壺の口縁部で、全形は復元できないが、玉葱状の胴部に脚台が付

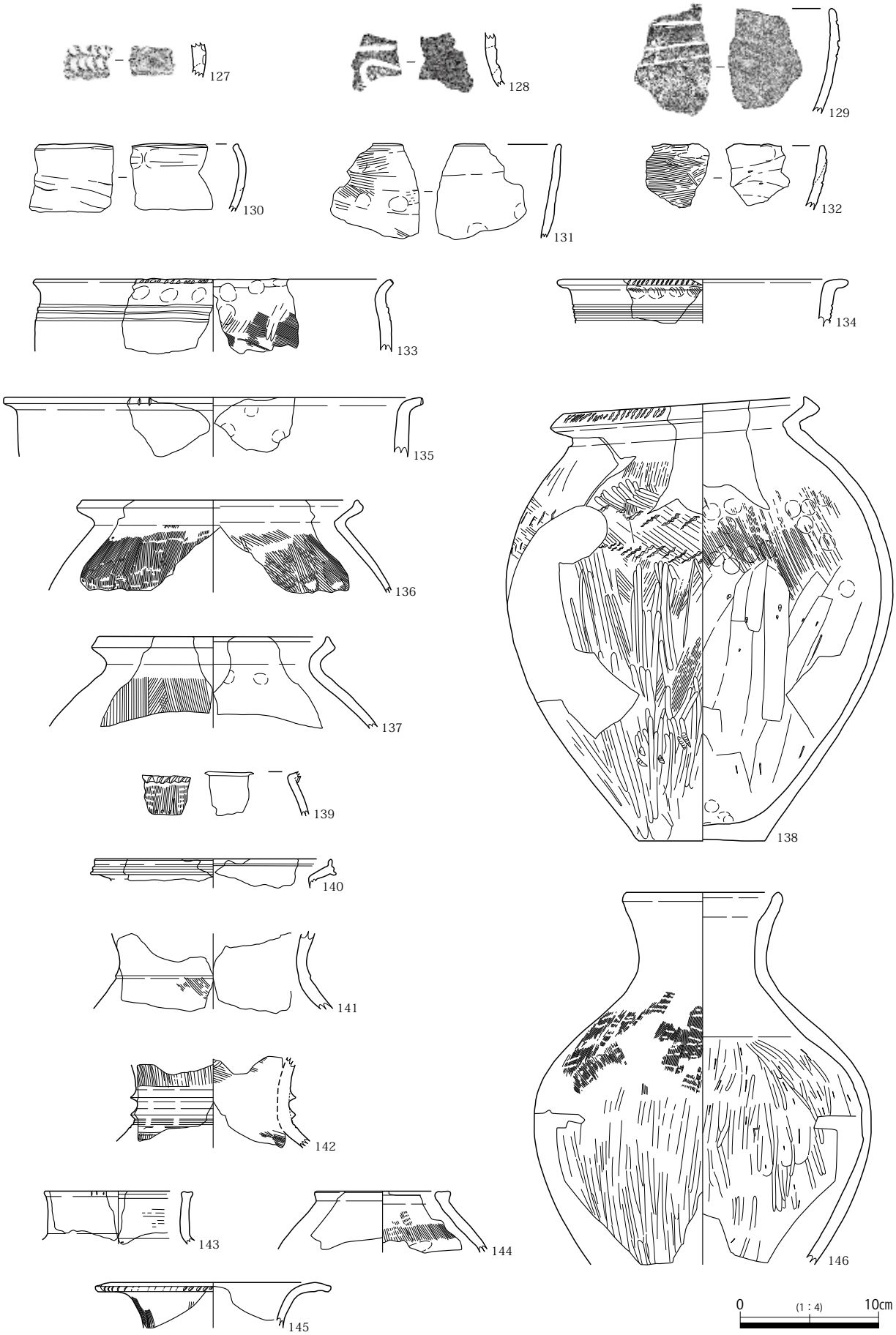

127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
0
(1：4)
10cm

図 70　19 溝 出土土器

く形態の壺であると考えられる。口縁端部が外側に突出し、端部上面に平坦面を持つ。内面には縦方向のハケメが残る。また 145 は、中期中葉の広口壺で、外側に大きく外反する口縁を持つ。端部に刻目、頸部外面に縦方向のハケメを施す。ほぼ全形を復元できた 146 は、細く長い頸部と倒卵形の胴部を持つ中型の壺である。頸部はやや外傾して立ち上がり、内面に強いナデを施して段差を形成している。器面調整は外面上半にハケメ、下半にミガキ、内面上半にナデ、下半にケズリののちミガキを施す。

147 ～ 152 は、中・大型の甕または壺の底部である。147 ～ 151 は安定した平底で、外面にはハケメとミガキ、内面にはケズリとハケメ、指押さえを施す。152 は上げ底で、壺の底部の可能性が高い。底部外面を指押さえで仕上げる。

また、153 は底部と考えられる土器である。底部の内外面から穿孔を施し、内面から施した穿孔は貫通することなく途中で止められている。底部に穿孔がある上、小型であるため、実用ではないミニチュア土器の可能性が高い。

154 は弥生時代中期中葉の高坏の口縁部である。口縁部は水平に近く外反し、屈曲部の内面が突出する。坏部は残らないが、椀形を呈するものと考えられる。155 は深い椀形の坏部で、上半を欠く。円盤充填法によって成形された坏底部が剥落している。内外面にはハケメ調整、およびわずかに残る脚部内面には絞りが確認できる。

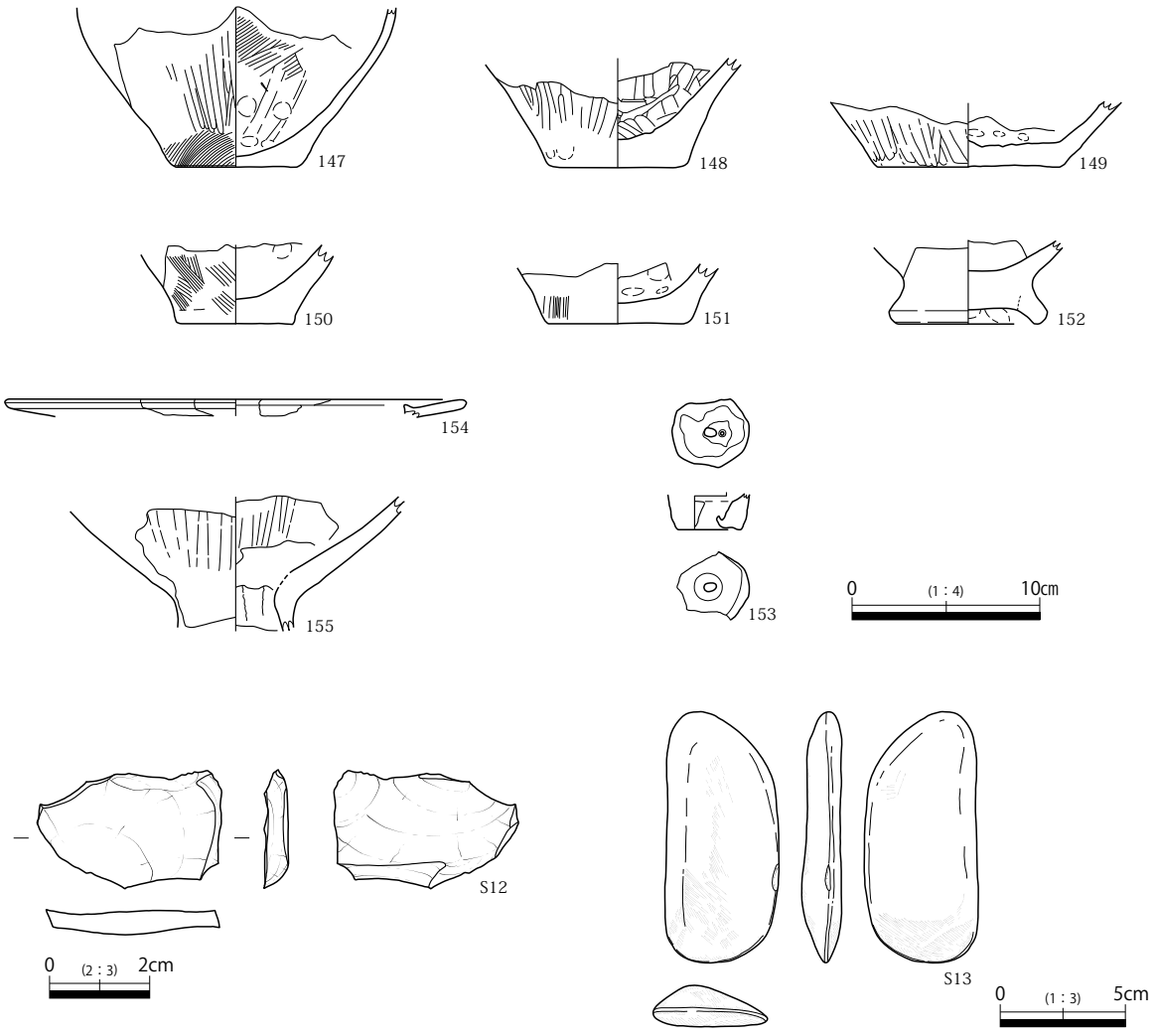


図 71　19 溝 出土土器・石器

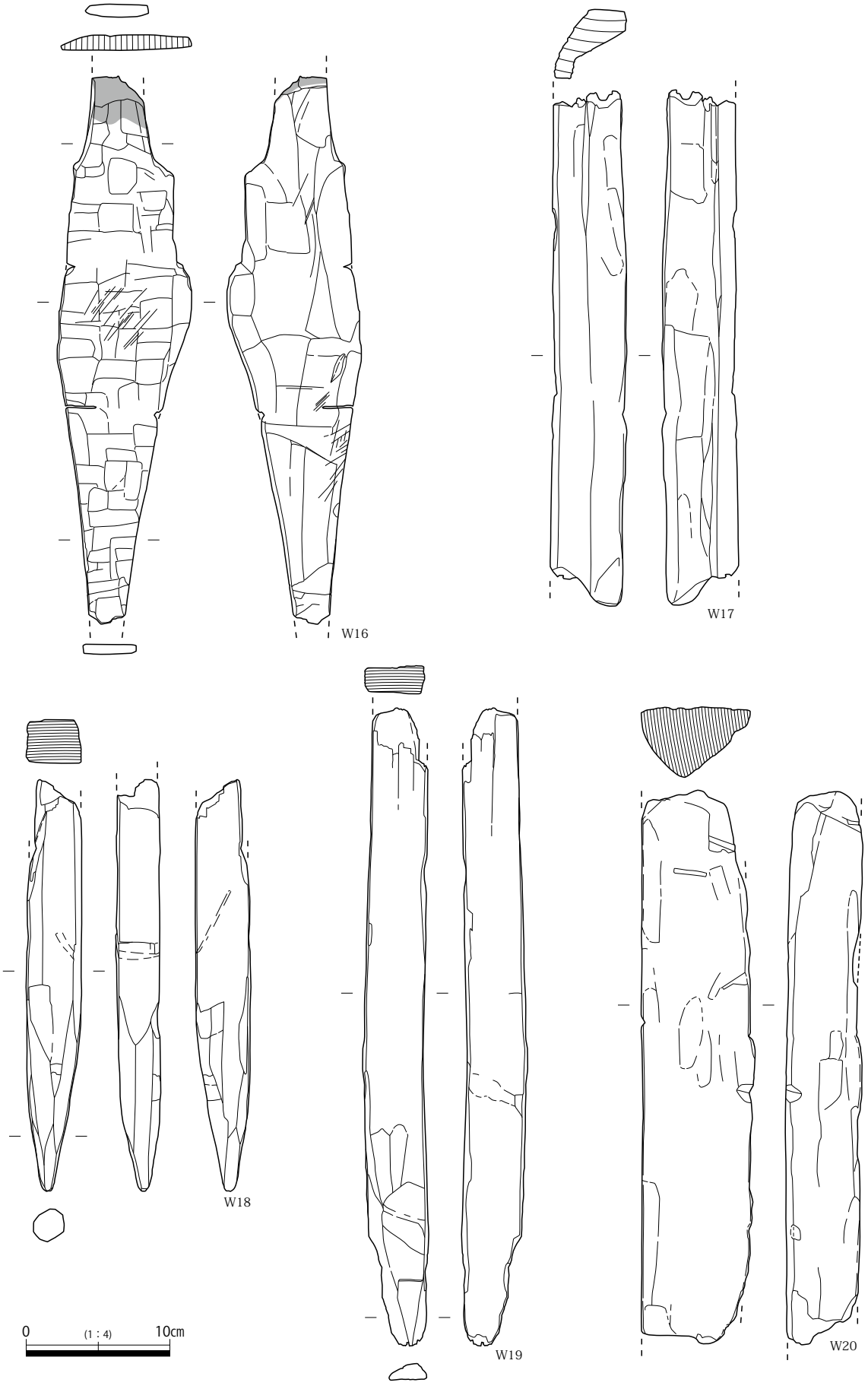


図 72　19 溝 出土木製品

＜石器＞（図71、PL.62）

石器は５点が出土した。組成は、安山岩の剥片が２点、碧玉の剥片が１点、安山岩の石核が１点、緑色片岩製磨石が１点である。このうち２点を図化掲載した。

S12 は碧玉の剥片。S13 は緑色片岩の円礫の端部に研磨を加えた石器で、磨石に分類した。いわゆる礫斧のような局部磨製石斧の可能性もあるが、研磨によって明瞭な刃部は形成されていない。

＜木製品＞（図72、PL.64）

W16 は曲柄又鍬の二次加工品。樹種はアカガシ亜属である。W17 は容器の蓋の破片と考えられる。W18･W19 は杭で、樹種はいずれもスギである。W20 はミカン割り材で、樹種はアカガシ亜属である。

（４）18 溝

遺構（図 34、PL.16）

調査区西端から北に延びる幅約 2.5 ｍの溝である。19 溝と同じく中期第２段階に帰属する。北端は 21 落ち込みに、東肩の一部を 26 溝に切られる。灰白色～淡黄色の粗砂で埋没しており、19 溝内の堆積物と層相が似ていることから、同時期の氾濫によって埋没した流路の可能性がある。26 溝との切り合い付近から北側の遺構の大半部分が完掘できておらず、平面図の上端を記録したのみである（図 34・35 など）。

遺構の重複関係から考えて、18 溝は弥生時代中期後葉の間に形成され、かつ埋没したと考えられる。

出土遺物（図 73、PL.65）

18 溝の出土遺物からは、弥生時代前期の土器２点を抽出した。石器は出土していない。

156 は遠賀川式土器の甕で、胴部上半まで復元できる。口縁部がく字状に短く外反し、端部に V 字状の刻みが入る。器面は内外面ともにハケメで調整され、内面には成形時の指頭圧痕が観察できる。また、頸部に３条の沈線が巡る。157 は弥生時代前期の壺である。外面はハケメ、内面はナデと指押さえを施す。肩部と考えられる位置に１条の沈線が引かれる。いずれも埋没時期を示すものではない。

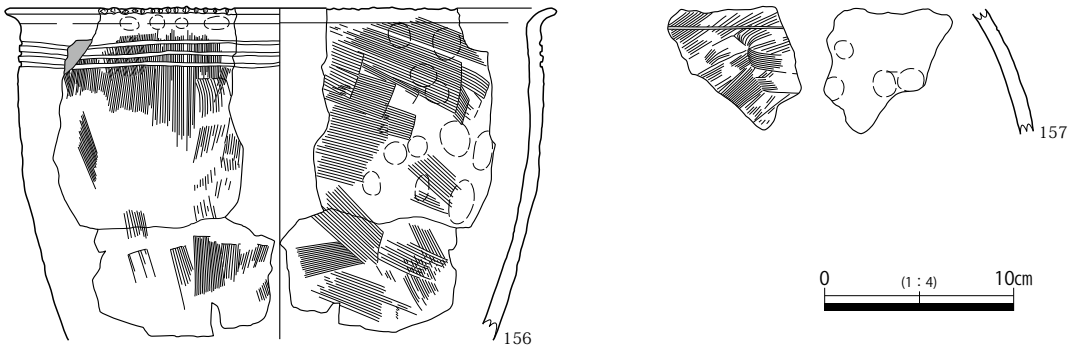


図 73　18 溝 出土土器

（５）26 溝

遺構（図 74・75、PL.16 ～ 19）

調査区の西端から、X=-56,005、Y=-15,545 付近まで延びる溝である。中期第３段階の遺構として捉えた。

溝の東肩には、横木と杭、樹皮を用いた木製構造物が構築されており、X=-56,020 付近では大きく湾曲して北方に延びる。西肩の大部分は後出する 28 溝によって切られている。溝の幅は、両肩が残っている部分で約 2.5 ～ 3.5 m である。

木製構造物は、14 溝内部に構築された構造物２や４など、樹皮を多用するものに類似しているが、横木に板材を使用し、杭材の多くに角材を用いている点で異なる。樹皮は、14 溝木製構造物と同じく針葉樹のものであり、横幅は 100 ～ 120 cm のものが多い。一部にヨシとみられるイネ科植物やスギの小枝を集積した場所もある。構築後にブロック土を含む粘質土で被覆されており、護岸的な役割を持つ施設と考えられる。

後述する 29 土坑よりも北側では、緑灰色～オリーブ灰色のシルト層で埋没するが、南側では砂礫によって埋没しており、水流による浸食を受けた状況が確認できる。浸食により木製構造物が破壊された場所では、浸食後に堆積した砂礫層の上部に新たな木製構造物を構築して護岸施設の修復を図っている。特に、19 溝との切り合い部分においては、浸食により木製構造物が破壊された状況と、修復の様子が明瞭に観察できた。この場所では、南側から湾曲しながら続く木製構造物が途切れている。横木として使用されている板材は連続せず、樹皮も少し西方にずれた場所に確認され、南側から続かない。逆に杭は他の場所に比べて多い。芯持ち丸太を利用した横木も確認されているが、この横木は周囲の木製構造物上部を浸食、堆積する砂礫層の上部に設置されている。14 溝、19 溝と変遷する流路は、調査区西端から北東方向への流向を持つ。26 溝の形成時には、木製構造物の設置によって 19 溝までの流れを遮断した上で、北方へと流向を変化させている。そのため、19 溝との切り合い部分が水衝部にあたることに加え、砂礫で埋没している 19 溝部分では、木製構造物の強度自体が弱い。最も浸食被害を受けやすかった場所といえるだろう。

一方で、こうした浸食と砂礫の堆積を確認できない北側においても、木製構造物の段階的な構築が確認できる。29 土坑北側で 26 溝を東西方向に断ち割った B 断面、C 断面では、人為的な被覆土と考えられる古土壌を挟んで上下に樹皮敷が確認できる。ちなみに、図 74 に示す平面状況は、いずれも上層の樹皮敷き木製構造物であり、下層の樹皮敷に関しては、2011 年度調査では断面のみの確認である。2011 年度調査の段階では、上層の樹皮の背面もしくは下面に木製構造物が構築されている状況が想定できたのに対し、下層の樹皮敷きに関しては、樹皮以外の構造物を伴うかどうか定かではなかった。しかしながら、後述するように 2012 年度調査の結果、下層の樹皮敷きの下面にも構造物が存在することを確認している。このような 26 溝北側における構造物の重層的な検出状況は、この遺構の性格に関する重要な手掛かりと考えられる。

26 溝からの出土遺物は、14 溝などに比べると非常に少なく、南側の木製構造物周辺に集中して出土した。これらの遺物は浸食後に堆積したと考えられる砂礫から出土しているため、確実に 26 溝に伴うものとは言い難い状況である。

遺構の重複関係から考えて、26 溝は弥生時代中期後葉の間に形成され、かつ埋没したと考えられる。

図 74　26 溝 木製構造物検出状況図

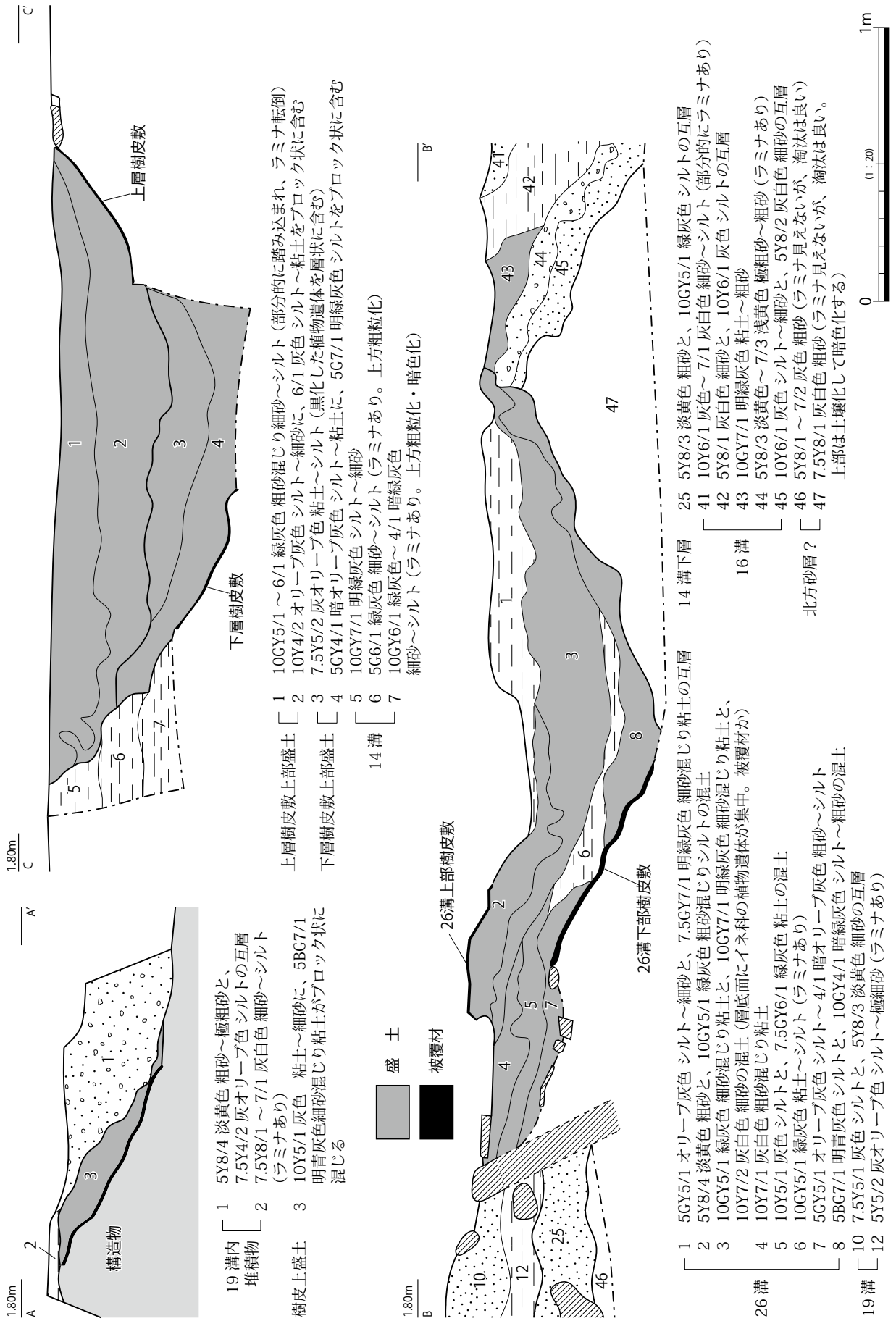


図 75　19 溝・26 溝 断面図

図 76　26 溝 出土土器

出土遺物（図 76、PL.65）

埋土中からの出土遺物のうち、土器を２点掲載した。いずれも弥生時代中期の土器である。158 は無頸壺の口縁部と考えられる。159 は甕の底部であろう。石器は出土していない。

（６）28 溝

遺構（図 77 ～ 79、PL.7・16・20・21）

26 溝の埋没後に上部から掘削される溝で、中期第４段階の遺構と捉えた。調査区西端を起点として、屈曲した後に北方に延びるが、北端は 29 土坑に切られて明確にし得なかった。溝の幅は約 2.2 ～ 2.8 ｍである。26 溝同様に東肩に護岸施設と考えられる木製構造物を構築する（図 77）。

木製構造物は、前段階までの遺構同様に、横木、杭、樹皮で構築される。杭材には芯持ちの細い丸太材を主体としている。29 土坑の北肩あたりまで杭材の設置がみられるが、29 土坑形成時に上部構造は失われていると考えられる。ただし、横木は 29 土坑手前の X=-56,014 ライン付近までしか確認できない。X= － 56,016 ライン付近では、木製構造物の上部にヨシのようなイネ科植物茎を敷いた状況が確認された（図 79 上：A 断面の８層上面）。

また、西肩部では、ヨシのようなイネ科植物茎と細い木材を組み合わせた組物が確認された。長軸約 2.5 ｍ、短軸約 0.7 ｍで、長軸に平行するように設置された２本の木材の間は皿状にたわみ、植物茎が敷き並べられる。北端部で植物茎の下部に細い棒材が確認されたため、舟状の構造を持つ遺物の可能性も考慮して、下部の土ごと 21 分割して取上げた。取上げ作業の中で、植物茎の下部に木質の構造の有無を確認したが、明確に木材が確認される場所はなかった。この組物の取り上げ後、下部に落ち込み状の遺構を確認し、36 溝として調査を行ったが、平面プランは明瞭に確認できなかった。断面状況（図 79 下）は 28 溝の堆積構造と類似しており、28 溝の一部であった可能性が高い。なお、組物下で確認した盛土中からは、この組物に類似したイネ科植物茎の集積や樹皮を確認しており（図 79 下）、組物もこれらと一連の盛土中の被覆材であった可能性も考えられる。

後述する出土遺物の時期や遺構の重複関係から考えて、28 溝は弥生時代中期後葉の間に形成され、かつ埋没したと考えられる。

出土遺物

28 溝は、上層および最下層で遺物の取上げをおこなった。28 溝の下位には、弥生時代前期の遺物を包含する 27 溝が存在する可能性が高く、最下層出土の遺物は、27 溝からの混入と考えられる。以下、土器については上層と最下層を分けて報告をおこなう。

＜28溝上層出土土器＞（図80、PL.66）

出土遺物は縄文土器４点、弥生時代中期の土器４点である。

160 ～ 163 は縄文土器である。160 は深鉢の口縁部で、外面を指によるナデ、内面を指押さえで仕上げる。口縁端部内面に１条の沈線が巡る。161 は浅鉢で、肩部で屈曲し、口縁部が外反して立ち上

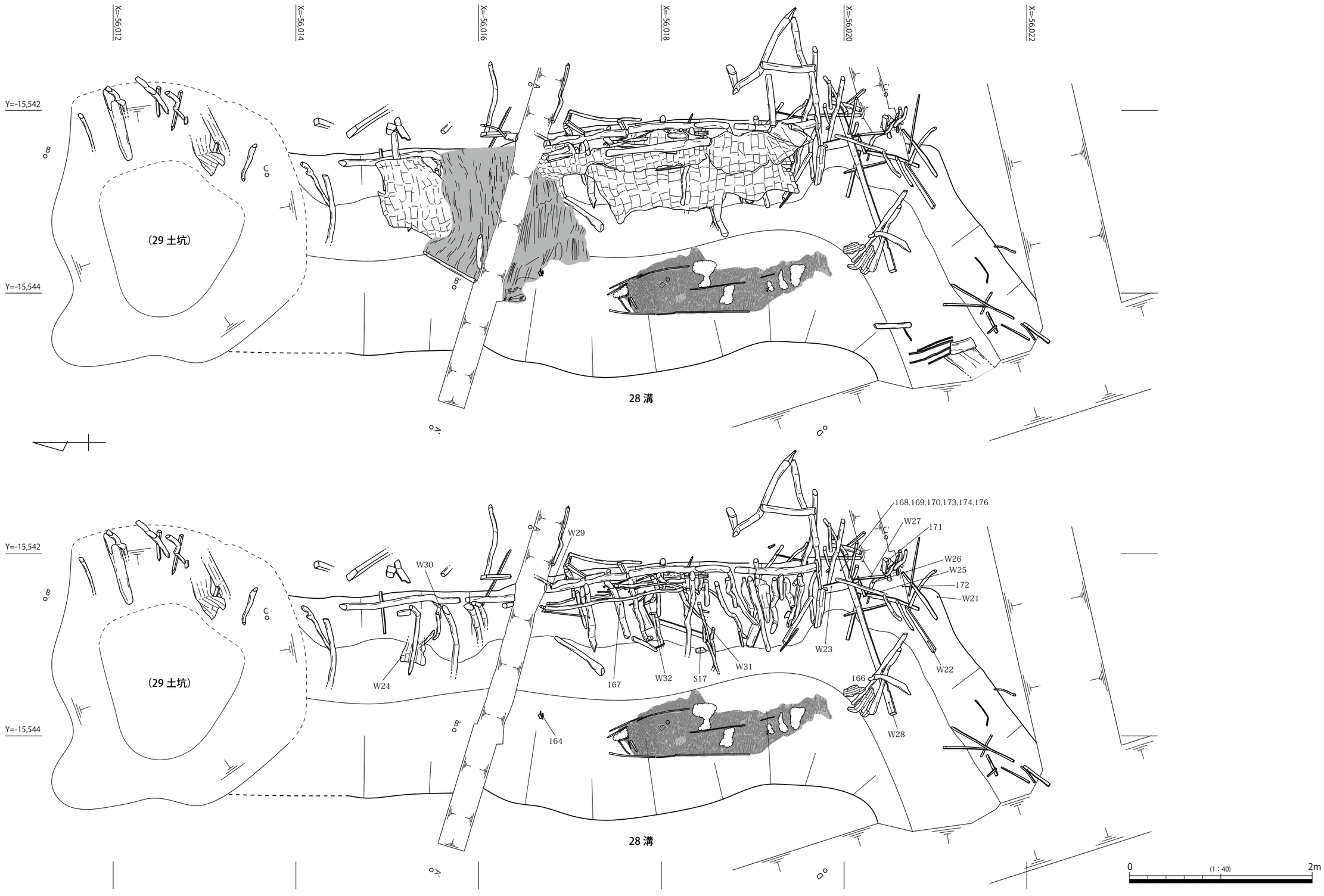

X=-56,012
X=-56,014
X=-56,016
X=-56,018
X=-56,020
X=-56,022
Y=-15,542
Y=-15,544
（29 土坑）
28 溝
W29
W30
W24
167
W32
S17
W31
164
168,169,170,173,174,176
W27
171
W26
W25
172
W21
W23
W22
166
W28
0
(1 : 40)
2m

図 77　28 溝 平面図

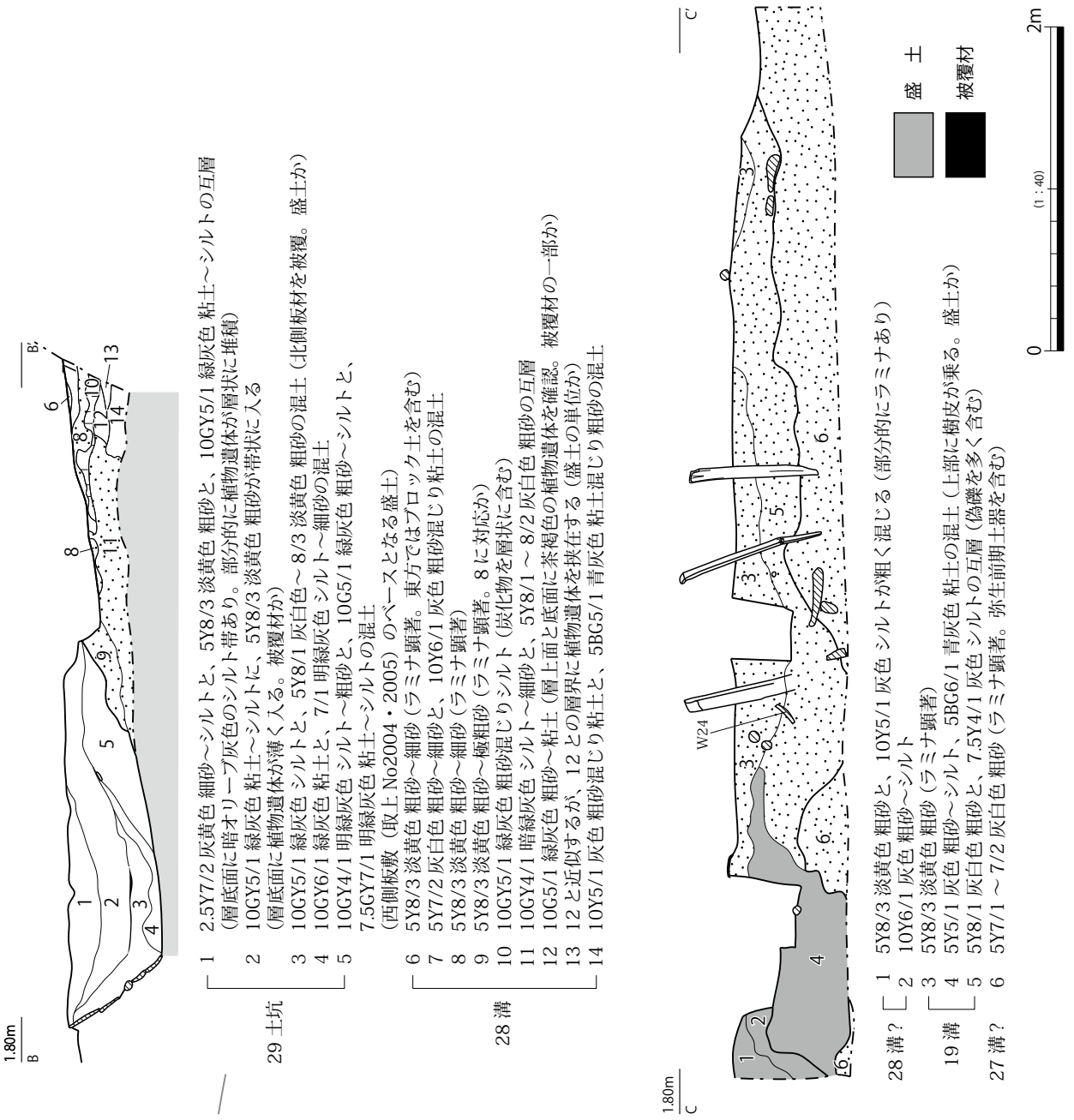
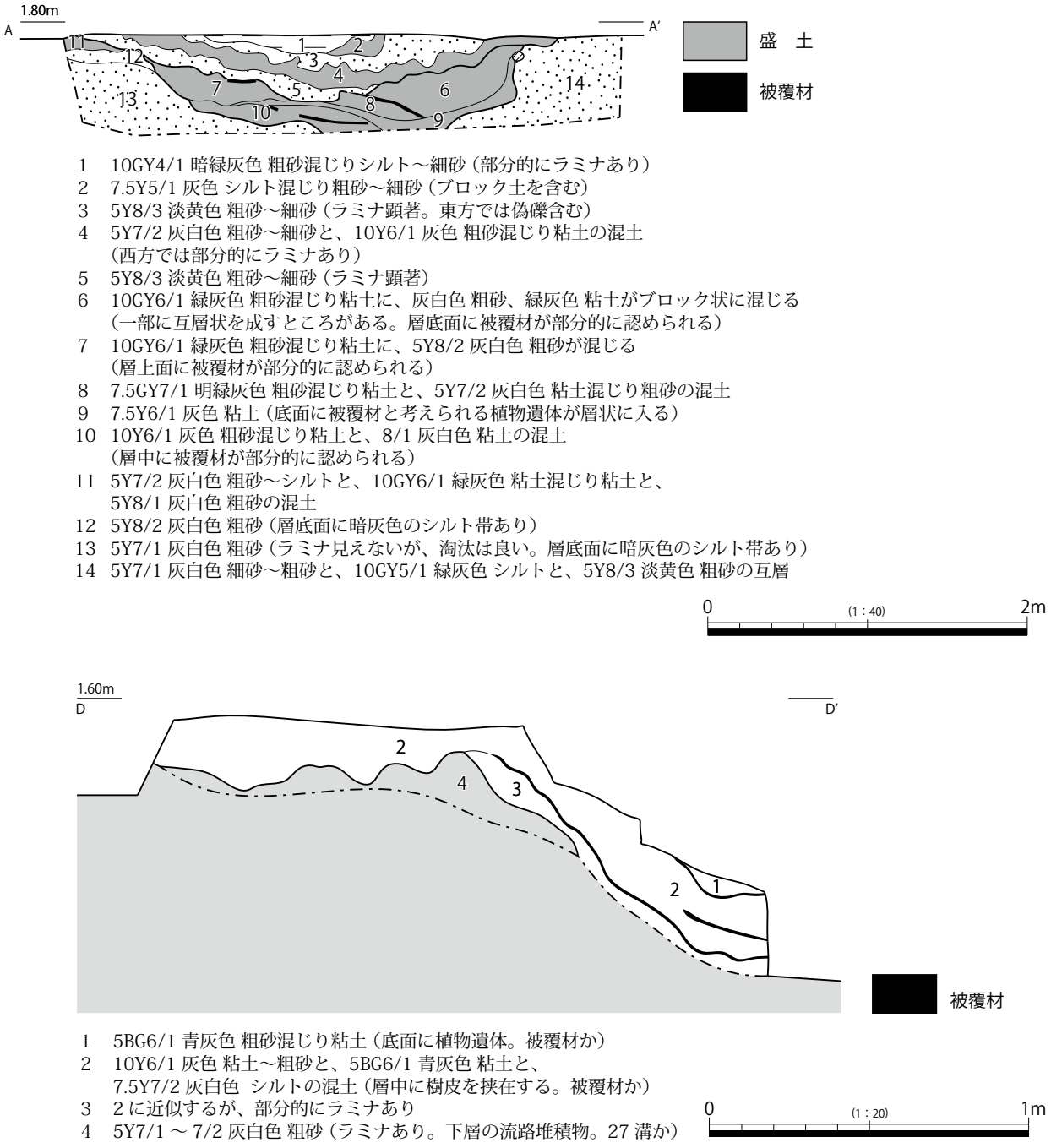


図 78　28 溝 断面図（1）

がる。内外面をナデ、指押さえで調整する。また、外面には工具痕が残る。162 は突帯文土器の口縁部である。器壁がやや外傾して真っ直ぐ立ち上がる。突帯は口縁部に接して貼り付けられており、棒状工具を押圧して刻目を施している。器面調整は指によるナデである。163 は浅鉢の底部と考えられる。風化が激しいが、外面に二枚貝条痕が観察できる。

164 ～ 167 は弥生土器である。164 は弥生時代中期中葉の甕である。く字状に屈曲する口縁部を持ち、端部に刻目、胴部にハケメが施される。165 は壺の口縁部で、T 字状に拡張した端部に 4 条の凹線と縦方向の刻目を施す。中期後葉に帰属する。166・167 は甕または壺の底部である。166 は高台状の平底で、粘土帯接合部に指頭圧痕が残る。167 は小型の甕の底部と考えられる。小型ながらしっかりとした平底である。底面に縦方向の圧痕が観察でき、土器製作時の痕跡を残す。



1　10GY4/1 暗緑灰色 粗砂混じりシルト～細砂（部分的にラミナあり）
2　7.5Y5/1 灰色 シルト混じり粗砂～細砂（ブロック土を含む）
3　5Y8/3 淡黄色 粗砂～細砂（ラミナ顕著。東方では偽礫含む）
4　5Y7/2 灰白色 粗砂～細砂と、10Y6/1 灰色 粗砂混じり粘土の混土
（西方では部分的にラミナあり）
5　5Y8/3 淡黄色 粗砂～細砂（ラミナ顕著）
6　10GY6/1 緑灰色 粗砂混じり粘土に、灰白色 粗砂、緑灰色 粘土がブロック状に混じる
（一部に互層状を成すところがある。層底面に被覆材が部分的に認められる）
7　10GY6/1 緑灰色 粗砂混じり粘土に、5Y8/2 灰白色 粗砂が混じる
（層上面に被覆材が部分的に認められる）
8　7.5GY7/1 明緑灰色 粗砂混じり粘土と、5Y7/2 灰白色 粘土混じり粗砂の混土
9　7.5Y6/1 灰色 粘土（底面に被覆材と考えられる植物遺体が層状に入る）
10　10Y6/1 灰色 粗砂混じり粘土と、8/1 灰白色 粘土の混土
（層中に被覆材が部分的に認められる）
11　5Y7/2 灰白色 粗砂～シルトと、10GY6/1 緑灰色 粘土混じり粘土と、
5Y8/1 灰白色 粗砂の混土
12　5Y8/2 灰白色 粗砂（層底面に暗灰色のシルト帯あり）
13　5Y7/1 灰白色 粗砂（ラミナ見えないが、淘汰は良い。層底面に暗灰色のシルト帯あり）
14　5Y7/1 灰白色 細砂～粗砂と、10GY5/1 緑灰色 シルトと、5Y8/3 淡黄色 粗砂の互層

1　5BG6/1 青灰色 粗砂混じり粘土（底面に植物遺体。被覆材か）
2　10Y6/1 灰色 粘土～粗砂と、5BG6/1 青灰色 粘土と、
7.5Y7/2 灰白色 シルトの混土（層中に樹皮を挟在する。被覆材か）
3　2 に近似するが、部分的にラミナあり
4　5Y7/1 ～ 7/2 灰白色 粗砂（ラミナあり。下層の流路堆積物。27 溝か）

図 79　28 溝 断面図（２）

＜28溝最下層出土土器＞（図80、PL.66）

最下層出土の土器は、縄文時代後期から弥生時代前期中葉に帰属するもので、下位を流れる 27 溝の帰属時期と一致する。出土遺物の内訳としては、縄文土器４点、弥生土器５点である。

168 ～ 170 は縄文土器である。168 は縄文晩期の粗製深鉢である。器壁がわずかに外傾し、口縁端部の外側のみ内傾して立ち上がる。内外面ともに工具による粗いナデで器面を調整する。169 は注口土器である。注口部分が残存しており、成形時の調整痕が状態良く観察できる。外面は指押さえとナデで丁寧に仕上げ、内面は工具による粗いナデを施している。170 は底部である。晩期前半に位置づけられるものであろう。外面に指頭圧痕が残る。

171 ～ 176 は弥生土器である。171 ～ 174 は甕の口縁部である。く字状に短く屈曲して立ち上がる口縁部の形状から、弥生時代前期前葉のものと判断できる。174 の端部には刻目が施される。器面調

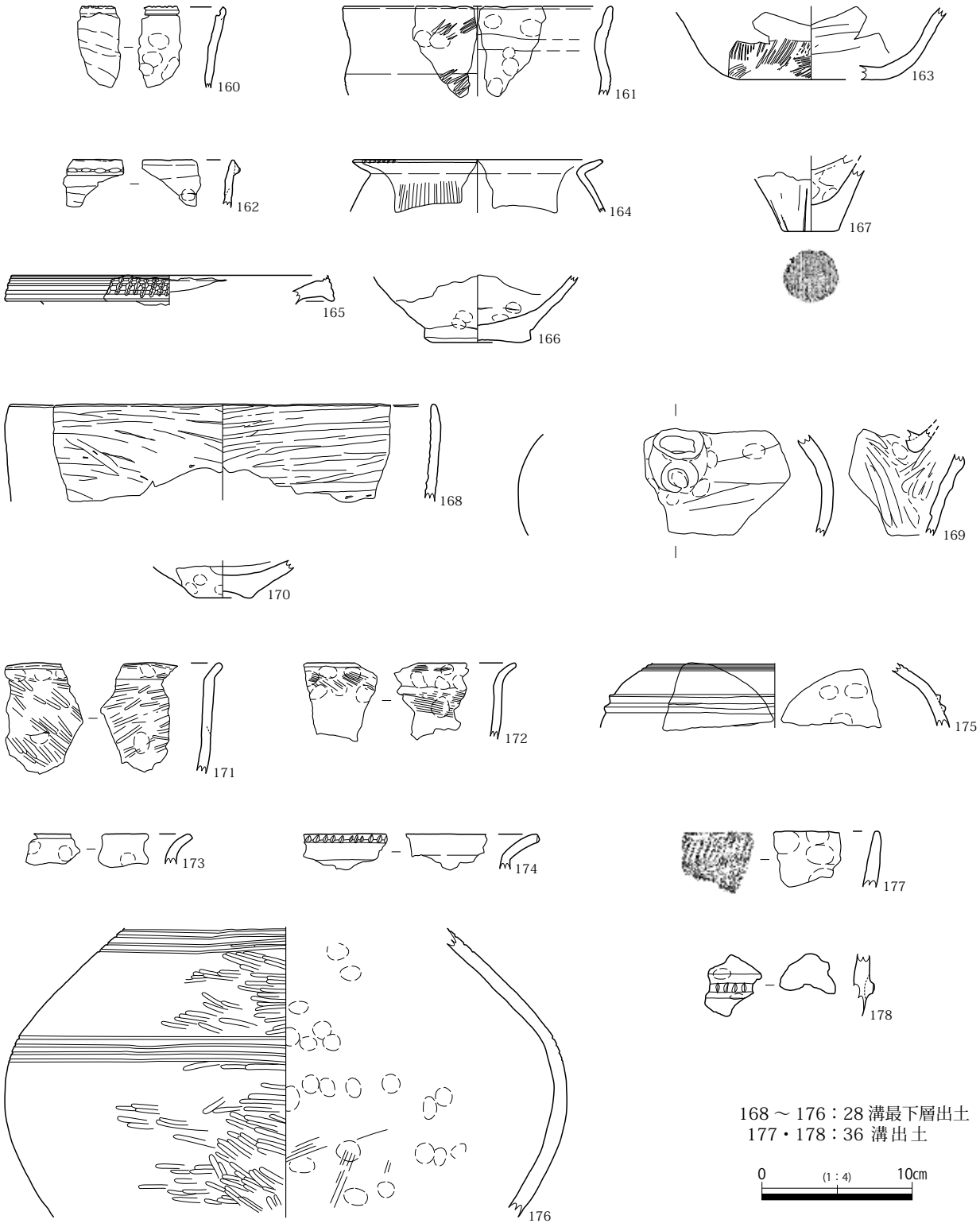


図 80　28 溝・36 溝 出土土器

整は、ナデ、指押さえを基本とし、171 は内外面ミガキ、172 は内外面にハケメが施される。175・176 は前期後葉の壺である。175 は肩部に沈線と貼付突帯、176 は沈線が巡る。176 の外面には精緻なミガキが前面に施され、内面には指頭圧痕とハケメが観察できる。

177・178 は 36 溝埋土出土として取上げた土器であるが、先述のように 36 溝は 28 溝の一部と考えらえられる。177 は時期不明の縄文土器で、口縁端部に縄文が施されている。178 は弥生時代前期の壺の頸部ないしは体部片であろう。

表５　28 溝 出土石器石材別組成表

	スクレイパー	楔形石器	加工痕のある剥片	磨製石斧	磨製石斧剥片	磨石＋敲石	計
安山岩	1	2				1	4
流紋岩			1	1	1		3
計	1	2	1	1	1	1	7

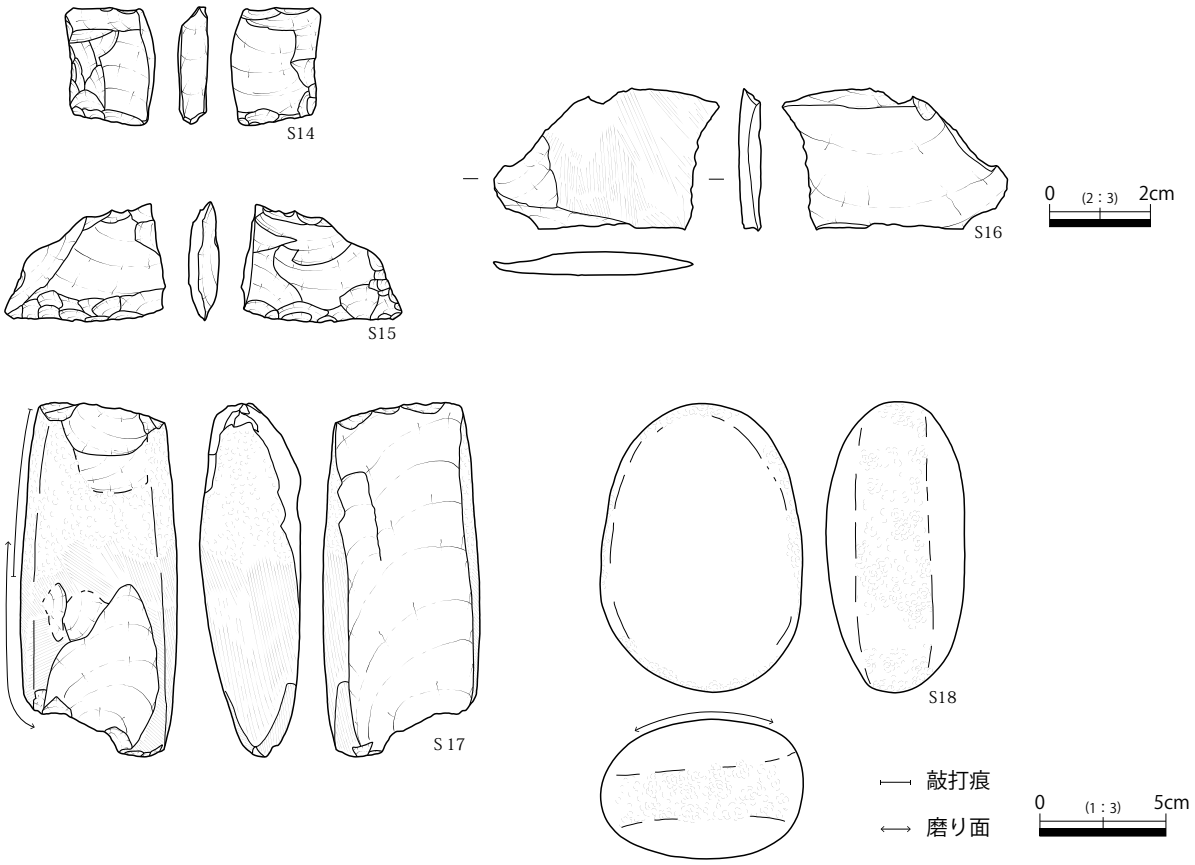


図 81　28 溝 出土石器

＜石器＞（図81、PL.65）

石器は組成表に示したとおり、スクレイパー、楔形石器、磨製石斧などが出土している（表５）。S14 はサヌカイト製の楔形石器で、上下方向の加撃による剥離痕と、揃断面が観察できる。S15 はサヌカイトのスクレイパー。S16 は磨製石斧から剥離された剥片で、いわゆるリダクションに伴うものであろう。S17 は刃部が欠損した大型両刃磨製石斧で、表裏面とも刃部側からの加撃による大きな剥離面が形成されている。使用に伴う破損であろう。S18 は磨石と敲石の複合石器である。

＜木製品＞（図82～84、PL.65・67・68）

W21 は９本の歯の付いた馬鍬型の直柄横鍬の鍬先である。樹種はアカガシ亜属である。

W22 ～ W32 は護岸材に用いられていた木材である。W22 ～ W24 は板で、いずれも建築部材を転用したものと考えられる。W22･W24 には､建築部材として加工された際の孔が見られる。壁板であった可能性が高い。W23 には先付けをして矢板への二次加工が行われている。W25 ～ W32 は杭である。W25 ～ W28 は角材を二次分割し、先付けを施して杭に転用したもので、いずれもスギを素材としている。少なくとも、大型の W25・W26・W28 は建築部材を転用したものと考えらえる。W28 は図の両側面を分割しており､ハツリが施された図の表裏面が建築部材本来の面にあたる｡表には木釘が２ヶ

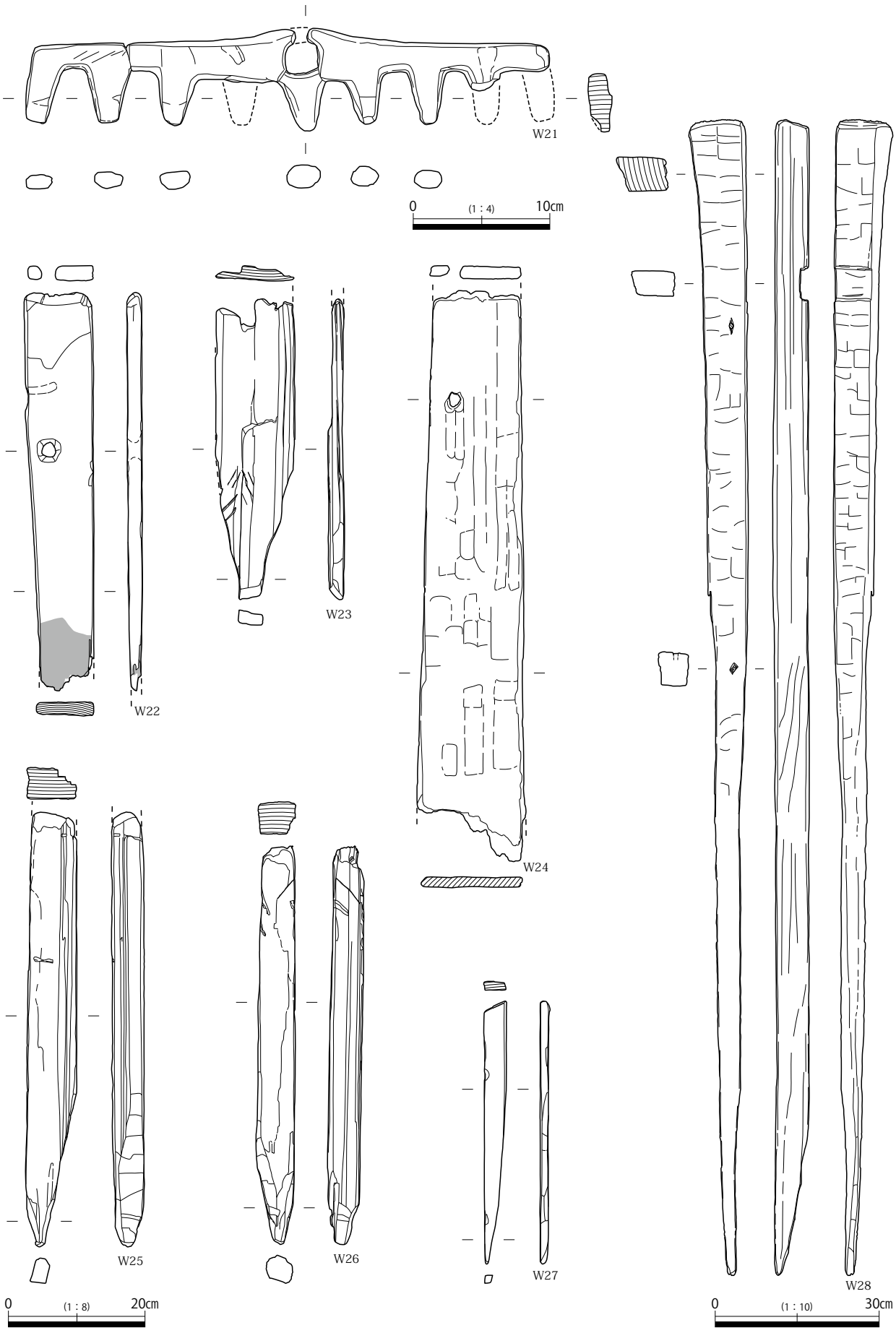


図 82　28 溝 出土木製品（1）

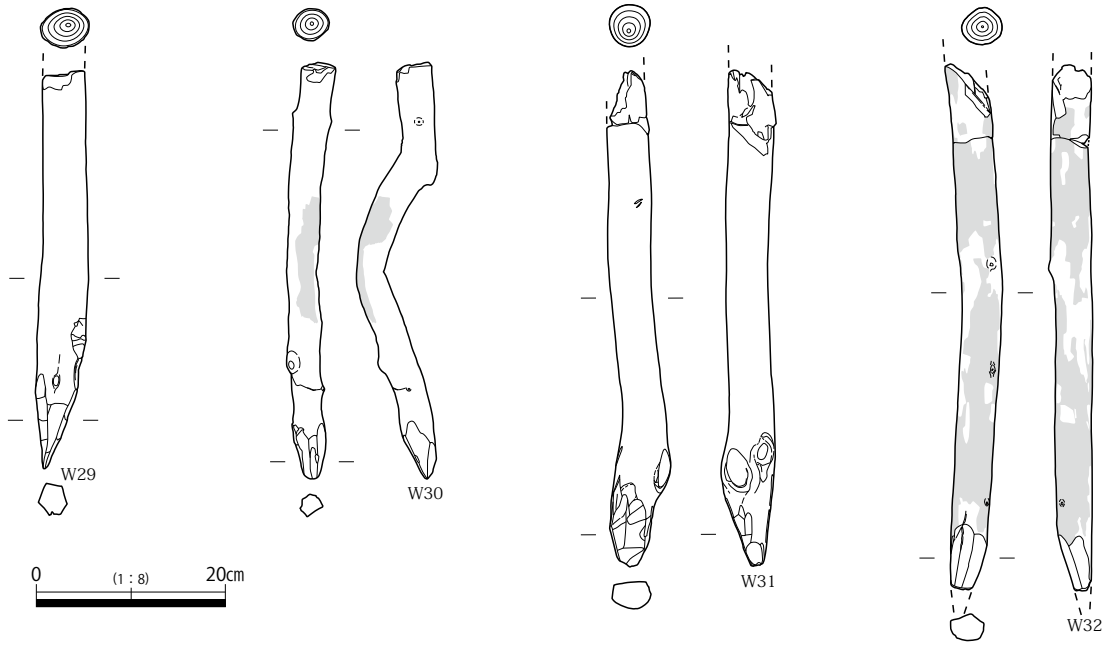


図 83　28 溝 出土木製品（２）

図 84　36 溝 出土木製品

所に打たれており、裏には欠き込みが施されている。部位は不明ながら、構造材と考えられる。W29 ～ W32 は自然木に先付けをした杭である。W33 は 36 溝出土遺物として取り上げた鋤の柄である。先述のように、36 溝は 28 溝の一部である可能性が高い。

（７）29 土坑

遺構（図 85、PL.22）

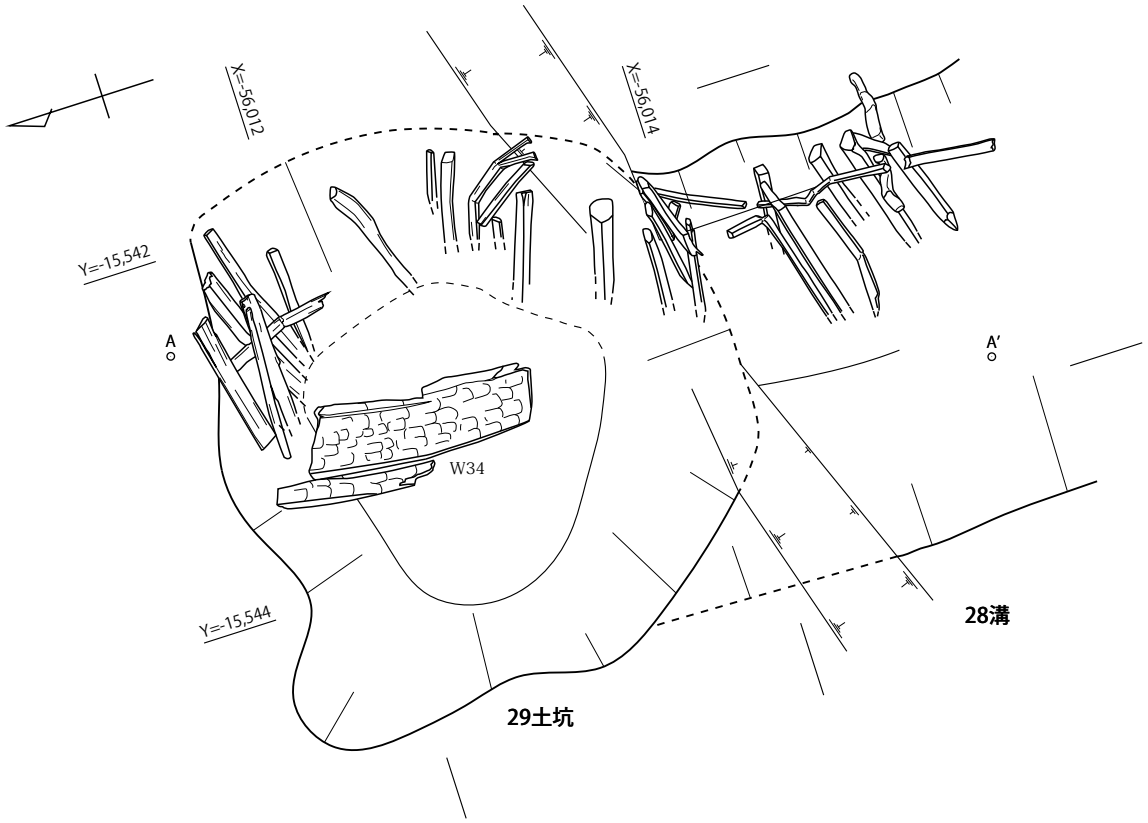
29 土坑は中期第５段階の遺構として捉えた、28 溝内の砂礫層を掘り込む直径約３ｍの土坑である。東肩には法面に角材や芯去り丸太の分割材を主体とする杭が立て並べられ、北肩には板材が並べられる。これらは断面図３～５層に被覆されており、木材設置後の盛土と考えられる。この盛土の上部には、表面調整の明瞭な板材（W34 ほか）が斜めに設置されており、板材の上部は自然堆積と考えられる１・２層で埋没していた。28 溝埋没後の井戸、もしくは水溜めのような遺構と考えられる。

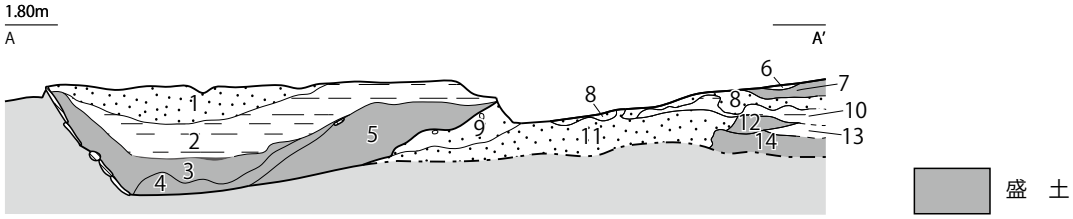
埋土中からは弥生時代中期の土器や石器が出土している。また、遺構に据え付けられた木材はすべて建築部材の転用材と考えられる

後述する出土遺物の時期や遺構の重複関係から考えて、28 溝は弥生時代中期後葉の間に形成され、かつ埋没したと考えられる。

出土遺物（図 86、PL.69）

179 は弥生時代中期の無頸壺の口縁部片である。石器は S19 のスクレイパー１点のみの出土である。流紋岩または安山岩の円礫から剥離された剥片を素材としている。W34 は大型の板で、スギの追柾目材を用い





29 土坑
- 1　2.5Y7/2 灰黄色 細砂～シルトと、5Y8/3 淡黄色 粗砂と、10GY5/1 緑灰色 粘土～シルトの互層（層底面に暗オリーブ灰色のシルト帯あり。部分的に植物遺体が層状に堆積）
- 2　10GY5/1 緑灰色 粘土～シルトに、5Y8/3 淡黄色 粗砂が帯状に入る（層底面に植物遺体が薄く入る。被覆材か）
- 3　10GY5/1 緑灰色 シルトと、5Y8/1 灰白色～ 8/3 淡黄色 粗砂の混土（北側板材を被覆。盛土か）
- 4　10GY6/1 緑灰色 粘土と、7/1 明緑灰色 シルト～細砂の混土
- 5　10GY4/1 明緑灰色 シルト～粗砂と、10G5/1 緑灰色 粗砂～シルトと、7.5GY7/1 明緑灰色 粘土～シルトの混土（西側板敷（取上 No2004・2005）のベースとなる盛土）

28 溝
- 6　5Y8/3 淡黄色 粗砂～細砂（ラミナ顕著。東方ではブロック土を含む）
- 7　5Y7/2 灰白色 粗砂～細砂と、10Y6/1 灰色 粗砂混じり粘土の混土
- 8　5Y8/3 淡黄色 粗砂～細砂（ラミナ顕著）
- 9　5Y8/3 淡黄色 粗砂～極粗砂（ラミナ顕著。8 に対応か）
- 10　10GY5/1 緑灰色 粗砂混じりシルト（炭化物を層状に含む）
- 11　10GY4/1 暗緑灰色 シルト～細砂と、5Y8/1 ～ 8/2 灰白色 粗砂の互層
- 12　10G5/1 緑灰色 粗砂～粘土（層上面と底面に茶褐色の植物遺体を確認。被覆材の一部か）
- 13　12 と近似するが、12 との層界に植物遺体を挟在する（盛土の単位か）
- 14　10Y5/1 灰色 粗砂混じり粘土と、5BG5/1 青灰色 粘土混じり粗砂の混土

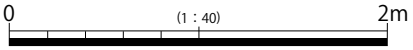


図 85　29 土坑 平・断面図

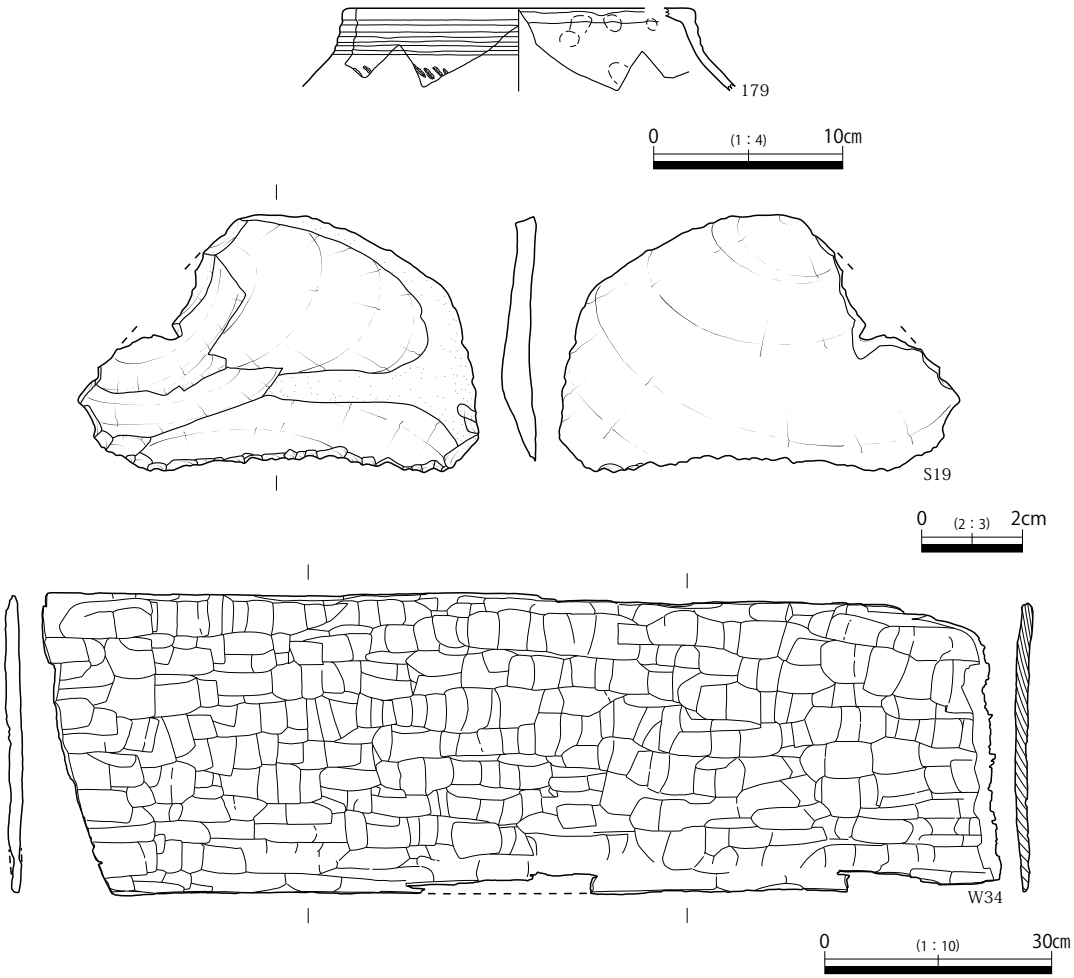


図 86　29 土坑 出土遺物

ている。壁板の転用であろう。

（8）弥生時代中期遺構群の機能と変遷過程

以上のように、弥生時代中期においては、おそらくは自然流路に水利施設を設置し、積極的な利用を始めた 14 溝を起点として、徐々に溝が規模を縮小していく状況が確認された。遺構群の時期は出土遺物や重複関係から見る限り、各遺構の埋没時期はすべて弥生時代中期後葉に収まる可能性が高く、比較的短い期間に展開したようである。

溝内に設けられる木製構造物は、各段階の利水状況を端的に示す遺構と評価できる。木製構造物は、14 溝のように流れに直交するように設置されるものと、26 溝や 28 溝のように溝の肩を被覆するように設置されるものがあり、前者は堰、後者は護岸と評価できるが、いずれも横木の上に杭を斜めに立て並べ、樹皮で被覆し、その上部に粘質土を盛り上げる点で構造上の共通性がみられる。水利施設としての目的や役割は異なっても、水流による浸食や破壊を防ぐ構築物として、その構造は同じくなることが理解され、当時の治水や土木技術を考える上で重要である。

14 溝内の木製構造物を堰として評価した場合、取水方向は溝の西方向と考えられる。14 溝西側は 26 溝や 28 溝と切り合っているために未調査であり、取水路などの施設の確認は行えていないが、調査を行えた 14 溝東側では、水利施設付近に取水路は確認できなかった。

調査区の西側では現在の三山口川が北流して湖山池にそそいでおり、14 溝はその旧河道か、その

分流にあたる可能性がある。大規模ではないものの、数次にわたる砂礫の供給を受けていることから、水利施設が度重なる浸食や埋没などの被害を受けた状況が看取される。14 溝内で検出された木製構造物群は、度重なる被害に対して何度も補修・修復が行われた状況を示しており、水路としての 14 溝の重要性を示唆するが、14 溝が埋没した後の遺存流路と考えられる 19 溝には、水利施設は設置されていない。26 溝の東岸に設置される木製構造物は、三山口川旧河道から受ける水流を北東方向から北方向に変化させるのに伴って構築された護岸施設であり、これ以降は 28 溝、29 土坑と規模を縮小しながら、さらに西方へ溝状遺構が変遷していく。26 溝、28 溝ともに、溝の北側が調査区内で完結し、さらに 29 土坑になると水溜め状の遺構となっていることから、19 溝の埋没以降、調査区周辺の水文環境が大きく変化したことを想定させる。

2　第 2a 層下面の遺構と出土遺物

（1）概要

側溝や断ち割り断面の中で、弥生時代前期以降、中期にかけての流路が存在することが確認でき、27･33･40 溝の 3 つの遺構を設定した。いずれも砂礫で埋没している。断面中で確認したのみであり、平面的には撹乱の底などを除いて調査していないが、掘削が及んだ場所では一定量の遺物の出土がみられる。

（2）27 溝

遺構（図 87、PL.23）

近世～近代の撹乱である 21・22 落ち込みの底面において、弥生時代前期の土器を多量に含む砂礫を確認し、これを 27 溝とした。出土した遺物については取上げを行ったが、下層を掘り下げての調査は行っていない。平面プランは不明だが、南方の 28 溝の下層に確認される砂礫層からも弥生時代前期の土器が出土しており（図 77）、27 溝と同一流路の可能性があるものとして、取上げを行っている。

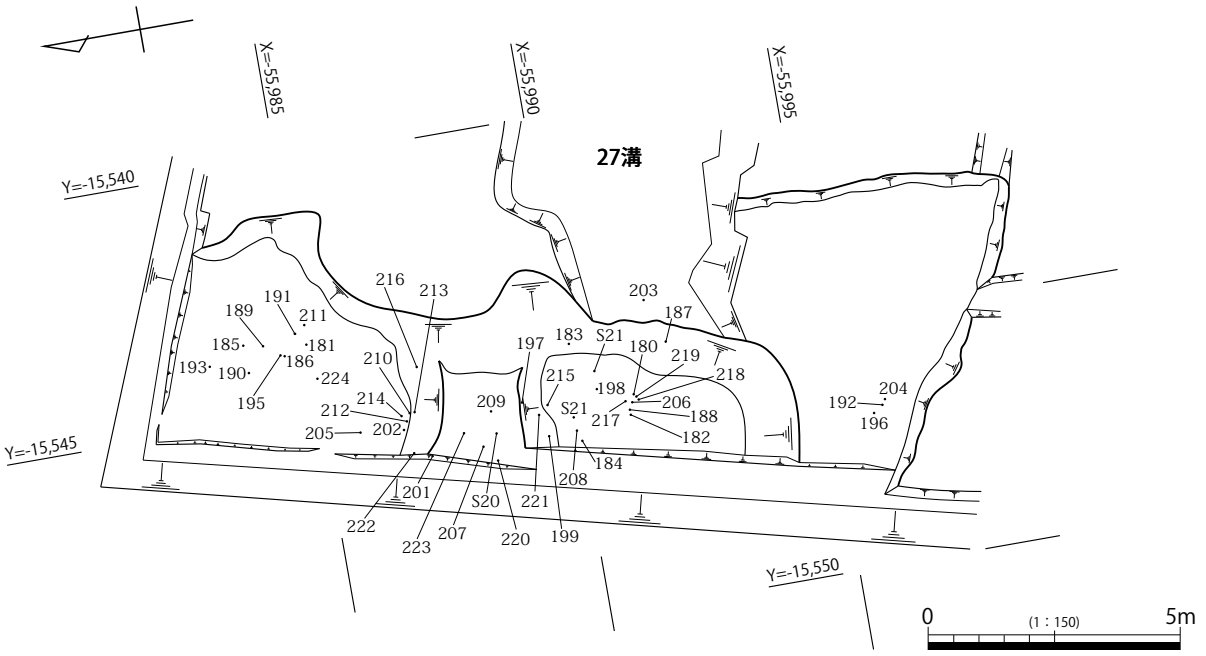


図 87　27 溝 遺物出土状況図

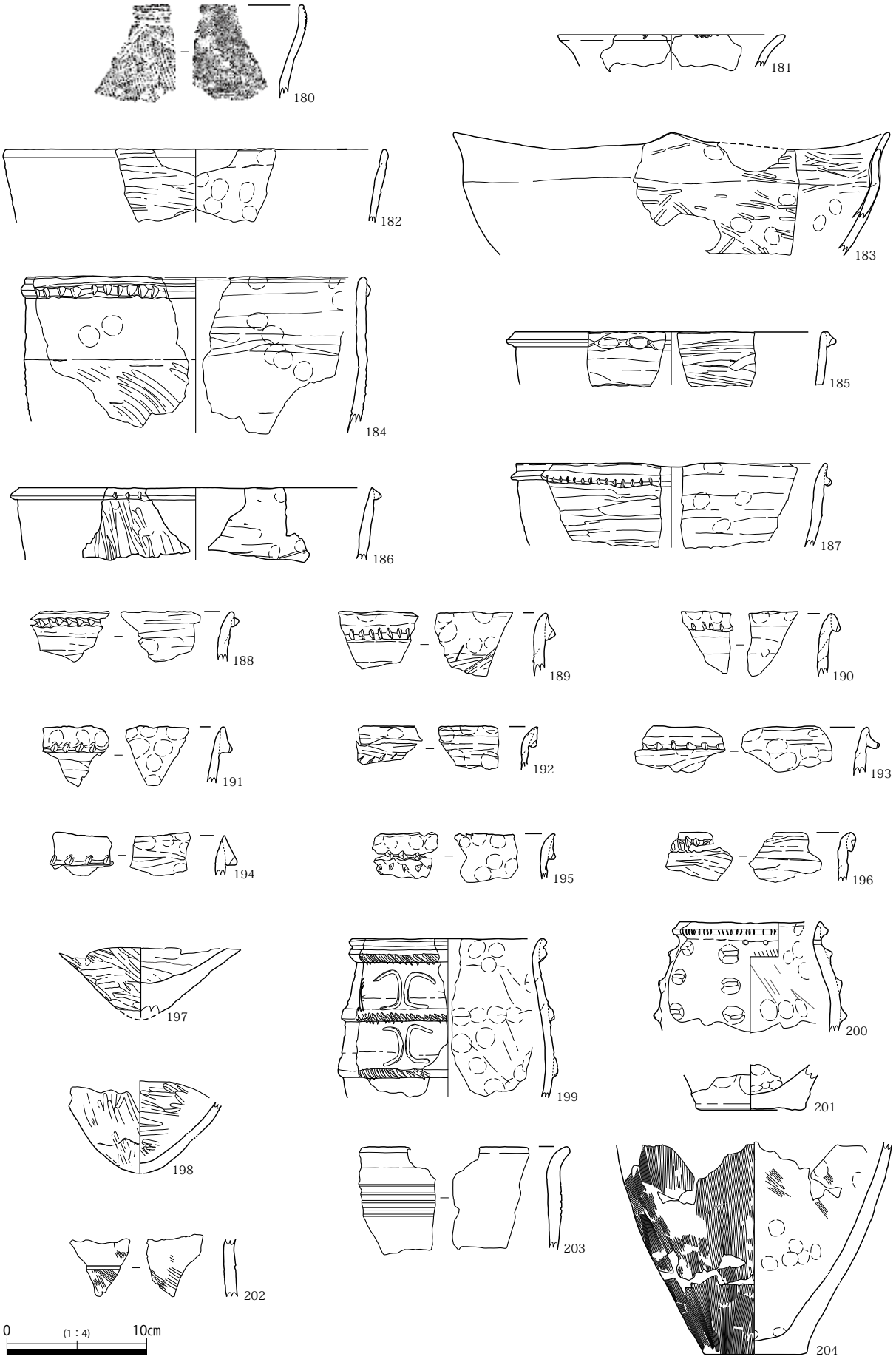


図 88　27 溝 出土土器（1）

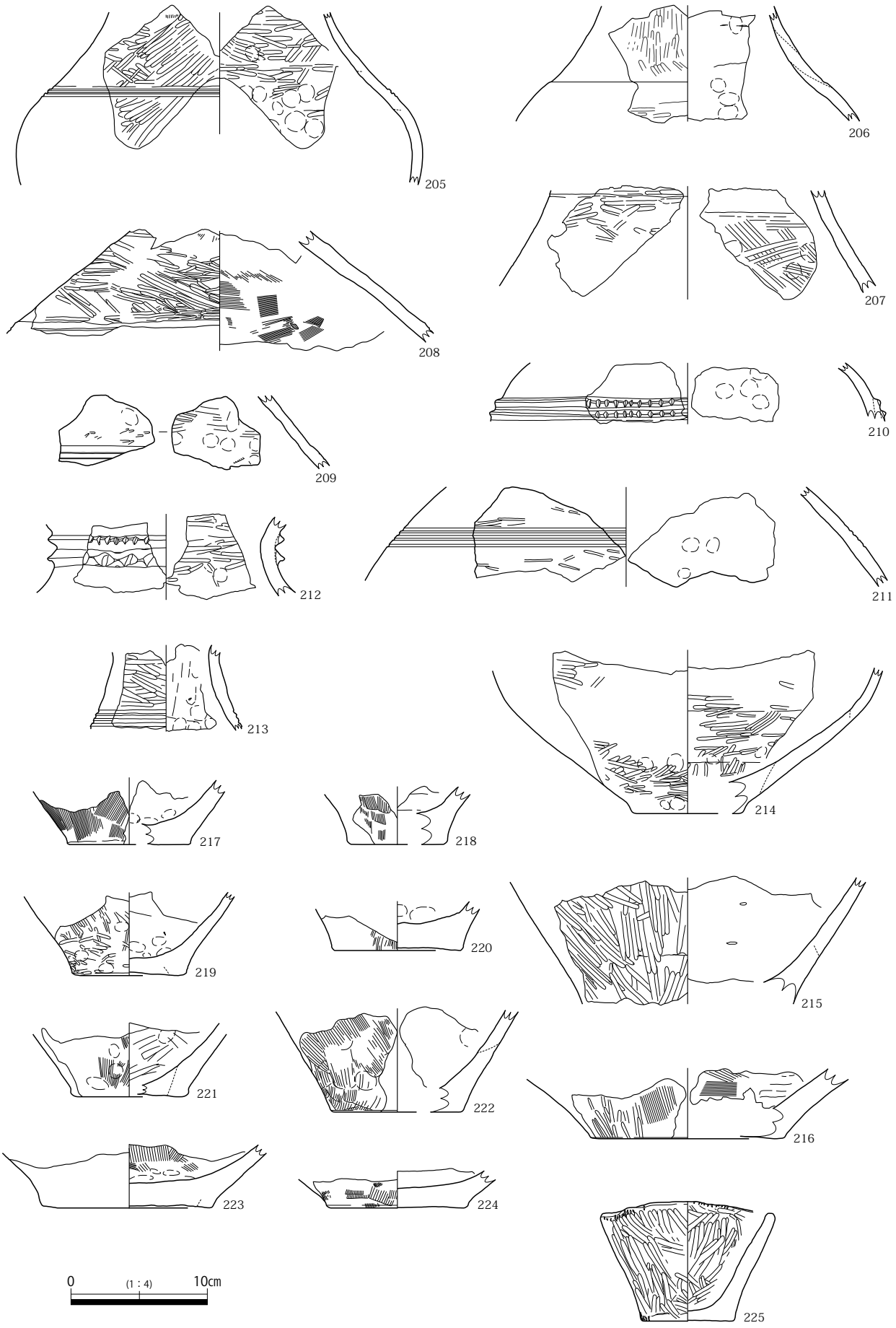


図 89　27 溝 出土土器（2）

出土遺物

＜土器＞（図88・89、PL.70～73）

27 溝からは、縄文時代後期から弥生時代前期の土器が多く出土した。主体となるのは縄文時代晩期後半の突帯文土器、弥生時代前期前～中葉の弥生土器である。そのうち、特徴的な資料を中心に抽出し、実測をおこなった。

180 ～ 201 は縄文土器である。180 は深鉢の口縁部で、口縁部が緩やかなＳ字状を呈する。外面は二枚貝条痕を地文とし、口縁部に沈線文が施される。内面は指による丁寧なナデである。181 は縄文時代後期に帰属すると考えられる口縁部で、大きく逆ハ字形に開くことから浅鉢の可能性が高い。全体が風化しているが、口縁端部に細密な縄文が観察できる。182 は粗製の深鉢で、口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。外面は擦痕が残る粗いナデ、内面はナデと指押さえで調整する。183 は波状口縁をもつ浅鉢で、縄文時代晩期前半期に帰属するものと推定される。内外面に丁寧にミガキを施す。また、201 は縄文土器の底部で、安定した平底である。内外面を指によるナデ、指押さえで成形する。

184 ～ 200 は縄文晩期後半の突帯文土器である。184 ～ 196 はいずれも口縁部で、器壁が直立ないし外傾することから、砲弾形の胴部を持つものと推定される。また、口縁部の貼付突帯、刻目の形状から、新旧の様相をもつ土器が混在していることが分かる。古い様相を示す 184・188 は、口縁端部のやや下にＤ字状の大きな刻目を施した突帯を貼りつける。一方新しい様相を示す 185 ～ 187・189 ～ 196 は、口縁端部に接して刻目突帯が貼りつけられるが、その中でも 187・193 は突帯が下方向に垂れ下がるものである。器面調整は、内外面ともに指押さえと、指や工具によるナデで、擦痕が残る。197・198 は突帯文土器の底部である。197 は尖底で、外面を粗いナデ、内面をナデで調整する。198 は丸底を呈し、内外面をミガキで整える。

このほか、特殊な突帯文土器も出土した（199・200）。199 は深鉢で、器壁が内湾して立ち上がり、口縁部が短く外反する。胴部下半を欠く。口縁部と胴部に合わせて３条の貼付突帯があり、ヘラ状工具で柳葉状の刻目を施す。口縁端部の突帯上には１条の沈線が巡っている。突帯に挟まれた器面には、Ｘ字形のような沈線文が刻まれ、一部には櫛描文のような沈線状の文様も観察できる。内面はナデと指押さえによって成形する。また 200 は、199 よりも口縁部がすぼまった小型の深鉢で、口縁部を覆うように突帯を貼り付け、細かい刻目を施す。最大の特徴は、胴部外面に山形の突起が等間隔に貼り付けられている点である。また、口縁部の突帯下に２ヶ所の円孔が穿たれる。器面調整は内外面ともに指押さえとナデである。

202 ～ 225 は弥生土器である。弥生土器には、甕、壺と、甕または壺の底部、鉢がある。いずれも弥生時代前期に帰属する資料で、壺の比率が高い。

202・203 は甕の口縁部である。202 は口縁端部を欠くが、203 と同様に口縁部が短くく字状に外反するものと推定される。いずれも頸部に沈線が巡り、202 には内外面にハケメ調整が残る。前期前葉に特徴的な甕である。204 は甕の胴部下半で、外面には全面に縦方向のハケメが施される。上半を欠くため、詳しい時期は不明である。

205 ～ 209 は遠賀川式土器の壺で、全形がうかがえるものはないが、遠賀川式土器の特徴である肩部の段（206・207）、沈線（205）、削り出し突帯（209）などが明瞭に観察できる。器面は外面を丁寧なミガキ、内面をハケメと指押さえで調整し、205 のみ内面にもミガキが施される。210・211 は前期

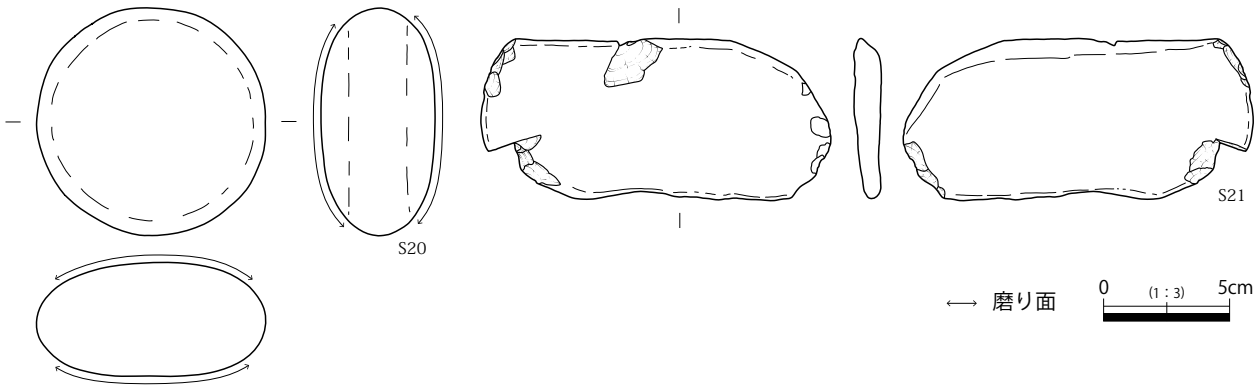


図 90　27 溝 出土石器

後葉の特徴を持つ壺の肩部で、210 は２条の刻目突帯、211 は４条の沈線が巡る。212・213 は頸部片である。212 は頸部に断面三角形の突帯が貼り付けられ、大小の刻目が施される。内面にミガキ調整と指頭圧痕が観察できる。頸部に刻目突帯をもつことから、前期後葉に位置づけられる。213 は、頸部が長く、口縁端部が短く外反する縄文系の壺である。頸部下端に、現状では４条の沈線が引かれ、外面をミガキ、内面をケズリ、ナデ、指押さえで調整する。前期前葉に帰属する。

214 ～ 216・223・224 は壺の胴部下半および底部である。器壁は底部から大きく開いて立ち上がっており、胴部が玉葱状に張った遠賀川式壺の形態に一致する。外面調整はミガキ、ナデ、内面調整はミガキ、ハケメ、ナデである。

217 ～ 222 は甕または壺の底部と考えられる。安定した平底であるが、一部わずかに上げ底になる資料も存在する。外面調整は 219 のみミガキで、その他はすべてハケメを施す。内面はナデ、指押さえ、ハケメ調整を施す。詳しい時期の特定は容易でないが、いずれも弥生時代前期に収まるものと考えている。

225 は小型の鉢である。無頸の甕のような形態で、底部は安定した平底である。内外面はミガキ調整で覆われ、口縁端部と底部の側面に細かな刻目を施す。

＜石器＞（図90、PL.73）

石器は少量の出土である。加工痕のある剥片１点、磨製石器未成品の可能性がある石器２点（接合して１点）、磨石１点が出土した。すべて安山岩製である。S20 は円礫素材の磨石、S21 は扁平な礫の周縁に剥離が加えられたもので、石庖丁の未成品の可能性などが考えられる。

（３）40 溝

断ち割り１断面（図 12）　および、14・19 溝東西Ｃ断面（図 40）で確認した。平面的には調査できていないが、断ち割り１の掘削中に弥生土器の小片が２点出土した。

（４）33 溝

遺構

断ち割り１断面（図 12）および、14・19 溝東西Ｃ断面（図 40）で確認した。平面的には調査できていないが、40 溝の直下で確認される。断ち割り１の掘削中に比較的まとまった量の縄文土器や弥生土器などが出土している。

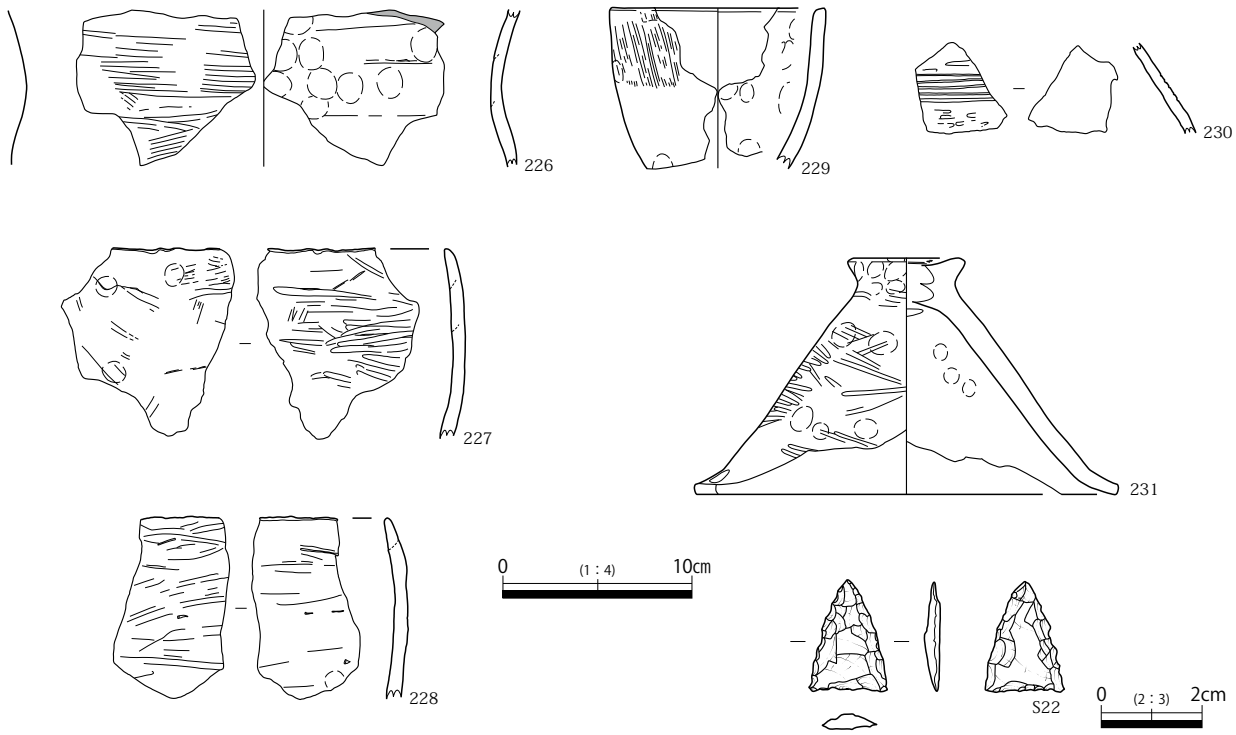


図 91　33 溝 出土遺物

出土遺物

＜土器＞（図 91、PL.73）

33 溝からは、縄文時代晩期から弥生時代前期の土器が出土した。

226 ～ 229 は縄文土器である。226 は篠原式の深鉢胴部である。頸部から肩部にかけてくびれており、口縁部が外反する。外面調整は二枚貝条痕、内面調整はナデと指押さえである。227・228 は粗製深鉢の口縁部で、口縁部がやや内湾して立ち上がる。全形は不明であるが、砲弾形の胴部を呈するものであろう。いずれも内外面はナデ調整が基本であるが、一部にハケメやケズリが観察できる。２の内面にはミガキが施されている。229 は小型の浅鉢である。外面にハケメ状の擦痕が残る。そのほかは内外面ともにナデ、指押さえによって器面を調整する。

230 は弥生時代前期後葉の特徴を持つ壺の頸部片である。頸部に巡る沈線は５条あり、外面をミガキで調整する。内面は風化により調整はわからない。231 は蓋である。背の高い山形の形状を呈し、把手部分も丁寧に作り出される。外面はミガキと指押さえ､内面はナデと指押さえによって調整する。形態や胎土、調整などから、弥生時代前期の範疇に収まるものと考えられる。

＜石器＞（図91）

安山岩（サヌカイト）製の石鏃（S22）が１点出土した。

第５節　第 3a 面の調査

１　概要（図 92）

第 3a 層の上面に形成される遺構面で、調査区南半の４・６溝と１土坑、調査区北西部の 16 溝がある。縄文時代晩期から弥生時代前期にかけて形成された遺構面である。

後述するように、４溝と６溝は同一の遺構で、規模の大きな流路跡である。埋土中から、大量の遺

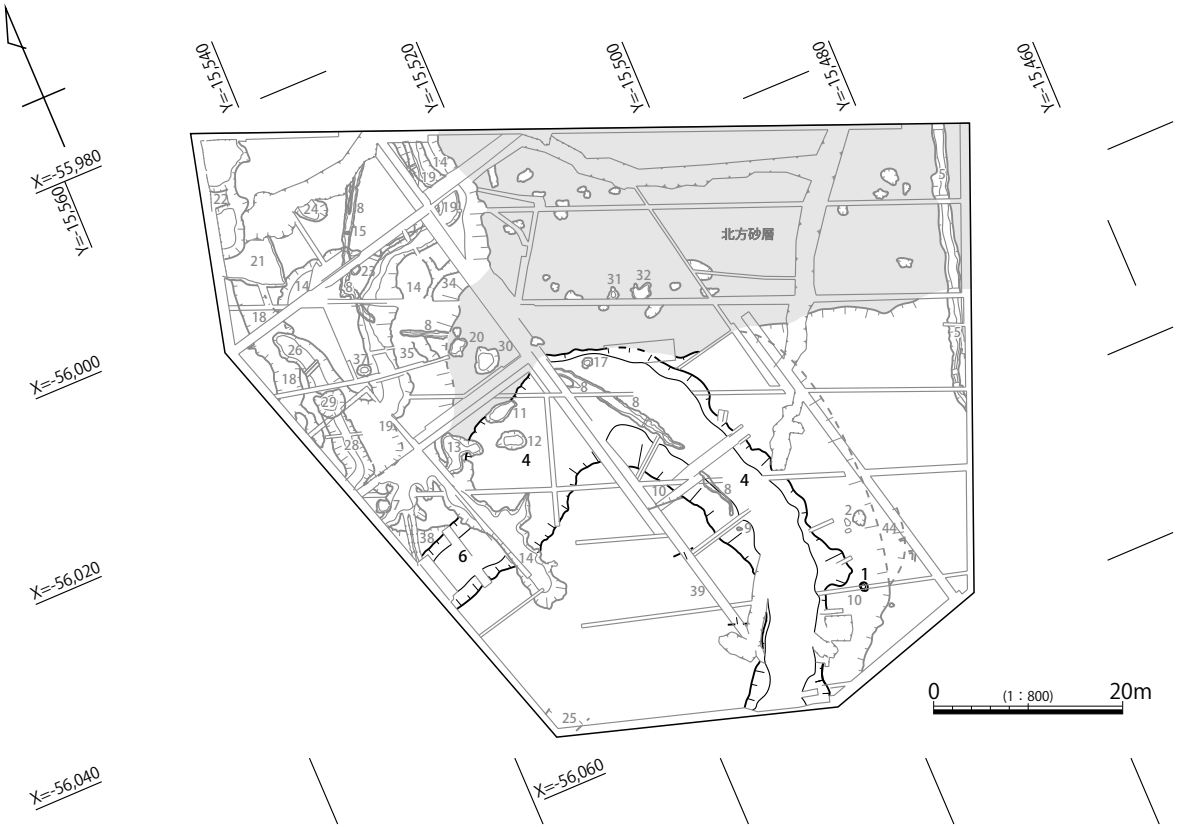


図 92　第３a 面全体図

物が出土しており、出土土器から縄文時代晩期末葉に埋没したと考えられる。多くの出土遺物のなかでも、縄文時代晩期の編組製品がまとまって出土した点が特筆される。

２　第 3a 面の遺構と出土遺物

（1）１土坑

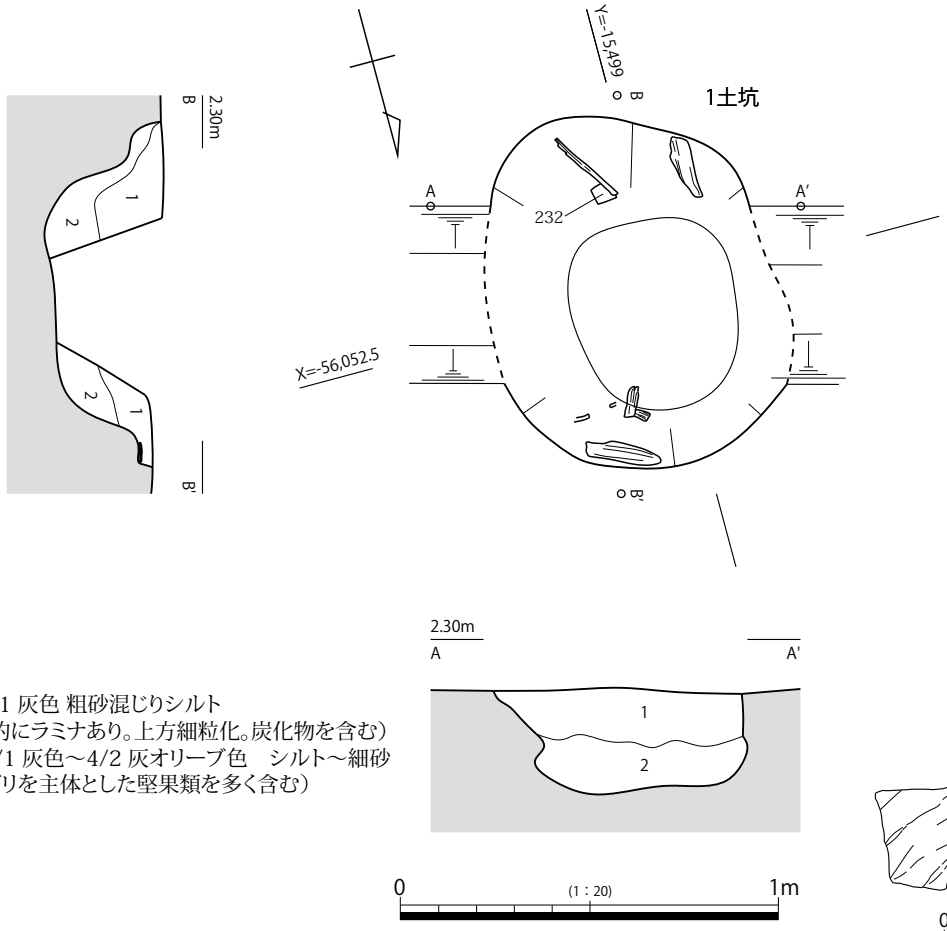
遺構（図 93、PL.23）

４溝の東肩付近で検出した。４溝の前身河川と考えられる 10 溝埋土の上から掘削されている。直径約 0.8 m、深さ約 0.3 mの円形土坑で、現代の暗渠によって中央部を東西に撹乱されている。

埋土からは縄文土器片１点（232）と木材片、ドングリを主体とした堅果類が出土した。堅果類は下層ほど多い（PL.23）。埋土はやや暗い灰色のシルトを主体としており、自然埋没した可能性が高い。貯蔵穴の可能性も考えられるが、周辺からは類似の遺構はみつかっていない。ただし、１土坑よりも北側では、重機掘削終了後に縄文遺物包含層（第 3a ～ 4a 層）を削り込んで遺構検出を行っていないため、類似の遺構が存在する可能性を残す。

出土遺物（図 94、PL.73）

232 は縄文時代晩期後半のものと考えられる深鉢の体部片である。表面に強いナデ、内面にナデが観察できる。



1　10Y4/1 灰色 粗砂混じりシルト
（部分的にラミナあり。上方細粒化。炭化物を含む）
2　7.5Y4/1 灰色～4/2 灰オリーブ色　シルト～細砂
（ドングリを主体とした堅果類を多く含む）

図 93　１土坑 平・断面図

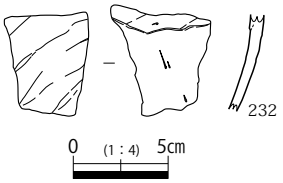


図 94　１土坑出土土器

（２）　４溝・６溝

遺構（図 95 ～ 99、PL.24 ～ 29）

＜概要＞

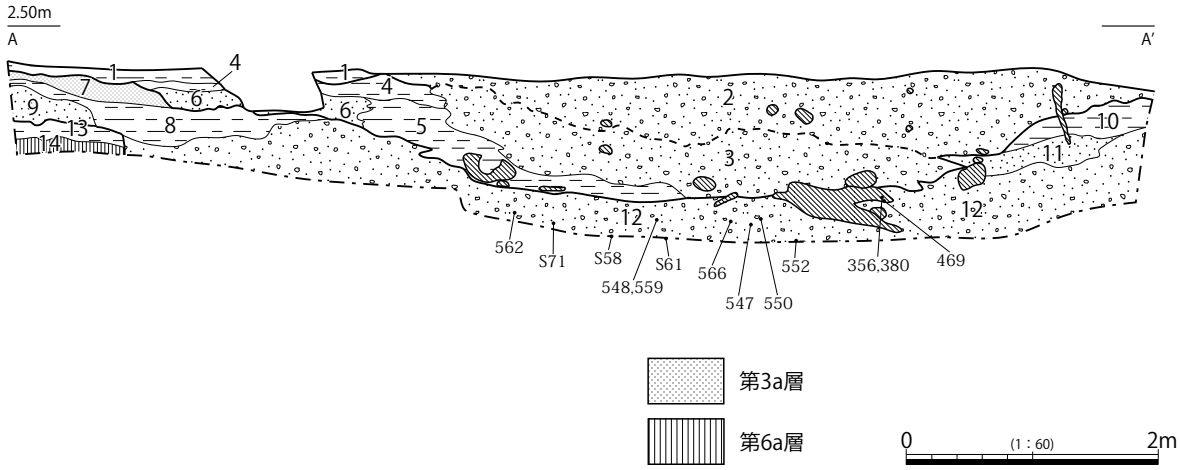
４溝は、調査区南端から北方に延び、後述する北方砂層に当たって西方に大きく屈曲する流路である。６溝は、調査区西側で検出された流路である（図 95）。両者はともに砂礫で埋没し、縄文時代晩期の土器および木質遺物を含む。調査当初は両者を別の遺構と認識していたが、調査が進捗し、４溝が北方で大きく西に屈曲しながら６溝と接続する平面プランが確認されるに至って、両者が同一遺構であることがわかった。内部の堆積状況と底面標高から、４溝から６溝への流向を持つと考えられるが、両遺構の間に未調査部分があるため断言できない。遺物の取り上げや写真撮影については、それぞれの遺構番号で記録化しているため、調査段階での統一化は図っていない。

４溝の調査は、調査区南端から断ち割り１まで、６溝の調査は調査区西端から 14 溝までとなっており、両者の接合部分、延長距離にして約 15m は調査を行っていない（この未調査部分については４溝として取り扱っている）。この部分の４溝の北肩には、縄文土器を多く含む暗青灰色の盛土らしき遺構が、断ち割りによって確認された（図 18）。平面調査は行っていないが、４溝プラン内において、盛土の頂部と思われる粘質土が東西方向に約５ｍ続く状況も確認される。盛土遺構は、４溝埋没砂で被覆されることから、４溝内に設けられた何らかの施設である可能性が考えられよう。

４溝の掘削にあたっては、大きく上下二層に分けて遺物の取り上げを行った。ただし、上下層とも

Y=15,520
Y=15,510
Y=15,500
Y=15,490
X=56,040
X=56,010
Y=15,530
X=56,050
X=56,020
Y=15,540
X=56,060
X=56,030
S31
S25
S27
S26
S33
編組製品10(W52)
編組製品13(W55)
433
根株7
根株1
編組製品12(W54)
横木A
468
W126
496
243
404
254
編組製品11(W53)
259
258
497
352
374
257
405
349,383
S29
255
395,419
233,270,273
356,380
469
401
481
567
398
370
4溝
350
10溝
未調査
横木B
編組製品 8 (W50)
編組製品 4 (W46)
編組製品2(W44)
285,294
277
編組製品 6 (W48)
269
267
333
271,288,290,571
464
278
338
505
430,466
302
287
308
397
367
編組製品3
(W45)
465
291
311
286
306
453
298
295
1土坑
282
274
484
根株5
373,417
272
275,299
471
319
235
297
杭
450
482
301
392
根株3
439,467,470,473
457
414
284
403
380
406
39溝
296
358
435
根株6
編組製品 7
(W49)
394,399
396,441
400
283
編組製品 1
(W43)
289
292
根株2
354,372,438
459
483
409
240,357,362,384
456
421
W111
S39
W38
W39
編組製品 9 (W51)
横木C
329
W38
38溝
編組製品5(W47)
523
6溝
519,522
524
515,516
525
517,518
520
512
0
(1：150)
10m

図 95　４・６溝 平面図



4溝（最上層）	1	10GY6/1 緑灰色 極細砂混じりシルト
4溝（上層）	2	5Y8/1 灰白色～ 8/3 淡黄色 礫～粗砂 （ラミナ顕著。上方及び西方に細粒化。西方は 10Y4/1 灰色 シルトの互層となる。径 1cm 程度の礫含む）
4溝（下層）	3	5Y8/1 灰白色～ 8/3 淡黄色 礫～粗砂 （ラミナ顕著。上層に比べ礫多く含む。西方は 10Y4/1 灰色 シルトの互層となる。径 2cm 程度の礫含む）
	4	10GY6/1 ～ 5/1 緑灰色 細砂混じりシルト
	5	10G6/1 緑灰色 シルトと、5Y8/1 灰白色～ 8/3 淡黄色 粗砂～細砂の互層
	6	10GY5/1 緑灰色 シルト混じり細砂～粗砂
10溝	7	10GY5/1 緑灰色 シルト～粗砂（炭化物を含む）
	8	5BG5/1 青灰色 シルト～粗砂（下方粗粒化。部分的にラミナあり）
	9	5Y8/1 灰白色～ 6/1 灰色 シルト混じり粗砂（ラミナあり。上方暗色化・弱土壌化）
	10	10GY6/1 緑灰色 細砂混じりシルト（部分的にラミナあり）
	11	5Y8/1 灰白色 細砂と、5GY5/1 オリーブ灰色 シルトの互層
	12	5BG7/1 明青灰色 礫混じり極粗砂～粗砂（ラミナあり。径 8cm の礫及び土壌を含む）
第5b層?	13	7.5GY5/1 緑灰色～ 3/1 暗緑灰色 粘土～シルト（上方明色化）
第6a層	14	10G3/1 暗緑灰色 粘土～粗砂

図 96　４溝 断面図

に砂礫を主体としており、両層の判別は容易ではない（図 96）。断ち割り断面であっても明瞭な分層は困難であり、確実に上下層に分けて取上げたとは言えない状況である。

４溝と６溝からは、多量の木材が出土した。多くは加工痕もなく、樹皮も付いたままの芯持ち材であることから流木と考えられる。サルノコシカケなどのキノコ類が木の幹に横方向に生えたままで出土する資料もあるため､倒木などが氾濫時に流出した状況なども示唆されよう。こうした木材のうち、明瞭な加工痕を持つものや、製品以外については、木材の両端をトータルステーションで測量することで出土位置を記録し、任意の場所で切断してサンプル化した後に取上げた（図 97）。また、半裁などの一次的な加工を施された木材や、炭化がみられるものなど、特筆すべき痕跡がみられるものについては、コンパクトデジカメによるメモ写真撮影を行い、法量や特徴などを記載した上でサンプル化した。なお、木材を被覆する砂礫の除去、取上げた木材の洗浄などに動力付きのハイプレッシャーポンプを利用した。脆弱な木材などへの使用には注意が必要だが、作業を効率的に進めることができた。

また、４溝の肩部には立木の根株が確認されている。これらは樹種同定分析の結果、ヤマグワが３点（根株２・５・７）、ヤブツバキが１点（根株１）、クリが１点（根株３）、エゴノキが１点（根株６）と同定された。縄文時代晩期の河畔植生として注目される。

＜横木＞

これらの木材とは異なり、４溝内に設置された可能性のある大型木材が４溝の３ヶ所で確認された（図 98）。北方から順に横木Ａ、Ｂ、Ｃと呼ぶ。これらの大型木材は、直径約 40 cm 以上の丸太材を

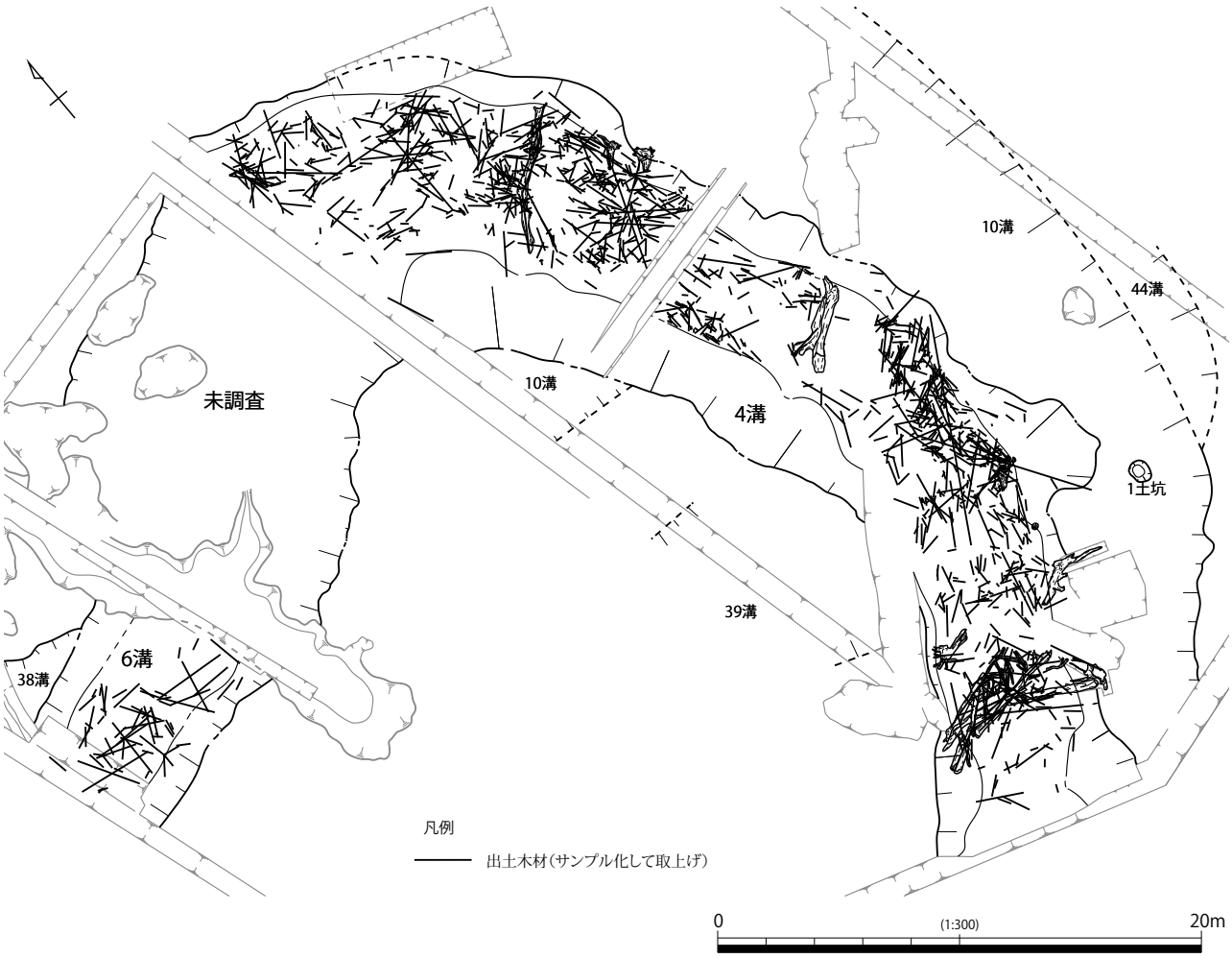


図 97　４溝・６溝 木材出土状況図

用いており、溝をふさぐ形で数本が横たわっている。特に横木Ｃでは、５本以上の大木が重ね合わさるように確認されている。溝周囲の立木が自然倒伏した可能性も否定できないが、他の流木と考えられる木材群より相対的に下層に位置していること、大型木材に接して杭の打設がみられること、周囲から編組製品や木製品、堅果類などが出土し、流路への人的関与が想定できることから、これらの横木について立木を意図的に伐倒することによって設置された堰状施設と評価したい。

横木Ａは、南西－北東方向に３本の木材が設置されている。最も東側の木材の東端は根株となっているが、下部から伸びる根の多くは払われたのか、腐食したのか、確認できなかった。木材に接して直径約３cm の細い杭が１本打設されていた。同様の細い杭の打設は横木Ｂ・Ｃでもみられる。横木に使用される大型木材を固定するための支持杭とも考えられるが、細すぎる上に、横木に対して１、２本程度と数が少ないことから、別の性格・機能を考えたい。また、横木Ａの南側には根株１と根株７が確認された。

横木Ｂは、横木Ａと同じく南西－北東方向に２本の木材を設置している。樹種同定の結果、それぞれオニグルミ、ヤマグワと同定された。南側の木材は、東端部が根株となっている。

横木Ｃは、多くの木材が絡み合った状況で確認されたが、大型の木材は５点である。木材の樹種同定結果は、ムクノキ、ヤマグワ、クリ、ムクロジ、エノキ、ヤブツバキ各１点ずつとなった。やや湾

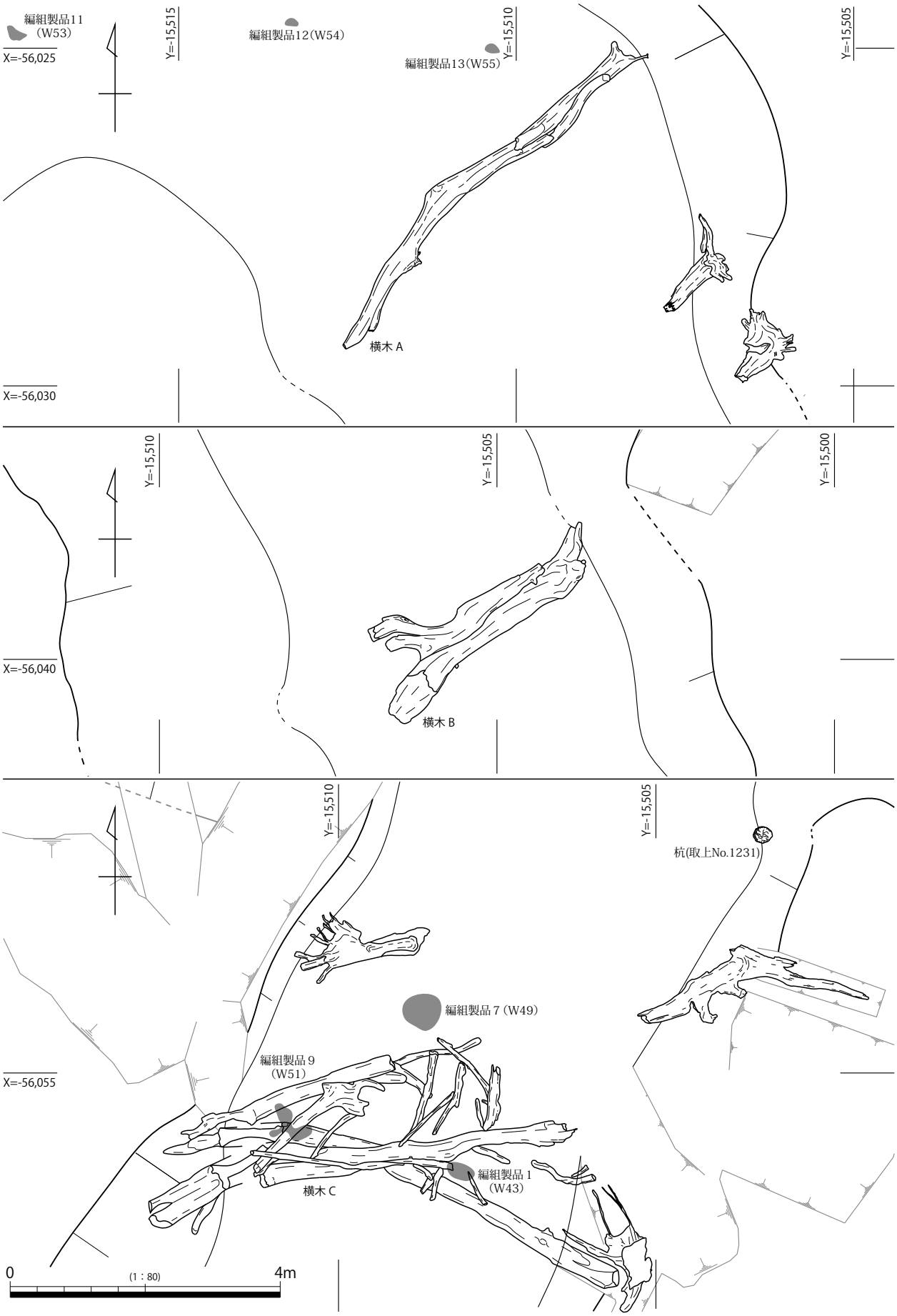


図 98　４溝 横木検出状況図

曲しながら東西方向に設置されており、横木Ａ・Ｂとは異なった主軸を持つが、４溝の流向に直交方向に据えている点では変わらない。最も下層に設置された木材（取上 No.995、樹種はエノキ）には、複数の抉りのような加工痕が確認された（PL.28－３）。

付近には、根株２・３・６が確認された。このうち、根株２（ヤマグワ）と根株３（クリ）は、横木Ｃの中に同じ樹種の木材が存在するので、立木を切り倒して横木に利用した可能性もあろう。また、横木Ｃから北方へ６ｍほど離れた４溝東肩には、直径約 20 cm の丸太（樹種はムクロジ）が立った

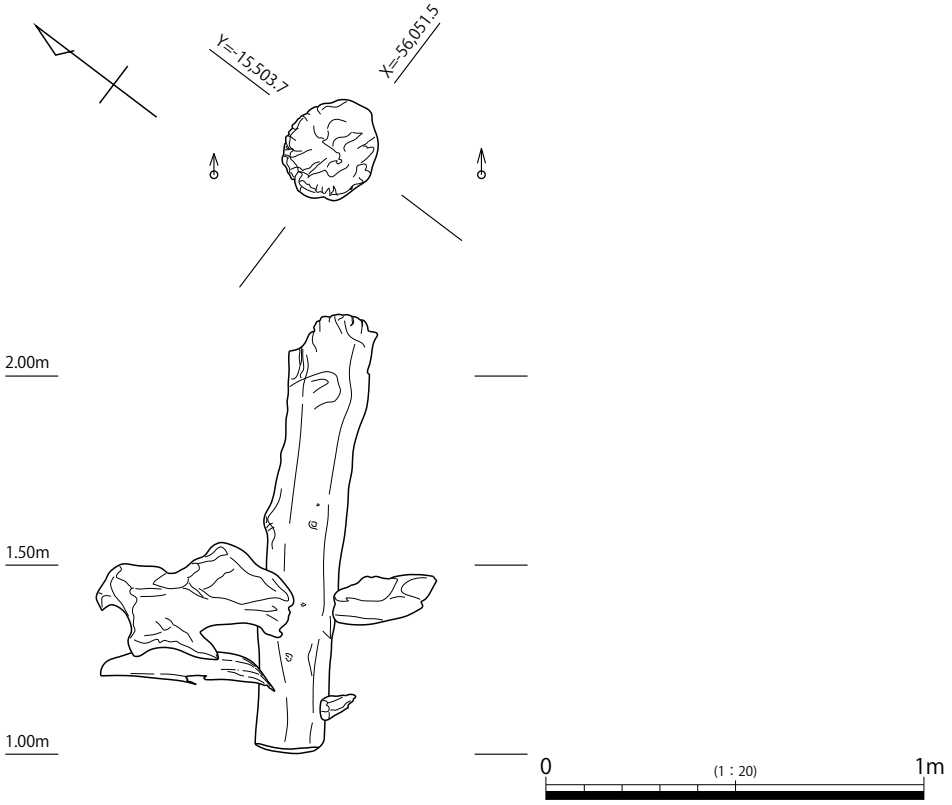


図 99　４溝 杭（取上 No.1231）平・立面図

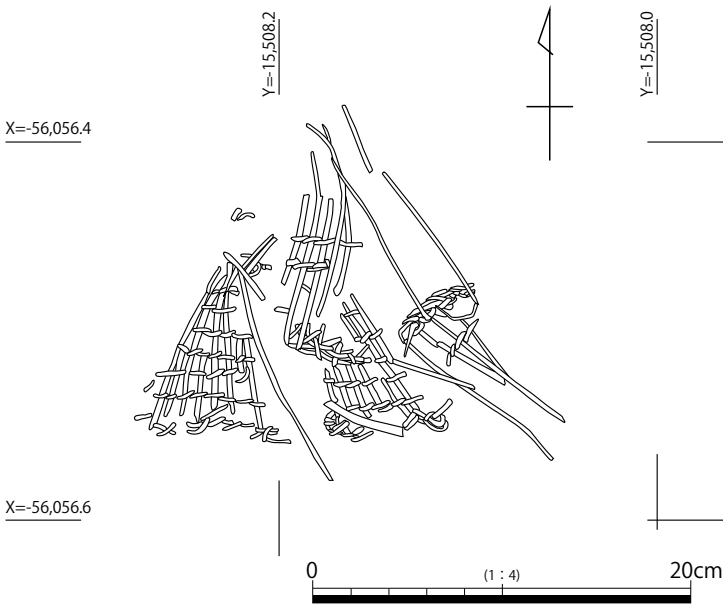


図 100　４溝 編組製品１出土状況図

状態で確認された（図 99）。下層の木材を貫通している状況から、打設された可能性が考えられるが、下端は伐採されたままの状況を示し先鋭にするような加工はみられない。

＜遺物の出土状況＞（図100～114、PL.30～44）

４溝から 12 点、６溝から１点の編組製品（カゴなど）が出土した。編組製品はいずれも砂礫に埋没しており、完形のものはない。強い水流によって流された後、埋没した状況を示すが、形状や製作方法のわかる良好な資料群であり、大きな距離は流れていないと評価できよう。編組製品の周囲から

図 101　４溝 編組製品２出土状況図

図 102　４溝 編組製品３出土状況図

出土する土器が縄文時代晩期末のもので揃うことから、一括性も高いと考えられる。

これらの編組製品については、現地において医療用ギプスによって側面を補強し、下部の土ごとアルミもしくはスチールの板で切り取って取上げた。その後は保存処理を施している。

編組製品の出土分布は、大きく①横木ＢとＣの間、②横木Ａの西側、③６溝内、の３ヶ所に分かれる。①からは８点の編組製品（編組製品１～４、６～９）が出土した。編組製品４の南側からは、径約４mm のテイカカヅラのツルを束ねたものが、北側からはヒノキを縦に裂き割いてヒゴ状に加工した 30 本程度の木材が束になって出土している（図 114、PL.42）。ヒゴ状の加工木材の束は、さらにもう２ヶ所で出土しており（図 113、PL.42・43）、編組製品の素材の可能性が考えられることから、遺跡内での編組製品の製作を想定することができよう。

②からは、４点の編組製品（編組製品 10 ～ 13）が出土した。

③からは、１点の編組製品（編組製品５）が出土した。

４溝および６溝からは、土器のほか、木製品が出土している。土器は、撹乱などからの混入品の可能性があるものを除けば、縄文時代晩期がほとんどで、早期から後期にかけての資料もある。完形に近いものや、肩部から出土したものなど、埋没位置を留めると考えられるものが全て縄文時代晩期の土器であるため、帰属時期として当該期が考えられよう。４・６溝の直下には、縄文時代後期以前と考えられる流路（10・38・41・44 溝）が存在しているため、縄文時代晩期よりも古い時代の土器群は下層流路からの混入の可能性が高い。また、縄文時代中期以前の遺物を含む第 6a・7a 層や、これと関連する遺構起源のものが混入した可能性も考えられよう。木製品では、横槌や自在鉤のほか、建

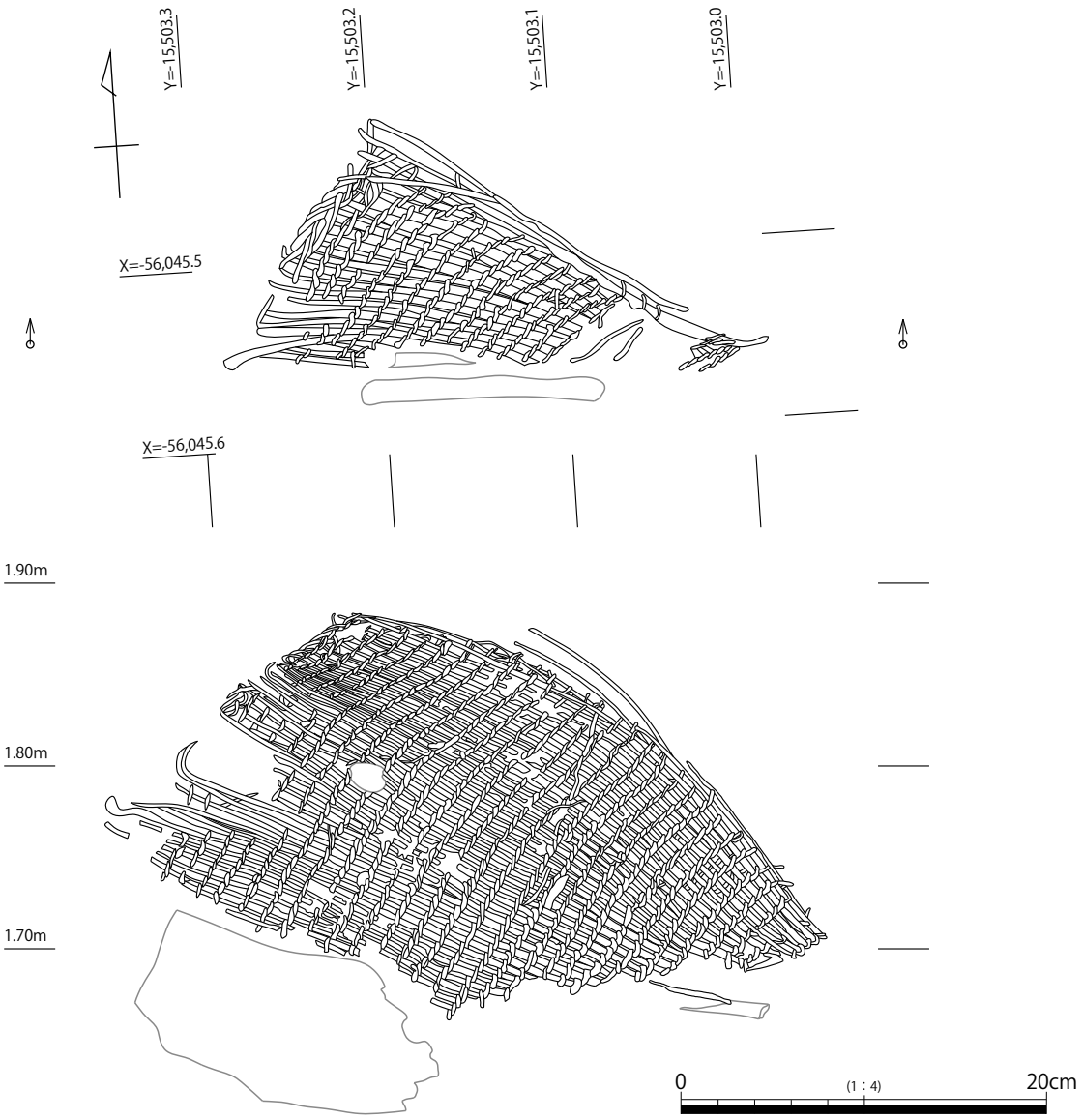


図 103　４溝 編組製品４出土状況図

築部材などが出土した。また、堅果類も多く出土しており、現地で掘削中に確認、取上げを行ったものとしてはトチ･クルミ･ドングリがある。一部ではトチのみが集積する場所も確認され（PL.44－２）、流路を利用したアク抜きや保管などが行われていた可能性を示唆する。

出土土器

a　４溝上層出土の縄文時代後期以前の土器

＜前期の土器＞（図115、PL.74）

連続刺突文を施す縄文時代前期の土器が出土している。３点を実測した。

233 はいわゆる３字文が施される羽島下層Ⅱ式の深鉢屈曲部片である。234 も、施された刺突文は典型的な３字文とはならないものの、羽島下層Ⅱ式並行期のものと考えられる。235 は内外面に貝殻条痕が、口縁端にキザミが施されている。

＜中期の土器＞（図116、PL.74）

縄文時代中期の土器が比較的多数出土している。中期全般の土器が見られるが、中期前半の船元式

図 104　６溝 編組製品５出土状況図

図 105　４溝 編組製品６出土状況図

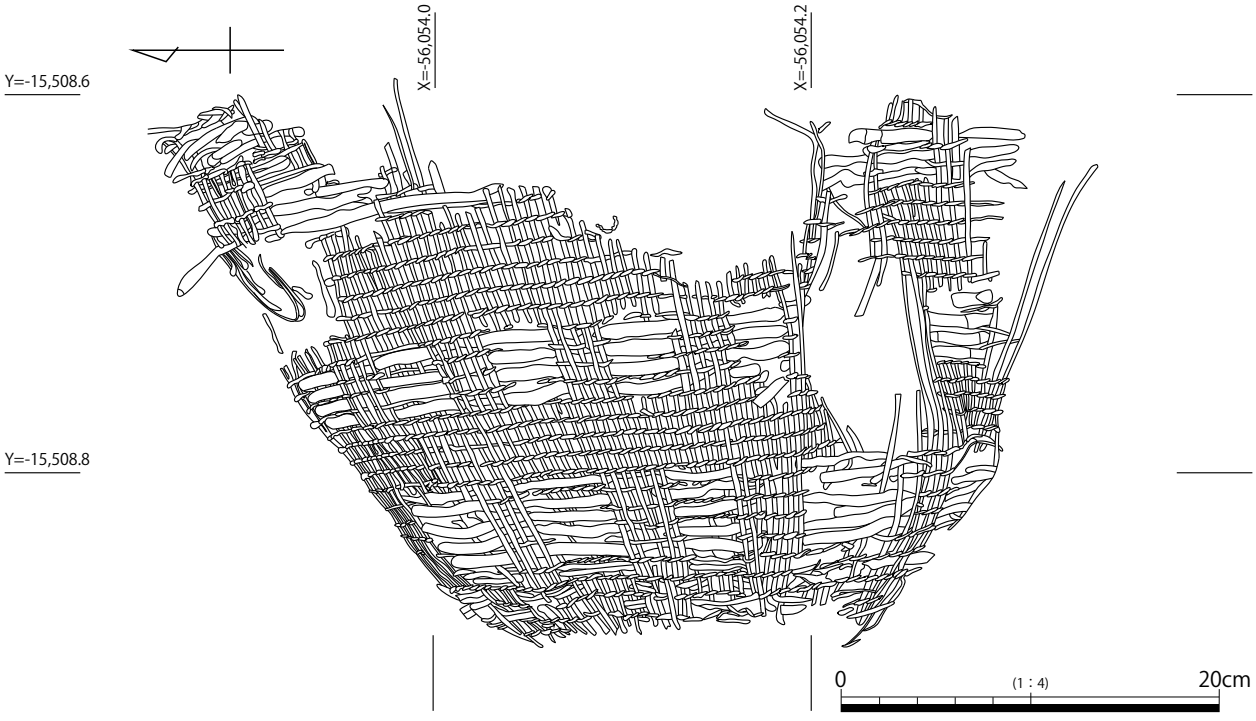


図 106　４溝 編組製品７出土状況図

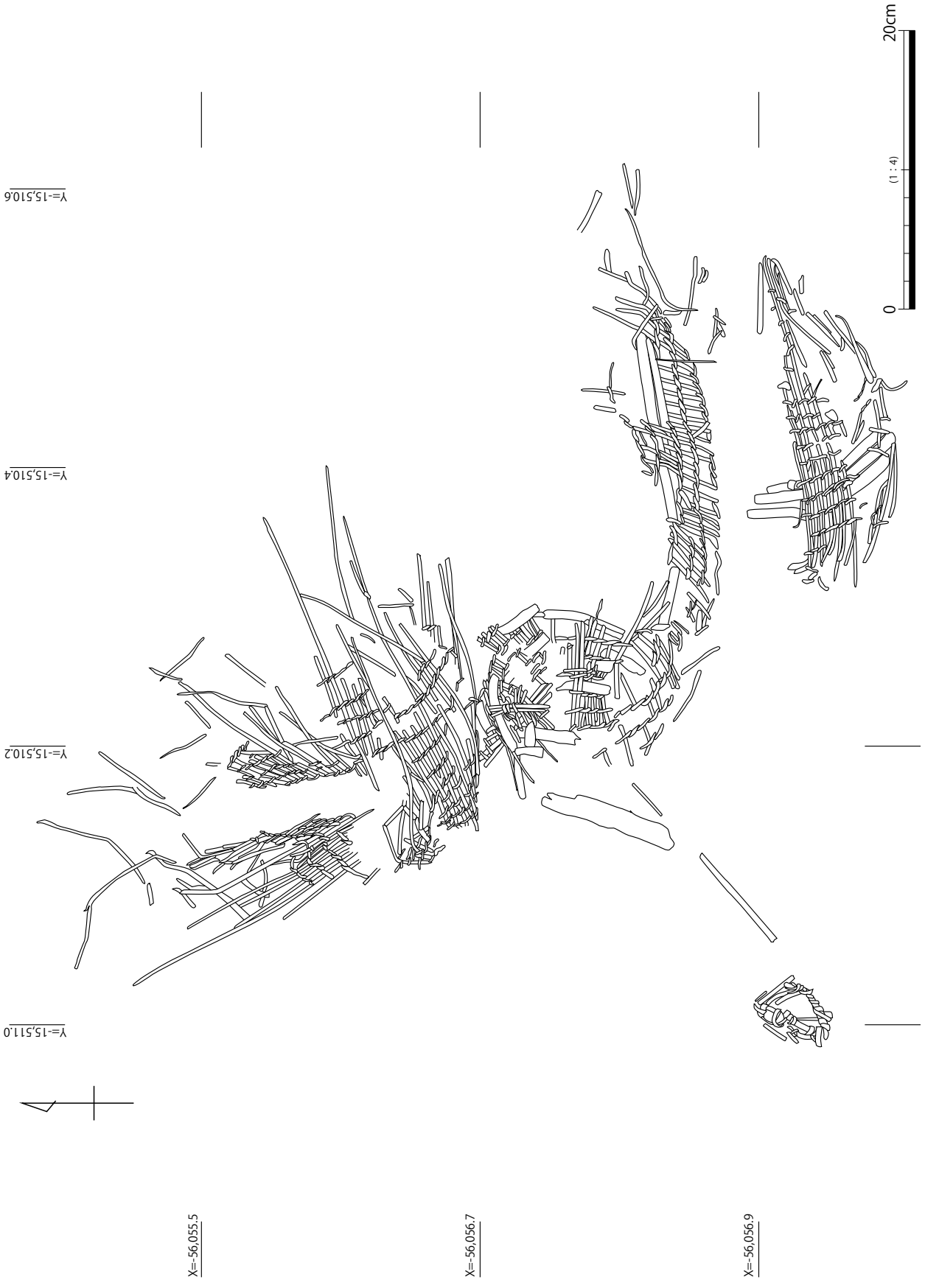


図 107　４溝 編組製品９出土状況図

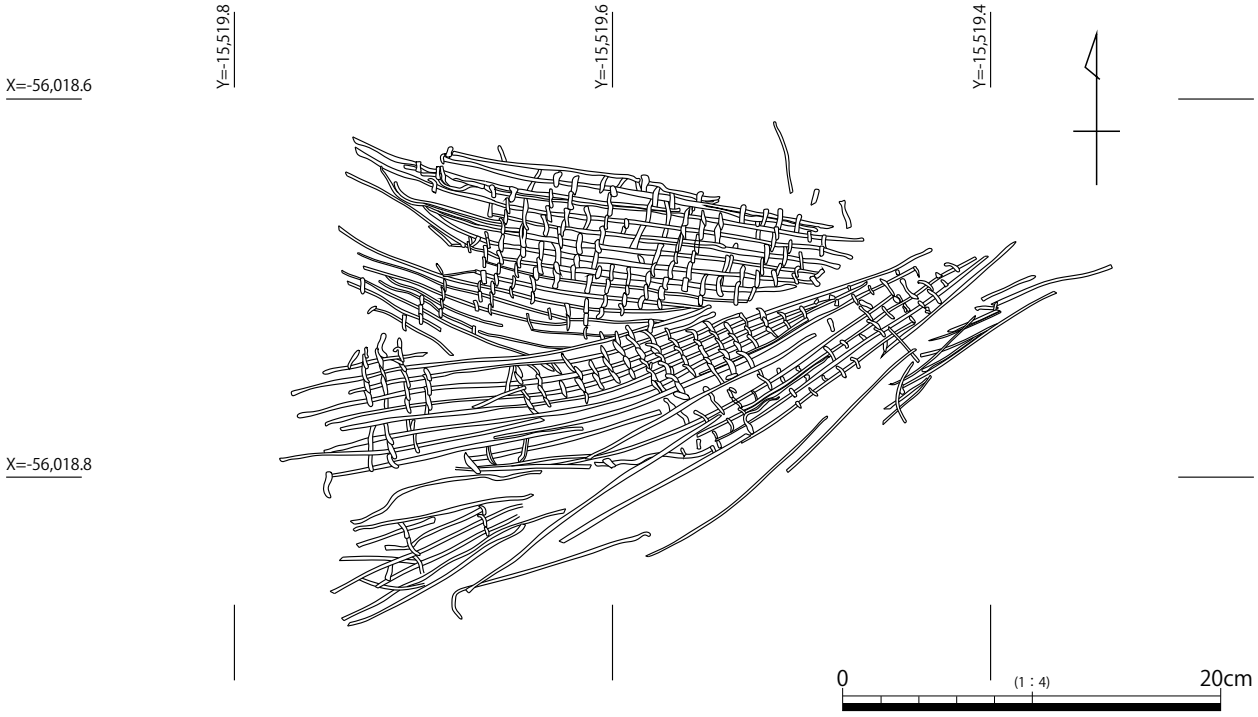


図 108　４溝 編組製品 10 出土状況図

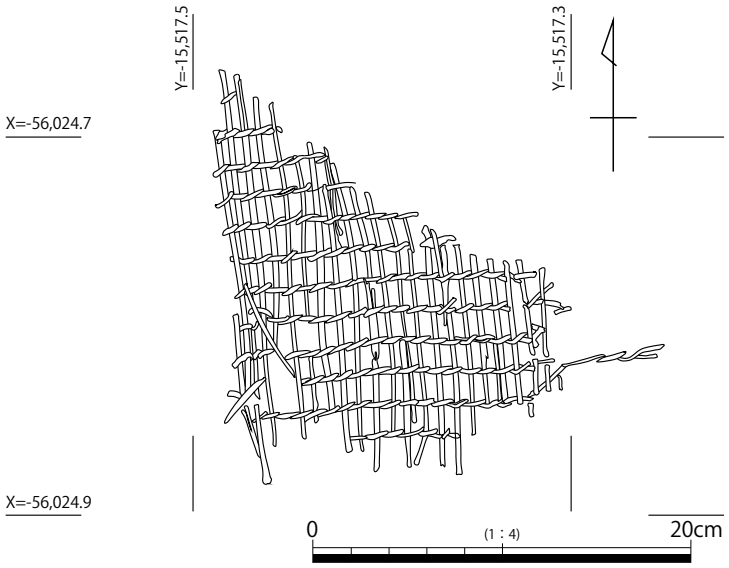


図 109　４溝 編組製品 11 出土状況図

に帰属する土器が主体となる。

236 ～ 252 は中期前半の鷹島式・船元式に帰属する土器である。236 は深鉢の口縁部片で、強く屈曲するキャリパー形の口縁～頸部、爪形文突帯、繊維痕のない長大な縄文といった特徴から、鷹島式に位置づけられる。237 ～ 241 は船元Ⅰ式に帰属すると考えた土器である。237 は強く屈曲する口縁をもち、外面全面と内面口縁部に縄文を施す。238 は、口縁部内面に粘土貼付肥厚帯がつくられ、その上に縄文が施されている。239・240 は外面に縄文を施すのみで特徴に欠けるものの、頸部が強く屈曲することから船元Ⅰ式に帰属するものと考えた。ただし、239 は屈曲部内面に明瞭な稜が形成されていないため、後出型式に帰属する可能性もある。242・243 は縄文地文に平行沈線が施される土

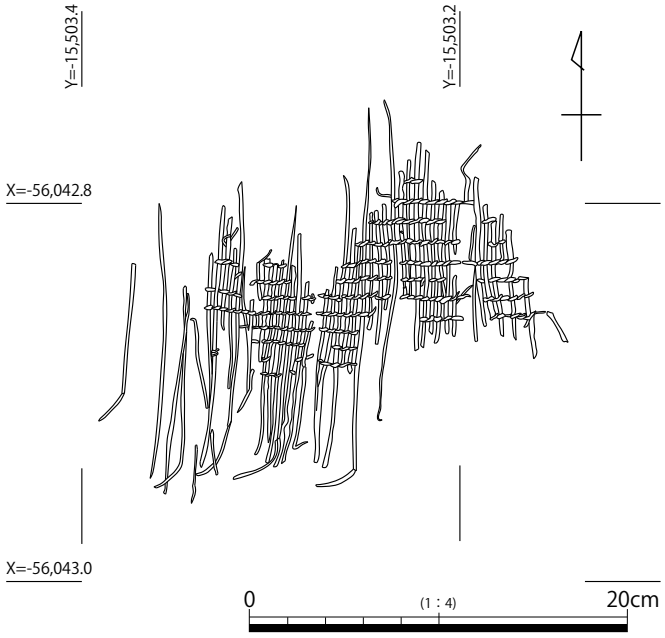


図 110　４溝 編組製品８出土状況図

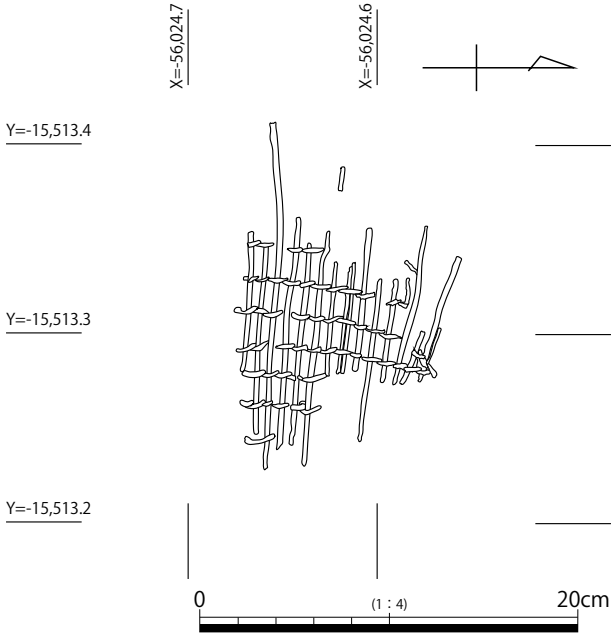


図 111　４溝 編組製品 12 出土状況図

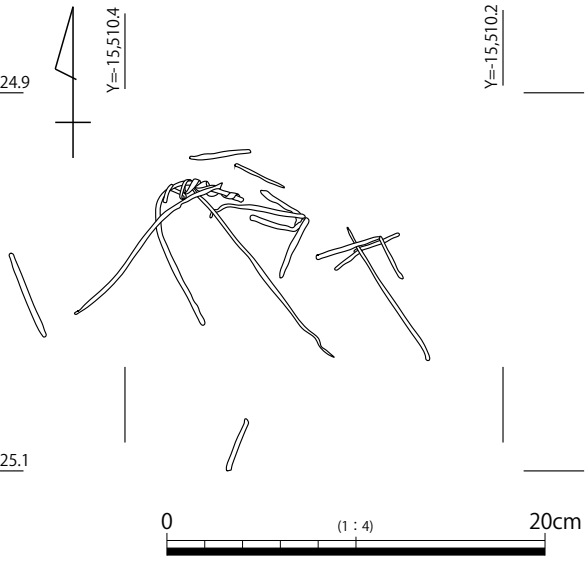


図 112　４溝 編組製品 13 出土状況図

器で、船元Ⅲ式に位置づけられる。242 の縦方向の平行沈線は、三角文の一部であろう。

244 ～ 252 は船元式の範疇に含まれると考えられるものの、明確な型式が判然としないものである。244 ～ 246 は口縁部に半裁竹管による押引文を施すもの。押引文だけを見れば、間壁分類（間壁 1971）の船元Ⅰ式Ｃ類とも捉え得るが、口縁部の内面縄文帯やキザミといった他の指標を満たさない。244 の頸部の屈曲は緩やかで、泉編年（泉 2008）での船元Ⅰ式の指標を満たさない。245 には縄文が見られない。246 は貼付突帯上に押引き文が施されている。247 ～ 251 は外面に縄文が施される口縁部片である。247・249・251 の口縁内面には、貼付け口縁様の粘土積みが見られる。252 は小片ながら縄文地文に平行沈線が確認できるため、船元Ⅲ式に帰属する可能性がある。

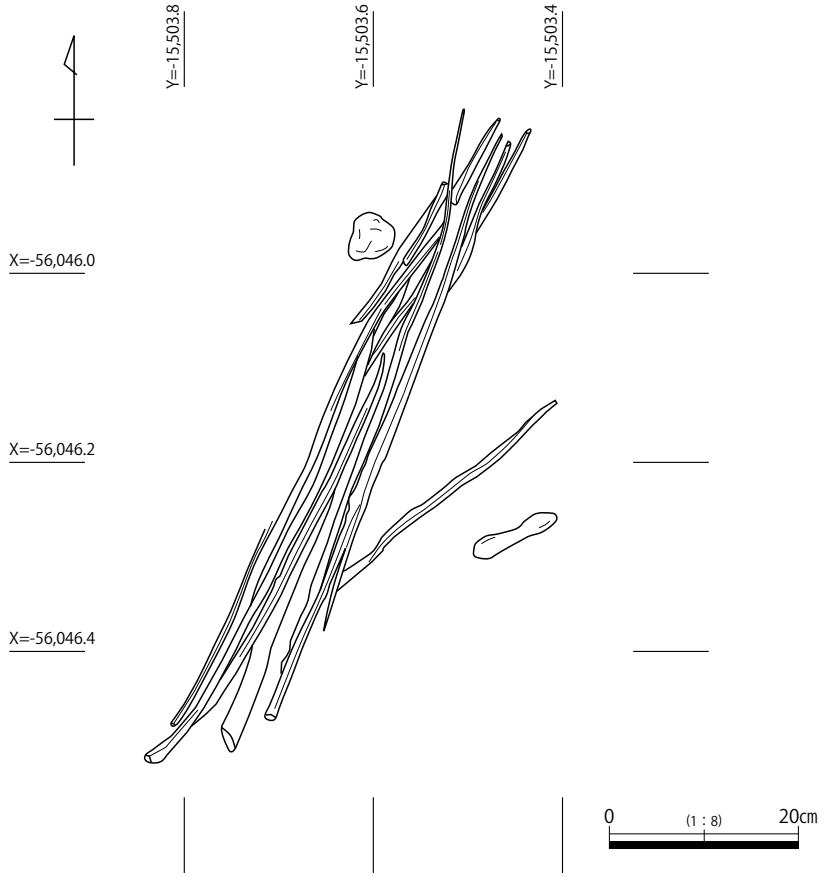


図 113　４溝 編組製品素材束１出土状況図

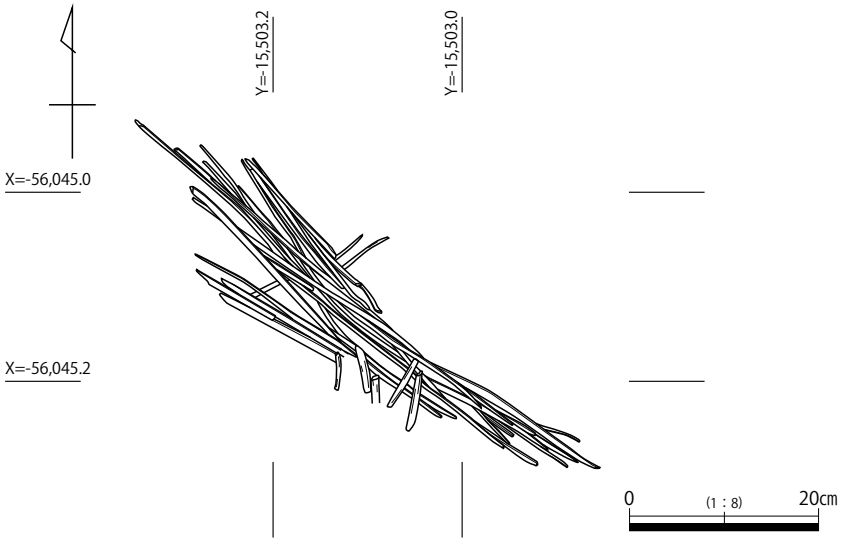


図 114　４溝 編組製品素材束２出土状況図

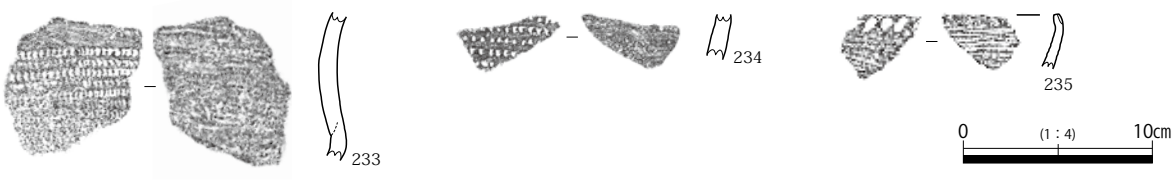


図 115　４溝上層 出土縄文土器（前期）

図 116　４溝上層 出土縄文土器（中期～後期）

253 は外面に撚糸文が施されていることから、里木Ⅱ式に帰属するものと考えられる。

254 ～ 260 は中期土器の底部。高台状の凹底（254 ～ 258）、平底（259）、角底（260）の形態があり、外面に縄文が施されるもの（254･255）、貝殻条痕が施されるもの（257）、条線が施されるもの（260）が見られる。

＜後期の土器＞（図116、PL.74）

261 ～ 265 は縄文時代後期に帰属する可能性が高い土器である。261・262 は同一個体の可能性も考えられる精製土器の口縁部片で、横走する沈線と突起をもつ。後期中葉のものであろうか。263 ～ 265 は粗製深鉢の口縁部片である。

b　４溝上層出土の縄文時代晩期土器

縄文時代晩期の土器には、晩期初頭の滋賀里Ⅱ式土器から晩期末の突帯文土器がある。ここでは、深鉢、突帯文土器、浅鉢に分けて報告をおこなう。

＜深鉢＞（図117、PL.75）

266 ～ 278 は突帯文土器出現以前の粗製深鉢である。

266 は、頸部がくびれ、加えて口縁端部が上方に屈曲する深鉢である。頸胴部の境目に沈線が施され、頸部にナデ、胴部に工具による粗いナデが施されることから、滋賀里Ⅱ式に位置づけられる。また、波状口縁を呈するものと推定される。267 ～ 278 は篠原式に併行する段階の粗製深鉢である。胴部上半を復元できたものは２点ある（277・278）。いずれも器壁が外傾し、口縁部付近で緩やかに屈曲、内傾して立ち上がり、口径は 30 cm を超える。内外面ともに指押さえと工具による粗いナデを施しており、外面は左上がり、内面はほぼ水平に擦痕状のナデの痕跡が残る。267 は、器壁の立ち上がり、器面調整等が 277・278 とかなり共通しており、これらと同様の形状を呈するものと考えられる。

268 ～ 273 は、口縁部がやや内湾ないし直線的に外傾するものである。小片であるため全形はうかがえないが、バケツ形の胴部を呈するものと推定される。内外面の調整は 267・277・278 と同様の指押さえと工具による粗いナデであるが、270・271 は調整に伴う砂粒の動きが観察できる部分もある。272・273 は口縁端部に刻目が入る。273 は、口縁端部内面に薄く粘土を貼り付けて肥厚させている。器面は内外面ともに工具を用いた粗いナデ調整である。272 は砲弾形の胴部を呈する深鉢と考えられ、外面を二枚貝条痕調整、内面を工具によるナデ調整で仕上げる。この２点は篠原式中段階に位置づけられよう。

274･275 は口縁部が外反して立ち上がるもので、頸部がくびれる深鉢である。口縁端部を面取りし、274 の端部には刻目を施す。器面調整は内外面ともに指押さえと工具による粗いナデである。この２点も、篠原式中～新段階に位置づけられる。

276 は胴部片である。頸部が屈曲する深鉢で、口縁部は外反して立ち上がるものと推定される。頸部に板状工具の小口による押引き文状の刺突文を巡らせるのが特徴である。内外面はいずれも丁寧なナデで、一部に工具によるナデの痕跡が残る。頸部に刺突文を施す点から、篠原式新段階に位置づけられる。

＜突帯文土器＞（図118、PL.75・76）

破片資料が中心で、全形を復元できたものはないが、284 のようにほぼ全体の形状が図上復元できたものもある。口径を復元できたものは、直径 10 ～ 30 cm と幅があるが、直径 20 cm 前後の中型品

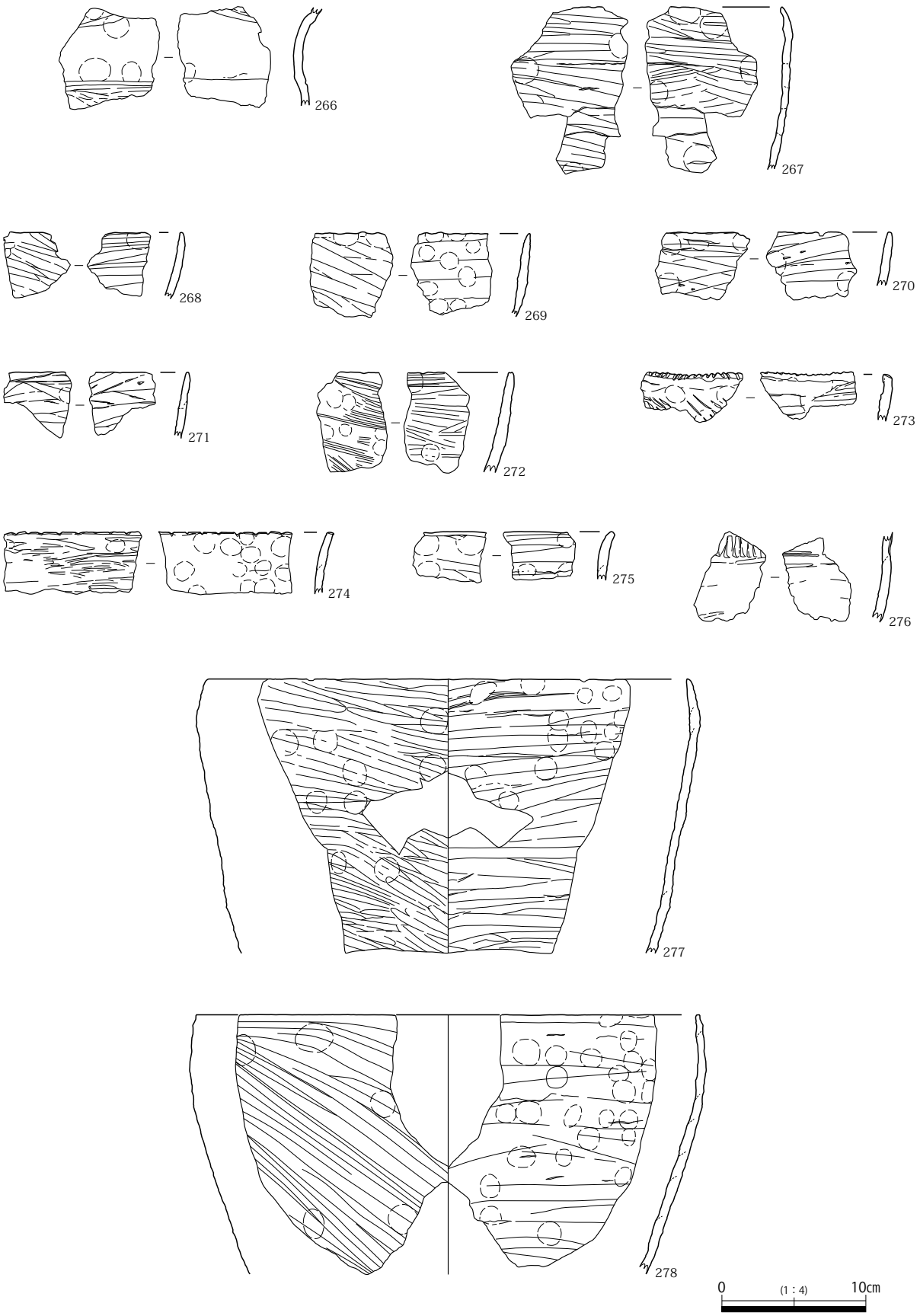


図 117　４溝上層 出土縄文土器（晩期深鉢）

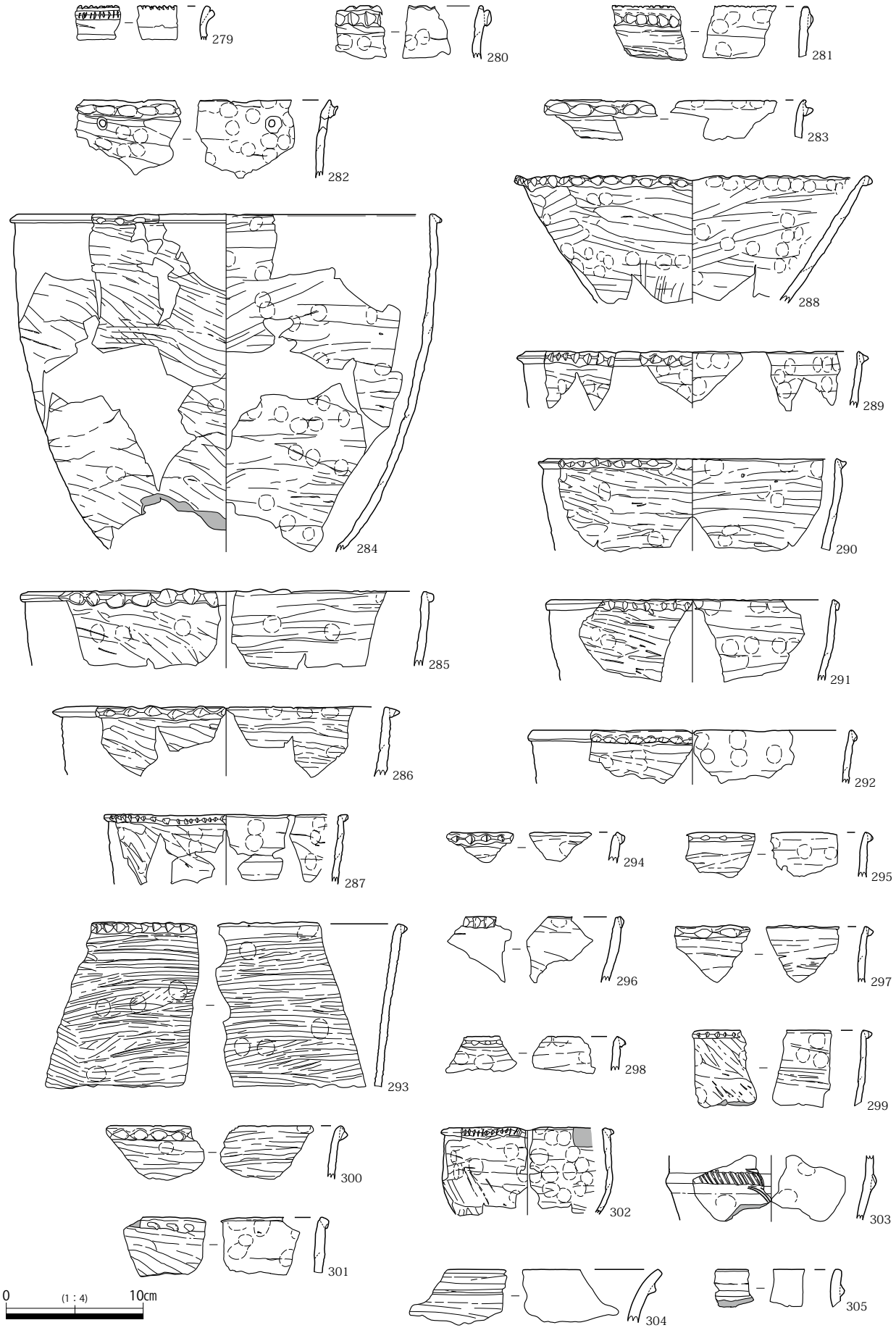


図 118　４溝上層 出土縄文土器（突帯文土器）

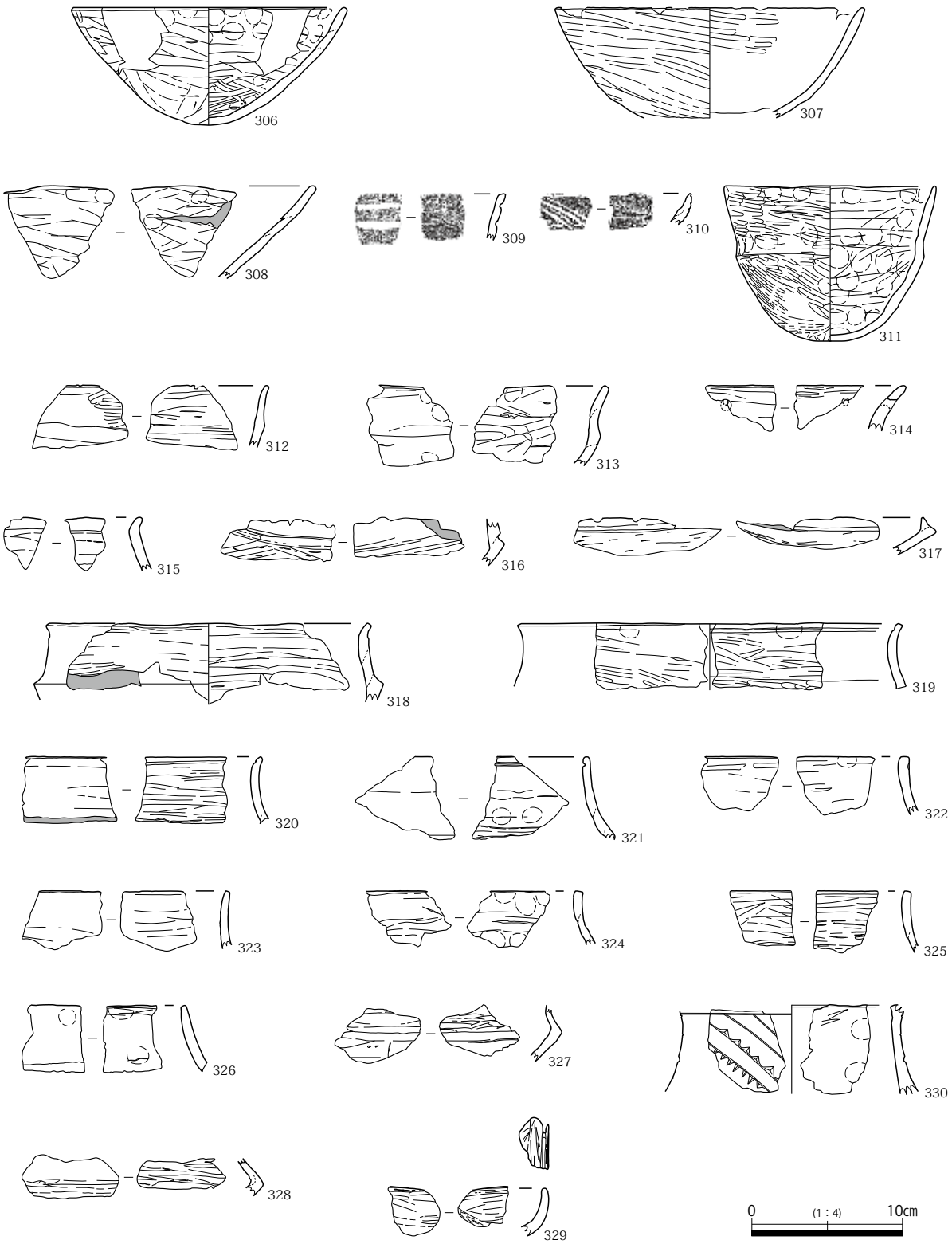


図 119　４溝上層 出土縄文土器（浅鉢）

が主体となる。これらは、口縁部に貼りつけられた突帯の位置と形状、刻目の形状等から、大きく２種類に分類できる。

279 ～ 283 は、口縁部からやや下がった位置に突帯を貼り付け、突帯には指や工具による横長の楕円形、あるいはＤ字形のしっかりとした刻目を施すものである。279 は例外的な資料で、口縁部内側に粘土帯を貼り付け、新たな口縁を作り出し、二股に分かれた口縁端部に刻目を入れる。280･281 は、

突帯に D 字状の刻目、口縁端部に V 字状の刻目が入る。また、282・283 は口縁端部に刻目がなく、突帯には指による横長楕円形の刻目が施される。内外面調整は擦痕の残る粗いナデと指押さえで、282 には補修孔と考えられる穿孔がみられる。胴部は復元できないが、残存する口縁部がほぼ垂直に立ち上がることから、砲弾形の胴部を呈するものと推定される。これらは、近畿地方の船橋式、瀬戸内海沿岸地域の沢田式に併行する資料である。

次に、284 ～ 302 は突帯が口縁端部に接して貼りつけられ、ヘラ状工具、指、爪などによる D 字状、V 字状の刻目が入るものである。近畿地方の長原式段階に位置づけられる。胴部上半まで復元できる個体が多く、器壁が垂直、あるいはやや外傾して立ち上がる傾向があり、砲弾形の胴部であるものと考えられる。例外的に、288 は器壁が強く外傾しており、浅鉢に近い形状を呈するものである。突帯は、279 ～ 283 に比べると小ぶりで、刻目も小さい。しかし、285・286 のように、楕円形ないし菱形の大きな刻目を持つものも一定数存在する。器面調整は、内外面ともに擦痕の残る粗いナデと指押さえである。総じて外面調整が粗く、内面は丁寧に調整する。293 は細いヘラ状工具で粗いナデを施している。また、291 や 299 の外面にはケズリを施した様子もみられる。

303 は胴部中位に細い縦長の刻目を施した幅広の突帯が巡る。口縁部を欠くが、二条突帯をもつ砲弾形の深鉢に復元できる。304・305 は口縁端部から下がった位置に無刻目突帯が貼り付く。口縁部が外反し、304 は外傾、305 はやや内傾して立ち上がっており、頸部がくびれる深鉢であると推定される。

＜浅鉢＞（図119、PL.77・78）

抽出、図化した浅鉢は 25 点である。ここでは、報告するにあたって、器形、口縁部の形状をもとに、単純な椀形を呈するものと、頸部で屈曲するものに大別した。さらに後者を、口縁部が外傾するもの、口縁部が内傾するものの２種に分類した。以下、この分類案に沿って報告をおこなう。

単純な椀形を呈する浅鉢は４点ある（306 ～ 309）。306 は丸底の浅鉢で、浅い椀形を呈し、口縁部をまるくおさめる。307・308 は底部を欠くが、器面の傾き等から、306 と同じ形状の丸底の浅鉢であると判断した。なお 308 は、口縁がわずかに波打っており、形骸化した波状口縁を持つと考えられる。器面調整はいずれも工具による粗いナデで、左上がりの擦痕が全面に残る。また 306 の内面には、指頭圧痕や細めの工具によるナデ調整の痕跡が観察できる。309 は滋賀里Ⅱ式のボウル状の浅鉢であると推定される。器面にはナデ調整を施し、口縁部に棒状工具等で引いたとみられる太い沈線が２条巡る。

次に、頸部で１段屈曲し、口縁部が外傾して立ち上がる浅鉢である（310 ～ 314）。この中でも、特に屈曲部の形状をもとに細分できる。まず 311・312 は、屈曲部の外面に明確な稜をもつが、内面には明確な屈曲が認められないものである。同時に、口縁部の外傾度合が低い。外面をミガキ調整で丁寧に仕上げ、内面はナデと指押さえで比較的丁寧に整形する。この２点は、晩期の中でもやや古い様相を示す土器であり、滋賀里式～篠原式古段階に位置づけられよう。一方 313・314 は、前述の２点に比べて外傾度合が強く、屈曲も明瞭である。器面調整は内外面ともに粗いナデ調整である。313 のような浅鉢は、篠原式中～新段階の資料に類例を見出すことができ、これらも当該期に帰属するものと考えられる。なお、310 は口縁部と頸部が２段階に屈曲する滋賀里Ⅱ式の浅鉢の口縁部で、外面に横方向の平行沈線２条の間に斜方向の４条の沈線が施される。

さらに、頸部で強く屈曲し、口縁部が内傾して立ち上がる浅鉢がある。この形態の浅鉢は突帯文期

の資料に多くみられ、晩期末まで存続するものである。この一群の中でも、口縁端部の形状によっていくつかに細分することができる。まず、やや直立気味に内傾して立ち上がり、口縁端部が短く外反するものである（315・318）。318 の口縁端部は外反の幅が不均等で、ほぼ直線的に口縁が伸びる部分もみられる。また、器面は工具によるナデ調整で、内外面ともに擦痕が残っており、やや雑な仕上がりである。また、口縁端部がわずかに外反し、端部内面に１条の沈線をもつものがある（319 ～ 321）。318 に比べて薄手で、外面調整にナデのほかミガキが施される（319）など、丁寧な印象を受ける。322 ～ 326 は、319 ～ 321 とほぼ同じ形状の口縁部で、端部内面に沈線が引かれず、端部を平坦に面取りする一群である。面取りしたためか、端部が肥厚する傾向が見て取れる。器面調整は工具による粗いナデである。また、胴部片 327・328 は、頸部が強く屈曲し、口縁部は内傾するものと推定されるため、突帯文期の浅鉢に分類した。また、突帯文期の浅鉢の中には、波状口縁方形浅鉢（316）と内傾して立ち上がる口縁が極めて短い皿状の浅鉢（317）がある。316 は胴部片で、この浅鉢に特徴的にみられる屈曲部の段差がみられる。内面は指によるナデ、外面はナデと、段差以下の胴部下半に粗いナデ調整が施される。317 は、単純な皿状の浅鉢の口縁部内面に、端部に接するように新たな口縁を貼り付けたものである。内外面ともに粗いナデ調整を施すが、外面の方がやや粗い。

以上のほか、329 は縄文時代晩期にみられる舟形土器である。船でいう船首付近の破片で、内外面は丁寧にみがかれている。また 330 は、晩期最終末の浅鉢変容壺である。頸部しか残らないが、口縁部の屈曲状態を見ると、口縁はほぼ水平に外反したものと推定される。頸部外面には左上がりの沈線が４条引かれており、その内、下の２条に沿うように三角形の刻目が施される。内面はナデ、指押さえで調整する。

c　４溝下層出土の縄文時代後期以前の土器

＜早期の土器＞（図120、PL.79・80）

縄文時代早期に帰属する押型文土器が１点のみ出土している。331 はネガティブ楕円押型文が施された土器で、早期前葉に位置づけられる。

＜前期の土器＞（図120、PL.79・80）

４溝下層からは、上層よりもまとまった量の縄文時代前期の土器が出土した（332 ～ 354）。いずれも前期前葉に帰属する土器と考えられる。

332 ～ 346 は貝殻腹縁による連続刺突文が施された土器で、羽島下層Ⅱ式に並行する時期の土器と考えられる。344 ～ 346 の刺突文はいわゆる３字文となっている。

347 ～ 352 は逆Ｃ字の爪形連続刺突文が施された土器で、北白川Ⅰａ式に相当する。349 は斜位に刺突文列が施されている。

353 は円形の連続刺突文が施された土器。354 は内外面に貝殻条痕、口縁端に刻目を施した土器である。

＜中期の土器＞（図121・122、PL.79～81）

上層と同様、下層からもまとまった量の縄文時代中期の土器が出土している。

355 ～ 388 は鷹島式・船元式に帰属する土器である。355 は、頸部が強く屈曲する波状口縁片で、爪形文をもつ突帯、繊維痕のない縄文などの特徴から、鷹島式に位置づけられる。356 ～ 363 は船元Ⅰ式に位置づけられる土器である。356 ～ 358 は屈曲部内面に明瞭な稜が形成されている。358 は外

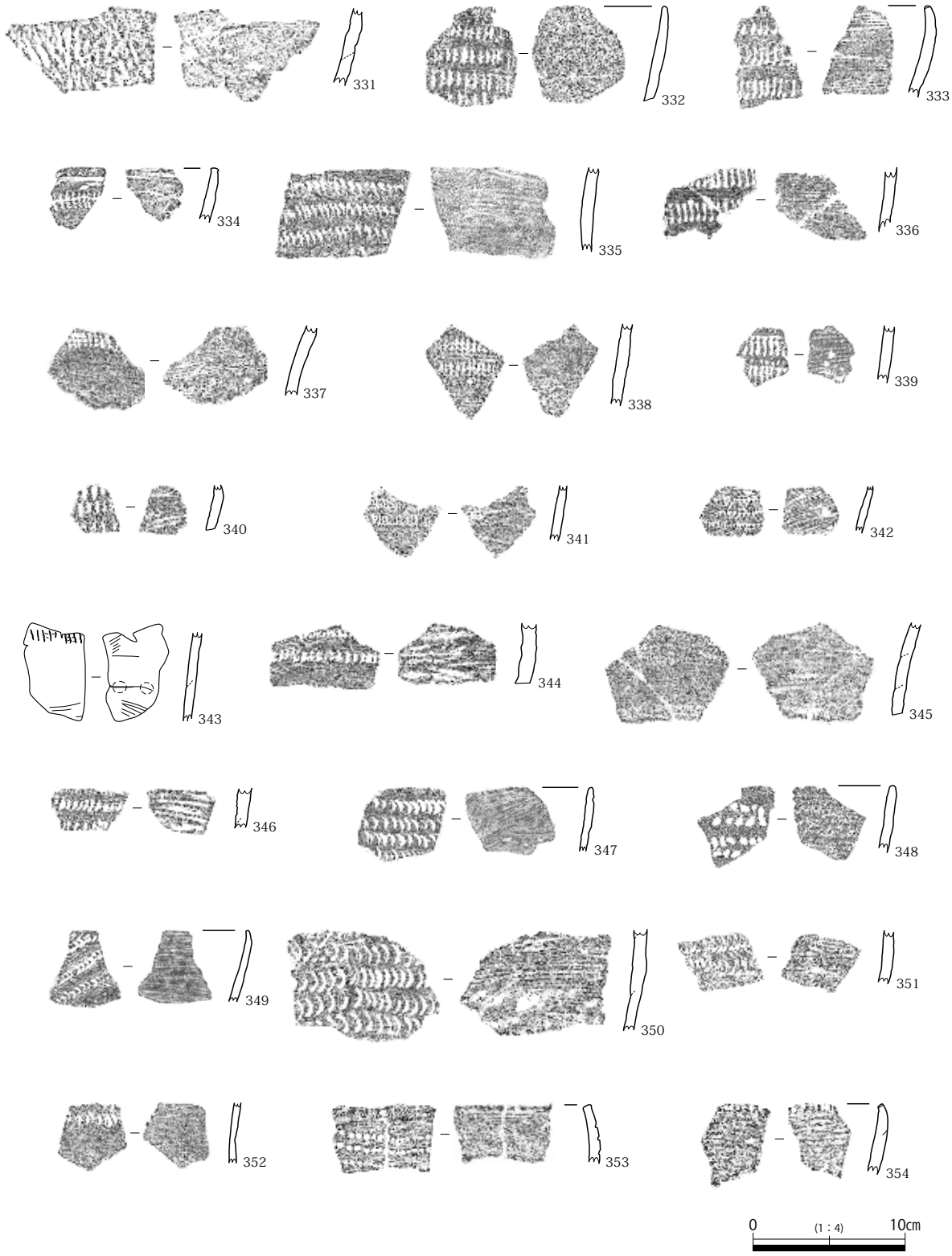


図 120　４溝下層 出土縄文土器（早期～前期）

面口縁端部に二枚貝の貝殻貝頂部による押捺文が施される。間壁分類（間壁 1971）の船元Ⅰ式Ｄ類に相当する。359・361 は口縁外面に半裁竹管による押引き平行線が、内面に縄文帯が施されており、間壁分類の船元Ⅰ式Ｃ類にあたる。364 は波状口縁の波頂部片で、垂下する隆線と円孔刺突文列が施される。船元Ⅱ式にあたる。365 ～ 368 は縄文地文に平行沈線文が施される船元Ⅲ式土器である。367 は平行沈線が押引き状に引かれているので、船元Ⅲ式に含められない可能性もある。368 は、横

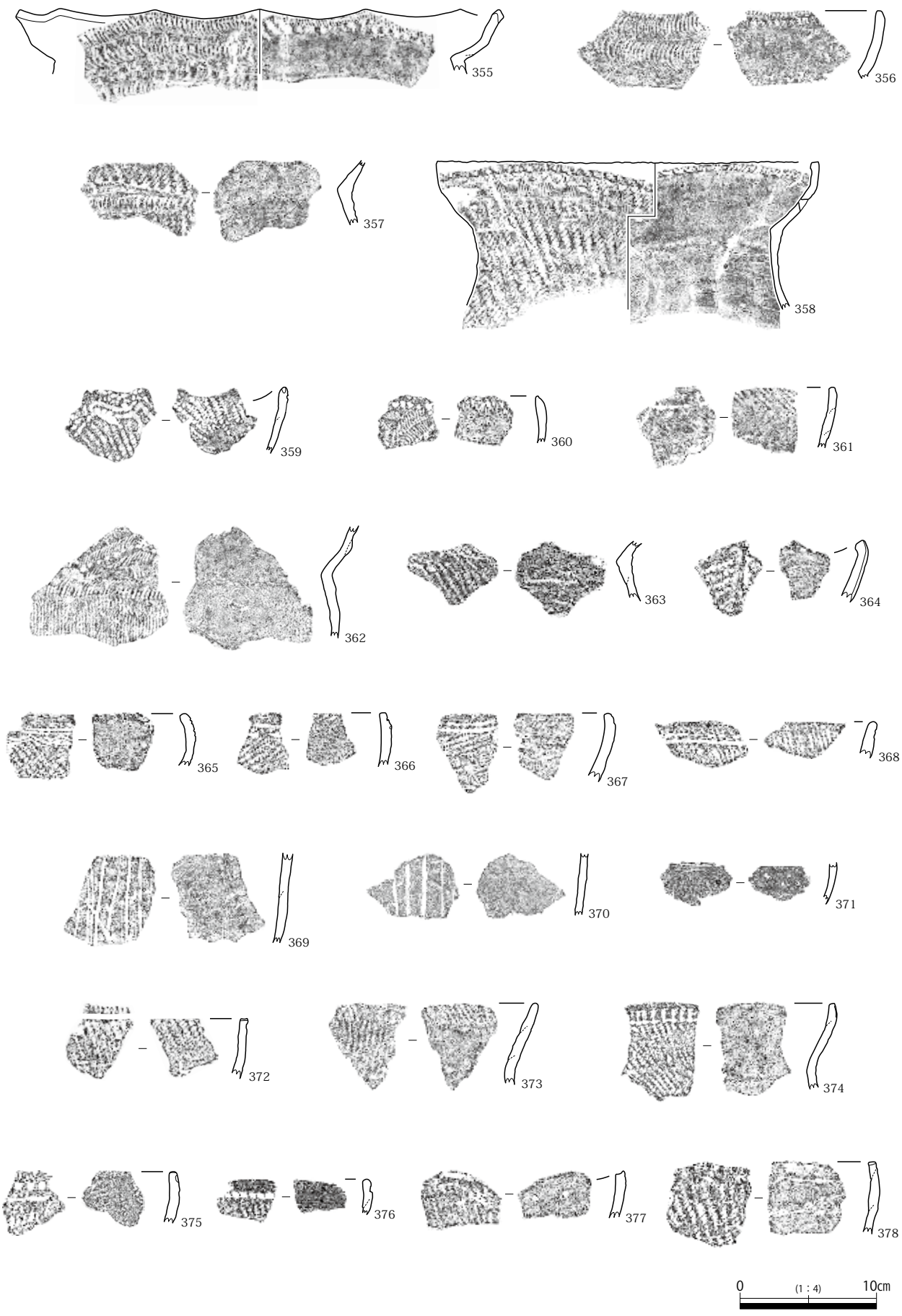


図 121　４溝下層 出土縄文土器（中期 1）

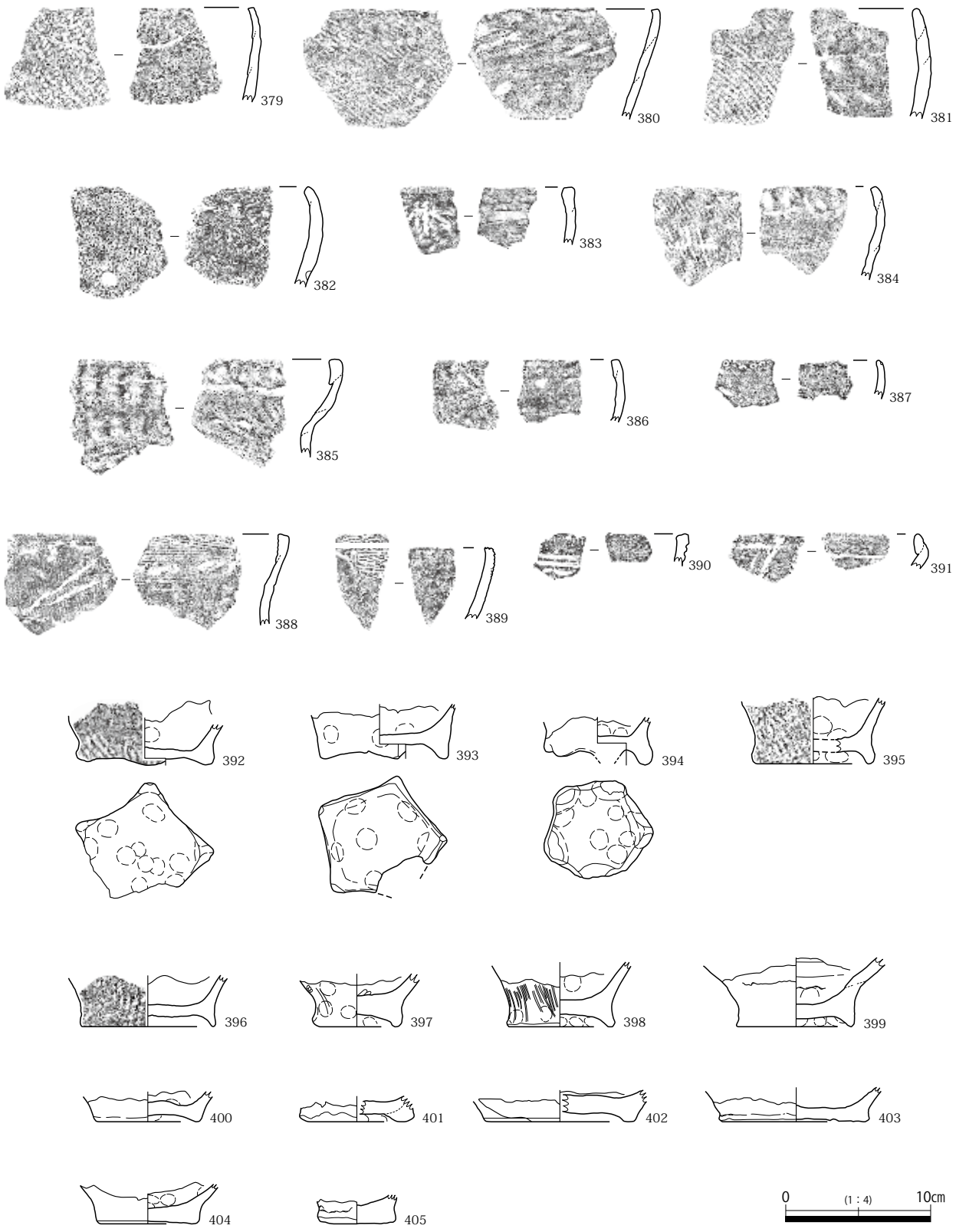


図 122　４溝下層 出土縄文土器（中期 ２）

方向の平行沈線は 367 と同様の押引き状であるが、三角文の一部と見られる縦方向の沈線も施されているため、船元Ⅲ式にあたる蓋然性が高いと考える。369 ～ 371 は外面に縦方向の条線が施された土器で、船元Ⅲ式にあたるものと考えた。369・370 は太い条線が粗い間隔で施されているのに対し、371 の条線は非常に細い。

372 ～ 388 は船元式の範疇で捉えられるものの、詳細な位置づけが不明な土器である。このうち、372 ～ 384 には、外面地文として縄文が施されている。372・373 は内面口縁部にも縄文帯がある。374 ～ 377 は、口縁に半裁竹管か貝殻腹縁による押引き文が施されている。378 ～ 384 ははっきりとしたキャリパー状口縁にならない可能性が高い。384 は口縁内面には貼付口縁状の粘土積み痕が見られる。385 ～ 387 は縄文が施されず、ナデのみで表面が整えられたもの。明確なキャリパー形となる 385 は、口縁端部の粘土積みが特徴的で、内面側に貼付口縁状の段が形成されている。386 も口縁内面に粘土積みによる段が見られる。387 は竹管による刺突文が施される。388 は非常にゆるい屈曲ながらキャリパー形を呈しており、内外面に貝殻条痕が施されている。

389・390 は里木Ⅱ式に位置づけられる土器である。ともに口縁に平行沈線が施されており、389 では地文の撚糸文も確認できる。

391 は外面に沈線が施され、内面に貼付肥厚帯をもつ口縁部片で、中期土器と考えられるものの、帰属型式が明らかでない。

392 ～ 405 は中期の土器の底部である。392 ～ 394 は五角形底。392 の縄文には繊維が見られない。395 ～ 399 は高台状凹底、400 ～ 402 は凹底、402 ～ 405 は平底である。

d　４溝下層出土の縄文時代晩期土器

縄文時代晩期の土器には、晩期中葉の篠原式土器から晩期末の突帯文土器がみられる。ここでは、上層と同様に、深鉢、突帯文土器、浅鉢に分けて報告する。

＜深鉢＞（図123・124、PL.82・83・88）

下層出土の深鉢から 67 点を抽出した。

406 ～ 437 は突帯文土器出現以前の粗製深鉢である。口縁部、胴部の形状によって、バケツ形を呈するもの、頸部がくびれるものに分けられる。

406 ～ 423 は、器壁がやや内湾しながら立ち上がるバケツ形の胴部を持つ深鉢である。立ち上がりの角度には、内傾、直立、外傾するものが混在している。また、口径を復元できたものは３点で、20 ～ 30 cm 程度であった。すべて口縁部を含む破片であるため、口縁部について言及すると、端部をまるくおさめるもの、指でつまみあげて薄くするもの、そして面取りするものがある。器形に関係なく、端部をまるくおさめるものが大半を占める。器面調整は、内外面ともに工具による粗いナデと指押さえが主体である。とくに外面調整は粗く、406 や 409 のようにケズリのように砂粒が動くもの、411 や 416 のようにナデ調整に用いた細い工具の痕跡が明確に残るものなどがある。内面は外面に比べてやや丁寧なナデ調整を施す。また 423 のように、外面に二枚貝条痕、内面に巻貝条痕を施すものもある。基本的に無文であるが、417 の外面には直径 1 cm 程度の円形の窪みが２ヶ所あり、指による刺突文の可能性が考えられる。

424・425 は口縁部が外反するもので、頸部がくびれる深鉢である。424 は口縁に近い位置に屈曲点がある。調整は、内外面ともにナデで、424 は工具による粗いナデである。

426 ～ 437 は口縁部に刻目の入る深鉢で、篠原式中～新段階に位置づけられる。口縁部がやや内湾して外傾するもの（426 ～ 431）と、外反して外傾するもの（432 ～ 437）があり、前者はバケツ形、後者は頸部がくびれる形状の胴部を呈するものと推定される。刻目は、大小の差はあるもののＶ字状を呈し、刻む間隔が狭い。429 は例外的で、口縁端部ではなく、口縁部外面に半裁竹管による刺突

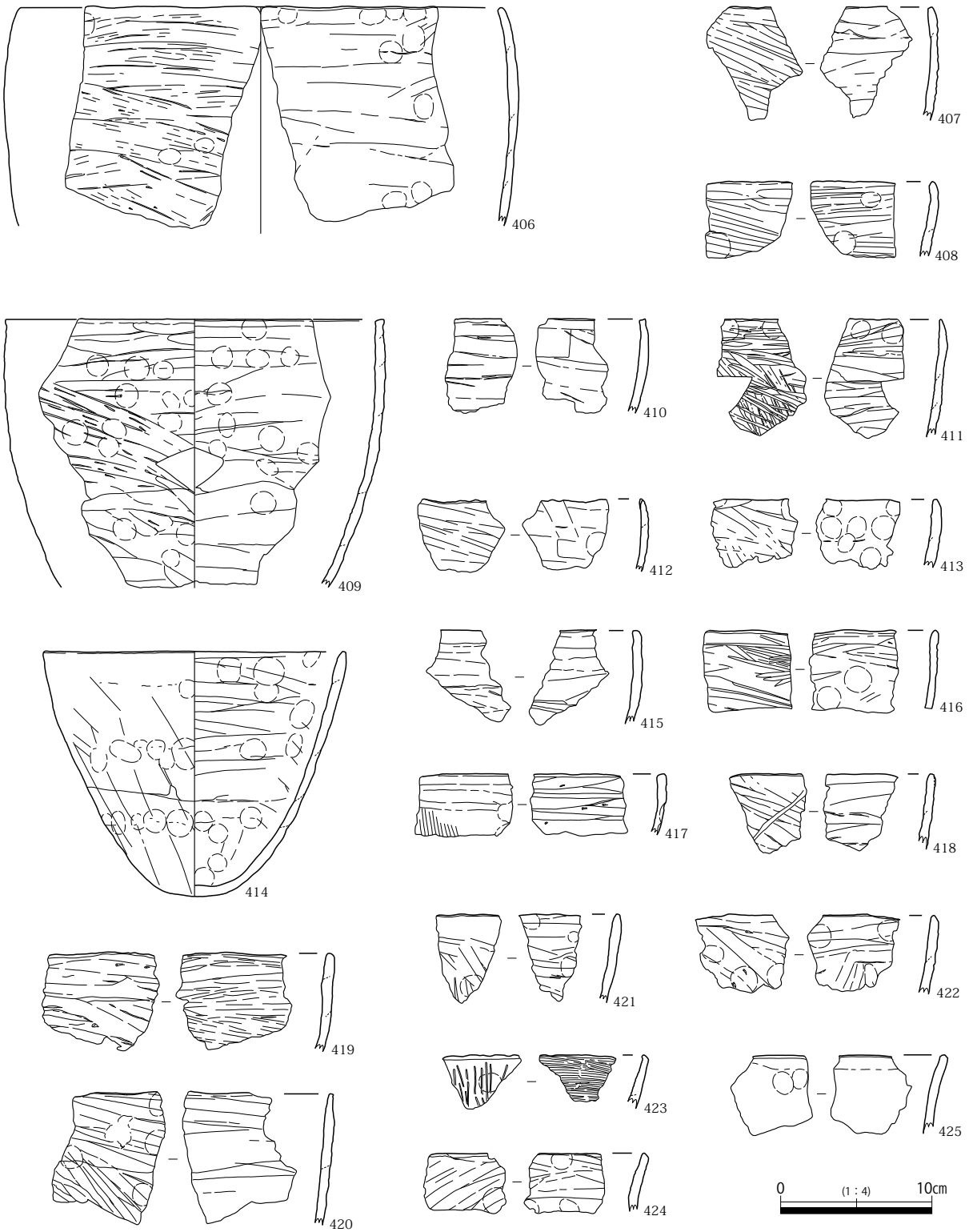


図 123　４溝下層 出土縄文土器（晩期深鉢 1）

が施される。器面調整は内外面ともにナデで、粗く擦痕が残る。432 は内外面ともに二枚貝条痕で調整する。437 は頸部片で、口縁部が大きく外反する。外面に二枚貝条痕、内面に丁寧なナデを施す。

＜突帯文土器＞（図125、PL.84・85）

上層と同様に破片資料が多く、復元できたのは胴部上半に限られる。口径を復元できたものは最大で約 30 cm を測り、上層出土のものと法量において大差はない。これらの資料についても、口縁端

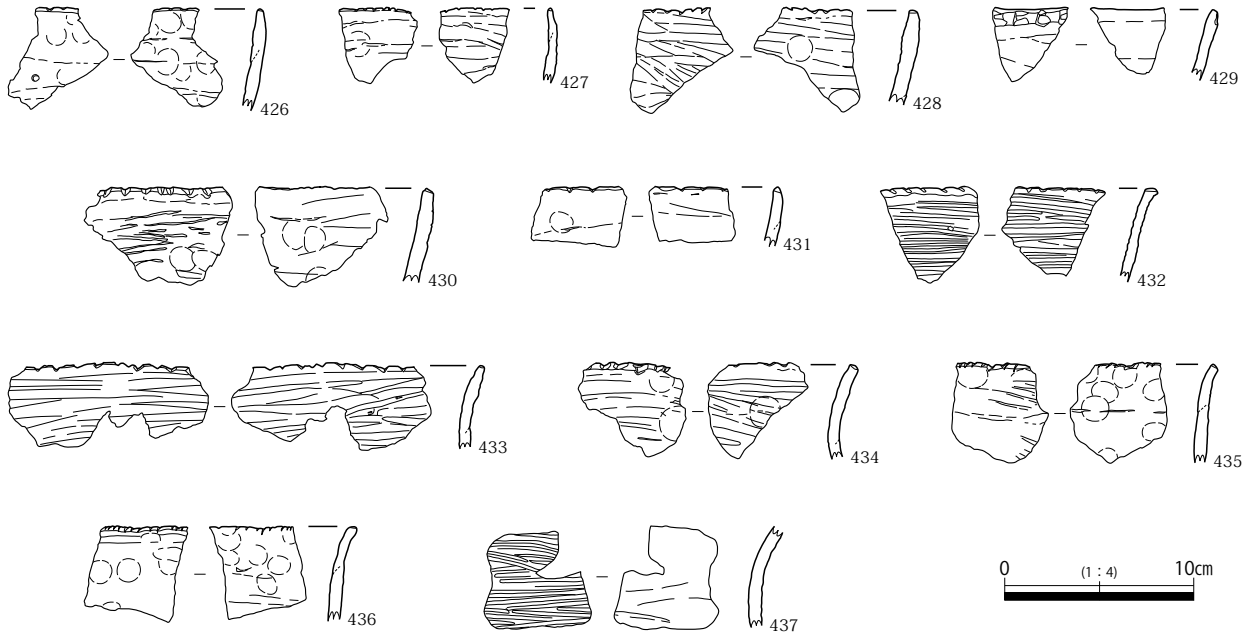


図 124　４溝下層 出土縄文土器（晩期深鉢 ２）

部に貼り付けられた突帯の位置、形状、刻目の形状等によって分類した上で報告をおこなう。

まず、438 ～ 459 は口縁端部から下がった位置に突帯が貼り付けられるものである。さらにこの中で、口縁端部の刻目の有無によって細分できる。438 ～ 453 は、口縁端部に V 字状の刻目が入る、古い様相を示す突帯文土器である。突帯は断面三角形が基本で、D 字状のしっかりとした刻目を施すものが多い。中には 442 のように細長い刻目、444･447 のように極めて小さい刻目を施すものも散見される。448 は唯一、無刻目突帯を持つ。口縁部はわずかに内湾ないし直線的に立ち上がるもの、口縁端部が外反するものがあり、そこからは砲弾形の胴部形状が復元できる。またそれ以外に、器壁の傾きが浅鉢に近い 439 や、頸部が屈曲する 452 があり、452 の屈曲部外面にはヘラ状工具による刺突文もみられる。一方、口縁端部に刻目が入らない 454 ～ 458 は、前者に比べてやや新しい様相を見せる。突帯や刻目の形状は前者と似ているが、456 のように突帯の貼り付け位置が口縁端部に近いものもみられる。口縁部形状は直立、あるいはやや外反し、砲弾形の胴部を呈するものと推定される。器面調整は、総じて工具や指による擦痕の残るナデと指押さえで内外面を調整する。一部、444 や 448 などミガキが見えるものもある。また、458 の外面には、２条１組の沈線文が斜方向に引かれており、文様の可能性がある。

次に、突帯が口縁端部に接して貼り付けられる一群（460 ～ 465）で、ここで報告する突帯文土器の中では最も新しい様相を呈する。下層では少数派であるが、上層ではこちらのタイプが４分の３以上を占めており、層序と出土遺物の時期差が合致している。460 は、突帯が口縁端部に接して貼り付けられる一方で端部に刻目が施されており、やや古めの様相を残す。突帯には刻目が入らない。460 以外は、突帯にのみ刻みが入るものである。突帯はいずれも小ぶりで、形状にはバリエーションがある。また、刻目も数種類あり、461・462 のように比較的大きいもの、464・465 のように小さいもの、そして 26 のように半裁竹管を用いて刺突を施すものがある。器面調整は、438 ～ 453 と同様である。

457 は胴部片である。頸部が緩やかに屈曲し、口縁部に向かってやや内傾して立ち上がる。内外面を工具による粗いナデと指押さえで調整する。

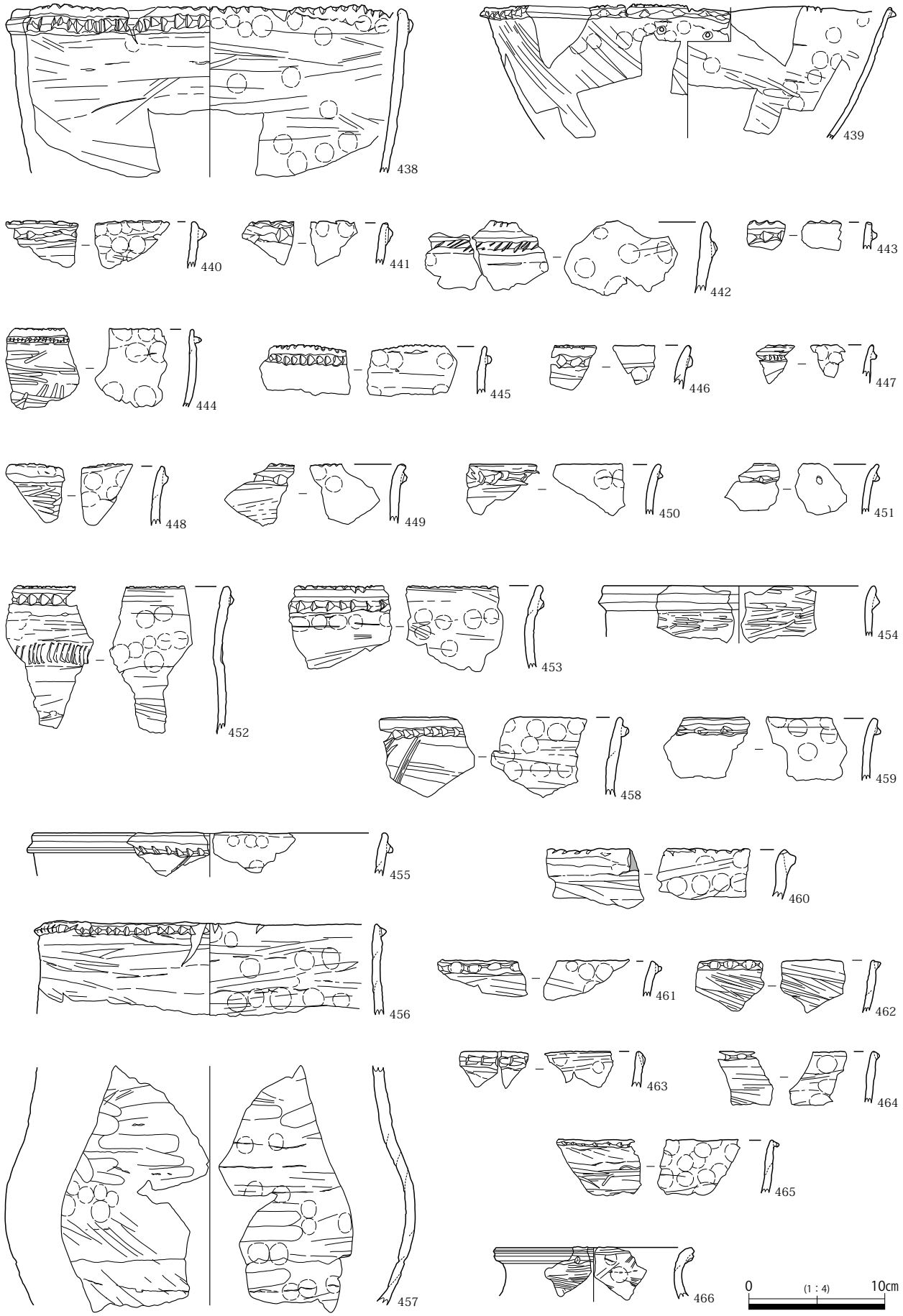


図 125　４溝下層 出土縄文土器（突帯文土器）

図 126　４溝下層 出土縄文土器（晩期浅鉢 1）

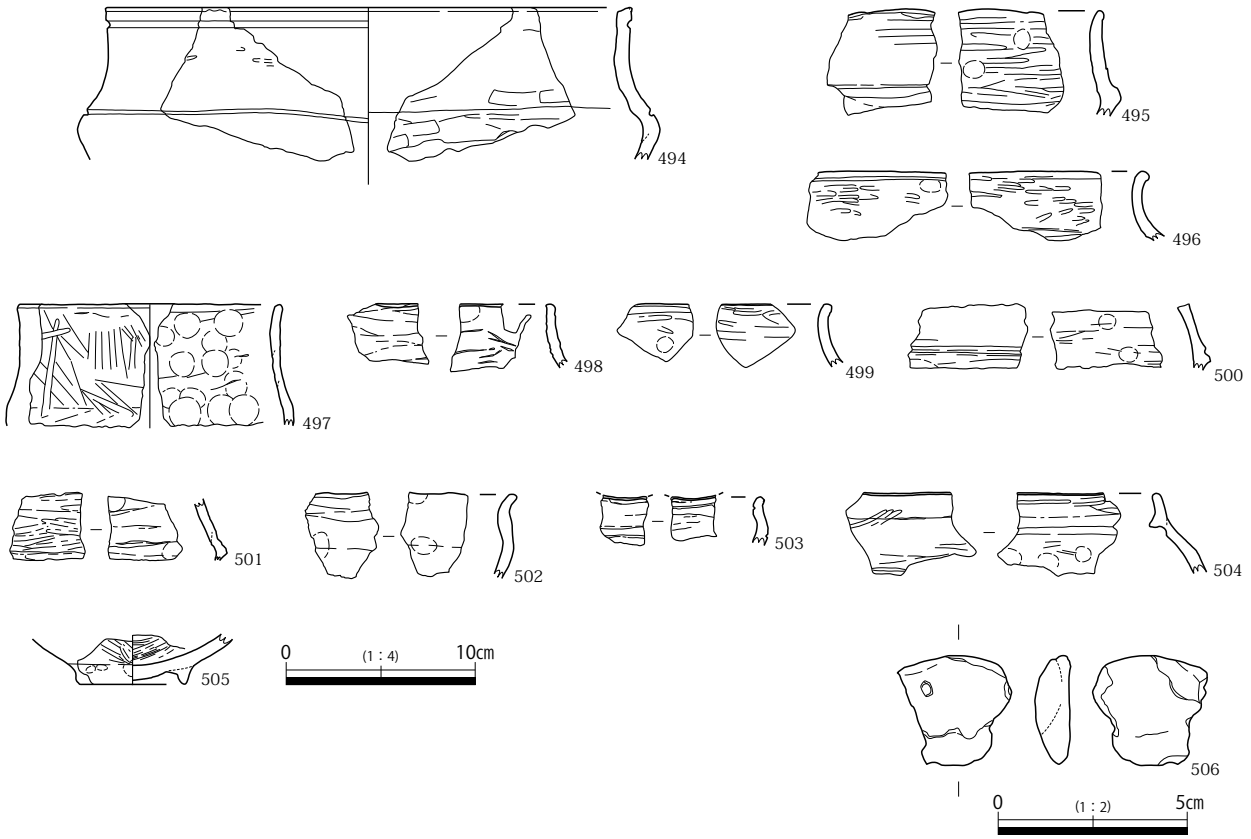


図 127　４溝下層 出土縄文土器（晩期浅鉢 ２）

また、466 は壺であるが、突帯を持ち、他に壺の資料がないため本項でまとめて報告する。頸部が強く外反して立ち上がる。突帯は口縁端部からごくわずかに下がった位置に貼り付けられ、棒状工具の先端によると考えられる楕円形の刻目が施される。外面は巻貝条痕、内面はナデと指押さえで調整する。

＜浅鉢＞（図126・127、PL.86～89）

下層出土の浅鉢からは、39 点を抽出した。ここでも、上層と同様に、器形、口縁部の形状をもとに、単純な椀形を呈するものと、頸部で屈曲するものに大別し、さらに後者を口縁部が外傾するもの、口縁部が内傾するものの２種に分類して報告をおこなう。

単純な椀形を呈する浅鉢は、小片を含めて 15 点である（467 ～ 481）。467 ～ 469 はほぼ全形を復元できた。467 は皿形、468 は浅い椀形、469 は深い椀形を呈し、467・468 は内外面をミガキ、469 はナデと指押さえで調整する。口縁端部はまるくおさめる。470 ～ 480 は口縁部片で、わずかに内湾ないし直線的に伸びており、外傾の角度を見ると 468・469 に近いものが多い。口縁端部は、指でつまんで薄く整形するもの（470・472・473・477）、まるくおさめるもの（471・474・479・480）、そして端部を面取りするもの（475・476・478）がある。また、479・480 は、口縁端部が内側に肥厚している様子も観察できる。なお、480 には補修孔と考えられる穿孔がみられる。器面調整は、擦痕があまり強く残らないナデ調整で、ミガキを施すものもある。471 や 476 には貝殻によると考えられる条痕調整もみられる。

481 は、浅い椀状を呈するが、やや特殊な口縁部を有する浅鉢である。口縁部内面には、端部に接するように突帯が巡り、等間隔で上方向に山形に突出する。破片を接合し、全体の３分の２弱を復元

したが、現状で３ヶ所に突出が残っている。本来は、５ヶ所に突起をつくり出していた可能性が高い。また、内面突帯の上面は面取りされ、山形突起の間に太い沈線を１条引く。なお、突起のうち１ヶ所に口縁部に直交するように円孔が穿たれる。器面調整は、外面にナデ、内面にミガキと指押さえを施す。

次に、頸部で屈曲し、口縁部が外傾・外反して立ち上がる浅鉢である（482 ～ 493）。胴部が残る 482・483 は、屈曲部に明確な稜があり、浅い椀形の胴部を呈する。また、口径を復元できた３点は、それぞれ直径約 16 cm（482）、23 cm（483）、30 cm（484）を測る。口縁部の長さ、屈曲度などにバリエーションがある。482・484・485 は、口縁部が長く伸びて外反し、端部が面取りされる。483・489 は短く外反して立ちあがった口縁を面取りしており、483 の口縁端部内面には１条の沈線が巡る。さらに 487・488 のように、屈曲、外反があまり強くないものもある。487 は口縁端部に穿孔が施される。また、488 は外反する口縁の端部に V 字状の刻目が施されており、篠原式新段階の様相を示す。さらに、492・493 は波状口縁である。胴部片 490 は、緩やかにく字状に屈曲する頸胴部境の外面に沈線１条引かれる。その沈線を境に、上半を丁寧なナデ、下半を板状工具による粗いナデで仕上げている。その他の器面調整は、指や工具によるナデ調整が主であるが、482 ～ 482・486・491 ～ 493 のようにミガキが施されるものも多い。

さらに、突帯文期に位置づけられる、口縁が外反、内傾して立ち上がる浅鉢（494 ～ 503）には、494 のように口縁が上に長く伸びるものと、502 のように、口縁が内傾して立ち上がり、端部が短く外反するものがある。前者は、口縁部が内傾するぶん、頸部屈曲部が横に張り出す傾向にあるが、前述した 482 ～ 484 と比べると、胴頸部境の稜線がやや鈍い。口縁端部は、面取りする（494）、まるくおさめる（495 ～ 499）など、丁寧に仕上げるものが多いことが注目される。さらに 494 の口縁部と頸胴部境、500 の頸胴部境には沈線が巡る。器面調整は粗い調整が少なく、内外面にミガキ調整を施して丁寧に仕上げるものが多くなる。粗い調整が残るものは、498 や 501 で、ナデの擦痕のほか、工具痕も観察できる。一方後者は、残存する口縁部から、小型で深めの浅鉢であることが推定される。端部はわずかに面取りされ、503 は波状口縁を呈する。器面調整は内外面ともにナデと指押さえである。

このほか、上記の３種に分類できなかった口縁部（504）と底部（505）がある。504 は胴部上半および口縁部が内傾するもので、口縁部内面の端部からやや下がった位置に突帯が巡る。全形は復元できないが、胴部半ばでく字状に強く屈曲する浅鉢であろう。内外面、基本的にナデ調整で器面を整え、一部にミガキを施す。また 505 は、丸底の底部に帯状の粘土を貼り付けて高台状にし、上げ底にしている様子が断面で観察できる。外面調整はやや粗いナデ、内面にはミガキを施す。

＜土製品＞（図127、PL.91）

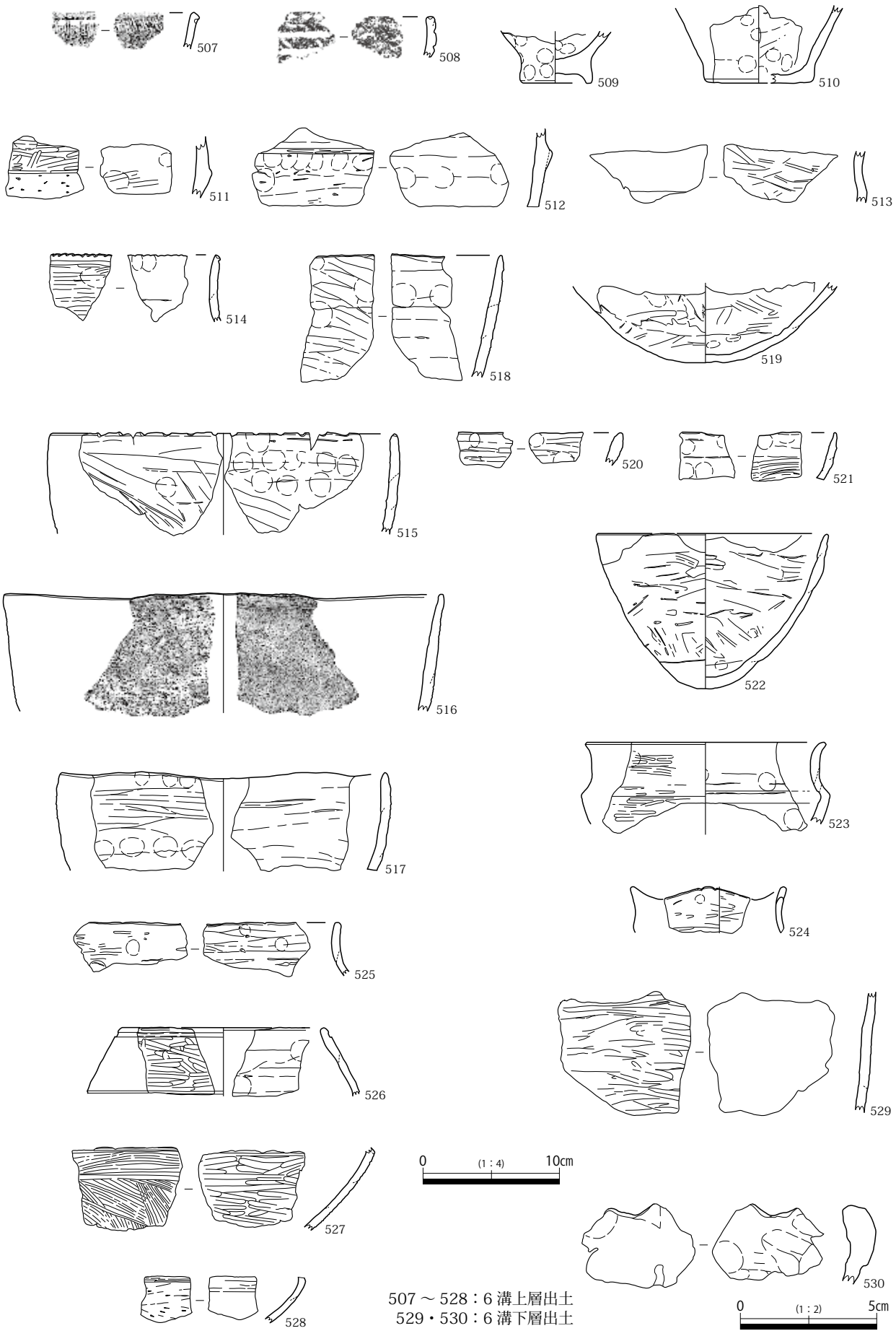
506 は不明土製品である。手づくねで作られている。胎土から見て、晩期のものであろう。

e　６溝上層出土土器

出土遺物は縄文土器で、縄文時代中期から晩期の資料を含む。ここでは、中期縄文土器２点、晩期縄文土器 21 点について報告する。

＜中期の土器＞（図128、PL.90）

507・508 は縄文時代中期の深鉢口縁部である。507 は船元Ⅰ式段階の口縁部で、口縁部外面にＣ字



507 ～ 528：６溝上層出土
529・530：６溝下層出土

図 128　６溝 出土土器

爪形文と円形刺突文を施す。508は内湾する口縁で、外面は縄文地に平行沈線が施され、口縁端部には円形刺突文が施される。船元式とみられる。509・510は底部で、509は小ぶりな上げ底、510は中型の平底である。いずれも指頭圧痕が鮮明に残る。

＜晩期の土器＞（図128、PL.90・91）

縄文晩期に帰属する資料には、深鉢、浅鉢がある。

511・512 は滋賀里Ⅱ式段階の深鉢の胴部である。中ほどで屈曲し、頸部は内傾して立ち上がり、口縁部は緩やかに外反するものと推定される。この特徴は､同時期の浅鉢にもみられるものであるが、この資料については深鉢と判断した。器面は、屈曲部を境に上半をミガキ、下半をケズリ調整で整える。内面調整はいずれも丁寧なナデ、指押さえである。

513 は晩期前半の滋賀里式、篠原式の範疇に入る深鉢胴部である。頸部が緩やかに屈曲し、肩部の稜線が立つ。外面調整はナデ、内面調整は工具によるナデである。

514・515 は篠原式の深鉢である。515 は篠原式中段階の資料で、やや内湾しながら直立ぎみに立ち上がり、口縁端部に刻目が入る。内外面ともに粗いナデ調整を施す。内面には、接合時の指頭圧痕が顕著にみられる。514 は新段階の深鉢口縁部で､頸部が外反して立ち上がり､こちらも口縁端部を刻む。外面は細いヘラ状工具によるナデ調整、内面は指によるナデで仕上げる。

516 ～ 519 は粗製深鉢である。516・518 は直線的に外傾して、517 は内湾して器壁が立ち上がる。いずれも内外面をナデで調整するが、516 の外面にはケズリによる砂粒の動きが確認でき、ケズリ調整ののち、指でなでて成形したことがうかがえる。519 は晩期後半の突帯文土器の底部である。浅鉢の底部である可能性も考えられる。丸底で、内外面を粗いナデ調整で整える。器面に成形時の接合痕が残る。

浅鉢は、口縁部の形状等によっていくつかの種類に分類できる。

520 ～ 522 は、底部から口縁部に至るまで屈曲しない椀形の浅鉢である。522 は深めの小型浅鉢で、成形時の粘土の積み上げ痕跡が器壁に残る。器面調整はケズリののちに指によるナデ調整を施すが、全体的に粗い作りである。520・521 は 522 のような形態の浅鉢の口縁部であろう。520 は口縁端部が肥厚、521 は内湾しながら外傾して立ち上がる。いずれも器面をナデ調整によって整えるが、521 の外面には二枚貝条痕も施される。

523 ～ 528 は、器壁が肩部で強く屈曲し、頸部が内傾する浅鉢で、古市河原田式の突帯文土器に併行する。523 ～ 525 は、口縁部が内傾・外湾して立ち上がり、胴部半ばで強く屈曲する。いずれも外面に横方向のミガキ、内面に粗いナデ調整を施す。524 は口縁部が波状を呈し、頂部に２ヶ所の刻目を入れる。526 は沢田式の浅鉢で、頸部が強く屈曲し、内傾して立ち上がる。また、器壁が僅かに内湾する。器面調整は外面ミガキ、内面ナデで、口縁部外面と屈曲部外面に太めの沈線が引かれる。527・528 は胴部下半の破片である。屈曲部で割れているが、破断面が粘土帯の接合部分にあたる。527 は外面を二枚貝条痕、内面をミガキ、528 は外面を粗いナデ、内面をナデで調整する。

f　６溝下層出土土器・土製品（図 128、PL.90・91）

上層に比べ、遺物の出土量は少なく、２点を報告するのみである。

529 は縄文土器の深鉢の胴部で、外面には工具による粗いナデ、内面には、風化により不鮮明であるが、ナデを施すものと考えられる。胴部片のみで詳しい帰属時期は不明であるが、縄文時代晩期で

あろう。

530 は土製品の破片である。丸みを帯びた形状を呈し、端部が指１本分程度の幅で窪む。外面は丁寧なナデ、内面はやや粗いナデで仕上げられる。小片であり、土製品の性格は不明であるが、土偶の可能性がある。

出土石器

４・６溝からは比較的多くの石器が出土している。石材別の器種組成を表６に示した。石鏃の組成率が極端に高く、打製石器類の組成率が低い。なお、遺跡全体の組成でもこれと同様の傾向を示している（表 33 参照）。定形器種を図化･掲載した。なお、６溝として取り上げた石器数は少なく、図化･掲載すべき定形器種は存在しなかった。

＜４溝上層＞（図129、PL.91・92）

S23・S24 はサヌカイト製の楔形石器である。いずれも両極打撃に伴って、上下縁に剥離痕、側面に截断面が形成されている。

S25 は磨製石斧の刃部片である。刃先側からの加撃で剥離しているので、使用に伴って破損したのであろう。S26 は小型でやや扁平な両刃の磨製石斧である。刃部が片減りしている。

S27 は安山岩製の打製石斧である。刃部に密な線状痕が見られる。S28 は磨製石斧の基部片である。S29・S30 は石鏃である。S31 は大きい剥離面が複数枚確認できる流紋岩または凝灰岩の亜角礫で、石核に分類した。礫器の可能性もある。S32 は安山岩の円礫を素材とした、磨石と敲石が複合した石器である。S33 は台石で、表面の広い範囲に磨り面が見られる。

＜４溝下層＞（図130、PL.91・92）

S34・S35 はサヌカイト製のスクレイパー。S36 は磨製石斧の刃部片で、S25 と同様に、使用に伴って剥離したものと考えられる。S37 は磨石と凹石の複合した石器。S38・S39 は台石である。S40 ～ S51 は打ち欠き石鏃である。S51 は打ち欠きが１端のみで、反対側には敲打が加えられている。

表６　４・６溝 出土石器石材別組成表

		打製石器						磨製石器		礫石器							計
		Sc	PE	RF	Fl	Cr	CAx	GAx	AxF l	SW	HS	GS＋HS	GS＋QS	QS	AS	被熱礫	
火成岩	安山岩	2	3	3	14		1	1		6	1	1	1	1	3	1	38
	流紋岩					1				1							2
	花崗岩									1							1
	他									4							4
堆積岩	凝灰岩				2												2
	砂岩									1							1
	他									5							5
変成岩	頁岩				1			1	1								3
	緑色片岩							1									1
	他									3							3
計		2	3	3	17	1	1	3	1	21	1	1	1	1	3	1	60

器種名凡例　Sc：スクレイパー、PE：楔形石器、CAx：打製石斧、RF：加工痕のある剥片、Cr：石核、Fl：剥片、GAx：磨製石斧、AxFl：磨製石斧剥片、SW：石鏃、GS：磨り石、HS：敲き石、QS：凹石、AS：台石

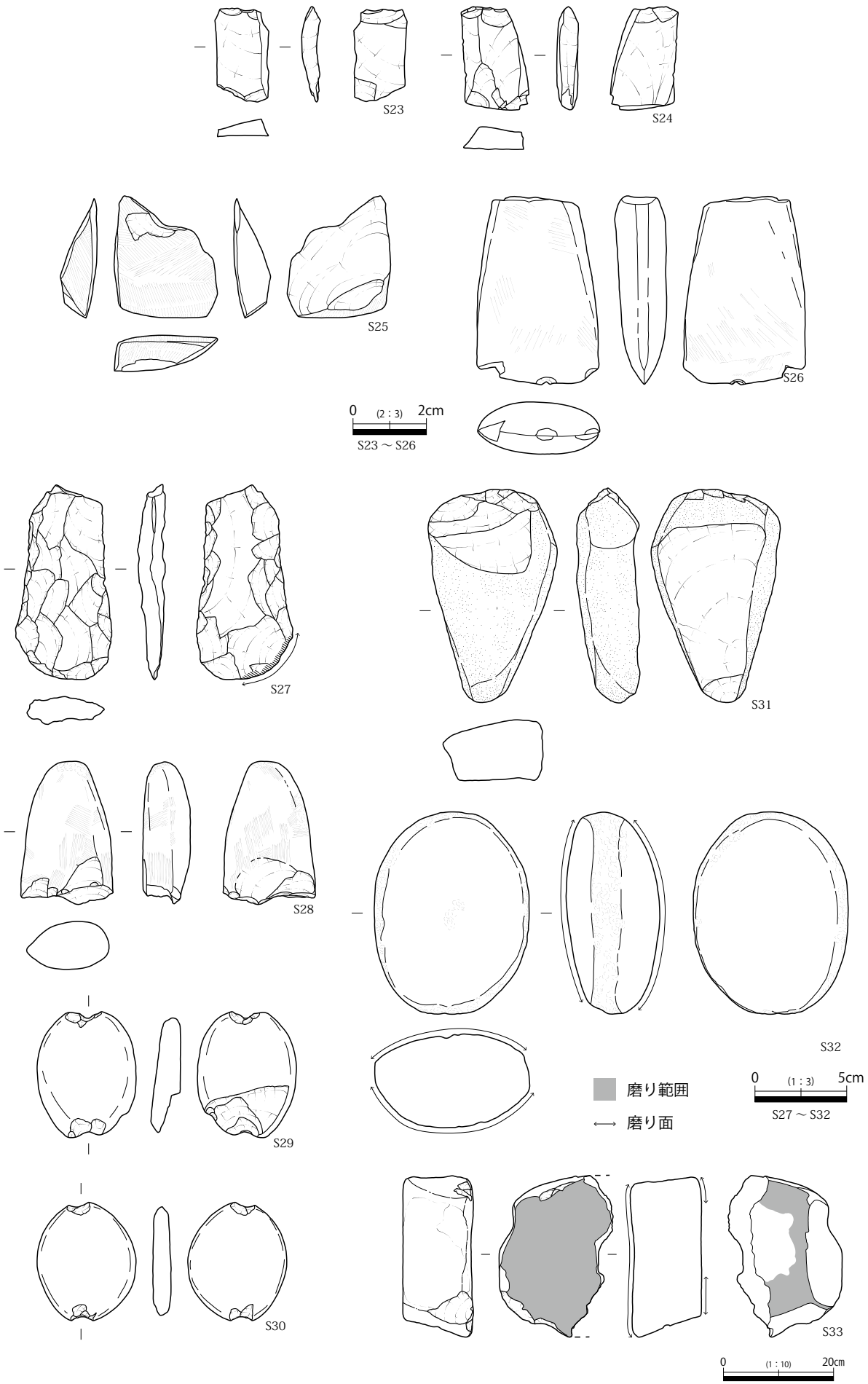


図 129　４溝上層 出土石器

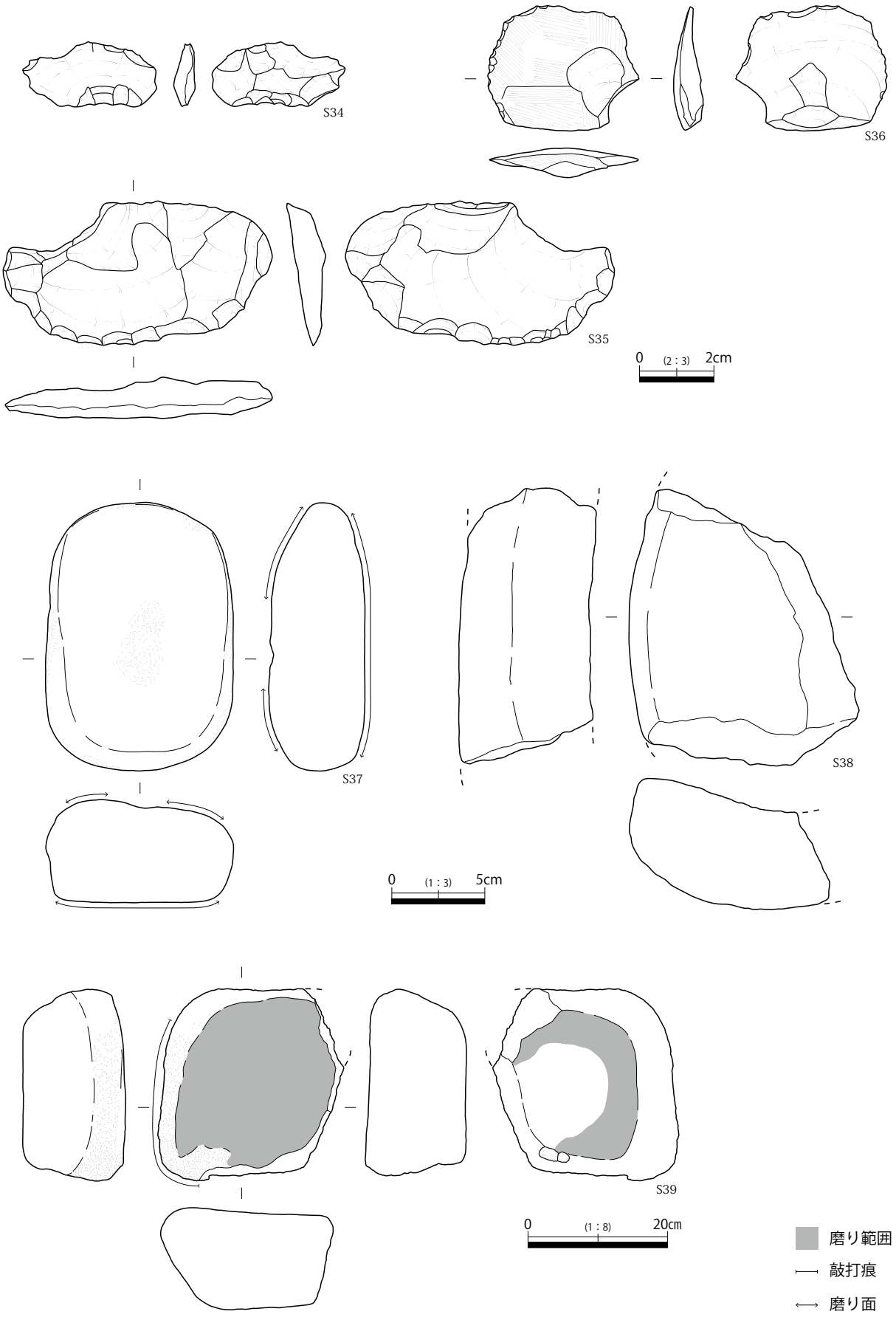


図 130　４溝下層 出土石器（１）

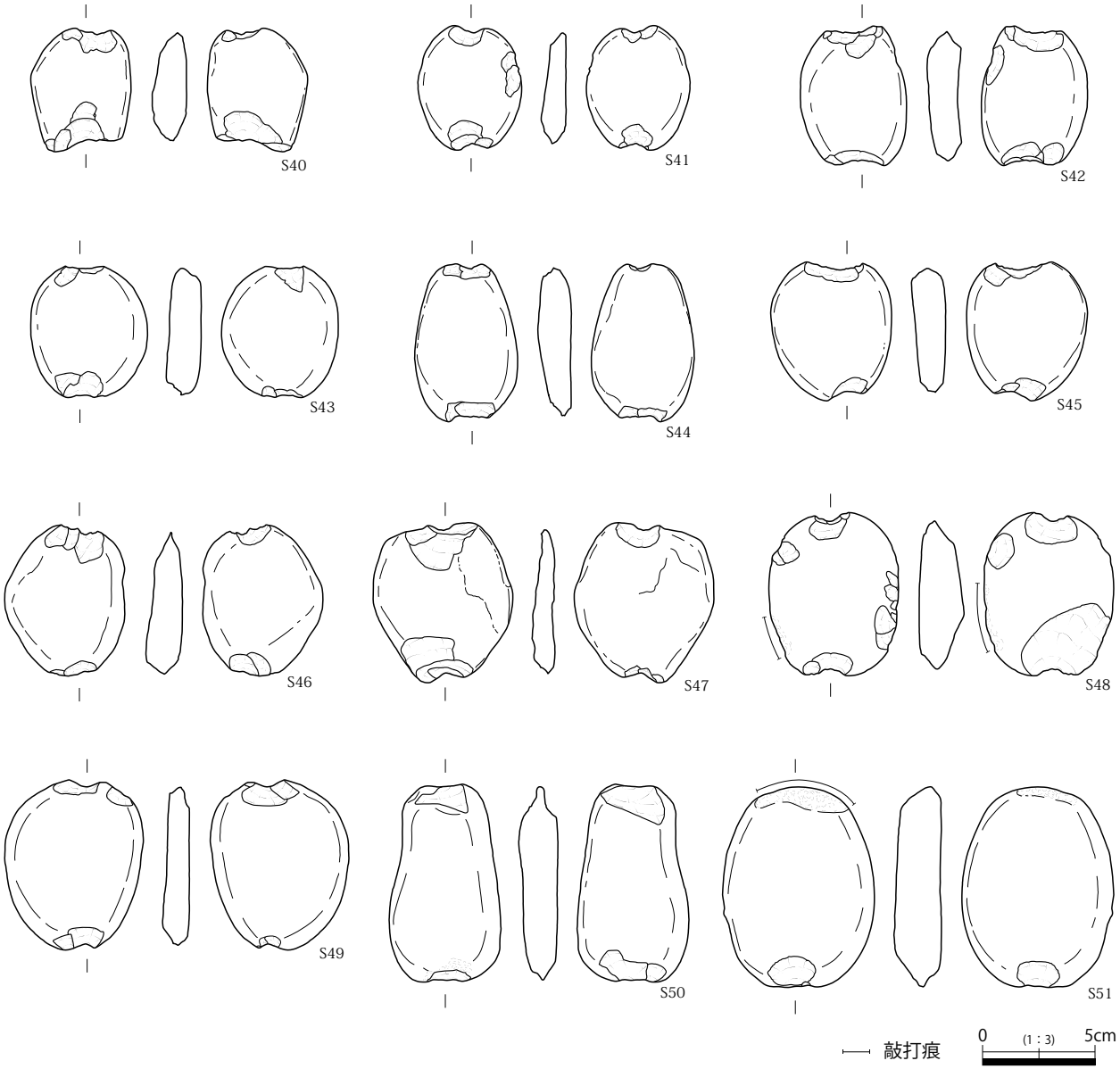


図 131　４溝下層 出土石器（２）

編組製品以外の出土木製品

＜４溝上層＞（図132、PL.93・94）

W35 は芯持ち丸太材の端部に抉りを施したもので、垂木の可能性が高いと考えた。樹種はヤブツバキである。W36 は板である。板目に粗く分割し、表面は整えられていない。側面に加工があり、矢板状に先が尖っている。W37 はアカガシ亜属を素材とした器種不明の板状木製品である。W38・W39 は芯持ち丸太材を素材とした杭である。

＜４溝下層＞（図133、PL.93・94）

W40 はヤブツバキを素材とした横槌で、表面には使用に伴うと見られる敲打痕が見られる。W41 は自在鉤である。樹皮の付いたヤブツバキの丸太材を用いている。W42 はクリの角材を利用した杭である。

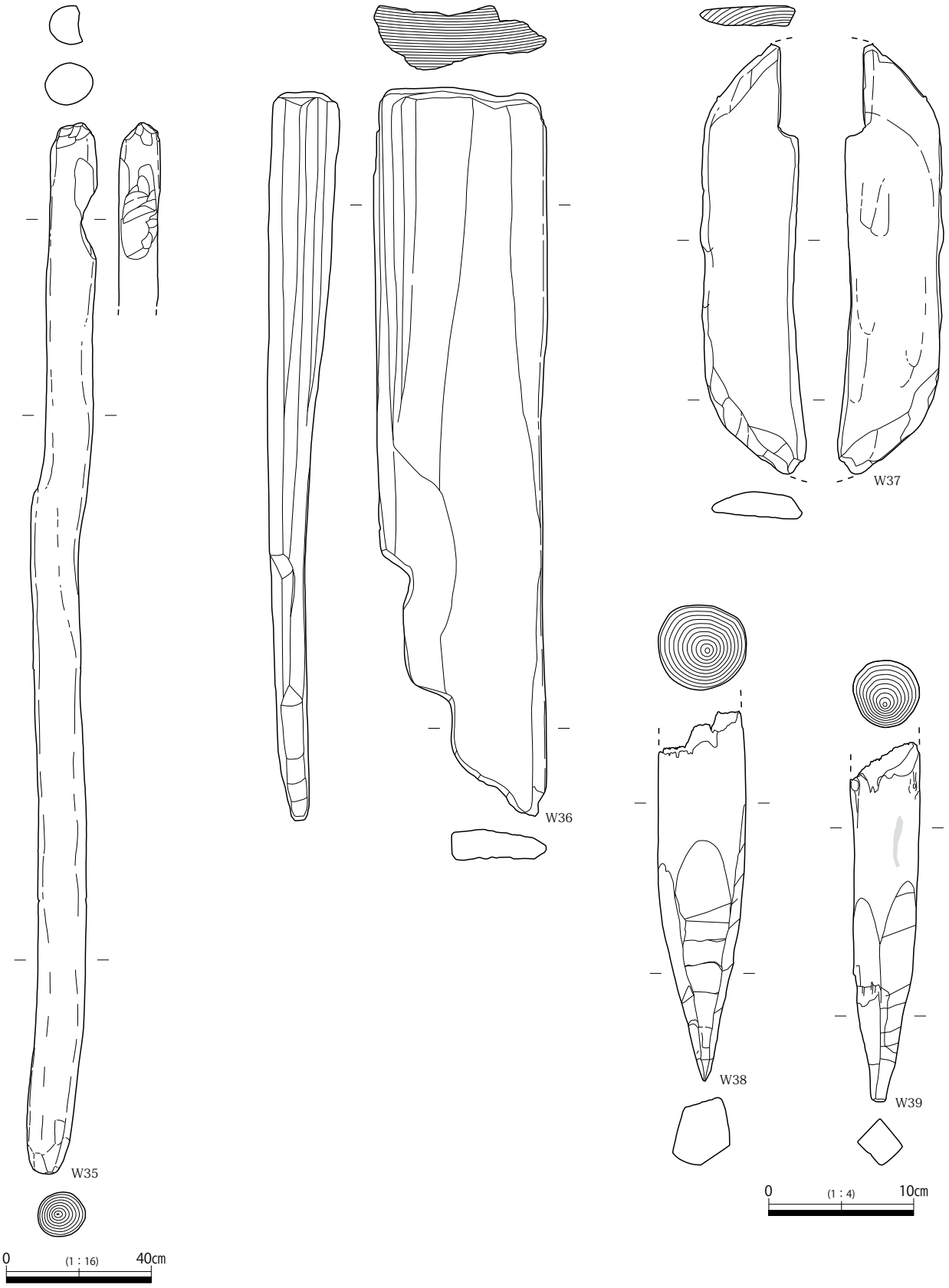


図 132　４溝上層 出土木製品

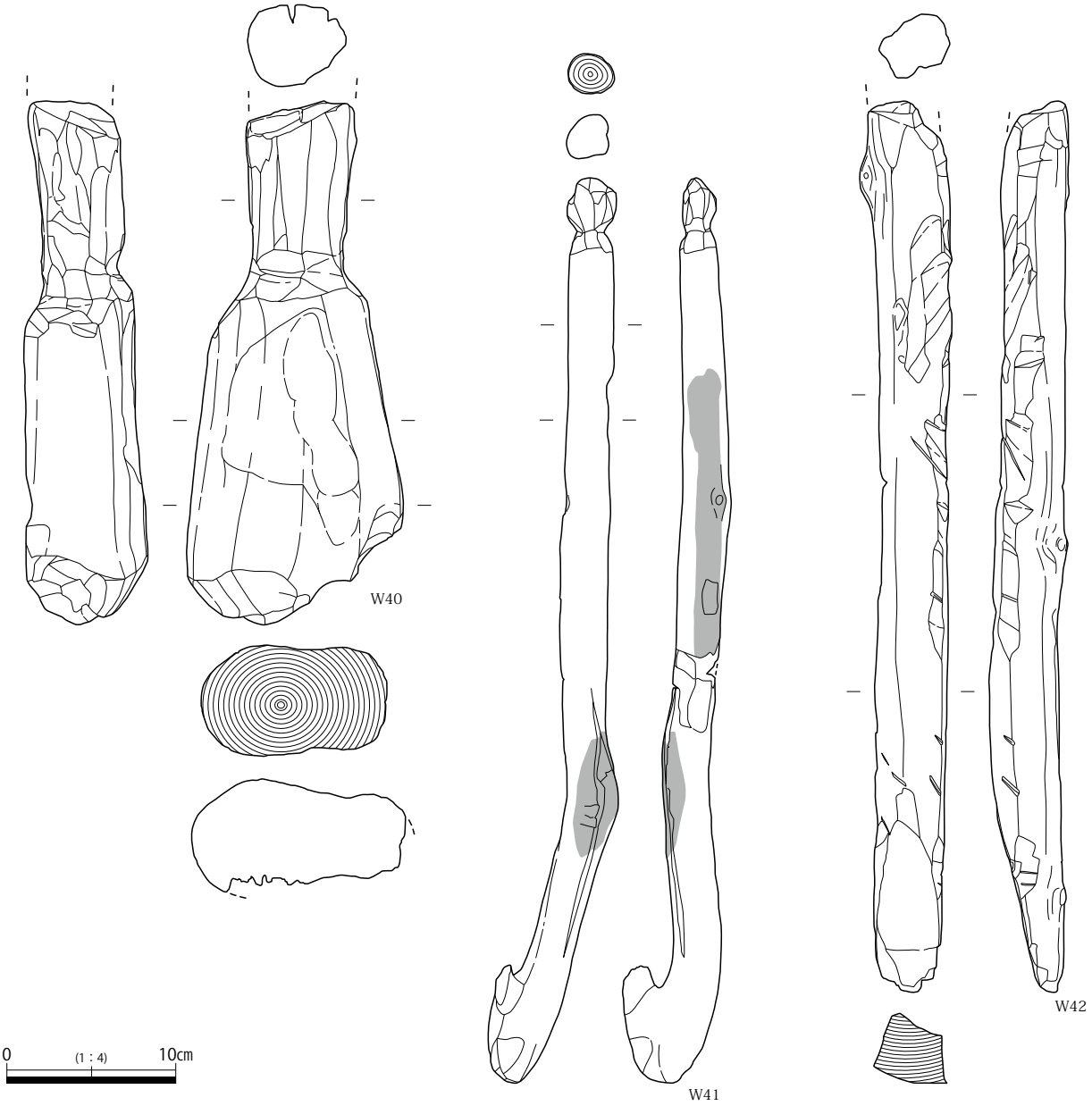


図 133　４溝下層 出土木製品

４・６溝出土編組製品

a 製品（図 134 ～ 144、PL.95 ～ 101）

４・６溝を埋める上層と下層から 13 点の編組製品が出土した。上層に相当する層準からは立体的な製品（カゴ）が６点（編組製品１～６）、下層に相当する層準からは立体的な製品（カゴ）が６点（編組製品７～ 12）と平面的な製品の一部とみられる小片が１点（編組製品 13）が出土している。以下、層位別に出土した編組製品を概略する。

なお、ここに記した寸法は、土圧でつぶれた状態の残存部位を可能な範囲で計測したもので、平面的な長さを計測した数値を示す。よって、立体的な正確な寸法を表したものではない。また、本報告では、口縁部に向かって縦方向に立ち上げる材を「タテ材」、タテ材に直交する方向に編まれた材を「ヨコ材」、体部に施された補強や装飾を「帯」、そのために付加されたヨコ材を「帯材」、口縁部や体部に巻き付けられた材を「巻き付け材」と呼称する。体部に編まれた（もじられた）ヨコ材については、口縁部から下に向かって、段数を数える場合がある。口縁の縁仕舞に、編まれた（もじられた）ヨコ

材が組み合う場合､縁仕舞を構成するヨコ材を１段目とする。また、口縁端部が残存する個体の長さについては、縁仕舞された口縁部の端部から下に向かって、もっとも長く残るタテ材の端までを計測した（遊離して原位置を保っていないとみられるタテ材は除外)。

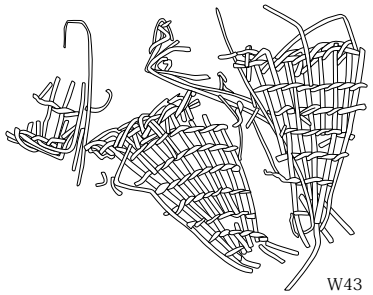


図 134　４溝 出土編組製品１

①上層出土の編組製品

編組製品１（図 134、PL.100）

４溝の西南端から出土した。もじり編みの立体的な編組製品である。

＜残存部位・寸法・器形＞

土圧でつぶれ、縦方向に分裂している。底部を欠くが、口縁部以下、底部直上まで体部が観察できる。残存する口縁部の幅は約 16 cm、口縁部から底部直上部までの長さは約 10 cm である。底部の幅は５cm 程度と推測する。器形がわかるものの中では最も小型品である。もとは鉢形を呈していたと考える。

＜製作技法と素材＞

もじり編みには２本のヨコ材が使用されている。ヨコ材は左撚りで、10 mm ほどの間隔をあけて施されている。タテ材は５mm ほどの間隔をあけている。口縁部の縁仕舞はタテ材の余剰を左斜め下方向に折り返し、左のタテ材を１本飛ばして、最上段のもじり編みに差し込んで、固定している。素材はタテ材、ヨコ材ともにヒノキの割り裂き材である。

編組製品２（図 135、PL.95）

４溝の西側から出土した。もじり編みの立体的な編組製品である。上層に相当する層準から出土した。

＜残存部位・寸法・器形＞

カゴの上半である。２枚の編組製品が上下に重なった状態で出土した。上面部（表）と下面部（裏）は別の編組製品ではなく、本来は一体のものだったが、土圧でつぶされ、左右の両端で分離している。丁寧にクリーニングし、保存処理を行ったところ、両外面の観察が可能となった。残存する胴部の横幅は 60 ～ 70 cm、口縁部から底部に向かって長さ約 35 cm が残存していた。底部は完全に失われている。口縁の周囲長は 140 ～ 150 cm となる見込みで、口径は 44 ～ 50 cm 程と推測する。広口で、バスケット形を呈するカゴと考える。

＜製作技法と素材＞

もじり編みには２本のヨコ材が使用されている。ヨコ材は左撚りで、10 mm ほどの間隔をあけて施されている。タテ材は６～８mm ほどの間隔をあけている。タテ材、ヨコ材に使用されているのはヒノキの割り裂き材である。口縁部の縁仕舞はタテ材の余剰を右斜め下方向に折り返し、右横の２本程度飛ばして、最上段のもじり編みにタテ材の端を差し込んで、固定している。また、胴部には２段に帯が付加されている。帯に使用されているのはテイカカズラの丸材、径は５～ 7.5 mm である。

上段の帯は口縁部から約５cm 下にある。上面側に確認できる帯材は４本、下面側に確認できる帯材は２本である。下面側を基準とすれば、上段の帯は上下２本の帯材が一単位となっていることがわ

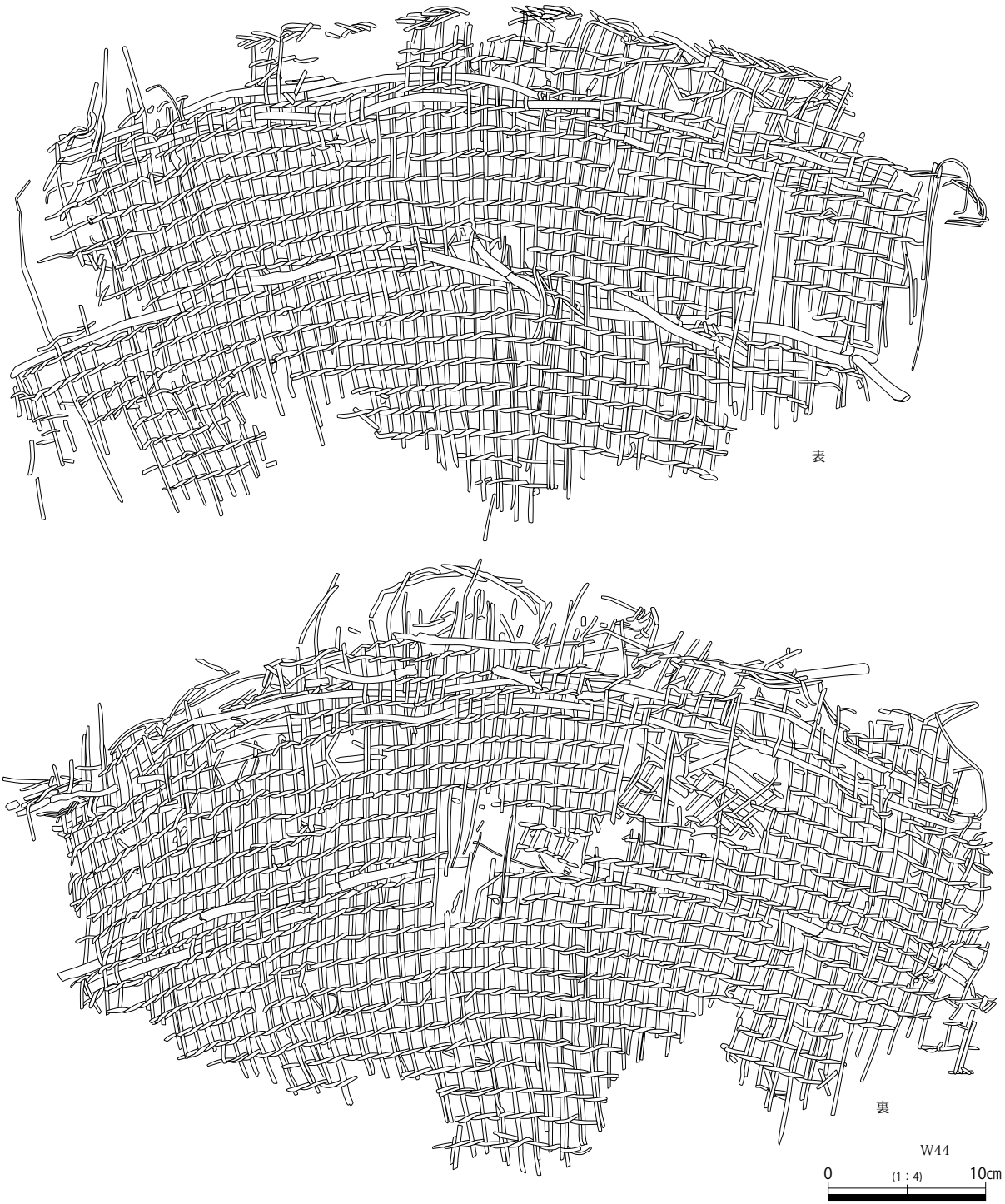


図 135　４溝 出土編組製品２

かる。上面側に４本の帯材が使用されているのは、不足した帯材の長さを補うために、別の帯材が付加されているからだろう。なお、上下２本の帯材は３～６本程度のタテ材を超えて、潜るが、上下の位置関係にある帯材の越え、潜りの関係は上下で一致していない。一見、上下で越えと潜りの位置関係が交互になっているようにみえるが、整然とした関係にはなく、タテ材数本単位でずれが認められる。また、下面側は上下二本の帯材が並走するが、上面側では中央付近で２本の帯材が交差し、位置関係を逆転している。

一方、下段の帯は上段の帯の約 10 cm 下にある。上・下面に確認できる帯材は２本である。下面側の左端では 16 cm 幅で２本の帯材が上下に並走するが、上面側の右側では２本の帯材が交互に絡めら

れている。上段の帯は２本を一単位としているが、下段の帯は１本で構成され、途中、不足した帯材を別の帯材を絡めて継ぎ足しているものと考えられる。なお、上下２本の帯材は５～７本程度のタテ材を越えて、潜る。

タテ材は１本の部分と、２本が一組になってなる部分とがある。その組み合わせに規則性はみえない。前者が連続する部分もあれば、後者が連続する部分もある。また、２本一組となるタテ材には、次のようなあり方が観察できる。①２本のタテ材を組み合わせているが、途中から１本となり、口縁部で縁仕舞されるもの。②２本一組のタテ材が途中で分割されて、それぞれ１本のタテ材として口縁部で縁仕舞されるもの。③途中からタテ材が２本となり、そのまま口縁部で縁仕舞されるもの。④２本のうちの１本がＬ字に折れて、ヨコ材となるもの。

また、タテ材をもじって留めるヨコ材には、長さの不足を補うために追加されたヨコ材の結び目が数カ所に観察できる。

編組製品３（図 136、PL.100）

４溝の西側から出土した。もじり編みの立体的な編組製品である。上層に相当する層準から出土した。

＜残存部位・寸法・器形＞

W45－１～３は同一個体である。掘り下げ中に分離しており、接合関係は不明である。W45－１が最も大きな破片である。口縁部以下、底部直上付近まで体部が観察できる。体部の中程から下部にかけては痛みがひどいが、口縁部はとても状態が良い。また、口縁部の右側は５cm ほどが下側に折れまがっているようで、縁が二重になっている。残存部位の寸法は、口縁部の幅が 17 cm、胴部の幅が

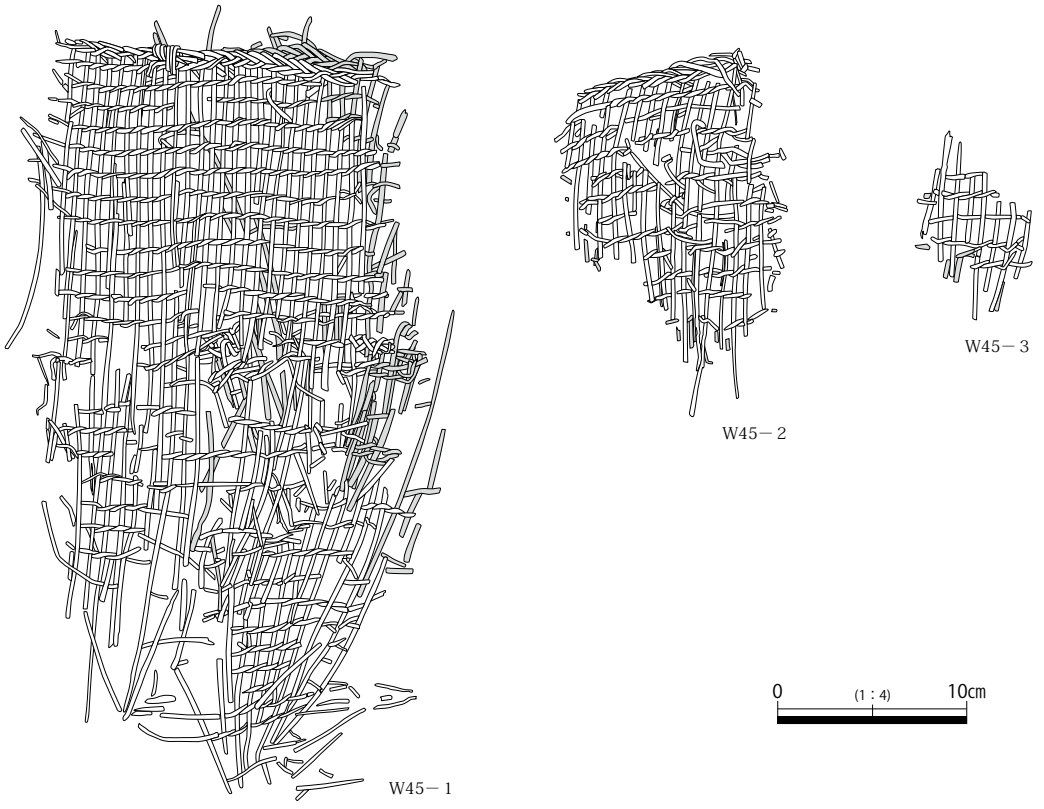


図 136　４溝 出土編組製品３

20 cm、口縁部から底部に向かって長さが約 39 cm である。W45－２は口縁部から体部上半の一部が観察できる。口縁部が幅 10 cm、体部が幅 11 cm、口縁部から下に向かって長さ 18 cm が残存している。W45－１同様、口縁部の状態は良い。W45－３は体部の小片である。縦方向に 10 cm、横方向に６cm が残存している。

＜製作技法と素材＞

W45－１について記述する。もじり編みには２本のヨコ材が使用されている。ヨコ材は左撚りで、10 mm ほどの間隔をあけて施されている。タテ材は５mm ほどの間隔をあけている。口縁部から下に 18 cm ほどのところまでは状態が良いが、それ以下は、多くのヨコ材が解けて失われており、タテ材も乱れている。また、タテ材は１本を基本とする。所々に５～７cm 程度、タテ材を重ねて使い、長さの不足を別の材で補っている箇所がある。タテ材とヨコ材にはいずれもヒノキの割り裂き材が使用されている。口縁部の縁仕舞はタテ材の余剰を右斜め下方向に折り返し、右横の１本を飛ばして、最上段のもじり編みにタテ材の端を差し込んで、固定している。また、残存する口縁部の中央やや左よりの位置に縦方向に巻かれた巻き付け材がある。丁寧に結束されており、２段目にもじられたヨコ材も一緒に巻き込んでいる。その他、残存する体部中央右端には、14 段目にもじられたヨコ材とタテ材の交点部分を巻き付け材で交差して緊縛する部分が認められる。

編組製品４（図 137、PL.96）

４溝の西側から出土した。もじり編みの立体的な編組製品である。

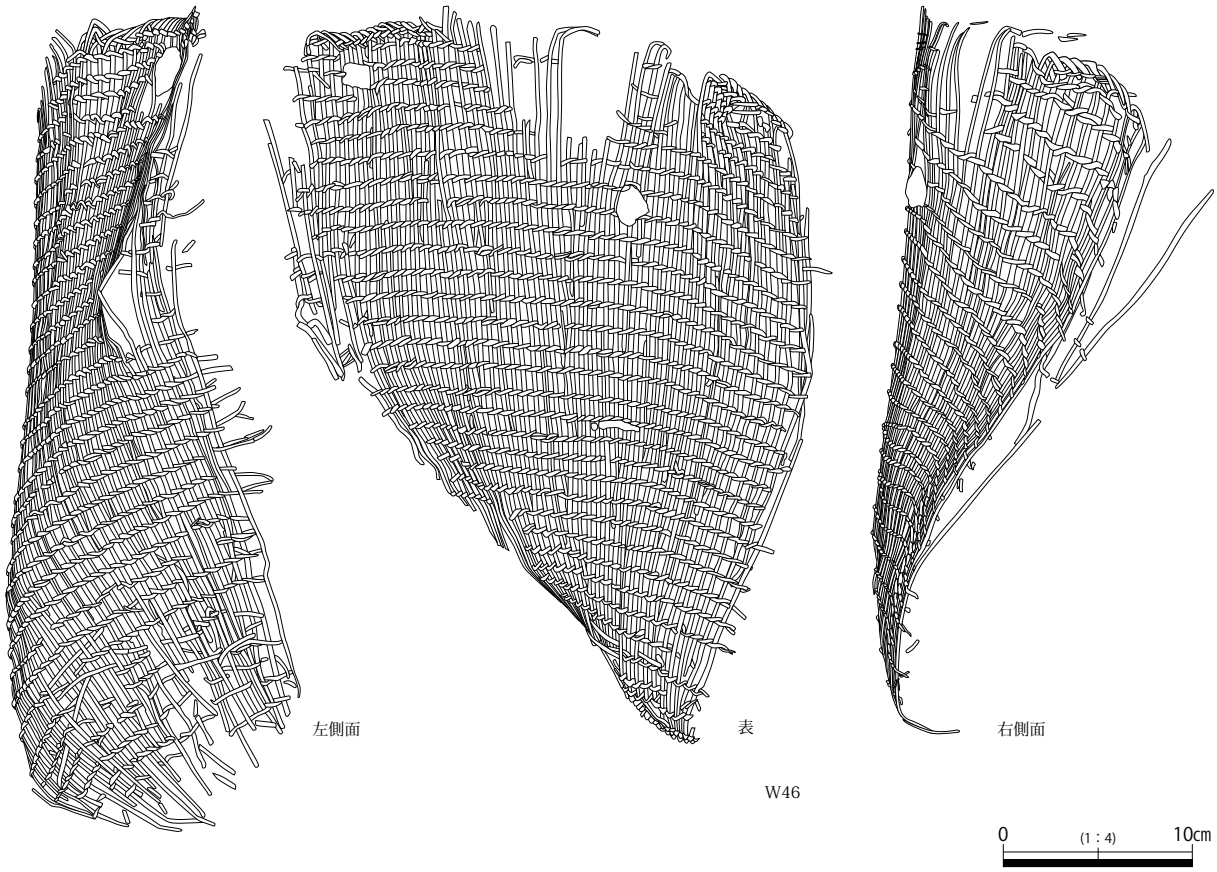


図 137　４溝 出土編組製品４

＜残存部位・寸法・器形＞

口縁部以下、底部直上付近まで体部が観察できる。口縁部は中央部が大きく欠損しているが、全体としては、適度に立体形を保っており、外面側から編組技術を観察できる優品である。残存部位の寸法は、口縁部の幅が 26 cm、胴部の幅が 28 cm、口縁部から底部に向かって長さが約 39 cm である。縦に長い深鉢形を呈する。

＜製作技法と素材＞

もじり編みには２本のヨコ材が使用されている。ヨコ材は左撚りで、８～ 10 mm ほどの間隔をあけて施されている。タテ材は５mm ほどの間隔をあけている。タテ材は１本を基本とするが、長さの不足を補うためにタテ材を２本が重なる部分がある。タテ材とヨコ材にはいずれもヒノキの割り裂き材が使用されている。口縁部の縁仕舞はタテ材の余剰を右斜め下方向に折り返し、右横のタテ材を１本程度飛ばして、最上段のもじり編みにタテ材の端を差し込んで、固定している。

編組製品５（図 138、PL.97）

６溝の西側から出土した。もじり編みの立体的な編組製品である。

＜残存部位・寸法・器形＞

口縁部付近から底部直上付近まで体部が観察できる。口縁部の縁仕舞は全く残存していない。体部の上半はひどく傷んでおり、ヨコ材の大半が失われている。残存する体部の寸法は、幅が約 30 cm、長さが約 55 cm である。縦に長い深鉢形を呈する。

＜製作技法と素材＞

もじり編みには２本のヨコ材が使用されている。ヨコ材は左撚りで、12 ～ 18 mm ほどの間隔をあけて施されている。タテ材は５mm ほどの間隔をあけている。タテ材は１本を基本とするが、２本を重ねて、長さの不足を補うタテ材が数カ所にある。タテ材とヨコ材にはいずれもヒノキの割り裂き材が使用されている。体部中程の右端には、テイカカズラのツルが２ケ所に確認できる。約３cm のツルがタテ材に直行しており、帯材の可能性がある。

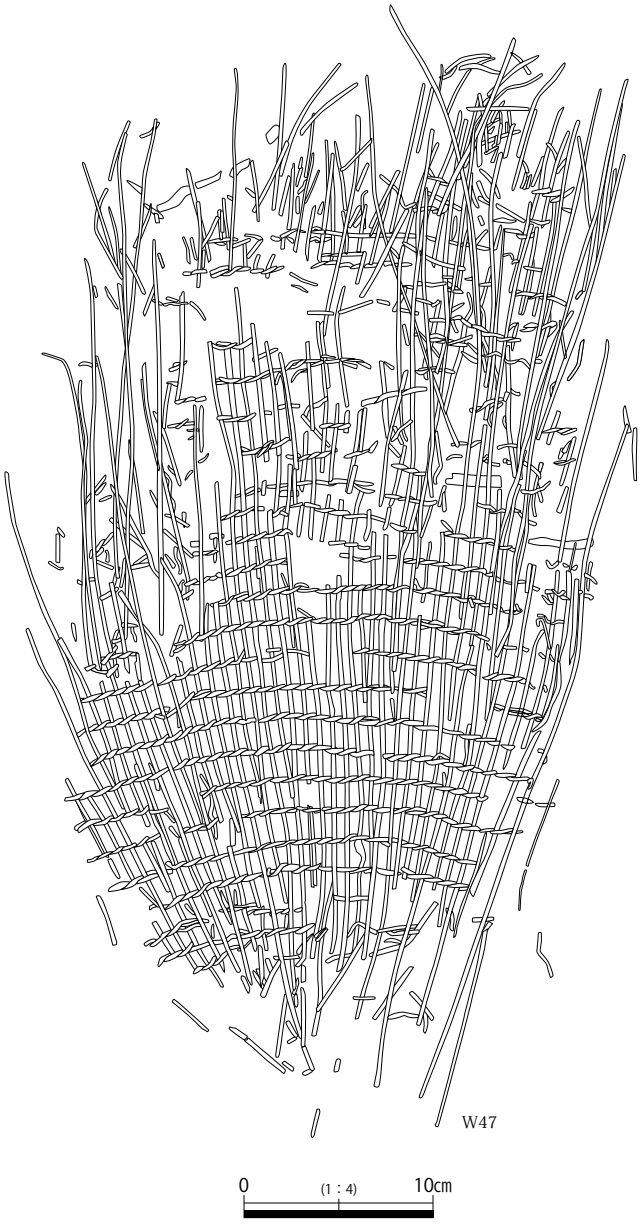


図 138　６溝 出土編組製品５

編組製品６（図 139）

４溝の西側から出土した。もじり編みの立体的な編組製品である。

＜残存部位・寸法・器形＞

体部の破片である。ひどく傷んでおり、ヨコ材がかなり失われている。残存する寸法は、幅が約 28 cm、長さが約 22 cm である。器形は不明である。

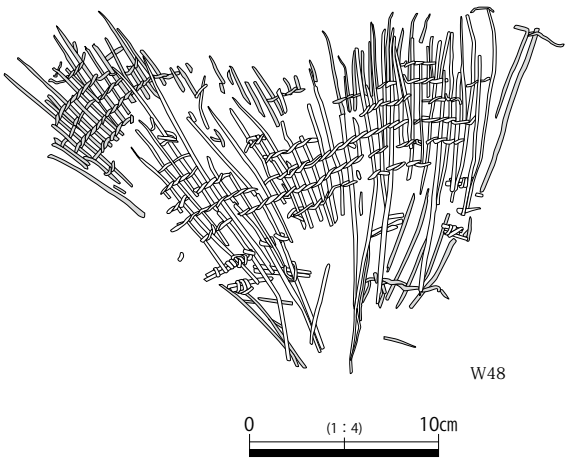


図 139　４溝 出土編組製品６

＜製作技法と素材＞

もじり編みには２本のヨコ材が使用されている。ヨコ材は左撚りで、８mm ほどの間隔をあけて施されている。タテ材は４mm ほどの間隔をあけている。タテ材は１本を基本とする。タテ材とヨコ材にはいずれもヒノキの割り裂き材が使用されている。また、下半部の左端に、巻き付け材で緊縛された２本を一組とするヨコ材がタテ材に直行するよう、２段に添えられている。巻き付け材もヒノキの割り裂き材である。

②下層出土の編組製品

編組製品７（図 140、PL.98）

４溝の西側から出土した。もじり編みの立体的な編組製品である。

＜残存部位・寸法・器形＞

口縁部以下、底部直上まで体部が観察できる。底部は完全に失われている。口縁部は中央部が大きく欠損しているが、体部は立体形を良く保っており、外面側から編組技術を観察できる優品である。左側のみ口縁部の縁仕舞が残存している。幅は７cm ほどで、状態は良くない。体部は底部に向かって少し狭まっていく。体部の横幅は口縁部側が約 46 cm、底部側が約 20 cm、口縁部から底部に向かって長さ約 32 cm が残存している。広口で、バスケット形を呈する。

＜製作技法と素材＞

もじり編みには２本のヨコ材が使用されている。ヨコ材は左撚りで、８mm ほどの間隔をあけて施されている。タテ材は２～４mm ほどの間隔をあけている。ヨコ材の長さを補うために、途中で別のヨコ材が追加されており、その結合部分を数カ所に観察できる。タテ材は１本を基本とするが、長さの不足を補ったり、体部上半を広くするためにタテ材が付加されており、２本が一組となっている部分が複数ある。タテ材とヨコ材にはいずれもヒノキの割り裂き材が使用されている。口縁部の縁仕舞はタテ材の余剰を右斜め下方向に折り返し、最上段のもじり編みにタテ材の端を差し込んで、固定している。

体部には３段の帯がある。４～７本の帯材を一単位とする。１本の帯材の幅は５～ 7.5 mm、素材はテイカカズラである。上段の帯は口縁部の直下にある。７本の帯材で構成される。帯の幅は約５cm である。最上部をめぐる２本のみがもじられており、他の５本はそれぞれがヨコ材の間を整然と縫うように水平に施されている。状態が悪く、観察が難しいが、水平に施された帯材は同じ位置で６～８本程度のタテ材を越えて、潜る。上段の帯から７cm 下に中段の帯がある。４本の帯材で構成される。帯の幅は約 3.5 ～ 3.8 cm である。全てヨコ材の間を整然と縫うように水平に施されている。５本ないし６本のタテ材を越えて、潜る。下段の帯は中段の４cm ほど下にある。５本の帯材で構成さ

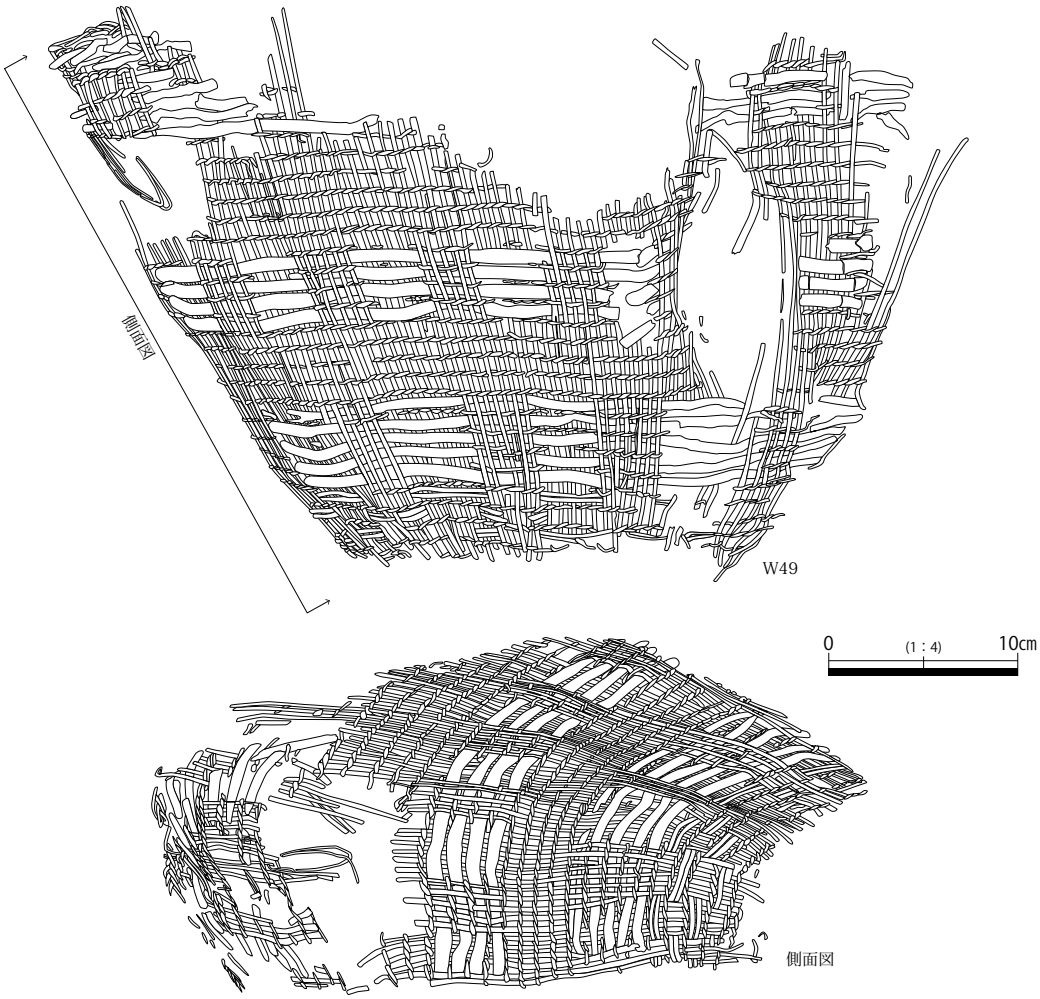


図 140　４溝 出土編組製品７

れる。帯の幅は約４～ 4.5 cm である。全てヨコ材の間を整然と縫うように水平に施されている。４～８本のタテ材を越えて、潜る。また、下段の帯の直下は、２本を一組とする割り裂き材をタテ、ヨコに組む。上・中・下段に施された帯の越えと潜りの関係は、観察できる面においては、位置をそろえるような意識があるようにみえる。ただし、体部が上方に向かって広くなるため、タテ材の本数が途中で付加されることで少しずつ位置がずれる。

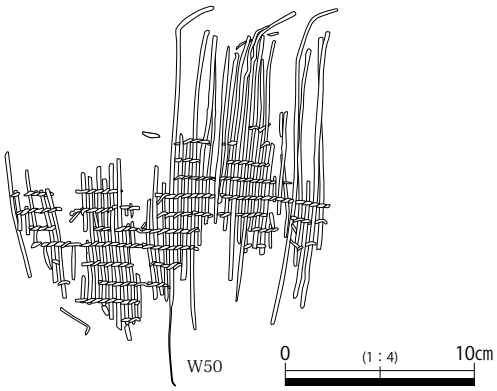


図 141　４溝 出土編組製品８

編組製品８（図 141）

４溝の西側から出土した。もじり編みの立体的な編組製品である。

＜残存部位・寸法・器形＞

口縁部付近が観察できる体部片である。折り曲げられタテ材の端部を観察できるが、口縁部付近のヨコ材は全て失われていて、縁仕舞は全く残存していない。残存する体部の寸法は、幅が約 27 cm、長さが約 19 cm である。器形は不明である。

＜製作技法と素材＞

もじり編みには２本のヨコ材が使用されている。ヨコ材は左撚りで、６～８mm ほどの間隔をあけて施されている。タテ材の間隔は２mm ほどである。タテ材とヨコ材にはいずれもヒノキの割り裂き材が使用されている。

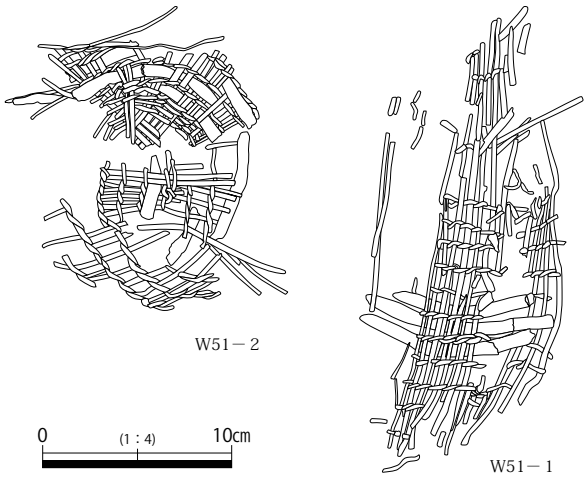


図 142　４溝 出土編組製品９

編組製品９（図 142、PL.101）

４溝の西南端から出土した。もじり編みの立体的な編組製品である。

＜残存部位・寸法・器形＞

一個体とみられるカゴが、押しつぶされて、複雑に折れ曲がった状態で出土した。口縁部に近い部分や、帯を伴う体部、底部が確認できだが、残存部位の寸法は計測できなかった。器形は、広口で、バスケット形を呈すると推測する。

＜製作技法と素材＞

体部はもじり編みである（W51－１）。２本のヨコ材が使用されている。ヨコ材は左撚りで、10～12 mm ほどの間隔をあけて施されている。タテ材の間隔は２～４mm である。タテ材とヨコ材にはいずれもヒノキの割り裂き材が使用されている。口縁部の縁仕舞が確認できる場所はないが、端部を折り返しているタテ材があるので、おそらくタテ材の余剰を斜め下に折り返し、最上段のもじり編みに端部を差し込んで、固定していたものと思われる。

体部に観察できる帯は、３本の帯材を一単位にしたものである。帯の幅は 2.6 cm で、ヨコ材の間を縫うように帯材が水平に施されている。１本の帯材の幅は５～８mm で、７本前後のタテ材を越え、潜る。

底部は円形を呈している（W51－２）。３・４本を一組とした割り裂き材をタテ、ヨコに組み、体部を立ち上げている。また、底部の外周付近は、タテ、ヨコに組まれた材を縫うように、テイカカズラが施されている。円形にめぐるテイカカズラの内側には２本の割り裂き材を使用した４段のもじり編みが確認できる。

編組製品 10（図 143、PL.99）

４溝の北側から出土した。もじり編みの立体的な編組製品である。

＜残存部位・寸法・器形＞

口縁部以下、底部直上付近まで体部が観察できる。土圧でつぶれており、口縁部が二重になってみえる。口縁部や体部が良好な状態を保つ優品で、外面側から編組技術が観察できる。残存部位の寸法は、口縁部の幅が 27 cm、下部から 10 cm ほどの幅が 15.5 cm、口縁部から底部に向かって長さが約 36 cm である。縦に長い深鉢形を呈する。

＜製作技法と素材＞

もじり編みには２本のヨコ材が使用されている。ヨコ材は左撚りで、６～８mm ほどの間隔をあけて施されている。タテ材の間隔は４～５mm ほどである。タテ材は１本を基本とするが、長さの不足を補うために、２本のタテ材を重ねる部分がある。タテ材とヨコ材にはいずれもヒノキの割り裂き材が

使用されている。口縁部の縁仕舞はタテ材の余剰を右斜め下方向に折り返し、右横のタテ材を１本程度飛ばして、最上段のもじり編みにタテ材の端を差し込んで、固定している。

体部の中央付近、直径５cm ほどの補修とみられる痕跡がある。もじられたヨコ材が抜けており、短いタテ材が追加されたり、ヨコに添えた材に、巻き付け材を巻き付けている様子が観察できる。

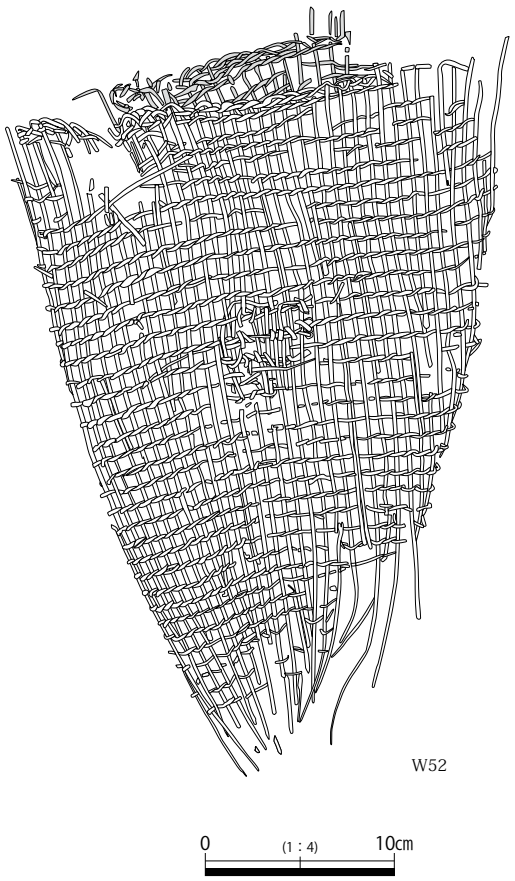


図 143　４溝 出土編組製品 10

編組製品 11（図 144、PL.101）

４溝の北側から出土した。もじり編みの立体的な編組製品とみられる。

＜残存部位・寸法・器形＞

体部の小破片である。残存する寸法は、幅が約 16 cm、長さが約 20 cm である。器形は不明である。

＜製作技法と素材＞

もじり編みには２本のヨコ材が使用されている。ヨコ材は左撚りで、10 ～ 14 mm ほどの間隔をあけて施されている。タテ材の間隔は６～８mm ほどである。タテ材は１本を基本とするが、２本のタテ材が重ねられた部分も観察できる。タテ材とヨコ材にはいずれもヒノキの割り裂き材が使用されている。

編組製品 12（図 144、PL.101）

４溝の北側から出土した。もじり編みの立体的な編組製品とみられる。

＜残存部位・寸法・器形＞

体部の小破片である。残存する寸法は、幅が約 10 cm、長さが約 15 cm である。器形は不明である。

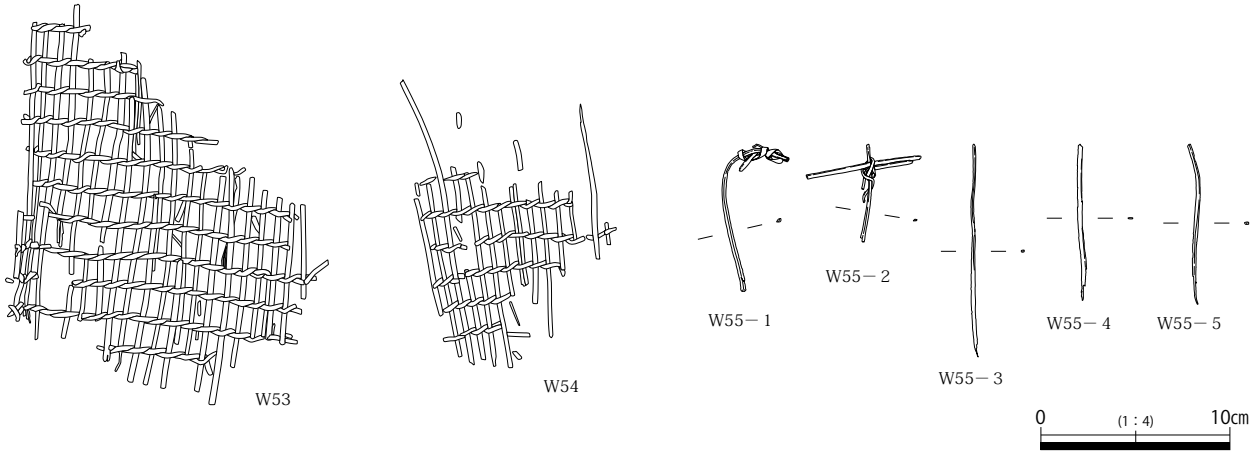


図 144　４溝 出土編組製品 11・12・13

＜製作技法と素材＞

もじり編みには２本のヨコ材が使用されている。ヨコ材は左撚りで、14 mm ほどの間隔をあけて施されている。タテ材の間隔は４～５mm ほどである。タテ材は１本を基本とするが、２本のタテ材が重ねられた部分も観察できる。タテ材とヨコ材にはいずれもヒノキの割り裂き材が使用されている。

編組製品 13（図 144）

４溝の北側から出土した。格子状に組んだタテ材とヨコ材を巻き付け材で巻き留めて製作されたネット状の編組製品の小片である。類例から平面的な編組製品と考えられるもので、左端の破片は縁部であろう。Ｌ字状に曲げられた材に巻き付け材が残る。左から二番目の破片はタテ材とヨコ材の交点を緊縛する巻き付け材が観察できる。

図 145　４溝上層 出土編組製品素材束１（１）

b　素材

４・６溝を埋める上層と下層から出土した加工された木材の中に、編組製品の素材と考えられるものが認められた。

①素材束

素材束１（図 145 ～ 147、PL.102）

４溝の南側から出土した。出土層位は上層である。ヒノキの割り裂き材が束になって出土した。４・６溝から出土した各編組製品のタテ材とヨコ材の樹種は全てヒノキなので、素材束１は編組製品の素材とみられる。もとは何かで結わえてあったのかもしれない。実測した 23 本の他に、小片が２本ある。

素材の長さは、22 － 25 cm、43 － 67 cm の２グループに大別できる。22 － 25 cm のグループは２

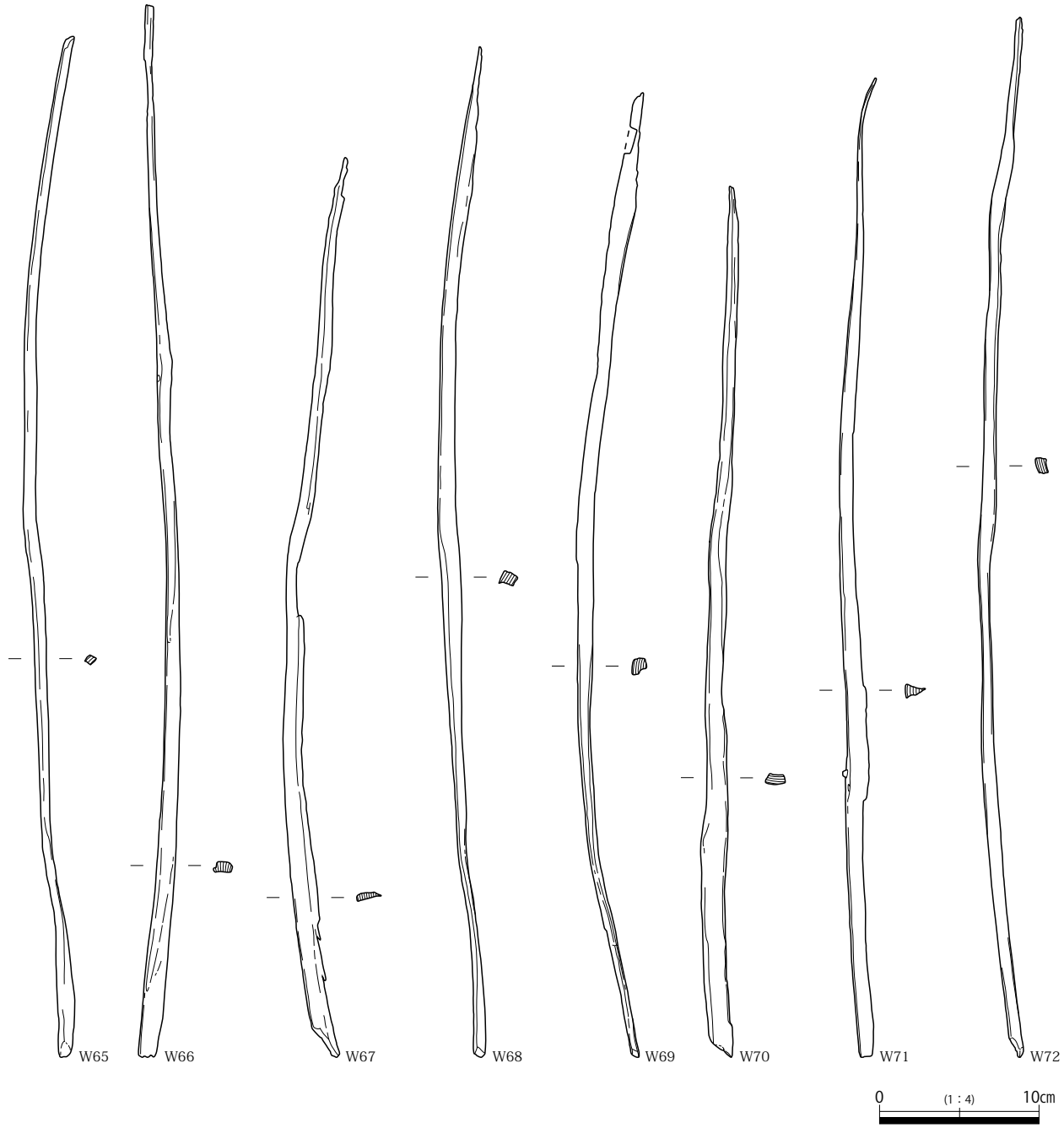


図 146　４溝上層 出土編組製品素材束１（２）

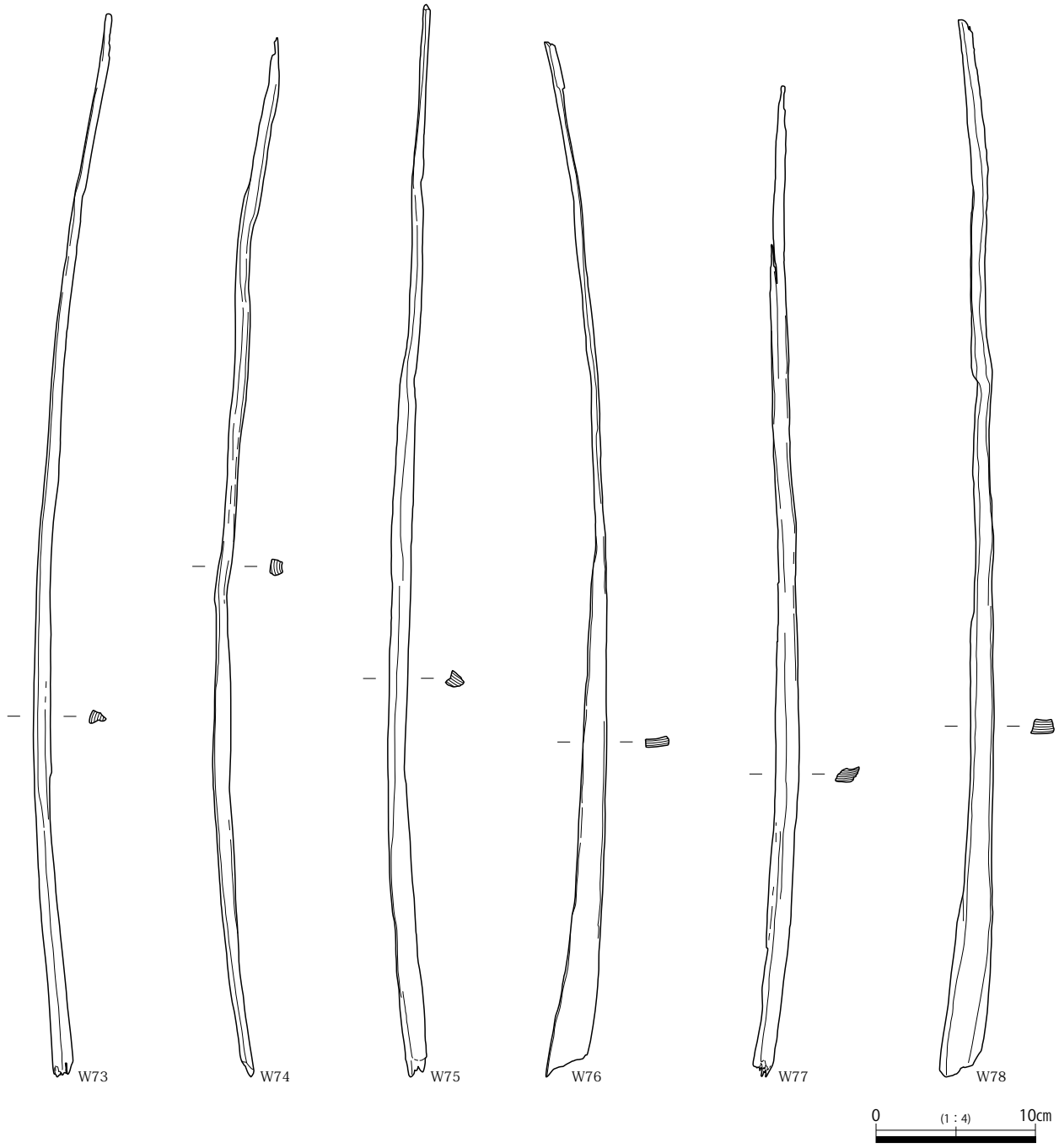


図 147　４溝上層 出土編組製品素材束１（３）

点しかない。端材もしくは破片の可能性がある。一方、43 cm 以上の素材の多くは長さが 60 cm 以上のもので占められている。この度の調査で出土した編組製品（カゴ）の中で、最も体部の長い編組製品５に使用されているタテ材の長さは 50 cm 前後となる見込みであり、素材束１の多くは、編組製品の素材に使用できる長さを保っている。

なお、各素材には、幅、厚さが比較的均質なものと、均質でないものがある。均質なものは、後者に比べて、幅と暑さが２～８mm におさまるものが多い。一方、均質でないものは厚みに対し、幅の広いものが多い。その中には両端の幅が大きく異なるものがあり、W76 は両端部の幅が約 18 mm も違う。

ヒノキ製のタテ材やヨコ材の幅や厚みは概ね２mm 程度なので、素材束１は編組製品に使用する素

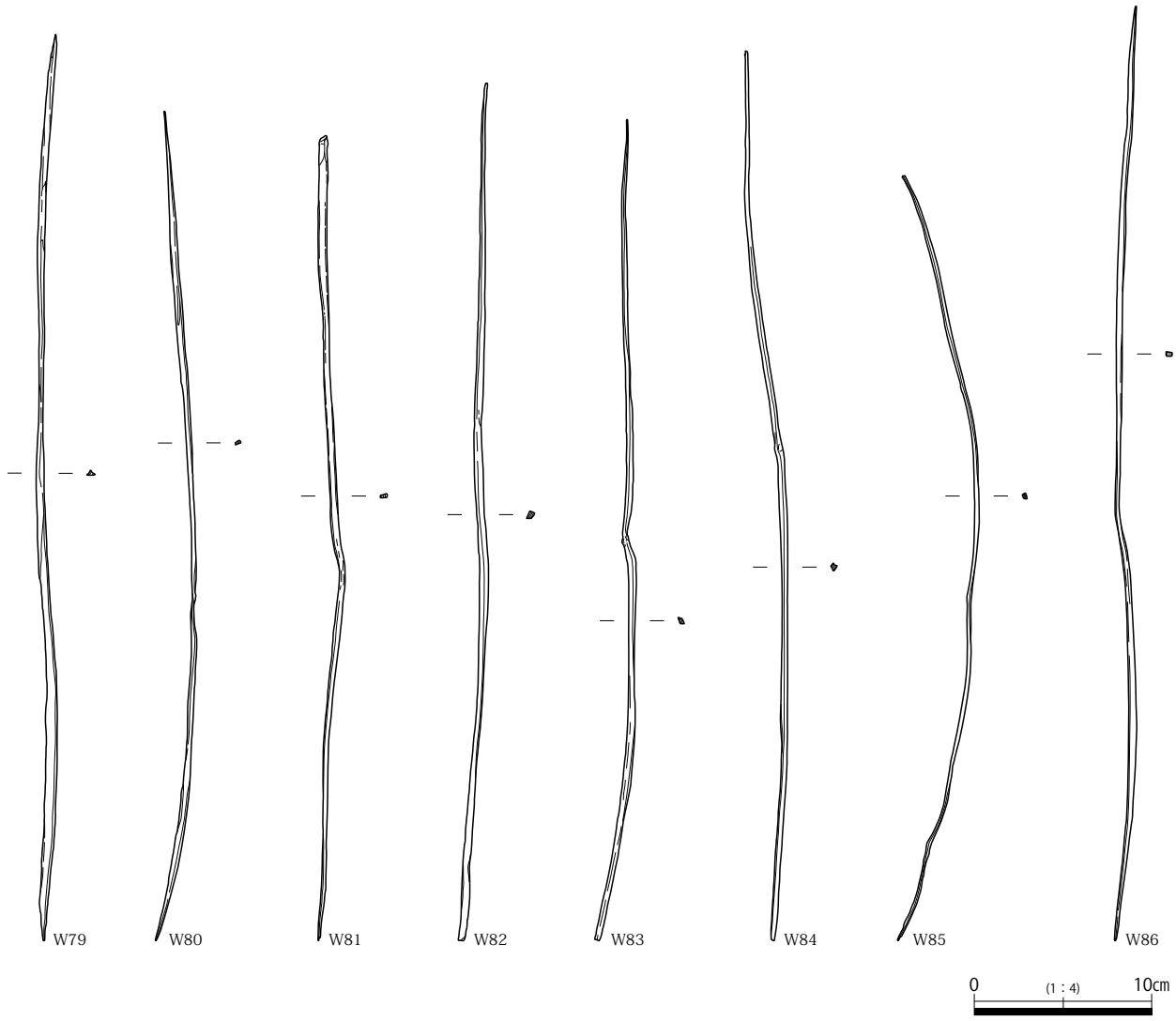


図 148　４溝上層 出土編組製品素材束２（１）

材を分割する作業過程にあるものが束ねてあったと考えられる。幅や厚さが均質なものは、均質でないものよりも細く割り裂かれた状態にある。均質でないものよりも、作業の工程が先に進んだ状態にあると理解できよう。すると、素材束１には、作業工程の異なる素材が一緒に束ねてあったことになる。

素材束２（図 148 ～ 151、PL.103）

４溝の南側で、編組製品４に近接して出土した。出土層位は上層である。ヒノキの割り裂き材が束になっていた。４・６溝から出土した各編組製品のタテ材とヨコ材の樹種は全てヒノキなので、素材束２も編組製品の素材とみられる。もとは何かで結わえてあったのかもしれない。実測した 32 本の他に、小片が 12 本ある。

素材の長さには、20 ～ 61 cm までの幅がある。一定の長さにまとまるグループはないが、50 cm 台が最も多い。この度の調査で出土した編組製品の中で、最も体部の長い編組製品５に使用されているタテ材の長さは 50 cm 前後となる見込みであり、素材束２の多くは、素材束１と同様に編組製品の素材に使用できる長さを保っている。

束ねられていた素材の幅や厚みは、均質なもので占められている。幅や厚みは１～５mm 程度のも

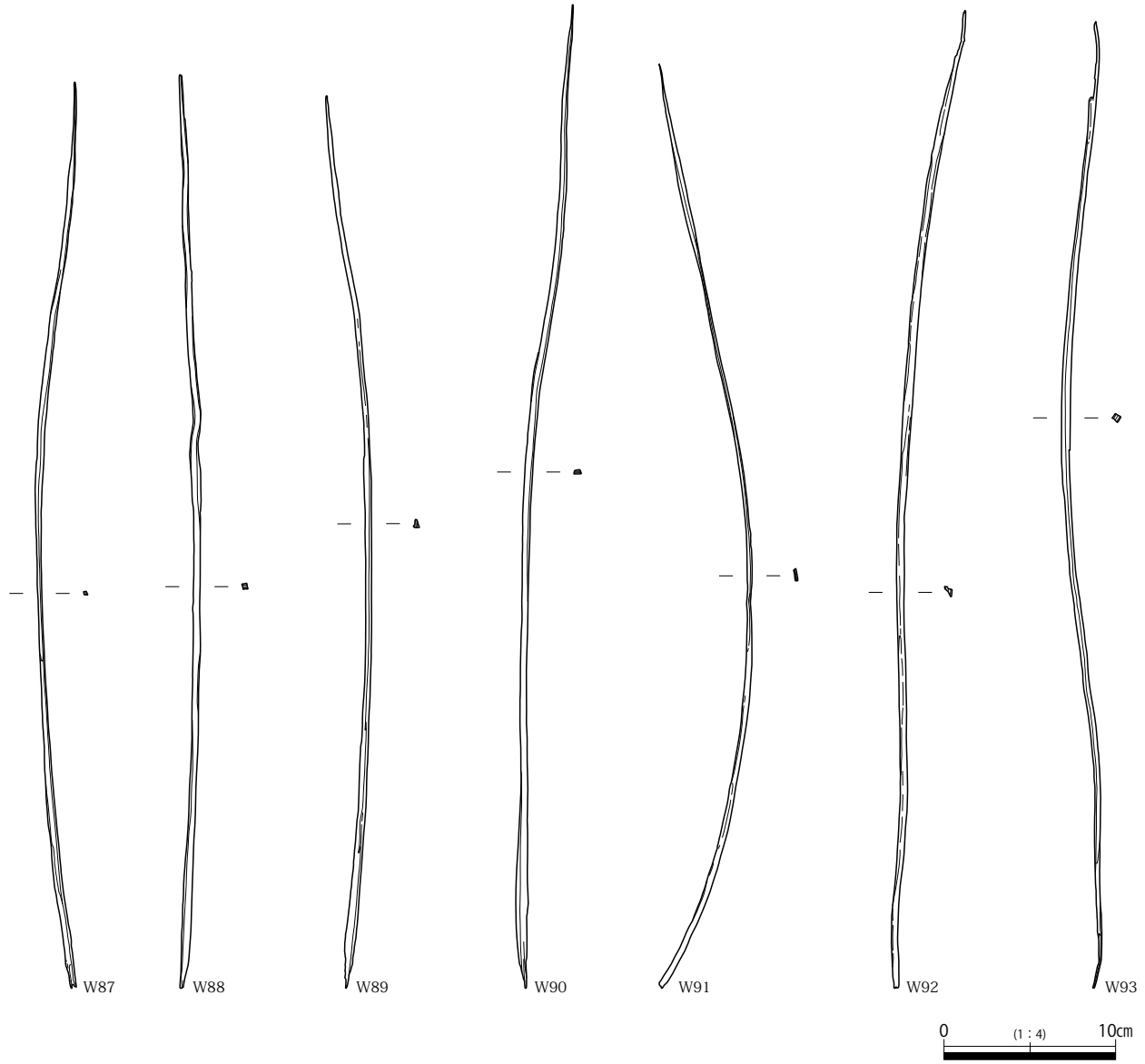


図 149　４溝上層 出土編組製品素材束２（２）

のが多く、素材束１のように厚みに対し、幅にばらつきのある素材を含まない。出土した編組製品のタテ材やヨコ材には２mm 前後に整えられたヒノキの割り裂き材が使用されている。素材束２の各素材は、まだ、分割できるので、最終工程直前の状態にあるものと考える。

素材束３（図 154、PL.104 ～ 106）

４溝の下層からも割り裂き材が束になって出土した。もとは何かで結わえてあったのかもしれない。素材はスギである。約 30 本分の割り裂き材が確認できたが、破片化したものが多い。出土した編組製品の素材に、スギは確認されていないが、近隣では、桂見遺跡から出土した編組製品にスギを用いた事例がある。よって、素材束３も編組製品に使用するための素材の可能性がある。接合関係がつかめないものもあり、正確な本数はわからないが、本報告では、22 本の素材を実測した。

素材の長さは、15 ～ 33 cm、46 ～ 56 cm の２グループに大別できる。ただし、前者のグループに含まれる素材には、破片が含まれている可能性がある。よって、全てが意図的に獲得された長さを表しているとはいえない。一方、後者については、素材束１や２と同様に、編組製品の素材に使用でき

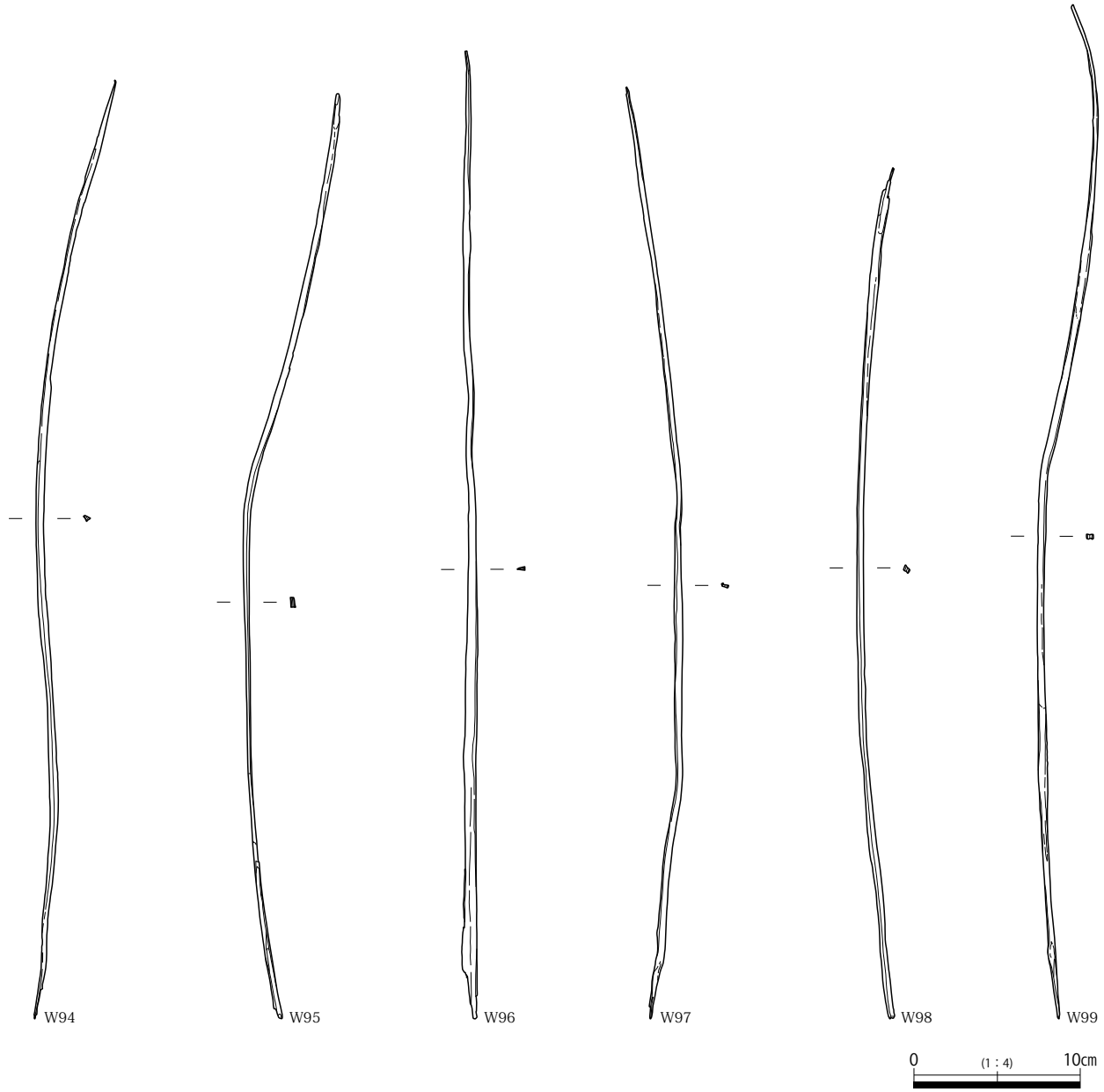


図 150　４溝上層 出土編組製品素材束２（３）

る長さを保っている。幅、厚さは、全体に均質だが、W148 の幅は７～ 14 mm といくらかの幅をもつ。出土した編組製品（カゴ）のタテ材やヨコ材には２mm 前後に整えられたヒノキの割り裂き材が使用されていることを勘案すると、割り裂く作業工程の途中段階のものと思われる。素材束１よりも整ったものが多いので、素材束１より先の工程に進んだものと推測される。また、素材束２よりも幅、太さともに大柄なものが多い。よって、素材束２の前段階の工程にあるものと考える。

②その他の素材

素材束の他にも上層と下層から編組製品の素材とみられる棒状の木材が出土している。

上層出土の素材など（図 152・153、PL.107）

割り裂き作業の過程にある素材と考えられる木材（W111 ～ 123・W125・W126）、もしくは製品に使用されていた素材とみられる木材（W124）がある。

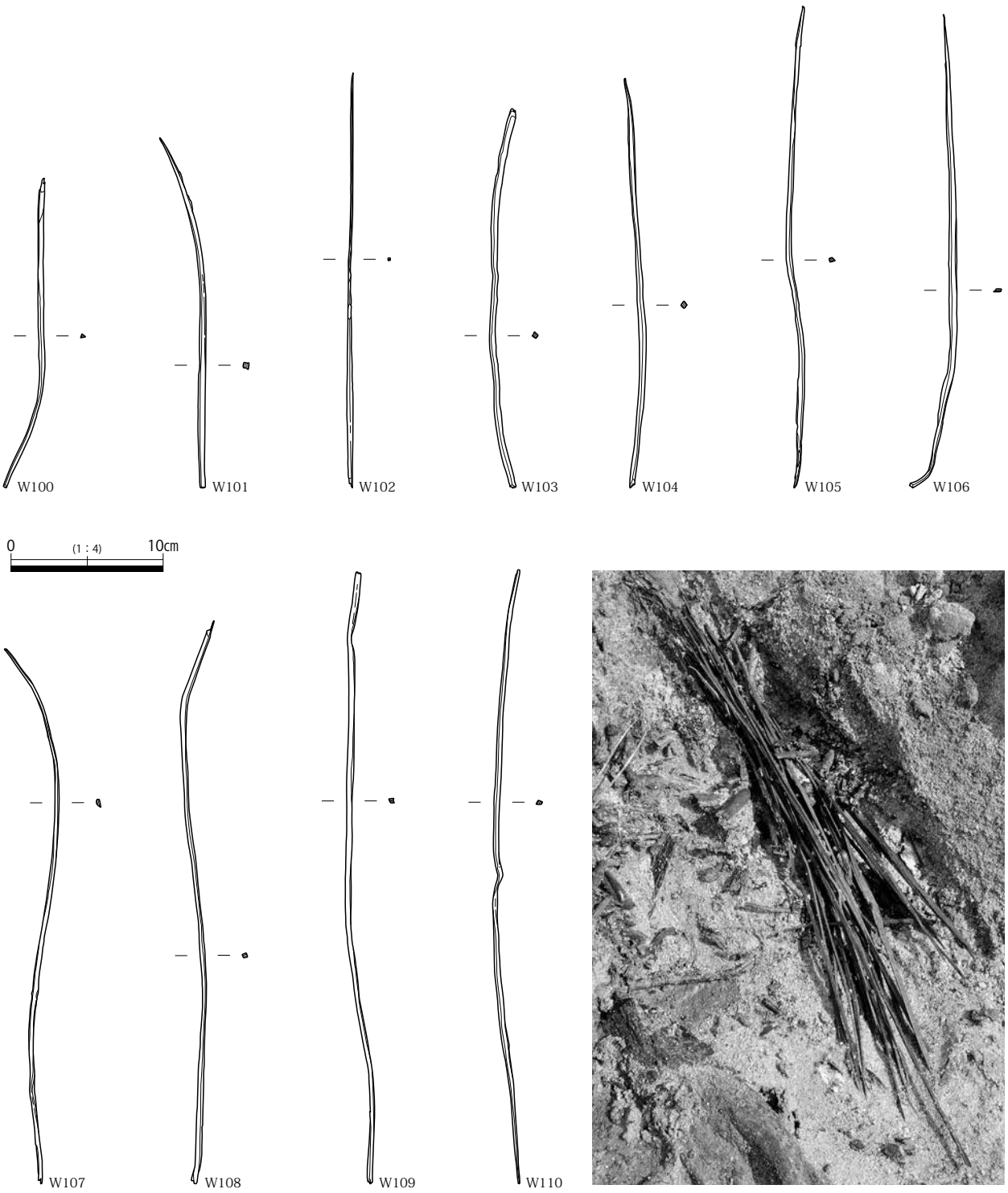


図 151　４溝上層 出土編組製品素材束２（４）

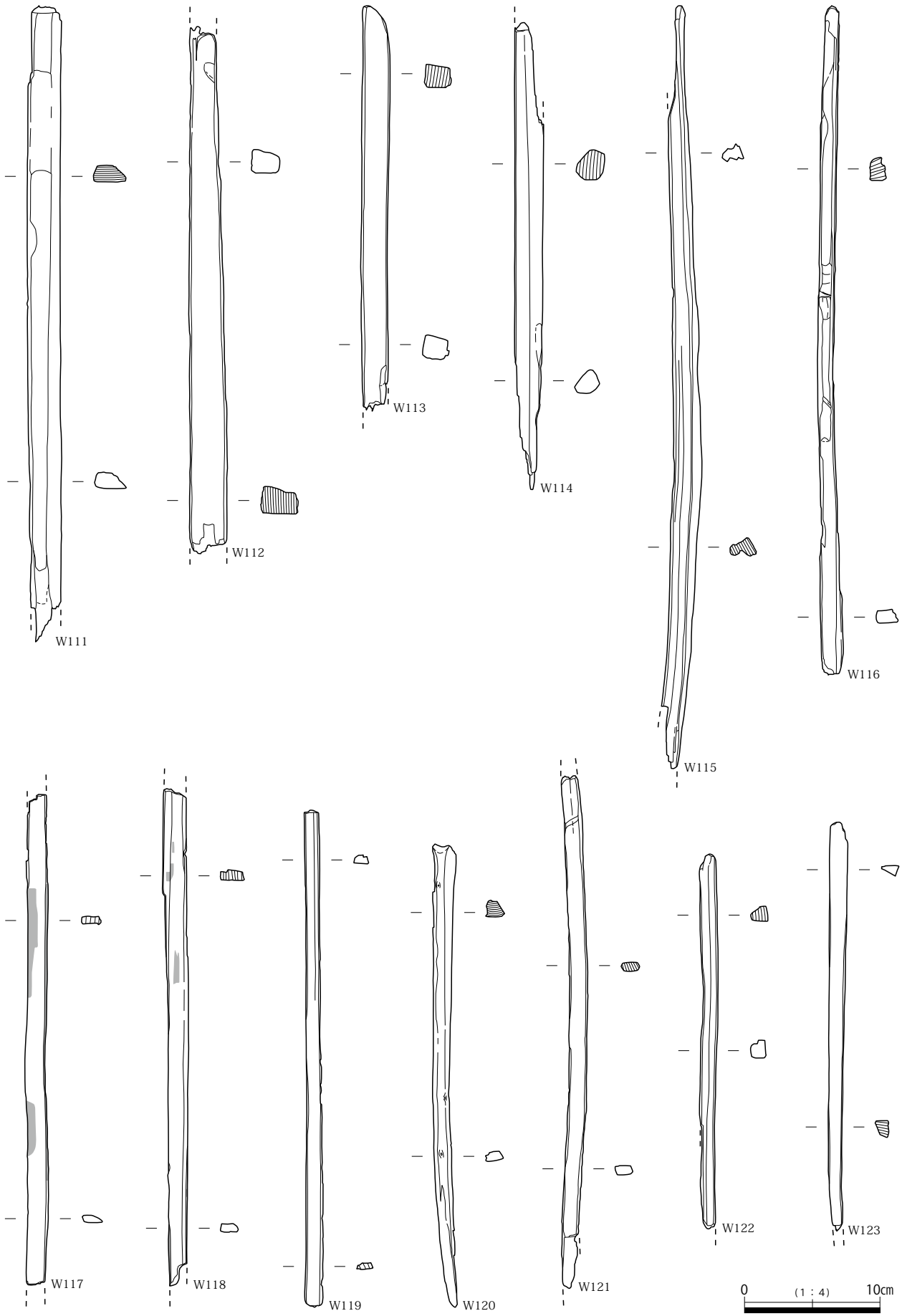


図 152　４溝上層 出土編組製品素材（１）

割り裂き作業の過程にある素材と考えられる木材には、W111 ～ 116 のように、幅広で厚みのあるものが多い。幅ないし厚みが２cm 前後のもの、１cm 前後のものがある。２cm 前後のものは、樹種が全てスギである。素材束１と比較して、全体に大柄である。素材束１よりも前の工程に位置づけられるものを含むと思われるが、別の目的で分割されたものが含まれているかもしれない。一方、１cm 前後のものは、W120 がヒノキ、その他はスギである。素材束１と規格が似る。また、W125 や W126 は、素材束１の中に含まれていた小柄で均質な素材と良く似た規格をしている。いずれも樹種はヒノキである。編組製品の素材を得るために割り裂かれた材である蓋然性が高い。

製品に使用されていた素材とみられる W124 は細く長い。樹種はヒノキで、幅は２mm 強である。編組製品に使用されているヒノキの割り裂き材に良く似ている。

図 153　４溝上層 出土編組製品素材（２）

下層出土の素材など（図 155・156、PL.107）

割り裂き作業の過程にある素材と考えられる木材（W149 ～ 160）、もしくは製品に使用されていた素材とみられる木材（W161 ～ 165）がある。

割り裂き作業の過程にある素材と考えられる木材には、W149 ～ 153 のように、幅広で厚みのあるものが多い。幅ないし厚みが２cm 前後～３cm ほどのものと、１cm 前後のものがある。２cm 前後の木材は、W150・153 がヒノキ、その他は全てスギである。素材束１と比較して、全体に大柄である。素材束１よりも前の工程に位置づけられるものを含むと思われるが、別の目的で分割されたものが含まれているかもしれない。一方、1 cm 前後のものは、W158 がヒノキ、その他はスギである。素材束１と規格が似る。

製品に使用されていた素材とみられる木材は、どれも幅や太さが２mm 前後で、均質である。W161・W164・W165 がスギ、W162・W163 がヒノキである。W165 は一方の端が曲がっている。編組製品の口縁部の縁仕舞をするために曲げられたものだろう。長さが 80 cm 弱あり、出土した編組製品との比較においては、大型の製品に用いられていた可能性がうかがわれる。

（４）16 溝

遺構（図 13・17）

調査区西側溝と、断ち割り４断面で確認した。18 溝の直下を南北方向に流れる流路と想定され、断ち割り４から土器片が出土している（531・536 など）。また、調査区北西隅の撹乱の南肩でも土器片（532）が出土しており、16 溝に含まれるものと考えられる。石器は出土していない。

このように 2011 年度調査では断ち割りでの断面調査に留まったが、2012 年度調査では、調査範囲は部分的ながら、平面的な掘り下げを実施した（第５章参照）。

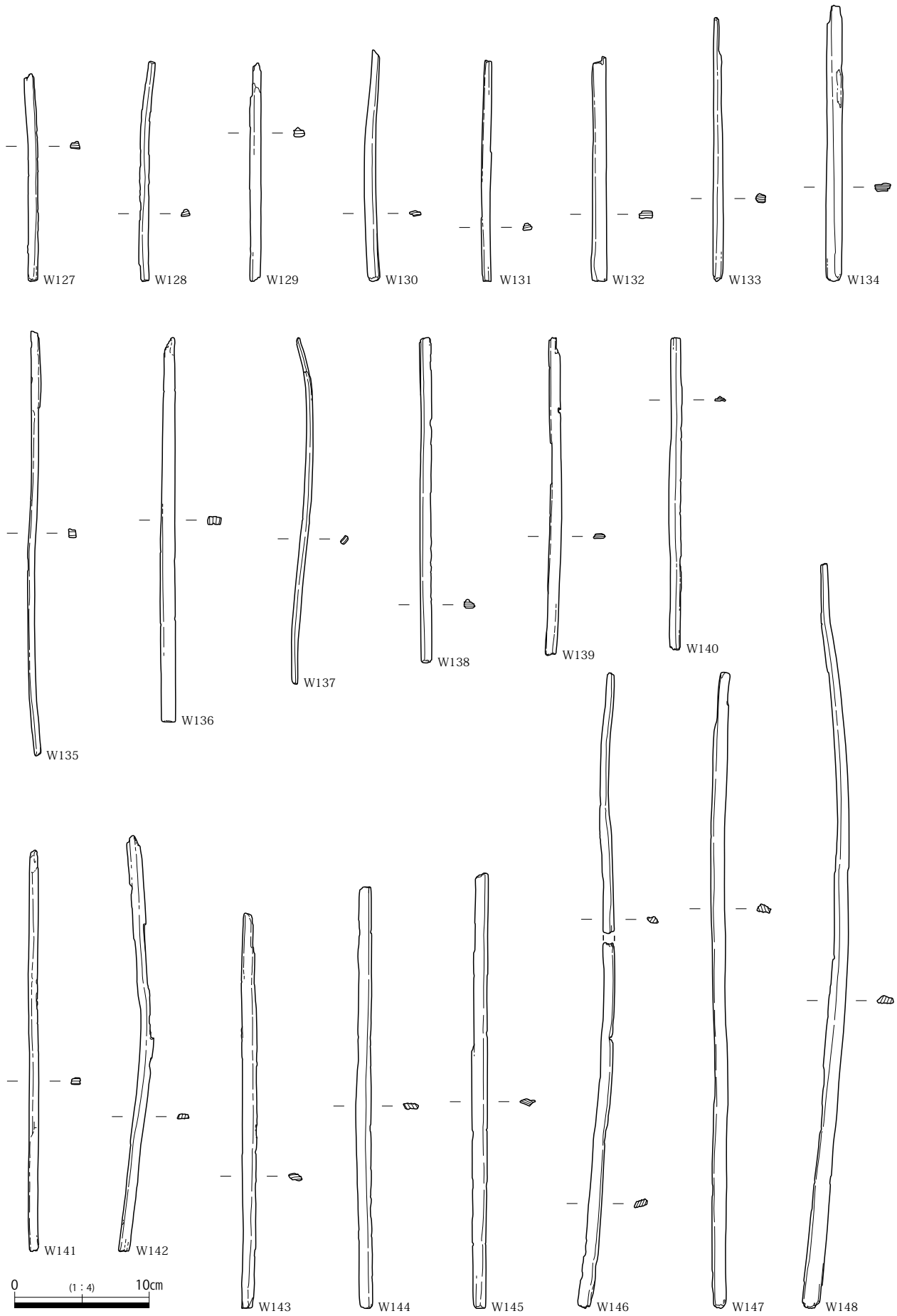


図 154　４溝下層 出土編組製品素材束３

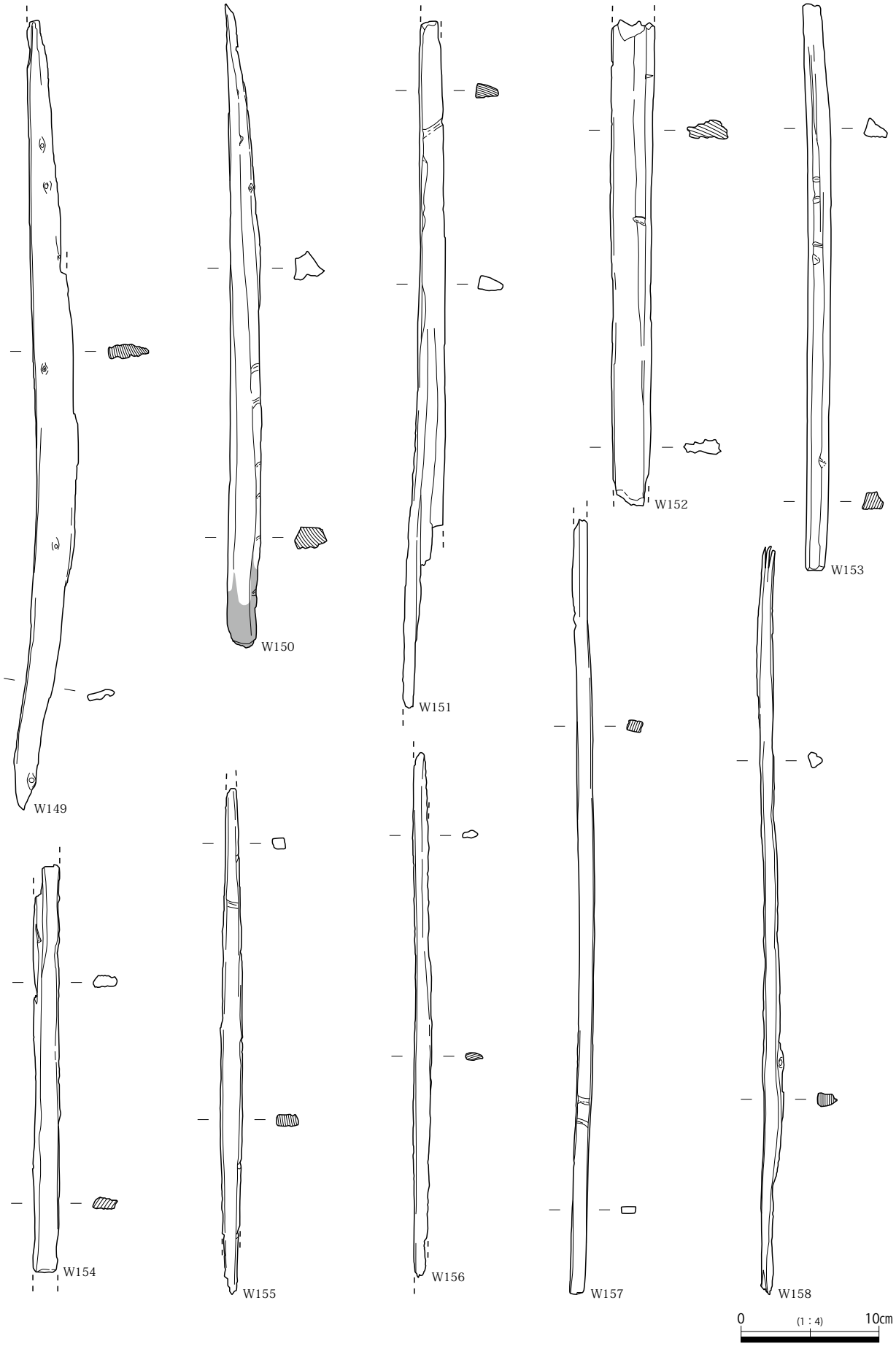


図 155　４溝下層 出土編組製品素材（１）

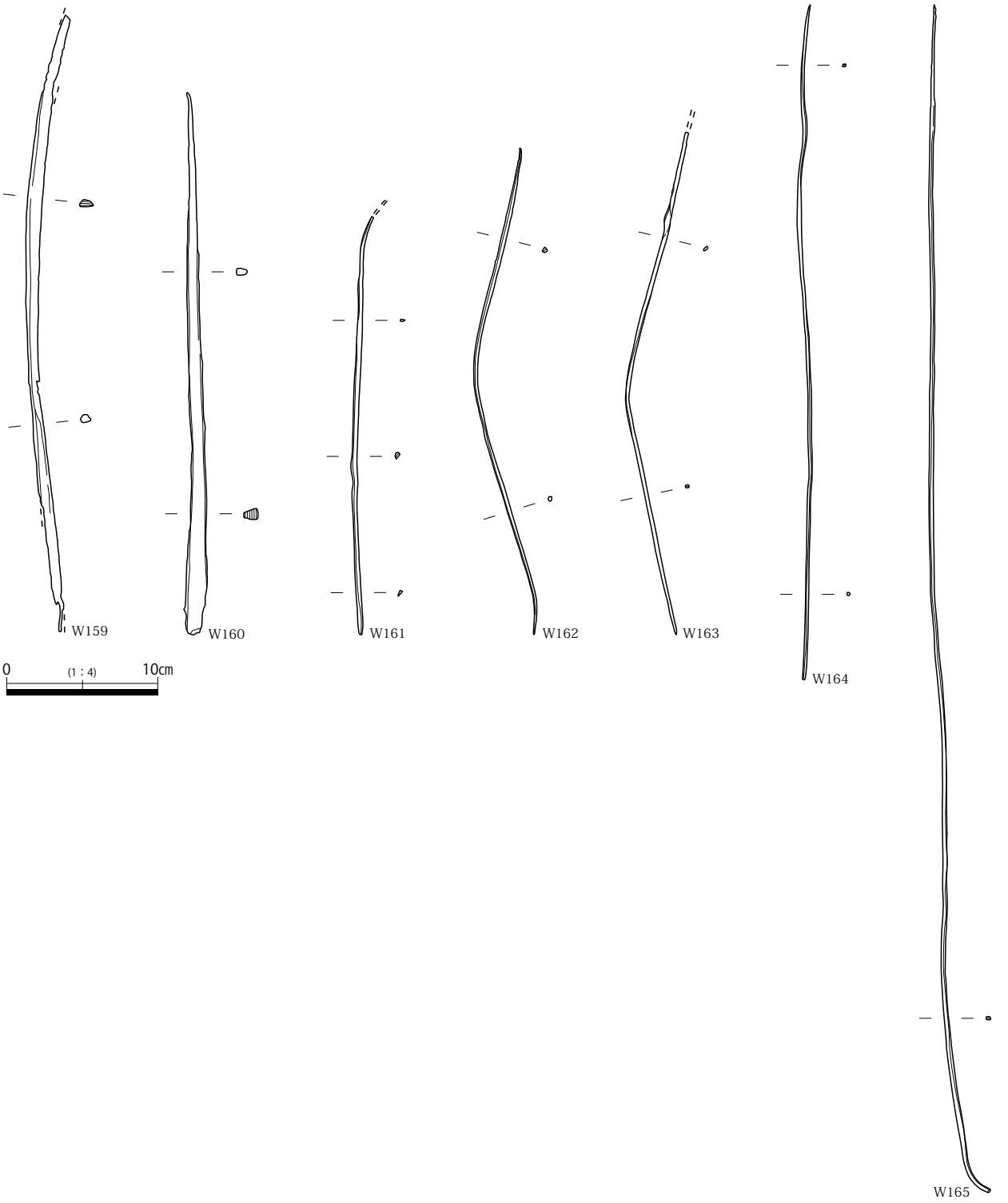


図 156　４溝下層 出土編組製品素材（２）

出土遺物（図 157、PL.108）

16 溝からは、縄文時代晩期後半の突帯文土器、弥生時代前期前葉の弥生土器が出土した。

531 ～ 532 は突帯文土器の深鉢である。器壁の立ち上がりは、531・532 が外傾、533 が直立で、いずれも砲弾形の胴部を呈するものと推定される。531 は口縁部のみやや外反する。突帯はすべて口縁部に接して貼りつけられ、531・532 には刻目が入る。533 は無刻目突帯である。器面調整は、内外面ともに擦痕が残るナデ調整で、532 の内面のみ二枚貝条痕が施される。

534 は浅鉢である。口縁部のみの破片であるが、外湾・内傾した口縁部は古市河原田式にみられる特徴である。内外面ともに器面調整はナデ、ミガキで、口縁端部に沈線状の窪みが巡る。

535 は弥生時代前期前葉の遠賀川式土器の壺である。頸部片であるが、遠賀川式土器の特徴である頸部の段は残っていない。外面は密にミガキを施し、内面は擦痕の残るナデ、貝殻条痕で調整する。536 は弥生土器の壺の底部であると考えられる。胎土が粗く、弥生時代前期の可能性が高いと判断した。風化により調整は不鮮明であるが、外面にハケメと指頭圧痕が確認できる。

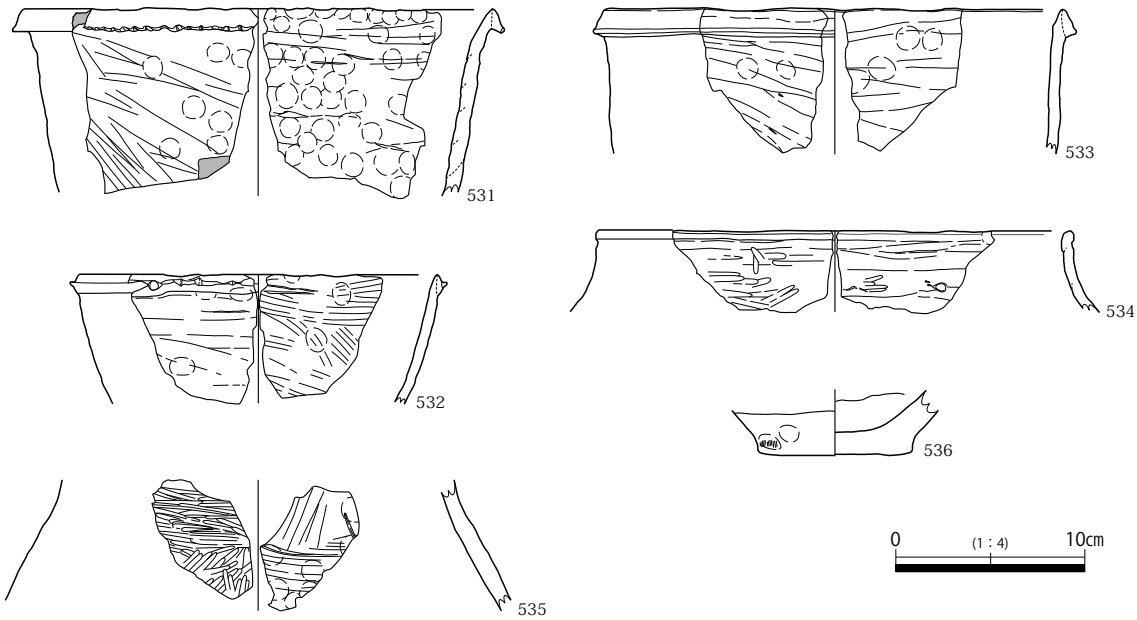


図 157　16 溝 出土土器

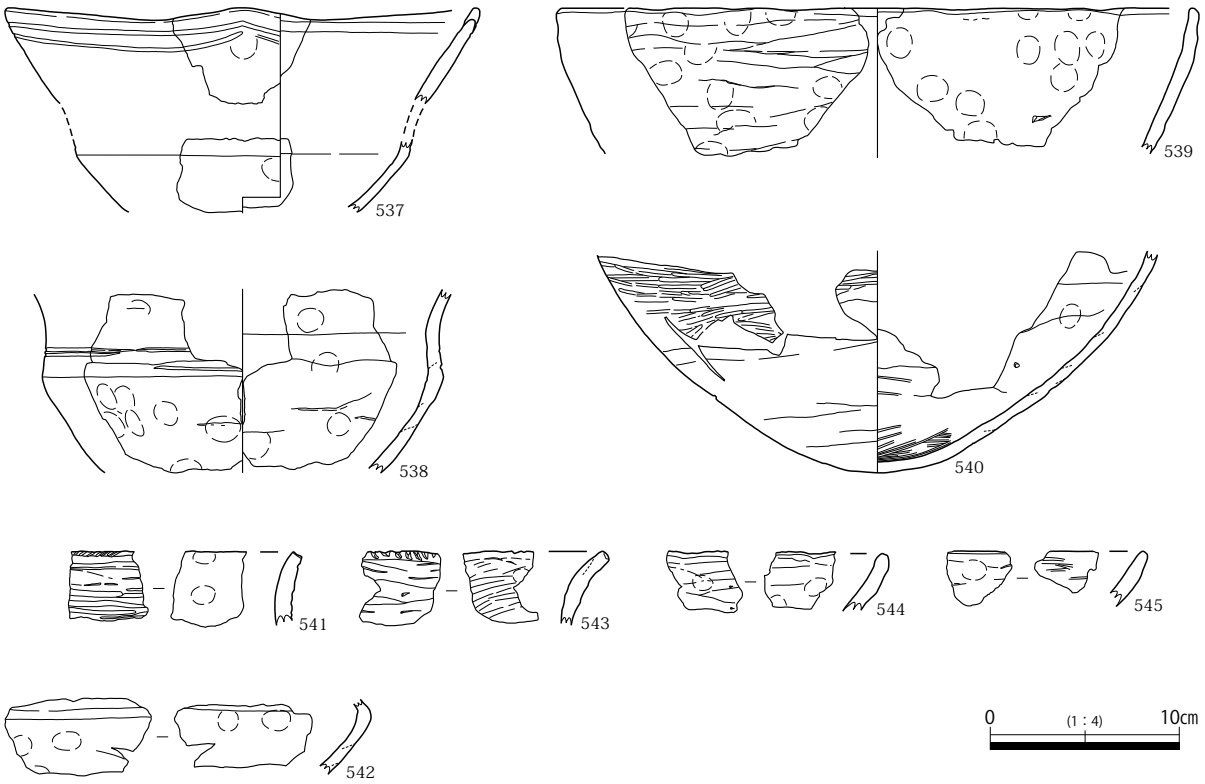


図 158　第３a 層 出土土器

（５）　遺構外の出土遺物（図 158、PL.108・109）

第 3a 層には、量はさほど多くはないが、縄文時代晩期の土器が包含されていた。図化可能なものを抽出、掲載した。

537・538 は胴部に屈曲部をもつ浅鉢で、いずれも滋賀里Ⅱ式に位置づけられる。539・540 は体部が大きく外に開くことから、深い椀形の浅鉢と考えた。541・542 は同一個体の可能性がある。胴部で屈曲し、口縁に刻目を持つ浅鉢で、篠原式新段階に位置づけられよう。543 は外反する口縁部で、端部に刻目が施されている。篠原式新段階の深鉢であろう。544・545 は椀形の浅鉢の口縁部片と思われる。

出土遺物から見て、第 3a 層は縄文時代晩期に形成された土壌と考えられる。

第６節　第 4a 面の調査

１　概要（図 159）

第 4a 層の上面から落ち込む遺構面である。この面では、10･25･38･39 溝、畦状高まりを検出した。ただし、いずれの遺構とも、側溝や断ち割りなどの断面でのみ確認し、平面的な調査は行っていない。

土壌層の層準や、遺構内の出土遺物から、第 4a 面は縄文時代後期頃に形成された遺構面と考えられる。

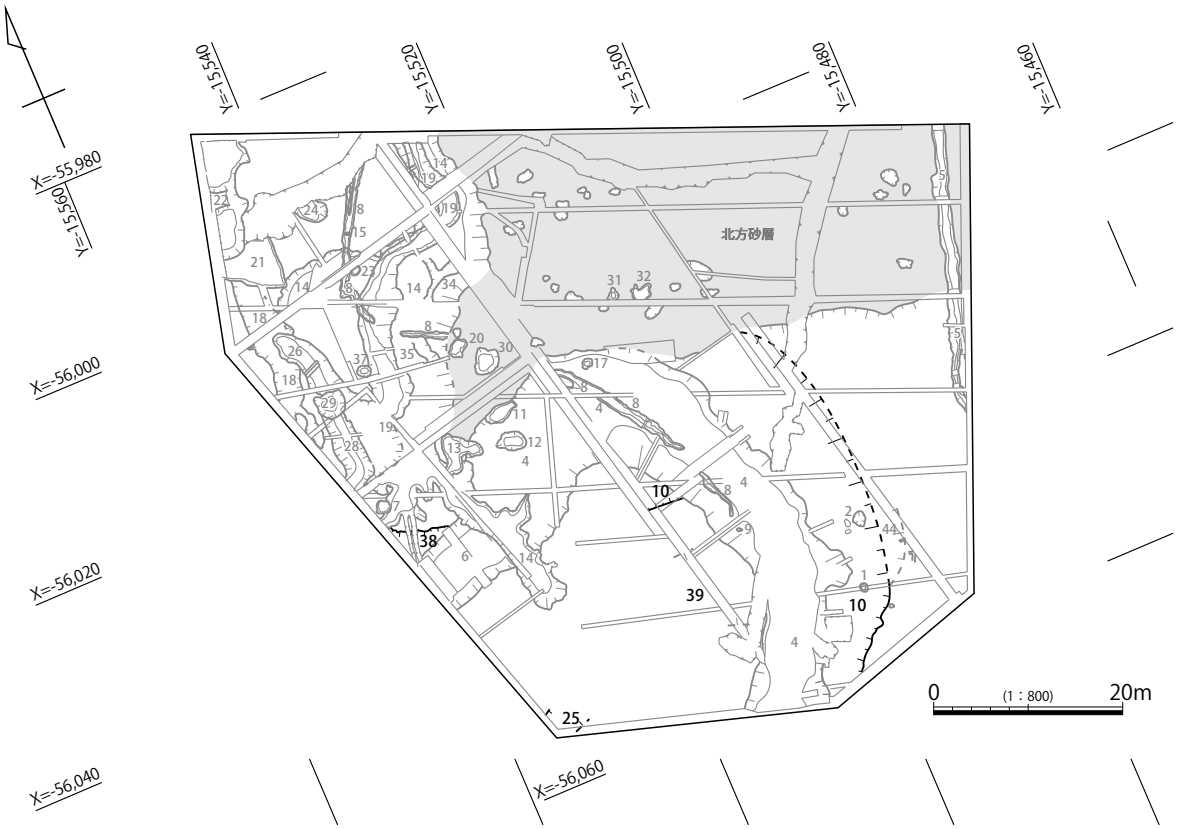


図 159　第４a 面全体図

２　遺構と出土遺物

（１）10・38 溝

遺構（図 12・14・17・19・96）

10 溝は４溝の直下、38 溝は６溝の直下に存在する流路で、４・６溝の前身河川として、同一の遺構になる可能性が高い。両者ともに調査は行っておらず、部分的な平面検出と断面調査のみであるものの、断面確認のための断ち割り掘削などで 10 溝と考えられる堆積層まで掘削した場所がある（図 96）。10 溝からの出土遺物には縄文中期～後期までのものが含まれるが、基盤となっている第 4a 層

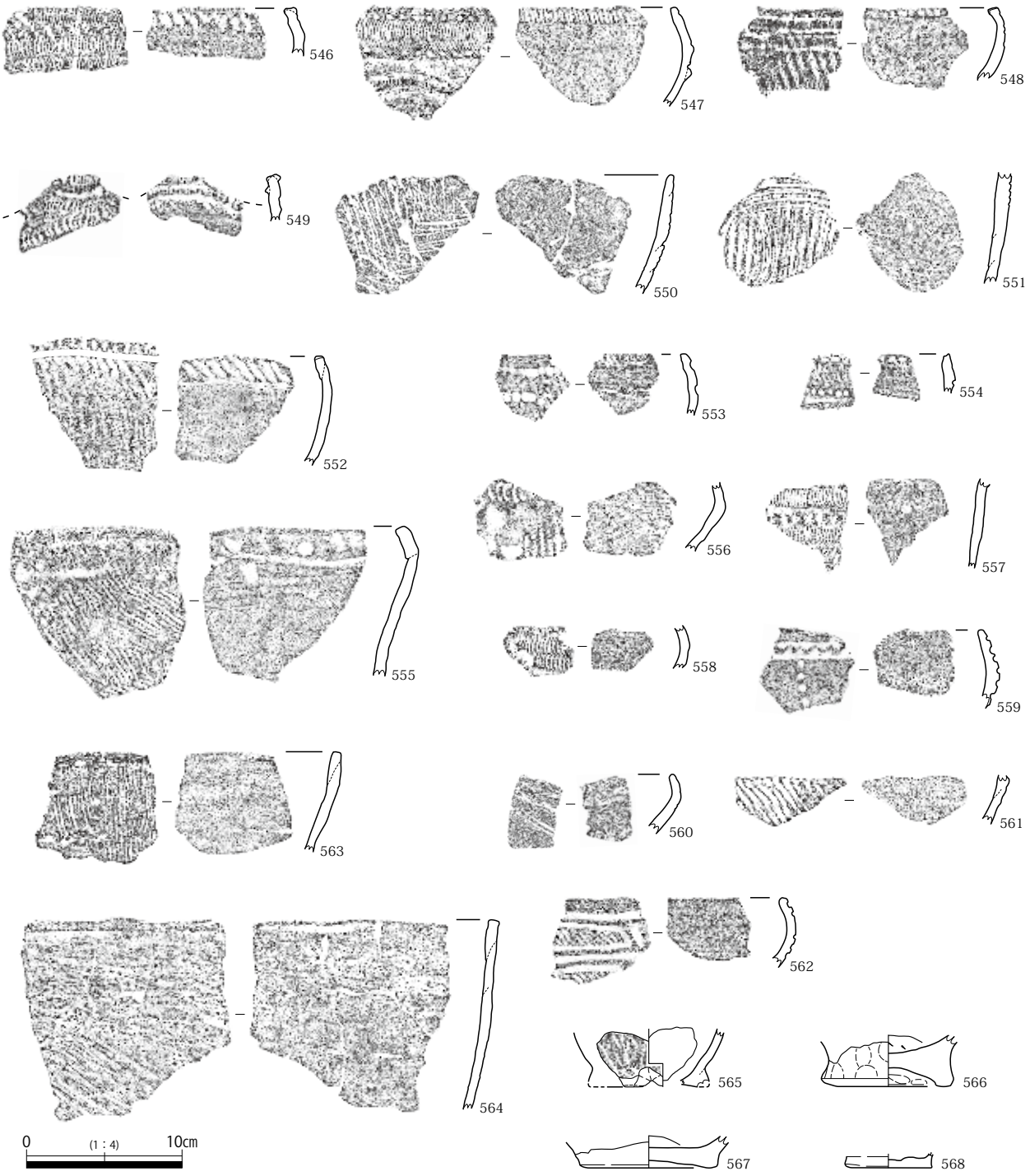


図 160　10 溝 出土土器

からは、断ち割り１掘削時に縄文時代後期の土器が出土しているため、上限を当該期に置くことができよう。

遺物は 10 溝のみで出土した。

出土遺物

＜土器＞（図160、PL.110）

10 溝からは埋没時期を示す縄文時代後期の土器以外に、縄文時代中期の土器が出土した。出土量は後者の方が圧倒的に多く、これらは 10 溝以前に存在していた遺構（44 溝など）や、第 6a・7a 層とこれに関連する遺構に包含されていた土器を巻き上げたものと考えられる。

546 ～ 561 は縄文時代中期の土器である。

546 は鷹島式、547 ～ 549 は船元Ⅰ式に位置づけられる。549 は口縁内面にも貼付突帯が見られる。550 は明確なキャリパー状口縁とならない可能性があるものの、外面に条線が施されることから船元Ⅲ式に相当すると考えた。551 は縄文地に平行沈線文が施される船元Ⅲ式土器である。

552 ～ 558 は船元式の範疇に含まれるが、詳細な位置づけが不明なもので、すべて外面縄文地文である。552 は口縁内面に縄文帯がある。553 ～ 558 には、押引き文、刺突文、爪形文などが施されている。555 は内面に貼付口縁様の肥厚帯が形成されている。

559・560 里木Ⅱ式に位置づけられる土器。559 の口縁には、里木Ⅱ式に典型的な半裁竹管による波状文が施されている。560 は屈曲する口縁部片で、撚糸文と平行沈線が確認できる。

561 は外面に縄文が施された土器片で、上側の欠損部分で明瞭な段がついて内側に屈曲するようである。船元式の範疇か、それに並行する時期の土器であろう。

562 ～ 564 は縄文時代後期の土器である。

562 は磨消縄文が施される浅鉢で、福田ＫⅡ式に相当すると考えられる。563・564 は後期に帰属すると思われる粗製深鉢である。

565 ～ 568 は底部片である。565・566 は縄文時代中期のもので、565 は角底、566 は高台状の凹底である。566 は凹底、567 は平底で、いずれも帰属時期を確定できない。

＜石器＞（図161・162、PL.109）

石器も比較的多く出土している。石材別の器種組成を表７に示した。４・６溝などと同様に、石錘を主体とする器種組成である。このうち、定形器種を図化した。

S52 はサヌカイト製の石鏃である。S53 は硬質頁岩製の横型石匙。S54 は蛇紋岩製の小型の片刃磨

表７　10 溝 出土石器石材別組成表

		石鏃	スクレイパー	磨製石斧	石錘	敲石	磨石	計
火成岩	安山岩	1			14	1	1	17
	流紋岩				6			6
	花崗岩				1		1	2
	閃緑岩				1			1
堆積岩	凝灰岩				3			3
	礫岩					1		1
変成岩	頁岩		1					1
	蛇紋岩			1				1
計		1	1	1	25	2	2	32

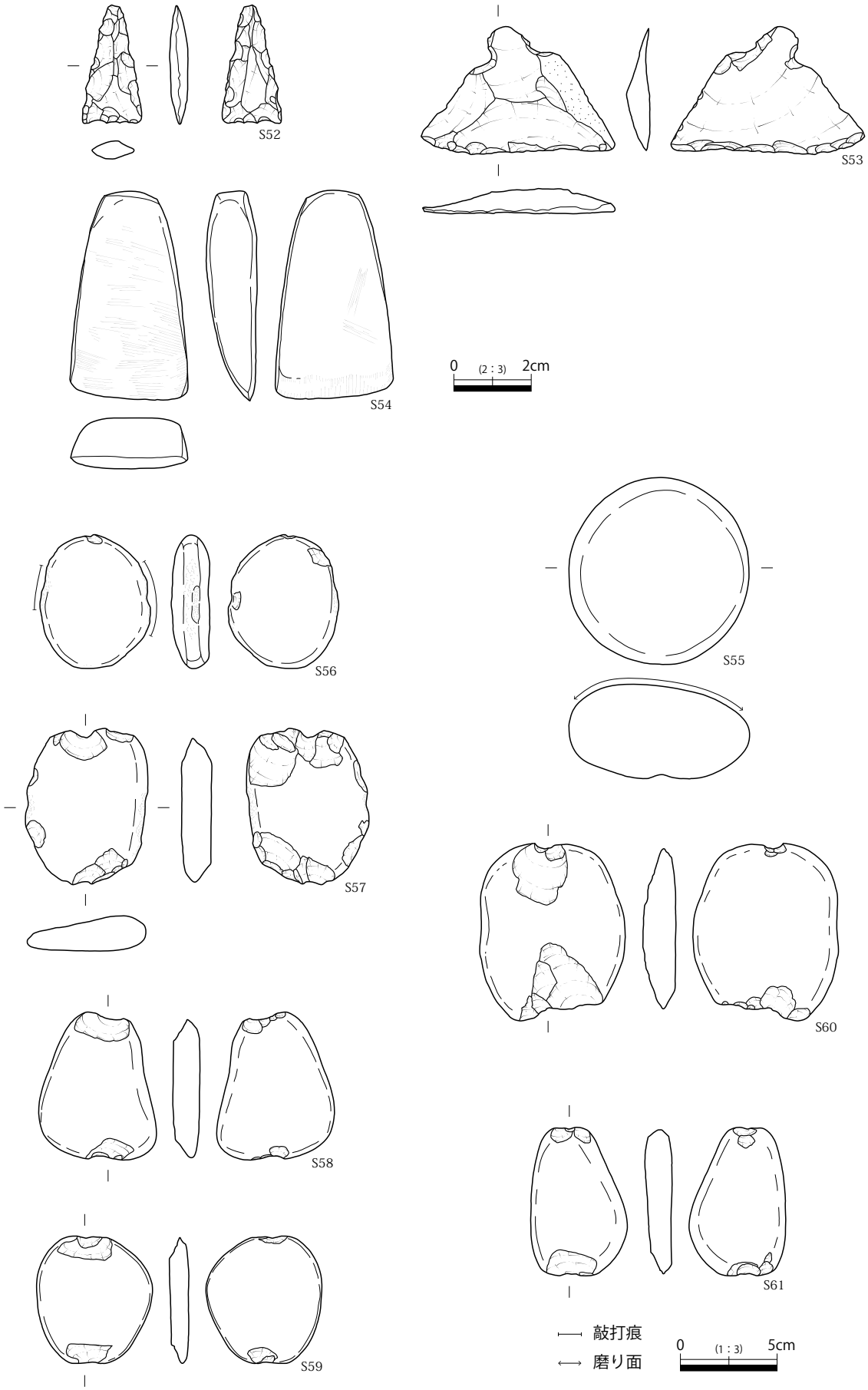


図 161　10 溝 出土石器（１）

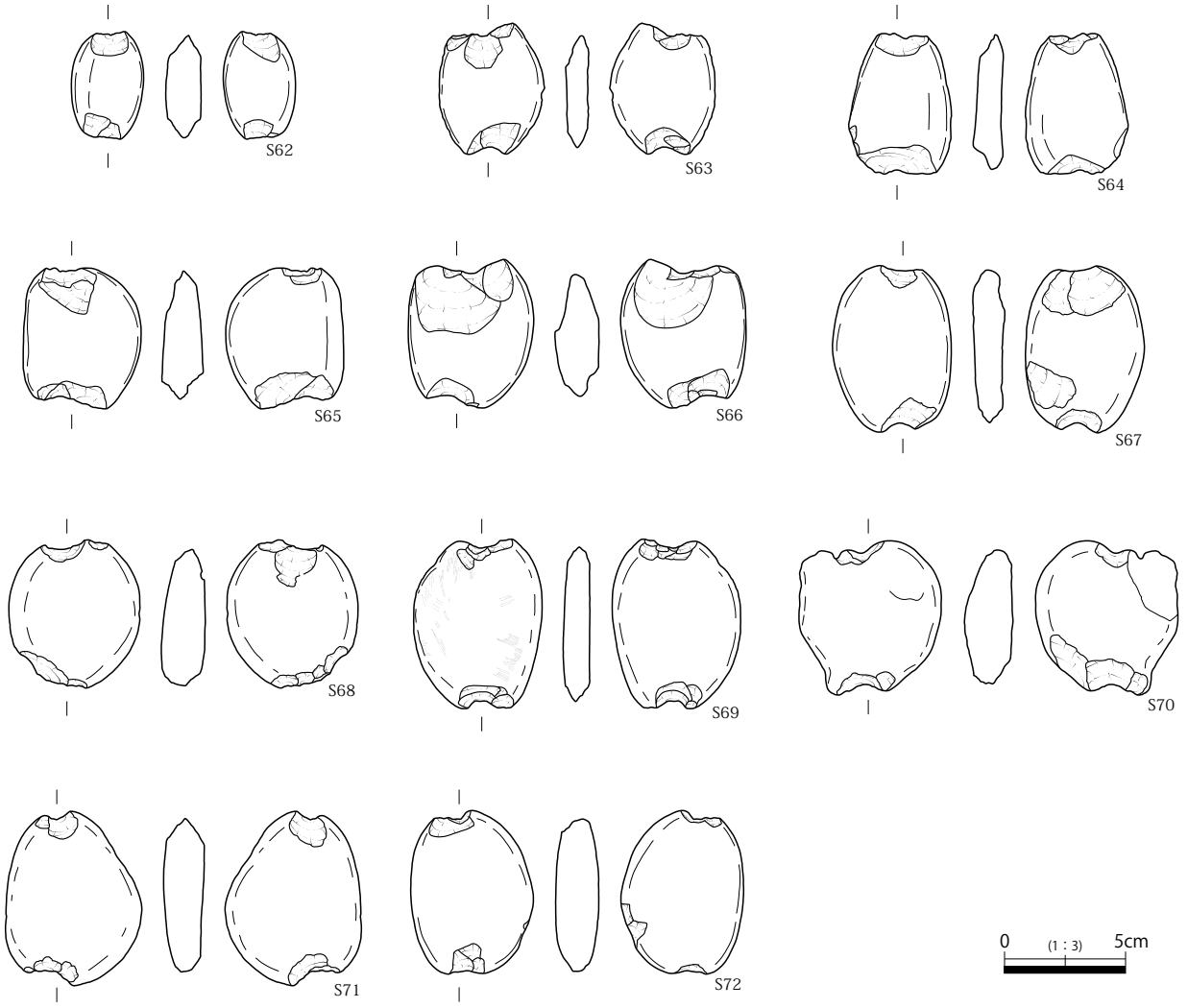


図 162　10 溝 出土石器（２）

製石斧である。後主面の刃部に顕著な線状痕がある。S55 は磨石。S56 ～ S72 は石錘である。S56 は側面に敲打で凹みがつくられている。ほかは打ち欠き石錘である。

（２）25・39 溝（図 12・17・19）

25 溝は、南側溝と西側溝断面で確認された。調査区南西端から北東に向かって流れる流路の可能性があるが、平面検出はしていない。39 溝は断ち割り１断面で確認された。東西方向に流れる流路と考えられ、層序対比からも 25 溝と同一の遺構である可能性があるが、今次調査では埋土上面を被覆する第 3a 層の除去を行っていないため検証できていない。４・６溝の前身河川と考えられる 10･38 溝と異なり、25･39 溝は完全に埋没してしまって、埋土上面には第 3a 層が形成されている。25・39 溝からは図化可能な遺物は出土していない。

（３）畦状遺構（図 14・15）

断ち割り２南側において、第 7a 層が畦状に高まっている状況が検出された。畦状遺構は２ヶ所で確認され、南側のものはＬ字状に検出されている。ただし、いずれも断ち割り２から西方１ｍほどまでの検出であり、それより西方は不明瞭な状況であった。

畦状遺構の周囲は、第 4a 層と考えられるブロック土混じりの粗砂～細砂層（図 14・15 の 27 層）となっており、この土層が第 7a 層を削り残しているような状況である。こうした状況からは、第 4a 層を形成する撹拌行為によって、その下面に形成される擬似畦畔のような遺構として捉えることもできる。ただし、周辺は圃場整備の削平や撹乱を強く受けており、重機の自重による土層の変形なども見受けられたことから、この畦状遺構がそうした痕跡である可能性も考えておく必要があろう。

第７節　第 5a 面以下の調査

１　概要（図 163）

第 5a 面以下では、側溝や断ち割りの断面で流路遺構を確認したほか、遺物を大量に含む土壌層を確認し、トレンチ調査を行った。確認した流路遺構は４条で、第 5a 層か第 6a 層のいずれかの上面に帰属する。遺物を大量に含む包含層は、調査区南端の側溝で確認した第 6a 層と第 7a 層の２層の土壌層である。

遺構、包含層とも、面的に調査を行えておらず、不明点が多い。しかしながら、特に包含層には大量の縄文時代中期の遺物が含まれており、本遺跡の形成過程や性格を考える上で非常に重要である。

２　第 5a 面～第 6a 面の遺構（図 14・15・17・19・20）

41 ～ 44 溝は、第 5a もしくは 6a 層の上面から落ち込む遺構群で、いずれも側溝や断ち割りの断面でのみ確認し、平面的な調査は行っていない。各断面中で、全ての基準層位が確認できるわけではないため、これらの遺構の中にも新旧は存在する可能性が高い。

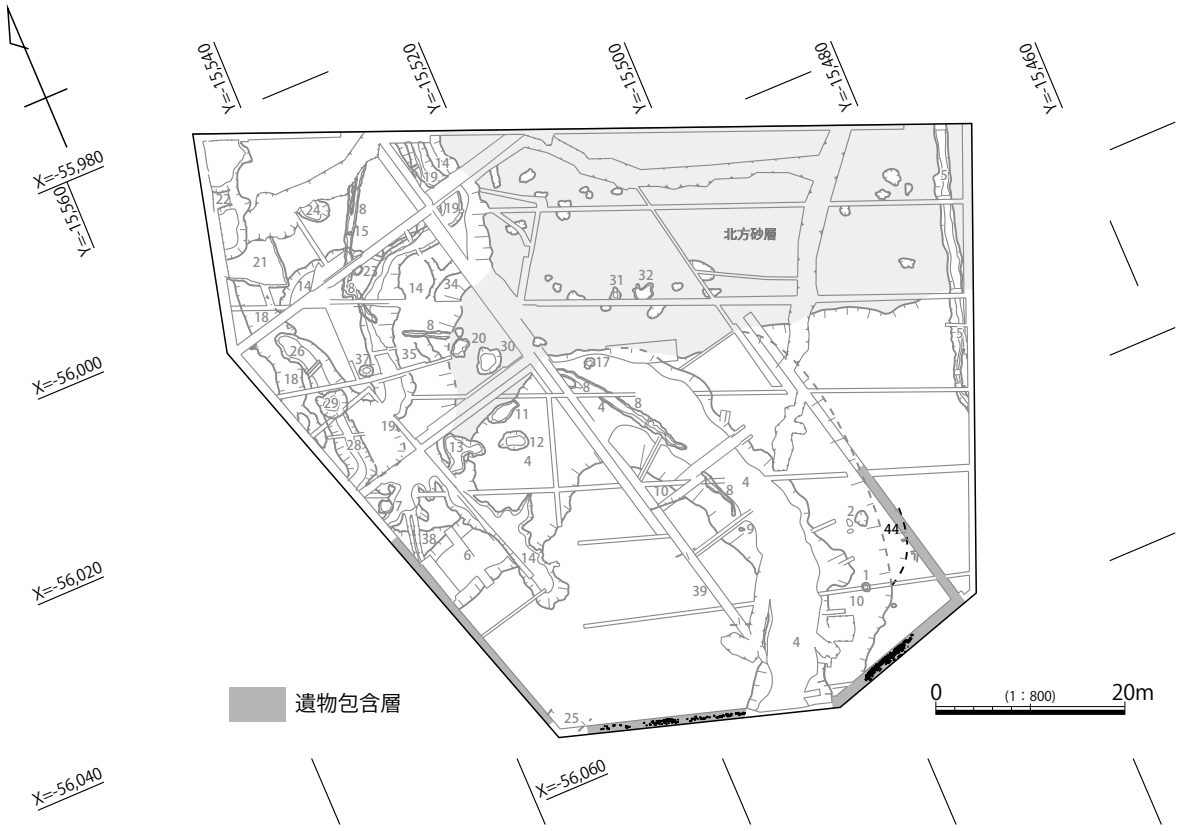


図 163　第５a 面以下の遺構・包含層の位置

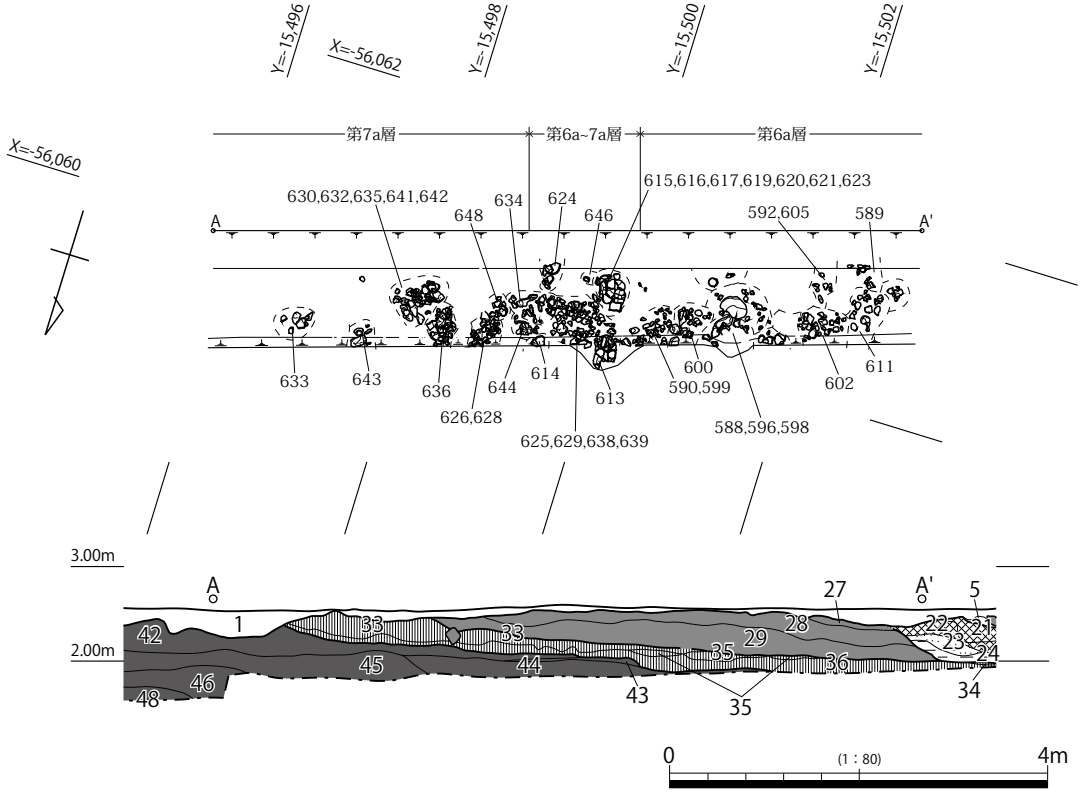
41 溝は 6･38 溝の、42 溝は 25 溝の、44 溝は 4･10 溝のそれぞれ前身河川と考えられる。43 溝については、西側溝において、14・19・28 溝の直下に確認された。小規模であり、埋土が自然堆積層で占められていないことから、人為的な遺構である可能性が考えられるが、未調査であるため不明である。

これらの遺構からは、図化可能な遺物は出土していない。

3　第 6a・第 7a 層の調査成果

（1）概要（図 164・165、PL.45）

明確な遺構としては捉えられていないが、側溝や断ち割り掘削の際、第 6a および 7a 層から大量の



近・現代撹乱	1	a	圃場整備盛土
遺構埋土？	5	a	2.5Y5/1 黄灰色 粘土～粗砂（多量の炭化物・土器片・礫を含む）
第 4a 層？	21	a	5Y5/1 ～ 6/1 灰色 粘土～粗砂（直径 1 ㎝までの礫を含む）
第 4a 層？	22	a	5Y7/2 灰白色 粘土～粗砂
44 溝？	23	b	5Y8/4 淡黄色 細砂（ラミナあり）
	24	a'	5Y7/2 灰白色 粘土（わずかに粗砂・炭化物を含む）（か b）
第 5a 層？	27	a	5Y6/1 灰色 シルト～粗砂（礫を含む。締まりが良い）
第 5a 層？	28	a	5Y6/2 灰オリーブ色 粗砂～シルト（礫を含む。締まりが良い）
第 5a 層？	29	a	5Y7/2 灰白色 粗砂～シルト（礫を含む。締まりが良い）
第 6a 層	33	a	10Y5/1 灰色 シルト～粗砂（礫を含む。締まりが良い）
第 6a 層	34	a	10BG5/1 青灰色 粗砂混じり粘土（遺物を多く含む）
第 6a 層	35	a'	10Y7/1 灰白色 粗砂混じり粘土（炭化物を含む）（か b）
第 6a 層	36	a	5Y3/1 オリーブ黒色 シルト混じり粗砂（縄文時代中期の土器・石器を多く含む）
第 7a 層	42	a	5Y7/2 灰白色 粗砂～粘土（直径 1 ㎝までの礫を含む。締まりが良い）
第 7a 層	43	a'	10GY7/1 明緑灰色 粘土（炭化物を含む）（か b）
第 7a 層	44	a	10G6/1 緑灰色 粗砂混じり粘土（炭化物・土器を多く含む）
第 7a 層	45	a	5Y6/2 灰オリーブ色～ 7/2 灰白色 粗砂～粘土（直径 1 ㎝までの礫含む。締まりが良い）
第 7a 層	46	a	10Y5/1 灰色 極粗砂～粘土
第 7a 層	48	a	5BG4/1 暗青灰色 粗砂～粘土（炭化物を含む。上方に向かって漸移的に締まる）

図 164　調査区南側溝　第６a ～７a 層遺物出土状況図・断面図

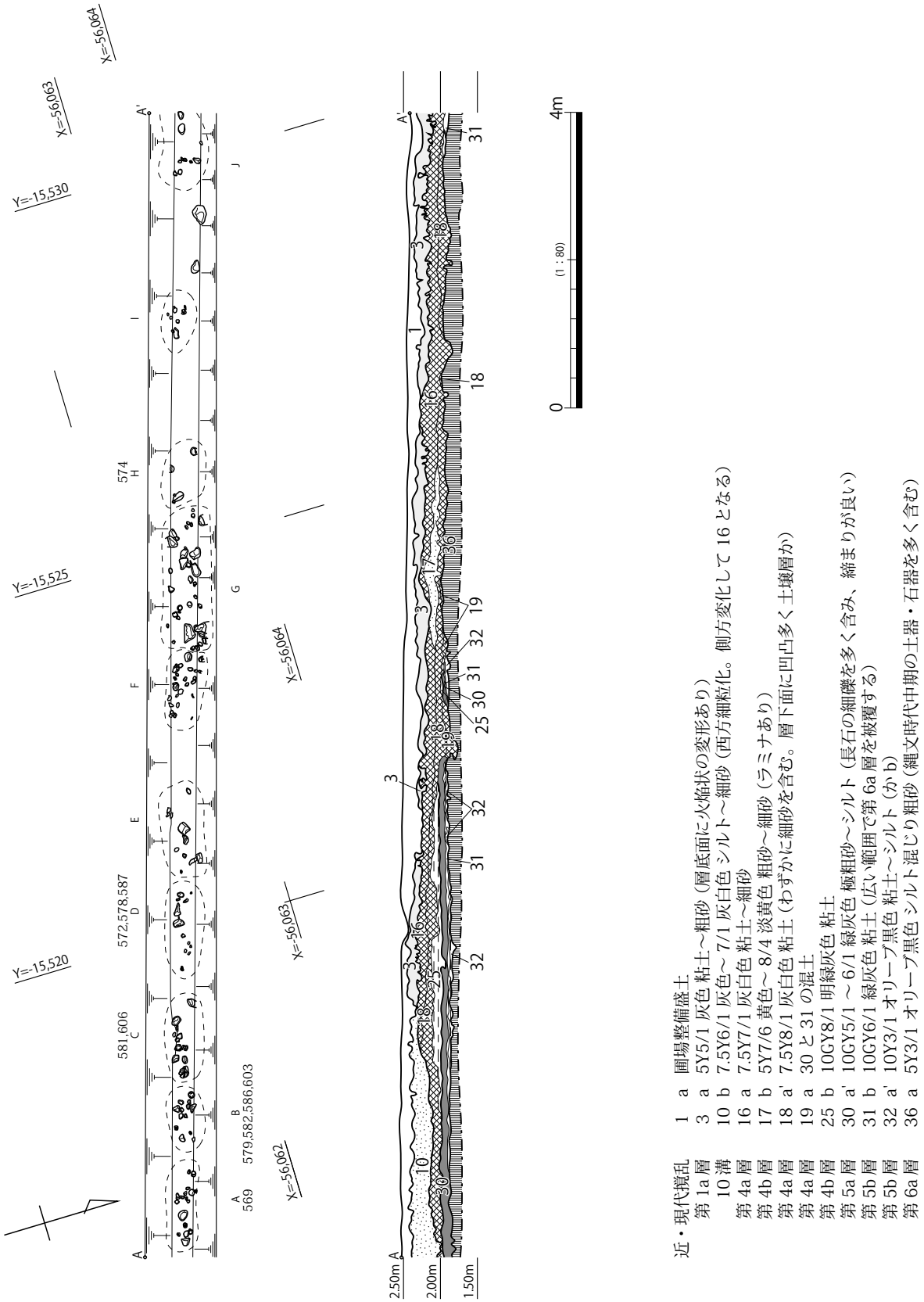


図 165　調査区南側溝 第６a 層 遺物出土状況図・断面図

遺物の出土を確認した。遺物は縄文土器と礫石器を主体とした石器からなる。土器の残りは比較的よく、残存部位の多いものも含まれる。第 6a 層は調査区南半部で広くみられ、側溝や断ち割りなど掘削が及んだ場所では遺物が出土する。遺物の出土量に合わせ、その内容からも、この遺物包含層の性格と形成過程については十分な検討を要すると思われる。

縄文土器は船元Ⅰ式から里木Ⅱ式に相当、または併行する時期のものである。また、打ち欠き石錐を主体とする礫石器も多く出土した。当該期の湖山池は日本海の内湾となっていたと考えられ、積極的な漁労活動を行っていた縄文人の姿がうかがえる。

また、断ち割り１の掘削中、第 6a 層が畦状に高まっている状況が確認された。検出位置は 10 溝と 39 溝の間に当たる。幅 15 cm ほどの高まりが 1.5 mほどわずかに湾曲しながら延び、断ち割り１西側に続くようだが、断ち割り１の底以外で平面的な調査を行っていない。高さは２～３cm 程度でそれほどしっかりした遺構ではないが、第 5b 層に被覆されて明瞭に検出される。検出範囲が限定的であるため、性格は不明であるが、人為的な遺構の可能性もあり、注意が必要である。

（２）第 6a・7a 層出土遺物

概要

第 6a 層から第 7a 層にかけて、大量の土器が出土した。出土した土器は、すべて縄文時代中期のものである。第 6a 層には中期全般にわたる型式の土器が含まれるのに対し、第 7a 層には中期前半に帰属する土器のみが含まれている。特徴の分かる土器は、そのほとんどを図化、掲載している。

また、石器も比較的多数出土しており、完形の定形器種はすべて図化、掲載した。

第 6a 層出土遺物

＜土器＞（図166・167、PL.111～113）

569 ～ 612 が第 6a 層から出土した土器である。船元式の範疇に含まれる土器と、これと並行するとされる波子式（山本清 1961「西山陰の縄文文化」『山陰文化研究紀要』第１号）を主体とし、里木Ⅱ式をわずかに含んでいる。

569 ～ 571 は船元Ⅰ式の口縁部片である。569 は間壁分類（間壁 1971）の船元Ⅰ式Ａ類にあたる。570 はⅠ字状ヘラ描き文が施された、泉編年（泉 2008）船元Ⅰ式２期に位置づけられるもの。

572 ～ 575 は、縄文地文に半裁竹管による平行沈線が施された船元Ⅲ式土器である。572 は波状口縁の波頂部で、垂下する隆線が見られる。573 は連弧文が、574 は三角文が、それぞれ平行沈線で施されている。575 は沈線に加えて、円形刺突が施されている。

576 は間壁分類では船元Ⅳ式とされる土器であるが、泉編年に基づいて里木Ⅱ式に含まれるものと考えておく。

577 ～ 581 は細別型式が不明な船元式土器である。577 は船元Ⅰ式に帰属する可能性がある。579 の口縁外面には、貼付口縁状の肥厚帯が見られる。

582 ～ 587 は、船元式の範疇に含まれるか、船元式に並行すると考えた縄文地文の土器である。582 ～ 584 はやや内湾する口縁部片である。583・584 は、口縁に平行して押引文が施されている。両者とも色調が橙色で、焼成も良好な点に、後述する波子式との共通性が見られる。585・587 はわずかながらも頸部に屈曲が見られることから、船元式の範疇に含められるだろう。586 は隆帯をもち、

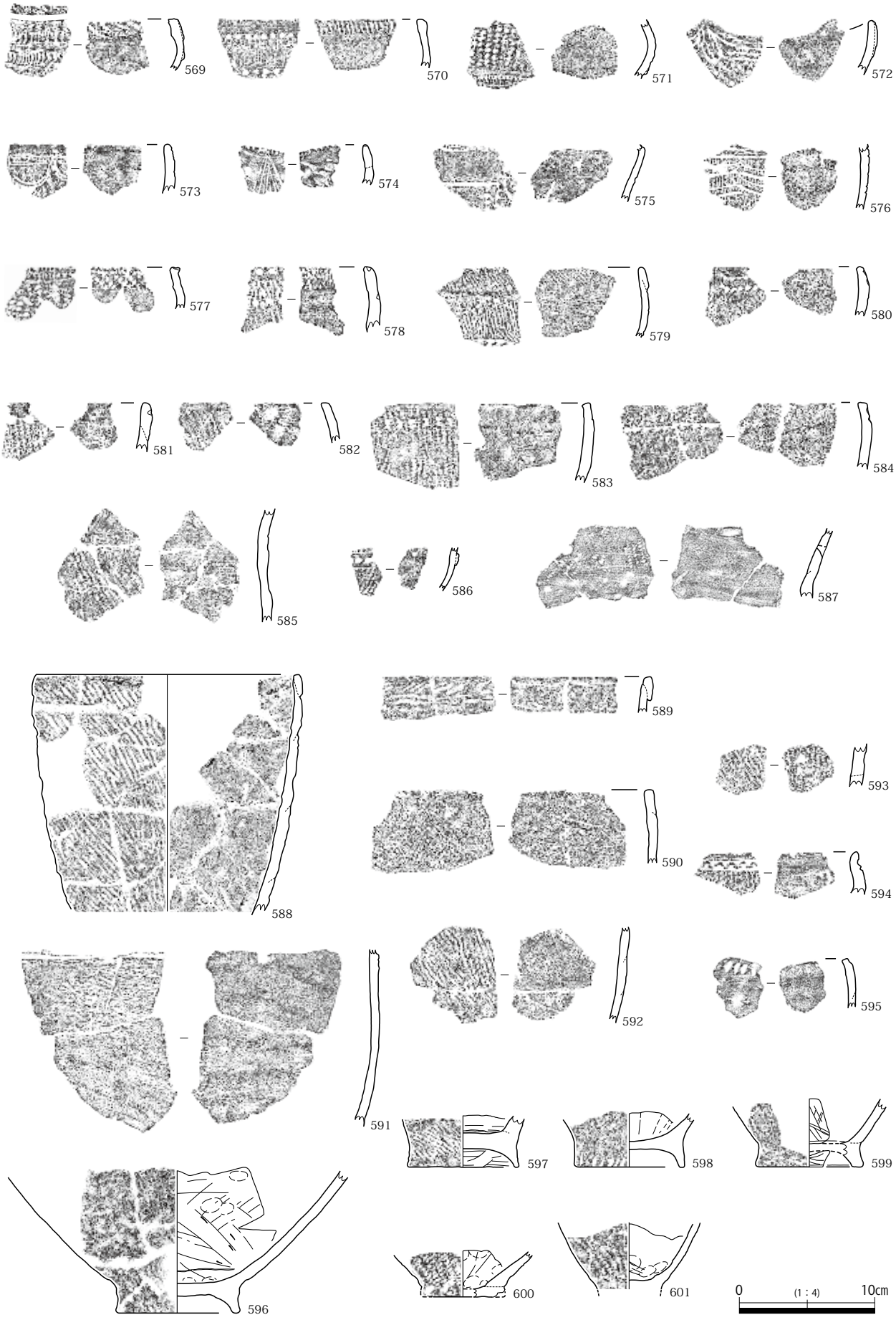


図 166　第６a 層 出土土器（１）

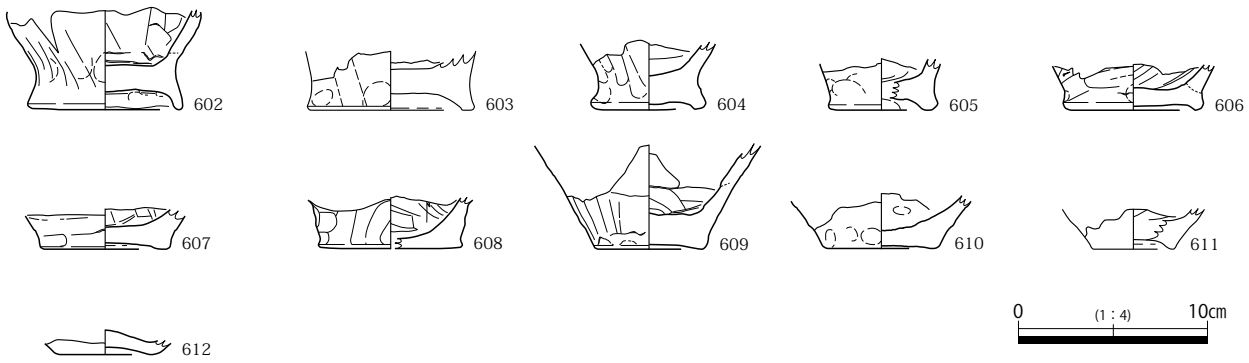


図 167　第６a 層 出土土器（２）

隆帯上に刺突が施されている。船元式の範疇であろうか。

588・589 は貼付口縁をもつ縄文地土器で、波子式に位置づけられる。いずれも外面に無節縄文が施されている。588 は同一個体片がまとまって出土しており、口縁が直立する小型のバケツ形の深鉢に復元できた。なお、588・589 をはじめとする波子式土器は、土器表面が橙色で、おおむね褐色を呈する船元式との色調の違いが大きく、焼成も船元式より良好な印象を受ける。

590 ～ 593 は縄文を地文とする土器で、型式を特定できないもの。590 はほぼ直立する口縁部の破片で、口縁端部の接合痕が明瞭で外傾接合となっているほか、色調も橙色を呈しており、製作技術的に波子式との親縁性が考えられるかもしれない。591 は上側の折損部分に横走する沈線が見られる。撚りのゆるい粗雑な LR 縄文が施されている。593 は内面にも縄文が施されている。

594 は、撚糸文を地文とし、平行沈線による波状文が施された里木Ⅱ式の口縁部片である。

595 は外面に条痕の痕跡が残り、口縁に刻目が見られる土器である。縄文時代前期に帰属する可能性もある。

596 ～ 612 は底部である。このうち、596 ～ 601 は外面に縄文が確認できる。高台状凹底、凹底、平底の各種形態が見られる。

＜石器＞（図168・169、PL.113）

石材別の器種組成を表８に示した。４・６溝などと同様に、石錘を主体とする器種組成である。

S73 はサヌカイト製のスクレイパーである。S74・S75 は黒曜石製の石器である。S74 は背面に上下両方向からの剥離痕が見られること、下縁に潰れがあること、主剥離面がウトラパッセとなって底面を取り込んでいることから、両極打撃に伴う剥離物と認定した。S75 は石核としたが、剥片石器素材

表８　第６a 層 出土石器石材別組成表

		打製石器			礫石器		計
		スクレイパー	剥片	打製石斧	石錘	磨石	
火成岩	安山岩	1	3	1	7	1	13
	流紋岩				5		5
	花崗岩				2	1	3
	黒曜石		1				1
堆積岩	凝灰岩				1		1
	砂岩				5		5
変成岩	他				3		3
計		1	4	1	23	2	31

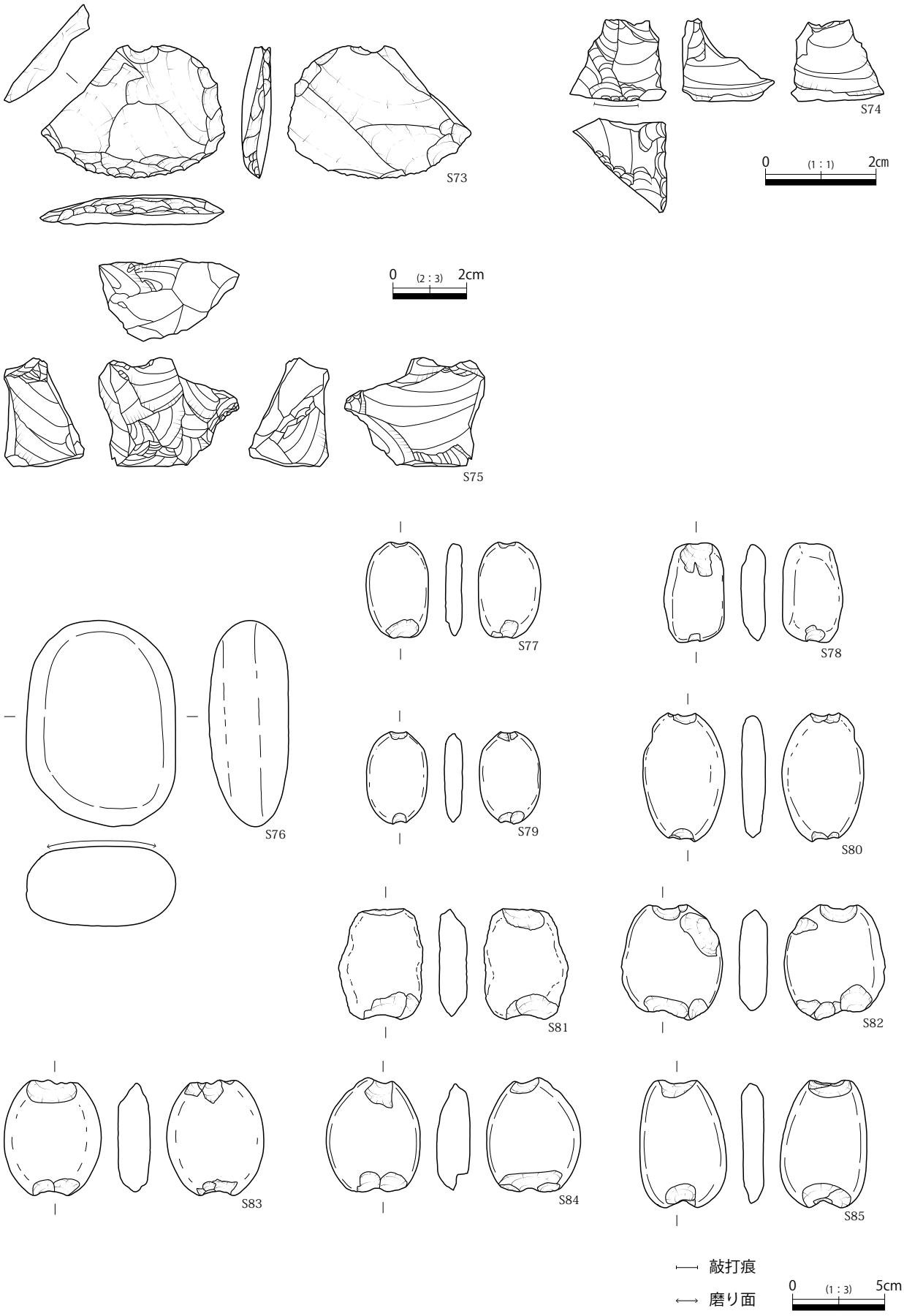


図 168　第６a 層 出土石器（１）

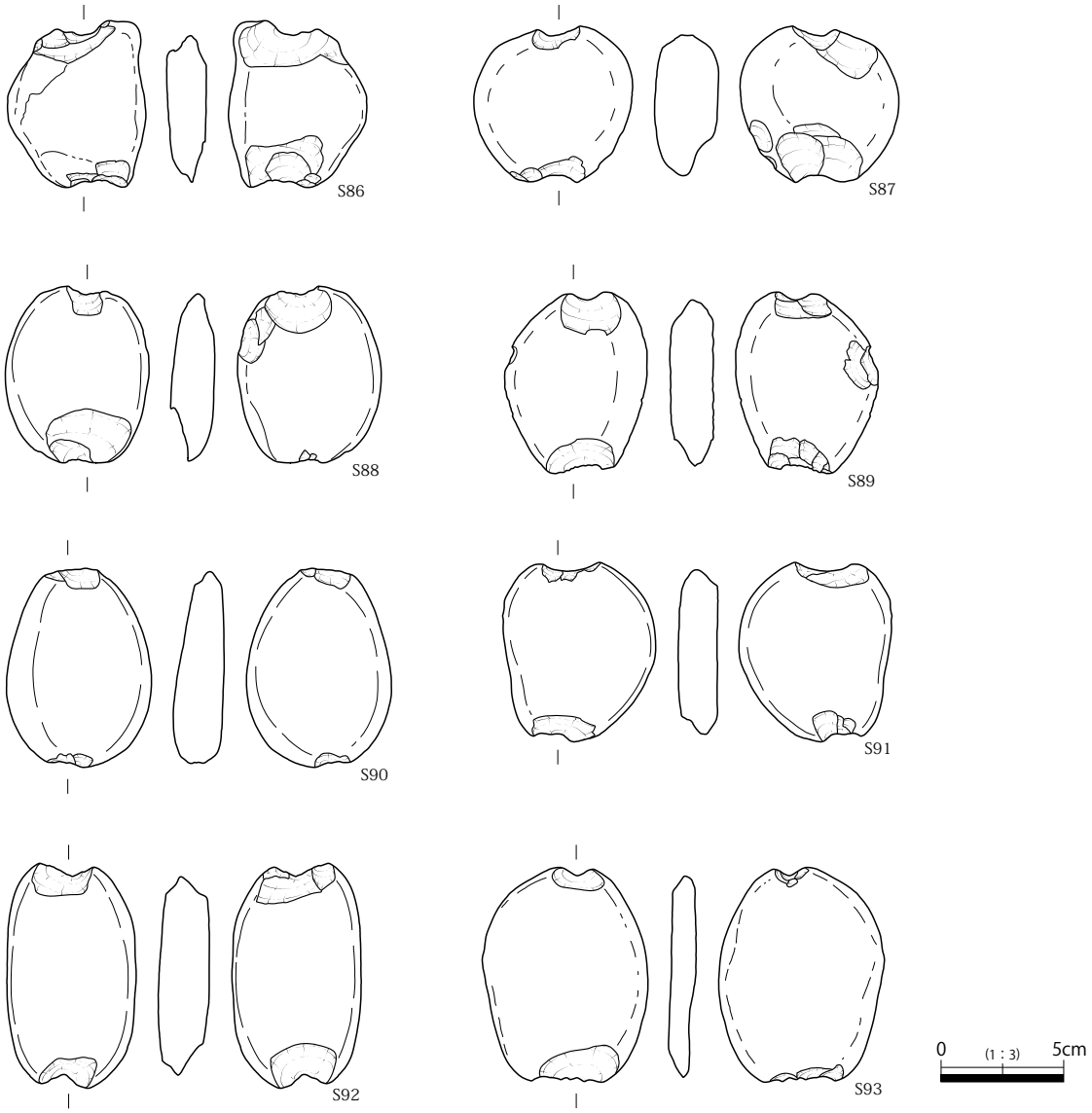


図 169　第 6a 層 出土石器（2）

が作出可能な大きさの剥離面は見られない。

S76 は安山岩の円礫を素材とした磨石である。S77 ～ S93 は打ち欠き石錘である。

第 6a ～ 7a 層出土土器（図 170・171、PL.114・115）

613 ～ 623 は、第 6a 層から第 7a 層にかけて出土した土器で、いずれに帰属するか判断しがたいものである。ただし、比較的多くの破片が接合した 613 ～ 617 は、層理面上で潰れたような状態で出土しており（図 164、PL.45）、基本的には第 6a 層に帰属させてよいと考えている。

613・614・618・619 は船元式に位置づけられる土器。613 は、口縁がキャリパー状に屈曲し、外面に RL 縄文を施している。頸部の屈曲はゆるやかながら、内面に稜が形成されている。614･619 もキャリパー状の屈曲をもつが、内面に稜は見られない。いずれも外面に無節縄文が施される。618 は円形刺突を施した貼付突帯と爪形文をもつ口縁部片で、船元Ⅰ式に位置づけられる。外面に赤彩が施されている。

615 は縄文地貼付口縁の波子式の深鉢である。第 6a 層出土の 588 と異なり、口径 37 cm の大型品に復元できる。

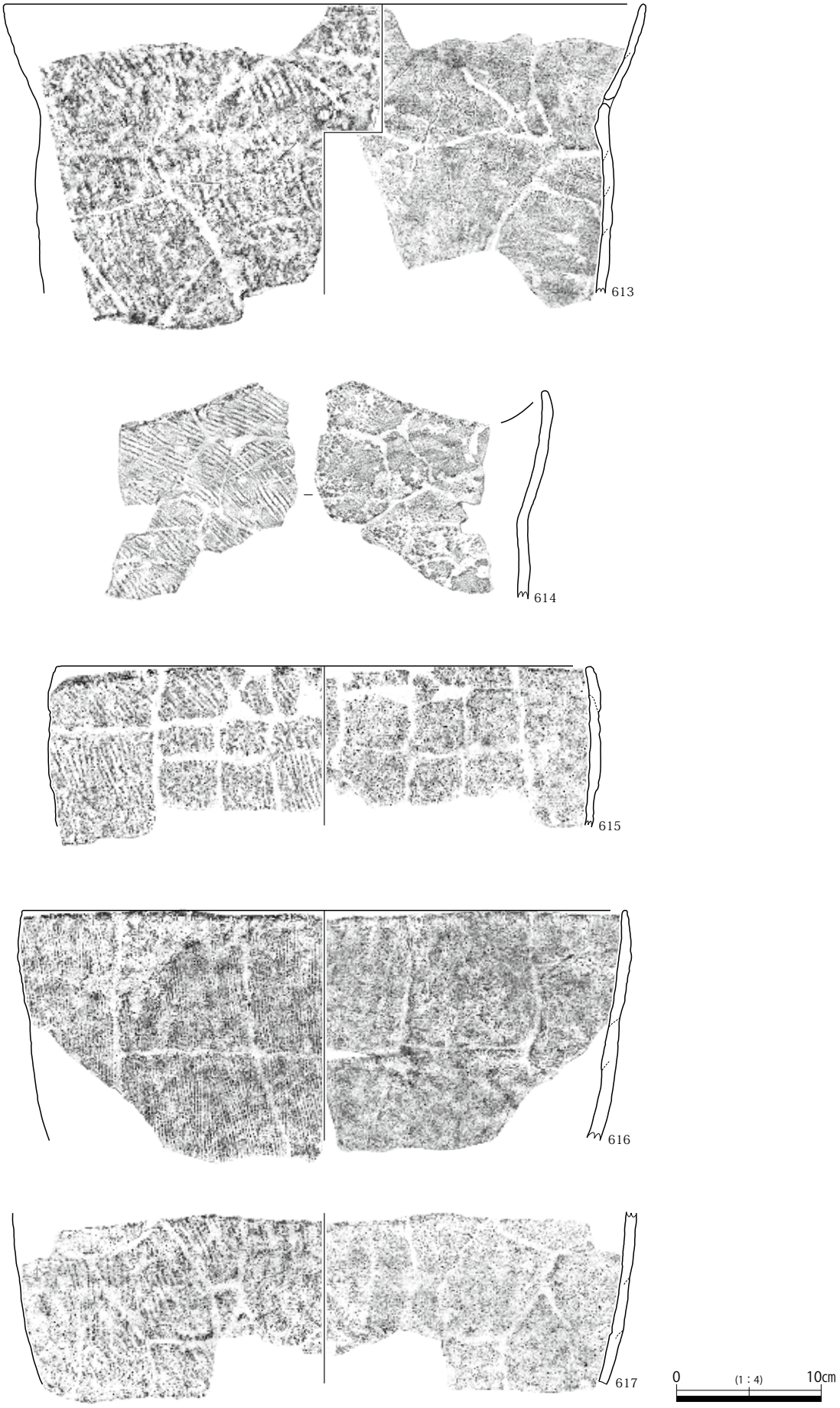


図 170　第６a ～７a 層 出土土器（１）

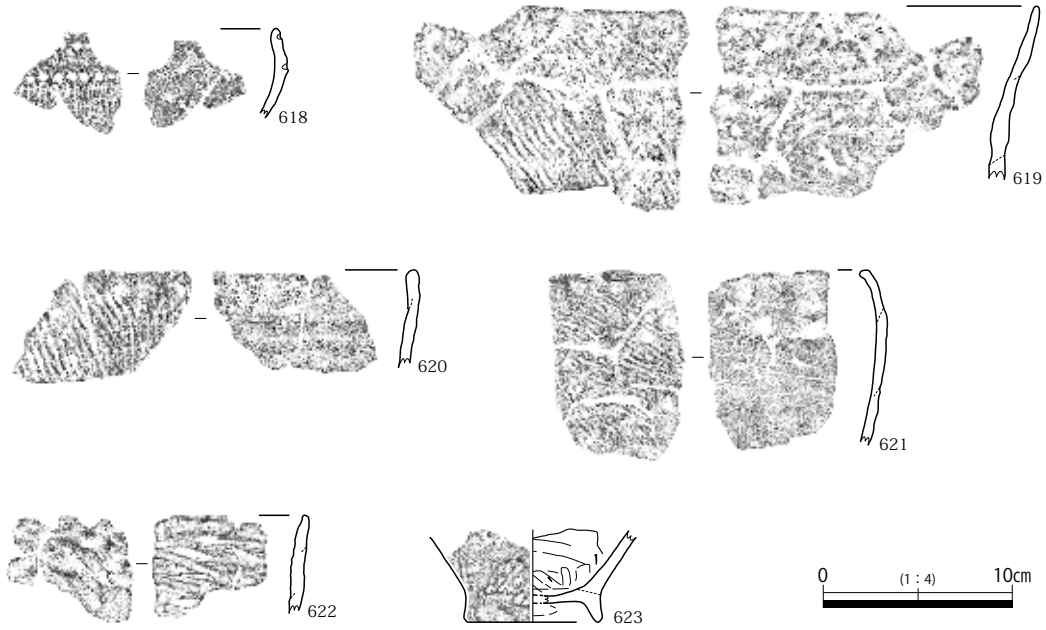


図 171　第６a ～７a 層 出土土器（２）

616・617・620 ～ 622 は縄文時代中期に帰属すると考えられるものの、型式を特定できない土器である。616 は、口縁がほぼ直立する大型のバケツ形の深鉢で、外面には縦方向に貝殻条痕が施されている。617 も、口縁を欠くが 616 と似た器形となる大型の深鉢で、外面に縄文が施されている。620・621 は外面に無節縄文が施された土器口縁部で、620 はほぼ直立し、621 は内湾する。622 は直立する口縁部片で、内外面とも粗いナデで調整されている。

623 は外面に縄文の施された高台状凹底となる底部である。

第 7a 層出土遺物

＜土器＞（図172、PL.116・117）

624 ～ 649 は第 7a 層出土の土器である。船元式を主体とし、波子式と型式の特定できない土器が客体的に加わる。第 6a 層と異なり、里木Ⅱ式は見られない。

624 ～ 630 は船元式に帰属する土器。630 を除き、外面に縄文が施されている。624 は口縁内面に粘土貼付けによる肥厚帯状の段が形成されている。626 は半裁竹管による平行沈線が施されており、船元Ⅲ式に帰属するものであろう。口縁に突起がつくられている。627 は口縁内面に粘土貼付けによる段をつくり、そこに縄文を施している。630 は縄文をもたず、外面は条痕とナデで調整されている。爪形文が施されることから、船元式の範疇で捉えられると考えた。

631 は波子式土器で、貼付肥厚帯上に楕円形の連続刺突文が３列施されている。

632 ～ 636 は型式が特定できない土器である。632 ～ 635 は外面に縄文が施されている。632 は波状口縁である。633 は口縁内面に粘土貼付けによる肥厚帯がつくられている。635 は、口縁は直立するが、底部に向かって内湾が強くなり、底径がすぼまる形態をとっている。636 は外面に縦方向の貝殻条痕が施されている。

637 ～ 649 は底部である。637 ～ 642 には外面に縄文が確認できる。平底の 649 のほかは、高台状の凹底である。

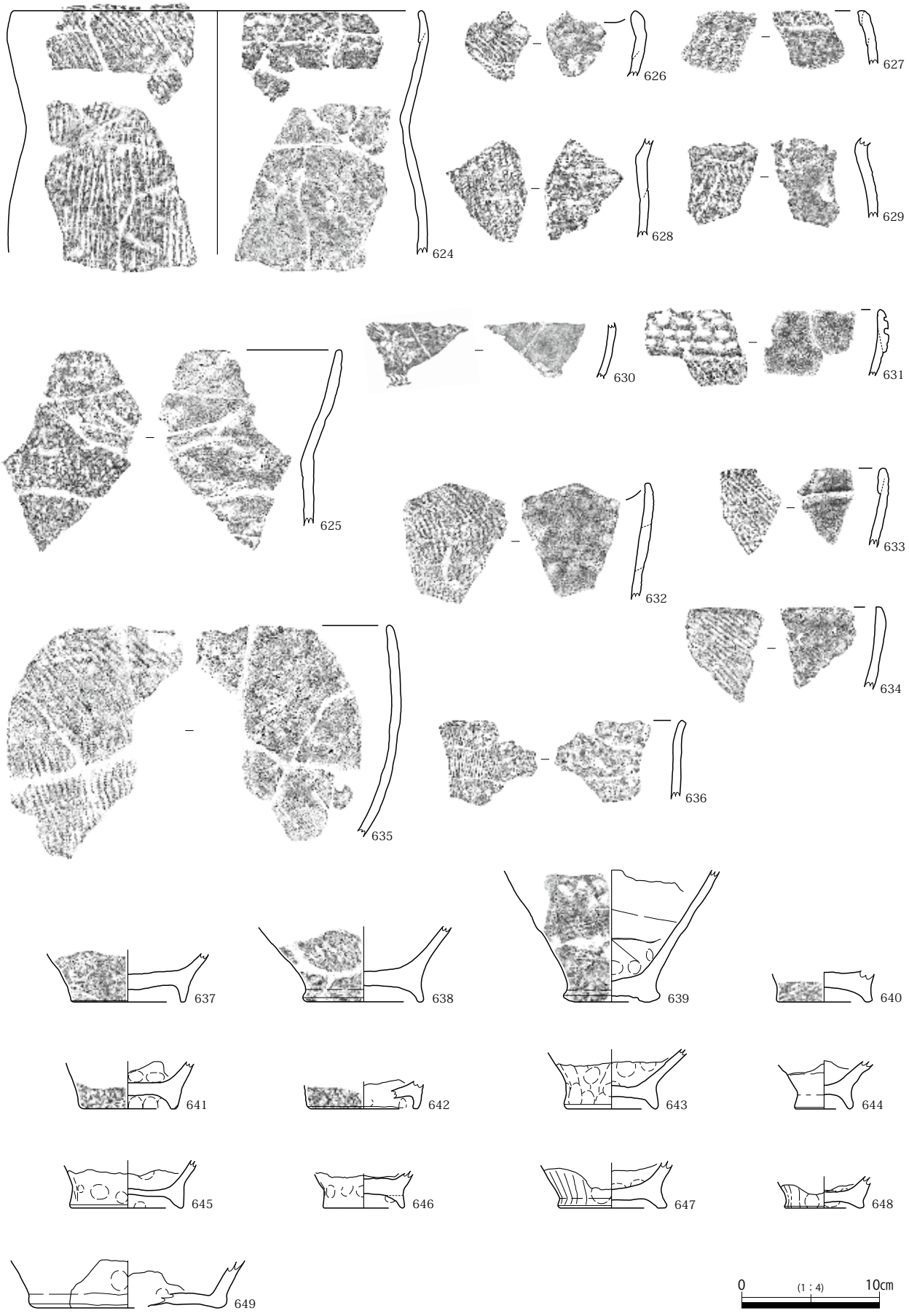


図 172　第７a 層 出土土器

表９　第７a 層 出土石器石材別組成表

		打製石器	礫石器			計
		剥片	石錘	磨石＋敲石	打剥礫	
火成岩	流紋岩		3	1		4
	花崗岩		1			1
堆積岩	砂岩				1	1
	他		2			2
変成岩	頁岩	1				1
計		1	6	1	1	9

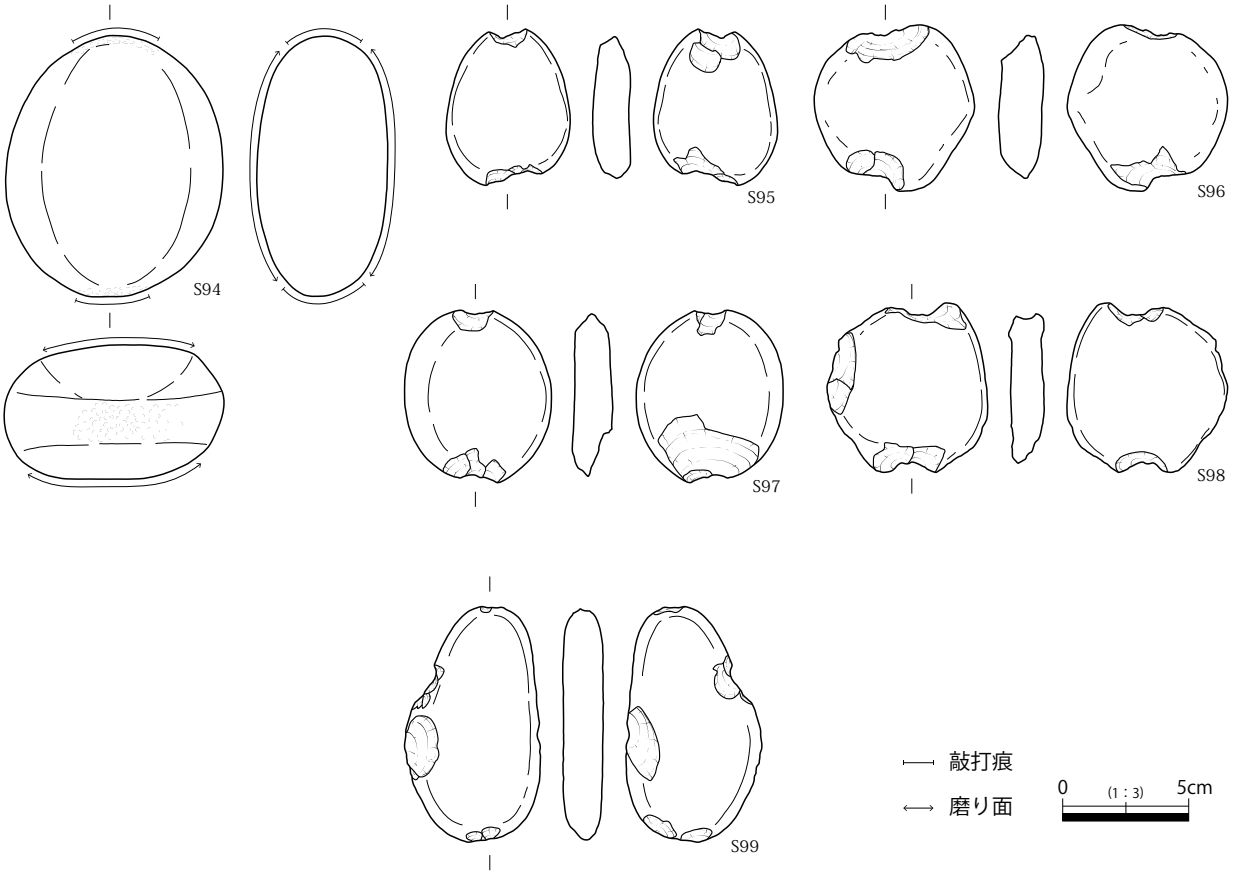


図 173　第７a 層 出土石器

＜石器＞（図173、PL.117）

石器の出土量は第 6a 層よりかなり少ない。石材別の器種組成を表９に示した。第 6a 層同様、石錘を主体とする器種組成である。

S94 は磨石と敲石の複合石器。S95 ～ S99 は打ち欠き石錘である。S98 は３ヶ所に、S99 は４ヶ所に打ち欠きが施されている。

第８節　時期不明の遺構（図 174）

未調査、もしくは遺物の出土がなかったために帰属時期を評価できなかった遺構について、以下にまとめて記載する。

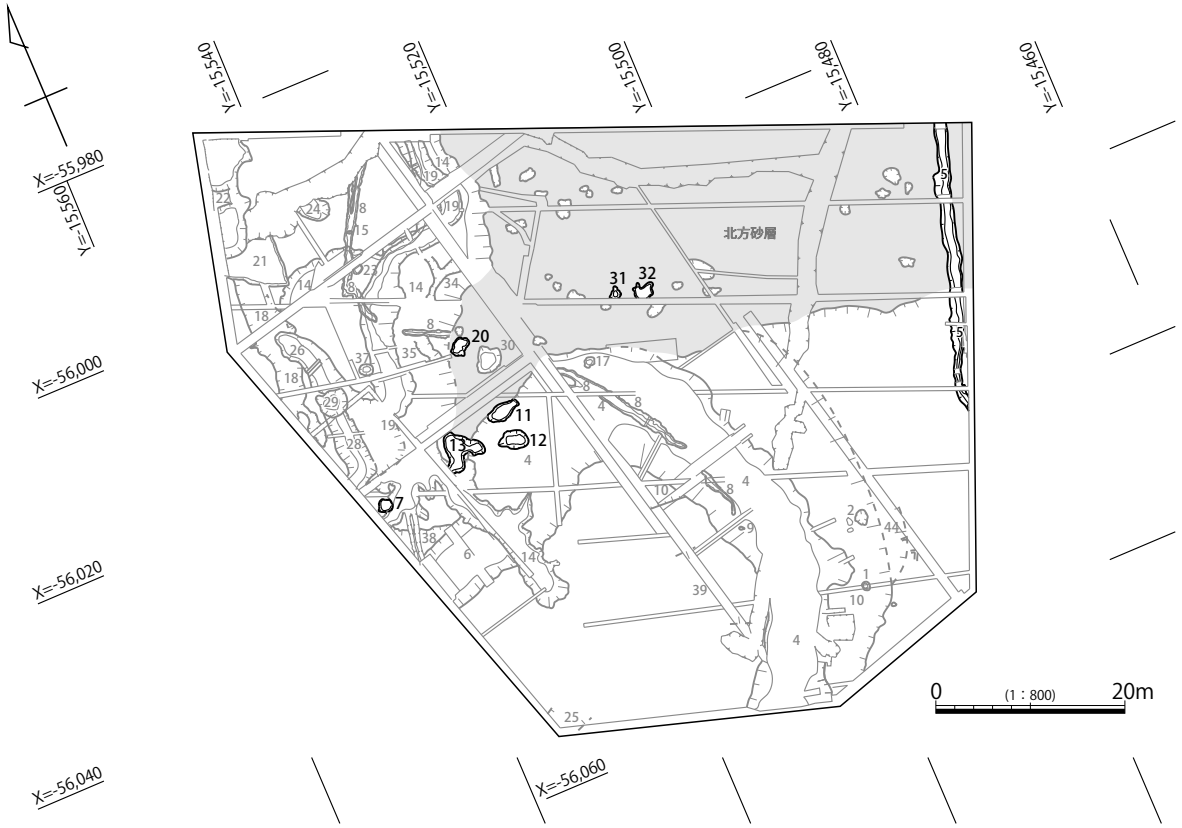


図 174　時期不明遺構配置図

５溝（図 175・176、PL.46・117）

調査区東端で検出された。現在の里道にほぼ平行するように延びる小溝である。内部は砂礫で埋没していたが、北側ほど近現代遺物を含む撹乱を受けている。南端では、溝底面に鍬もしくは鋤とみられる工具痕が確認される。長軸約 10 cm で角が鋭利であることから、鉄製の工具が想定されよう。工具痕は砂礫で埋没している。溝内の砂礫中からは縄文土器が出土したが（650・651）、いずれも細片である。工具痕の存在から、当遺構の帰属年代は新しく想定され、混入品の可能性がある。

出土した 650・651 はいずれも底部片で、縄文時代後晩期のものと考えられる。

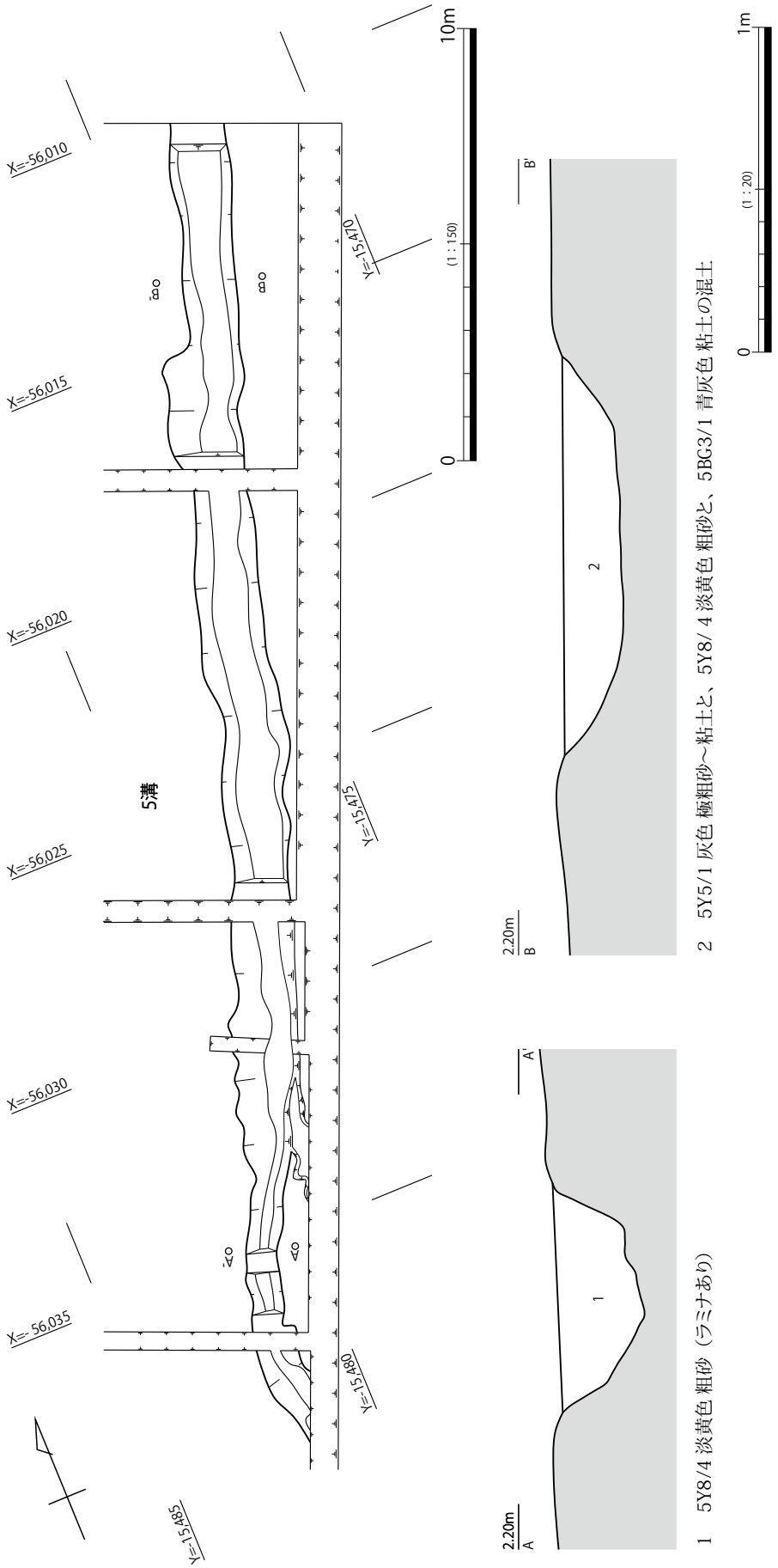
７土坑（図 177・178、PL.46・117）

調査区西側で 14 溝の肩を切り込んで検出された。一辺約 1.5 ｍの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは約 0.1 ｍと浅い。ブロック土や炭化物を含む埋土が確認され、人為的な埋め戻しが考えられる。

出土遺物は１点のみで、652 の縄文時代晩期の深鉢口縁部片である。

11 ～ 13 土坑・20 土坑（図 178・179、PL.46）

調査区中ほど西寄りで検出された。11 ～ 13 土坑は隣接して確認される。いずれも不定形の土坑で、内部は緑灰色のシルト～細砂や粘土を主体とする。また、20 土坑は 11 ～ 13 土坑群の北方約 10 m で検出された。灰オリーブ色のシルトを主体とした堆積物で埋没している。いずれの土坑も、木材や土器の細片が出土するものの、埋土は泥質な自然堆積と考えられる。13 土坑や 20 土坑のように、直径２cm ほどの細杭が遺構内と周辺に打設されており、これらの遺構に伴うものとは即断できないものの、注意が引かれる。時期の分かる遺物は出土しなかったが、13 土坑が 14 溝を掘り込むことから、



1　5Y8/4 淡黄色 粗砂（ラミナあり）

2　5Y5/1 灰色 極粗砂～粘土と、5Y8/4 淡黄色 粗砂と、5BG3/1 青灰色 粘土の混土

図 175　5溝 平・断面図

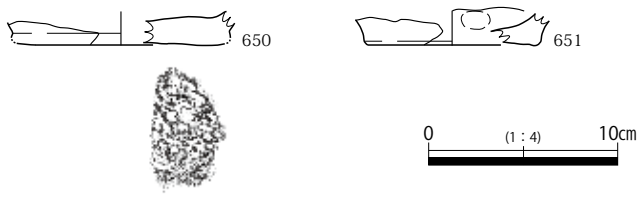
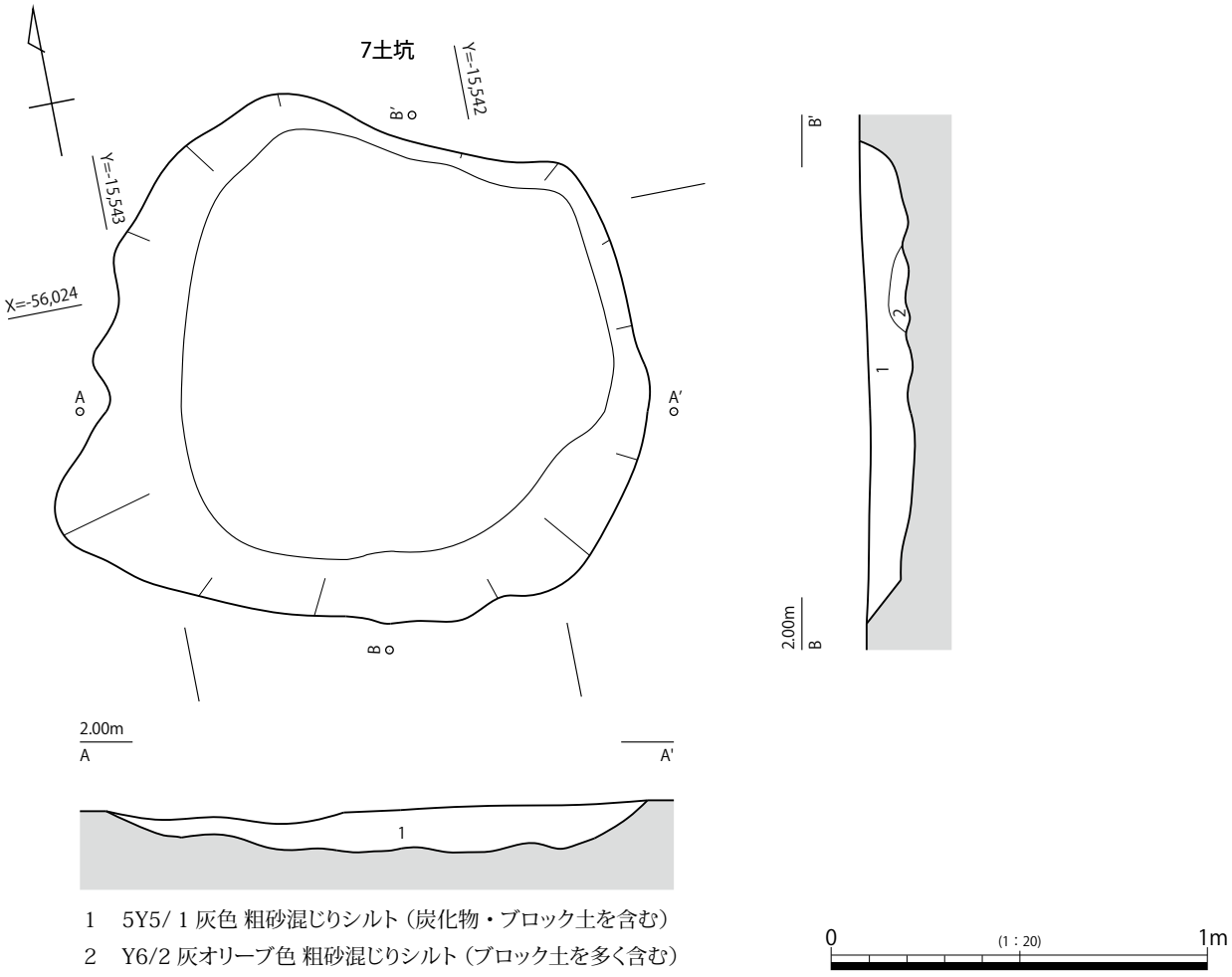


図 176　５溝 出土土器



1　5Y5/ 1 灰色 粗砂混じりシルト（炭化物・ブロック土を含む）
2　Y6/2 灰オリーブ色 粗砂混じりシルト（ブロック土を多く含む）

図 177　７土坑 平・断面図

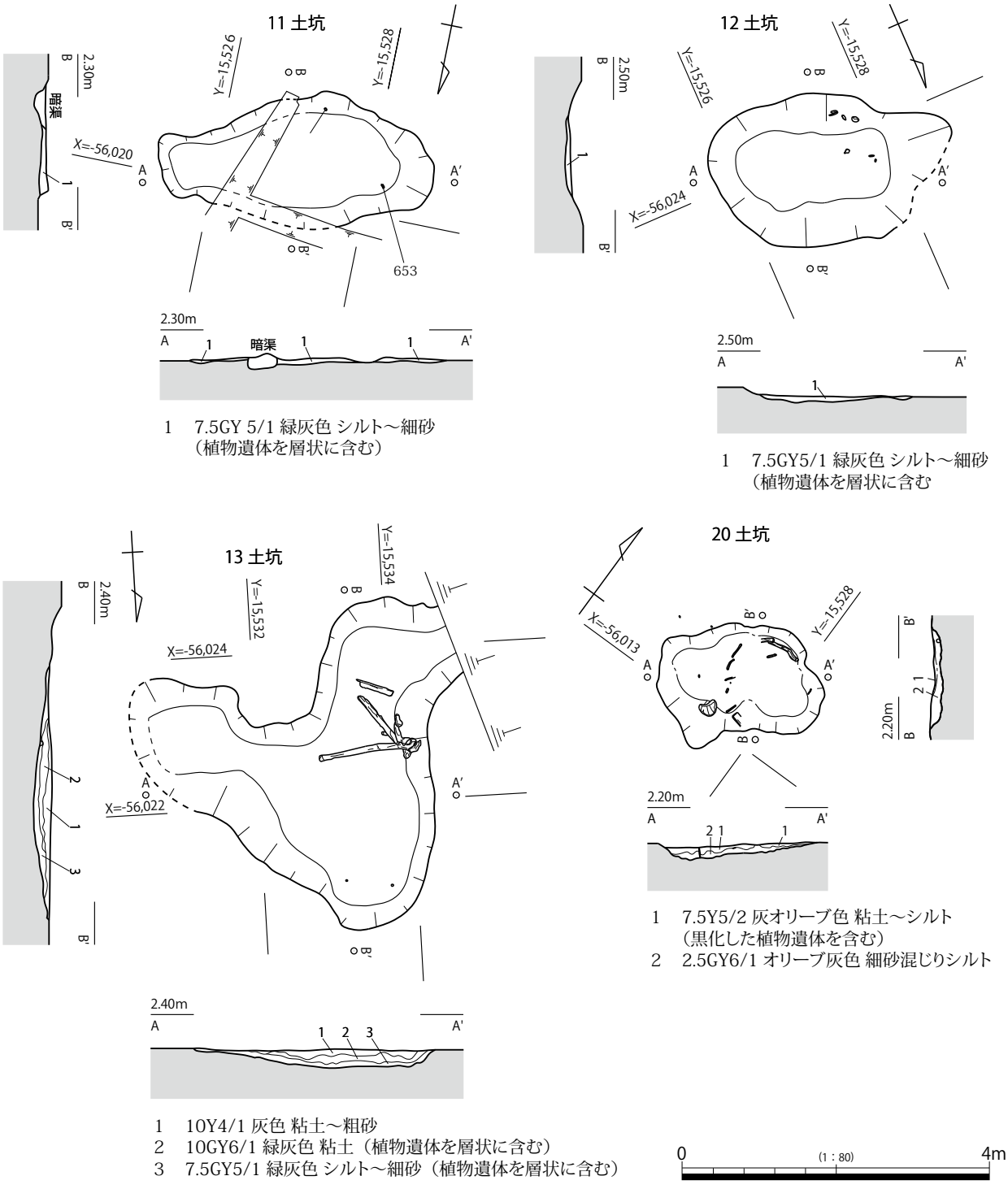
図 178　７・11・13 土坑 出土土器

弥生時代中期以降の帰属年代が考えられる。

11 土坑から弥生土器片 653 が、13 土坑から底部片 654 が出土している。

北方砂層上面検出遺構（31・32 土坑ほか）

調査区北東から北側にかけて確認された北方砂層については、縄文時代中期以前の堆積が考えられ



1　7.5GY 5/1 緑灰色 シルト～細砂
（植物遺体を層状に含む）

1　7.5GY5/1 緑灰色 シルト～細砂
（植物遺体を層状に含む

1　7.5Y5/2 灰オリーブ色 粘土～シルト
（黒化した植物遺体を含む）
2　2.5GY6/1 オリーブ灰色 細砂混じりシルト

1　10Y4/1 灰色 粘土～粗砂
2　10GY6/1 緑灰色 粘土（植物遺体を層状に含む）
3　7.5GY5/1 緑灰色 シルト～細砂（植物遺体を層状に含む）

図 179　11・12・13・20 土坑 平・断面図

る。この砂層の上面は圃場整備により削平を受けており、重機によって圃場整備盛土を除去すると、直ちに北方砂層が露出する状況であった。この北方砂層の上部には楕円や円形を呈する土坑が 25 基確認されている。これらについては、平面検出までに留め、調査は行わなかった。ただし、時期と性格を確認するために、そのうち 2 基の土坑を 31･32 土坑として調査を実施した。31・32 土坑は調査区中ほど北寄りで検出された。隣接する土坑で､いずれも南側が現代の暗渠によって撹乱されている。

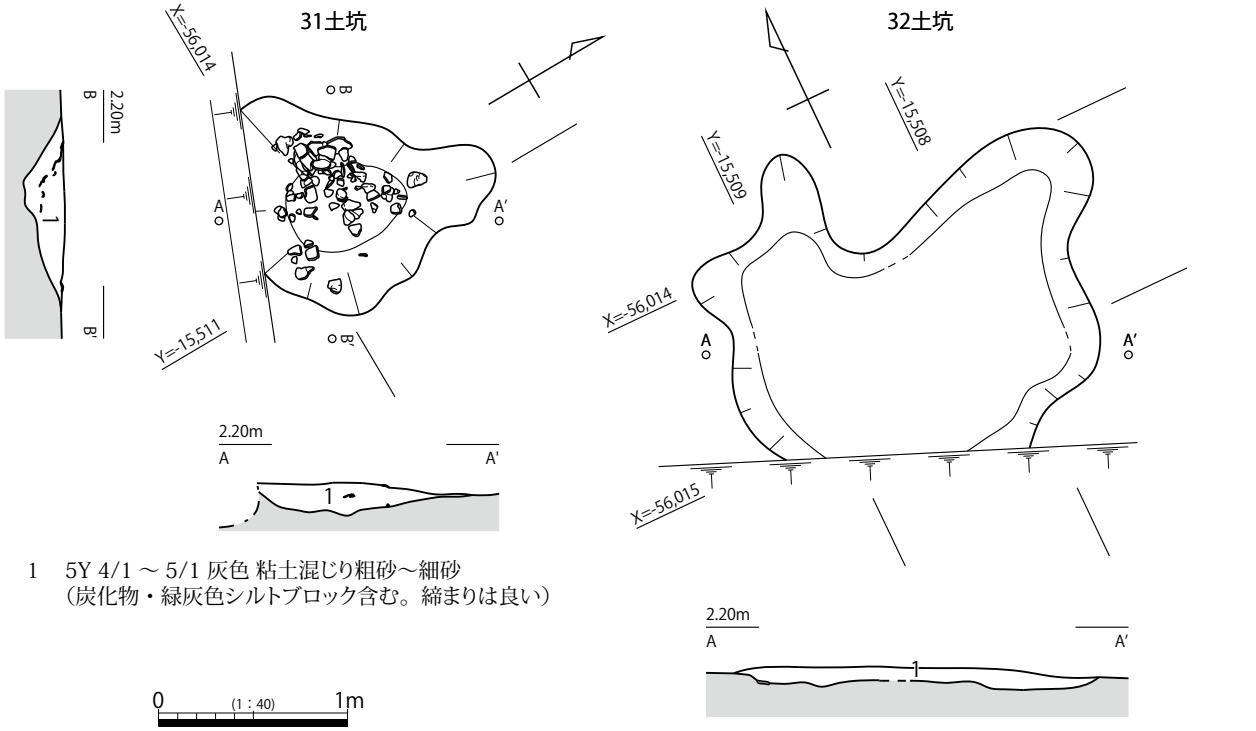
（1）31 土坑（図 180・181、PL.47・118）

31 土坑は長軸約 1.5 ｍの不整形の土坑で、上面が削平されているため非常に浅い。検出段階から土器が多く含まれた埋土が確認されており、掘削してみると炭化物とブロック土を含む埋土中から多量の土器片が出土した。

出土遺物はいずれも縄文時代晩期の土器である。655・656 は深鉢で篠原式新段階のもの、657 は浅鉢の底部であろう。

（2）32 土坑（図 180、PL.47）

32 土坑は、31 土坑の東方３ｍで検出された。長軸約 2.2 ｍの不整形の土坑で、31 土坑同様に上面が削平されているため非常に浅い。炭化物をわずかに含む埋土は 31 土坑に近似するが、遺物は出土



1　5Y 4/1 ～ 5/1 灰色 粘土混じり粗砂～細砂
（炭化物・緑灰色シルトブロック含む。締まりは良い）

1　5Y6/1 灰色 粗砂～シルト（わずかに炭化物を含む。締りが良い）

図 180　31・32 土坑 平・断面図

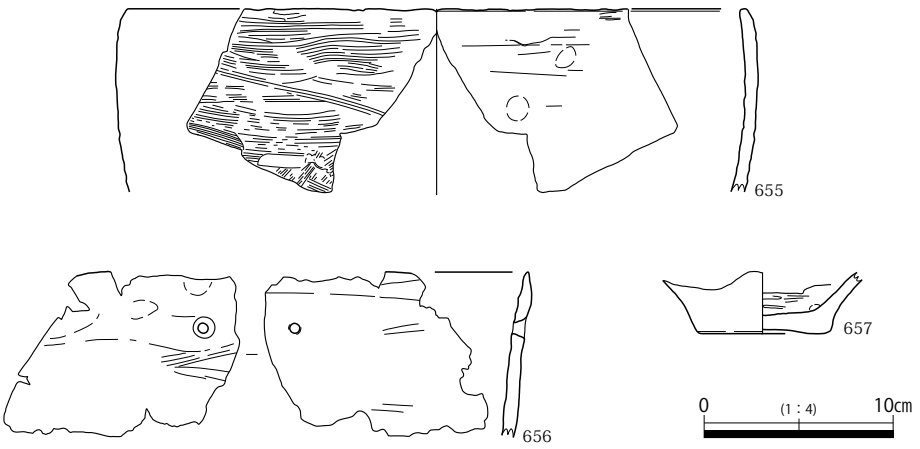


図 181　31 土坑 出土土器

しなかった。

（3）北方砂層上面出土遺物（図 182、PL.118）

31・32 土坑などの北方砂層上面検出遺構周辺から、比較的大型の縄文土器片などがまとまって出土している。先述のように、北方砂層は表土直下で検出しているため、これらの遺物が本来どの層に含まれていたかを判断できないものの、北方砂層上面検出遺構に関連する可能性が高い。縄文土器はすべて縄文時代晩期のものである。

658 は頸部に屈曲をもち、口縁が外反する深鉢である。659 は上面観がレモン形に復元できそうなボウル形の浅鉢である。体部がやや直線的に立ち上がり、口縁部外面にナデで凹みをつけており、内面側が肥厚している。660 は、体部が内湾しながら大きく開く、ボウル形の浅鉢である。661・662 はバケツ形の深鉢である。これらの土器は、いずれも篠原式に相当するものと考えられる。

S100 は砂岩製の打ち欠き石錘である。

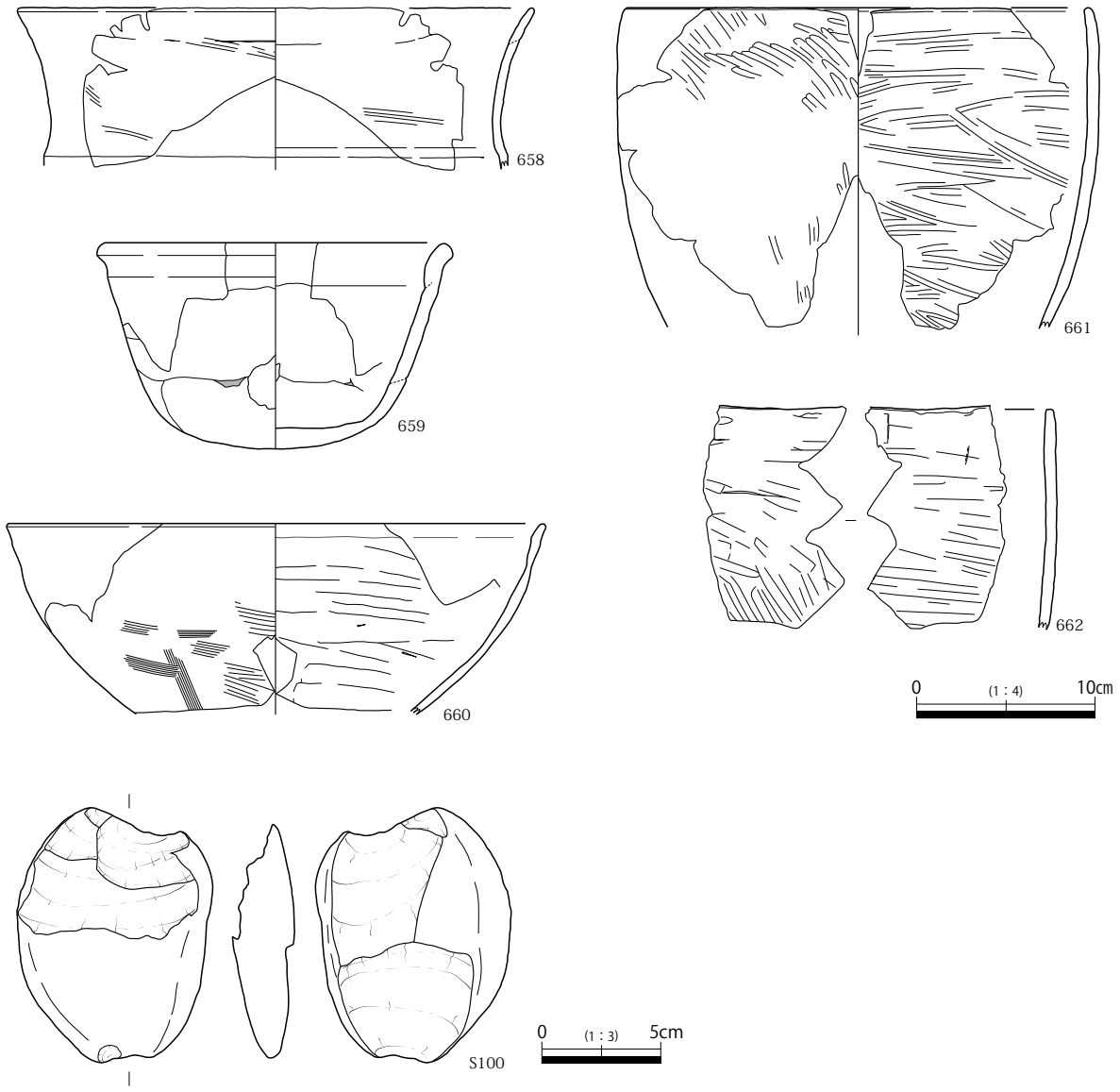


図 182　北方砂層上面 出土遺物

遺物観察表

表 10　土器観察表（1）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
1	図 23 PL.48	21 落ち込み	突帯文土器 深鉢	△ 2.6 △ 4.3	口縁部	外面：貼付刻目突帯、粗いナデ 内面：横ナデ、オサエ、接合痕	密	外面：灰黄褐～褐灰色 内面：にぶい黄橙色	
2	図 23 PL.48	21 落ち込み	突帯文土器 深鉢	△ 3.0 △ 4.4	口縁部	外面：貼付刻目突帯、キザミ、粗いナデ 内面：ナデ、オサエ、接合痕	密	外面：オリーブ黒色 内面：にぶい黄褐～黒褐色	
3	図 23 PL.48	21 落ち込み	突帯文土器 深鉢	△ 4.0 △ 6.8	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ、接合痕	密	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐～黒色	
4	図 23 PL.48	21 落ち込み	突帯文土器 深鉢	△ 4.3 △ 6.0	口縁部	外面：貼付刻目突帯、刺突、ナデ 内面：ナデ	密	外面：黒色 内面：黒褐色	
5	図 23 PL.48	21 落ち込み	突帯文土器 深鉢	△ 6.0 △ 4.0	口縁部	外面：貼付突帯、ナデ、オサエ、キザミ（風化により不明瞭） 内面：ナデ、オサエ、接合痕	密	外面：灰黄色 内面：灰黄色	
6	図 23 PL.48	21 落ち込み	弥生土器 甕	△ 25.0 △ 21.8	口縁部～胴部	外面：口縁部キザミ、ナデ、肩部段・沈線。沈線以下タテハケ 内面：口縁部ナデ、胴部オサエ・ハケ	密	外面：黄褐～暗灰黄色 内面：橙～灰黄褐色	遠賀川式
7	図 23 PL.48	21 落ち込み	弥生土器 甕	△ 11.0 △ 3.4	口縁部	外面：口縁部ナデ、体部ハケ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄橙～黒色	
8	図 23 —	21 落ち込み	弥生土器 壺	△ 4.8 △ 7.0	肩部	外面：ミガキ、沈線 内面：横ナデ	密	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄橙色	遠賀川式
9	図 23 PL.48	21 落ち込み	弥生土器 壺	△ 22.4 △ 5.5	口縁部	外面：口縁部３条の凹線、頸部ナデ・沈線 内面：口縁部３条の凹線、頸部横ナデ	密	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	
10	図 23 PL.48	21 落ち込み	弥生土器 壺	△ 20.2 △ 3.4	口縁部	外面：２条の凹線、円形浮文、ナデ 内面：ナデ、ハケ	密	外面：褐灰色 内面：褐灰色	
11	図 23 PL.48	21 落ち込み	瓦質土器 鍋	△ 3.9 △ 6.3	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ	密	外面：黒色 内面：灰色	
12	図 23 PL.49	22 落ち込み	突帯文土器 深鉢	△ 6.5 △ 6.5	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄～黄灰色 内面：灰～灰オリーブ色	
13	図 23 PL.49	22 落ち込み	突帯文土器 深鉢	△ 23.4 △ 3.2	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐～にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	風化剥落
14	図 23 PL.49	22 落ち込み	突帯文土器 深鉢	△ 4.5 △ 2.1	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙～黄褐色 内面：灰黄褐～黄褐色	
15	図 23 PL.49	22 落ち込み	突帯文土器 深鉢	△ 2.6 △ 3.5	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ	密	外面：灰黄～黒色 内面：暗灰黄色	
16	図 23 PL.49	22 落ち込み	突帯文土器 深鉢	△ 3.5 △ 3.2	口縁部	外面：貼付刻目突帯、巻貝貝殻刺突、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰褐～灰黄褐色 内面：にぶい黄灰色	
17	図 23 PL.49	22 落ち込み	突帯文土器 深鉢	△ 3.2 △ 4.0	口縁部	外面：貼付突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒褐～にぶい黄褐色 内面：黒褐色	風化が激しい
18	図 23 PL.49	22 落ち込み	縄文土器 壺	△ 5.4 △ 4.8	頸部	外面：オサエ、ミガキ、２条の沈線（おそらく下にも数条あり） 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄～黒褐色 内面：灰黄～黒褐色	
19	図 23 PL.49	22 落ち込み	弥生土器 壺	— △ 12.2	頸部	外面：ナデ、ハケ、穿孔（内面から）、オサエ、ミガキ 内面：ナデ、オサエ、貼付突帯、ハケ	やや密	外面：灰黄～黒色 内面：にぶい黄～灰黄色	内面突帯
20	図 23 PL.49	22 落ち込み	弥生土器？ 壺	— △ 2.5	肩部	外面：沈線、刺突文、ミガキ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黄灰～黄褐色 内面：黒褐色	
21	図 23 PL.49	22 落ち込み	弥生土器 壺	— △ 7.9	肩部	外面：削り出し突帯、キザミ、ミガキ 内面：横ナデ、オサエ、接合痕	密	外面：黄灰～黒褐色 内面：黄灰～黒褐色	
22	図 27 PL.49	15 ピット	弥生土器 ミニチュア 甕	4.8 5.6	ほぼ完形	外面：口縁部ナデ、胴部～底部ハケ後ナデ、 内面：ナデ	密	外面：暗灰色 内面：灰白色	
23	図 30 PL.50	8 溝	弥生土器 甕	※ 18.6 △ 3.2	口縁部	外面：２条の凹線（磨滅により不明瞭） 内面：ナデ、ケズリ	密	外面：明黄褐～黒褐色 内面：にぶい黄橙～黒褐色	
24	図 30 PL.50	8 溝	弥生土器 甕	△ 18.0 △ 4.8	口縁部	外面：口縁部ナデ、体部ハケ 内面：横ナデ、ケズリ	密	外面：にぶい橙色 内面：橙～黒色	
25	図 30 PL.50	8 溝	弥生土器 甕	△ 18.3 △ 3.8	口縁部	外面：３条の平行沈線、ナデ 内面：ナデ、ケズリ	密	外面：灰黄褐～黒褐色 内面：褐灰色～黒色色	
26	図 30 PL.50	8 溝	弥生土器 甕	△ 16.1 △ 3.7	口縁部	外面：３条の平行沈線 内面：横ナデ、ケズリ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：灰黄褐色	
27	図 30 PL.50	8 溝	弥生土器 甕	△ 22.0 △ 2.9	口縁部	外面：７条の平行沈線、ナデ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄橙色	
28	図 30 PL.50	8 溝	弥生土器 甕	△ 13.6 △ 6.5	口縁部～胴部上半	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ケズリ	密	外面：にぶい褐色 内面：灰黄褐色	
29	図 30 PL.50	8 溝	弥生土器 甕	△ 16.0 △ 3.8	口縁部	外面：５条の平行沈線、ナデ 内面：ナデ、ケズリ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
30	図 30 PL.50	8 溝	弥生土器 甕	△ 20.0 △ 2.2	口縁部	外面：３条の平行沈線、ナデ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	

表11　土器観察表（2）

遺物No.	挿図PL	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
31	図30 PL.50	8溝	弥生土器 甕	△15.0 △2.2	口縁部	外面：3条の凹線、ナデ 内面：ナデ	密	外面：褐灰色 内面：にぶい黄橙色	
32	図30 PL.50	8溝	弥生土器 甕	— △3.5	口縁部	外面：平行沈線 内面：口縁部ミガキ、頸部ケズリ	密	外面：灰白色 内面：灰黄色	
33	図30 PL.50	8溝	弥生土器 甕	※17.0 △4.1	口縁部	外面：平行沈線 内面：ナデ	密	外面：黒褐色 内面：灰黄褐色	
34	図30 PL.50	8溝	土師器 甕	※14.3 △3.3	口縁部	外面：横ナデ 内面：横ナデ、ケズリ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
35	図30 PL.50	8溝	弥生土器 甕	△20.0 △4.3	口縁部	外面：平行沈線 内面：ナデ、ミガキ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
36	図30 PL.50	8溝	弥生土器 甕	— △4.7	胴部上半	外面：貝殻腹縁による条痕文 内面：頸部ナデ、胴部ケズリ	密	外面：にぶい黄褐色 内面：明黄褐色	
37	図30 PL.50	8溝	弥生土器 甕	— △3.1	底部	外面：ナデ一部ミガキ 内面：ナデ	密	外面：褐灰色 内面：にぶい黄橙色	
38	図30 PL.50	8溝	弥生土器 鼓形器台	— △4.0	受部	外面：ナデ 内面：ミガキ	密	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	
39	図30 PL.49	8溝	弥生土器 高坏	— △10.0	脚部	外面：ナデ後ミガキ、脚端部凹線 内面：ナデ、ミガキ	密	外面：にぶい黄橙～橙色 内面：灰黄～橙色	内外面赤彩
40	図30 PL.49	8溝	弥生土器 高坏	— △8.0	脚部	外面：風化剥落 内面：ケズリ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
41	図30 PL.50	8溝	土師器 高坏	△13.0 △3.5	坏部	外面：風化により不明瞭（ナデ？） 内面：風化により不明瞭（ナデ？）	密	外面：橙色 内面：橙色	内面赤彩
43	図32 PL.50	30土坑	縄文土器 深鉢	— △4.2	胴部上半	外面：RL縄文 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄橙色	
44	図32 PL.50	30土坑	弥生土器 甕	※17.2 △3.0	口縁部	外面：平行沈線（上半ナデ消し） 内面：ナデ、ケズリ	密	外面：黒褐色 内面：黄褐色	
45	図32 PL.50	30土坑	弥生土器 甕	※18.5 △3.8	口縁部	外面：平行沈線、ナデ 内面：ナデ、ケズリ	密	外面：オリーブ褐～黒色 内面：オリーブ褐色	
46	図32 PL.50	30土坑	弥生土器 甕	※18.6 △3.8	口縁部	外面：平行沈線（上半ナデ消し） 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄褐～黒色 内面：にぶい黄褐色	
47	図32 PL.50	30土坑	弥生土器 甕	— △4.3	口縁部	外面：平行沈線（上半はナデ消し） 内面：丁寧なナデ、ケズリ	密	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄橙色	
48	図32 PL.50	30土坑	弥生土器 甕	※15.6 △5.5	口縁部	外面：ナデ、強いナデ 内面：丁寧なナデ、オサエ、ケズリ	密	外面：暗オリーブ褐～黒色 内面：にぶい黄褐色	
49	図33 —	撹乱～ 第1a層	縄文土器 浅鉢	— △2.75	口縁部	外面：キザミ、沈線 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：灰黄褐色	
50	図33 PL.51	撹乱～ 第1a層	弥生土器 甕	※14.0 △8.9	口縁部～ 胴部上半	外面：一部ミガキ、ナデ 内面：ナデ、オサエ、ケズリ	密	外面：褐灰～黒色 内面：褐灰～黄褐色	
52	図33 —	撹乱～ 第1a層	突帯文土器 深鉢	△7.2 △11.7	口縁部	外面：貼付刻目突帯、横ナデ 内面：ナデ	密	外面：黄褐～黒色 内面：にぶい黄橙～黒褐色	突帯のつくりが粗雑
53	図33 —	撹乱～ 第1a層	縄文土器 深鉢	△5.8 △8.8	口縁部	外面：口縁キザミ、ナデ 内面：丁寧なナデ	密	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄橙～黒色	外面風化剥落
54	図33 —	撹乱～ 第1a層	縄文土器 浅鉢	△4.5 △3.9	口縁部	外面：ミガキ、粗いナデ 内面：ナデ	密	外面：黒色 内面：黒褐～黒色	口縁部がわずかに内傾
55	図53 PL.52	14溝 上層	縄文土器 深鉢	△3.1 △3.1	口縁部	口縁部突起。円孔をもつ渦巻き状の造形	密	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	
56	図53 PL.52	14溝 上層	縄文土器 粗製深鉢	— △4.9	口縁部	外面：粗いナデ、オサエ 内面：粗いナデ、オサエ	密	外面：褐灰色 内面：灰黄褐～褐灰色	
57	図53 PL.52	14溝 上層	縄文土器 粗製深鉢	— △4.2	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ	やや密	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐～褐灰色	
58	図53 PL.52	14溝 上層	突帯文土器 深鉢	△3.8 △3.4	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：暗灰黄色 内面：暗灰黄色	
59	図53 PL.52	14溝 上層	突帯文土器 深鉢	△3.4 △4.0	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐色 内面：灰黄～黄灰色	
60	図53 —	14・33溝 上層	突帯文土器 深鉢	— △4.2	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	やや密	外面：にぶい黄橙～にぶい黄褐色 内面：にぶい黄橙～にぶい黄褐色	
61	図53 PL.52	14溝 上層	突帯文土器 深鉢	△4.6 △4.7	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒褐色 内面：にぶい黄橙色	
62	図53 PL.52	14溝 上層	突帯文土器 深鉢	△3.9 △4.3	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄色 内面：灰黄色	
63	図53 PL.52	14溝 上層	突帯文土器 深鉢	— △2.8	底部	外面：粗いナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐～灰白色 内面：灰白色	尖底
64	図53 PL.52	14溝 上層	弥生土器 壺	△12.8 △4.8	口縁部	外面：横ナデ、オサエ 内面：横ナデ、沈線	密	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	

表 12　土器観察表（３）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
65	図 53 PL.52	14 溝 上層	弥生土器 甕	※ 25.0 △ 3.6	口縁部	外面：ナデ 内面：ハケ、沈線	密	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	
66	図 53 PL.52	14 溝 上層	弥生土器 甕	△ 23.0 △ 10.3	口縁部～ 胴部上半	外面：口縁キザミ、ナデ、6 条の沈線 内面：口縁部ナデ、体部タテハケ後横ナデ	密	外面：にぶい黄橙～灰褐色 内面：浅黄橙～褐色	
67	図 53 PL.52	14 溝 上層	弥生土器 甕	△ 23.2 △ 5.2	口縁部	外面：横ナデ、オサエ、6 条の沈線 内面：横ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
68	図 53 PL.52	14 溝 上層	弥生土器 甕	※ 24.0 7.5	口縁部～ 胴部上半	外面：口縁上刺突、頸部 18 条の沈線・刺突、ナデ 内面：ナデ	密	外面：灰白色 内面：灰黄色	
69	図 53 PL.52	14 溝 上層	弥生土器 甕	△ 16.0 △ 13.8	口縁部～ 胴部上半	外面：ハケ後ナデ、刺突文 内面：ハケ後ナデ	密	外面：灰白～にぶい黄褐色 内面：灰白～にぶい黄褐色	
70	図 53 PL.52	14 溝 上層	弥生土器 甕	※ 12.2 △ 4.3	口縁部	外面：口縁部２条の凹線、ナデ 内面：ナデ、ハケ	密	外面：灰黄褐～褐灰色 内面：灰黄褐色	両面マメツ
71	図 53 PL.52	14 溝 上層	弥生土器 甕	※ 12.0 △ 3.5	口縁部	外面：口縁部１条の沈線、ハケ後ナデ 内面：ナデ、ハケ	密	外面：暗灰黄色 内面：暗灰黄～黒褐色	
72	図 53 PL.52	14 溝 上層	弥生土器 甕	△ 16.9 △ 5.0	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ、ハケ	密	外面：褐灰色 内面：灰黄褐～黒褐色	外面風化剥落、器面が剥落
73	図 53 PL.52	14 溝 上層	弥生土器 甕	※ 19.0 △ 4.3	口縁部	外面：横ナデ、ハケ 内面：横ナデ、ハケ（磨滅）	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
74	図 53 PL.52	14 溝 上層	弥生土器 甕	※ 15.8 △ 4.4	口縁部	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ、ハケ	密	外面：灰白色 内面：灰白色	
75	図 53 PL.57	14 溝 上層	弥生土器 甕	14.7 29.2	ほぼ完形	外面：口縁部３条の凹線・横ナデ、体部上半ハケ・一部タテ方向ミガキ、体部下半タテ方向ミガキ 内面：口縁部ナデ、体部上半ハケ、体部下半ヘラケズリ・オサエ	密	外面：灰黄褐～褐灰色 内面：灰黄褐～褐灰色	外面風化剥落
76	図 53 PL.57	14 溝 上層	弥生土器 甕	※ 15.8 26.2	ほぼ完形	外面：口縁部２条の凹線・ナデ、体部横ハケ後ミガキ 内面：口縁部ナデ、体部上半ハケ・オサエ、体部下半ケズリ	密	外面：暗灰黄色 内面：灰黄色	肩部に吹きこぼれの痕跡
77	図 53 PL.57	14 溝 上層	弥生土器 甕	15.5 27.4	ほぼ完形	外面：口縁部２条の凹線、体部ナデ後ミガキ（上半） 内面：口縁部ナデ、体部上半ハケ・オサエ、体部下半ケズリ	密	外面：灰黄褐～褐灰色 内面：灰黄褐～褐灰色	
78	図 54 PL.53	14 溝 上層	弥生土器 甕	※ 15.0 △ 9.8	口縁部～ 胴部上半	外面：ナデ、ハケ（磨滅ひどく不明瞭） 内面：ナデ、オサエ、ケズリ	密	外面：淡赤橙色 内面：明褐灰色	外面赤彩（内面も薄く残存）
79	図 54 PL.57	14 溝 上層	弥生土器 甕	△ 12.8 △ 11.8	口縁部～ 胴部上半	外面：口縁部沈線・ナデ、体部ハケ・一部ミガキ 内面：ハケ	密	外面：灰白～褐灰色 内面：灰白～褐灰色	
80	図 54 PL.53	14 溝 上層	弥生土器 甕	— △ 7.6	頸部	外面：貼付刻目突帯、ハケ後ナデ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：黒色	
81	図 54 PL.53	14 溝 上層	弥生土器 甕	※ 20.2 △ 10.8	口縁部～ 胴部上半	外面：口縁部２条の凹線・ナデ、体部ハケ 内面：口縁部２条の凹線、頸部ハケ、胴部ケズリ	密	外面：暗灰黄色 内面：赤褐色	
82	図 54 PL.53	14 溝 上層	弥生土器 甕	※ 17.6 △ 3.5	口縁部	外面：口縁部３条の凹線・円形浮文・キザミ、体部ナデ・ハケ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
83	図 54 PL.53	14 溝 上層	弥生土器 甕	※ 18.7 △ 1.7	口縁部	外面：口縁部３条の凹線・円形浮文・キザミ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
84	図 54 —	14 溝 上層	弥生土器 甕	— △ 15.3	胴部	外面：ミガキ（風化の為調整不明瞭） 内面：上半ハケ、下半ケズリ	密	外面：にぶい橙色 内面：暗灰黄色	
85	図 54 PL.53	14 溝 上層	弥生土器 甕	— △ 6.6	肩部	外面：ナデ、刺突文 内面：ハケ	やや密	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：黄灰色	
86	図 54 PL.53	14 溝 上層	弥生土器 甕	— △ 4.8	肩部	外面：ハケ、波状文、ナデ 内面：ナデ？	密	外面：にぶい橙～黄灰色 内面：橙色	
87	図 54 PL.57	14 溝 上層	弥生土器 甕	— △ 13.8	胴部以下	外面：ハケ後ミガキ 内面：ハケ、ケズリ	密	外面：にぶい赤褐色 内面：暗灰黄色	
88	図 54 PL.53	14 溝 上層	弥生土器 壺	※ 9.8 △ 13.4	口縁部～ 胴部上半	外面：ミガキ、オサエ 内面：上半ナデ、下半ハケ	密	外面：灰白色 内面：灰白色	縄文系の壺
89	図 54 PL.53	14 溝 上層	弥生土器 壺	※ 8.3 △ 10.9	口縁部～ 肩部	外面：ナデ、ミガキ、オサエ 内面：上半ミガキ、下半ハケ	密	外面：浅黄～黒色 内面：浅黄～黄灰色	縄文系の壺
90	図 54 PL.57	14 溝 上層	弥生土器 壺	※ 11.0 △ 10.1	口縁部～ 胴部上半	外面：ハケ、貝殻腹縁刺突文 内面：ナデ、オサエ、ハケ	密	外面：黒褐色 内面：にぶい黄橙色	内面風化顕著
91	図 54 PL.53	14 溝 上層	弥生土器 壺	△ 24.0 △ 9.2	口縁部 ～頸部	外面：口縁部ヘラ描き斜格子文、頸部ハケ後５条の凹線文・貼付刻目突帯 内面：ナデ	密	外面：にぶい橙色 内面：にぶい黄橙色	内面風化剥落
92	図 54 PL.53	14 溝 上層	弥生土器 壺	— △ 2.7	口縁部	外面：ヘラ描き斜格子文 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	

表 13　土器観察表（４）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
93	図 54 PL.53	14 溝 上層	弥生土器 壺	※ 25.1 △ 2.2	口縁部	外面：円形浮文、4 条の沈線後キザミ 内面（上面）：2 条の凹線、波状文、ナデ、貝殻による刺突	密	外面：にぶい褐～灰黄褐色 内面：灰黄褐色	
94	図 55 PL.54	14 溝 上層	弥生土器 短頸壺	△ 10.8 △ 19.0	ほぼ完形	外面：口縁部沈線・ナデ、体部ハケ（タテ→横）後ミガキ 内面：口縁部ナデ、体部上半ハケ後ナデ・オサエ、体部下半ケズリ	密	外面：橙～褐灰色 内面：橙～褐灰色	
95	図 55 PL.54	14 溝 上層	弥生土器 壺	— △ 13.7	頸部～胴部上半	外面：ミガキ 内面：ナデ、ミガキ	密	外面：灰黄～黒褐色 内面：灰黄～黒褐色	96 と同一個体の可能性あり。表面風化
96	図 55 PL.54	14 溝 上層	弥生土器 壺	— △ 7.5	底部	外面：ミガキ、粗いナデ？ 内面：ナデ	密	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	95 と同一個体の可能性あり。表面風化
97	図 55 PL.55	14 溝 上層	弥生土器 壺または鉢	△ 5.7 △ 7.1	胴部	外面：貼付突帯、ハケ後ミガキ 内面：ケズリ後ナデ、オサエ	密	外面：黒色 内面：にぶい黄橙色	断面M字の突帯
98	図 55 PL.55	14 溝 上層	弥生土器 小型台付壺？	— △ 2.7	脚台	外面：ミガキ、ケズリ 内面：ナデ	密	外面：黄灰～黒褐色 内面：黄灰～黒褐色	
99	図 55 PL.55	14 溝 上層	弥生土器 甕または壺	— △ 2.5	底部	外面：ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：灰黄褐色	
100	図 55 PL.55	14 溝 上層	弥生土器 甕または壺	— △ 5.6	底部	外面：ミガキ、ナデ 内面：ナデ、オサエ、ケズリ	密	外面：にぶい褐色 内面：黒色	外面に工具痕。底部に種子圧痕 1 点あり
101	図 55 PL.55	14 溝 上層	弥生土器 甕または壺	— △ 5.6	底部	外面：ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：明赤灰～橙色 内面：橙～赤灰色	風化剥落により両面の調整は不明瞭
102	図 55 PL.55	14 溝 上層	弥生土器 底部	— △ 3.8	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：オサエ？	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	内面風化の為調整不明
103	図 55 PL.55	14 溝 上層	弥生土器 底部	— △ 7.0	底部	外面：ミガキ 内面：ケズリ後ナデ	密	外面：灰黄色 内面：黄褐色	
104	図 55 PL.55	14 溝 上層	弥生土器 鉢	△ 15.8 △ 3.0	口縁部	外面：ハケ後ナデ 内面：ハケ後ナデ	密	外面：黄褐色 内面：灰黄褐色	
105	図 55 PL.55	14 溝 上層	弥生土器 高坏	※ 13.0 △ 4.2	坏部	外面：ナデ、ハケ、オサエ 内面：ナデ、ハケ、ミガキ	密	外面：灰黄～黄灰色 内面：灰～黒色	
106	図 55 PL.55	14 溝 上層	弥生土器 高坏	△ 24.8 △ 5.0	坏部	外面：口縁端部キザミ、ナデ、オサエ後ミガキ 内面：ナデ、ハケ後ミガキ	密	外面：灰黄褐色 内面：灰白色	外面赤彩あり
107	図 55 PL.55	14 溝 上層	弥生土器 高坏	— △ 8.1	坏部～脚柱部	外面：杯部ミガキ、脚部 4 条の凹線後ナデ 内面：杯部ハケ後ナデ・オサエ、脚部絞り	密	外面：浅黄橙色 内面：浅黄橙色	外面風化剥落、赤彩あり
108	図 55 PL.58	14 溝 上層	弥生土器 高坏	※ 20.1 △ 6.9	坏部	外面：口縁部キザミ・ナデ、上半ケズリ後ナデ、下半ケズリ 内面：口縁部ナデ、上半ハケ・オサエ、下半ハケ後ミガキ	密	外面：暗灰黄色 内面：灰黄～黒褐色	
109	図 56 PL.58	14 溝 下層	縄文土器 粗製深鉢	※ 32.6 △ 21.0	口縁部～胴部	外面：粗いナデ、オサエ 内面：粗いナデ、オサエ	やや密	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：黄灰色	
110	図 56 PL.58	14 溝 下層	縄文土器 粗製深鉢	28.0 △ 15.9	口縁部～胴部上半	外面：粗いナデ、オサエ 内面：横ナデ、オサエ	やや密	外面：にぶい褐～黒褐色 内面：灰黄褐～黒褐色	
111	図 56 PL.58	14 溝 下層	縄文土器 浅鉢	※ 21.0 △ 7.1	口縁部～胴部上半	外面：横ナデ、オサエ 内面：横ナデ、オサエ	密	外面：褐灰色 内面：褐灰色	
112	図 57 PL.56	14 溝 最下層	縄文土器 壺	※ 13.4 △ 4.3	口縁部	外面：横ナデ 内面：口縁部 2 条の沈線、横ナデ	密	外面：褐灰色 内面：褐灰色	浅鉢変容壺
113	図 57 PL.56	14 溝 最下層	突帯文土器 深鉢	※ 14.0 △ 7.2	口縁部～胴部上半	外面：ナデ、貼付突帯、オサエ、一部ケズリ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐色 内面：黒褐色	無刻目突帯
114	図 57 PL.56	14 溝 最下層	突帯文土器 深鉢	— △ 4.7	口縁部	外面：貼付突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	やや密	外面：褐灰色 内面：褐灰色	無刻目突帯
115	図 57 PL.56	14 溝 最下層	縄文土器 壺	※ 28.8 △ 13.3	口縁部～胴部上半	外面：貝殻条痕、オサエ 内面：頸部以上貝殻条痕・オサエ、胴部ケズリ	密	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	深鉢変容
116	図 57 PL.58	14 溝 最下層	弥生土器 甕	△ 11.1 (口縁部) 6.3 (底部) 5.2	口縁部 底部	外面：口縁部ナデ、頸～肩部ハケ、底部ミガキ 内面：口縁～肩部ナデ、底部ミガキ	密	外面：にぶい黄橙色～黒色(漆) 内面：にぶい黄橙色～黒色(漆)	内外面漆塗（外面は大半が剥離）。頸部に 2 か所穿孔
117	図 57 PL.56	14 溝 最下層	弥生土器 ミニチュア 甕	※ 4.5 7.3	ほぼ完形	外面：ハケ、工具によるタテ方向のナデ、ナデ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	無頸
118	図 57 PL.56	14 溝 最下層	弥生土器 甕	— △ 6.6	底部	外面：ハケ、ナデ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙～黒褐色	
119	図 57 PL.56	14 溝 最下層	縄文土器 深鉢？	— △ 5.5	底部	外面：ハケ状工具ナデ、ナデ 内面：風化により調整不明	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
120	図 57 PL.56	14 溝 最下層	弥生土器 壺	※ 14.3 △ 11.8	口縁部～肩部	外面：ミガキ、オサエ、黒斑 内面：ミガキ、ナデ	密	外面：にぶい橙～黒色 内面：にぶい黄橙色	遠賀川式

表 14　土器観察表（５）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
121	図 57 PL.58	14 溝 最下層	弥生土器 蓋	6.0 9.0		外面：ナデ（風化で不明瞭、ハケの可能性あり）、オサエ、ハケ 内面：板状工具ナデ	密	外面：灰黄～黄灰色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	
122	図 65 PL.62	34 溝	弥生土器 底部	— △ 4.9	底部	外面：ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：橙色 内面：にぶい黄橙色～褐灰色	全体的に風化が著しい
123	図 65 PL.62	34 溝	弥生土器 甕	— △ 4.3	底部	外面：ハケ後ナデ 内面：ハケ、ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：灰黄～黄灰色	焼成後穿孔
124	図 66 PL.61	35 溝	弥生土器 脚付無頸壺	10.1 △ 13.6	口縁部～底部	外面：口縁部貼付刻目突帯・ナデ、体部上半刺突文・櫛描文・円形浮文、体部下半ミガキ 内面：口縁部貼付突帯、ナデ、オサエ	密	外面：黒褐～にぶい黄橙色 内面：黒褐～にぶい黄橙色	口縁に２か所焼成前穿孔。口縁端部（外面）の貼付部分が欠損、内面は残存
125	図 68 PL.62	37 土坑	縄文土器 深鉢	※ 20.2 △ 7.1	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄橙色	
126	図 68 PL.62	37 土坑	縄文土器 深鉢	— △ 7.7	胴部	外面：貝殻条痕、工具ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙色～褐灰色 内面：にぶい黄橙色	
127	図 70 PL.63	19 溝 最下層	縄文土器 深鉢	— △ 2.4	体部	外面：爪形刺突文、ナデ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄褐色	C 字形爪形文
128	図 70 PL.63	19 溝	縄文土器 深鉢	— △ 4.0	体部	外面：沈線、RL 縄文 内面：ナデ	やや密		
129	図 70 PL.63	19 溝	縄文土器 深鉢	— △ 7.6	口縁部	外面：沈線 内面：ナデ	やや密		
130	図 70 PL.63	19 溝	縄文土器 浅鉢	— △ 5.4	口縁部	外面：丁寧なナデ 内面：丁寧なナデ、オサエ	密	外面：黒褐色 内面：黒褐色	
131	図 70 PL.63	19 溝	縄文土器 粗製深鉢	△ 6.5 △ 6.9	口縁部	外面：貝殻条痕、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや密	外面：灰黄褐～黄褐色 内面：にぶい黄～黄灰色	外面に風化が激しい
132	図 70 PL.63	19 溝	縄文土器 粗製深鉢	△ 4.4 △ 5.1	口縁部	外面：貝殻条痕 内面：オサエ、ケズリ	密	外面：灰黄褐～黒色 内面：灰黄褐～黒褐色	
133	図 70 PL.63	19 溝	弥生土器 甕	△ 25.6 △ 5.2	口縁部	外面：口縁端部キザミ、頸部３条の沈線、ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ、ハケ、一部ミガキ	密	外面：黒色 内面：にぶい黄褐色	
134	図 70 PL.63	19 溝 下層	弥生土器 甕	※ 20.0 △ 3.2	口縁部	外面：口縁端部キザミ、頸部４条の沈線、ナデ、オサエ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
135	図 70 PL.63	19 溝	弥生土器 甕	△ 29.8 △ 4.3	口縁部	外面：口縁端部キザミ、ナデ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
136	図 70 PL.63	19 溝	弥生土器 甕	※ 19.9 △ 6.7	口縁部	外面：口縁部横ナデ、体部ハケ 内面：口縁部横ナデ、体部ハケ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
137	図 70 PL.63	19 溝	弥生土器 甕	△ 16.4 △ 6.6	口縁部	外面：口縁部横ナデ、体部ハケ 内面：ナデ	密	外面：橙色 内面：橙～にぶい黄橙色	内外面赤彩
138	図 70 PL.62	19 溝	弥生土器 甕	※ 17.4 32.0	口縁部～底部	外面：口縁部キザミ（二枚貝腹縁）、体部ハケ後ミガキ、肩部に二枚貝腹縁刺突文 内面：口縁部ナデ、体部上半ハケ後ナデ・オサエ、体部下半ケズリ	密	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄橙～黒褐色	外面赤彩の可能性あり
139	図 70 PL.63	19 溝	弥生土器 甕	— △ 3.2	口縁部	外面：頸部貼付刻目突帯、ハケ、刺突文（巻貝先端） 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
140	図 70 PL.63	19 溝	弥生土器 甕	△ 17.0 △ 2.1	口縁部	外面：２条の凹線、ナデ 内面：ナデ	密	外面：黒色 内面：暗褐色	
141	図 70 PL.63	19 溝	弥生土器 壺	— △ 5.9	頸部	外面：ハケ 内面：不明	密	外面：にぶい黄橙色 内面：灰黄褐色	遠賀川式。風化剥落
142	図 70 PL.63	19 溝	弥生土器 壺	— △ 6.6	頸部	外面：頸部貼付突帯、ハケ 内面：ハケ？	密	外面：灰白～灰黄褐色 内面：にぶい黄橙色	内面風化顕著
143	図 70 PL.63	19 溝	弥生土器 短頸壺	△ 9.4 △ 3.8	口縁部	外面：口縁端キザミ、ナデ 内面：ハケ後ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	風化剥落。赤彩あり
144	図 70 PL.63	19 溝	弥生土器 無頸壺	※ 9.5 △ 4.5	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ、ハケ、オサエ	密	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙～にぶい黄橙色	外面風化著しい
145	図 70 PL.63	19 溝	弥生土器 壺	※ 17.0 △ 3.3	口縁部	外面：口縁端キザミ（不明瞭）、ハケ 内面：ナデ	密	外面：にぶい橙～にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	全体的に風化の為不明瞭
146	図 70 PL.62	19 溝	弥生土器 壺	※ 11.0 △ 25.9	口縁部～胴部	外面：口縁～頸部ナデ（横ミガキの可能性あるが風化のため不明）、胴部上半ハケ後ナデ（風化）、胴部下半ヘラミガキ 内面：口縁～頸部ナデ、胴部ケズリ後ヘラミガキ	密	外面：灰黄～にぶい黄褐色 内面：灰黄～にぶい黄色	
147	図 71 —	19 溝	弥生土器 甕または壺	— △ 8.5	底部	外面：ハケ後ミガキ、ナデ 内面：ハケ、ケズリ後ナデ	密	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：にぶい黄橙～黒色	

表15　土器観察表（6）

遺物No.	挿図PL	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
148	図71 —	19溝	弥生土器 甕？	— △	底部	外面：ナデ後ヘラミガキ、ナデ、オサエ 内面：粗いナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
149	図71 PL.63	19溝	弥生土器 甕または壺	— △4.5	底部	外面：ヘラミガキ 内面：オサエ	密	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄橙色	内面風化剥落
150	図71 PL.62	19溝	弥生土器 壺または甕	— △4.2	底部	外面：ハケ、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：明橙～灰褐色 内面：灰黄褐～黒色	
151	図71 PL.63	19溝	弥生土器 甕または壺	— △3.3	底部	外面：ハケ後ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：明黄色 内面：褐灰～にぶい黄橙色	
152	図71 PL.63	19溝 下層	弥生土器 壺	— △4.5	底部	外面：ナデ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：黄灰色	高台底
153	図71 PL.63	19溝	弥生土器 小型甕または壺	△3.4 △1.9	底部	外面：風化により調整不明 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：暗灰色	底部の両面から穿孔
154	図71 PL.63	19溝	弥生土器 高坏	△24.0 △0.9	口縁部	外面：ナデ 内面：ミガキ、ナデ	密	外面：黒～黄褐色 内面：にぶい黄橙色	
155	図71 PL.63	19溝	弥生土器 高坏または台付壺	— △7.0	坏部～脚部	外面：ヘラミガキ、ナデ（風化の為不明瞭） 内面：ヘラミガキ、脚部絞り目	密	外面：黄灰色 内面：灰黄褐～褐灰色	円盤充填剥落
156	図73 PL.65	18溝	弥生土器 甕	△28.0 △17.5	口縁部～胴部上半	外面：口縁端部キザミ、頸部3条の沈線、ハケ 内面：ハケ、オサエ	密	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄橙色	遠賀川式
157	図73 PL.65	18溝	弥生土器 壺	△6.0 △7.4	肩部	外面：沈線、ハケ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐～黒褐色 内面：灰黄褐～黒褐色	
158	図76 PL.65	26溝	弥生土器 無頸壺	※12.2 △2.6	口縁部	外面：ナデ、ハケ 内面：ナデ	密	外面：黒色 内面：にぶい黄橙色	
159	図76 PL.65	26溝	弥生土器 甕または壺	— △3.2	底部	外面：ナデ、ミガキ 内面：ハケ、オサエ	密	外面：にぶい黄～黒色 内面：橙色	
160	図80 PL.66	28溝	縄文土器 深鉢	△2.9 △5.4	口縁部	外面：ナデ 内面：端部に沈線、ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：灰黄～褐灰色	
161	図80 PL.66	28溝	縄文土器 浅鉢	※17.7 △5.9	口縁部	外面：ナデ、工具ナデ、オサエ、横ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：浅黄～黒褐色 内面：黄褐～黒褐色	
162	図80 PL.66	28溝	突帯文土器 深鉢	△3.9 △3.1	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐～にぶい黄橙色 内面：灰黄褐色	
163	図80 PL.66	28溝	縄文土器 浅鉢	— △4.9	底部	外面：ナデ、貝殻条痕 内面：ケズリ後ナデ	やや密	外面：褐灰～灰黄色 内面：灰黄褐～褐灰色	
164	図80 PL.66	28溝	弥生土器 甕	※16.4 △3.6	口縁部	外面：口縁端部キザミ、体部ハケ 内面：ナデ	密	外面：浅黄～黒褐色 内面：灰黄～黄灰色	口縁部端部に刻み赤彩あり
165	図80 PL.66	28溝	弥生土器 壺	※21.0 △2.0	口縁部	外面：4条の凹線後ヘラ状工具によるキザミ 内面：ナデ	密	外面：黄褐色 内面：灰黄色	
166	図80 —	28溝	縄文土器 深鉢	— △4.5	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	凹底（高台状）
167	図80 —	28溝	弥生土器 甕	— △5.1	底部	外面：ナデ、工具痕 内面：ケズリ後ナデ、オサエ	密	外面：灰白～黄灰色 内面：にぶい黄～黒褐色	底面に圧痕
168	図80 PL.66	28溝 最下層	縄文土器 粗製深鉢	※28.0 △6.5	口縁部	外面：工具ナデ後ナデ 内面：工具ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙～にぶい黄褐色	
169	図80 PL.66	28溝 最下層	縄文土器 注口土器	△21.0 △7.1	注口部分	外面：オサエ、丁寧なナデ 内面：粗いナデ	やや密	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：黒褐色	
170	図80 PL.66	28溝 最下層	縄文土器 深鉢	— △2.5	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：調整不明	やや粗	外面：にぶい黄色 内面：灰黄色	凹底
171	図80 PL.66	28溝 最下層	弥生土器 甕	△5.2 △7.4	口縁部	外面：ミガキ、オサエ 内面：ミガキ、オサエ	密	外面：黄褐色 内面：黄褐色	
172	図80 PL.66	28溝 最下層	弥生土器 甕	△4.8 △5.1	口縁部	外面：ハケ、ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ、ハケ	密	外面：暗灰黄～黄褐色 内面：暗灰黄～黄褐色	
173	図80 PL.66	28溝 最下層	弥生土器 甕	△3.7 △2.0	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ	密	外面：黒褐色 内面：灰黄褐色	
174	図80 PL.66	28溝 最下層	弥生土器 甕	△5.6 △2.4	口縁部	外面：口縁端部にキザミ、ナデ 内面：ナデ	密	外面：灰黄～褐色 内面：にぶい黄～明黄褐色	
175	図80 PL.66	28溝 最下層	弥生土器 壺	※23.2 △4.3	肩部	外面：頸部に3条の沈線、肩部に貼付突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
176	図80 PL.66	28溝 最下層	弥生土器 壺	※37.4 △19.2	胴部	外面：4条の沈線、ミガキ（磨滅によりやや不鮮明）、ミガキ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい橙～灰黄褐色 内面：にぶい黄～黒褐色	
177	図80 PL.65	36溝	縄文土器 深鉢	— △3.7	口縁部	外面：LR縄文、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	

表 16　土器観察表（7）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
178	図 80 PL.65	36 溝	弥生土器 甕	— △ 4.1	頸部？	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙色～褐灰色 内面：にぶい黄橙色	
179	図 86 PL.69	29 土坑	弥生土器 無頸壺	— △ 4.4	口縁部	外面：刺突文、4 条の凹線 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄橙～にぶい橙色	
180	図 88 PL.70	27 溝	縄文土器 深鉢	△ 5.8 △ 7.0	口縁部	外面：口縁部に半裁竹管による押引文・平行沈線、貝殻条痕 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄褐色 内面：明黄褐～褐灰色	船元Ⅲ式
181	図 88 PL.70	27 溝	縄文土器 深鉢	※ 16.2 △ 2.5	口縁部	外面：端部に縄文、ミガキ 内面：ナデ	密	外面：黒褐色 内面：黒褐～黄褐色	
182	図 88 PL.70	27 溝	縄文土器 深鉢	※ 27.0 △ 5.3	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黄灰～黒色 内面：灰黄色	
183	図 88 PL.70	27 溝	縄文土器 浅鉢	※ 30.6 △ 8.8		外面：ミガキ、オサエ 内面：ナデ、ミガキ、オサエ	密	外面：黄灰色～黒褐色 内面：黄灰色～黒褐色	
184	図 88 PL.70	27 溝	突帯文土器 深鉢	△ 24.0 △ 11.2	口縁部～胴部上半	外面：口縁貼付刻目突帯、頸部ナデ・オサエ、胴部工具ナデ 内面：丁寧な横ナデ、オサエ	密	外面：黄褐～黒色 内面：黄橙～黒色	
185	図 88 PL.70	27 溝	突帯文土器 深鉢	※ 22.1 △ 4.3	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、粗いナデ	密	外面：灰黄褐～黒褐色 内面：灰黄褐～黒褐色	
186	図 88 PL.70	27 溝	突帯文土器 深鉢	※ 25.3 △ 5.2	口縁部	外面：貼付刻目突帯、工具ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰～黒褐色 内面：灰～黒褐色	
187	図 88 PL.70	27 溝	突帯文土器 深鉢	※ 22.1 △ 5.9	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黄灰～灰黄褐色 内面：黄灰～黒褐色	
188	図 88 PL.70	27 溝	突帯文土器 深鉢	△ 5.7 △ 3.7	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄～黒褐色 内面：黄灰色	
189	図 88 PL.70	27 溝	突帯文土器 深鉢	△ 5.6 △ 4.6	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：工具ナデ、オサエ	密	外面：黄褐～黒色 内面：暗灰黄～黒色	
190	図 88 PL.70	27 溝	突帯文土器 深鉢	△ 3.5 △ 4.4	口縁部	外面：貼付刻目突帯、横ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄～黒色 内面：灰黄色～黄灰色	
191	図 88 PL.70	27 溝	突帯文土器 深鉢	△ 4.9 △ 4.0	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
192	図 88 PL.70	27 溝	突帯文土器 深鉢	△ 4.6 △ 3.0	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒色 内面：黒褐色	
193	図 88 PL.70	27 溝	突帯文土器 深鉢	— △ 3.3	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
194	図 88 PL.70	27 溝	突帯文土器 深鉢	△ 4.5 △ 3.1	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄褐色	
195	図 88 PL.70	27 溝	突帯文土器 深鉢	△ 4.8 △ 3.5	口縁部	外面：貼付刻目突帯、刺突、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰オリーブ色 内面：暗灰黄色	
196	図 88 PL.70	27 溝	突帯文土器 深鉢	— △ 3.4	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ	密	外面：褐灰～黒褐色 内面：褐灰～黒褐色	
197	図 88 PL.70	27 溝	突帯文土器 深鉢	— △ 4.3	底部	外面：粗いナデ 内面：ケズリ後ナデ	密	外面：灰黄褐～黒褐色 内面：黒褐色	尖底。外面に種子圧痕
198	図 88 PL.70	27 溝	突帯文土器 深鉢	— △ 5.0	底部	外面：ミガキ 内面：ミガキ	密	外面：灰黄～黒褐色 内面：灰黄～黒褐色	尖底。内面に種子圧痕
199	図 88 PL.70	27 溝	突帯文土器 深鉢	※ 13.6 △ 11.4	口縁部～胴部上半	外面：３条の貼付刻目突帯、X 字状の沈線文、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒色 内面：にぶい黄橙色	
200	図 88 PL.70	27 溝	弥生土器 甕	※ 10.0 △ 7.9	口縁部～胴部上半	外面：口縁部貼付刻目突帯・穿孔（外面から）、瘤状突起貼付、ナデ 内面：ナデ、オサエ、一部ハケ	密	外面：灰黄褐色～黒褐色 内面：灰黄褐色	
201	図 88 PL.70	27 溝	底部	— △ 3.3	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄橙～明黄褐色	縄文深鉢の可能性あり 風化剥落、底部外面に種子圧痕
202	図 88 PL.70	27 溝	弥生土器 甕	— △ 4.1	胴部	外面：沈線、ハケ、ナデ 内面：ハケ、ナデ	密	外面：にぶい褐～黒褐色 内面：にぶい黄褐～灰色	遠賀川式
203	図 88 PL.70	27 溝	弥生土器 甕	△ 5.5 △ 7.7	口縁部	外面：5 条の沈線、風化のため調整不明 内面：ナデ、オサエ	やや密	外面：浅黄橙～黄灰色 内面：黄灰～黒色	
204	図 88 PL.73	27 溝	弥生土器 甕	— △ 15.0	胴部下半～底部	外面：ハケ、ナデ 内面：ハケ後ナデ、オサエ	密	外面：にぶい茶褐～灰褐～明赤褐色 内面：黒褐色	
205	図 89 PL.71	27 溝	弥生土器 壺	— △ 11.5	頸部～胴部	外面：ハケ後ミガキ、頸部に 2 条の沈線 内面：ミガキ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	
206	図 89 PL.71	27 溝	弥生土器 壺	— △ 8.5	頸部	外面：ミガキ、頸部に段 内面：ナデ、オサエ	密	外面：橙～にぶい黄橙色 内面：にぶい橙色	遠賀川式
207	図 89 PL.71	27 溝	弥生土器 壺	— △ 8.3	頸部	外面：ミガキ、頸部に段 内面：貝殻条痕→ハケ後ナデ、オサエ	密	外面：明黄褐～黒色 内面：にぶい黄橙色	遠賀川式 風化剥落

表 17　土器観察表（８）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
208	図 89 PL.71	27 溝 22 落ち込み	弥生土器 壺	— △ 8.0	頸部	外面：ハケ後ミガキ､下端部沈線（突帯剥落？） 内面：ハケ	密	外面：灰黄～黒色 内面：灰白色	遠賀川式 種子圧痕内面に１点（イネか）、外面に１点
209	図 89 PL.71	27 溝	弥生土器 壺	— △ 5.4	肩部	外面：ミガキ（風化により不明瞭）、頸部に削り出し突帯 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄褐～黒褐色	
210	図 89 PL.71	27 溝	弥生土器 壺	— △ 4.3	肩部	外面：２条の貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄褐色 内面：黒褐～黄褐色	
211	図 89 PL.71	27 溝	弥生土器 壺	— △ 7.3	肩部	外面：ミガキ、４条の沈線 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒褐色～明黄褐色 内面：にぶい黄橙色	
212	図 89 PL.71	27 溝	弥生土器 壺	— △ 5.8	頸部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ミガキ、ナデ	密	外面：褐灰～灰黄褐色 内面：褐灰～暗灰黄色	
213	図 89 PL.71	27 溝	弥生土器 壺	— △ 6.4	頸部	外面：ミガキ、４条の凹線 内面：ナデ、ケズリ後ナデ、オサエ	密	外面：褐灰色 内面：にぶい黄褐色	
214	図 89 PL.72	27 溝	弥生土器 壺	— △ 7.0	胴部下半～底部	外面：ミガキ、オサエ 内面：ミガキ、オサエ	密	外面：黄褐～灰黄褐色 内面：灰黄褐色	遠賀川式
215	図 89 PL.72	27 溝	弥生土器 壺	— △ 9.0	底部	外面：ミガキ 内面：ハケ後ナデ	密	外面：にぶい橙色 内面：灰黄褐色	内面種子圧痕
216	図 89 PL.72	27 溝	弥生土器 壺	— △ 5.2	底部	外面：ハケ、ミガキ、ケズリ 内面：ナデ、ハケ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：黒褐色	
217	図 89 PL.72	27 溝	弥生土器 甕または壺	— △ 4.8	底部	外面：ハケ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	両面に種子圧痕
218	図 89 PL.72	27 溝	弥生土器 甕または壺	— △ 4.3	底部	外面：ハケ、ナデ 内面：ナデか（風化の為不明瞭）	密	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：浅黄橙色	
219	図 89 PL.72	27 溝	弥生土器 甕または壺	— △ 5.8	底部	外面：ナデ後ミガキ、オサエ 内面：ケズリ後ナデ、オサエ	密	外面：にぶい褐～灰褐～にぶい橙～にぶい赤褐色 内面：にぶい橙色	
220	図 89 PL.72	27 溝	弥生土器 甕または壺	— △ 3.6	底部	外面：ハケ後ナデ 内面：オサエ	密	外面：褐灰色 内面：灰白色	
221	図 89 PL.72	27 溝	弥生土器 甕または壺	— △ 5.4	底部	外面：ハケ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい橙～灰褐色 内面：明赤褐～黒褐色	
222	図 89 PL.72	27 溝	弥生土器 甕	— △ 7.7	底部	外面：ハケ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄橙～黒色	
223	図 89 PL.72	27 溝	弥生土器 壺	— △ 4.6	底部	外面：ナデ 内面：ハケ、ナデ、オサエ	密	外面：橙色～灰黄褐色 内面：橙色～灰黄褐色	
224	図 89 PL.72	27 溝	弥生土器 壺	— △ 2.7	底部	外面：ハケ、ナデ 内面：ナデ（一部ハケが薄く残る）	密	外面：にぶい黄橙色 内面：橙色	
225	図 89 PL.73	27 溝	弥生土器 鉢	※ 13.6 8.8	完形	外面：口縁端部にキザミ、ナデ後ミガキ 内面：ミガキ	密	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄橙色	
226	図 91 PL.73	33 溝	縄文土器 深鉢	— △ 8.2	頸部	外面：貝殻条痕 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙色～褐灰色 内面：にぶい黄橙色	
227	図 91 PL.73	33 溝	縄文土器 深鉢	— △ 10.1	口縁部～胴部上半	外面：ナデ 内面：ナデ、ミガキ	密	外面：黒褐色 内面：褐灰色	
228	図 91 PL.73	33 溝？	縄文土器 深鉢	— △	口縁部～胴部上半	外面：ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	
229	図 91 PL.73	33 溝	縄文土器 浅鉢	※ 11.3 △ 8.5	口縁部～胴部	外面：工具ナデ後ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：褐灰色 内面：暗灰黄色	
230	図 91 PL.73	33 溝？	弥生土器 壺	— △ 4.8	肩部	外面：ミガキ後ナデ、５条の沈線 内面：風化の為調整不明	密	外面：にぶい黄褐色 内面：褐灰色	
231	図 91 PL.73	33 溝	弥生土器 蓋	※ 22.2 12.5	ほぼ完形	外面：ナデ・オサエ後ミガキ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒褐色 内面：橙色～褐灰色	
232	図 94 PL.73	1 土坑 1 層	縄文土器 深鉢	— △ 5.3	胴部	外面：ナデ 内面：ケズリ後丁寧なナデ	密	外面：黒褐～黒色 内面：黒褐色	
233	図 115 —	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	— △ 7.0	胴部	外面：刺突文（貝殻腹縁）文、ナデ 内面：貝殻条痕後ナデ	やや密	外面：橙～黒色 内面：にぶい褐色	
234	図 115 —	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	— △ 2.4	胴部か	外面：半裁竹管連続刺突文、ナデ 内面：ナデ	やや密	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄橙色	
235	図 115 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	— △ 2.9	口縁部	外面：口縁端にキザミ、貝殻条痕 内面：貝殻条痕後ナデ	やや密	外面：黄灰色 内面：黄灰色	
236	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	— △ 7.3	口縁部	外面：貼付突帯＋爪形文、RL 縄文 内面：口縁端 RL 縄文、横ナデ、オサエ	粗 (砂礫多)	外面：明黄褐～黒色 内面：明黄褐～黒色	鷹島式
237	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 4.8 △ 3.7	口縁部	外面：RL 縄文？（風化） 内面：口縁端 RL 縄文、ナデ	やや粗	外面：灰黄褐～黒褐色 内面：褐灰～黒褐色	船元Ⅰ式
238	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 3.9 △ 2.9	口縁部	外面：RL 縄文、ナデ 内面：貼付隆帯→ RL 縄文	やや粗	外面：褐灰～黒褐色 内面：褐灰～黒褐色	船元Ⅰ式

表 18　土器観察表（９）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
239	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 10.7 △ 7.8	口縁部	外面：LR ？縄文、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：褐灰～にぶい黄橙色 内面：褐灰～にぶい黄橙色	船元式
240	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 7.5 △ 4.8	胴部	外面：RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：灰黄褐～黒褐色 内面：灰黄褐～黒褐色	船元Ⅰ式
241	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 4.3 △ 2.7	胴部	外面：爪形文 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄橙～黒色	船元Ⅰ式
242	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 12.5 △ 6.5	胴部	外面：RL 縄文、平行沈線文 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	船元Ⅲ式
243	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 7.2 △ 6.0	胴部	外面：縄文→平行沈線文 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：灰黄褐色 内面：黒褐色	船元Ⅲ式
244	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	— △ 7.1	口縁部	外面：半裁竹管による押引文、RL 縄文 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	船元式
245	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	— △ 4.5	口縁部	外面：半裁竹管による押引文、ナデ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	船元式
246	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	— △ 2.1	口縁部	外面：貼付突帯＋押引文、RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：褐灰色 内面：灰黄褐色	船元式
247	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 3.3 △ 3.3	口縁部	外面：RL 縄文 内面：横ナデ、オサエ	やや粗	外面：にぶい橙～褐灰色 内面：にぶい橙～褐灰色	船元式
248	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 5.0 △ 4.5	口縁部	外面：RL 縄文 内面：ナデ、オサエ	粗	外面：明黄褐～褐灰色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	船元式
249	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 5.8 △ 4.6	口縁部	外面：RL 縄文 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：灰オリーブ～灰白色 内面：浅黄～黒褐色	船元式
250	図 116 —	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 5.7 △ 7.1	口縁部	外面：RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：明黄褐～灰黄褐色 内面：黄褐～灰黄褐色	船元式
251	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 3.8 △ 4.3	口縁部	外面：RL 縄文 内面：貼付突帯、ナデ	粗	外面：黒褐～黒色 内面：黒褐～黒色	船元式
252	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 4.5 △ 2.4	胴部	外面：縄文→平行沈線文 内面：ナデ	やや粗	外面：褐灰色 内面：黄灰色	船元式
253	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	— △ 4.4	胴部	外面：貝殻条痕 内面：粗いナデ	やや粗	外面：褐灰色 内面：灰黄褐色	
254	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	— △ 2.6	底部	外面：縄文、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：黄灰～暗灰黄色 内面：黒褐色	凹底
255	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	— △ 4.2	底部	外面：縄文、キザミ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：にぶい橙～にぶい褐色 内面：灰黄～にぶい黄褐色	凹底（高台状）
256	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	— △ 2.6	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：オサエ	やや粗	外面：にぶい黄橙～黄灰色 内面：橙～灰黄色	凹底（高台状）
257	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	— △ 3.9	底部	外面：貝殻条痕、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：にぶい黄橙色 内面：灰黄褐～明黄褐色	凹底（高台状）
258	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	— △ 3.4	底部	外面：タテ方向のナデ、オサエ 内面：オサエ、工具ナデ	やや粗	外面：暗灰黄色 内面：灰黄～明黄褐色	凹底
259	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	— △ 1.9	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：オサエ	やや粗	外面：にぶい黄色 内面：灰黄色	
260	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 3.6 △ 3.4	底部	外面：ナデ、条線 内面：オサエ	やや粗	外面：灰黄色 内面：灰黄色	角底。端部に突起
261	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	— △ 3.7	口縁部	外面：ナデ、沈線 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	口縁部に突起
262	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 5.3 △ 3.0	口縁部	外面：ナデ、沈線 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄褐～にぶい黄橙色 内面：にぶい黄褐～にぶい黄橙	口縁部に突起
263	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 6.7 △ 5.1	口縁部	外面：ケズリ状 内面：工具ナデ	やや密	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：にぶい黄橙～黒色	後晩期粗製土器
264	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 7.4 △ 6.4	口縁部	外面：粗いナデ 内面：粗いナデ	やや密	外面：灰黄褐～黒色 内面：にぶい黄橙～黒色	後晩期粗製土器
265	図 116 PL.74	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 5.2 △ 4.3	口縁部	外面：貝殻条痕 内面：貝殻条痕	やや密	外面：にぶい褐～にぶい橙色 内面：にぶい黄橙～黒褐色	後晩期粗製土器
266	図 117 PL.75	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 6.8 △ 7.2	頸部	外面：ナデ、屈曲部に沈線 内面：ナデ	密	外面：灰黄褐色 内面：黒色	
267	図 117 PL.75	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 8.1 △ 11.6	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	
268	図 117 PL.75	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 4.4 △ 4.6	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒色 内面：黒褐色	
269	図 117 PL.75	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 5.6 △ 5.9	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒～黄褐色 内面：灰黄褐色	
270	図 117 PL.75	4 溝 上層	縄文土器 深鉢	△ 6.2 △ 4.8	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄褐色	

表19　土器観察表（10）

遺物No.	挿図PL	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
271	図117 PL.75	4溝 上層	縄文土器 深鉢	△4.7 △4.6	口縁部	外面：工具ナデ 内面：工具ナデ	密	外面：黒色 内面：暗灰黄色	
272	図117 PL.75	4溝 上層	縄文土器 深鉢	△4.7 △7.0	口縁部	外面：口縁端部キザミ、ナデ、貝殻条痕 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黄灰色 内面：黒褐色	
273	図117 PL.75	4溝 上層	縄文土器 深鉢	△6.9 △3.4	口縁部	外面：口縁端部粘土貼付・キザミ、工具ナデ 内面：工具ナデ	密	外面：黒褐色 内面：黒褐色	
274	図117 PL.75	4溝 上層	縄文土器 深鉢	△9.5 △4.3	口縁部	外面：口縁端部キザミ、工具ナデ 内面：オサエ、丁寧なナデ	密	外面：灰色 内面：黒褐色	
275	図117 PL.75	4溝 上層	縄文土器 深鉢	△4.9 △3.6	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒色 内面：黒色	
276	図117 PL.75	4溝 上層	縄文土器 深鉢	△4.4 △6.3	頸部	外面：板状工具による連続刺突、ナデ 内面：工具ナデ、ナデ	密	外面：黒褐色 内面：黒色	
277	図117 PL.75	4溝 上層	縄文土器 深鉢	△33.2 △19.0	口縁部～ 胴部上半	外面：工具ナデ、オサエ 内面：工具ナデ、オサエ	密	外面：明黄褐～黒色 内面：にぶい黄褐～黒褐色	
278	図117 PL.75	4溝 上層	縄文土器 深鉢	△34.4 △18.0	口縁部～ 胴部上半	外面：工具ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：暗灰黄色 内面：黒褐色	
279	図118 PL.76	4溝 上層	縄文土器 深鉢	— △2.5	口縁部	外面：口縁端部にキザミ、刻目突帯、ナデ 内面：ナデ	密	外面：にぶい褐～灰黄褐色 内面：にぶい褐～灰黄褐色	口縁部が二股に分かれる
280	図118 PL.76	4溝 上層	縄文土器 深鉢	— △	口縁部	外面：口縁端部にキザミ、貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：褐灰色 内面：褐灰色	
281	図118 PL.76	4溝 上層	縄文土器 深鉢	— △3.7	口縁部	外面：口縁端部にキザミ、貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：褐灰色 内面：褐灰色	
282	図118 PL.76	4溝 上層	縄文土器 深鉢	— △5.7	口縁部	外面：貼付刻目突帯、粗いナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰～黒褐色 内面：灰～黒褐色	指による刻目。補修孔あり
283	図118 PL.76	4溝 上層	縄文土器 深鉢	— △2.8	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒褐色 内面：褐灰～黄灰色	指による刻目
284	図118 PL.75	4溝 上層	縄文土器 深鉢	※30.2 △24.6	口縁部 ～胴部	外面：貼付刻目突帯、粗いナデ 内面：粗いナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐～黒褐色 内面：灰黄褐～黒褐色	
285	図118 PL.76	4溝 上層	縄文土器 深鉢	※29.0 △5.5	口縁部	外面：貼付刻目突帯、粗いナデ、オサエ 内面：粗いナデ、オサエ	密	外面：にぶい褐～黒褐色 内面：黒褐色	指による刻目
286	図118 PL.76	4溝 上層	縄文土器 深鉢	※23.5 △5.1	口縁部	外面：貼付刻目突帯、粗いナデ 内面：粗いナデ	密	外面：褐灰～灰黄褐色 内面：黒褐～灰黄褐色	
287	図118 PL.76	4溝 上層	縄文土器 深鉢	※17.7 △5.1	口縁部	外面：貼付刻目突帯、粗いナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐～黒褐色 内面：にぶい黄褐～黒褐色	
288	図118 PL.75	4溝 上層	突帯文土器 浅鉢	※25.6 △9.3	口縁部	外面：貼付刻目突帯、粗いナデ、工具ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：褐灰～黒褐色 内面：褐灰～黒褐色	指による刻目
289	図118 PL.76	4溝 上層	突帯文土器 深鉢	※24.4 △4.1	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒褐色 内面：灰黄褐～黒褐色	
290	図118 PL.76	4溝 上層	突帯文土器 深鉢	※21.2 △6.7	口縁部	外面：貼付刻目突帯、粗いナデ、オサエ 内面：粗いナデ、オサエ	密	外面：黄灰～黒褐色 内面：褐灰～黒褐色	突帯が途中で途切れる
291	図118 PL.76	4溝 上層	突帯文土器 深鉢	※20.7 △5.9	口縁部	外面：貼付刻目突帯、粗いナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐～黒褐色 内面：灰黄褐～黒褐色	
292	図118 PL.76	4溝 上層	突帯文土器 深鉢	※23.3 △3.9	口縁部	外面：貼付刻目突帯、粗いナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐～黒褐色 内面：灰黄褐～黒褐色	
293	図118 PL.76	4溝 上層	突帯文土器 深鉢	— △11.9	口縁部～ 胴部上半	外面：貼付刻目突帯、粗いナデ、オサエ 内面：粗いナデ、オサエ	密	外面：黒褐色 内面：黄灰色	
294	図118 PL.76	4溝 上層	突帯文土器 深鉢	— △2.3	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ	密	外面：黒褐色 内面：黒褐色	指（爪）による刻目
295	図118 PL.76	4溝 上層	突帯文土器 深鉢	— △3.3	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰色 内面：灰色	
296	図118 PL.76	4溝 上層	突帯文土器 深鉢	— △4.8	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ	密	外面：黒色 内面：黒褐色	
297	図118 PL.76	4溝 上層	突帯文土器 深鉢	— △5.1	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ハケ状の工具ナデ	密	外面：黒褐色 内面：暗褐色	指による刻目
298	図118 PL.76	4溝 上層	突帯文土器 深鉢	— △2.5	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐色 内面：褐灰色	
299	図118 PL.76	4溝 上層	突帯文土器 深鉢	— △5.6	口縁部	外面：貼付刻目突帯、粗いナデ、オサエ 内面：粗いナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄褐～黒褐色 内面：にぶい黄褐～黒褐色	
300	図118 PL.76	4溝 上層	突帯文土器 深鉢	— △3.9	口縁部	外面：貼付刻目突帯、粗いナデ、オサエ 内面：粗いナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	指による刻目
301	図118 PL.76	4溝 上層	突帯文土器 深鉢	— △4.5	口縁部	外面：貼付刻目突帯、粗いナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	
302	図118 PL.76	4溝 上層	突帯文土器 浅鉢	※11.5 △6.3	口縁部～ 胴部上半	外面：貼付刻目突帯、タテケズリ後粗い横ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黄灰～黒褐色 内面：黄灰～黒褐色	小型

表 20　土器観察表（11）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
303	図 118	4 溝	突帯文土器	—	胴部	外面：胴部に貼付刻目突帯、ナデ	密	外面：にぶい黄橙色	二条突帯の可能性あり
	PL.76	上層	深鉢	△ 4.7		内面：ナデ、オサエ		内面：にぶい黄橙色	
304	図 118	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：横ナデ、貼付突帯	密	外面：褐灰色	無刻目突帯
	—	上層	浅鉢	△ 3.9		内面：横ナデ		内面：褐灰色	
305	図 118	4 溝	突帯文土器	—	口縁部	外面：貼付突帯、ナデ	密	外面：黄灰色	無刻目突帯
	PL.76	上層	深鉢	△ 2.8		内面：ナデ		内面：褐灰色	
306	図 119	4 溝	縄文土器	※ 18.0	ほぼ完形	外面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐～褐灰色	
	PL.77	上層	浅鉢	7.8		内面：横ナデ、オサエ、下半ヘラ状工具ナデ		内面：灰黄褐色	
307	図 119	4 溝	縄文土器	※ 20.6	口縁部	外面：横方向のナデ	密	外面：褐灰色	
	PL.77	上層	浅鉢	△ 7.3	～胴部	内面：横方向のヘラミガキ		内面：褐灰色	
308	図 119	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：横方向のナデ	密	外面：褐灰色	わずかに波状口縁部
	PL.78	上層	浅鉢	△ 5.2		内面：不定方向のナデ		内面：褐灰色	
309	図 119	4 溝	縄文土器	△ 3.1	口縁部	外面：2 条の沈線、剥離の為調整不明（ナデ？）	密	外面：褐色	
	PL.78	上層	浅鉢	△ 3.1		内面：ナデ、オサエ		内面：灰黄褐色	
310	図 119	4 溝	縄文土器	△ 3.5	口縁部	外面：沈線、オサエ	密	外面：黒褐色	
	PL.78	上層	浅鉢	△ 2.1		内面：オサエ、貝殻条痕？		内面：黒色	
311	図 119	4 溝	縄文土器	※ 13.8	ほぼ完形	外面：ナデ・オサエ後ミガキ	密	外面：黒褐色	
	PL.77	上層	浅鉢	△ 10.4		内面：ナデ、オサエ		内面：灰黄褐～黒褐色	
312	図 119	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：ミガキ？、ナデ	密	外面：灰黄褐色	
	PL.78	上層	浅鉢	△ 4.5		内面：横ナデ		内面：灰黄褐色	
313	図 119	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：横ナデ	密	外面：灰黄褐色	
	PL.78	上層	浅鉢	△ 5.3		内面：ナデ、工具ナデ		内面：黒褐色	
314	図 119	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：横ナデ	密	外面：黒褐色	補修孔あり
	PL.78	上層	浅鉢	△ 3.1		内面：横ナデ		内面：褐灰～黒褐色	
315	図 119	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：ナデ？	密	外面：褐灰色	
	PL.78	上層	浅鉢	△ 3.5		内面：横ナデ？		内面：褐灰色	
316	図 119	4 溝	縄文土器	—	肩部	外面：横ナデ、斜方向のナデ	密	外面：灰黄褐色	
	PL.78	上層	方形浅鉢	△ 2.7		内面：横ナデ		内面：灰黄褐色	
317	図 119	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：横ナデ	密	外面：褐灰色	
	PL.78	上層	浅鉢	△ 2.5		内面：ナデ		内面：褐灰色	
318	図 119	4 溝	縄文土器	※ 21.0	口縁部	外面：ナデ	密	外面：灰褐色	
	PL.78	上層	浅鉢	△ 5.2		内面：ナデ		内面：黒色	
319	図 119	4 溝	縄文土器	※ 25.0	口縁部	外面：ミガキ	密	外面：黒褐～黒色	
	PL.78	上層	浅鉢	△ 4.3		内面：口縁端部に沈線、ミガキ（不明瞭）		内面：黄灰色	
320	図 119	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：ナデ	密	外面：褐灰～黒褐色	
	PL.78	上層	浅鉢	△ 4.1		内面：口縁端部に沈線、ヘラナデ（ミガキ？）		内面：褐灰色	
321	図 119	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：横ナデ	密	外面：黒褐～黒色	
	PL.78	上層	浅鉢	△ 5.5		内面：口縁端部に沈線、横ナデ、オサエ		内面：褐灰色	
322	図 119	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：横ナデ	密	外面：にぶい黄橙色	口縁部外面に沈線状のくぼみ
	PL.78	上層	浅鉢	△ 3.9		内面：横ナデ		内面：灰黄褐色	
323	図 119	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：横ナデ	密	外面：にぶい黄褐色	
	PL.78	上層	浅鉢	△ 4.1		内面：横ナデ		内面：橙～にぶい黄褐色	
324	図 119	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：ナデ	密	外面：褐灰～黒褐色	
	PL.78	上層	浅鉢	△ 3.9		内面：ナデ、オサエ		内面：黒褐色	
325	図 119	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：ナデ	密	外面：褐色	
	PL.78	上層	浅鉢	△ 4.1		内面：横ナデ		内面：褐色	
326	図 119	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：ナデ	密	外面：褐灰色	
	PL.78	上層	浅鉢	△ 4.4		内面：ナデ		内面：褐灰色	
327	図 119	4 溝	縄文土器	—	肩部	外面：横ナデ	密	外面：褐灰～黒色	
	PL.78	上層	浅鉢	△ 3.9		内面：横ナデ		内面：褐灰色	
328	図 119	4 溝	縄文土器	—	肩部	外面：横ナデ、粗いナデ	密	外面：にぶい黄橙色	
	PL.78	上層	浅鉢	△ 2.5		内面：粗いナデ		内面：にぶい黄橙色	
329	図 119	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：ナデ後ミガキ	密	外面：黄灰～黒色	
	PL.78	上層	舟形土器	△ 3.2		内面：ナデ後ミガキ		内面：灰黄褐色	
330	図 119	4 溝	縄文土器	△ 4.7	頸部	外面：沈線文、刺突文、ナデ	密	外面：灰黄褐色	
	PL.78	上層	浅鉢変容壺	△ 6.1		内面：ナデ、オサエ		内面：明黄褐色	
331	図 120	4 溝	縄文土器	—	胴部	外面：押型文（ネガティブ楕円文）	密	外面：明黄褐色～褐灰色	
	PL.79	下層	深鉢	△ 5.1		内面：ナデ		内面：にぶい黄橙色～黒褐色	
332	図 120	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：刺突文（貝殻腹縁）、ナデ	密	外面：灰黄～明褐色	
	PL.79	下層	深鉢	△ 6.2		内面：ナデ		内面：黒褐色	
333	図 120	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：刺突文（貝殻腹縁）、ナデ	密	外面：灰黄褐色	
	PL.79	下層	深鉢	△ 6.2		内面：貝殻条痕		内面：灰黄色	
334	図 120	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：刺突文（貝殻腹縁）、ナデ	密	外面：暗灰黄色	
	—	下層	深鉢	△ 3.6		内面：ナデ		内面：暗灰黄色	
335	図 120	4 溝	縄文土器	—	胴部	外面：刺突文（貝殻腹縁）、ナデ	密	外面：灰黄色	
	PL.79	下層	深鉢	△ 5.5		内面：貝殻条痕		内面：黄灰～黒褐色	

表 21　土器観察表（12）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
336	図 120	4 溝	縄文土器	—	胴部	外面：刺突文（貝殻腹縁かヘラ状工具）、ナデ	密	外面：暗灰黄色	
	PL.79	下層	深鉢	△ 4.3		内面：貝殻条痕		内面：暗灰黄色	
337	図 120	4 溝	縄文土器	—	胴部	外面：刺突文（貝殻腹縁）、貝殻条痕	密	外面：灰黄色	
	PL.79	下層	深鉢	△ 4.6		内面：貝殻条痕		内面：黄灰色	
338	図 120	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：刺突文（貝殻腹縁）、ナデ	密	外面：黒褐色	
	PL.79	下層	深鉢	△ 5.4		内面：ナデ		内面：黒色	
339	図 120	4 溝	縄文土器	—	胴部	外面：刺突文（貝殻腹縁）、ナデ	密	外面：灰黄褐色	
	PL.79	下層	深鉢	△		内面：ナデ		内面：灰黄褐色	
340	図 120	4 溝	縄文土器	—	胴部	外面：刺突文（貝殻腹縁）、ナデ	密	外面：にぶい黄褐色	
	PL.79	下層	深鉢	△ 3.0		内面：ナデ		内面：灰黄褐色	
341	図 120	4 溝	縄文土器	—	胴部	外面：刺突文（貝殻腹縁）、ナデ	密	外面：黒褐色	
	PL.79	下層	深鉢	△ 3.2		内面：ナデ		内面：黒色	
342	図 120	4 溝	縄文土器	—	胴部	外面：刺突文（貝殻腹縁）、ナデ	密	外面：灰黄褐色	
	PL.79	下層	深鉢	△ 3.2		内面：植物質条痕		内面：灰黄褐色	
343	図 120	4 溝	縄文土器	—	胴部	外面：刺突文（貝殻腹縁）、ナデ	密	外面：黒色	
	PL.79	下層	深鉢	△ 5.8		内面：ナデ、一部貝殻条痕		内面：黒色	
344	図 120	4 溝	縄文土器	—	胴部	外面：刺突文（貝殻腹縁）、ナデ	密	外面：明黄褐～灰黄褐色	３字文
	PL.79	下層	深鉢	△ 3.8		内面：植物質条痕		内面：にぶい黄褐色	羽島下層Ⅱ式
345	図 120	4 溝	縄文土器	—	胴部	外面：刺突文（貝殻腹縁）、ナデ	密	外面：暗灰黄色	３字文
	PL.79	下層	深鉢	△ 6.2		内面：ナデ		内面：明黄褐～黒褐色	羽島下層Ⅱ式
346	図 120	4 溝	縄文土器	—	胴部	外面：刺突文（貝殻腹縁）、ナデ	密	外面：灰黄褐色	３字文
	PL.79	下層	深鉢	△ 2.7		内面：ナデ		内面：灰黄褐色	羽島下層Ⅱ式
347	図 120	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：刺突文（半裁竹管）、ナデ	密	外面：黒色	逆Ｃ字爪形文
	PL.79	下層	深鉢	△ 4.2		内面：条痕		内面：黒色	北白川下層Ⅰａ式
348	図 120	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：刺突文（半裁竹管）、ナデ	密	外面：灰黄褐色	逆Ｃ字爪形文
	PL.79	下層	深鉢	△ 4.4		内面：ナデ		内面：灰黄褐色	北白川下層Ⅰａ式
349	図 120	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：刺突文（半裁竹管）、ナデ	密	外面：にぶい黄褐色	逆Ｃ字爪形文
	PL.79	下層	深鉢	△ 4.7		内面：ナデ		内面：黒色	北白川下層Ⅰａ式
350	図 120	4 溝	縄文土器	—	胴部	外面：刺突文（半裁竹管）、ナデ	密	外面：暗灰黄色	逆Ｃ字爪形文
	PL.79	下層	深鉢	△ 6.7		内面：ナデ		内面：暗灰黄色	北白川下層Ⅰａ式
351	図 120	4 溝	縄文土器	—	胴部	外面：刺突文（半裁竹管）、条痕	密	外面：暗灰黄色	逆Ｃ字爪形文
	PL.79	下層	深鉢	△ 3.1		内面：条痕		内面：暗灰黄色	北白川下層Ⅰａ式
352	図 120	4 溝	縄文土器	—	胴部	外面：刺突文（半裁竹管）、ナデ	密	外面：黒褐色	逆Ｃ字爪形文
	PL.79	下層	深鉢	△ 4.0		内面：ナデ		内面：黒褐～黄褐色	北白川下層Ⅰａ式
353	図 120	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：刺突文（円形棒状工具）、条痕	密	外面：褐灰色	
	—	下層	深鉢	△ 3.9		内面：条痕		内面：褐灰色	
354	図 120	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：貝殻条痕、端部にキザミ	密	外面：灰黄褐色	
	PL.80	下層	深鉢	△ 4.7		内面：貝殻条痕		内面：灰黄褐色	
355	図 121	4 溝	縄文土器	△ 32.7	口縁部	外面：爪形文、口縁端キザミ、RL 縄文（節内繊維痕なし）	粗	外面：灰黄褐～黒色	鷹島式
	PL.80	下層	深鉢	△ 5.2		内面：口縁端部に RL 縄文、丁寧なナデ	(砂礫多)	内面：にぶい黄橙～黒褐色	
356	図 121	4 溝	縄文土器	△ 7.8	口縁部	外面：爪形文、口縁端キザミ、RL 縄文（節内繊維痕なし）	粗	外面：にぶい黄橙～褐灰色	鷹島式
	PL.80	下層	深鉢	△ 5.5		内面：口縁端部に RL 縄文、ナデ	(砂礫多)	内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	
357	図 121	4 溝	縄文土器	△ 7.7	胴部	外面：爪形文、RL 縄文（節内繊維痕なし）	粗	外面：にぶい黄橙～褐灰色	鷹島式
	PL.80	下層	深鉢	△ 4.5		内面：ナデ	(砂礫多)	内面：にぶい黄橙～褐灰色	
358	図 121	4 溝	縄文土器	△ 26.8	口縁部～	外面：RL 縄文、貝殻殻頂部押捺	やや粗	外面：にぶい黄橙～褐灰色	船元Ⅰ式
	PL.79	下層	深鉢	△ 10.7	胴部上半	内面：口縁端部に RL 縄文、ナデ		内面：にぶい黄橙～褐灰色	補修孔あり
359	図 121	4 溝	縄文土器	— (1) △ 5.1 (2) △ 3.6	口縁部	外面：RL 縄文、半裁竹管押引文、口縁端刺突	やや粗	外面：褐灰色	船元Ⅰ式
	PL.80	下層	深鉢			内面：口縁端部に RL 縄文、ナデ		内面：褐灰色	
360	図 121	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：刺突、爪形文	やや粗	外面：褐灰色	船元Ⅰ式
	PL.80	下層	深鉢	△ 3.5		内面：口縁端部に RL 縄文、ナデ		内面：褐灰色	
361	図 121	4 溝	縄文土器	△ 5.3	口縁部	外面：RL 縄文、半裁竹管押引	やや粗	外面：にぶい黄橙～褐灰色	船元Ⅰ式
	PL.80	下層	深鉢	△ 5.2		内面：口縁端部に RL 縄文、ナデ		内面：にぶい黄褐～黒色	
362	図 121	4 溝	縄文土器	△ 10.0	胴部	外面：RL 縄文→爪形文、貼付突帯上爪形文・刺突文	粗	外面：にぶい黄褐～黒褐色	船元Ⅰ式
	PL.80	下層	深鉢	△ 8.0		内面：ナデ	(砂礫多)	内面：にぶい黄褐～黒褐色	
363	図 121	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：RL 縄文	粗	外面：にぶい黄～黒褐色	船元Ⅰ式
	PL.80	下層	深鉢	△ 4.2		内面：ナデ	(砂礫多)	内面：にぶい黄～黒褐色	角閃石非常に多く含む
364	図 121	4 溝	縄文土器	— (1) △ 4.2 (2) △ 3.4	口縁部	外面：垂下隆線、爪形文	やや粗	外面：暗灰黄色	船元Ⅱ式
	PL.80	下層	深鉢			内面：ナデ		内面：暗灰黄色	
365	図 121	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：RL 縄文→平行沈線	やや粗	外面：にぶい黄橙色	船元Ⅲ式
	PL.80	下層	深鉢	△ 3.9		内面：ナデ		内面：にぶい黄橙色	

表 22　土器観察表（13）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
366	図 121 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 4.5	口縁部	外面：LR 縄文→平行沈線 内面：ナデ	やや粗	外面：灰黄褐色～褐灰色 内面：灰黄褐色	船元Ⅲ式
367	図 121 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 5.0	口縁部	外面：半裁竹管押引文、LR 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：灰黄褐色～褐灰色 内面：にぶい黄橙色～褐灰色	船元Ⅲ式
368	図 121 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 2.7	口縁部	外面：RL 縄文、半裁竹管押引文、沈線（三角文?） 内面：RL 縄文	やや粗	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	船元Ⅲ式
369	図 121 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	△ 5.8 △ 6.8	胴部	外面：沈線 内面：ナデ	やや粗	外面：黒褐色 内面：黒褐色	船元Ⅲ式
370	図 121 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 4.5	胴部	外面：沈線 内面：ナデ	やや粗	外面：明黄褐～灰黄色 内面：黄褐～黒色	船元Ⅲ式
371	図 121 —	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 3.1	胴部	外面：沈線 内面：ナデ	やや粗	外面：褐灰色 内面：灰黄褐色	船元Ⅲ式
372	図 121 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 4.5	口縁部	外面：RL 縄文、口縁端キザミ 内面：RL 縄文、ナデ	やや粗	外面：黄灰色～褐色 内面：暗灰黄色	船元式
373	図 121 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	△ 5.9 △ 6.0	口縁部	外面：RL 縄文 内面：RL 縄文、ナデ	やや粗	外面：褐灰色 内面：褐灰色	船元式
374	図 121 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 6.3	口縁部	外面：RL 縄文、半裁竹管押引文 内面：ナデ	やや粗	外面：暗灰黄色 内面：暗灰黄色	船元式
375	図 121 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 3.8	口縁部	外面：LR 縄文、貝殻腹縁押引状刺突、口縁キザミ 内面：ナデ、	やや粗	外面：灰黄色 内面：灰黄色	船元式
376	図 121 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 2.6	口縁部	外面：RL 縄文、半裁竹管押引文 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	船元式
377	図 121 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 3.4	口縁部	外面：RL 縄文、貝殻腹縁押引文 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：褐灰色 内面：にぶい黄橙色	船元式
378	図 121 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 5.3	口縁部	外面：RL 縄文、口縁端キザミ 内面：ナデ	やや粗	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄橙色	船元式
379	図 122 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	△ 6.6 △ 6.6	口縁部	外面：RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄褐～黒色 内面：灰黄褐～黒色	船元式
380	図 122 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	△ 1.2 △ 7.6	口縁部	外面：無節縄文（R）、オサエ 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	船元式
381	図 122 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	△ 5.8 △ 7.9	口縁部	外面：RL 縄文、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：明黄橙～褐灰色 内面：にぶい黄橙色～褐灰色	船元式
382	図 122 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	△ 6.0 △ 7.1	口縁部	外面：縄文（風化顕著） 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	船元式？
383	図 122 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	△ 3.6 △ 4.0	口縁部	外面：RL 縄文、ナデ 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄橙～灰黄橙色 内面：にぶい黄橙～灰黄橙色	船元式
384	図 122 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	△ 6.1 △ 6.3	口縁部	外面：RL 縄文 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：灰黄褐～褐灰色 内面：明黄橙～褐灰色	船元式
385	図 122 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	△ 6.7 △ 6.7	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：口縁肥厚帯状、ナデ、オサエ	やや粗	外面：明黄褐～にぶい黄橙色 内面：灰黄褐～褐灰色	船元式
386	図 122 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	△ 4.6 △ 4.6	口縁部	外面：RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：にぶい黄褐～褐灰色	船元式
387	図 122 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 2.6	口縁部	外面：刺突（竹管文）、ナデ 内面：ナデ	やや粗	外面：灰黄色 内面：灰黄色	船元式
388	図 122 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	△ 7.7 △ 6.2	口縁部	外面：貝殻条痕 内面：貝殻条痕、ナデ	やや粗	外面：にぶい黄橙～灰黄褐色 内面：明黄褐～にぶい黄橙色	船元式
389	図 122 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	△ 3.6 △ 5.7	口縁部	外面：撚糸文、平行沈線 内面：ナデ	やや粗	外面：灰白～にぶい黄橙色 内面：灰白～にぶい黄橙色	里木Ⅱ式
390	図 122 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 2.2	口縁部	外面：平行沈線、ナデ 内面：ナデ	やや粗	外面：黄灰色 内面：黄灰色	里木Ⅱ式
391	図 122 PL.80	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	△ 4.7 △ 2.5	口縁部	外面：ナデ、沈線？ 内面：貼付肥厚帯、ナデ	やや粗	外面：にぶい黄褐～褐灰色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	
392	図 122 PL.81	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 2.7	底部	外面：RL 縄文（節内繊維なし）、ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗 (砂礫多)	外面：灰黄色 内面：灰黄色	鷹島式 五角形底
393	図 122 PL.81	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 3.8	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：オサエ	やや粗 (砂礫多)	外面：灰白色 内面：灰黄～黄灰色	五角形底
394	図 122 PL.81	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 3.3	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	粗 (砂礫多)	外面：灰黄色 内面：浅黄～黄灰色	五角形底
395	図 122 PL.81	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 4.5	底部	外面：RL 縄文、ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：にぶい黄橙色 内面：灰黄褐色	凹底（高台状）
396	図 122 PL.81	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 3.0	底部	外面：RL 縄文、オサエ 内面：ナデ、オサエ	粗	外面：黄褐色 内面：灰黄～黒褐色	凹底（高台状）
397	図 122 PL.81	4 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 3.7	底部	外面：RL 縄文、ナデ、オサエ 内面：オサエ、ヘラ状工具ナデ	やや粗	外面：にぶい黄～黄褐色 内面：暗灰黄色	凹底（高台状）

表23　土器観察表（14）

遺物No.	挿図PL	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
398	図122 PL.81	4溝 下層	縄文土器 深鉢	— △4.5	底部	外面：貝殻条痕、ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：灰黄色 内面：浅黄色	凹底（高台状）
399	図122 PL.81	4溝 下層	縄文土器 深鉢	— △4.8	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：灰黄褐～にぶい黄橙色 内面：明褐色	凹底（高台状）
400	図122 PL.81	4溝 下層	縄文土器 深鉢	— △2.1	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：オサエ	やや粗	外面：にぶい黄褐～黄灰色 内面：灰黄色	凹底
401	図122 PL.81	4溝 下層	縄文土器 深鉢	— △1.8	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：オサエ	やや粗	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄橙色	凹底
402	図122 PL.81	4溝 下層	縄文土器 深鉢	— △2.2	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：オサエ	やや粗	外面：灰黄色 内面：灰黄色	凹底
403	図122 PL.81	4溝 下層	縄文土器 深鉢	— △2.3	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ	やや粗	外面：黒褐色 内面：明黄褐～黒褐色	
404	図122 PL.81	4溝 下層	縄文土器 深鉢	— △2.8	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：オサエ	粗 (砂礫多)	外面：暗灰黄～黒褐色 内面：暗灰黄～黒褐色	
405	図122 PL.81	4溝 下層	縄文土器 深鉢	— △2.0	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ	やや粗	外面：黄褐～灰褐色 内面：灰白～黄灰色	
406	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△31.6 △14.7	口縁部～胴部上半	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐色～黒褐色 内面：灰黄褐色～橙色	
407	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△5.4 △7.5	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄～黒色 内面：にぶい黄～黒色	
408	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△6.0 △5.0	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：暗灰黄色 内面：暗灰黄色	
409	図123 PL.83	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△25.0 △17.8	口縁部～胴部	外面：粗いナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：暗灰黄色	
410	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△4.7 △6.2	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ	密	外面：褐灰色 内面：黒色	
411	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△5.8 △7.9	口縁部	外面：オサエ、工具ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒色 内面：黒褐色	
412	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△5.8 △5.1	口縁部	外面：貝殻条痕 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒褐色 内面：暗灰黄色	波状口縁？
413	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△6.0 △4.6	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐色 内面：暗灰黄色	
414	図123 PL.88	4溝 下層	縄文土器 小型深鉢	19.4 16.2	ほぼ完形	外面：ナデ、オサエ 内面：粗いナデ、オサエ	密	外面：黄褐～黄灰色 内面：暗灰黄色	
415	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△4.3 △6.3	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ	密	外面：黒褐色 内面：褐～黒褐色	
416	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△5.9 △5.5	口縁部	外面：工具ナデ 内面：工具ナデ、口縁部下半丁寧なナデ、オサエ	密	外面：黒色 内面：灰黄褐～黒色	
417	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△6.4 △4.2	口縁部	外面：2条の沈線、タテ方向の条痕、指による刺突 内面：ナデ	密	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	
418	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△5.1 △5.3	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ	密	外面：黒色 内面：灰黄褐色	
419	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△7.7 △6.5	口縁部	外面：ケズリ後ナデ 内面：ミガキ	密	外面：褐灰黄～黒褐色 内面：褐灰黄～黒褐色	
420	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△7.1 △8.8	口縁部	外面：工具ナデ、オサエ 内面：丁寧なナデ	密	外面：暗灰黄～黒色 内面：黒色	
421	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△4.4 △5.9	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒色 内面：黒色	
422	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△6.1 △5.4	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ、タテ方向のナデ？	密	外面：黒褐色 内面：黒褐色	
423	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△5.3 △3.6	口縁部	外面：貝殻条痕、オサエ 内面：貝殻条痕	密	外面：黄灰色 内面：黒色	
424	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△5.5 △4.1	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄色 内面：灰黄色	
425	図123 PL.82	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△5.2 △5.4	口縁部	外面：丁寧なナデ 内面：丁寧なナデ	密	外面：褐灰色 内面：褐灰色	
426	図124 PL.83	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△4.7 △5.4	口縁部	外面：口縁端部キザミ、ナデ・オサエ→一部ミガキ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒色 内面：灰黄色	
427	図124 PL.83	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△4.1 △4.0	口縁部	外面：口縁端部キザミ、ナデ、オサエ 内面：ナデ	密	外面：黒色 内面：にぶい黄褐色	
428	図124 PL.83	4溝 下層	縄文土器 深鉢	△5.5 △5.7	口縁部	外面：口縁端部キザミ、ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	

表 24　土器観察表（15）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
429	図 124	4 溝	縄文土器	△ 4.0	口縁部	外面：口縁端部半裁竹管押引文、ナデ	密	外面：灰黄褐色	
	PL.83	下層	深鉢	△ 3.8		内面：丁寧なナデ		内面：にぶい黄褐色	
430	図 124	4 溝	縄文土器	△ 7.7	口縁部	外面：口縁端部キザミ、工具ナデ、オサエ	密	外面：黄灰色	
	PL.83	下層	深鉢	△ 5.3		内面：ナデ、オサエ		内面：暗灰黄色	
431	図 124	4 溝	縄文土器	—	口縁部	外面：口縁端部キザミ、ナデ	密	外面：黄灰色	
	PL.83	下層	深鉢	△ 3.1		内面：ナデ		内面：灰黄色	
432	図 124	4 溝	縄文土器	△ 5.2	口縁部	外面：口縁端部キザミ、貝殻条痕	密	外面：灰黄色	
	PL.83	下層	深鉢	△ 5.1		内面：貝殻条痕		内面：暗灰黄色	
433	図 124	4 溝	縄文土器	△ 10.7	口縁部	外面：口縁端部キザミ、ナデ	密	外面：黒褐色	
	PL.83	下層	深鉢	△ 4.8		内面：ナデ		内面：黒褐色	
434	図 124	4 溝	縄文土器	△ 5.2	口縁部	外面：口縁端部キザミ、ナデ	密	外面：灰黄色	
	PL.83	下層	深鉢	△ 5.1		内面：ナデ、オサエ		内面：黒色	
435	図 124	4 溝	縄文土器	△ 5.2	口縁部	外面：口縁端部キザミ、ナデ、条痕？	密	外面：黒色	
	—	下層	深鉢	△ 5.3		内面：ナデ		内面：褐灰色	
436	図 124	4 溝	縄文土器	△ 4.7	口縁部	外面：口縁端部キザミ、ナデ、オサエ	密	外面：黒色	
	PL.83	下層	深鉢	△ 5.1		内面：ナデ、オサエ		内面：褐灰色	
437	図 124	4 溝	縄文土器	△ 5.7	頸部	外面：貝殻条痕	密	外面：暗灰黄色	
	PL.83	下層	深鉢	△ 5.5		内面：ナデ		内面：黄褐色	
438	図 125	4 溝	突帯文土器	※ 28.2	口縁部～	外面：口縁端部キザミ、貼付刻目突帯、ナデ	密	外面：黒色	
	PL.84	下層	深鉢	△ 12.4	胴部上半	内面：ナデ、オサエ		内面：明褐～黒褐色	
439	図 125	4 溝	突帯文土器	※ 29.6	口縁部～	外面：口縁端部キザミ、貼付刻目突帯、ナデ、オサエ	密	外面：黒～黒褐色	補修孔２か所
	PL.84	下層	深鉢	△ 9.5	胴部上半	内面：ナデ、オサエ		内面：黒～黒褐色	
440	図 125	4 溝	突帯文土器	△ 5.4	口縁部	外面：口縁端部キザミ、貼付刻目突帯、ナデ	密	外面：暗灰黄～黒色	
	PL.85	下層	深鉢	△ 3.6		内面：ナデ、オサエ		内面：灰黄～黒褐色	
441	図 125	4 溝	突帯文土器	△ 3.9	口縁部	外面：口縁端部キザミ、貼付刻目突帯、ナデ	密	外面：暗灰黄色	
	PL.85	下層	深鉢	△ 3.3		内面：ナデ、オサエ		内面：黄褐色	
442	図 125	4 溝	突帯文土器	△ 9.0	口縁部	外面：口縁端部キザミ、貼付刻目突帯、ナデ	密	外面：浅黄～黒色	
	PL.85	下層	深鉢	△ 5.3		内面：ナデ、オサエ		内面：灰白色	
443	図 125	4 溝	突帯文土器	△ 3.0	口縁部	外面：口縁端部キザミ、貼付刻目突帯、ナデ	密	外面：黒色	
	PL.85	下層	深鉢	△ 2.2		内面：ナデ、オサエ		内面：灰黄褐色	
444	図 125	4 溝	突帯文土器	△ 5.2	口縁部	外面：口縁端部キザミ、貼付刻目突帯、ナデ、ミガキ	密	外面：黒褐～明黄褐色	
	PL.85	下層	深鉢	△ 5.9		内面：ナデ、オサエ		内面：黒褐～明黄褐色	
445	図 125	4 溝	突帯文土器	△ 6.7	口縁部	外面：口縁端部キザミ、貼付刻目突帯、ナデ	密	外面：黒褐色	
	PL.85	下層	深鉢	△ 3.6		内面：ナデ、オサエ		内面：黒褐色	
446	図 125	4 溝	突帯文土器	△ 3.1	口縁部	外面：口縁端部キザミ、貼付刻目突帯、ナデ	密	外面：黒色	
	PL.85	下層	深鉢	△ 3.3		内面：ナデ、オサエ		内面：黒褐色	
447	図 125	4 溝	突帯文土器	△ 2.5	口縁部	外面：口縁端部キザミ、貼付刻目突帯、ナデ	密	外面：暗灰黄～黒褐色	
	PL.85	下層	深鉢	△ 2.9		内面：ナデ、オサエ		内面：褐灰色	
448	図 125	4 溝	突帯文土器	△ 4.2	口縁部	外面：口縁端部キザミ、貼付刻目突帯、ミガキ	密	外面：暗灰黄～黒褐色	
	PL.85	下層	深鉢	△ 4.6		内面：ナデ、オサエ		内面：黒褐色	
449	図 125	4 溝	突帯文土器	△ 4.4	口縁部	外面：口縁端部キザミ、貼付刻目突帯、ナデ	密	外面：黒褐色	
	PL.85	下層	深鉢	△ 4.6		内面：ナデ、オサエ		内面：灰黄色	
450	図 125	4 溝	突帯文土器	△ 5.5	口縁部	外面：貼付刻目突帯	密	外面：灰黄褐色	突帯が大きくゆがむ
	PL.85	下層	深鉢	△ 4.0		内面：ナデ、オサエ		内面：暗灰黄色	
451	図 125	4 溝	突帯文土器	△ 4.0	口縁部	外面：ナデ、貼付刻目突帯	密	外面：灰黄褐色	
	PL.85	下層	深鉢	△ 3.7		内面：ナデ、オサエ		内面：褐灰～灰黄褐色	
452	図 125	4 溝	突帯文土器	△ 6.3	口縁部～	外面：口縁端部キザミ、貼付刻目突帯、胴部上半ナデ、ヘラ状工具による刺突文	密	外面：黄橙～黒色	
	PL.85	下層	深鉢	△ 10.8	胴部上半	内面：ナデ、オサエ		内面：黄橙～黒色	
453	図 125	4 溝	突帯文土器	△ 7.5	口縁部	外面：口縁端部キザミ、貼付刻目突帯、ナデ	密	外面：黒色	
	PL.85	下層	深鉢	△ 6.3		内面：ナデ、オサエ		内面：黄灰色	
454	図 125	4 溝	突帯文土器	※ 20.0	口縁部	外面：貼付突帯、ナデ、ミガキ	密	外面：黒色	無刻目突帯
	PL.85	下層	深鉢	△ 3.8		内面：ミガキ		内面：黒褐色	
455	図 125	4 溝	突帯文土器	※ 25.6	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ	密	外面：黄灰色	
	PL.85	下層	深鉢	△ 3.0		内面：ナデ、オサエ		内面：にぶい黄褐～黒褐色	
456	図 125	4 溝	突帯文土器	※ 24.4	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ	密	外面：黒色	
	PL.84	下層	深鉢	△ 6.8		内面：ナデ、オサエ		内面：黒褐色	
457	図 125	4 溝	突帯文土器	—	胴部	外面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄～黒褐色	
	PL.84	下層	深鉢	△ 12.6		内面：ナデ、オサエ		内面：灰黄～暗灰黄色	
458	図 125	4 溝	突帯文土器	△ 6.8	口縁部	外面：貼付刻目突帯、縦方向の平行沈線、ナデ	密	外面：黄灰色	
	PL.85	下層	深鉢	△ 6.1		内面：ナデ、オサエ		内面：暗灰黄色	
459	図 125	4 溝	突帯文土器	△ 5.6	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ、オサエ	密	外面：黒褐～暗灰黄色	
	PL.85	下層	深鉢	△ 4.6		内面：ナデ、オサエ		内面：黄灰色	

表25　土器観察表（16）

遺物No.	挿図PL	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
460	図125 PL.85	4溝 下層	突帯文土器 深鉢	△6.3 △4.4	口縁部	外面：口縁端部キザミ、貼付突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒色 内面：暗灰黄色	無刻目突帯
461	図125 PL.85	4溝 下層	突帯文土器 深鉢	△6.0 △2.9	口縁部	外面：貼付刻目突帯、キザミ、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：明黄褐～黒褐色 内面：明黄褐～黒褐色	
462	図125 PL.85	4溝 下層	突帯文土器 深鉢	△5.1 △3.9	口縁部	外面：貼付刻目突帯、工具ナデ 内面：工具ナデ	密	外面：黄褐～黒褐色 内面：黄褐～黒褐色	
463	図125 PL.85	4溝 下層	突帯文土器 深鉢	△5.1 △2.8	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄～黒褐色 内面：暗灰黄色	半裁竹管による刻目
464	図125 PL.85	4溝 下層	突帯文土器 深鉢	△3.4 △4.0	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒色 内面：黒褐色	
465	図125 PL.85	4溝 下層	突帯文土器 深鉢	△5.8 △4.1	口縁部	外面：貼付刻目突帯、ナデ、工具ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：暗灰黄色 内面：黄褐～黒褐色	
466	図125 PL.85	4溝 下層	突帯文土器 壺	※14.4 △3.8	口縁部	外面：貼付刻目突帯、巻貝条痕 内面：ナデ、オサエ	密	外面：暗灰黄色 内面：黒褐色	浅鉢変容壺
467	図126 PL.89	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	20.6 4.8	ほぼ完形	外面：ミガキ 内面：ミガキ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄橙～黒褐色	
468	図126 PL.86	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	※26.8 △8.4	口縁部～胴部	外面：ミガキ 内面：ミガキ、オサエ	密	外面：黒褐色 内面：黒褐色	
469	図126 PL.86	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	※21.3 △10.2	胴部	外面：粗いナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄褐～黒褐色 内面：にぶい黄褐～黒褐色	
470	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △7.2	口縁部	外面：ナデ、ミガキ 内面：ナデ	やや密	外面：黒褐色 内面：黒褐色	
471	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △4.7	口縁部	外面：ナデ、貝殻条痕 内面：ナデ	密	外面：褐灰色 内面：にぶい黄褐色	
472	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △3.9	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ、ミガキ	密	外面：にぶい黄褐色 内面：黒褐色	
473	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △5.0	口縁部	外面：ナデ、ミガキ 内面：粗いナデ、条痕	密	外面：黒褐色 内面：黒褐色	
474	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △4.9	口縁部	外面：ヘラ状工具ナデ 内面：ヘラ状工具ナデ	やや密	外面：灰黄褐～黒褐色 内面：黒褐色	
475	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △3.3	口縁部	外面：丁寧なナデ 内面：丁寧なナデ	密	外面：黒褐色 内面：黒褐色	
476	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △3.4	口縁部	外面：ナデ、一部ミガキ 内面：条痕	密	外面：オリーブ黒色 内面：黄褐色	口縁部端部に沈線？
477	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △2.9	口縁部	外面：ナデ、ミガキ 内面：ナデ	密	外面：黒色 内面：にぶい黄褐～黒褐色	
478	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △3.0	口縁部	外面：ナデ、ミガキ 内面：ミガキ（不鮮明）	密	外面：灰褐～黒色 内面：灰褐色	口縁部外面に円形の窪み
479	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △2.6	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄橙色	
480	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △4.4	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ	密	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐～褐灰色	口縁部に焼成前穿孔
481	図126 PL.89	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	17.3 5.6	ほぼ完形	外面：ナデ、口縁端部肥厚し5つ（？）の円孔をもつ突起 内面：ミガキ、オサエ	密	外面：黒褐色 内面：黒褐色	
482	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	※16.0 △6.7	口縁部～胴部	外面：ナデ、ミガキ 内面：ナデ、ミガキ	密	外面：暗灰黄～黒色 内面：暗灰黄～黒色	
483	図126 PL.88	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	24.0 10.1	ほぼ完形	外面：ナデ、丁寧なミガキ 内面：口縁端部に沈線、ナデ、ミガキ	密	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：黄褐～黒褐色	
484	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	※32.6 △6.7	口縁部	外面：ナデ、ミガキ 内面：ナデ、ミガキ	密	外面：黒色 内面：灰黄褐色	
485	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △4.3	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ	密	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	
486	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △2.5	口縁部	外面：ミガキ 内面：丁寧なナデ、オサエ	密	外面：灰黄褐色 内面：暗灰黄色	
487	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △4.1	口縁部	外面：ナデ、ミガキ、粗いナデ 内面：ナデ、ミガキ	密	外面：灰褐色 内面：灰褐～黒色	口縁部に焼成前穿孔
488	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 小型浅鉢	△10.8 △4.3	口縁部～胴部上半	外面：口縁端部キザミ、ナデ、ケズリ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：明黄褐～褐灰色 内面：明黄褐～褐灰色	
489	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △3.4	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：調整不明	密	外面：にぶい黄色 内面：に憂い黄橙色	
490	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △4.2	肩部	外面：ナデ、ミガキ、工具ナデ 内面：ナデ、ミガキ、オサエ	密	外面：褐灰～黒褐色 内面：褐灰～黒褐色	
491	図126 PL.87	4溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △3.8	肩部	外面：条痕、ナデ 内面：ナデ、ミガキ	密	外面：黒褐色 内面：黒褐色	

表 26　土器観察表（17）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
492	図 126 PL.87	4 溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △ 4.6	口縁部	外面：ナデ 内面：ミガキ、ナデ	密	外面：黒褐色 内面：黄灰～黒褐色	波状口縁部
493	図 126 PL.87	4 溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △ 2.1	口縁部	外面：ナデ、ミガキ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒色 内面：灰黄褐色	波状口縁部
494	図 127 PL.87	4 溝 下層	縄文土器 浅鉢	※ 26.4 △ 8.2	口縁部～胴部上半	外面：口縁部と屈曲部に沈線、ミガキ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄褐～黒色 内面：にぶい黄褐～黒褐色	
495	図 127 PL.87	4 溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △ 5.1	口縁部	外面：ナデ、ミガキ？ 内面：ミガキ、オサエ	密	外面：黒褐～黒 内面：黒褐～黒	
496	図 127 PL.87	4 溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △ 3.7	口縁部	外面：ミガキ（風化により不鮮明） 内面：ミガキ（風化により不鮮明）	やや密	外面：褐灰色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	
497	図 127 PL.87	4 溝 下層	突帯文土器 浅鉢	※ 13.8 △ 6.4	口縁部～胴部上半	外面：ミガキ、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒色 内面：黒褐色	
498	図 127 PL.87	4 溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △ 3.2	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：褐灰色 内面：灰～黒褐色	
499	図 127 PL.87	4 溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △ 3.2	口縁部	外面：ナデ、ミガキ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄橙～明褐色	
500	図 127 PL.87	4 溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △ 3.4	口縁部	外面：ナデ、屈曲部に沈線 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒褐色 内面：黒褐色	
501	図 127 PL.87	4 溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △ 3.2	口縁部	外面：ミガキ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：褐灰～黒褐色 内面：褐灰～黒褐色	
502	図 127 PL.87	4 溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △ 4.5	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ	密	外面：褐灰色～黒褐色 内面：褐灰色	
503	図 127 PL.87	4 溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △ 2.3	口縁部	外面：ナデ、ミガキ？ 内面：口縁端部に沈線、ナデ	密	外面：黒褐色 内面：暗灰黄色	波状口縁部
504	図 127 PL.87	4 溝 下層	縄文土器 浅鉢	— △ 4.7	口縁部	外面：ミガキ後ナデ 内面：口縁に突帯、ミガキ、ナデ、オサエ	密	外面：オリーブ黒～黒色 内面：暗オリーブ褐～黒褐色	
505	図 127 PL.87	4 溝 下層	縄文土器 浅鉢	△ 9.4 △ 2.6	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ミガキ	密	外面：黒褐色 内面：黒褐色	高台状
507	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 深鉢	△ 3.9 △ 2.6	口縁部	外面：爪形文、円形刺突文 内面：口縁端部 Rl 縄文	密	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	船元Ⅰ式
508	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 深鉢	△ 4.1 △ 3.2	口縁部	外面：Rl 縄文、平行沈線 内面：ナデ	密	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	船元式
509	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 深鉢	— △ 4.0	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：明黄褐～黒色 内面：明黄褐～黒色	凹底（高台状）
510	図 128 —	6 溝	縄文土器 深鉢	— △ 5.9	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：明黄褐～褐灰色 内面：明黄褐～黒色	
511	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 深鉢	△ 4.0 △ 4.5	肩部	外面：ミガキ、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：褐灰～黒褐色 内面：褐灰～黒褐色	
512	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 深鉢	△ 9.3 △ 5.8	肩部	外面：一部ミガキ、ナデ、オサエ 内面：丁寧なナデ、オサエ	やや密	外面：褐灰～灰黄褐色 内面：褐灰～灰黄褐色	
513	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 深鉢	— △ 3.8	胴部	外面：ナデ？ 内面：（ケズリ後？）粗いナデ	密	外面：灰黄～黒色 内面：灰黄色	
514	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 深鉢	△ 4.6 △ 4.9	口縁部	外面：口縁端部キザミ、沈線、貝殻条痕 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄橙～黒褐色	
515	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 深鉢	△ 25.0 △ 7.5	口縁部	外面：ナデ、工具ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黒～明黄褐色 内面：灰褐～明黄褐色	
516	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 深鉢	△ 31.8 △ 8.4	口縁部	外面：ケズリ後ナデ 内面：丁寧なナデ	密	外面：褐灰～黒色 内面：褐灰色	
517	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 深鉢	△ 23.6 △ 7.3	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：明黄褐～黒色	
518	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 深鉢	△ 4.9 △ 9.1	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：褐灰～黒褐色 内面：褐灰～黒褐色	
519	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 浅鉢	— △ 5.9	胴部下半～底部	外面：粗いナデ 内面：ナデ、オサエ	やや密	外面：灰黄褐～黒色 内面：灰黄褐～黒色	外面風化が顕著
520	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 浅鉢	△ 4.1 △ 2.6	口縁部	外面：粗いナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：明黄褐～褐灰色 内面：明黄褐～褐灰色	
521	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 浅鉢	△ 4.1 △ 3.6	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黄褐～黒色 内面：褐灰～黒色	外面二枚貝条痕
522	図 128 PL.91	6 溝	縄文土器 浅鉢	16.5 11.4	ほぼ完形	外面：ケズリ後ナデ 内面：粗いナデ、オサエ	やや密	外面：灰黄～黒色 内面：灰黄～黒色	
523	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 浅鉢	△ 17.4 △ 6.7	口縁部～胴部上半	外面：ナデ後ミガキ、オサエ 内面：丁寧なナデ、オサエ	密	外面：明黄褐～黒色 内面：灰黄褐色	
524	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 浅鉢	△ 11.0 △ 3.4	口縁部	外面：波頂部にキザミ、ミガキ、オサエ 内面：ミガキ	密	外面：黒褐色 内面：黒褐色	波状口縁部
525	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 浅鉢	— △ 3.9	口縁部	外面：ミガキ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：褐灰～黒褐色 内面：にぶい黄橙色	

表 27　土器観察表（18）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径（cm） 器高（cm）	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
526	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 浅鉢	△ 14.8 △ 5.0	口縁部	外面：口縁端部と肩部に沈線、ミガキ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：褐灰色 内面：褐灰～にぶい黄褐色	
527	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 浅鉢	△ 7.9 △ 6.1	胴部下半	外面：貝殻条痕 内面：ミガキ	密	外面：明黄橙～黒色 内面：褐灰色	
528	図 128 PL.90	6 溝	縄文土器 浅鉢	△ 3.7 △ 3.4	胴部下半	外面：工具ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙～灰黄橙色 内面：にぶい黄橙～灰黄橙色	
529	図 128 PL.90	6 溝 下層	縄文土器 深鉢	— △ 8.9	胴部	外面：工具ナデ 内面：風化の為調整不明（ナデ？）	やや密	外面：暗灰黄色 内面：暗灰黄色	
531	図 157 PL.108	16 溝	突帯文土器 深鉢	※ 24.6 △ 9.8	口縁部～胴部上半	外面：貼付刻目突帯、粗いナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：灰黄～褐灰色 内面：灰黄褐色	
532	図 157 PL.108	16 溝	突帯文土器 深鉢	△ 19.0 △ 6.6	口縁部～胴部上半	外面：貼付刻目突帯、ナデ、オサエ 内面：貝殻条痕、ナデ、オサエ	密	外面：黄橙～黒色 内面：黄橙～黒色	
533	図 157 PL.108	16 溝	突帯文土器 深鉢	△ 24.0 △ 7.3	口縁部	外面：貼付突帯、オサエ、ケズリ、ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：褐灰色	無刻目突帯
534	図 157 PL.108	16 溝	突帯文土器 浅鉢	△ 24.8 △ 4.3	口縁部	外面：ミガキ 内面：ナデ、一部ミガキ	密	外面：灰黄褐色 内面：褐灰色	
535	図 157 PL.108	16 溝	弥生土器 壺	— △ 7.0	頸部	外面：ミガキ 内面：ナデ、オサエ、条痕（貝殻か）	密	外面：オリーブ黒色 内面：暗灰黄色	
536	図 157 PL.108	16 溝	縄文土器 深鉢	— △ 3.5	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：風化の為調整不明	やや密	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：黒褐色	
537	図 158 PL.108	第３a 層	縄文土器 浅鉢	24.4 △ 5.1	口縁部～胴部	外面：口縁に沈線、ナデ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色～褐灰色	
538	図 158 PL.108	第３a 層	縄文土器 浅鉢	※ 21.2 △ 9.7	胴部	外面：肩部に沈線、ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙～灰黄褐 内面：にぶい黄橙～灰黄褐	
539	図 158 PL.108	第３a 層	縄文土器 浅鉢	※ 33.2 △ 7.9	口縁部～胴部上半	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黄灰色～黒褐色 内面：灰黄褐色～褐灰色	
540	図 158 PL.109	第３a 層	縄文土器 浅鉢	— △ 11.7	胴部下半	外面：ミガキ、ナデ 内面：ナデ、貝殻条痕	密	外面：暗灰黄色 内面：黒褐色	
541	図 158 PL.108	第３a 層	縄文土器 浅鉢	— △ 3.9	口縁部	外面：キザミ、沈線、ヘラ状工具ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黄灰色 内面：黄灰色	542 と同一個体
542	図 158 PL.108	第３a 層	縄文土器 浅鉢	— △ 4.0	胴部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：褐灰色 内面：にぶい黄橙色	541 と同一個体
543	図 158 PL.108	第３a 層	縄文土器 深鉢	△ 9.2 △ 3.9	口縁部	外面：口縁端部キザミ、ナデ 内面：ナデ、貝殻条痕	密	外面：にぶい黄橙色～褐灰色 内面：にぶい黄橙色～褐灰色	
544	図 158 PL.108	第３a 層	縄文土器 浅鉢	— △ 3.1	口縁部	外面：ナデ 内面：ナデ、オサエ	密	外面：黄灰色 内面：褐灰色	
545	図 158 PL.108	第３a 層	縄文土器 浅鉢	— △ 2.9	口縁部	外面：ナデ、オサエ 内面：ミガキ（不鮮明）	密	外面：黄灰色 内面：灰黄褐色	
546	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 3.2	口縁部	外面：RL 縄文、爪形文、口縁端キザミ 内面：口縁端部 RL 縄文、ナデ	やや粗 (砂礫多)	外面：灰黄褐色～黒褐色 内面：灰黄褐色～黒褐色	鷹島式
547	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 6.4	口縁部	外面：貼付突帯、爪形文、刺突文 内面：口縁端部 RL 縄文、ナデ	やや粗 (砂礫多)	外面：黒褐色 内面：褐灰色	船元Ⅰ式
548	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 4.6	口縁部	外面：RL 縄文、半裁竹管波状文、口縁端キザミ 内面：口縁端部 RL 縄文、ナデ	やや粗 (砂礫多)	外面：灰黄褐色～黒褐色 内面：褐灰色	船元Ⅰ式
549	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 2.9	口縁部	外面：貼付突帯、爪形文 内面：貼付突帯、爪形文、ナデ、口縁端部 RL 縄文	やや粗	外面：黄灰色 内面：黒褐色	船元Ⅰ式
550	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 浅鉢	— △ 8.2	口縁部	外面：条線 内面：ナデ	やや粗 (砂礫多)	外面：灰黄褐色～黒褐色 内面：灰黄褐色～黒褐色	船元Ⅲ式
551	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 7.2	胴部	外面：RL 縄文、半裁竹管平行沈線 内面：ナデ	粗 (砂礫多)	外面：黄灰色 内面：黄灰色	船元Ⅲ式
552	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 7.1	口縁部	外面：RL 縄文、口縁端キザミ 内面：口縁端部 RL 縄文、ナデ	やや粗	外面：橙色～褐灰色 内面：橙色～褐灰色	船元式
553	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 3.9	口縁部	外面：RL 縄文、押し引き文 内面：口縁端部 RL 縄文、ナデ	やや粗	外面：灰黄褐色 内面：浅黄色～橙色	船元式
554	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 2.5	口縁部	外面：爪形文、刺突文 内面：貝殻押捺？、ナデ	やや粗	外面：灰黄褐色 内面：黒褐色	船元式
555	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 9.5	口縁部	外面：RL 縄文 内面：ナデ、オサエ、肥厚帯状に接合痕残る	やや粗	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	船元式
556	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 4.7	口縁部	外面：RL 縄文、爪形文 内面：ナデ	やや粗	外面：黄灰色 内面：灰黄色	船元式
557	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 5.8	胴部	外面：RL 縄文、爪形文 内面：ナデ	やや粗	外面：黒褐色 内面：黒褐色	船元式

表 28　土器観察表（19）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
558	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 2.6	口縁部	外面：爪形文 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい橙色～にぶい黄橙色 内面：にぶい橙色～にぶい黄橙色	船元式
559	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 4.9	口縁部	外面：ナデ、半裁竹管波状文、刺突文 内面：ナデ	粗 (砂礫多)	外面：にぶい黄橙色～褐灰色 内面：にぶい黄橙色～褐灰色	里木Ⅱ式
560	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 3.8	口縁部	外面：撚糸文、沈線 内面：ナデ	やや粗	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	里木Ⅱ式
561	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 3.0	胴部	外面：RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	中期
562	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 浅鉢	— △ 3.6	口縁部	外面：RL 縄文→沈線 内面：ナデ	粗 (砂礫多)	外面：灰黄褐色～黒色 内面：黒褐色	中津式または福田Ｋ Ⅱ式
563	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 6.5	口縁部	外面：条痕 内面：ナデ	やや粗	外面：灰黄色～黄灰色 内面：灰黄褐色～黒褐色	中期
564	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 12.2	口縁部	外面：工具ナデ 内面：ナデ	やや密	外面：にぶい黄橙色～暗褐色～黒褐色 内面：にぶい黄橙色～褐灰色	後晩期粗製土器
565	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 3.8	底部	外面：RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	船元式 底部に突起あり
566	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 3.3	底部	外面：オサエ 内面：ケズリ	やや粗	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	凹底
567	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 2.1	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ	やや粗 (砂礫多)	外面：浅黄色～黄灰色 内面：浅黄色	
568	図 160 PL.110	10 溝	縄文土器 深鉢	— △ 1.0	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：暗灰黄色 内面：にぶい黄色～黄灰色	
569	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 3.6 △ 3.8	口縁部	外面：RL 縄文、貼付突帯に爪形文、口縁上端 RL 縄文 内面：口縁端部 RL 縄文、ナデ	やや粗	外面：褐灰～黒褐色 内面：灰黄～黄灰色	船元Ⅰ式
570	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 6.5 △ 3.7	口縁部	外面：円形刺突文、Ⅰ字状ヘラ描文 内面：口縁端部 RL 縄文、ナデ	やや粗	外面：灰黄～黄灰色 内面：にぶい黄橙色	船元Ⅰ式
571	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 6.8 △ 4.3	口縁部	外面：RL 縄文、貼付突帯、爪形文 内面：RL 縄文、ナデ	やや粗	外面：灰黄～黒褐色 内面：黒褐色	船元Ⅰ式
572	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 5.4 △ 3.7	口縁部	外面：貼付突帯、沈線文、RL 縄文 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：にぶい黄橙～黄灰色	船元Ⅲ式
573	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 4.4 △ 4.0	口縁部	外面：平行沈線文（連弧文）、RL 縄文 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：暗灰黄色 内面：黄褐色	船元Ⅲ式
574	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 3.5 △ 3.0	口縁部	外面：ナデ、沈線文、口縁端キザミ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：にぶい黄橙色 内面：灰黄褐色	船元Ⅲ式
575	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 5.3 △ 4.0	口縁部	外面：ナデ、沈線文、刺突文 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄橙～黒色 内面：灰黄褐色	船元Ⅲ式
576	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 4.8 △ 4.9	胴部	外面：沈線文、RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：灰黄褐～褐灰色 内面：にぶい黄～黄灰色	黒木Ⅱ式
577	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 5.0 △ 3.3	口縁部	外面：RL 縄文、口縁端キザミ 内面：口縁端部 RL 縄文、ナデ	粗	外面：褐灰色 内面：黒褐色	船元式
578	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 3.5 △ 4.8	口縁部	外面：円形刺突文、RL 縄文 内面：口縁端部 RL 縄文、ナデ	やや粗	外面：灰黄色 内面：黒褐色	船元式
579	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 6.1 △ 5.2	口縁部	外面：口縁貼付肥厚帯、RL 縄文、刺突文、押引文 内面：口縁端部 RL 縄文、ナデ	やや粗	外面：黄灰～灰黄色 内面：灰黄～黄灰色	船元式
580	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 4.2 △ 3.8	口縁部	外面：半裁竹管押引文、RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい橙色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	船元式
581	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 3.7 △ 3.7	口縁部	外面：刺突文、RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：浅黄色 内面：灰黄色	船元式
582	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 4.2 △ 3.0	口縁部	外面：無節縄文（R） 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい褐～褐灰色 内面：にぶい黄橙色	中期
583	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 6.5 △ 6.0	口縁部	外面：押引文、RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：にぶい黄橙色	中期
584	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 7.3 △ 5.0	口縁部	外面：半裁竹管押引文、RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	中期
585	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 6.0 △ 8.3	胴部	外面：押引文、RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい橙～黒色 内面：灰白～にぶい橙色	船元式？
586	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 1.9 △ 3.0	口縁部	外面：RL 縄文、貼付突帯、突帯上刺突文 内面：ナデ	やや粗	外面：黒褐～黒色 内面：にぶい黄褐色	船元式？
587	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 8.6 △ 6.2	胴部	外面：ナデ、一部 RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：灰黄褐色 内面：にぶい黄橙色	船元式？ 補修孔
588	図 166 PL.111	第 6a 層	縄文土器 深鉢	△ 19.4 △ 17.5	口縁部～胴部上半	外面：口縁貼付肥厚帯、無節縄文（R） 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい橙～褐灰色 内面：にぶい橙～黒色	波子式

表29　土器観察表（20）

遺物No.	挿図PL	遺構層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
589	図166 PL.111	第6a層	縄文土器 深鉢	△8.1 △2.1	口縁部	外面：口縁貼付肥厚帯、無節縄文（L） 内面：ナデ	やや粗	外面：橙色 内面：黄灰色	波子式
590	図166 PL.111	第6a層	縄文土器 深鉢	△8.8 △5.5	口縁部	外面：RL縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：橙～にぶい黄橙色 内面：浅黄～にぶい黄橙色	中期
591	図166 PL.111	第6a層	縄文土器 深鉢	△10.3 △13.0	胴部	外面：沈線、LR縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：黄褐～暗灰黄色 内面：褐灰～黒褐色	中期
592	図166 PL.111	第6a層	縄文土器 深鉢	△6.3 △7.1	胴部	外面：RL縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：明黄褐～褐灰色 内面：黄灰色	中期
593	図166 PL.111	第6a層	縄文土器 深鉢	△3.6 △3.1	胴部	外面：RL縄文、押引文 内面：RL縄文	やや粗	外面：黒褐～暗灰黄色 内面：灰黄褐色	中期
594	図166 PL.111	第6a層	縄文土器 深鉢	△4.7 △3.2	口縁部	外面：撚糸文、半裁竹管波状文 内面：ナデ	やや粗	外面：褐灰～灰白色 内面：褐灰～黒色	里木Ⅱ式
595	図166 PL.111	第6a層	縄文土器 深鉢	△3.9 △3.8	口縁部	外面：貝殻条痕→ナデ、口縁端キザミ 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい橙～黒色 内面：にぶい黄褐～にぶい黄橙色	
596	図166 PL.113	第6a層	縄文土器 深鉢	— △10.5	胴部下半～底部	外面：RL？縄文（風化）、ナデ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙～にぶい黄橙色	凹底（高台状）
597	図166 PL.112	第6a層	縄文土器 深鉢	— △3.8	底部	外面：RL縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：褐灰～灰黄褐色 内面：灰黄褐色	凹底（高台状）
598	図166 PL.112	第6a層	縄文土器 深鉢	— △4.0	底部	外面：RL縄文、端部キザミ、ナデ 内面：（貝殻条痕後？）ナデ	やや粗	外面：にぶい黄橙色 内面：褐灰～にぶい黄橙色	凹底（高台状）
599	図166 PL.112	第6a層	縄文土器 深鉢	— △5.1	底部	外面：RL縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	凹底（高台状）
600	図166 PL.112	第6a層	縄文土器 深鉢	— △3.4	底部	外面：RL縄文 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：褐灰～灰黄褐色 内面：褐灰色	
601	図166 PL.112	第6a層	縄文土器 深鉢	— △4.9	底部	外面：RL縄文 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：灰黄褐～褐灰色 内面：にぶい黄橙～黄灰色	
602	図167 PL.112	第6a層	縄文土器 深鉢	— △5.2	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙～黒色	凹底
603	図167 PL.112	第6a層	縄文土器 深鉢	— △3.0	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：風化の為調整不明	やや粗	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい黄褐色	凹底
604	図167 PL.112	第6a層	縄文土器 深鉢	— △3.5	底部	外面：ナデ、工具あるいは爪の痕あり 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄褐～褐灰色 内面：灰黄褐～黒褐色	凹底
605	図167 PL.112	第6a層	縄文土器 深鉢	— △2.7	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい褐色 内面：にぶい橙～褐灰色	凹底
606	図167 PL.112	第6a層	縄文土器 深鉢	— △2.4	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ	やや粗	外面：褐灰色 内面：にぶい黄褐～褐灰色	凹底
607	図167 PL.112	第6a層	縄文土器 深鉢	— △2.1	底部	外面：ナデ 内面：ヘラ状工具ナデ	やや粗	外面：灰黄褐色 内面：黄灰色	凹底
608	図167 PL.112	第6a層	縄文土器 深鉢	— △2.7	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：工具ナデ	やや粗	外面：にぶい黄褐～褐灰色 内面：黒褐色	
609	図167 PL.112	第6a層	縄文土器 深鉢	— △5.5	底部	外面：タテ方向のナデ、ナデ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：褐～黒褐色 内面：にぶい黄褐～褐灰色	
610	図167 PL.112	第6a層	縄文土器 深鉢	— △2.8	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：灰黄褐～灰白色 内面：灰黄褐～褐灰色	
611	図167 PL.112	第6a層	縄文土器 深鉢	— △2.1	底部	外面：ナデ 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄橙色 内面：褐灰色	凹底
612	図167 PL.112	第6a層	縄文土器 深鉢	— △1.3	底部	外面：ナデ 内面：ナデ	やや粗	外面：灰黄褐～黄灰色 内面：灰黄褐～褐灰色	凹底
613	図170 PL.114	第6a層～第7a層	縄文土器 深鉢	△44.4 △20.0	口縁部～胴部上半	外面：RL縄文（撚りがゆるい） 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい橙～黒色 内面：灰白～にぶい橙色	船元式
614	図170 PL.115	第6a層～第7a層	縄文土器 深鉢	△11.6 △14.5	口縁部～胴部上半	外面：無節縄文（R） 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい褐～黒褐色 内面：にぶい橙～褐灰色	船元式
615	図170 PL.115	第6a層～第7a層	縄文土器 深鉢	△37.0 △11.0	口縁部～胴部上半	外面：貼付肥厚帯、RL縄文 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：橙色 内面：浅黄橙色	波子式
616	図170 PL.114	第6a層～第7a層	縄文土器 深鉢	△41.4 △16.0	口縁部～胴部上半	外面：貝殻条痕 内面：ナデ	やや粗	外面：橙色 内面：にぶい橙～橙色	中期
617	図170 PL.115	第6a層～第7a層	縄文土器 深鉢	△48.2 △11.9	胴部	外面：RL縄文、 内面：ナデ	やや粗	外面：橙～褐灰色 内面：橙色	中期
618	図171 PL.115	第6a層～第7a層	縄文土器 深鉢	△5.6 △4.3	口縁部	外面：貼付突帯、爪形文、刺突文 内面：縄文、ナデ	やや粗	外面：灰白色 内面：灰白～にぶい黄橙色	船元Ⅰ式
619	図171 PL.115	第6a層～第7a層	縄文土器 深鉢	— △9.5	口縁部	外面：無節縄文（R） 内面：ナデ	やや粗	外面：橙色 内面：褐灰～橙色	大型
620	図171 PL.115	第6a層～第7a層	縄文土器 深鉢	△7.4 △5.2	口縁部	外面：無節縄文（R） 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい褐色 内面：橙～褐灰色	中期

表 30　土器観察表（21）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径(cm) 器高(cm)	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
621	図 171 PL.115	第 6a 層～第 7a 層	縄文土器 深鉢	△ 6.9 △ 9.3	口縁部	外面：無節縄文（R） 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：灰褐～橙色 内面：褐～黒褐色	中期
622	図 171 PL.115	第 6a 層～第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 5.2	口縁部	外面：工具ナデ 内面：工具ナデ	やや粗	外面：褐灰色 内面：褐灰色	中期
623	図 171 PL.115	第 6a 層～第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 4.5	底部	外面：RL 縄文、ナデ、底部端に爪形文 内面：工具ナデ	やや粗	外面：にぶい黄橙色 内面：浅黄橙色	凹底（高台状）
624	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	※ 29.2 —	口縁部～胴部上半	外面：無節縄文（R） 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	船元式
625	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 12.6	口縁部～胴部上半	外面：RL 縄文（撚りが非常にゆるい） 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい橙～褐灰色 内面：にぶい橙色	船元式
626	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	△ 4.6 △ 4.7	口縁部	外面：RL 縄文、沈線文 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：橙～褐灰色 内面：橙～褐灰色	船元Ⅲ式
627	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	△ 4.5 △ 4.5	口縁部	外面：RL 縄文 内面：RL 縄文	やや粗	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	船元式
628	図 172 —	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 7.2	胴部	外面：RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：橙色 内面：にぶい黄橙色	船元式
629	図 172 —	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 5.8	胴部	外面：LR 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄橙～灰黄褐色 内面：にぶい橙～褐灰色	船元式
630	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 3.9	口縁部	外面：ナデ、一部条痕、爪形文 内面：ナデ	やや粗	外面：黒褐色 内面：黄灰～黒褐色	船元式
631	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	△ 6.9 △ 4.8	口縁部	外面：貼付肥厚帯、肥厚帯上刺突文、RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：灰黄褐～黒褐色 内面：：灰黄褐～黒褐色	波子式
632	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	△ 5.7 △ 8.4	口縁部	外面：RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：橙～黒色 内面：にぶい橙～黒褐色	中期
633	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	△ 4.5 △ 5.7	口縁部	外面：無節縄文（R）、オサエ 内面：貼付肥厚帯、ナデ、オサエ	やや粗	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：灰白～にぶい黄橙色	中期
634	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	△ 5.7 △ 6.0	口縁部	外面：無節縄文（R）、オサエ 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい橙～灰褐色 内面：にぶい橙～褐灰色	中期
635	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	△ 10.7 △ 15.4	口縁部～胴部上半	外面：RL 縄文 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい橙～黒褐色 内面：橙～黒褐色	中期
636	図 172 —	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 5.7	口縁部	外面：貝殻条痕 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい赤褐～黒褐色 内面：暗赤褐～黒褐色	中期
637	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 3.7	底部	外面：LR 縄文、ナデ 内面：ナデ	やや粗	外面：橙～淡橙色 内面：橙～淡橙色	凹底（高台状）
638	図 172 PL.117	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 5.5	底部	外面：RL 縄文？、ナデ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：橙～明褐灰色	凹底（高台状）
639	図 172 PL.117	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 9.6	底部	外面：RL 縄文、ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：にぶい橙～明褐灰色 内面：にぶい黄橙～灰黄褐色	凹底（高台状）
640	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 2.3	底部	外面：RL 縄文、ナデ、オサエ 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい黄橙～褐灰色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	凹底（高台状）
641	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 3.4	底部	外面：ナデ、一部 RL 縄文、底部端にキザミ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：にぶい橙～黒色 内面：にぶい橙～褐灰色	凹底（高台状）
642	図 172 —	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 2.0	底部	外面：RL 縄文、ナデ、オサエ 内面：ナデ	やや粗	外面：灰白～褐灰色 内面：褐灰色	凹底（高台状）
643	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 4.3	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：橙～黒色 内面：灰黄褐～黒色	凹底（高台状）
644	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 3.2	底部	外面：ナデ？ 内面：ナデ	やや粗	外面：にぶい褐～明褐灰色 内面：にぶい褐～明褐灰色	凹底
645	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 3.5	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：にぶい橙～明褐灰色 内面：橙～灰黄褐色	凹底（高台状）
646	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 2.6	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：にぶい橙色 内面：にぶい橙色	凹底（高台状）
647	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 3.3	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：にぶい黄橙～明黄褐色 内面：にぶい黄橙～明黄褐色	凹底（高台状）
648	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 2.3	底部	外面：粗いナデ、ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄～褐灰色	凹底（高台状）
649	図 172 PL.116	第 7a 層	縄文土器 深鉢	— △ 3.5	底部	外面：ナデ、オサエ 内面：ナデ、オサエ	やや粗	外面：褐灰～黒褐色 内面：褐灰～黒褐色	
650	図 176 PL.117	5 溝	縄文土器 深鉢	— △ 1.8	底部	外面：ナデ、底面圧痕 内面：ナデ	やや粗	外面：褐灰色 内面：にぶい黄橙色	
651	図 176 PL.117	5 溝	縄文土器 深鉢？	— △ 1.9	底部	外面：ナデ 内面：オサエ	やや粗	外面：灰白色 内面：黒色	
652	図 178 PL.117	7 土坑	縄文土器 深鉢	— △ 3.8	口縁部	外面：貝殻条痕 内面：ナデ	密	外面：黒褐色 内面：黒褐色	

表 31　土器観察表（22）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	口径（cm） 器高（cm）	部位	調整・文様	胎土	色調	備考
653	図 178 PL.117	11 土坑	弥生土器 壺	— △ 4.0	頸部	外面：ミガキ 内面：ナデ、ケズリ	密	外面：灰黄色 内面：灰黄色	
654	図 178 PL.118	13 土坑	縄文土器 深鉢	— △ 1.5	底部	外面：ナデ 内面：ナデ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	
655	図 181 PL.118	31 土坑	縄文土器 深鉢	— △ 9.7	口縁部～胴部上半	外面：ハケ状条痕 内面：ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙～黒褐色 内面：にぶい黄橙色	
656	図 181 PL.118	31 土坑	縄文土器 深鉢	— △ 8.7	口縁部～胴部上半	外面：ナデ、一部貝殻条痕 内面：ナデ	密	外面：褐～暗褐色 内面：褐～暗褐色	口縁部に補修孔
657	図 181 PL.118	31 土坑	縄文土器 深鉢	— △ 3.2	底部	外面：ナデ 内面：ヘラ状工具ナデ、オサエ	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙～褐灰色	
658	図 182 PL.118	北方砂層 上面	縄文土器 深鉢	※ 28.6 △ 9.1	口縁部	外面：ナデ、貝殻条痕 内面：ナデ、一部貝殻条痕	やや密	外面：灰黄褐色 内面：灰黄褐色	
659	図 182 PL.118	北方砂層 上面	縄文土器 浅鉢	△ 19.0 11.5	ほぼ完形	外面：風化により調整不明 内面：風化により調整不明	密	外面：にぶい黄橙色 内面：にぶい黄橙色	上面形が楕円形
660	図 182 PL.118	北方砂層 上面	縄文土器 浅鉢	△ 30.2 △ 10.7	口縁部～胴部	外面：ハケ状条痕 内面：ケズリ	密	外面：灰黄褐色 内面：褐色	
661	図 182 PL.118	北方砂層 上面	縄文土器 深鉢	※ 25.6 △ 18.0	口縁部	外面：貝殻条痕後ナデ 内面：貝殻条痕	やや密	外面：灰黄褐色 内面：暗褐色	外面風化著しい
662	図 182 —	北方砂層 上面	縄文土器 深鉢	— △ 12.4	口縁部	外面：ヘラ状工具ナデ 内面：板状工具ナデ	密	外面：浅黄～黒褐色 内面：にぶい黄褐色	

表 32　土製品観察表

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	種別 器種	法量（cm） 長さ	幅	厚さ	調整・文様	胎土	色調	備考
42	図 30 PL.50	8 溝	土製品	4.5	4.7	3.0	ナデ、オサエ	密	褐灰色	鏡形？
506	図 127 PL.91	4 溝 下層	土製品	△ 2.9	△ 3.0	0.9	圧痕、割れ	密	外面：黄灰色 内面：暗灰黄色	粘土を寄せ集めて固めた？
530	図 128 PL.90	6 溝 下層	土製品	△ 2.9	—	—	ナデ、オサエ	密	外面：暗灰黄～黒褐色 内面：暗灰黄色	外面煤付着 （土偶の可能性あり）
51	図 33 PL.51	撹乱～第 1a 層	土錘	4.8	1.9	2.1	ナデ、下部一部黒斑	密	灰白～褐灰色、一部橙色	

表 33　2011 年度出土石器石材別組成表（集計）

総集計		打製石器								磨製石器			礫石器											計
		AH	Sc	PE	RF	Fl	Cr	Bk	CA x	GA x	AxFl	未製品	SW	HS	GS	QS	GS + HS	GS + QS	AS	WS	打剥礫	礫石器破片	被熱礫	
火成岩	安山岩	1	4	7	4	23	1	1	5	1		2	32	4	4	1	4	1	3			1	2	101
	流紋岩				1		1			2	1		21				1							27
	閃緑岩									2			1											3
	花崗岩												5		2					2				9
	黒曜石					1																		1
	碧玉					2																		2
	他												4											4
堆積岩	凝灰岩					2			1				4							1				8
	砂岩												7								1			8
	礫岩													1										1
	他									1			7											8
変成岩	頁岩		1			2	1			1	1													6
	緑色片岩									2					1									3
	蛇紋岩									1														1
	他												7											7
計		1	5	7	5	30	3	1	6	10	2	2	88	5	7	1	5	1	3	3	1	1	2	189

器種名凡例　AH：石鏃、Sc：スクレイパー、PE：楔形石器、RF：加工痕のある剥片、Fl：剥片、Cr：石核、Bk：ブランク、CAx：打製石斧、G-Ax：磨製石斧、AxFl：磨製石斧剥片、SW：石錘、GS：磨り石、HS：敲き石、QS：凹石、AS：台石、WS：砥石

表 34　石器・玉観察表（1）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	石材	法量 長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
S1	図 23 PL.48	21 落ち込み	打製石斧	凝灰岩または流紋岩	15.6	8.4	5.0	850	
S2	図 32 PL.49	30 土坑	敲石	安山岩	12.2	4.0	2.6	190	
S3	図 33 PL.51	盛土～第 1a 層	打製石斧	安山岩	10.2	5.0	2.0	119	
S4	図 33 PL.51	第 1a 層	磨製石斧	流紋岩または安山岩	6.6	5.0	1.2	69	
S5	図 33 PL.51	第 1a 層	磨製石斧	閃緑岩	5.9	4.5	3.8	116	破片
S6	図 33 PL.51	撹乱	磨製石斧	閃緑岩～花崗岩	14.3	6.5	4.8	683	
S7	図 58 PL.59	14 溝	楔形石器	安山岩	5.7	3.8	1.0	25.46	
S8	図 58 PL.59	14 溝	砥石	細粒花崗岩	8.8	5.4	4.1	313	
S9	図 58 PL.59	14 溝	砥石	緑色凝灰岩	4.7	1.5	0.9	4.47	
S10	図 58 PL.59	14 溝	敲石	安山岩	11.3	12.0	5.2	650	
S11	図 58 PL.59	14 溝	石錘	流紋岩または安山岩	11.1	9.9	1.7	168	
S12	図 71 PL.62	19 溝	剥片	碧玉	2.3	3.7	0.5	5.41	
S13	図 71 PL.62	19 溝	磨石	緑色片岩	10.0	4.5	1.6	103	磨製石器未成品？
S14	図 81 PL.65	28 溝	楔形石器	安山岩	2.3	1.6	0.6	3.37	サヌカイト
S15	図 81 PL.65	28 溝	スクレイパー	安山岩	2.2	3.1	0.6	4.25	サヌカイト。楔形石器の可能性あり
S16	図 81 PL.65	28 溝	磨製石斧剥片	流紋岩または安山岩	2.8	4.0	0.5	6.72	
S17	図 81 PL.65	28 溝	磨製石斧	流紋岩または安山岩	13.7	6.2	4.0	525	

表35　石器・玉観察表（2）

遺物No.	挿図PL	遺構層位	器種	石材	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
S18	図81 PL.65	28溝	磨石＋敲石	安山岩～デイサイト	11.4	8.0	5.5	672	
S19	図86 PL.69	29土坑	スクレイパー	流紋岩～安山岩	4.9	7.9	0.6	25.96	スクレイパー
S20	図90 PL.73	27溝	磨石	安山岩	9.0	9.1	4.5	515	
S21	図90 PL.73	27溝	石器未成品	安山岩？	6.3	13.9	1.1	126	石包丁素材？
S22	図91 —	33溝	石鏃	安山岩	2.2	1.5	0.3	0.92	サヌカイト
S23	図129 PL.91	4溝上層	楔形石器	安山岩	2.5	1.4	0.5	2.12	サヌカイト
S24	図129 PL.91	4溝上層	楔形石器	安山岩	2.8	1.7	0.7	4	サヌカイト
S25	図129 PL.91	4溝上層	磨製石斧剥片	頁岩	3.1	2.8	0.9	8.3	刃部が剥離した剥片
S26	図129 PL.91	4溝上層	磨製石斧	緑色片岩	5.1	3.3	1.4	36.86	
S27	図129 PL.91	4溝上層	打製石斧	安山岩	10.4	5.2	1.5	82	
S28	図129 PL.91	4溝上層	磨製石斧	安山岩？	7.8	5.0	2.6	141	
S29	図129 PL.92	4溝上層	石錘	安山岩	6.8	5.4	1.5	66.71	
S30	図129 PL.92	4溝上層	石錘	変成岩	6.3	5.4	1.0	50.73	
S31	図129 PL.92	4溝上層	石核	流紋岩～凝灰岩	11.5	6.8	3.4	378	
S32	図129 PL.92	4溝上層	磨石＋敲石	安山岩	11.0	8.4	5.1	651	
S33	図129 PL.91	4溝上層	台石	安山岩	28.8	19.0	12.3	10,950	
S34	図130 PL.91	4溝下層	スクレイパー	安山岩	1.6	3.6	0.6	3	サヌカイト
S35	図130 PL.91	4溝下層	スクレイパー	安山岩	3.8	7.1	0.9	25	サヌカイト
S36	図130 PL.91	4溝下層	磨製石斧剥片	頁岩	3.4	4.1	0.8	10.25	刃部が剥離した剥片
S37	図130 PL.92	4溝下層	磨石＋凹石	安山岩	14.4	10.1	5.5	1,479	裏の磨面が非常に平滑
S38	図130 PL.92	4溝下層	石皿	安山岩	13.8	11.9	6.0	1,279	
S39	図130 PL.91	4溝下層	台石	安山岩	26.6	25.8	14.7	16,500	
S40	図131 PL.92	4溝下層	石錘	火成岩	5.2	4.4	1.5	48.91	
S41	図131 PL.92	4溝下層	石錘	安山岩	5.5	4.6	1.1	38.87	
S42	図131 PL.92	4溝下層	石錘	火成岩	6.2	4.7	1.5	64.89	
S43	図131 PL.92	4溝下層	石錘	安山岩	5.8	5.2	1.5	70.37	
S44	図131 PL.92	4溝下層	石錘	変成岩	6.9	4.6	1.5	66.86	
S45	図131 PL.92	4溝下層	石錘	花崗岩～閃緑岩	5.9	5.4	1.5	72.92	
S46	図131 PL.92	4溝下層	石錘	火成岩	6.7	5.3	1.5	77.43	
S47	図131 PL.92	4溝下層	石錘	蛇紋岩	7.0	6.2	1.0	54.82	
S48	図131 PL.92	4溝下層	石錘	火成岩	7.2	5.7	2.0	114	
S49	図131 PL.92	4溝下層	石錘	安山岩	7.5	6.2	1.2	84.88	
S50	図131 PL.92	4溝下層	石錘	安山岩	8.7	4.9	1.7	110	
S51	図131 PL.92	4溝下層	石錘	砂岩	9.9	6.7	2.1	193	

表 36　石器・玉観察表（３）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	石材	法量 長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
S52	図 161 PL.109	10 溝	石鏃	安山岩	3.0	1.4	0.4	1.79	サヌカイト
S53	図 161 PL.109	10 溝	スクレイパー	頁岩	3.3	4.9	0.7	8.35	石匙
S54	図 161 PL.109	10 溝	磨製石斧	蛇紋岩	5.4	3.1	1.3	35	
S55	図 161 PL.109	10 溝	磨石	花崗岩	9.7	9.3	4.8	650	細粒花崗岩
S56	図 161 PL.109	10 溝	石錘？	凝灰角礫岩	6.9	5.7	2	100	
S57	図 161 PL.109	10 溝	石錘	安山岩	7.9	6.2	1.8	124	
S58	図 161 PL.109	10 溝	石錘	安山岩	7.6	5.9	1.4	102	
S59	図 161 PL.109	10 溝	石錘	流紋岩または安山岩	6.6	6.0	1.0	64	
S60	図 161 PL.109	10 溝	石錘	安山岩	9.0	7.5	1.7	169	
S61	図 161 PL.109	10 溝	石錘	流紋岩または安山岩	7.7	5.0	1.4	78	
S62	図 162 PL.109	10 溝	石錘	細粒花崗岩～閃緑岩	4.4	3.0	1.5	28	
S63	図 162 PL.109	10 溝	石錘	安山岩	5.4	4.3	0.9	33	
S64	図 162 PL.109	10 溝	石錘	安山岩～デイサイト	5.8	4.2	1.2	45	
S65	図 162 PL.109	10 溝	石錘	安山岩	5.6	4.8	1.7	65	
S66	図 162 PL.109	10 溝	石錘	流紋岩または安山岩	△ 5.8	5.2	1.8	72	
S67	図 162 PL.109	10 溝	石錘	流紋岩または安山岩	6.9	4.9	1.3	50	
S68	図 162 PL.109	10 溝	石錘	安山岩	6.1	5.4	1.3	85	
S69	図 162 PL.109	10 溝	石錘	流紋岩または安山岩	6.9	5.3	1.1	61	
S70	図 162 PL.109	10 溝	石錘	安山岩	6.2	5.9	2.0	78	
S71	図 162 PL.109	10 溝	石錘	安山岩？	7.2	5.6	1.7	94	
S72	図 162 PL.109	10 溝	石錘	安山岩？	6.6	5.1	1.8	93	
S73	図 168 PL.113	第 6a 層	スクレイパー	安山岩	3.6	5.0	0.8	16	サヌカイト
S74	図 168 PL.113	第 6a 層	楔形石器削片	黒曜石	1.5	1.7	1.8	2.53	
S75	図 168 PL.113	第 6a 層	石核	黒曜石	2.9	3.6	2.1	20	
S76	図 168 PL.113	第 6a 層	磨石	安山岩	11.1	8.1	4.3	574	磨面平滑。面をなす
S77	図 168 PL.113	第 6a 層	石錘	砂岩	5.2	3.4	0.9	26	
S78	図 168 PL.113	第 6a 層	石錘	安山岩	5.4	3.3	1.3	40	
S79	図 168 PL.113	第 6a 層	石錘	花崗岩	5.0	3.3	1.0	26	
S80	図 168 PL.113	第 6a 層	石錘	安山岩	6.9	4.4	1.3	61	
S81	図 168 PL.113	第 6a 層	石錘	砂岩	6.0	4.5	1.5	69	
S82	図 168 PL.113	第 6a 層	石錘	安山岩	6.2	5.5	1.5	70	
S83	図 168 PL.113	第 6a 層	石錘	流紋岩または安山岩	6.3	5.3	1.7	80	
S84	図 168 PL.113	第 6a 層	石錘	変成岩	6.2	5.1	1.8	83	
S85	図 168 PL.113	第 6a 層	石錘	砂岩	△ 6.9	4.7	1.2	64	

表 37　石器・玉観察表（4）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	石材	法量 長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
S86	図 169 PL.113	第 6a 層	石錘	流紋岩または安山岩	6.8	5.6	1.6	89	
S87	図 169 PL.113	第 6a 層	石錘	花崗岩	6.4	6.5	2.6	140	細粒花崗岩
S88	図 169 PL.113	第 6a 層	石錘	安山岩	△ 7.2	5.8	1.8	100	
S89	図 169 PL.113	第 6a 層	石錘	安山岩	7.3	5.8	2.0	119	
S90	図 169 PL.113	第 6a 層	石錘	砂岩	△ 8.1	5.9	2.0	132	
S91	図 169 PL.113	第 6a 層	石錘	流紋岩または安山岩	7.0	6.2	1.6	112	
S92	図 169 PL.113	第 6a 層	石錘	安山岩	△ 9.0	5.3	2.1	154	
S93	図 169 PL.113	第 6a 層	石錘	流紋岩または安山岩	8.6	6.6	1.0	93	
S94	図 173 PL.117	第 7a 層	磨石 + 敲石	流紋岩または安山岩	10.3	8.6	5.4	655	表裏で使用強度に差
S95	図 173 PL.117	第 7a 層	石錘	流紋岩または安山岩	6.1	4.9	1.4	68	
S96	図 173 PL.117	第 7a 層	石錘	蛇紋岩	6.6	6.3	1.7	83	
S97	図 173 PL.117	第 7a 層	石錘	流紋岩または安山岩	6.7	5.8	1.5	86	
S98	図 173 PL.117	第 7a 層	石錘	蛇紋岩	6.5	6.3	1.3	73	
S99	図 173 PL.117	第 7a 層	石錘	花崗岩	9.3	5.4	1.6	127	
S100	図 182 —	— 北側砂層	石錘	流紋岩または安山岩	10.7	8.1	2.6	256	
G1	図 33 PL.51	表採	ガラス小玉	—	0.4	0.4	0.2	0.3	色調：スカイブルー

表 38　木製品観察表（1）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	形状	木取り	樹種	法量（最大値　cm） 長さ	幅	厚さ	備考
W1	図 32 PL.51	30 土坑	板	—	板目	モミ属	△ 10.0	8.4	2.5	
W2	図 32 PL.51	30 土坑	板	—	板目	モミ属	△ 11.2	8.7	2.4	
W3	図 32 PL.51	30 土坑	角材	—	芯去	アカガシ亜属	△ 9.1	6.2	4.3	
W4	図 33 PL.51	撹乱	漆器椀	—	横木取り	カツラ	口径 △ 12.4	高さ △ 5.8	底径 —	1 cm に 5,6 本の年輪
W5	図 59 PL.59	14 溝 上層	田下駄	板状	板目	スギ	31.9	△ 17.7	1.3	孔あり
W6	図 59 PL.59	14 溝	盾	板状	板目	モミ属	△ 23.2	6.8	0.9	
W7	図 59 PL.59	14 溝	分割材	板状	芯去	スギ	31.0	11.7	6.7	
W8	図 59 PL.59	14 溝	矢板	板状	板目	スギ	△ 31.1	21.4	4.6	ハツリ状の加工？あり
W9	図 60 PL.60	14 溝 上層	舟	—	追柾目	モミ属	△ 85.3	42.0	11.8	
W10	図 60 PL.59	14 溝	板	—	板目	スギ	87.9	16.0	2.0	穿孔あり
W11	図 60 —	14 溝	杭	自然木	芯持丸太	スギ	212.3	8.6	8.4	樹皮あり
W12	図 61 PL.61	14 溝	縦杓子	—	縦木取り	ヤマグワ	※ 44.5	10.5	1.0	
W13	図 62 PL.61	35 溝	直柄 平鍬未成品	板状	柾目	アカガシ亜属　※ 2	△ 25.0	24.2	3.5	泥除装着部分が欠損。保存処理実施
W14	図 62 PL.61	35 溝	直柄 平鍬未成品	板状	柾目	アカガシ亜属　※ 2	△ 26.2	18.7	4.4	保存処理実施
W15	図 63 PL.61	35 溝	直柄 平鍬未成品	板状	柾目	アカガシ亜属　※ 2	△ 26.4	21.7	4.8	保存処理実施
W16	図 72 PL.64	19 溝	曲柄又鍬	板状	柾目	アカガシ亜属	△ 38.1	9.2	1.1	二次加工し、板材に転用
W17	図 72 PL.64	19 溝 東肩付近	容器　蓋	—	縦木取り	スギ	△ 35.7	5.1	4.8	
W18	図 72 PL.64	19 溝	杭	角材	芯去	スギ	△ 12.4	3.8	3.0	圧痕あり
W19	図 72 PL.64	19 溝	杭	角材	芯去	スギ	△ 44.2	4.2	1.9	先端炭化
W20	図 72 PL.64	19 溝	ミカン割材	—	放射状分割	アカガシ亜属	△ 38.5	7.9	4.8	斧直柄素材の可能性
W21	図 82 PL.67	28 溝	直柄横鍬	—	柾目	アカガシ亜属	7.5	37.9	1.7	馬鍬様の刃
W22	図 82 PL.67	28 溝	板	—	板目	スギ	57.1	10.0	2.1	一ヶ所に穿孔。壁材？転用
W23	図 82 PL.67	28 溝	矢板	—	板目	スギ	△ 43.5	11.6	2.3	刀子状工具の痕跡
W24	図 82 PL.67	28 溝	板	—	追柾目	スギ	△ 83.5	15.7	2.2	孔あり
W25	図 82 PL.68	28 溝	杭	角材	芯去	スギ	△ 63.4	7.3	4.6	
W26	図 82 PL.68	28 溝	杭	角材	芯去	スギ	△ 58.0	5.5	4.7	先端全面加工
W27	図 82 PL.68	28 溝	杭	板状	芯去	スギ	37.2	3.3	1.3	板材転用
W28	図 82 PL.68	28 溝	杭	角材	芯去	スギ	211.2	10.4	6.6	建築部材転用。木釘が打ち込まれている
W29	図 83 PL.68	28 溝	杭	自然木	芯持丸太	サカキ	△ 41.5	5.2	4.1	
W30	図 83 PL.68	28 溝	杭	自然木	芯持丸太	カエデ属	△ 43.7	4.1	5.2	圧力により折曲。焦げ面あり
W31	図 83 PL.68	28 溝	杭	自然木	芯持丸太	ヤブツバキ	△ 52.3	5.8	5.6	
W32	図 83 PL.68	28 溝	杭	自然木	芯持丸太	シイノキ属	△ 55.4	4.4	4.4	
W33	図 84 PL.65	36 溝	鋤柄	棒状	芯去	スギ	△ 47.9	8.4	2.5	組み合わせ式の柄
W34	図 86 PL.69	29 土坑	板	板状	追柾目	スギ	126.3	40.0	2.0	

表 39　木製品観察表（２）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	形状	木取り	樹種	法量（最大値　cm） 長さ	幅	厚さ	備考
W35	図 132 PL.94	４溝 上層	建築部材	棒状	芯持丸太	ヤブツバキ	144.8	7.4	6.7	樹皮をわずかに残す（風化しほとんど剥落か？）
W36	図 132 PL.93	４溝	板	—	板目	スギ	50.2	11.9	4.7	
W37	図 132 PL.93	４溝 上層	不明木製品	板状	板目	アカガシ亜属	△ 29.3	6.7	1.7	土掘り具の可能性あり
W38	図 132 PL.93	４溝 上層	杭	自然木	芯持丸太	マツ属複維管束亜属	△ 24.6	6.1	5.9	
W39	図 132 PL.93	４溝 上層	杭	自然木	芯持丸太	マツ属複維管束亜属	△ 24.0	4.8	4.6	
W40	図 133 PL.93	４溝 下層	横槌	—	縦木取り（芯持）	ヤブツバキ	30.1	12.6	6.6	敲打痕あり
W41	図 133 PL.94	４溝 下層	自在鉤	自然木	芯持丸太	ヤブツバキ	53.5	5.7	4.1	コゲあり
W42	図 133 PL.93	４溝 下層	杭	角材	芯去	クリ	△ 52.6	5.2	3.8	先端１面加工
W43	図 134 PL.100	４溝	編組製品	—	—	ヒノキ　※１	縦△ 15.0	横△ 19.1		編組製品１
W44	図 135 PL.95	４溝	編組製品	—	—	ヒノキ テイカカズラ　※１	縦 △ 39.2	横△ 63.1		編組製品２　口縁部巻き付け材・帯部にテイカカズラ使用
W45	図 136 PL.100	４溝 上層	編組製品	—	—	ヒノキ　※１	縦 △ 42.0	横△ 23.7		編組製品３
W46	図 137 PL.96	４溝 上層	編組製品	—	—	ヒノキ　※１	縦 △ 39.0	横△ 30.0		編組製品４
W47	図 138 PL.97	６溝	編組製品	—	—	ヒノキ テイカカズラ　※１	縦 △ 59.9	横△ 33.4		編組製品５　帯部にテイカカズラ使用
W48	図 139 —	４溝 上層	編組製品	—	—	ヒノキ　※１	縦△ 19.4	横△ 29.6		編組製品６
W49	図 140 PL.98	４溝 下層	編組製品	—	—	ヒノキ テイカカズラ　※１	縦△ 30.4	横△ 48.6		編組製品７　縁仕舞・帯部にテイカカズラ使用
W50	図 141 —	４溝 下層	編組製品	—	—	ヒノキ　※１	縦△ 20.0	横△ 17.6		編組製品８
W51	図 142 PL.101	４溝 下層	編組製品	—	—	ヒノキ テイカカズラ　※１	縦△ 16.0	横△ 14.9		編組製品９　底部ヨコ材の一部にテイカカズラ使用
W52	図 143 PL.99	４溝 下層	編組製品	—	—	ヒノキ　※１	縦△ 40.6	横△ 26.6		編組製品 10
W53	図 144 PL.101	４溝	編組製品	—	—	ヒノキ　※１	縦△ 21.1	横△ 17.0		編組製品 11
W54	図 144 PL.101	４溝	編組製品	—	—	ヒノキ　※１	縦△ 15.2	横△ 11.4		編組製品 12
W55	図 144 —	４溝	編組製品	—	—	ヒノキ　※１	縦△ 7.7	横△ 3.5		編組製品 13
W56	図 145 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	22.1	0.8	0.7	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W57	図 145 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	23.4	0.8	0.5	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W58	図 145 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	43.7	0.8	0.5	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W59	図 145 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	45.3	0.9	0.5	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W60	図 145 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	44.3	1.0	0.5	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W61	図 145 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	49.4	0.8	0.5	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W62	図 145 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	24.6	1.3	0.8	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W63	図 145 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	58.8	0.9	0.8	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W64	図 145 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	62.0	0.7	0.8	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W65	図 146 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	64.0	1.1	0.9	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W66	図 146 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	65.9	1.3	1.0	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W67	図 146 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	56.3	15.5	11.5	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W68	図 146 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	63.2	1.3	0.9	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施

表 40　木製品観察表（３）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	形状	木取り	樹種	法量（最大値　cm） 長さ	幅	厚さ	備考
W69	図 146 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	60.4	1.4	1.2	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W70	図 146 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	54.5	1.6	0.8	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W71	図 146 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	61.3	1.7	1.3	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W72	図 146 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	65.1	1.1	1.3	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W73	図 147 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	66.6	1.3	1.2	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W74	図 147 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	65.1	1.1	1.2	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W75	図 147 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	67.3	1.5	1.2	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W76	図 147 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	64.9	2.4	0.7	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W77	図 147 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	62.2	1.5	1.1	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W78	図 147 PL.102	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ　※１	66.3	2.5	1.1	素材束１（23 本＋破片２が束で出土）保存処理実施
W79	図 148 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	51.0	0.4	0.3	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W80	図 148 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	46.6	0.3	0.2	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W81	図 148 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	45.3	0.4	0.2	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W82	図 148 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	48.3	0.4	0.4	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W83	図 148 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	47.2	0.4	0.4	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W84	図 148 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	50.0	0.3	0.4	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W85	図 148 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	43.0	0.3	0.3	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W86	図 148 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	52.5	0.4	0.2	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W87	図 149 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	52.7	0.3	0.2	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W88	図 149 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	53.1	0.3	0.3	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W89	図 149 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	51.8	0.4	0.4	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W90	図 149 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	57.2	0.5	0.2	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W91	図 149 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	53.8	0.2	0.5	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W92	図 149 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	56.9	0.5	0.4	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W93	図 149 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	56.2	0.4	0.3	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W94	図 150 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	56.4	0.4	0.3	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W95	図 150 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	55.5	0.3	0.5	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W96	図 150 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	58.1	0.5	0.2	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W97	図 150 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	55.9	0.4	0.2	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W98	図 150 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	51.0	0.4	0.3	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W99	図 150 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	60.9	0.4	0.3	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W100	図 151 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	20.3	0.3	0.2	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W101	図 151 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	22.9	0.4	0.4	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W102	図 151 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	27.3	0.2	0.2	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施

表 41　木製品観察表（４）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	形状	木取り	樹種	法量（最大値　cm） 長さ	幅	厚さ	備考
W103	図 151 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	24.9	0.4	0.3	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W104	図 151 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	24.9	0.4	0.4	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W105	図 151 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	31.7	0.4	0.3	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W106	図 151 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	31.1	0.4	0.2	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W107	図 151 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	35.1	0.3	0.5	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W108	図 151 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	37.0	0.3	0.3	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W109	図 151 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	40.1	0.3	0.3	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W110	図 151 PL.103	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ　※１	40.3	0.4	0.3	素材束２（32 本＋破片 12 が束で出土）保存処理実施
W111	図 152 PL.107	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 46.8	25.0	1.3	
W112	図 152 PL.107	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 38.9	2.8	2.1	
W113	図 152 PL.107	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 29.6	2.1	2.7	
W114	図 152 PL.107	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 34.5	2.1	2.2	
W115	図 152 PL.107	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 26.2	2.1	1.7	
W116	図 152 PL.107	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	49.2	1.6	1.7	
W117	図 152 PL.107	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 36.2	1.5	0.6	コゲあり
W118	図 152 PL.107	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 36.7	△ 1.8	△ 0.8	コゲあり
W119	図 152 PL.107	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 36.7	1.4	0.6	
W120	図 152 PL.107	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ	△ 34.2	1.6	1.5	
W121	図 152 PL.107	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 37.8	1.4	0.8	
W122	図 152 PL.107	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 27.7	1.3	1.3	
W123	図 152 PL.107	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 30.2	1.3	1.3	
W124	図 153 PL.107	４溝 上層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ	△ 48.5	0.3	0.3	
W125	図 153 PL.107	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ	37.4	0.7	0.7	
W126	図 153 PL.107	４溝 上層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ	△ 31.4	0.8	0.6	
W127	図 154 PL.104	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	15.4	0.8	0.5	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W128	図 154 PL.104	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	16.3	0.7	0.5	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W129	図 154 PL.104	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	16.1	0.8	0.8	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W130	図 154 PL.104	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	17.1	0.9	0.5	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W131	図 154 PL.104	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	17.4	0.7	0.5	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W132	図 154 PL.104	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	16.7	1.2	0.6	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W133	図 154 PL.104	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	19.6	0.8	0.6	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W134	図 154 PL.104	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	20.5	1.2	0.6	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W135	図 154 PL.105	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	31.6	0.7	0.6	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W136	図 154 PL.105	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	28.6	1.1	0.6	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施

表 42　木製品観察表（５）

遺物 No.	挿図 PL	遺構 層位	器種	形状	木取り	樹種	法量（最大値　cm） 長さ	幅	厚さ	備考
W137	図 154 PL.106	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	25.7	0.6	0.4	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W138	図 154 PL.104	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	24.1	0.8	0.7	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W139	図 154 PL.104	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	25.3	0.9	0.4	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W140	図 154 PL.104	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	23.1	0.9	0.4	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）　保存処理実施
W141	図 154 PL.105	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	29.8	0.7	0.7	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W142	図 154 PL.105	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	30.9	1.0	0.4	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W143	図 154 PL.105	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	25.4	1.1	0.6	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W144	図 154 PL.105	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	31.3	1.1	0.5	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W145	図 154 PL.105	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	32.3	1.1	0.5	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W146	図 154 PL.105	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	19.4 27.2	1.1	0.5	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W147	図 154 PL.105	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	47.3	1.1	0.7	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W148	図 154 PL.105	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	55.4	1.4	0.5	素材束３（破片化した約 30 本分が束で出土）保存処理実施
W149	図 155 PL.107	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 57.2	3.1	1.4	
W150	図 155 PL.107	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ	46.6	2.3	2.1	コゲあり
W151	図 155 PL.107	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 49.7	2.0	1.1	
W152	図 155 PL.107	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 35.2	3.2	1.5	
W153	図 155 PL.107	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ	41.0	1.7	1.4	
W154	図 155 PL.107	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 29.5	2.0	1.0	工具痕？あり
W155	図 155 PL.107	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 36.7	1.6	0.9	
W156	図 155 PL.107	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 38.1	1.3	5.1	
W157	図 155 PL.107	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 56.1	1.1	0.9	
W158	図 155 PL.107	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	ヒノキ	54.1	1.6	1.0	
W159	図 156 PL.107	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	△ 40.7	1.0	0.6	
W160	図 156 PL.107	４溝 下層	編組製品 素材	棒状	芯去	スギ	35.9	1.4	0.7	
W161	図 156 PL.107	４溝 下層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	スギ	△ 27.6	0.3	0.4	
W162	図 156 PL.107	４溝 下層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ	32.2	0.3	0.2	
W163	図 156 PL.107	４溝 下層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	ヒノキ	△ 33.2	0.4	0.3	
W164	図 156 PL.107	４溝 下層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	スギ	△ 44.7	0.2	0.2	
W165	図 156 PL.107	４溝 下層	編組製品 素材	ヒゴ状	芯去	スギ	78.5	0.3	0.2	

樹種のうち、※１は鈴木三男氏ほかによる同定、※２は切片採取を行わずに外観的特徴によって判断したもの。他はすべて中原計氏による同定。

一般国道９号（鳥取西道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書XX

鳥取県鳥取市

高 住 井 手 添 遺 跡

第１分冊（本文編１）

発　行　　2015 年 10 月 16 日

編　集　　公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室

発行者　　鳥取県教育委員会
〒 680-8570　鳥取県鳥取市東町一丁目 271 番地
電話　（0857）26-7525

印　刷　　勝美印刷株式会社